
最果ての魔女

櫻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最果ての魔女

【Nコード】

N5188T

【作者名】

櫻

【あらすじ】

銀の魔女、最果ての魔女が救世主。東の大国で預言されたその言葉が、すべての始まりだった。三百年の時を経て再び出会う氷の魔女と炎帝と猫の王は、その出会いに歓喜と嘆きで涙する。救世主として喚ばれた魔女と皇帝達がそれぞれに選んだ、方向の違う道。彼等はそれに何を想うのか。シリアス恋愛FT。 サイトにて連載中のもを重複掲載

銀の魔女

これは世界でただ一人、銀の髪を持って生まれた魔女の物語。

南で生まれた一人の少女は、海を渡った先の大陸で東と西に位置する小国を救う。

彼女は滅亡間近の国を魔導の力で支え、危険が去るまで王の傍から離れることはなかったという。

そうして滅亡を逃れ富んだ二つの国は大国となり、やがて対立することになる。

今では誰もが知っている百年戦争で、彼女は東の大国の味方となった。

死神とも戦乙女とも言われた彼女は白銀の名を冠し、当時の魔導士達を圧倒する力を見せる。

衣服が血に汚れ、その翡翠の瞳から涙が絶えなくなっても、彼女は戦い続けた。

誰もが生きること疲れきってしまったても、彼女は戦って戦って戦って。

百年を過ぎたある日、とうとう力を使い果たして倒れてしまう。

そして皮肉にも、それが戦争を終える理由となった。

彼女は「白銀の魔女」として、時の東西皇帝達によって最果ての島へと送られる。

眠ったままの彼女が、いつの日か必ず目覚めると信じて。

銀の魔女、最果ての魔女が救世主。

モリス大陸各地で知らぬ者はいないほどに有名なこの言葉は、この物語から生まれたと言われている。

「ねえ、おばあちゃん」

「ん？ 何だい？」

「白銀の魔女って本当にいるの？ 魔法使いなんて見たことないよ？」

モーリス大陸の北に位置する島ノースポートの市場では、毎日大量の魚が釣り上げられ活気がなくなることはない。

その影響だろうか。魚の匂いに釣られてふらふらと人をすり抜けて歩く灰色の猫は、今ではすっかり市場の看板猫となっている。

特に決まった名前もなく漁師達に好き勝手に呼ばれるこのオス猫は、今日も強面の漁師が気まぐれに魚を与えてくれるのを待つために店の前で立ち止まり丸くなる。

すると、丁度目の前の日陰になった場所で老婆が孫に絵本を読んでいる姿が目映った。

彼はしわがれた声が慣れた様子で絵本を読み聞かせるのを欠伸をしながら見つめていたが、少女が老婆に尋ねた言葉に一瞬だけ尻尾を振った。

少し青みがかかった毛並みを余すことなく太陽の光に浴びせながら、注意深くその金の瞳で少女を見つめる。

傍から見るととても可愛らしいこの仕草に、しかし少女は気付くことなく祖母の答えを待っていた。

老婆は少女の問いに少しだけ目を閉じて考え込む風を装ってから、もちろんとだけ答えた。

「白銀の魔女は今でも最果ての島にいて、力を取り戻すための眠りについているのさ」

「最果ての島って……ここより北のあの孤島？」

「そうさね。まあ、ここから船で行けるんだから孤島とは言えないだろうけどね」

「魔女は力を取り戻してどうするの？ また戦うの？」

「どうだろうねえ。救世主って言われるからには、ひどいことはいないだろう」

「ふうん」

「まあ、救世主様が出てこなければならぬ事態なんか起きない方がいいんだよ」

そこで話は終わったのか、老婆は少女の手を引いて家へと帰っていった。

ただ一匹その場に残った猫は二、三回尻尾を振ってから立ち上がり、いつものように漁師に甘えて魚を与えられた後、港へと向かう。だがゆったりとした速度で歩く彼は、一瞬何か異変に気付きでもしたのか目を見開いて地面を見る。

そしてその金の瞳が港へと続くレンガを捉えた瞬間、ドンツという低い音と共に地面が揺れた。

あまりに強い揺れは人間でも耐えられるものではなく、ましてや小さな猫の身に耐えられるはずもない。

彼は尻餅をついたり倒れたりする人々の間を灰色の塊としてコロコロと転がっていき、白い石造りの壁に激突してようやく止まった。ほんの十数秒の揺れではあったが、まだ完全には終わったわけではないらしく小さな揺れが港を包む。

ケホ、と一度咳をしてようやく意識を取り戻した彼は三半規管を狂わされたのかふらふらになりながら天を仰ぐ。

その横から「これで今年になって何回目だ？」「いくらなんでも多すぎる」などと漁師達が言っているものの、ただじっと空を見る彼にはまったく聞こえていないようであった。

右、左と足踏みをして元の状態に戻ったことを確認してから、猫は今までののんびりとした態度から一変して港への道を駆けていく。出発前の北の孤島行きの船にこっそりと乗り込み、物陰に隠れてから彼はそっと目を閉じる。

瞼の裏には、いつも何か退屈しているような顔をしている銀髪の少女の姿。

その姿を何度も思い返しながらか、彼は船が目的地へと到着するのを待っていた。

北の孤島のその奥の、誰も近付けない屋敷へと帰るために。

「おかえりなさい、ビー」

「……ただいま」

屋敷へと入るなり、彼はリビングでくつろいでいた少女に声を掛けられて立ち止まった。

そうしてノースポートの街の誰もが知らない声で、人の言葉を使つて話す。

それが突然変異でもなんでもなく、目の前でのんびりと紅茶を飲む少女の力によるものなのだということは、彼はもう三百年も前に理解していた。

ビーという名も、その時にもらったものだ。

「何百年も生きてるくせに、よく毎日飽きもせずに街に行けるものね」

「レイアもたまには外に出ないと、干乾びちゃうよ」

「面倒くさいから嫌よ。第一、誰が書いたのか知らない絵本のせいでこの姿じゃ歩けないもの」

「最果ての魔女の話？」

「そう、それ」

今ではすっかり「最果ての魔女」というタイトルで定着した物語が、彼女には気に食わないらしい。

レイアと呼ばれた少女は足元に寄ってきたビーを抱き上げて膝に乗せてから、軽くポンポンと頭を叩きながら言う。

その間にもティーポットがふわふわと浮いてカップに紅茶を注いでいる。この世界の誰にもできないこんな芸当に彼も最初はとても驚かされたが、長く生きているうちに慣れてしまった。

だから彼は自分の毛並みが乱れることを心配するように前肢で少女の手を押しつけながら尋ねる。

「あれって本当にレイアじゃないの？」

「何度も言っているでしょう。わたしは大戦後に生まれたの。人違いよ、人違い。大体、わたしの目は翡翠色じゃないでしょう?」

「それはそうだけど……」
長い年月の間に何度も繰り返されてきた問答を飽きもせずまた反復する。

そうして何度もしてきたようにじつとレイアの瞳をその金の瞳で覗き込むと、確かに彼女の言う通りその瞳の色が物語と違うことは明らかなのであった。

白銀の魔女が持っていたのは翡翠、そうして今ビーが見つめる瞳は海のような蒼蒼を持っていた。

これでは街へ出ての間違えられるはずはないのだが、何せレイアは銀の髪を持ち主である。

今までにどこを探しても白銀の魔女以外に銀髪を持つ人間が現れなかったことで、彼女はかなり目立つ存在になってしまふ。

故に特別閉じ込められているわけでもないこの屋敷から彼女は出ることが叶わなかった。

そのせいかほとんどの場合退屈そうにしているレイアを、ビーは猫なりに心配していたのだ。

「それより」

何度も繰り返してきたように彼女をどうやって屋敷の外に出すかを考え始めたビーを優しく撫で、レイアは呟いた。

「地震、またあったでしょう?」

「え、もしかしてここまで揺れたの?」

「それはないわ。ただいつも家に来るあの大量の猫達がすごい勢いで飛び込んできたから」

「……ノースポートはひどい揺れだったよ。多分モーリス大陸はもっとひどいと思う」

尋ねられて、ビーは先程感じた揺れを思い出して毛を逆立たせた。彼にとつてはひどい揺れ方だったし、漁師達もそうだと言う。

さすがに彼らのいる北の孤島までは揺れは来ないらしいが、震源

がノーสปอร์ตより南にあると感じているレイアはただ「でしょうね」とだけ答えた。

そうして注がれた紅茶に口をつけ、屋敷のあちこちから聞こえる猫の鳴き声に軽く眉根を寄せてから。

「何が理由か知らないけれど、もう駄目ね。あの大陸」

実にあっさりと言つてのけた。それは聞くものによつては彼女がその言葉の意味を分かっているのではないのでは、と不安に思わせるほどの声色だ。

しかし彼女と長く生きてきたビーには、彼女がその意味をちゃんと知っていることを理解していたし本当にどうでもいいと思つているのだということも分かっていた。

彼にはそれがどうしてなのかは分からなかったが、実は多分に優しいところのあるこの少女がそれだけ突き放せるのなら相当のことがあるのだろうと思つて口を閉ざす。

だがそこで何かに思い当たったのか、勢いよく顔を上げた彼はレイアの日に焼けることを忘れた白い肌を前肢でぺちんと叩いた。

「救世主」

「……？」

「救世主だよ。人違いって知らない誰かが、白銀の魔女を頼つてここまで来るなんてないよね？」

「当たり前じゃないの。ここは誰にも見つけれないように結界が張つてあるし、魔女の話信じている子供達は船には乗れないですよ」

慌てたようなビーの言葉を笑つて一蹴したレイアは、ただ一つの可能性に思い至つたが。

「……まさかね」

そう呟いたきり、結局は考えないことにした。

考えることを放棄して、ただいつも通りの日を過ごそうと立ち上がった。

「一体どうなっているんだ！」

石造りの家々が崩れ落ちるほどの地震から十数分後。

モーリス大陸東部の大国ファルガスタの王城では、まだ青年とも言えるような姿の皇帝を始め二十人もの家臣達が集まり事態の収拾に奔走していた。

皇帝の執務室は被害状況の報告を告げる兵士や国庫から薬を提供するよう求める医師達でごった返している。

そのあまりといえはあまりの騒がしさに、執務室の中央で処理に追われる皇帝も耳を塞ぎたくなつたがそれどころではないと結局は我慢して一人でも多くの民を救出できるように兵と物資を提供していた。

窓から遠く城下を見れば、未だ治まらぬ粉塵が立ち込めているのが見えるだろう。

それらは全て瓦解した建物が生み出したものであり、同時に地震の規模を如実に伝えるものにもなっていた。

臣下に指示を出しながら舌打ちをする皇帝は、この国で唯一彼だけが持ち得る紅蓮の髪をかきむしる。

彼には窓から外を見る時間すら惜しかった。その時間を一人でも多くの民のためにと必死だった。

だがどれだけ尽くしたとしても天災を前に死者を防ぐことはできず。

「くそっ！」

数日が経ちようやく状況が落ち着いてきた頃に、彼は苛立たしげに机を叩いた。

ほとんど飲まず食わずで働いていたのだろう。本来なら艶を持っているはずの髪は鈍くくすみ、頬もこけていた。

ただその赤い瞳だけが数日前と変わらず怒りに燃え、爛々と輝いているのみである。

「今月に入つてすでに12回だぞ!? どう考えてもおかしすぎる!」

「しかし陛下。天災ばかりは私達ではどうしようも」

「建てても建てても家は壊れる! いくら強度を上げててもそれに合わせて地震も強くなる……民はいつまで経つても家に帰ることができないまま、仮設のテントで寝泊りだ。対策を練り施行すべき俺達も、まったく事態に追いつけていない」

「それは」

「一度や二度の天災ならどうしようもないと言いつてもできるかもしれない。だがこれは本当に天災か? 聞けば被害は西のツヴァイ、北のノースポートにまで及ぶという。これだけの広範囲の天災など聞いたことがない」

苛立ちが治まらず、ほぼ八つ当たりのように激昂する皇帝に彼の何倍も生きた家臣が苦渋の表情を作る。

この若き皇帝が何のために起こっているのか、王城で知らぬ者はいない。

だからこそ周りを取り囲む家臣達もその言葉を受け目を閉じた。

ただ一人、国専属の預言者以外は。

「陛下」

「……何だ」

長いローブをまとい、顔を隠したまま皇帝の前に出ることを唯一許されている男は一步前に出て膝をついた。

そうしてローブで隠れた顔で主君たる青年を見上げ、囁くような声で言った。

「先日、地震が起きた日の夜に夢に一人の少女が出てまいりました」

「先見の夢か?」

「はい」

国でただ一人の預言者であるその男は、しばしば未来を夢に視ることがあるのだと言う。

その夢がどれだけ信憑性の高いものかは、顔を隠したまま主の前

に出て文句を言われないことから察することができのらう。
家臣達はその夢がどんな内容のものであれ決して疑うことはしな
かった。

皇帝はもとより、その能力を高く買っていた。

ただ、望んで視られるものではないので皇帝が彼を呼び出すこと
はなかったが。

男は主の言葉に小さく頷いてから、唐突に「陛下におかれまして
は、白銀の魔女の話をご存知でしょうか」と問うた。

だが彼は男のそんな態度には慣れていいのか、特に驚くこともせ
ず「ああ」と答える。

「大戦の英雄だろう。実在したのは知っている」
それがどうした、とは言わなかった。

言わずともすぐに答えは得られることを彼は知っていたからだ。
彼の考えていた通り、男はすぐに答えを告げた。

深く頭を下げ、足元の真つ青な絨毯を見つめ朗々と。

「銀の魔女、最果ての魔女が救世主。有名なこの言葉が、再び真実
となる日が来ます」

「なんだと？」

「夢では、白銀の魔女により救われる映像ばかりが流れ込んでくる
のです。それがどういいう手段なのかは分からないにせよ」

「地震が治まると？」

「夢で視た陛下はそう仰っておりました」

「……そうか。だが、最果ての地と言ってもどこにいるのか検討が
つかなければ意味がない。一体どうすれば」

「それなのですが」

もはやこれにすぎるしかないのかと考え、いかにして魔女を探す
かを思索し始めた主に男は珍しく逡巡しながらも告げた。

そのせいだらう、主の顔を見ずに告げた男は彼が自分の言葉でど
んな顔をしたのか分からず終いだった。

「私が視たのは銀に翡翠の魔女ではなく、銀に海の蒼を持つ少女で

した……どうやら銀の魔女は他にもいるようです」

「な……っ」

意外な情報にうるたえる家臣をよそに、皇帝だけがその瞬間ただ足元で跪く男を見ていた。

「間違いはないな!？」

焦るようにそう念を押して、頷く男に視線を向けながら彼は遠い昔を生きた先祖が残した言葉を思い返す。

同時に、彼は誰にも気付かれないように小さく笑った。

そうして口元に笑みを浮かべたまま未だ動揺したままの家臣達を見渡し、その立場を鑑みれば決して言うべきではないことを口にした。

「道が定まった! その女は俺が迎えに行く」

「な、何を仰ってるんですか! 陛下を行かせるわけが」

「そうですよ、大体」

「お前達では駄目だ。会うことすら叶わないし、何より俺は幸いにしてその魔女に心当たりがある。翡翠の方でなくて本当に助かった、これなら次の地震に間に合うかもしれない!」

主の言葉に次々と怒号が飛び交ったが、それらを一蹴して彼は二ヤリと口の端を上げる。

これ以上自国の民を傷つけるわけにはいかないと考えていた彼は、ほんのわずかな希望でも手放すわけにはいかなかったしその気もなかった。

国や民への想いの熱さ、そして自らが持つ色から「炎帝」とも呼ばれる彼は、その紅く燃えるような瞳をまっすぐ北へと向けて言い放った。

「名に相応しく最果ての地で眠る魔女殿には、是が非でも救世主になっただけだ」

第一話 切れた音

雪の降る日だった。

目の前に広がる白銀の世界の中で、ただ一人炎の色を持つあの人は泣いていた。

城下で多くの人が倒れて死んだ、オールド暦四六一年のあの冬の日。

彼は何を想って、何を願って、何を叫んで泣いていたのか。

今ではもう、思い出すことはできないけれど。

夢から覚めると、真っ先に猫の鳴き声が聞こえてきた。

それもただの可愛らしい鳴き声ではなく、まったく可愛げのない繁殖期特有の鳴き声だ。

そうかと思えばどこかのオス猫がメス猫を巡って喧嘩を繰り広げる声も聞こえる。

……どう頑張っても眠るどころではない。

かといって私は柔らかな日の匂いのするベッドから出ることもできなくて、毎度のことのようにビーを呼んだ。

別に使いつぱしりにしているわけじゃなくて、この問題は私が出る幕ではないからなのだ。

第一私には猫語が分からない。

「おはよ、レイア」

「おはよう。それよりあれ、どうにかならないの？ 朝から晩までミャーミャーミャーミャー言われたらたまったものじゃないわ」

「喧嘩の仲裁も王様の仕事なんだってさ。一応僕も猫の中では王様だしね」

「何よそれ、体のいい雑用係じゃないの。大体それなら屋敷じゃな

くてノースポートの市場ですればいいのに」

私の機嫌とは反比例して上機嫌なビーは、自身が密かに自慢にしている灰色の毛並みをすり寄せてきた。

何を言っても気にしない、という態度がありありと伝わってくる。心地良い体温と毛並みの肌触りに、つい眠ってしまいそうになるのを我慢してベッドから起き上がりその攻撃から逃げる。

すると心なしか残念そうな顔をされたので、やっぱり無下にできず抱き上げた。

腕の中に抱き込むと小さな心音と体温が伝わって心地良いことこの上ない。

「じゃあ、と猫らしい声を出すビーは間違っても他の猫達のような可愛げのない声は上げない。」

彼曰く「繁殖期はとうに過ぎてる」「らしい。それを聞いた時密かに安堵したのは秘密だが。」

「それより、何でそんなに機嫌がいいの？」
「あつたかい寢床とご飯と昼寝する時間があれば猫はいつだって上機嫌さ」

「それはいつもじゃない。今日は特に機嫌が良さそうに見えるけど？」

少年のような若干高めの声からは、鼻歌が漏れてきそうなほどだ。彼の言い分からすれば、あつたかい寢床かご飯か昼寝する時間のどれかに該当するんだろうけれど。

意外に気まぐれな性格なのでいつ何をしたら喜ぶのか三百年経った今でもよく分かっていなくて、私は首を傾げて答えを待った。

そうしてじっとしていると天窓から差し込む温い光が、再び睡魔を呼び起こす。

思わず目を閉じてしまいそうになっているとそれに気付いたのだろっ、ビーはそれ以上焦らさずに私の腕をすり抜けてベッドから降りた。

「ちょっと待ってて」

そう言っ て寝室を出て行く。
その隙に誘惑に負けてベッドに入ってしまった、そこでふと考え込む。

「久しぶりに見たな、あの夢」

あの人が泣いている夢。

思考のずっとずっと奥に封じ込めて鍵を何重にもかけたと思っただのに、まだなお浮上してくる。

あの人はあの時なんて言っ てただろうか。なぜあんなにも泣いていたんだろうか。

思い出せないのが悔しくて、私は夢に見た光景を再び思考の奥へと突き落とす。

そして考えるのを放棄するため、苦し紛れに枕元に置いてある本へと手を伸ばした。

シンプルなデザインの真っ白い本の中には、驚くほどたくさんの文字が書いてある。

それは精霊を使役する方法であったり、人を癒す術であったり、逆に人を殺すための術が書いてあったり。

数多くの言葉が残されているが、共通しているのはそれらがすべて魔術であるということだ。

誰かが残し、気付いた時にはこの手にあつた私が知る限り世界で唯一冊の魔導書。

世界に散らばる魔導士達が歌い歩いて魔術を広めていた時代に、形として残してくれたその見ず知らずの人に今でも深く感謝している。

これがなければ私は簡単に命を失っていただろうし、これからもそうならないとは言えない。

もつとも、もつかなり長く生きたのでこれ以上生きようという意識がないのだが。

そういえば、私はこれをどこで手に入れたんだろうか。

そんなことを考えながらペラペラとページをめくり、文字を指で

なぞりながら黙読していく。

手に入れたその時から読めるようになっていたはずなのに、ここでこれを手に入れたのか、魔女以外読めないようなこの文字をどこで覚えたのか。

一切が思い出せないことに少しだけ苛立ちを覚える。

「レイアー、見てみて！」

苛立ちを抑えるためにゆっくりと本を黙読していると、何やら重そうなものを引きずってビーが部屋に入ってくるのが見えた。

見ればそれは包装紙に包まれてご丁寧にリボンまで巻かれていても

「……魚？」

「うん、今朝方カナデ島から来た奴が手土産につて！ カツオって言うんだよ！ ねーねーレイアー」

「……はいはい。料理してあげるからそんなにキラキラしないでよ」「やったー！ じゃあ早く食べようよー」

あまりにも嬉しそうにはしゃぐビーが、そのままカツオとやらを引きずって行こうとするので慌てて止めた。

朝から手が生臭くなるのは嫌だったけど、家の中が魚臭くなるよ
りずつとマシだった。

そう思い受け取った魚は、やはりずっしりと重く身が詰まっている感触がした。

モリス大陸の東に位置するカナデ島は百年戦争の前から鎖国しているので無論行ったことはないが、良質の魚が獲れることで猫の間では有名なのだと聞いたことがある。

どう料理したらいいのかまったく分からないけれど、ビーはその辺了解してくれているんだろうか。

「何作ればいいの？」

「タタキ！」

「タタキ？ 何それ、聞いたことないんだけど」

「さっき作り方教えてもらったから大丈夫！ 僕が教えるよ」

スキップでもしそうなほどに軽快な足取りで歩きながら、はしゃいだ高い声が響く。

そのほっそりとした足が冷たい床を踏んで歩くのを見ながら、私は溜息のような息を漏らした。

さっきまで苛々としていた気持ちを一蹴するかのような姿は癒しではあるのだが、少し呆れもする。

「三百年も生きて自動的に王様になっても、やっぱり猫は猫よね」

「当たり前さ。僕は生まれたその瞬間から猫なんだから」

呆れたままの声でそう言うと、ビーはくるりと振り返って得意げにそう言った。

左手の窓から差し込む柔らかな日差しが、子供のように光る金の瞳を照らす。

私はカツオを持ち直しながら、当たり前と言えば当たり前前という言葉に「それもそうね」と返した。

生命の理を超えて長生きしたって人の言葉を覚えたって、やっぱり魚一匹で上機嫌になるし毛並みが乱れると不機嫌になる、そういうものなのだろう。

では

「レイアだって、初めて会った時から変わってないじゃないか。相変わらず普通の女の子のままだよ」

「17の時から？ いくらなんでもそれはないでしょう」

「そうかな、僕には同じに見えるよ。いつまで経っても朝は弱いし、食わず嫌い多いし。大戦後の魔女狩りで散々被害にあったのについてものんびりしてるし」

「……馬鹿にしてるでしょ」

「お互い様だね」

では私は？ と尋ねる前に答えが返ってきたので少し驚きながら

も前を見る。

すると別段変わった様子もなく、むしろ何を当たり前のことでも言いたげなビーの視線とぶつかった。

気負った風でもなく、淡々と事実を述べているような気軽さ。

だけどだからこそ信憑性のある言い方をされて、私は一瞬立ち止まった。

「……そんなに変わってない？」

「うん」

何も即答しなくても、と思ったがそれはあえて口に出さない。

確かに容姿はこの島に来た十七の時から変わっていないが、それだけが理由じゃないんだろう。

横目に見ると、私を私だと定義するかのような鮮烈な銀の髪が見える。

まったく色褪せることを知らない髪が、私が変わっていない理由ではないなら一体何が理由なんだろう。

自分が変わった方がいいのか、そうじゃない方がいいのかそれすら理解できないままにそつと息をつく。

同時に生臭い魚の匂いが鼻をついて、私は慌ててキッチンへと行くこうとして。

「あ」

「どうしたの？」

歩を進めようと動かした足は、不意に現れた違和感のせいで結局元に戻された。

思わず手に持つ魚を落としそうになり慌てて持ち直しながら、窓の外を見る。

そこは特に何の変化もなく、変わり映えのしない森と小さな川が見えるだけのいつも通りの光景。

「ただ、今確かに。」

「揺れた」

「え？」

「ここじゃないけど。またモーリス大陸で地震があったみたい」

「昨日揺れたばかりなのに!？」

「規模は小さいけれど……頻度は格段に上がってる。すぐに余震が来るはず」

目に見ることのできない存在が、何かに怯えているような感覚。

それは地震があつたという事実を私に伝えてくれている。

伝えて、どうしたいのかは分からないけれど。

ぐらぐらと世界が壊れていく、何かが抜け落ちていくような感覚。そういったものが体の芯から伝わってきて、立っているのが困難になる。

いつだってそうだ。地震を感知する時はいつもこんな風に足元がおぼつかなくなる。

一瞬視界がぶれて倒れそうになり慌てて壁に手をつくると、慌てたようなビーの声と魚が落ちる音が聞こえた。

ひやりとした壁に触れて初めて、自分が手に汗をかいていることに気付く。

体が不調なわけではないのにこの時ばかりはだるくなるのを抑えられない。

自分には関係のない遠い場所での出来事が及ぼすこの倦怠感に、許されるなら舌打ちでもしたい気分だ。

息を吸い呼吸を整えてから、壁についた手を離す。

そうして魚を拾い上げてからもう一度窓の外を見た。

ここからでは見ることの適わない大陸を見ようと目を凝らすのが、やはり無理なものは無理で。

私は諦め混じりに溜息をついて視線を逸らしてから今朝の夢を思った。

夢に出てきたあの人が生きた大陸の終末が、夢を見た原因かもしれない。

というより、そういうことにおきたい。

私は心配そうにこちらを見上げる金の瞳に大丈夫というように手

を振って、一歩進む。

するとだるくて仕方なかった体も少しは楽になり、これ幸いと歩を進めた。

同時に、体の奥でもう一度地面が揺れる感覚。

それを意識しないようにしながら進み、まな板の上に魚を置いてからずるずると座りこむ。

「何なのよ、もう」

膝に飛び乗ってくる灰色の塊を意識の隅に捉えながら、苛立ちをそのままに独りごちる。

私には関係ない。

少なくともこの島にまで被害が及ばない限りは、関係のないことのはずなのだ。

魔女は、魔導士は皆この感覚を味わっているんだろうか。それとも私だけなんだろうか。

長生きするだけして外に出なかった私にはさっぱり検討がつかないのだけれど。

流れる汗と体の芯が揺れるこの感覚が不快なことだけはよく分かった。

「大丈夫？」

「あんまり大丈夫じゃない……」

困ったような悲しそうな顔をするビーを宥めるように撫でながら、もう片方の手で首筋に張りついた髪を払いのける。

そうしてビーを抱えながら着ていた白のワンピースを軽く叩く。

まだ少し倦怠感を感じてはいたが、座り込まなければならぬほどではなくなったので試しにうろろと歩いてみた。

これなら大丈夫。

軽くなる足取りを感じてそう思った私は「じゃあ作りましようか」と声をかけ、心配そうな顔を僅かに綻ばせるビーを床に下ろした。

そしてまな板の上で調理されるのを待っているリボンと包装紙付きのカツオを見下ろし、包丁を手に取る。

よし、と心の中で言ってからとりあえずつろこを取るつと包丁を
当てた時。

「え？」

ぷつんと、何か切れる音がした。

それは地震が起きた時のあの感覚ではなく、この屋敷に来てから
ずっと起こることのなかった非日常。

第二話 炎帝

「君が人目に触れぬよう」

そう言つて、屋敷の周囲に結界を張り巡らせるようあの人が指示してから三百四年。

人間以外の存在しか通ることの許されなかった魔力の糸が、ふつりと切れた。

「!?!」

手に持った包丁を慌てて離し顔を上げると、確かに誰かがこの屋敷に向かつてくる気配がした。

気配に気付いたのだろうか。今の今まで屋敷のあちこちで好き勝手に鳴いていた猫達の声が止み、しんと静まり返ったキッチンには不気味すぎるほどの静寂が舞い降りた。

結界が破られた……? ?

背中に冷たい汗が伝うのを感じながらリビングに向かい、椅子にかけてあったショールを肩に掛ける。

そして、集中し切れた糸を繋ぎ合わせようと試みたがそれはできなかった。次から次へと切れていく糸の感覚が頭の中の「ぷっん」という音で伝わってくるからだ。

でも、いったい誰が何のために。

この場所を知っている人間なんてとうの昔に亡くなっているはずだ。なのに、どうして今更。

一つ息をつきながらそう思い、睨みつけるように目を細めて玄関のドアの方向へと視線を向ける。

そしてこの unnecessary 来訪者の姿を見ようと、透視の呪文を口にし、すぐにやめた。

「レイア？」

「……直に見た方が早いわ」

それに、盗賊の類なら直接灸を据えてやりたい。そうでなかったとしてもいきなり人の屋敷の結界を壊すような非常識な人にはそのぐらいで丁度いいはずだ。

シヨールを胸の前でかき合せて、頭の中にある呪文をありったけ思い出しながら玄関へ向かうと、外からもさくさくと草を踏みしめる音が聞こえてきた。

今度は魔力を使つての感覚ではなく、私自身の聴覚で伝えられた音だ。

小さく早いスピードで歩く私とは正反対に、大きくゆっくりと歩いてくる足音。

歩幅もスピードも違う二つの足音は、私が十歩、相手が五歩進んだところで止んだ。

少し手を伸ばせばドアノブに触れるほどの場所に立って、私は相手がドアを開けるのを待つ。

別に自分から開けてもよかったのだけれど、歓迎してやる理由もないのでやめた。

足音からすれば、目の前にいる人間は彼と称するのがいいんだろう。

彼は私の後ろからビーが追いついてくるまでの間も、ドアを開けることなくただ立っていた。

……何がしたいんだろうか。まさかドアベルを探しているなんてことはないわよね。だとしたら何て律儀な。

足元で首を傾げながらドアを見つめるビーと共に前を見ながら、思わず呆れて息をつく。

すると。

「……すまないが、開けてもらえないだろうか」

ここでの生活に慣れていたせいだろう。思わず息を呑んでしまったほどの低い声は、静かに言った。

ドア越しの、私に向かって。

「……」

一応静かに歩いていたらつもりだし、屋敷のドアや壁だって決して薄いわけじゃないのに。

それでも気付かかれていたなんてと多少の驚きを隠せなかったけれど、それを態度に出してやるつもりは毛頭ない。

しかしどうしたものか。

このまま無視して居留守を使ってもいいけれど、それだともこまで来た意味がない。

少し考えて結論を出した私は、先ほどまでの驚きを隠したままに平坦な声で返してやった。

「ご自分で開けたらよろしいでしょう」

「一人暮らしの女性の家に無断で上がりこむほど無礼じゃない」
するとすぐに、若干慚然としたような声が返ってきた。

けれどその言葉はいかがなものか。
わざわざ一人暮らしの女性が張り巡らせた結界を壊しておいて、
今更なお話だ。

腹が立つのを通り越して呆れてしまった私は、それでもどこか棘のある声で。

「ご安心を。ここまで来ただけで十分に無礼ですので」

世間一般でこれが無礼にあたるのかは分からなかったけれど、ついでに口から出てしまった言葉を消すこともできず。

とりあえずそれ以上何も言わないよう口を閉ざし、相手の言葉を待つ。

それにしても……ドアをじっと見つめながら心の中でそっと呟く。
足音だけでは分からなかったが、声を聞く限り随分若い印象を受ける人物だ。今までずっと自分とビーの声ばかり聞いていたから、あの低い声には驚いた。

けれど、成人男性ならあれぐらいが普通なんだろう、多分。私がよく知る男性も丁度このぐらいの低さの声を持っていた気がする。

もつとも、もうとつくに亡くなっている人物だし随分昔の記憶だから当てにならないが……。

でも、そうだ。

私の記憶にある「彼」の声に、よく似ている。目の前の男の方がずつと硬い印象を受ける声だけれども。

「貴女は」

ぼんやりと記憶を引き出し考え込んでいると、不意に声をかけられ思わず体を震わせる。それは、今丁度思い出そうとしていた人物に話しかけられたような錯覚を感じたからかもしれない。

沈黙のまま先を促すようにドアをじつと見つめると、それが伝わったわけではないだろうが男は続ける。どことなく冷たい印象を感じさせる硬質の声には、なぜだか若干の期待と不安がこもっているように聞こえた。

「貴女は、何色の瞳をしている？」

「……え？」

「だから、貴女の瞳の色は何色なのかと訊いている」

それは一度聞いたから分かってる。

少し早口に繰り返す男の声をそんな風に思いながら聞き流し、立ちつくす。

困惑する頭の中に一応答えは出ているものの、どうしてそんなことを答えなければならぬのかが分からず口にできない。

それより、この男はそんなことを尋ねるためにわざわざこんな北の孤島までやって来たのか。だとしたら、どうかしてる。

外からの人間がこの島に来るには、ノースポートから一週間に一便しか出ない船に乗るしかないのに。

いや、ノースポートの人間なら一日一便だからこの男はノースポートの住人なのかもしれない。

どちらにせよ目の前の男の質問の意図が掴めずに困惑していると、今までじつとしていたビーが私のドレスをくいくいと引いた。

(何?)

ドア越しの男に聞こえないよう、唇だけでそう問うとビーもそれに倣って唇だけを動かした。猫の口は人のそれより小さくて、理解するのに少し時間がかかったけれど。

(最果ての魔女に会いに来たんじゃないの?)

数秒かかって理解した言葉によろやく、ああそうかと気がついた。昨日ビーに示唆されたばかりなのにすっかり忘れていた自分が情けない。

銀の髪に翡翠の瞳。

『銀の魔女、最果ての魔女が救世主』

きつとこの男は、それを目指してきたんだろう。

気の毒に、と上辺だけの同情を胸の中で呟きながら、私は一瞬考えてこう返した。

長い沈黙に耐えた末に出された答えに、男は何を思っただろうか。それが少しだけ気になった。

「少なくとも、翡翠の瞳ではありません。ご期待に添えず申し訳ありませんが、人違いです」

ただどうかこれで帰ってほしいと切実に思う。理由はないけれど知らない人が結界の中にいるだけで落ち着かない。

ああ、でも帰る前に結界を解いた方法だけは訊いておかななくては。これからの参考にしたい。

体温ですっかり温もったシヨールを羽織りなおしながら、とりあえず相手の出方を待つことにする。

何やら私達の会話は沈黙ばかりのような気がする、と思わなかったわけじゃないけれど自分から何かを切り出すのもどうかと思ったし切り出す言葉もなかった。

舞い降りた沈黙の中で、上を仰ぎ見ながら退屈しのぎに考える。

この男は落胆するだろうか、絶望するだろうか。

大の男がただ会いたいからという理由でわざわざこんな所に来たりはしないだろう、だとしたらそれなりの理由があるはずだ。

期待と不安が混ざった声も、そうした理由からなんだろうと思っ

たら納得がいく。

しかし、私は大戦後に生まれたまったく関係のない……銀の髪ぐらしいか共通点のないまったくの別人で。

誰の救世主にもなり得ないのだ。たとえ魔導の力があつたとしても。

彼は何を言うだろうか、世界への嘆きの言葉か、自分への怨嗟の言葉か。それとも私への八つ当たりの言葉か。

左足に感じる灰色の熱に目を閉じながら、聴覚だけでそれを聞き届けることを決めた。

そうしてどれだけ待っていたのか、長い間だったような短い間だったような気がするけれど。

「そうか、翡翠の瞳じゃないか」

一言目に聞こえてきたのは、くつくつという笑いを含んだ声。

不安を取り除き、期待だけを込めて出された声は私にというより自分自身に言っている言葉のようだ。

密やかな笑いは徐々に大きくなり、目を開けた今でも聞こえる程度の大きさの声で彼は笑っていた。

……絶望して壊れた、というわけじゃなさそうだけど。

それでも予想に反して笑い始めた男の様子がさすがに心配になってきて、どうしたんですかと言おうと口を開いて。

「白銀の魔女は必要ない。今の俺に必要なのは、蒼の瞳を持つ魔女一人だからな」

笑みを含みながらも鋭いほどに真っ直ぐ放たれた声に、結局は口を閉ざすことになった。

男の言葉に、再び目を閉じてゆっくりと瞼に指を触れさせる。

そうして微かに脈打つ瞼の下にある、誤魔化しようのない紺碧の瞳を思い浮かべた。

何も答えない私に構わず男が続けるのが暗い視界の中で聞こえる。聴覚のみで受け止めている言葉は、視覚がない分より鮮烈に頭に残った。

「モーリス大陸の民に多い空色の瞳では駄目だ。海のように深く濃い蒼を持つ銀の髪の魔女を探している」

どうして、という言葉は溜息となって出ていくばかりで、外に出ていく確たる言の葉にはならない。

ビーが言うように勘違いしてここまで来たのならまだ理解できる。それほどに最果ての魔女の話は浸透しているし、近頃の地震の状況を考えると誰かが救世主に頼ろうとしてもおかしくはないのかもしれない。

でも、この男は最果ての魔女ではなく私を探していると言う。それはなぜなのか。

そういえば、男の言葉を聞きながら一つ疑問に思った。

この男は私の髪については一言も触れなかった。それこそ私が銀髪であると信じて疑っていないというように。

あくまで瞳の色にこだわっている。それがどうしても気になった。結界を破ってきたぐらいだ、私が魔女であることはとうに知っているのだろう。そして、この男の言葉から察するに私が銀髪であることも。

……どちらも、誰も知らないはずの情報なのに。

『君が人目に触れぬよう』

そう言ったあの人が、私に関する記録はすべて処分したはずだ。

もし処分漏れがあったとしても、とうに風化して朽ちているだろう。当時の文明では、三百年の時に耐えられる紙などなかったはずだから。

「もう一度訊く。貴女の瞳は何色だ？」

瞼に指先を触れさせたまま男の問いには答えずに、昨日ビーと話している時に浮かんだたった一つの可能性を思い出す。

それは気の遠くなるような時間、手間をかけて私のことを何らか

の形で伝え続けていくこと。

あれほど私が人目に触れないようにと言っていたあの人が、どうしてそんなことをするのか分からないし考えられなかったから意識の端に追いやっていたけれど、それしか今目の前にいる男が私を知る術はないはずだ。

国中の人間に伝えるなんてことはさすがにしないだろう、だとしたら城内にいる誰か。

皇族か、それとも彼らに命じられた臣下か。

そこまで考えて、結局そんな情報では何にもならないと思い首を振る。

同時に薄く開かれた視界に一番に飛び込んできた銀の髪が、何だかとても恨めしかった。

ええ、そうですよと答えるのは簡単だ。けれどそう答えることで何か面倒なことに巻き込まれそうな気がしてならない。

とにかくこの男の目的が知りたかった。私を探してどうしたいのか、それを知って安心するなり警戒するなりしておきたかった。

けれどそれを問うことは、男の問いを肯定することに他ならない。だから問えない。

これだけ長生きしていても、一人の来客に対する扱いに困るだなんて本当にお笑い種だ。

苦笑しつつ、色々考えすぎて熱くなつた体を冷ますためシヨールを腰の位置までずらしていると、焦れたような声が響く。

「どうした、答えられないのか」

頭の中にたくさん言葉を用意しつつも、前を向くためにきちんと目を開けて広がった視界の中で苦し紛れの言葉を返す。

「答える義理があるのでしょいか」

ああ、これも相手の言葉を肯定する言葉になってしまいかねないというか、相手はきつとそう取るはずだ。

失敗したと思う暇もなく言葉は口から出てしまった。そのことに心底頭を抱えたい気持ちになる。

大体私の予想が当たっているのなら目の前の男は一応位的に私よりずっと上の人のはずなのに、随分と生意気な口を叩いたものだと
思う。

とはいえ、三百年も生きているのだからこれぐらいの無礼は許されるのだろうか。

色々思うところはあったけれど、それは楽しげな男の声にかき消されてしまった。

「義理なんてないさ」

「でしたら答えません。ドアも開けませんのでこのままお帰りください」

「魔女殿は、思っていたよりも随分と意地が悪い御人だな」

「貴方の言葉をお借りするなら、一人暮らしの女性の家を連絡もなしに訪問するのは無礼です。無礼には無礼で返しても問題ないかと思いました」

「手紙を送るうにも、届ける者がいなかったんだ。すまないな」

よくもまあ、これだけスラスラと言葉が出るものだと自分自身に呆れてしまう。

けれど意地が悪いとは失礼な。そう思いつい棘を含んだ言葉を返してしまうものの、相手は楽しげな声色を深めるのみだ。

先程までの長い沈黙はどこへやら。平坦な声と楽しげな硬質の声
が実にテンポ良く飛び交う中、誠意があるのかないのか分からない謝罪を最後に再び沈黙が降りる。

私を魔女と知っていてなお堂々とした態度を崩さない男は、私の出方を待つために口を閉ざす。

そして次に言葉を返すべき私は、自分が考えた可能性の是非について知るため言葉を選んでいたがために口を閉ざす。

ただど結局何も口にしなないわけにはいかず、一瞬躊躇ってからその言葉を口にした。

「貴方の髪の色は？」

「……そんなことを訊いてどうする」

「貴方が、貴方にここに来るよう命じた誰かがいるのならその人がどちらか片方でも炎の色の髪を持つなら、私は私の予想が当たったのだと納得できます」

横に流れてきた髪を背中に流しながら素直に答えると、男は一言なるほどと呟いて、そして。

「そんなに俺の髪の色が気になるのなら、ご自分で確認なさるといい」

「それは、ドアを開けるということですか？」

「いや」

妙に慇懃無礼な言葉を返してきた。それが何となく癪に障って、眉を寄せながら思わず険のある声を出してしまう。

いや、ドアぐらい自分で開ければいいのだけれど。開けないと言った以上自分から開けるのは癪だったのだ。

これは私にドアを開けさせるための言葉なのかと思ったけれど、それはあっさりと否定された。

同時に視界の端に見えていたビーの耳がぴくりと動くのが見える。それはドアノブが捻られる音が聞こえたからなのか、それとも男の言葉を聞いたからだろうか。

「ドアは自分で開けると言ったな」

そうしてドアが少しだけ開けられる。開いたドアの隙間から日差しが入り込み、眩しさに目を細めると同時に森の清涼な空気が鼻をついた。

少し遅れて、屋敷の傍を流れる川のささやかな水音が聞こえてくる。

片手を目の前にかざしながらその音を聞き、そっと手を下ろす。光の入ってこない玄関に長くいたせいでまだ目は光に慣れていないが、我慢できないほどじゃなかった。

鮮烈な光に視界を奪われる中で見えたのは、目の前に立つ男のことなく均整の取れた立ち姿。

だが男はそんな私の頼りない視界よりも、もっとはつきりとした

視界で私を見たらしい。

相手の目があるであろう位置をじっと見つめっていると、男が一瞬息を呑む気配を感じた。

同時に、小さく笑った気配もしたがその顔はよく見えなかった。

「予想以上だな。美しいとは言われていたが」
「何を……」

誰が、何を言っていたと？

男の言葉の意味がよく分からず、とりあえず視界を取り戻すために目を凝らす。

すると頭一つ分よりも大きな背に、肩ほどまで伸ばされた髪、声と同様に鋭さと錯覚しそうになるほどの真っ直ぐな瞳、冷たそうな印象に反して緩やかに孤を描いた口元といった相手の姿がゆっくりと見えてくる。

そうして黒と白の世界が最後に色をもたらして、私は溜息のような声を漏らした。

「炎帝……」

「レイアステイ、だな？」

色のついた世界で一番よく見えたのは森の緑でも川の水色でもなく、炎の色だった。

モーリス大陸の東の大国ファルガスタの皇帝のみが持ち得る、かの国の禁色ともいえる色がそこにはあった。

そこまでは確かに意外だけれど予想の範疇だった。あの人が誰かに伝えるなら、子孫かよほどの側近だと思っていたし、他言は決して許さないはずだから。

でも、ここまでとは思っていなかった。

目の前に立つ男の視線と声は、冷たく硬質の印象を与えてくるけれど。

頷いた私に笑いかけてくるその表情は、安堵したような声は。
「やっと見つけた。俺の救世主」
三百年の昔を生きた「彼」に、瓜二つだったから。

第三話 救世主

その姿を見た瞬間、頭に浮かんだのは炎のように熱くて春のように暖かい笑顔。

たくさんの思い出が走馬灯のように、浮かんでは消えを繰り返す。懐かしさと切なさに胸が痛くなり、思わず涙が出そうになった。けれど。

「私は貴方の救世主じゃない」

目の前の男は「彼」じゃないし、彼はもういない。

それが嬉しいのか悲しいのか分からないまま、私は棘を含んだ声でそう言った。

「いいや」

驚きから立ち直り反撃の言葉を発した私に、男は口元に笑みを形作ったままそう言って首を振った。

そうして熱を孕んだような紅の瞳をこちらに向けて、じつとこちらを見つめてくる。他に何を考えるでもないまっすぐな瞳を見返すのは何だかひどく勇気があることだったけど、目を逸らすこともできなくて私もじつと見返した。

相反する色を持つ私達の視線は交わるわけではなく、むしろぶつかっているという表現が正しいような強いものだ。

喧嘩と呼べるほどのことでもなく、でも色々とお互い譲れないものがあるせいなのかもしれない。

少なくとも私は今自分が言った言葉を取り消すつもりなんてないのだから。

私が救世主？ 冗談じゃない。

そんな大そうなものになるところか、三百年前にはこの男のいる

国の魔女狩りで殺されかけたというのに。死を望まれるほど恨まれていた存在が、いくら時を経たからといって同じ地で救世主になんかなれるわけがない。

というよりもたとえどんな状況であってもなる気がないのだけだ。

そう考えながらも目を逸らさずにいると、またしても男はくつくと笑い声を漏らした。

楽しくて楽しくて仕方がないというようなその笑い声に眉を寄せ、るものの、何か言おうとする前に男の声が響く。

「随分とお気の強い方のように安心して」

「安心、ですか」

「城内にはそれなりに富と権力を欲する輩が蔓延っている。だが貴女ならそうだった輩もその冷たい瞳で蹴散らせそうだ」

気が強いと言われたことに関してはあえて何も言わずそう問うと、男は更に失礼極まりないことを言った。

冷たいとはなんだ、こちらはただ視線を逸らしたくなかったただけなのに。

あまりの言葉に慄然として、そこでふと気付く。

……今さらりと城内には、と言われた気がする。

まるで当たり前のように私がついてくると思っているのかこの男は。

呆れて口をぽかんと開けていると、男は日差しの中着ている黒の外套を森の清涼な風で揺らしながら一歩足を踏み出した。すると私の歩幅にして一步分の距離しか、お互いの間にはなくなる。

近づいたせいで更に顔を上へと向けながら相手の顔を凝視していると、男は私が先程の言葉に対して不満を持っていることに気付いていたのか「これは失礼」と全然失礼だと思っていないような声で言った。まるで道化師が口にするような慇懃無礼な声色は癪に障ったが、そんなことをいちいち言っではいられない。

黙っていると男は私の瞳を指差しながら続ける。

「貴女の瞳の色があまりに冷たいもので、つい。海というよりは氷のようだ」

「生まれつきです。大体、貴方の瞳も無駄に高い熱を孕みすぎているのでは？」

「悪いがこれも生まれつきだ。ああ、でもそれはいいな」

上半身を傾けて瞳を覗き込もうとする男から逃げるように、足を一步後ろに下げる。同時に一緒に下がったビーが軽く毛を逆立てて男を睨みつけるが、男は気付いているのかいないのかまったく気にした様子もなく手を打った。

そうして楽しげに笑いながら更に一步足を踏み出し、屋敷の敷居をまたぐ。常ならばここで境界が発動するはずなのに、やはり何の効果も成さなかった。ただ、ふつりと糸が切れる音が一つ頭の中で響いたのみ。

目を細め、その瞬間魔力がどこかに流れたか探そうと試みるが一瞬のことでもあるし、何より他人の魔力を探るなどということは得意ではない。三百年前は力の使い方をほとんど知らなかったし、今までは人に会うことがなかったのだから。

試行錯誤を繰り返し、数度目の走査で諦める。はあ、と溜息をつこうとしてようやく自分が未だに男の目を見ていることに気がついた。視線だけを向けてまったく相手を見てはいないという unnecessary 器用さを、視線を逸らすことで誤魔化そうとする。

するともう一度男はこちらを見下ろして瞳を覗き込んできたが、今度は逃げることができなかった。

ぼんやりしているなどとも言われるのかと思ったが、幸いなことに相手も別のことを考えていたらしく次の言葉はまったくそれとは関係のないことだった。

「関係はない、のだけれど。」

「熱は氷を溶かす。ということは、貴女の冷たさは俺の熱で溶けるということだな」

「何を馬鹿なことを」

「この色を持つのは俺だけなのだから、世界中で俺だけが貴女を溶かすことができるわけだ」

それならば、と男は続けながら指先を私の頬へと滑らせた。久々に人に触れられる感触にぞくりとして目を見開き、思わず最大級の攻撃スペルを唱えようとして足元のビーに慌てた様子で止められた。その必死の形相に、使ったことはないがおそらく一瞬で人を殺せるぐらいのことはできるはずの言葉を飲み込み、代わりに後ろに下がろうとする。

だが男も理解していたのだろう、もう片方の腕が腰に回されぐいと引き寄せられる。そのせいでお互いの上半身が触れるか触れないかの位置まで持っていかれた。ドアから差し込んでいるはずの強い日差しは男の体のせいで見えず、顔には影が落ちていく。

離してください、という言葉は虚しく響くのみで男はまったく腕を離す気配がない。

ただ笑みを深めてこちらを見下ろしている。

こちらの混乱している様をじっくり見てやろうという魂胆か。そう思い、もういっそ殺してやろうかと黒い感情が混乱する頭を過ぎったけれど、結局はビーに視線を向けるに留めた。

だがその必要はなく、ビーはすでに男の足元へと寄って足首に牙を立てていた。それでも男が顔色一つ変えないのはよほど硬い素材のブーツでも履いているからなのだろうと、何か傷みに耐えるようなビーの顔を見て察する。

男は足元で威嚇をする灰色の猫のことなどお構いなしに腕に力を込め、頬に触れた指先を顎にまで落とす。

剣でも嗜んでいるのか若干硬い指先が触れる感触は、喜悅も嫌悪もなくただぞくりとするもので。私はびくりと体を震わせて顔を逸らそうとしたがその動きは逆にあの指先に絡めとられ、結果として仰向いて男の瞳を見るしか道がなくなる。

腰に回した腕とは違い、あくまで優しく触れてくる男はふっと視線の強さを和らげて笑みを浮かべた。

それは今までの慇懃無礼なものでも楽しげなものでもなく、とても甘く蕩けるような。

自らが持つ色と相まって相手の心を溶かそうとする、そんな笑顔を浮かべて男は言った。

「今すぐ貴女が溶けてくれればいいのに。そうして俺と混ざり合っ
て、常に共にあればいい」

「……傍から見れば口説き文句のような言葉ですが、要は利用したいだけでしょ」

「？ おかしいな。大抵の女はこれで堕ちるんだが、さすがに魔女殿には効かないか」

「どこの女性が騙されたのかは知りませんが、目を見ればすぐに分かります。視線を和らげた貴方に、真実なんて語れない」

だが、その笑顔がどれだけ甘くても。放たれた言葉がどれだけ甘くても。

私にはただ嫌悪の対象としか感じられなかった。

そう、今すぐにこの腕も指先も視線も離してほしいと思ったほどに。

ただまっすぐに向けられていた瞳が和らぐということは、何か別のことを考えているからだと思えて仕方なかった。第一、突然人の家に押しかけてきておいて口説き文句を言うような男などいるはずがないし、いたとしたら即刻退場願っているところだ。

はつきりと言い男を睨みつけると、相手は驚いたというように紅の瞳を軽く見開いた。

きっと自分の視線のことなど分かっていないからだろう、常に鏡を見ているわけでもないのだし。

相手が驚いている隙に両手を突き出し何とか離れようとするのだが、それでも腕は外されない。

先程と同じように瞳を覗き込まれるだけだ。

ただ一つ違うのは、相手の目が純粹な好奇心を孕んでいるということだけ。

自分の嘘を見抜かれたことがなかったのだろうか。何で分かったんだろうという言葉が出てきそうなほどに不思議そうな目でまじまじと見られて、居心地の悪いことこの上なかった。

居心地の悪い中、心の中では嘲笑と同情が入り混じった感情が渦巻いていた。

誰にも嘘を気付いてもらえないということ。

それは周りの人間の間抜けさと、この男の孤独を表しているような気がしてならなかったから。

何せこの髪と瞳だ、すでに皇帝になったのかまでは知らないが、少なくとも第一皇位継承者であるはずのこの男に友人がいないのは仕方のないことなのかもしれない。

男の胸に腕を突き出したままの状態でそう考えたが、そんな感情はすぐに取り消すことになった。

不思議そうにこちらを見ていた男はそうか、と言いながら何やら納得顔で頷く。

「分かった。貴女ほどの人だ、きっと口説き文句も睦言も言われ慣れているのだな。この屋敷なら男を何人連れ込んでも問題はないだろうし」

ぴたりと、そこで思考が止まった。

睦言？ 言われ慣れてる？ 拳句の果てには男を連れ込んでる？

確かに魔女は欲望に忠実で快樂を求める生き物だと三百年前の魔女狩りの際に散々言われたし、事実そういう魔女がいたという話は聞いたことがある。モリス大陸のとある小国にいたっては魔女と快樂に溺れた王のせいで滅んだという歴史書まであるほどだ。

だが、それとこれとは話が違う。

人目につかないよう、三百年以上も結界を張って閉じこもってた私が男を連れ込んでる？

冗談じゃないわ。

前言を撤回する、この男は立場じゃなくて性格のせいで友達がいらないのよ。

突き出した腕の先にある外套を力一杯握りしめ、私は腸の煮えくり返るような怒りに目を閉じる。

真実娼婦だと言われ、蔑まれていくような屈辱に唇を噛みしめた。他の男に言われていたらまだこれほど腹は立たなかったのかもしれない。

だが、相手の顔が顔だった。

「彼」と同じ顔をして、私を娼婦扱いする。

それがひどく悲しくて腹立たしくて、そう考えると触れている指先にも腕にも私が掴んでいる外套にも先程まで見えていた紅蓮の瞳にも。すべてに嫌悪感を感じて嫌で嫌で仕方がなくて。

静止するようなビーの高い鳴き声なんておかまいなしに、私は相手に聞こえるか聞こえないかというほどに小さな声で言い放った。

「その腕は黄昏の風を生み、その足は大地を揺るがし、その瞳はすべてを拒絶し、その声は世界を砕く者。汝、主たる我が名の下に今こそその責務を果たせ」

「? どうした、何をぶつぶつと……」

「ちょ、レイア！ それはやばいよ！」

「来たれ。ハウエルティ・ガーディアン」

瞬間、私を軸にして強風が吹き荒れた。主に、私の真正面に向かって。

目を見開き、驚愕を浮かべた男を軽々と吹き飛ばした風は、それだけでは飽き足らず風を固めた衝撃波を男へと食らわせた。もちろん、死なない程度の威力である。

そのぐらいの冷静さを持っている私は、逆に性質が悪いのかもしれない。

内心でそう思ったが、だからといってこの怒りをそう簡単には治められなかった。

そうして相手の姿が見えなくなってから、ようやく一息つく。するとビーが大慌てで外へ飛び出し、男の姿を見に行った。別にそんなことしなくてもいいのに。

性格の出来た猫に多少の呆れを感じていると、勢いよく戻ってきたビーが人目などまるで気にせず人の言葉を喋った。そういえばさつきも猫の鳴き声ではなかった気がする。それほどに混乱させてしまったのなら、悪いことをした。

しかし、そんな小さな後悔など吹き飛ばしてしまうほどの大声でビーが「何てことを！」と叫んだ。

「ひどい怪我だよ!? っていうかあんな魔法使ったら普通の人間は死んじゃうかもしれないんだよ!？」

「手加減はしたわよ」

「ああもう! だからレイアは変わってないんだよ! 昔から落ちて着いてるようで短気だし!! 大体後先考えずにやったでしょ!」

右前足で頭を押さえながら叫ぶビーに、なぜかものすごく萎縮しながら「うん、まあ」と答える私。そう言われてみれば多少やりすぎた気はする。呼び出したのはこの屋敷の門番なのだけれど、実は自分が誓約できた召喚霊の中では最強だし。

とはいえきつと短気じゃなくてもあんなことを言われたら誰だって怒りたくなるはずだ、ある意味開き直りのようにそう考えてドアの向こうを見て男の姿を探す。

けれどもかなり遠くまで飛ばしたのか、肉眼では確認できなかったので「ちよっと待ってて」と言い置き、仕方なく屋敷から出ることにした。ビーの言葉から察するに死んではいけないはずだけど、怪我ぐらいはしているだろう。

動けないようなら傷を治してやらないと 治さないといけないのか、自分で傷つけて自分で治すだなんてなんて不毛な。そこまで考えてようやく後先考えずにやったなあと思った。これに関してはビーが正しい。

溜息をつき、さくさくと草を踏みしめて歩きながら男の姿を探す。すると数分歩いた先の小川に左半身を浸からせて倒れているのが見えた。早足で近づき、触れようとするとつめき声が聞こえて思わず手を引っ込める。

けれど放置しておくこともできないので、男の体に手をかざして大体どの辺りを怪我しているのか調べてみた。

「右腕に肋骨三本に、あとは挫創……か」

この男の利き手は右だろうか、左だろうか。右だとしたらすぐに直さないと色々と不便だ。

本当ならすぐにでも屋敷に運んで落ち着いた場所で手当てをすべきなのだろうけれど、個人的にこの男を屋敷には入れたくない。たとえこの傷が私のせいだったものとしても。

だからせめてこの場ですぐに治癒してあげて、さっさと帰っていただくと思った。

すうつと息を吸い、男の右腕に手をかざす。そうして治癒のスペルを唱えようと口を開いた所で。

ぐ……っ、と男が再度呻くのが聞こえて、続けて腕を掴まれたので一旦口を閉じる。濡れている方の手で掴まれたため、素肌に水の感触がして少し気持ちが悪かったが文句は言わずにいた。

腕を水滴が伝って着ていたドレスに落ちていく中、男はかすれた声で言った。

「何を、した」

「私は魔女なんですから、魔法に決まっていますでしょう。仕方がないからすぐに治しますけど、即刻立ち去ってください」

「ちよ、待て……!!」

「なんですか。怪我人は大人しくしててください。気が散るので邪魔です」

「……け、怪我をさせたのは、貴女、だろ」

途切れ途切れの言葉と、やはり肋骨の骨折のせいかな苦しげな咳を発しながら男はしっかりと私の腕を掴んでいる。

同時に男の全身に作られた挫創から流れ出る血が川の綺麗な水に流れていくのが見えた。それを見て、別に男のためではなく川のためと内心で何度も言いながら掴まれているのは逆の腕で男の外套を引っ張り、体を川から引き上げた。

少し乱暴だったせいかな男は軽く呻き、苦しげな息を一つ吐く。
そのあまりに弱々しい姿に、悪いことをしたなと確かに考えはした。

したけれど、口に出して謝ったり気遣ったりすることはしなかった。

そんなことをしたら私の怒りもなかったものになりそうな気がして嫌だったし、何よりやりすぎではあるけれど魔法を使ったのは別に後悔していなかったから。

とはいえ何度も言うようだけどやりすぎたから、せめて傷を治してやるぐらいのことはしてやりたい。

そう思い男の制止を冷たく切り捨て、男を引き上げたせいで濡れてしまった手をかざし、「一応完璧に治してさしあげますから」とわざと恩着せがましく言っ、治癒魔法に必要なスペルを一言一言呟いた時。

突如右腕に痛みが走ったかと思うと次の瞬間乾いたものが唇に触れる感触がして、目を見開いた。

スペルなんて頭から飛んでいくほどに衝撃的な事実気付いたのは、あまりに近すぎる紅蓮の瞳が閉じられてから。

きっかり五秒、固まったままでいると再びその瞳が開かれる。

だけどその時にも私は攻撃スペルを唱えるための頭がなくて、離れていく乾いたものの感触にただぼんやりとしているのみだった。

開かれた視界の中にいる男は黙り込んだ私を満足そうに見て、先程強すぎる力で私の体を引き寄せた腕を離す。

そうして腕が開放された瞬間、私はすぐに体を離し口元を拭ったけれど何度拭いても感触が消えない。

い、今は。

手の甲を口元に当てて男を睨みつけると、男はふむ、と頷いて多少楽になったのか元の調子で話す。

「魔女は快楽を好むと聞いていたんだが、訂正しよう。最果ての魔女殿はただ純情なだけなんだな」

「……すみませんが、もう一度吹き飛ばしてもいいですか？」
「構わないが、手当ては魔法ではなく貴女自身からの介抱を所望する」

「? どうして」
意味が分からない。

自然治癒だなんて痛い思いが長引くだけなのに。

男の言葉に内心首を傾げていると、少しかすれたくつくつという笑い声が辺りに響く。

笑っていられるわけのない激痛に滝のような汗を流しているくせに、態度だけはどこまでも不遜だった。

「それならば俺は貴女を口説く時間ができる。重い怪我であればあるほど時間は長い」

「今すぐ魔法で治します」

「そうか、もう一度口付けをご所望なら喜んで」

「……知つての通り私は魔女です。貴方を拘束して無理矢理傷を治すぐらいのことはできます」

「先程から思っていたが、魔女というのは過激なものなのか？」

「人それぞれです」

「……貴女が過激な上に短気なのがよく分かった」

「それはよかった。なら理解できたはずです。私が救世主なんかじゃないと」

無理矢理傷を治すというのは何だかひどく矛盾した気がしたけれど、この際突っ込まれない限り自分からどうこう言うてはいられない。怪我をしているというのにかかわられているような感覚に、私は呆れのような苛立ちのような気持ちを抑えに言い放つ。

「そうよ、これで分かったはずだ。」

こんな風に人を吹き飛ばすような私が救世主のわけがない、やはり人違いなのだ。

内心で多分に満足感を感じていると、男は草の上に寝転がったまま「いいや」と頑固にも返す。

「間違いなく貴女が救世主だ、レイアステイ。会ってみてそれがよく分かった」

「……救世主というのが破壊者と同義であるなら、納得してさしあげましょう」

「それについてはいくらでも話して聞かせよう。だから今は貴女の屋敷に俺を連れて行って介抱していただきたい」

「傷を治して帰っていただいて、一生放っておいていただくのが一番の解決策です」

「そうはいかない」

頑固すぎるお互いの言葉を終わらせたのは、強い言葉。

鋭くなった眼差しがこちらを見据え、激痛に息を吐きながらそれでも力を失わない強い光に射抜かれる。そのあまりの強さと熱に今まですらすらと出ていた文句のすべてが一瞬にして消えた。

皇帝か、もしくは第一皇位継承者ともあるう人がこんな所まで来たことの意味を、その時やっとな理解する。

「俺の」ではない。

きっとこの男は「祖国の」救世主を探してここまで来たのだ。

自分一人の存在だけを背負うことが許されないから、だから。

けれど、それでも。

「それでも私は、救世主じゃない」

そうとしか思えなかった。

殺されかけたとはいえ、一応私もこの男と同じ国に住んでいたのだ。あの人と同じ顔で、あんな目をされて何も思わないわけじゃない。だけどありえないのだ。

静かに首を振る男に、涙が出るような思いでこちらが首を振りたくなる。

何かを救うなんて大それたこと、できるはずがないのだ。

その証拠に私はあの時あの人に。

「それでも貴女が救世主だ」

はつきりとそう言った男は、だから、と続ける。

「何度でも貴女を口説く時間がほしい。説明していないことをすべ
て説明して、それでも拒む貴女を口説く時間がほしい」

「……一体何度怪我をするつもりですか」

「力づくで連れて行く手段がないのでは、他に方法がないだろう。
言っておくがどんなに遠くに飛ばされたって、次の日には屋敷の中
の貴女のベッドで寝ているぐらいのことはしてみせるからな」

「それは単なる不法侵入です……まったく」

きつと、本当にやるだろう……この男なら。

何が理由かは知らないが背負っているものがそうさせるのだろう
し、本人の気質の問題もある。

結界が意味を成さない以上、何度追いつ返しても屋敷の中に入れる
というところが頭の痛いところで。

かといって本当にベッドで寝られても困るから、じゃあやってみ
せてくださいと言つこともできなくて。

私は考えに考えた末、盛大な溜息をつきながらそっぽを向き。

「勝手にしてください……飽きるまで頑張れば、無駄骨だと分かる
でしょう」

……もう好きにすればいい。

というか勝手にしていただきたい。

どれだけ言葉を交わすよりも放置した方が遥かに早いと思い知っ
て、私は半ば自棄になりながら言っただけ。すると背中に「なら
ば勝手にさせてください」と嬉しそうな声が響いて、それが癢だ
ったから手を伸ばして男の右腕を掴む。

同時に男が小さく悲鳴を上げて、そこで手を離してやる。我なが
ら意地悪なことをしていると思っただけ、この男に全面的に負け
るのは嫌だったからちよつとした仕返しだ。

いい気味だと思いつつ満足してから濡れた外套を脱がしてやる。する
と外套と同じ黒の上着にズボンといった何とも暑苦しい格好が見え
たがこれは無視し、手をかざして男が止める間もなく今度は短いス
ペルを早口に言い、挫創を治す。

「おい、だから治すなと」

「言っておきますが、屋敷まで貴方を運ぶだなんて面倒なことは御免です。肋骨と挫創を治して、ついでに痛みも一時的に取り払いますから、勝手に帰ってきてください。怪我なら右腕の骨折一つで十分でしょう」

「……どうせまた怪我をするのなら同じことだ」

「貴方が私を怒らせない限り、怪我なんてさせません」

「それでは話が違う」

「治すなと言うから右腕は残しますが、それが治ればあとは無傷で屋敷にいればいいでしょう。怪我人なんて邪魔なだけです」

「レイアステイ……？」

「言ったはずです。飽きるまで頑張れば、と。どうします？ 右腕も治しますか？」

手の平から流れる魔力で男の傷を急速に治していきながらも話している、男は柔らかく目を細めて「いや」と返した。

「このままでいい。貴女に介抱してもらいたいからな」

「……ちなみに、貴方の利き腕は？」

「右だ」

「治しましょうか」

「治したら口付けでは済まないが」

「皇族がそんな簡単に魔女に手を出すものではありません」

「誰も見ていないのだから問題ない」

前の炎帝はこんなに口の回る人だっただろうか……頭の痛くなる思いを胸に、とりあえずの治癒を終えると男はゆっくりと息をついた。肋骨を骨折していたのだ、息をするのも苦しかったはずなのにすぐに怪我をする前と同じ調子で喋っていたこの男の根性に内心脱帽する。

負けた、とはさすがに思いたくなくなかったから思わなかったけど、もうどうでもいいとは思えてきて。私は溜息混じりに「分かりましたよ」と言って立ち上がり、手を差し出してあげた。

するとなぜか驚いた様子の男と目が合って、確かにあれだけ魔法を放っておきながら助け起こそうとするのも変な話かもしれないと気がついた。

でも手を引っ込めるのも何だか変な気がしたからそのままにいると、口の端を吊り上げた男はしつかりと私の手を掴んで立ち上がる。そうしてそのまま手を離さずに、軽く上下に振った。何なんだ一体。

大きな手でがっしりと自分の手を握られ内心たじろいでいると、遠くで鳴いた鳥のさえずりと共に男の声が耳朶を打つ。

「ヴァノツサだ」

「……？」

「いつまで経っても貴女が尋ねてこないものだから、自分で名乗ってみた」

そういえば忘れていた。

けれど尋ねる気もしなかったから、結局思い出しても訊かず終いだっただろう。

なら今手を上下に振ったのは握手のつもりか、それなら一応納得はいく。

男の名前を頭の片隅に置いて、手をやんわりと引き離す。

何も仲良くしたいわけではないのだ、だから握手も必要ない。

そう思い相手を置いて先に進むと、再び手を掴まれた。引き離し進むと、また掴まれる。

「いい加減にしてください」

「握手の一つくらいさせてくれてもいいと思うんだが」

「不要です」

「ならばこうしよう。この島に不慣れな俺を貴女が手を引いて屋敷まで連れて行ってくれるということにすればいい、これも介抱の一つだ」

「……そのよく回る口を今すぐ塞いでしまいたいのですが」

「貴女の唇で塞いでいただけるのなら、喜んでお受けする」

「……もういいです」

「そうか。ならこれからよろしく頼む。俺の救世主殿」

この男が相手だと、どうにも調子が狂う。

姿が「彼」に似ているのも理由の一つだけれど、それよりもこのよく回る口が原因なんだろう。冷静だったはずなのに、気付けば自棄になってしまっている自分がいる。

そんな簡単な事実は今更気付いた私は内心で舌打ちをしたい気分
に駆られつつも、顔を背けて屋敷へと歩いていく。そうして手を繋
いで帰ってきた私達を、ビーは心底不思議そうな顔をして出迎えて
くれた。

こうして、この慇懃無礼で不遜で頑固な男ヴァノツサと私は出会
い、ビーも交えて一つの屋敷を共有して生活することになった。

けれど、数日で終わると高をくくっていたこの関係がずっと長い
ものになるだなんて、この時の私には知る由もなかった。

第四話 リイズネイション

救世主を求めて、自らをも犠牲にする皇族。

そこまでする男を見て、話の一つぐらいは聞いてやりたいと思わなかったわけではない。

だけど、私では。

『お前には、氷の魔女がお似合いよ』

私では、誰も救えはしないのよ。

「随分綺麗だな」

「観察する暇があるなら早くこちらに来てください」

屋敷に入った男の感嘆の声を切り捨てながら廊下を進んでいき、突き当たりの部屋のドアを開ける。そうしてドアを開け放したまま中に入り、久しく見ていなかった部屋を一望した。

ベッドと衣装棚のみが置かれた部屋には大きな窓があり、そこからはテラスとそこに咲く花々が見える。鮮やかな青を放ちながら咲くそれを見て、この屋敷に来たばかりの時から育てていたのにすぐに辞めてしまった花の名前を思い出した。

いくら時の流れが緩やかになっているとはいえ、三百年近くも放置していたのにまだあんなに鮮やかに花を咲かせるなんて。

「美しい花だな。見たことのない種類だが、貴女が世話しているのか？」

「？ 今は絶滅しているんですか？ これはリイズネイションという花です。三百年近く放置していたのですが、まだ咲いているみたいですね」

「リイズネイションか……いや、というか放置した状態で三百年も花が咲くとは、一体どうなっているんだこの島は」

「さあ」

そんなこと私にも分かるはずがない。ただ花の持つ生命力に感嘆するばかりだ……さすがは炎帝がくれた花というわけか。

テラスの端から端までを青で埋めつくすリイズネイションを見ながら、私はほうと息をつく。するとこうしてリイズネイションを見るまで忘れていた色々なことが頭をよぎり、思わず目を瞑りたくなる。

目を閉じても頭の中に、目を開けても目の前に、この花の種をくれた人の姿が見えるというのに。

『それでも貴女が救世主だ』

『お前はすべてを壊すだけ』

……思い出したくない。

男が私に求めるものも、過去も。

炎帝を思い出すのは嫌ではないが、それに付随する過去と男の言葉を思い出すのが辛かった。常ならば気にならない出来事ではあるものの、今は。

目の前の男が、私に救世主を求める今は。

頭をよぎる過去と現実にくじくとした鈍い痛みを感じるから。

「とりあえず手当をしますから、そのベッドにでも座ってください」

そうだ、今はこの男の手当が先。

そう思い、私はリイズネイションから目をそらしてベッドを指差す。いくら魔術で痛みを麻痺させているとはいえ、患部はかなり腫れているはずだ。いくらなんでもそんな状態で放置はできない。

心の中でそう考え、思い出しかけたことを頭の隅に追いやる。

そして、さて包帯はどこにあったかと思案した。

男はそんな私に頷きながらベッドに腰掛け、しかしその状態で少し困ったようにこちらを見て。

「さっきから疑問に思っていたのだが、魔女である貴女に普通の手当なんてできるのか？」

「ご希望にお答えして怪しい薬でも塗りたくりましようか？」

「……包帯と副え木で十分だ」

「元よりそれしかする気がありません。薬だなんてもったいない」

そんな失礼極まりないことを言うので、自分が浮かべられる限りの意地悪な顔をして返すと小さく首を振った男が心底嫌そうな声で答えた。残念だ。

男の言葉に内心本気で怪しい薬を出そうとしていた私は、そうとは悟らせないように冷たい言葉を言い放つ。そのおかげで思い出したくないことが綺麗さっぱり消え去って、そのことには感謝した。とはいえ、今の言葉は嘘ではない。いくら怪しく見えても薬は薬、確かな効果があるのだ。

……効果の内容は色々あるだろうけれど。

そこまで考えて包帯の位置を思い出し部屋を出ようとすると、ぽつりと拗ねたような声が響いたので思わず振り返る。拗ねる、なんて表現をこの目の前に座る男に使うことがあるなんて。

「……貴女は随分手厳しいな。冗談も通じないし、親しくする際も与えてくれない」

「貴方の冗談がいちいち失礼だからです。第一、冗談なんて言いそうにないのでそうは聞こえません」

「女性を口説くのに冗談を言うぐらいのことは必要だろう」

「……貴方本当に皇族ですか？」

「歴代二人目の炎帝にして、ファルガスタ第三十一代皇帝だが何か問題でも？」

「嘘」

「嘘ではない。貴女も存外失礼だな」

右腕をかばいながら左手一本で外套を脱ぎ、それを真横に放った男は私の短い言葉に軽く睨みながらそう言う。衣ずれの音に重なりながら聞こえたその言葉はしかし、大した効力を持たなかった。

言葉を受け取る側である私が、聞く耳を持たなかったから。

確かにこの男が皇帝になっているという可能性も視野に入れてい

たが、それにしては若すぎる。これではまるで三百年前と……。私はぼんやりと目の前の炎の色を見下ろしながら、若くして皇帝になったこの男にかつての炎帝を見る。

若くして炎帝の名を与えられたあの人。似ている似ていると思っていたが、この男もその名を得たのか。確かに、そうでなければ私が炎帝と言った時に否定の言葉の一つも言っていたはずだ。じつとこちらを見つめる男と、かつての炎帝が重なる。だけどはっとするほどに真っ直ぐな視線のおかげで、彼とこの男を間違えずに済んだ。そうだ、いくら似ていても間違えたり比べたりするのはこの男にも彼にも失礼だ。たとえ、同じ道を辿っていたとしても。

磁力のように離すことのできない瞳を見返したまま、私は男の右腕に軽く触れる。するとやはり腫れているのだらう、服の上からでも分かるほどの熱が指先に伝わって私はすぐに指先を離すと男に背を向けた。

「仕方がないので薬も使います。文句を言わずに飲んでくださいね」
さすがにこれだけひどい熱を孕んでいるのに、包帯と副え木だけではまずいだらう。

せめて鎮痛薬は飲ませなければ。
そう思いドアへと向かうと、「貴女は」と男が早口に言うのが聞こえて足を止めた。響く声の低さにまだ慣れず、知らず心が震えたのが悔しい。

「貴女は、どうして何も言わない」
「……」

「訊きたいことがないわけではないだらう。それに、俺が先代の炎帝と酷似した道を辿っていることにも気付いているはずだ。なのになぜ何も言わない、無表情のまま話を逸らす」

背を打つ声は見なくても分かるほどに直線的だったのに、私には男が何を思っただけそんなことを言ったのか分からない。

なのに。

「きつと」

その言葉はすんなりと口から出てきた。

「貴方が私に救世主を見るからです」

言葉にするとそれはすくと胸に落ち、すつとする。

そうか、かつて耳を塞ぎなくなるような言葉を言われたあの日のことを思い出すから、救世主なんて言葉を否定するのか、私は。

けれどそれは仕方のないことなのだと思う。

遠い日に向けられた言葉はそれだけの力を持ち、私に突き刺さったのだから。

沈黙する男に背を向けたまま、私は「少し待っていてください」とだけ言つて部屋を後にした。

振り返らなかったのは、話を長引かせたくないという理由からではない。

ただ、男がどんな顔をしているのか見たくなかったのと、かつての炎帝がくれたリーズネイションを見る勇気がなかったからだだった。

「僕知らないからね。あんな奴屋敷に入れて何かあつても」

後ろ手にドアを閉め溜息をつく、目の前の灰色の塊が拗ねたようにそう言うのが聞こえて視線を向ける。

すると声同様どこなく拗ねた顔をしたビーが見えて、私は今度は安堵の息をついた。同時に、自分がそれほどに緊張していたのかと思ひ知らされて苛立たしくなる。

前肢を一步踏み出してこちらを見上げるビーは私の返事を待つことなくほら、と囁く。

「皆も警戒してる」

言われて辺りを見渡してみれば、なるほど確かに毎日が発情期だとも言いたげにやかましかった猫達の気配が薄れているのが分かった。結界が破られた辺りから静まり返ってはいたけれど、時間が経つても警戒したままでいるだなんて意外と臆病なのね。

そう思い、苦笑交じりに金の視線を見返して。

「……知らない人間が突然来れば、警戒ぐらいするでしょう」

「そうだよ。だけど皆の警戒を解けるような奴でないなら、レイアだつて疲れたまんまじゃないか」

「私が？」

「出てくるなり溜息ついてるのに、疲れてないなんて言わないよね？」

疲れたとは思ってなかったけれど、やっぱり疲れてるんだろうか？

責めるような色を含んだ声にうつと言葉を詰まらせていると、部屋から「誰かいるのか？」という炎帝ことヴァノツサの声。

不思議そうなのその問いに慌てて「いえ、誰も」と平然を装った声を返して、急ぎ足で包帯と薬を探しに歩く。

そうしてドアからある程度離れてから「大丈夫よ」と返した。

何が大丈夫なのか、自分でもよく分かってはいないのだが。

辿り着いた部屋でひやりとした取っ手を引き、そこから包帯と副え木を取り出して次に薬をどこにやったものかと考える。その間中ずっと強い視線を感じたが、あの紅蓮の瞳より強い力を持つてはいなかったので渋々見返すという失態は防げた。

どこことなく薬品の匂いがする包帯を弄び、ようやく薬の在り処を思い出した時。とうとう我慢できなくなったのかビーが立ち止まった。

「何が大丈夫なのさ」

「何が、というわけじゃないけれど。あの男はどの道すぐに大陸へと帰るわ」

「……どうして」

「皇帝ともあるう御方が、国を長いこと空けられるわけがないわ。だとしたらこれは短期間での我慢比べよ」

「あいつ、皇帝なの？」

「そう言ってたわ。二代目の炎帝にして第三十一代ファルガスタ皇帝陛下」

あまり信じたくない事実をさらりと述べると、ビーは不快な物を見るかのような目で男のいる部屋の方角を睨んだ。

無論ドアや壁に阻まれて見えるはずはないのだが、それでも何か思うところがあるのだろう。薬のある部屋へと向かおうとする私に付いてくることなく、ビーは吐き捨てるように言った。

「だったら余計にあんな奴にいてほしくない」

「……？」

「炎帝なんていなくなっただっていいのに、あんな」

「ビー！」

どうしてそんなことを言うのか、私にはよく分からなかった。

確かにあの男の人間性には問題が多々あると思う。けれどそれは、そこまで言われなといけないことでもないはずだ。

それに。

「どうしたの？ 先代の炎帝は貴方の飼い主でしょう？」

「……だから嫌なんだよ。拾われて命を救ったのが炎帝だなんて」

私にビーを託したのは、他ならぬ先代の炎帝だ。

なのはどうして。

今まで突き詰めて話すことがなかったから知らなかったが、まさかここまで彼を嫌悪していたなんて。とはいえかなり長い時を一緒に生きてきて気付かないほどに隠されていたのは、何だかとても悲しい気がした。

ただひたすら遠くを睨みつけるビーを見る私の顔は、きつと少し困惑したものだっただろう。

それを誰にも見られていないことが幸福なのか不幸なのか分からないが、心配をかけずに済むなら幸福なのだろうと思った。

……が。

「先代は随分と嫌われていたようだな」

「……え？ ちょっと、貴方怪我をしているのに」

「……」

扉の影から、紅蓮の髪と瞳と何よりこの屋敷で誰も持ち得ない低

い声が現れた。

楽しげに笑う男は、先程までのビーの言葉になどまるで心を動かされた様子もなくこちらへと歩いてくる。

カツ、カツと靴音を響かせるのはわざとなのだろうか。

そこまでは分からなかったが、黙るビーを通り過ぎ男は私の前に立つ。

そのせいで部屋の温度が心なしか数度ほど下がった気がしたのだが、多分それは私の体感温度の中でのみなんだろう。

他の人間の前だからか、黙り込むビーの姿は男のせいでまったく見えない。だがそれが図つてのことなのだろうということだけは分かった。

嫣然と笑む男の瞳はただこちらにのみ向けられる。

そして。

「さすがは最果ての魔女殿。飼い猫に言葉を与えることができるとは」

「飼い猫ではありません。飼い主がどうこうと言うのなら、先代の炎帝こそが正統な飼い主です」

「……先代にもらったのか？」

ぴりぴりと、殺気に似た空気を感じたもののそれでも事実だと思いい言い放つと、男は軽く首を傾げながらそう言った。

だらんとぶら下げられた右腕がひどく痛々しくて、私はそちらに気を取られながらも頷く。そうしたのは自分なのだからどうしようもないのだが、後悔というのは決して先には立ってくれない。

頷く私にふむ、と言いながら左手を顎に当て。そこでようやくビーへと視線を向けた。すべてを焼き尽くすような紅蓮の瞳に見つめられて、彼の奥に立つビーは何を思ったのだろうか。

無言の、睨み合いともいえる視線の交差のせいでそれは分からず終いだっただ。

手持ち無沙汰に包帯と副え木を弄びながら、彼らの視線に介入するのを避けて視線を遠くへと向ける。

夕日が現れつつあるのか、オレンジ色の柔らかい光が窓から差し込む。暖かかった空気も多少の冷たさを持って吹き込んできた。

静かだけど、人間が一人増えたことで気配の増した部屋の中。先に視線を逸らしたのは男の方だった。

興味深そうな一瞥をビーに向け、しかしそれ以上そちらには視線を向けず私の持つ包帯と副え木を指差して。

「それで、魔女殿は俺の手当てのために薬を取りに行ったのでは？
痛くて敵わないんだが」

「……なら安静にしていたらよかったです」

「この屋敷に他に男でもいるんじゃないかと心配になってな」

「オス猫ならいますけどね……部屋に戻りましょう。私の魔術を薬代わりにしますから、それで我慢してください」

正直この男が素直に痛いなど言うのは意外だったが、見上げた視線の先で男が口元に笑みを浮かべながらも額に汗を浮かべているのを見てそれを口にするのはやめた。

男の自業自得とも言えるが、結局のところ傷を負わせたのは私なのだから。

男とビーの間をすり抜けて扉を開けそう言うと、男は素直に付いてくる。

きつと、もうすでに軽口を叩いている状態でもなかったんだろう。長い時間待たせてしまったようで、そこは申し訳ないと思った。

オレンジ色に染まる屋敷の中をすたすたと歩く男の背中を見ながら、足元に寄ってきたビーを抱きかかえる。

そうして耳元に唇を寄せてばれちゃったわね、と囁いた。抱きかかえられたことに対する抵抗はしないものの、それでもやはり不機嫌なのか冗談めかしたその言葉に対する返答はなかったけれど。

長くも短い廊下を歩くと、西日が次第に濃く強くなるのが感じられて思わずそちらに視線を向ける。

それはいつもぼんやりと眺めていた景色だったけど、なぜだろうか……とても落ち着かない気分させられた。……もしかしたらま

た地震か何か起こるのかもしれない。この落ち着かなさは、そういう類のものに感じられた。

ふわりと髪を揺らしていく風に数秒目を閉じて、その冷たさで体を冷やさないように腕の中のビーをぎゅっと抱きしめる。それは同時に、落ち着かないこの気持ちを静めようと考えてのことだったのかも知れない。

モリス大陸がどうなるかと、そんなことはどうでもよかったし少なくともそう思おうとしていた。だからこそ地震の感覚に悪態をつくことはあっても、不安を感じることもなかったのに。

今日の前を、ぴんと背筋を伸ばして歩く男を見ているとどうにも不安を感じるのを禁じえない。

国の心配などではない。そんなものは今までの人生で数えるほどしかなかったはずだ。だから違う。きっと私は、地震が起こることによってこの男が苦悩するのが嫌だったのだと思う。

はつきり言って性格が悪すぎる男ではあるが、何せ炎帝なのだ。先代のこととも考慮するとしてもじゃないが、邪険にできない。というかなぜかとことん憎みきれないのは、この男の口の達者さのせいなのだろうが。

とはいえ確証のないこの感覚を地震のせいだと片付けて男に告げることが早急すぎてできないし、自分が救世主になるなどと馬鹿げたことも言えない。できることがないのに救いの手を差し伸べようとするなんて、無意味なことだ。

「レイアステイ」

「何か？」

「いや、名を呼んでみただけだ。救世主でも最果ての魔女殿、でも貴女を呼ぶに相応しくはないらしいからな」

「……何を急に」

「俺は」

ぴたりと立ち止まると、そこは先ほどまで私と男がいた部屋の前だった。

……考え事をしている間に着いてしまったのか。それほど長い距離ではなかったにせよ、男に不審に思われなかったか不安だ。

それにしても、どうしてこの男は中に入ろうとしないのだろうか。男は夕日の色を浴びていつもより穏やかな炎の色を浮かべながら、こちらをじっと見つめるばかりでドアを開けようとはしない。

ただ私の名前を呼んで、わけの分からないことを言い出した。

一体何が言いたいんだろうか。突然名前を呼ぶ男に違和感を感じつつそちらを見返すと、部屋を出た時にビーに向けられたものよりもずっと強い視線とぶつかる。

だが今日ずっとこの視線を見続けてきたからか、このぐらいの強さがないと落ち着かないことに気付かされて内心で舌打ちをした。

真っ直ぐすぎる瞳は、恐らくだが嘘をつかない。

別に誰に嘘をつかれたわけでもないが、そのことだけはこの男を評価してやってもいい。

温い静寂の中、なぜか上からの目線でそう思っていると男は視線を逸らすことなくもう一度俺は、と言った。

「貴女に救世主を見ているし、そうなってくれることを望んでいる」「知っていますよ、そんなことは」

「そして、貴女がそれを望んでいないことも知っている。だからレイアステイと呼ぶ。かまわないか」

低く響く言葉は、この温い静寂に似合わないようでとても馴染んでいた。

真っ直ぐな声の強さはそれだけで相手を従わせる色を持っているのに、同時に希うような色も持っていて。

若干夕日色の混じる紅蓮の瞳を見返しながら足を踏み出した私はドアノブに指先を触れさせ、扉を開き。その先に見えるリーズネーションを視界の端に収めながら、真横に立つ男に囁くように言う。

口達者な男に乘せられたわけでも、傷を負うその姿に良心の呵責を感じたわけでも、気まぐれでもなく。

ただ、ああこの男はやっとな私を見たのかとただそれだけを思い。

あの青く咲き誇る花に聞かせるように、私は。
「かまいません」
まるで何かの誓いのように、そう言った。

第五話 華月

「それだけの魔力を持ちながら、救いもせず与えもせず。そればかりかお前はわたくしから大切な者を奪い、絆を破壊していくばかりではありませんの」

「そんな！ 私は」

「卑しき魔女の口答えなどいりはしませんわ！ ……華月の魔女だなんて図々しい。お前にはせいぜい氷の魔女がお似合いよ。血も涙もない、冷たい化物」

胸に突き刺さる声に目を開けると、辺りから激しい息遣いが聞こえる。

荒すぎるその息遣いを不審に思い辺りを見渡して、それが自分のものだど気付くまでに数秒の時間を要した。

「はあ……」

薄い闇の中ぼんやりと天井を見つめ、息を整えるために深く息を吸うが軽く開いた口からは空気が入ることはなくただただ荒く出されるばかり。

同時に激しく動く心臓を抑えるべく胸に手を当てるが、こちらも効果はない。

落ち着きたくても落ち着けない状況というものははっきり言っただけ気分が悪いものだが、焦ったところで落ち着けないことは分かったから、とりあえず気持ちだけは落ち着け、別のことを考えて気を紛らわせることにした。

そういえば、私は一体いつ眠ったんだろうか？

体が水分を失ったみたいになるかったから、余程中途半端な時間に寝たのだらうとは思っけど。

でも、さつきまで私はあの男の手当をしていたのではなかったか。「確かあの男に名前を呼ばれて」

そうだ、あのリーズネイションが咲く部屋で炎帝が私の名前を呼ぶことを宣言したのだった。

じわじわと染み込ませるように記憶をたぐり寄せていくと、鮮やかな青と紅蓮の瞳が瞼の裏に浮かび上がった。それは白の壁と茶の床を基調とするこの屋敷に異質なほどによく映える対称的な色で。長いことこの屋敷の色ばかり見てきた私には、その色は忘れたくても忘れられない色になるのだろうと予感させられた。

そうしてあの後男に治療のスペルを用い、怪我の痛みを取り除いてやりながら副え木と包帯で簡易の治療を施したのだった。男は痛みに耐え続けていたせいかわったままだったが、腕の熱が引くまでただこちらをひたと見据えていたのが印象的だった。

強いほどにまつすぐな視線には徐々に慣れつつあったが、やはり長時間向けられ続けると疲れる。

「ああ……そうか」

だから治療が終ると同時に部屋に帰ってすぐに眠ってしまったのだった。

先程見た夢のせいか、記憶が混乱気味だけれど多分間違いないだろう。

そう思いながら額に張り付いた髪をやや雑に払い除けつつ身を起こし、時刻を確認すべく壁時計に視線を向けた。するともう夜といえる時刻であることが分かる。

……いい加減起きないと、あの男もビーもお腹が空いているはずだ。

特にビーにはカツオのタタキとやらを作ってあげる約束をしていたのだから。そう思い裸足のまま床に触れ立ち上がると、ただひたすらに涼やかな温度を感じてほっとする。

同時にようやく荒い呼吸が落ち着いてきたことに気付き、試しに深く息を吸い込んでみる。すうっと勢いよく吸い込んだ風はまだ肌

寒いこの季節らしく清涼で、何となく体内を清浄にしてくれているような気持ちにさせられる。

それが理由というわけではないがそうして何度か深呼吸を繰り返してみると、髪同様肌に張り付いたワンピースに不快感を感じるものがなくなつた。汗が乾いた証拠だったが、それはこの肌寒さを思いつきかけとなる。

軽く身震いして、闇に慣れた目を凝らし明かりをつけることなくシヨールを探す。

そしてふわりと衣装棚にかかる紺のシヨールを手に取り肩に羽織ると、さらりとした感触が気持ちよかつた。もう肌に馴染んだその感触に気を良くして、軽くなつた体を前に進める。

そうして開け放たれた窓からテラスに出ると、宵闇の中に一番星が見えてその強い光に息を呑んだ。

よく考えたら星を見るのも久しぶりのような気がする。

……前にこうして夜空を見上げたのはいつだったか。

「……いつもはすぐに寝てしまうから」

ベッドに入りビーを抱きしめて眠りに就くことが何よりの幸せで、るくに外には出なかつた。

昼間は昼間でやつぱり外に出ることがなくて。ただただ面倒臭かつただけなのだが、そう言うたびに不満そうな灰色猫のことが頭を過ぎつた。

……そういえばビーは一体どこに。

炎帝が来てからというものの、妙にギクシャクしている気がするから少しぐらい話をしたいのに。

微かに甘い香りを運ぶ風に弄ばれる髪をやんわりと押さえ付けながら辺りを見渡すものの、部屋の中はもちろん廊下にもビーの気配は感じられない。宵闇の中で見えるのは風に舞うカーテンとベッドのぼうとした白さ、そして月明かりが差し込む一条の道筋だけ。

「ビー……?」

聞こえなければ呼ぶ意味なんてないのだけれど、それでもなぜか

言葉にしてしまう。

案の定私の声は静寂に呑み込まれ、そこで始めてこの静寂が怖いものと思えた。

普段彼はノースポートに出かける度に何日も屋敷を留守にするのぐらいだ、だから少々側にいなくても問題はないはずだった。なのにどうしてだろうか、今この瞬間にビーが側にいないことが私の不安を駆り立てる。

不吉な予感なんかじゃない、ただ心細い。

原因不明の地震の感覚も、突然現れた炎帝も、そしてそれをきっかけに夢に見始めた過去もすべて面倒だったり不安材料だったりするのだけれど。でもそれはビーがいれば怖くも何ともなかったわけで、そう考えると結局ビーがいないことが私にとって一番怖いことなのだと思えた。

今すぐにも探しに行きたいが、なぜか足が動かぬまま私はただ下を見る。

するとそこには室内同様自分の着る白いワンピースがぼうと闇に浮かぶのが見えた。それは柔らかくも冷涼な風に遊ばれてふわ、と浮かんでは元の位置に戻っていく。

そんな様子を何度も見ていると、何だかひどく安堵した。

ビーも似たようなもののように思えたからだ。少し遠くに行ってもすぐに返ってきて、またどこかへ……風というよりは、風に遊ばれるこのワンピースのような、そんな感じ。

とはいえ寂しくないわけではなくて。

「……どこ行ったのよ、あの放蕩猫」

「……」

なぜか責めるように口にしたら後ろから即答されて、思わずテラスと室内の段差に転びかけた。後ろに倒れそうになりながらも首だけ振り向くと、月明かりが造る柔らかな道に灰色の猫が一匹尻尾を揺らしながら座っていた。

空気に溶けそうなほどの声でビー、と呟くとそれが聞こえたわけ

ではないのだろうが猫はにゃあ、と一声鳴いた。

指先に感触を覚えてしまった柔らかい毛並を左前肢で撫でつけながら、ビーは猫らしく鳴くばかりでこちらに来ることもなければ特に何かを話すつもりもないらしい。再び降りた静寂は一步步寄りければあっけなく壊れるはずなのに、私はなぜかその一步踏み出せずにいた。

会いたいと思って、側にいてほしいと願ってそしてビーは多少遅れながらも確かにここに来てくれた。だけど一体何を話せばいいんだろう……私達は、普段何を話していたのだったか。

考えるべきことや話し合うことは確かに、ある。

今日一日で起きたことはこの屋敷に来てから始めてのことばかりだったし、あの男については時間を待てばどうとでもできるのだろうけど、その時間が本当に短い期間なのは正直自信がない。

それほどに強い意思を持っているように思えたし、立場から考えてもそれは想像にかたくない。かといってまさか大国の一皇帝を無理矢理叩き出すこともできなければ、第一あの男が何を以て結果を解除しているのかがまだ分からないのだ。それに……。

「何か」

「……え？」

「何か、悪い夢見たの？」

ぐるぐると何を話そうか考えていたら、少し高い声が響いて慌てて視線をそちらに向けた。

月明かりに照らされ灰色の体毛が元来帯びているわずかな青みや瞳の金を際立たせる。

そこにある姿はどこまでも優しく、彼の持つ体温と同じぐらいに温かかった。

「悪い夢、というよりも懐かしい夢を見たの」

「……まさかまた炎帝？」

「うっん。皇妃様の夢」

思えばいつだってこの猫は私が悪い夢を見るとこうして声をかけ

てくれる。

そう気付いた瞬間には、今まで悩んでいたのが嘘みたいに簡単に言葉が口から出てきた。

そうして、今まであまり話す気になれなかった話をする。

「ビーに出会った時、私は氷の魔女と呼ばれていたでしょう？」

「うん。魔女や魔導士には二つ名があるからって」

私の言葉に頷くビーは、内心首を傾げていることだろう。

それほどに唐突な問いかけだったが、だからといって止めるという選択肢は頭の中になかった。

「そう。今もどこかにいるはずの魔女や魔導士達は真の名を出さずに二つ名で己を呼ぶし、相手にもそうさせるものらしいから。私は自覚がなくてそうはしなかったけれど」

真の名とは決して教えてはならないのだと、古びた書物に書かれていたのを思い出す。

名は存在そのものであり、それを知られるということは己を奪われる可能性もあることだからと。

事実名を知られたせいで相手と誓約させられ、服従するしか道がなくなった魔女がいたことから言われ始めたことらしい。

ただその時には無知な私はあの人に名を名乗っていたのだけれど、幸いにしてあの人はただ私の名を呼ぶことにだけそれを使ったし他の誰かの前で私の真の名を口にすることはなかった。

今思えば彼もそのことを知っていたのだろう……そしてきっと、いとも簡単に名乗った私に呆れたに違いない。

不思議そうに話を聞くビーを見ながら、内心で少し落ち込んだが一応時効だからいいかということにしておいて話を続ける。

「それでも二つ名は必要だと言って陛下が二つ名をくださったの。ただ、氷の魔女というのは陛下がつけてくださったものではなくて皇妃様がつけたもので、その時のことを夢に見たの」

「……わざわざ炎帝がつけた名前があるのに、何で氷の魔女に？ レイアを見る限り、あんまりいい理由じゃない気はするけど」

炎帝のことを口にすると僅かに不快そうな顔したビーだったが、それは尻尾の一振りでも振り払い間髪入れず訊いてきた。

それは確かにもつともな意見だと思う。皇帝自らつけた名前ではなく、なぜ皇妃のつけた名前が浸透していたのか……しかも氷の魔女などという、どう考えてもいい意味には捉えてもらえない名前が。「僕は最初氷の魔法が得意な魔女かと思ったんだけど、別に氷の魔法がずば抜けてるわけじゃないもんね」

「そういう捉え方もあるわね。まあ、皇城内では違う捉え方しかされなかつたけれど」

「何？ どんな捉え方？」

「歩くだけでその場の温度が下がる、血も涙もない冷たい化物」

まるで何かの売り文句みたいだと当時は思ったものだ。

ささやかな悪意は確かに浸透して、私が歩く場の温度を下げていった……あくまで感覚的な問題であって、本当に気温を下げながら歩いたことはない。

とにもかくにも、氷の魔女という名はその意味と共に浸透して最初に名付けられた名を呼ぶのはあの人のみになってしまっていた。

それを申し訳なく思ったが、それ以上に私は。

「そう言われるほどに憎まれたことが悲しかった。だから今でも夢に見ると苦しくなるの」

あの時言われた言葉が、今でも胸に刺さって抜けずにいる。

穏やかな日々について忘れた気であるけれど、こうして不意に思い出すとじわりとした痛みが胸に苦しく蘇る。

そつと痛む場所を押さえてもそれは消えることはなくて、指先に触れるワンピース生地感触も何の慰めにもならなくて。

ただ、触れた先にある体温だけが私が氷の魔女ではないのだと教えてくれる。

血も涙もないわけじゃなく、ちゃんとそれは私の中にあるのだと熱が鼓動が教えてくれる。

けれど苦しんでいる人々に何もしてあげられなかったのは事実だ

し、彼女の世界をまったく傷つけなかったのかと問われると自信がない。むしろ不安でいっぱいだから私も強く否定ができなくて、結局氷の魔女と呼ばれることを止めはしなかった。

「炎帝は。あいつは何も言わなかったの？」

「もちろん陛下だつて名の理由を知つてお怒りのご様子だったけど……」

「何もしなかったんだ」

「あの方にはそれ以上にやるべきことがあったもの」

憤懣やるかたない、といった様子でビーは床を叩きながらそう言うが事実あの頃はそれどころではなかった。

首都にまでじわじわと染み渡りつつあった病の対処法と予防法を得るために駆け回っていたあの人に、そんなことは望めなかったし望みたくなかったから。

闇が深くなり、それと同時に強くなる月明かりの中ビーは真つ直ぐな瞳をこちらに向ける。

真摯なその瞳は確かな怒りを孕んでいて……だからだろうか、その先に続く言葉が予測できた。

「そんな奴らの子孫なんて、今すぐ叩き出しちゃえばいいんだ」

「でも、相手は皇帝で」

「レイアができないんなら、僕が皆に話して叩き出す」

「え、ちよつと待ちなさいビー！」

「うわっ、離してよ！」

背を向けて脱兎のごとく　猫に使うのは変だけど　走り出すととするビーの体を慌てて抱え上げるとじたばたともがく灰色の塊は尻尾や前肢をぺちぺちと叩きつけてきた。これで爪でも出そうものなら大怪我をすることでさすがにそこまでする気はないらしく過激さに欠ける抵抗に心底安堵した。

ビーは、あんな奴叩き出すんだー！　と怒鳴りながら必死に腕から抜け出そうとするが、それを許すわけにはいかず私も渾身の力で抱きしめる。

ぎゅう、と力を籠めすぎて潰れたらどうしようかと案じるほどに抱きしめた時、ようやく落ち着きを見せたビーの顔を覗きこんでぎよっとした。

軽く伏せ気味の金の瞳から、ぼたぼたと透明な……涙が流れていった。

力を緩めた腕の中でくったりと体の力を抜いたビーは小さくしゃくり上げながらひどいよ、と何度も口にする。

それがどういう意味なのか分からずにいると、こちらを見上げたビーが体を伸ばして右前肢を私の頬に触れさせ「三百年だよ？」と呟いた。

「三百年。ただの人間には単なる数値でしかなくて中身が空っぽにしか見えない時間だけど、でも僕達は確かに生きてたんだ。空っぽじゃなくて、単調でもちゃんと毎日中身があっただ」

「……うん」

「死んだ奴らが忘れられるぐらいに生きて、長く生きて。なのにそれだけ時間が経っても忘れられない痛みを与えた、ファルガスタの皇族なんて大嫌いだ」

三百年生きたと口にするのは一瞬だ。

そして代わり映えしない私達の姿形や性格は、人間達にそれを感じさせないに違いない。けれど生きたことは事実で、あの国で生きていた頃の人々は皆死に絶えても私達は確かに生き続けていて今でもここに住んでいる。

「何が化物だ！勝手に知った風な口利いて……三百年も一緒にいた僕達でさえ、まだお互いのこと全部知ってるわけじゃないのに！」

「……うん」

激昂するビーに静かに頷きながら、柔らかな前肢に触れる。

涙で微かに湿ったそれはとても温かくて、私はそっと目を閉じた。そうして素直に体を預けてきた温もりを首筋に感じながら、それでもはつきりと言うことができた。

「それでも私は、陛下に出会えてよかったと思う。記憶もなく、気

がついたらファルガスタにいて右も左も分からないでいた私に、たくさんのことを教えてくれたから」

私にはファルガスタに降り立つまでの記憶がまったくない。

だから気付いた時、自分が立っていた場所がどんな名前を持っているかも自分がどこから来たのかも知らなかったのに、あの人は手を差し伸べてくれた。

結果多くの嘲笑と憎しみを向けられても、死を願われても。

こうして私をここまで逃して、生きることが望んでくれた人がいることが嬉しかったし、あの人なくしてビーとの出会いもなかったのだから。

どこで生まれて、どうやって生きてきたのかも分からない私にそこまでしてくれた人なんて、この長い人生でもきつと炎帝とビーぐらいだ。

「でもあいつは死ぬまでレイアに会いに来なかったもん」

「……」

「子孫が来れるんだから、自分だって来れたはずなのに来なかったからむかつく」

身動きして、首をふいとどこかに向けた感触がしたかと思うとそんな拗ねたような声が聞こえる。

あくまでもかたくなな態度だが、しかし……。

「まさか、それで陛下のことが嫌いなのか？」

「悪い？ 言っとくけど、僕のレイアを泣かすような奴は皆嫌いなんだからね」

それは知らなかった。

というよりビーがあの人を嫌っていたことですら知らなかったのだから、当然といえば当然なのだけれど。

拗ねたような声はどことなく開き直った風な口調で、驚きに目を開けた私は思わず苦笑した。首筋に触れるふかふかとした毛並みに人差し指を軽く押し当て、ついと頭を撫でてやる。するとビーは諦めたのか幾分呆れたような口調で言った。

「あいつのことは嫌いだけど、気になってたから言っとくね」
「？」

「レイア、あいつに炎帝を見てるよね。まあ僕もそうだけど」

「……え？」

「あいつがレイアに救世主を見てるように。きっと」

意外な言葉に目を丸くするものの、ビーはまるで当たり前のことのようにそう口にする。きっと、とは言っているがそれはきっぱりとした断定的な響きを持っている。

……そんなことはない、と思うのだけれど。

第一見てくれは似ていても中身がかなり違うのだ、同じになど見れるはずがない。

とはいえビーが言うくらいなのだからまったくの見当はずれなのだとも言えず、困りきって視線を落とすとビーはじっとこちらを見上げて言う。

「だってレイア、あいつを名前では呼ばないじゃないか」

「それは」

「名が存在そのものだって言うなら、レイアはあいつの存在を認めてないことになる。あいつはレイアを呼んだのに、それだけが不公平じゃないかと思ってたんだ」

「……確かに、それはそうだけど」

「呼んでやれって言うてるわけじゃないんだ。というよりあいつがレイアの名前を呼ばなければそれでいいんだけどね」

刺さるような正論に、返す言葉もない。

あの男は私に救世主を見ていて、それを嫌がった私のことを考えて名を呼ぶことにした。

なのに私は未だあの男呼ばわりをするばかりでちゃんと名前を呼んだこともない。

それはこちらを見ている相手から目を逸らすことと何が違うのか。ビーはああ言うけれど、元はといえば名を呼ばれることになったのは私のせいだ。

なら私もそれなりに責任は取らないといけないのだろうと思った。そう考えているとそうだ、というビーの声が響く。

それはあまり物のないこの部屋に少しだけ反響して聞こえた。

「放置して待つなんて方法取らなくてもいいんじゃないかな」

「……他に何か？ 言っておくけど、傷つけちゃ駄目よ」

「そうじゃないよ。どうせなら事情も言い分もぜーんぶ聞いて、その上で理詰めで勝てばいいんだよ」

……それが上手くいくんだろうか。

あの男の口達者さ加減を考えると思わずげんなりしてしまうような内容の話ではあったが、確かにあの男は全部話さないと気が済まないに違いない。すべて話してその上で私を口説く時間がほしいとか言っていたぐらいだから。

名案を思いついたとばかりにきらきらとした顔を向けられて、私は苦笑しながら内心でどうしたらいいものか考える。

話を聞いてやりたいとは思った。

結論として切り捨てることになっても、わざわざこんな孤島に来たぐらいなのだから。

でもそれはもう少し後の話だと思っていた。

けれどビーの顔を見る限り。

「……それ、今すぐ？」

「もちろん！ 明日の朝には帰ってもらいたいし」

やっぱり今すぐじゃないといけないのか。

というより、随分な言いようだ。

はつきりと言い放つビーにがくりと肩を落としながら、ずれ落ちかけたショールを羽織り直す。

そうしてついでにビーを抱き直しながら二人の炎帝の顔を思い浮かべた。

確かに似ている。

そして似ているからこそ、夢にあの人を見てしまうことは否めない。

けれどそれでも違うと否定したいから、とりあえずはあの男の名前を呼んでその存在を肯定することから始めないといけないのだからと納得した。

話を全部聞いてやれる自信なんてものはない。あの男の口車に乗せられないとも限らないから。

でも名前ぐらいは呼べるだろう。

そうして納得できると後は簡単で。

「ご飯を作ったらあの男の所に行くてくるわ。ビーも来る？」

「僕は嫌。あいつレイアが寝てる間ずっと僕を喋らせようとするんだもん」

「あら、仲良しになってたのね」

「冗談」

あっさりとそう決めた私はビーを下ろして、心底嫌そうな顔をするその姿にくすりと笑う。

そうしてビーが「先にキッチンに行くてね」と言い置いたのを背中に聞いてから、再びテラスへと足を向けた。

空気が澄んでいるからか、数え切れないほどの星がただひたすらに瞬いている。

そうして眩しいほどの空を見上げていると、そこに珍しく姉妹月である花月と華月が昇っているのが見えた。

普段は花月しか見ることができないのに、華月まで見られるなんて本当に珍しい。

というか、夢を見たその直後に見るだなんてまるでおあつらえ向きだ。

大きさの違う二つの月を見ながらぼんやりとそう思い、同時に先程見た夢を思い出した。

浮かぶのは華奢な肩を怒らせながらこちらを睨みつけてくる今は亡き皇妃様。

『華月の魔女だなんて図々しい』

「……そんなこと、私だつて分かっているのに」

小さい方の月をじっと見てそう独りごちる。

妹月である花月よりもささやかで、けれど繊細な光を放つ華月。それはかつてより美しさの象徴として、この世界を見渡している。その月の名を冠した魔女として自分が存在していたことが信じられないほどに、夜空に浮かぶそれは美しかった。

……そうだ、そんな美しいものに喩えられるほど自分は綺麗なものじゃない。

ましてや。

「誰かを救うだなんて」

そんなの無理だとしか言いようがない。

夢にまで見る過去がそれを突きつけてくるのだから。

こうして悩んでいたら、またビーが怒り出しそうな気がしたけれどそれでも痛みも事実も消えはしない。そう思いながら溜息混じりに手の平を目の前に持つていき、月明かりに照らされるそれをじっと見る。

そこにはただ何百年も見続けた、もはや見飽きたとも言える自分の手。ビーに外に出るよう促されるほどに白いこの手は、自分の持つ色を際立たせるようで好きではない。

それなのに、あの男はこの手で何をさせようというのか。

……そうだ。

話を聞くのではない。

私が話せばいいのだ。

この身に起きた過去を、私が華月の魔女になり氷の魔女と呼ばれるようになった過去を。

そうしてすべてを話したらあの男も少しは考え直してくれる気がした。

同時に話すことでこの痛みから解放されたいとも考える。胸に溜めておくよりも、いっそすべて話してしまいたかった。

それに少なくとも、話した結果諦めてくれなくてもただ何も言わずに拒絶するだけよりずっと建設的な気がする。だからここは面倒

くさがらずに行くしかないようだお腹をくくり、とりあえずご飯を作るためにキッチンへと足を向けた。

「随分とよく寝ていたんだな」

「貴方の相手をするのはかなり疲れるようですので」

「失礼な」

それから少しの時間が過ぎ。

私はビーにカツオのタタキを作りつつ、ファルガスタで一般的に食べられていた料理をいくつか作って持っていったのだが。

……よく考えたら時代が違うのだからこれでいいのか不安だ。

作ってしまった今となっては後の祭りとしか言いようがないのだが、いざ男の前に立つとそれが気になって仕方がなくなる。

とはいえ今はそんなことを気にしている場合ではない。

「ヴァノツサ」

「……………何だ？」

「お腹、空いていませんか？」

「……………空いた。貴女が俺を放って寝てしまったからな」

さらりと口にしてみた名前に、返ってきたのはかなりの沈黙と何気なさを装った声。

けれどその沈黙が相当の動揺を示していることが分かり、私は何だかおかしくなって笑い出しそうになりながら持っていたトレイをベッド横の棚に置いた。

冷めてしまわないようにトレイの周囲だけ温度を調整していたのを解除すると、たちまち湯気が溢れてくる。それを確認してからもう一度トレイを持ち直し、その動作に不思議そうな目を向けた紅蓮の皇帝を見下ろす。

そうして視線をこの部屋のテラスへと向けて、咲き誇るリイズネイシヨンの手前にあるテーブルを見る。本来なら白いはずのそれは

姉妹月の光とリーズネイションの色に照らされて青白くなっていた。静かに歩きテーブルの前に立ち、トレイを下ろす。そして振り返った先でただこちらを見ている紅蓮の瞳をじっと見て私は言った。

「私は貴方に先代の炎帝を見たくありません」

「俺だつてそんなことを許すつもりはない。貴女がどこことなく俺に先代を見ているようだったから、いい加減文句を言うつもりでいた」
「ええ、ビーにも言われました。だからヴァノツサと呼ばせていただきます。それでよろしいですか？」

「無論だ。……だが貴女はそれを言いに来たのか？ まさか姉妹月が綺麗だから一緒に食事をしてくれるとでも？」

「いいえ」

突然の宣言にも驚く様子は見せずヴァノツサは小さく笑い、ベッドから出てきた。

鍛えられてはいるものどかさすりとした体躯はこちらへと向かってきて、暗がりから出てきた姿はまず真つ先に姉妹月の光を浴びる。

そうして華月を見上げた男が軽く眉を上げ「やはり美しいな」と漏らした。

同時に、私を見下ろす。

その視線が先ほどのビーと同じくどこまでも温かく優しいものだったから、何だか居心地悪くなった。

降りてきた吐息も、声も優しい。

「まるで貴女のようにだ、レイアスティ。氷の魔女なんて名はやめて、華月の魔女と名乗ればいいんじゃないのか？」

だが、その言葉を聞いた瞬間私は身を強張らせヴァノツサを射抜くように見てしまった。

その様子に怪訝そうな顔をされたが、そんなことは気にしていられない。

あの人と同じことを言ったヴァノツサの姿に、内心嬉しくなかったと言えば嘘になる。

だから本当ならそこでお礼の一つでも言つべきだったのだろう。
だが今はそれよりも。

氷の魔女、とヴァノツサは言った。

ならば私のことを伝え残したのはあの人じゃないということになる。

だってあの人は。

「私は先代炎帝陛下より、華月の名を頂いています」

「……何？　だが俺が見た手紙には」

「氷の魔女と書いてあったなら、それは陛下が残したものではないはずですよ」

決して私のことを氷の魔女だなんて呼ばなかった。

そのせいで城内の人達から不埒な噂を流されてもまるで意に介さずに、いつだって私を真の名かその二つ名で呼んだのだから。

やはり私のことを伝えていたのは誰かが残した手紙だったのだ。

それを何代にも渡り職人が保存加工をしながら残していったのだろう。

でも、誰がそんなことを命じた？

その様子を見る限りヴァノツサにもきつと分かりはしないのだろうけれど、ただあの人私のことを伝え残したわけではないことに安堵と落胆を感じずにはいられなかった。

安堵は自らが放った言葉通りに、誰の目にも触れないように配慮してくれたことに対して。

そして落胆は、あの人私のことをずっと覚えていてくれたのか確かめようがなくなったことということに対して。

どの道もういない人に対してそんなことを確かめても栓のないことなのだけ。

小さく息をつくとき、目の前で怪我をしていない方の手を軽く口に当て考え込むヴァノツサが見える。

それを見て、今切り出そうと思った。

だから私はとりあえずヴァノツサを座らせ、目の前の料理を食べ

るよう勧めてから。

「貴方に話があります、ヴァノッサ」

ようやく決心して、そう口にする事ができた。

第六話 魔女の狂宴

自分がまったくの無力だとは思わない。

魔女である自分には他の人間より強い魔力があることは、よく分かっている。

けれどそれだけで何ができる？

いくら人より魔力が強いつても、私一人にできることなんてたかが知れているのに。

静かに頷いたヴァノッサは、それからもくもくと料理に手をつけていた。いくら時間が経ったといっても食事のマナーはあまり変わってはいないらしく、見ただけで本当に皇族なのだと分かる仕草で料理を嚙下していく。

そういえばこの人は何も言わずに食べているけれど、料理は口に合っているのだろうか。

普段から自分やビーの食事しか作らないから、自分好みの味付けしかしていないというのに。

まあ、まずいと言ったその瞬間に料理を下げるぐらいのことはするのだけだ。

……とりあえずは私の作った料理が今のファルガスタでも食べられていますようにと祈るばかりだ。

この料理は何だと訊かれたら年月が過ぎたことを嫌でも思い知らされて嫌だったし、何より懐かしい故郷の料理を食べたら国が恋しくなることだろうから。そしてそれは私とビーにとっては歓迎すべきことだ。夜風と料理の湯気の両方に頬を撫でられながら、私はそれを確認しようかと考えて止めた。

そんなことを話すためにわざわざここに来たわけじゃない。

私が話し出すのを待っているのだろう、あくまでも静かに料理を嚙下するヴァノツサの紅蓮の瞳を一度見やっしてからついと指先を動かして自分ごと椅子をふわりと浮かせ、リーズネイションが咲く方向へと向けた。

そうしてそんな特に意味のない動作をしてから、ヴァノツサに顔を見られないようにしてようやく声を出した。

「オールド暦四六一年」

「？」

「この年に何が起こったか、貴方は知っていますか？」

雪とともにファルガスタに地獄が舞い降りたあの冬のことをこの男は知っているのだろうか。いや、史実としてはもちろん知っているだろう……仮にも炎帝を名乗るなら。

けれど、ほんの一欠片でも想像することができただろうか。

「原因不明の伝染病に国中が侵され、多くの民が死に絶えました。

皮膚の色が変わり激痛に襲われ、最後には狂って死んでいく死の病です」

「……魔女の狂宴か」

変わりゆく肌の色と激痛に死を感じ怯えながら、それでも生きていた人々のことを。

大事な人が目の前で死に逝く中、悲しむこともできないくらい狂っていった民のことを。

国が滅びなかったのが不思議なぐらい多くの人が、あの冬に死んだ。

それをこの男はどれだけ理解しているのだろうか。

集中していないと聞こえないほどの風音にあえて意識を集中させながら、私は微かに声を震わせて努めて静かに言った。

姉妹月に浮かされてぼうと浮かび上がるテラスに目を細めて、ともすれば泣き出しそうな心を叱咤しながら。

できることなら思い出さたくない、けれど思い出さなければ話なんて進まない。

椅子の背もたれに深く腰掛け、同時に嗚咽を吐き出すまいと深く深く息を吸う。すると喉の奥でひゅっという音がして、私はそれを悟らせないために微かに身動きした。

そう、あれはまさに狂宴だった。

決して魔女や魔導師が起こしたことはないのだけれど、そう思われても仕方がないほどに私達には異変がなかったし為す術がない出来事だった。

誰に責めることができただろう、誰よりも苦痛を味わう人々が何の苦痛も知らない魔女へ怒りをぶつけることを。

私からすればとんでもないことだったけれど、どうでもいいと思える程度ではあっても強い憎しみに囚われるほどではなかった。

何より陛下に止められない狂気を私に止められるはずがない。

辺境から城下へと迫った狂気は、やがて。

「そう。だから人々は、炎帝の傍に侍る氷の魔女を殺せと国中で声を上げた」

「確かに、手紙にも史実書にもそう書いてあった……だがなぜだ？ 当時は他にも魔力を持った者が存在したと」

「もちろんいました。けれど皆とつくに身を隠していましたから、一番目立つ魔女である私に白羽の矢が立ったのです」

反乱という波となって、城へ……私へと襲いかかった。

もちろんそれは予想していた通りの流れで、分かりきっていた話なのだけれど。それでも私は身を隠したりはしなかった、という性格好良い言い方だけで別に自己犠牲に酔っていたわけではない。

見上げた先にある姉妹月がすれ違いそうなほどに近付くのをぼんやりと見ながら、ささやかに甲高い音をさせてヴァノッサが食事を止めた気配を半身に感じた。そうして気配を感じた方の頬に、強い視線が向けられるのも。

まるで怒っているようなその気配は一体何を言いたいのだろうか。横顔で視線を受け止める私には分からなかったけれど、別に気にする必要はなかったらしい。

がた、と音がしてそれからすぐに姉妹月が消える。自然と降りた影を見ると、それはやはり怒っていた。

肩を怒らせてこちらを見る紅蓮の瞳は私に何も伝ええない、だが代わりに言葉で怒りを伝えてくる。

「なぜ逃げなかった」

「……」

「他の魔女達とともに身を隠せば、民だって貴女に憎しみをぶつけることはなかった」

「……一つ、勘違いをしているようですが」

どうして貴方がそんなに怒るのか。

私としてはその方がずっと問題なのだとこの男は気付いて……いないに違いない。

刺すような視線に私は呆れ混じりの溜息をつき、首を振る。するとヴァノツサの怪訝そうな瞳とぶつかった。

確かに普通に考えればそれが正しい。私だって誰かが同じことをしていたら馬鹿にするかもしれない。

けれどヴァノツサは分かっている。

「私がここにいるということ。生きているということ。その意味が、貴方になら分かるはずです」

「だが」

「あの時国中の人が、私の死を確信したでしょう。でも私は生きている……逃げて、ここで生きている」

遅かれ早かれ私は逃げたのだ。

なのに逃げなかったことに対して怒られるのは筋違いというもので、なぜ逃げたと言われれば文句は言えないけれど逆は認められない。

そう言った私の顔は、一体どんな表情をしていたのだろう。ヴァノツサが怯んだように目を逸らし、眉を寄せて苦渋を浮かべたのが見えた。

影になっているからそれが本当に苦渋なのかは分からないけれど、

きつとそうなのだと思う。

ふわり、と自分の体だけ浮かせてそのままの体勢でテラスの手すりに腰掛ける。体重をかけると何かの拍子に落ちそうだったから、触れるか触れないかという程度にだけ。

そうして自身の身に纏うワンピース生地を柔らかかに揺らしながらヴァノツサを見ると、一変して明るい場所で見えた彼の顔にはやはり苦渋が浮かんでいた。

複雑そうなその表情を見て、もしかしたらこの男は気付いたのかもしれないと思った。

「貴女を逃がしたのは、先代の炎帝か」

「ええ」

気付いた、というよりは確信したというべきか。

予想はしていても確信するには私自身が認めるしかない。

搾り出すような声にできる限り平静を保って答えると、その演技がそのまま私の心を平静にする。

リーズネイションに囲まれて白いテラスの中に佇むヴァノツサはともすれば浮いてしまいそうなその場所で、自然に自己の色を浮かび上がらせる。

特に欠点のないその姿はまるで一枚の絵画のようで、自分が同じ場所にいるとはとても信じられない。姉妹月に背を向けていなければ、その二つの月ですら絵画の中にすんなりと入れてしまいそうだが、美しいというわけではない、確かに幻想的ではあるがそれが理由ではない。ただ異常なまでの強さがすべてを巻き込んで、それがゆえにヴァノツサと世界が溶け込んでるように見えたから。……これが炎帝と言われる所以だとするならば、やっぱりあの人とこの男は別人なのだと思うた。

見た目はほとんど同じなのに私はあの人にこんな強さを見たことはない。見たいとも思わなかった。

私がそう思っている間に、ヴァノツサは拳を軽く握りしめてこちらを見る。

燃えるような瞳は少しの躊躇を持つて一度閉じられ、一步分私へと近付く。自分の歩幅よりもずっと大きな一步はしかしそれ以上進んでくことはせず、瞳を開くことで押し止められる。

「それが、救世主を拒む理由か」

「もちろんそれもあります」

溜息のような問いに肯定と若干の否定を返すと、ヴァノツサはまだあるのかというような顔でこちらを見た。まさかこれだけだと思っただろうか、魔女の長い人生を舐めてもらったら困る。

まあ……すべてあの冬に起きたことだと考えれば、舐めてかかってこられても仕方がないのかもしれないけれど。

とりあえず座ってはとうですか？ と尋ねればこのままがいい、という返答とともにヴァノツサはもう一步こちらに近付いてきた。あまり高くはない手すりに腰掛けて、丁度同じ目線になっていることにその時気付く。

上からでも下からでもなく真正面から見たヴァノツサはやっぱりあの人に似ていて、そのくせ紙一重の差で別人で。

私は一体この男にどんな顔をすればいいのだろうかと思ひながら、「一つ、昔話をしましょう」

少しずつ自分が話したかったことへと近付いていく。

それは自分が普段思い出すまいとしている記憶との対面だったけれど、何も過去のすべてを事細かに語る必要も思い出す必要もないただ、話すべき事柄だけを思い出し話せばいいのだ。なににどれだけ痛みの少ない記憶を探してもそんなもの見つからなくて、私は痛みを閉じた。

そうして閉じた視界の中で、懐かしいあの国の光景が目に見えだ。ああ、どうして記憶をそのまま見せてあげられる魔法がないんだろうか……あれば思い出すだけで済むのに。

黙って立つたままのヴァノツサを見えない視界に捕らえながら私は何から話すべきかと思案して。

「病が城下に近付く、ほんの少し前に私は一人の女の子に出会いま

した」

「……」

「あの頃はまだ場内の者達にしか私の存在は知られていなくて、何も知らないその子は私によく懐いてくれました」

最後に街に出た日のことを話そうと決めた。

どうして出会ったのかも分からないたった一人の女の子のことを。そしてその子が死んだ日のことを。

意識を集中させて体を浮かせ続けた私は不意にその魔法を解いてゆっくりと手すりに腰掛ける。今もし何かあつたら落ちてしまいそうな体勢だったけれど、どうしても何かに触れてはたくてその冷たい手すりに指先を這わせた。

どこか幻想的なこの光景の中で自己を保っているにはそれしかないと思つたから。

「何の話をしていたか覚えていないし、どうして出会ったのかも覚えていないけれど、私もその子のことが好きだったのは覚えています」

そう、会う度に抱きついてきたあの子の冷たい体を抱きしめるのが好きだった。

お忍びで城下へ降りてきていた陛下がそれを見て笑うのが好きだった。

もつすぐ雪が降るなど考えていたのをよく覚えている。

……そんな他愛のないことばかりちゃんと覚えている。何を話していたのかとかそういう大事なことは全然覚えていないのに。それが何だかとても悔しくて思わず唇を噛みしめたくなつたけれど、そんな姿を目の前の男に見せたくはなくて、寸前で我慢して話を続けた。

「でもあの子も病にかかつてしまった。城下の誰より早く、あの子に死が近付いていきました」

誰もがあの子を遠巻きに見ていた。紫に爛れていく肌を晒したあの子に、誰も手を差し伸べようとはしなかった。

皆知っていたのだ、それが城下で起こる地獄の始まりだと。ただ私だけがあの子に近付いて、何とかできないかとひたすらに薬を調合した。

魔女がその病にかからないことは、すでに陛下から聞いていたから。

怪我を治すことができるのに病を治すことができない自分をあの時ほど呪ったことはない。

手すりに這わせた指先が、そこから冷えていくのを感じながら私は細く深く息を吐いた。平静で、何事もないかのように話していなければならぬのにどうしてもそうはできなかった。

思い出さなければ何てことはないのに、思い出せば後から後から溢れてくる痛み支配されそうだった。

「毎日毎日、病の対処法に奔走する陛下と一緒に薬を調合し続けました」

「……貴女は」

「でも駄目だった。何度試しても効果がなくて、あの子が痛み狂うのを見ながら私まで気が狂いそうになりました」

いくら自分が救世主に向かないことを証明するためとはいえ、自分の無力を語ることがこんなに辛いことだとは知らなかった。

卑下ならいくらでもできる、それこそ一晩中自分を卑下し続けよう。

でもそれだけではきつと納得しないことは分かっていたから。確かな理由と過去と持って証明する必要があった。だからこうして話しているのに、いくら覚悟をしてもそれで痛みが和らぐわけではなく、私は死ぬ間際のあの子の言葉を口にした。

「助けて」

「レイアステイ？」

「助けてって……言ってたのに」

助けて、と何度も何度も繰り返していたのを思い出す。

あれはどこだったか、場所は覚えていないけれどそれだけはちや

んと覚えていて。そして私は覚えていないだけで、きっと何度も何度も誰かのその言葉を聞いては助けられなかったことに絶望したのだと思う。

その中でこれは最初の絶望だった。

息絶えるその瞬間まであの子は私に助けてと言い続けていた。

それはもしかしたら私が魔女だと気付いたからかもしれないし、そうではないのかもしれない。でもそんなことはどうでもよかった。このまま落ちてしまおうか、何とはなしにそう思いながら軽く体を傾け私は続けた。

「私には何もできなかった。誰も助けられなかった。そのくせ一人逃げ出した」

「……貴女はそれを」

「いくら魔女だと言っても、私一人にできることなんてたかが知れています。それなのに貴方は私に救世主を望むのですか」

ファルガスタも、そこに生きる民も他国のこともどうでもいい。そう思うのは激しい憎しみをぶつけられたせいでもあるし、これ以上関わりたくないという想いのせいでもあるし、本当にどうでもいいと思っているせいでもある。

けれどたとえばここで何とかしたいと想ったとして、私に何ができる？

何もできずにまた絶望するの？ あの冬のように。

そんなのはごめんだった、絶対に嫌だった。

そう思い目を開けると、あまりに近くにヴァノツサがいたので思わず手すりから落ちそうになった。だが魔法を使おうとしたところでヴァノツサの腕に支えられたので止める。

小さく礼の言葉を口にするものの、支える腕が離れないので怪訝に思っただけなら視線を向ける。すると彼は表情を隠すように口を引き結んでこちらを見ていた。

不快感を表すものでもない、同情しているわけでもないだろう、ではこれは何？

不思議に思いじつとその紅蓮の瞳を見つめっていると、ヴァノツサは私から腕を離し　え？

「な、何を！」

「　すまない」

いきなり目の前で跪いた紅蓮と黒の体に、慌てて手すりから降りる。

腕を伸ばして肩に触れる。そうして立ち上がらせようとした所で放たれた言葉は、見事に私を固まらせた。

腕が折れている方の肩に熱を感じて思わず指先を離しそうになったのに、それすらできないほどに驚かされた。

……どうして。

「どうして貴方が謝るんですか」

「そうしたかったからに決まってるだろう」

自分が生まれるよりもずっと前の話を聞いて、どうして謝るのだろう。

そう思い困惑をそのままに声を出すと、響いた声に重なるように即答で返された。自分の声の余韻と重なったそれはひどく綺麗に聞こえる。

一歩後ずさってその音の余韻に浸っていると、ヴァノツサはそれにと続けた。

「俺はこれから貴女に残酷なことを言うし、願うからだ」

「……っ」

こちらを見上げる怖いほどに真摯で強い視線を見てこれから言葉、願われる残酷なことが何なのかに気がついて目を見開いた。

これだけ話したのに、人がせつかく痛みを耐えて自分の過去を晒したのにこの男は、まだ　。

「貴女がどれだけ絶望したか聞いて、それでも俺は貴女に救世主を望む」

まだ、私に救世主を望むというの？

あまりのやるせなさに眩暈を感じて、私は手すりに体を預けて跪

いたままのヴァノツサを力なく見下ろした。

一体どうしてこの男は、そこまでするのだろうか。

何もできなかった私にこうして謝罪までして、どうして。

そう考えているとヴァノツサは苦笑を浮かべながら、疑問に対する答えを返してくれた。

「銀の魔女、最果ての魔女が救世主」

「……？ それは確か」

「知っているか、あの物語を。うちの預言者があの物語の通りになると預言したから俺はここに来た」

「でもあれは翡翠の」

「海のような蒼の瞳を持つ、銀の魔女を指名してきたぞ」
呆れた。

確かにそんな姿を持つのは世界にそうそういるものではないだろう、更には最果てという単語までついたとなれば。

けれどこの男はそんな預言者の言葉を信じて、ただそれだけを信じてここまで来て頭を下げているのか。仮にも皇帝が、そんなにしてまで預言者の言葉を信じて。

紅蓮の瞳から目を逸らして夜風に揺れる紅い髪を何とはなしに見ながら、馬鹿みたいと呟く。本当に馬鹿みたいだ……ただそれだけのために私は振り回されたのか。その預言者にも腹が立つが何よりヴァノツサに腹が立った。

はあ、と息をつくと先ほどの私の言葉が聞こえたのだろう。ヴァノツサが苦笑を深めてそうだな、と同じく呟いた。

「確かに馬鹿みたいだ。だが今は、預言者の言葉抜きで貴女に救世主を望んでいる」

「……どうして」

「人の死に絶望して、更には三百年経った今でも痛みを感じ続ける魔女なんて、聞いたことがないからだな」

「馬鹿にしませんか？」

「まさか。むしろ申し訳ないと思っている。俺の国の先祖や民が責

女を苦しめ続けているのだから」

いい加減立ち上がればいいのに、ヴァノッサはやはりその体勢のままただ真摯な瞳でこちらを見ているが少しだけその視線を弱めて笑った。

緩やかに弧を描いた唇が紡いだのはやはり笑みを含んだ声で。

「貴女は自分一人でできることなんてたかが知れていると言ったな」

「ええ」

「まずその勘違いを正しておきたいんだが」

口調は先ほどから変わらないのに、ひどく優しい声が辺りを満たす。

自分ではきつとどう頑張ったって出せそうにないその声をこの男が出していることが不思議で、私はどことなく自分より年上に見える男から視線が逸らせないでいた。

顔を若干仰向けて姉妹月の光をいっぱい浴びた瞳は、次の瞬間微かに曇る。想いを隠そうともしない瞳は、最初に出会った頃とは大違いだと思えるほどに分かりやすかった。

きつと、故意にそうしているのだろう。

ここで隠し事をするということがどういうことか分からない男ではないはずだから。

「今、モーリス大陸では俺の国を始め多くの国が地震の被害を受けている」

「……知っています」

「何度家を建て直しても次から次から壊れていく。民はいつまで経っても避難所での生活を強いられているし、何より地震の規模も頻度も大きくなっている」

「そうでしょうね。私もそう感じていますから」

「分かるのか？」

「感覚としてなら。体がかなりだるくなりますけど」

唐突に切り出された言葉に別段何を言うでもなくただ相槌を打つ。すると私に地震の感覚が分かることに驚いたのか、ヴァノッサは微

かに眉を上げてこちらを凝視した。

けれどそれぐらいで驚かれては困る、私は一応魔女なのだし。

そうなのか、と呟いたヴァノッサはしかしすぐに表情を引きしめてこちらを射抜くように見た。その表情に徐々に影が出てきたのを感じ、そろそろ姉妹月のうちの片方が消える時間かと内心で呟く。

ということは、もう結構な時間私達はここで話していたということになる。ついとヴァノッサの横に咲くりズネイションへと視線を向けて、その花が閉じようとしているのを見て確信する。

そうしてそんな確信を抱いていると。

「俺は俺の国と民を守りたいし、守るためには何だってやってやる」
「……」

「一人で絶望させるつもりはない、その時は国を失い俺も一緒に絶望する。一人でできることなんてたかが知れてるなら、二人でやればいいだろう。その結果本当に国が救えるかは分からないが、もしできなかったとしてもそれは貴女の責任ではなく貴女を選んだ俺の責任だ。貴女が苦しむことなんて何一つない、その代わりに俺は貴女に限界を超えて力を揮うことを願う」

「そんな、無茶苦茶な」
「だから」

無茶苦茶だ。

大体一人増えたぐらいで変わるものではないし、そういう意味で言ったわけではない。

なのにヴァノッサは私を責めないと言いつつも私に限界を超えろと無茶を言う。

そうして真摯な瞳と柔らかい声をそのままに折れていない方の手を差し出した。

ややごつごつとして見えるその手を困惑気味に見ていると、ヴァノッサは続ける。

「俺と来い、レイアスティ。臣下としてではない、救世主として俺の隣に立て」

第七話 その手を

『俺と来い』

何て無茶なことを言い出すのかと思った。

けれどこの人は本気でそんな無茶を口にして、手を差し伸べて。

『一人で絶望させるつもりはない』

今まで誰からも言われたことのないそんなことを言うものだから。ほんの、ほんの一瞬だけ。

その手を取りたいと思っってしまった。

すべてを巻き込む強さでもって向けられる視線と柔らかな声が、胸に突き刺さる。

そうして突き刺さった場所から、どこまでも我儘で優しい言葉がゆっくりと全身に染み渡る。

扉越しに話をしたあの時、私を娼婦扱いたあの時。そのすべて夢だったのではないかと思えるほどに真剣な瞳は、瞬きを忘れたようにただひたとこちらに向けられる。

燃えるような紅蓮の瞳。

しかしそれはただ目の前の男に鮮やかな色を与えるのみで熱の原因などではなく、熱いのはヴァノツサの心そのものなのだ。と今更ながらに気がついた。

リーズネイションも姉妹月も目に入らなくなるほどの熱は言葉よりも急速に私の胸を焦がしていき、その熱に浮かされて軽く開いた唇からほうと息を吐き出してぎゅっと手を握りしめた。

膝を着きこちらを見上げるヴァノツサは、上でも下でもなくただ隣に立てと言う。臣下ではなく救世主として。恐らくそれはファルガスタの人間が聞いたら天にも昇る気持ちになれるほどに、恐れ多

いことなのだろう。

私を知る限り歴史に一度しか名を刻まれていない炎帝が救いを求めてくるのだから。

けれど。

「納得いきません。それだけの理由で貴方は私に手を差し出すのですか」

ヴァノツサは、預言者の言葉なしに私に救世主を望むと言った。人の死に絶望して、三百年も痛みを感じ続ける魔女など聞いたことがないと。確かにそれはそうかもしれない。あの流行病の折に起きた魔女狩りのせいで、魔女達は人間の前に姿を現さなくなっただけから。

けれど本当にそうなのだろうか？ ただそれだけのことで炎帝ともあるうものが民の命を私に託すのか。きつとそんなことはありえないと心の中で頭を振って、口にした言葉への答えを待つ。

ずっと同じ体勢で居続けるヴァノツサの体はきつと冷えきっているはずなのだが、彼はそれをまったく意に介することなく小さく吹き出した。そうして差し出していた手を更に伸ばして、握りしめた私の手に触れる。

冷えていると予想していたその指先が触れた瞬間焼けそうに熱いと思ったが、どうやらそれは錯覚だったらしい。次の瞬間感じたのは予想通りの冷たさだった。そつと包むように手を握り、何度か離したり握った後でようやく聞こえたのはひどく淡々とした響きで。

「魔女というのは、快楽を好みその果てしない邪悪な心でもって人々を恐怖に陥れると昔教わったことがある。気に入らなければ殺し、気に入れば飽きるまでどんな手段を使っても手放さない。高らかに笑い狂宴を繰り広げる魔物だ」と

「……余計なお世話です」

「だが貴女は違う」

そのくせ最後の否定だけはやけにはつきりとした響きで、同時にぎゅっと強く握られた手が次第に熱を持つのが印象的だった。空い

た方の手を彷徨わせ、何か冷たいものに触れたいと願うほどに。

眩暈がするほどに熱に浮かされているのは、病気になったわけでも恋に落ちたわけでもないのだけれど。それでも苦しいほどに熱い。自分だけが私の心を溶かすことができるというわけだな、とヴァノツサは言っただけれどとんでもない。溶けるどころか蒸発してしまいうそなほどの熱にくらりと倒れそうになりながら、足掻くように空いた方の手で空を掴んだ。

この男の熱と空気に飲まれては駄目　　そう何度も心の中で叫びながら。

心の中で足掻く私に、ヴァノツサは続ける。

「色で男を虜にして楽しむ程度の魔物なら、逆に俺が墮として連れ去ろうと思っていたのに」

「……何てことを考えているんですか、貴方は」

「なのに来てみれば貴女は俺が今まで聞いてきたどの魔女にも当てはまらず、どうしていいのか途方に暮れていた」

「……」

「だが、俺は貴女以外の魔女を知らないしもう時間も無い」

あまりといえばあまりの言葉に、思わず呆れてそう言うがヴァノツサは聞く耳を持たず続けた。

そうしている間に触れる手の熱が下がり、微熱のような温度に変わる。

それはあの心を焦がすほどの熱に比べるとひどくぬるかったけれど、なぜだかひどく落ち着いた。冷静さを取り戻した視界には先程まで失念していた姉妹月やテラスの様子が見え、ヴァノツサしか見えなかった世界が急速に広がった。

「確かな理由なんて俺にも分からん。貴女しか魔女がいないからだと言われたらそうかもしれないと思うし、否定されれば違うかもしれないと思う」

「随分と曖昧ですね」

「仕方がないだろう。俺はただ預言の通りの魔女を探しに来ただけ

なのだから」

それは確かにそうかもしれない。ファルガスタからノースポートを抜けてこの島へたった一人で来たのである。ヴァノツサは、ただ一人の魔女だけを求めていたのだらう。もちろんただの魔女ではなく、救世主たる魔女を。

皇帝がこの場所にいる地点ですでに形振りなんてものは何の意味も持たず、そこにはただ強い願いだけが在るのだらう。そう思うとヴァノツサの言葉にも納得できた。

納得は、できるのだけれど。

もしこの場に私以外の魔女がいたなら、そしてその魔女が同じく蒼の瞳と銀の髪を持っていたならヴァノツサは一体どうしたのだろうか。どちらか確実に連れ出せる方にその真摯な目を向けたのだろうか。もしも、とありえない状況を頭に思い描きながらなぜか少しだけ胸が痛むのを抑えることができない。

けれど頬に触れた自分の髪の冷たさに我に返り、私は溜息をつきながら首を振った。その様子に何を思ったのかヴァノツサは軽く首を傾げる。しかし紅蓮の瞳の先に映る私が何も言わずにいるのを見て取ると、自嘲気味に笑って続けた。

「本当に、どうして俺はこんな北の孤島で魔女に跪いているんだらうな」

「そんなことは私の方が知りたいことです。今すぐ国へ帰還しますか？ そのぐらいのお手伝いならできますよ」

「……ここまで拒まれて、それでも引き下がれない俺の心情を少しは察した上での発言をしてもらいたいのだが」

「それはここまで拒んでもなお救世主を望まれる私の心情を察した上での発言でしょうか」

「俺にここまで言わせて何が不満だ」

「今の私には護りたいと願う人はいませんし、助けたいと強く願う人もいませんので」

「俺がいる」

「……貴方が、ですか」

そうだ、と笑ったヴァノツサの表情は目を見張るほどに艶やかで。私は驚きを顔に浮かべる前に溜息をついて誤魔化す。すると体温を共有しているかのように温度を感じない手の平がびくりと動いて少しだけ強く握られた。

「同情でいい。ほんの僅かでも俺を哀れだと思つなら、共に来てほしい」

「……随分と下手に出ましたね」

「貴女はどこまでも辛口だな……だが本心なのだから仕方がないだろう。それに、下手に出るぐらいで貴女が俺と来てくれるのなら安いものだ」

「くだらない演技に騙されるほど馬鹿ではないつもりですが」

「口先だけの言葉に心を動かされない人だということもとくに知っている。だからこうして本心で話しているんだ」

苦笑して立ち上がったヴァノツサと一瞬だけ真正面から目が合うが、すぐにそれは見上げるほどに高い所に行ってしまう。黒衣をついと見てその上にある紅蓮の瞳を見上げるとヴァノツサはこちらを見下ろし、それでも手を離さずに口の端を軽く上げた。そうして西へ東へ沈んでいく姉妹月の柔らかな光を浴びながらああ分かった、と呟く。

しみじみとしたその声に眉を上げて続きを待つがヴァノツサはくつくつと笑い出し、それ以上何も言わない。だからただ楽しげな笑い声だけが響く中困惑するしかなかった。何なのでしょう、と声を上げようとするがなぜかあまりにも楽しそうな声を阻んではならない気がして、結局言葉を紡げないまま静かに時が過ぎていく。

そうしてたつぷりと笑いの余韻を響かせてからヴァノツサはようやく私の方を見て言った。

楽しくて仕方がないというようなその声はどこか吹っ切れたようでもある。

「貴女は絶望に怯えながらも、決して誰かに怯えたりはしない。そ

んな目をするから欲しくなるんだと今気付いた」

「な……っ」

「初めて会った時もそうだった。貴女は俺に先代を見ていたが、それは皇帝という立場ではなくただ一人の男を見ていたんだらう？」

「……それは」

「媚を売ることなどしない、ただ本心からこちらを見て話している。貴女は気付いていないだろうがひどくまっすぐなのだ」

そして俺も貴女と同じなのだと言いついた。

そう言ったヴァノツサは触れていた手を離して、じつと自らの手の平を視線を落とす。そこから何らかの感情を読み取ることはできなかつたけれど、あまりいい感情ではないのだからということとは予想がつく。

手が離れ風の触れる面積が増えた私の手の平は急激に温度を失い、先程まで触れていた手を恋しく思うが追いかけてまで握る気はなかつたしその勇氣もなかつた。

それにしても、ヴァノツサはなぜ同じだなどと口にしたのだろうか。

丁度姉妹月の光が交差するテーブルに置かれた冷めた料理を視界の端に捉えながら、ぼんやりとそう思う。

思いながら、口にしていた。

「私と貴方の何が同じだと言つのですか」

魔女と人間、皇族と平民。これほどまでに対称的な存在もないだらう。なのに一体ヴァノツサは何をもってして同じだと言つたのか。納得がいかなくてどこか憤慨した様子で言うと、彼は驚いたように目を軽く見開いてそれから小さく笑った。すでにあの慇懃無礼さや道化師じみた笑みを捨てたヴァノツサは静かに俺も、と答える。

静謐なその声はしかしなぜか大した響きを持たずそのくせどこか悲しげだった。

「俺も魔物扱いだ。この髪と瞳のせいで普通の人間とは見てもらえない」

「……そんな」

「だが貴女はそんな俺をどこまでもまっすぐに見据えてくる。それをとて嬉しく思ったから俺は貴女に救世主を望むのだと思う。俺の国を救う魔女が貴女であればいいと、漠然とだがそう願う……まあ、貴女以外の魔女を見つけられないからという理由もないわけではないが」

「……やっぱり曖昧なのですね」

「俺には理由など必要ないからな。ただ貴女が必要だという、それだけが真実なのだから」

いつ、どの瞬間からだろうか。この男が私に対して本音をぶつけてきたのは。慇懃無礼な態度で誤魔化すことをせず、からかうことをせずただ自分をぶつけてきたのは。

まっすぐな紅い瞳にそんな関係のないことを考えながら、答えなど必要ないのかもしれないと思った。そんなことを知らなくてもヴァノツサは確かに私に嘘をつくことなく、曖昧でも彼にとっての確かな理由を口にしたという事実が今目の前にあるのだから。

そう、だからこそ。

「貴女の過去など俺には関係ない。俺には過去を変える力もその意思もない。だが俺と来るなら、そこから起きるすべてに俺が責任を持つ」

そのどこまでも人のことを考えていない残酷な言葉ですら、心地良いと思う。

昼間のようなただ甘いだけの言葉よりもそこには確かな真実があり、想いがあつた。

どう責任を持つつもりなのか、そう疑問が浮かばなかったわけではない。けれど心地良い言葉に、ただ好ましいとだけ思った。

再度、手が差し延べられる。

今度は先程みたいに俺と来いなどとは言わなかったけれど、その手は耳に響く言葉よりも強く私に意思を伝えてきたような気がする。何の覚悟も押しつけず気安く差し延べられた手を、やはり一瞬だ

け取りたいと願ってしまった。けれどどうしても最後の一线を越えることができず私は小さく首を振る。さらりと揺れた銀の髪が一瞬視界を覆い尽くしたせいでその時ヴァノツサがどんな顔をしたのかは分からなかったけれど。

「共に行くつもりなどありません」

「……いい加減にしろ、どれだけ俺に言わせれば」

「いい加減にするのは貴方ですヴァノツサ。貴方が私の過去など関係ないと言うように、私には貴方の現状など関係ない」

「……」

「ですが、何もしないで貴方を帰すのも夢見が悪い。ですから一日だけ」

手を取るだけでいいのならこれほど楽なことはない。けれど手を取った瞬間私に望まれるものがあると知っているから拒むしかなかった。

必ずできることであるなら不承不承ながらも受けようと思う。とはいえ地震を収めるなど自分にできるとは思えないし、できないことを了承するなどという愚を冒すつもりもない。ヴァノツサだってそんなことは望んでいないだろう。いくら救えなくても私の責任ではない、と口にしていても。

……それにしても、何もここまで言うつもりはなかったのに。拒絶の言葉に苛立ったヴァノツサが棘のある言葉をぶつけてきたせいで、売り言葉を買ってしまった。思ったよりも鋭くなった声はヴァノツサを黙らせ、それに少しだけ悪いことをしたかもしれないと思っただけで後悔は決して先には立たず、そしてそれを口に出す気もなかった。

代わりに彼が望む言葉を私の望む形で向ける。

屋敷から出て救世主になどなるつもりはないけれど、せめて屋敷の中でなら。

「一日だけ、時間をください。一日あれば理由ぐらいは探すことができるでしょう」

「……レイアステイ、では」
「勘違いをされているようですが、私は救世主になどなるつもりは毛頭ありません。これは貴方への同情分ですから。その代わり理由を見つけられなくても文句を言われる筋合いはありませんし、見つかったとしてもそこから先は貴方の仕事であつて、私は知りません」
ヴァノツサの言葉ではないけれど、彼に同情ぐらいはしているのだからその分だけでも。

できるかは分からないけれど、そのぐらいなら努力をしてもいいのではないかと思つた。弾かれたように目を見開いたヴァノツサに私はそう釘を刺しながら内心でそう呟く。実際に何をするのかと問われればただ地の精霊を召喚して尋ねるといふ選択肢しか思い浮かばないのだが、それでもヴァノツサには十分だつたのだろう。

思わずこちらが驚きで凍りつくほどに無邪気に笑つてすまない、と返す。するとどこか硬質な顔がとても鮮やかになり、まるであの人のようだつた。思わず声をかけそうなほどにそっくりな顔をされて私は溜息のような息を漏らした。幸いにもそれを悟られることはなかつたけれど。

救世主になどなれるわけがないし、なるつもりもない。それはヴァノツサがいくら言葉を尽くそうとも変わることはないだろう。いくら私を振り回しても、心を溶かしても決してそれは変わらない。けれどここまで妥協したのは、やはりこの男が持つ想いの強さゆえか。ならばもしも想いで世界を動かすことができたなら、そんなことが可能になるならその時はきつとヴァノツサこそが。

「レイアステイ。もしいつか」
「え？」

ヴァノツサの言葉と心の中の呟きはそんな声で中断された。けれどそれは紛れもない自分の声で、そしてがくと落ちるように力を失つた身体も紛れもなく私のもので。慌てた様子のヴァノツサの腕に支えられながらも力を取り戻すことのできない身体は、あの深い脱力感に襲われていた。

……まさか。

「おい、どうした！？ レイアスティ！」

「……地震が」

「地震……まさか！」

この感覚はあの地震しかないだろう。そう思いヴァノツサの言葉に頷くと「くそっ！」という悪態が上から聞こえてきた。苛立ちが身体を支える腕から直に伝わるほどに、彼は今国を想っているに違いない。

それでも救世主を拒む私の身体をしっかりと支えているのは驚嘆するに値するのだけれど。自分の願いをことごとく跳ね除けるような者など私なら放り投げてしまいそうだというのに。

抱き合うように支えられながら荒く息をつき、意識を集中させる。そうして精霊達の声に耳を傾けてどの辺りで地震が起きたのかを大まかにだが読み取り、そこが西の大国ツヴァイであると知った。それならば反対側に位置するファルガスタにはあまり被害はないのだからうけれど、それを口にする気はなかった。全身で苛立ちを表すヴァノツサにとってそんなことは問題ではないのだろうと分かっていたから。

もう時間がない、というヴァノツサの言葉は正しい。

モーリス大陸にはもう一刻の猶予も残されてはいないのだ。

だからこそヴァノツサが来たのだろうし、私の身体も際限なく悪くなっている。

そう、もう猶予なんてない……ならば私がすべきことは。

「ヴァノツサ」

「何だ！」

「私を外に連れて行ってください。ここでは地の精霊と話ができない」

「……何？」

「一刻の猶予もないのでしよう、ならば急いでください。これ以上具合が悪くなる前に、私は私の言葉を果たしたいのです」

唯一取れる選択肢を、今すぐにも実行すること。

救うことなどできないけれど理由だけでもこの男に伝えることができたなら。それでは何も解決などしないのだけれど、自分が口にした以上少なくともそれだけは果たす義理がある。

ほだされた、といえれば言い方が悪いかもしれないが少しぐらいなら協力してやりたいと思えるようになった心境の変化には、我ながら驚いた。拒絶するために過去の話まで持ち出したのに、よもやそこからこんな展開になるだなんて。いや、もちろん何かしてやりたいと思っただけなのだけれどそれはすべて過去の出来事に負けてしまっただけで何もできなくて。けれどヴァノツサが責任は自分にあるのだからと言った瞬間、その重荷が軽くなったからかもしれない。

目を閉じると次第に脱力感が強くなっていく。けれどそれでも私は急がなければと半ば強迫観念にとり憑かれたように目を開いて、強い口調でヴァノツサを急かした。

ヴァノツサに抱きかかえられて庭へと降り立つと、多少楽になったのかしっかりと地に足をつけることができた。そうして彼を下がらせて前に手をかざす。それは儀式的なもので本当は必要ないものなのだと思うけれど、どうしても精霊を召喚する時にはこの儀式めいた流れを使ってしまう。

地面から突如吹いた風がふわりとワンピースや髪を揺らすぐそれには頓着せず、ただ前を見据えて心の中で私の知る地の精霊の名を呼ぶ。すると頭の中にも精霊の声が聞こえた気がして、そこでようやく言葉を紡いだ。

魔力を声に籠めて、できる限りはつきりと。

「水を生み、花を咲かせ、墮ちゆく世界を支える者。汝、盟主たる我が名の下に 来たれ。アマンティ」

声にした瞬間目の前の地面が盛り上がり、私のゆうに三倍にはな

るつかという高さにまでなる。けれど決して草を散らすことなく盛り上がった大地はゆっくりと人の形を取っていった。

女性の裸体を形作った大地はその口からパラパラと土を落とすしながら、けらけらと笑った。すると後ろでヴァノッサがぎよっとする気配が伝わってきたので、振り返って大丈夫だと言うように手を振った。

宵闇の中で土を散らす地の精霊はけたたましい笑い声を少しずつ鎮めながら私へと視線を向け、それからもう一度吹き出してから腕を組みその笑い声よりも若干声を落として言う。

「こうして顕現するのはどれぐらい振りかしたら、ねえ小娘。どう？
少しはその根暗な性格は直った？」

「いちいち嫌味ね、アマンティ」

「あら、事実じゃない。あなた一体いつになったら大人になるのかしら。いつまで経っても小娘のままでじれったいじゃないわ。もし悔しいのならあたくしみたいに花ぐらい咲かせてみせなさいよ」
「……何怒ってるのよ」

「小娘がいつまでもあたくしを召喚しないから待ちくたびれただけよ。地震の度に体調を崩すくせになぜあたくしを呼ばなかったの」
大量の土を落として徐々に面積を縮めながら喋るアマンティに、私は呆れ混じりの言葉を返すことしかできない。少なくとも百年以上こうして面と向かって話すことのなかった者にいきなり嫌味を言うのは彼女ぐらいだ。

けれど若干ふつくらとした裸体を人間のそれと同じほどの大きさにしてようやく土を落とすのを止めたアマンティは、私の言葉に大げさに眉を上げてみせる。よほどご立腹のようだ。

「精霊が他の者とあまり関わってはいけないだなんてことはないんだから、呼びたきゃ呼べばいいのよ。エイミーもガラナもマーグリスも、あんたに呼ばれるのを今か今かと待っているのに」

「……そんなに頻繁に呼んでまですることなどないでしょう」

「ふん、それは灰猫しか友達のいない暇人が言う言葉じゃなくてよ

……それはそうと」

完璧に憤慨した様子のアマンティは私の言葉に鼻で笑いつつ、視線を後ろのヴァノツサへと向ける。光なき土の瞳は闇の中で何を映すのかは分からないけれど、少なくともヴァノツサの紅蓮の髪ぐらいは見えたに違いない。

軽口を叩くのを止めてまじまじとヴァノツサを凝視するアマンティは、暗闇の中でも分かるほどに不快げな顔を浮かべた。……でも一体どうして。

私はアマンティの様子に内心で疑問を感じ、数歩下がってヴァノツサの隣に立つ。そうして彼を見上げるとそこには困惑の色があるものの、アマンティから視線を逸らすことはない。

その視線が睨むような……いや、挑むようなものであるのは恐らく私のように売られたものを買っているだけなのだろうと感じた。しかしいつまでもそうして睨み合いを続けられても困るので、私はふうと息をついてから口を開く。

「貴女に訊きたいことがあるのよアマンティ。今話していた地震の原因は何？」

「……何だつて？」

「モーリス大陸を襲う地震だ。地の精霊である貴女なら理由ぐらい分かるのではないか？」

やや強めの声で言うアマンティが目を開くのが見え、一瞬怪訝に思ったもののそれはヴァノツサの問いでかき消される。

隣に立つヴァノツサは不毛な睨み合いを止め、召喚の際の驚きをそのまっすぐな表情に押し隠して問いを発する。しかしやはり喧嘩を売られたという感覚があるせいだろうか、その口調はどこか小馬鹿にしたようでもあり私は慌てて彼の服の袖を引っ張った。

そうして小声で貴方はどこまで不遜なのですか、と窘めた。人間に分からないのは仕方がないことかもしれないけれど、精霊に接するにはそれ相応の礼儀が必要になる。アマンティと私は盟約という形で同等の位に位置するから問題はないけれど、ヴァノツサはそう

はいかない。いくら人間の王であろうともそれは精霊には通用しないのだから。

すると土塊から発せられた怒声は強風を生み文字通り私達に叩きつけられる。そうしてアマンティが怒りを隠そうともせず、月明かりの下肩を怒らせたのを見て、私はヴァノッサの礼儀知らずに内心で舌打ちした。

こんなことならいくら身体がだるくても自分一人でアマンティを呼ぶべきだった。

そうして痛む頭でどうやって取り繕うべきか考え、しかし次の瞬間発せられた言葉にそれが礼儀知らずゆえではなかったのだと知り。「地震の原因はお前でしょ、ビリオン坊や。それなのにあたくしに理由を求めるなど茶番もいいところね」

そして凍りついた。

アマンティの口から出てきたのは、あの人の名前だったから。

第八話 地震の原因

ビリオン・ヴァン・ファルガスタ。

それは三百年前のファルガスタを揺るがした、世界初の炎帝の名前。

記憶を失っていた私を保護してくれ、瀕死状態のビーを助けた言葉通りの命の恩人……なのだけれど。

『地震の原因はお前でしょ、ビリオン坊や』

どうしてアマンティが、ヴァノツサを見てあの人の名前を口にするの　しかも、地震の原因だなんて。

「ちょ、ちょっと待ってアマンティ！」

「何よ。あたくしは今この男と　」

「この人はヴァノツサよ、ビリオン様じゃないわ！　大体あれから三百年も経過しているのにビリオン様が生きてらっしゃるわけがないでしょう！」

驚きで硬直した身体を無理矢理動かし叫ぶように言い放つと、アマンティは不機嫌な顔のままばら、と土を落としこちらを睨んだ。けれど暗闇と見間違えそうなほどのその姿にどれほどの威圧を加えられても、引き下がるわけにはいかなかった。再度叫ぶように言いつつ、理解してもらるように理屈を述べる。

けれどまだ理解してくれていない彼女は強い視線をそのままに私を睨みつけ、鼻で笑う。するとその影響で巻き起こった風が頬を打った。……風の精霊でもないのにこの威力、本当に只者じゃない精霊だ。けれど、だからこそ彼女がビリオン様とヴァノツサを間違える理由が分からない。

「柄にもなく騙されてるんじゃないやなくて？　小娘。こいつがビリオン

坊やじゃないって嘘ついてるだけでしょ」

「確かに姿形はそっくりだけれど、中身がまったくの別人よ。第一ピリオン様はもっとお優しい方だもの、間違ってもヴァノツサみたいな性格じゃないわ」

「……どうして貴女はそうも」

「ふむ……まあ確かにあたくしに対する態度も違うといえは違うけど、でもねえ」

「それにアマンティ、貴女仮にも世界を支える大精霊であるなら二代目の炎帝が生まれたことぐらい知っているはずでしょう。彼がその二代目よ」

私の言葉に肩を落とすヴァノツサを尻目に呆れ混じりにそう言うと、そこでようやく冷静になったのか彼女は睨みつけるような視線を丸くしてまじまじとヴァノツサを見る。そうして挑むようなその紅蓮の瞳に何を見たのか、召喚された時同様けらけらと笑い出した。地面から土を吸い上げてそれをまた吐き出すように地面へと落とし、自らの身体の体積を増やしては減らしてはただひたすらに笑う。

狂ったようなその笑い声はしかしさっぱりしており、困惑したようなヴァノツサの視線に私は大丈夫ですと首を振った。救いなのは、アマンティがきちんと私の言葉を聞いてくれたこととヴァノツサの礼儀知らずに怒ったわけではないということか。

それにしても、と思う。どうしてアマンティが陛下の名前を口にしたのか……世界のすべてを見渡せるほどの精霊があの人死を知らぬはずがないのに。そしてヴァノツサが生まれたことも。

軽く腕を組んで内心で考え込んでいるとアマンティは笑うのを止めて再びこちらを見る。ふくよかだけれどとても硬そうな身体を向け、悪かったねと言う。恐らく、ヴァノツサへの謝罪だろう。ヴァノツサもそう思ったのかアマンティの言葉に軽く首を振る。売り言葉を買っていた視線も今は落ち着いていた。

「確かに二代目の炎帝が生まれたって話は聞いてたけど、まさかここに来るとは思ってなかったからってつきりあの男かと思ってしまっ

たわ」

「……そんなに似てるのか」

「精霊たるあたくしが見間違えるぐらいだ、きつと魂の本質まで似てるんだろっね」

あたくしとしたことが、と肩を竦めて笑うアマンティにヴァノツサはどこことなくシヨックを受けた様子で呟いていたけれどそんなことはどうでもいい。

魂の本質が似ているかどうかなんてことは関係ないのだ、この道この男はあの人ではない。ちらりと盗み見るように紅蓮の髪が揺れる横顔を見て内心でそう思い、不意に頭に浮かんだあの人のことを考えた。熱くて冷たくてどこまでも優しくなれるのに同時にどこまでも残酷になれるあの方は、今自分が口にしたようにとうに亡くなっているはずだ。

それなのにアマンティはあの方が地震の原因だと言っていた……それがどうにも腑に落ちなくて、私は彼女に問い詰めようと口を開く。けれど何をどう言えばいいのかよく分からなくて、すぐに口を閉ざした。指先で唇に触れてはあ、と息を吐く。そうして頭の中を整理しようとするものの、どうしてもうまくいかなかった。それほどに動揺しているということが、何だか可笑しい。

どうして地震の原因があの人だと言えるの？

貴女はあの人に会ったの？

あの人は、生きているの？

訊こうと思えば次から次から疑問が出てくる。けれどどれも自分の中では馬鹿馬鹿しい言葉に過ぎなくてどうしても喉から先に出てくれない。そうだ……ありえないのだ、あの方が生きているだなんて。そして何より、それがありえたらいけないのよ。きつとアマンティがヴァノツサとあの人を間違えたように何か勘違いでも起きているのだからと自分を納得させて、すっかり仲良くなった様子のヴァノツサとアマンティの方を向く。

動揺で脱力感が増していたけれど、そんなことはどうでもよかつ

た。

「それより、肝心の地震の原因をまだ聞いていないわ」

あの人とヴァノツサがいかに似ているか話そうとしていたアマンティの声を遮ってそう言うと、二人の視線がこちらに向いた。大地そのものの瞳と炎を模した瞳に見つめられて多少居心地が悪くなるものの、交互に視線を返していく。

地の精霊が顕現した影響か、余震も今のところはなくなり体調も徐々に回復しつつある私は地面を踏みしめてそう尋ねた。まだ視界が揺れているような感覚を感じたけれど、それもやはりどうでもよかった。あの人の名前が今更になって出てくるということ、それが一番の問題で。地震の原因ですら本当はどうでもよかった節があった……ヴァノツサには、口が裂けても言えないことだけれど。とはいえ自分が口にした約束もあるからそう尋ねる。

微かに震える体はまだ身体の力が抜けていることを如実に表していたけれど、だからといって地面に座り込むわけにもいかず手を強く握りしめることで背を伸ばしてアマンティの答えを待つ。

すると私の問いにアマンティは一度考え込むように顎に手をやって、次の瞬間にはふうと溜息をついて首を横に振る。同時にふわりとヴァノツサの目の前まで移動した彼女は若干乾いた土塊からできた手で彼の頬に触れた。そうして驚きに目を丸くするヴァノツサにやっぱり別人か、と溜息混じりの声を出してから。

「地の精霊は堕ちゆく世界を支えるもの。でもそんなあたくし達の目をかいくぐって地脈を砕く不届き者がいる」

「……地脈を？ でもそんなこと簡単には」

「もちろん人間ごとくにできるはずがなくてよ。でも精霊がそんなことをするはずがないし、事故でもない」

地面の奥深くまで行ったことがないから詳しくは分からないけれど、地脈とはすなわち世界に流れる魔力の通り道だと言われている。同時に、精霊達の通り道でもある。そうして魔力や精霊が通り世界を支えるからこそ、この世界は堕ちてゆくことはないのだしそれ

は多少なりとも魔力を持つ者達には常識だった。

けれどただの人間であるヴァノッサにそれが分かるはずもなく。地脈という言葉の意味も分からずただ軽く俯いて考え込む風だったので、私は小さな声で「地脈とは大地を支えるものだと考えて頂いたらいいです」と補足した。すると彼はなるほど、と顔を上げたもののやはり実感は湧かないに違いがない……私だって、見たことがないのだから実感としてはよく分からない。けれど想像ならできる。

地脈は魔力と精霊の通り道。それが壊されるということは……。破壊された場所を間違つて通つた魔力や精霊達が、そこから溢れていくのね……」

「そう、そうして溢れた力が大陸を揺らす鍵となる。精霊ならまだいいわ、あたくし達が注意すればいいだけだから。でも魔力はそうはいかない……世界が生まれたその瞬間から完成されていた流れを変えるなんて」

「……修復することはできないのか？」

「もちろんできるわ。でもそれには長い年月が必要になる。あたくし達はそれでもいいけど、その間に人間達は死に絶えてしまうわ」

逆らうこともできずにただ立ち尽くしているヴァノッサの横顔を見ながら呟くと、アマンティは頷いて溜息をついた。そうしてヴァノッサの言葉に首を振る。そう、世界が生まれた瞬間から完成されていたものを直すには確かに膨大な時間が必要になるはずだ。たとえ地の精霊といえども、それは変わらない。

ましてやこの世界中の魔力の通り道なのだ。質量だって私達の想像を遥かに超えるものになるはずだから。そんな、と呟いたきり黙りこんだヴァノッサの紅蓮の髪を横目に見ながら私はアマンティの言葉に納得していた。

そうして考えて、でもと心の中で呟く。でも、どうして突然地脈が砕かれ始めているの？アマンティにも分からないであろう疑問を深く突き詰めて考えようとして、私ではあまりに知識がないことに気がついてやめる。世界の流れを汲むことはできても、その流れ

の原理も始まりもよく分からない私には何がどうなっているのか分からなかった。

ただ、言われてみれば確かに辺りを巡る魔力に違和感を感じるのは分かる。あくまでも言われてみれば、なのだけれど。でもそれは恐らくここが北の孤島であるからであって、ノースポートやモーリス大陸では。

「この孤島が揺れないということは、壊されているのはモーリス大陸直下の地脈なのね」

「そうよ。あの大陸の中央にある地脈が破壊されてるからいつまで経っても地震が収まらないのよ」

きつと他の大陸ではこれ以上の違和感を感じることになるはずなのだ。何せここは地震すら起こらないほどに他の大陸から離れているのだから。アマンティの言葉を聞き、あの大陸にいる精霊達は大丈夫なのだろうかと考える。魔女である私ですら違和感を感じるような世界の流れに、彼らは耐えられるのだろうか。

両手をぎゅっと握りしめて彼らが道に迷うことがないように祈ることしかできないけれど、それでも何もせずにはいられないほどの事実を再確認する。普段は感覚としてしか触れることのできない精霊の存在を今ほど哀れに思ったことはない。私のような脱力感で済むなら、それはまだ幸福なことなのかもしれないと。

大陸の終わりなどどうでもいいと思っていたのに、こうして精霊を目の前にして始めて彼らの存在を突きつけられる。大陸が墮ちるということとは、すなわちそこにいる精霊達の生命も危うい。

分かりきっていたことではあるけれど、事態がファルガスタのみの問題ではないことを嫌でも思い知らされて気が重くなった。どうしてそんな事態に巻き込まれているのだろうか、私は。ましてやほぼ中心人物ともいえる位置に置かれてしまっている自分を恨めしく思いながらも一度ヴァノッサを見た。

やや白み始めた景色の中でヴァノッサの横顔は若干青白く見えた。アマンティの言葉に地震の理由を理解したようではあるけれど、そ

れに対して打つ手が見えないことも理解して。

「……つまり地脈を直さないことには地震は収まらない、と」

「そうなるね」

「そして地脈を直すには膨大な時間がかかるのだな」

「少なくともお前達の一生では賄えないよ」

「すぐに直す方法は」

「できればあたくし達が即やってる」

アマンティの言葉にもう一度そんな、と呟いたヴァノッサの顔に初めて絶望の色が浮かんだ。地の精霊にここまでのはつきり言われたことの意味がこの男にはきちんと理解できているのだろう。だからこそヴァノッサは傍から見ていて止めたくなくなるほどに強く拳を握りしめ、唇を噛みしめた。

つ、と流れた血に気付くことなく俯く。その絶望を呈した姿に何も言えず、私はただ黙り込んだままアマンティに視線を向けた。何か方法はないのか、と瞳に意思を籠めて。すると彼女にもものすごく意外そうな顔をされたけれど、それは無視した。

さわさわと音を立てて草花を軽く揺らしながら彼女は一度目を閉じた。そうして花月の沈んだ空の下、それでも温度の下がる空気を身体中に浴びながら彼女は目を閉じたまま一つ、と囁くように口にした。その囁きはしんとした中やけによく響き、ヴァノッサと私の耳朵を打つ。ほぼ同時に身動きした私達はただひたすら続きを待つ。

「あたくし達精霊にはできないけど、方法はちゃんとある」

「本当か!？」

「ただ、その前にやるのが二つあるけどね」

そうしてアマンティの言葉に弾かれたように声を上げたヴァノッサに、彼女は土でできたやや無骨な指を二本立てる。すると土中の水分が遠い朝日を照らしてきらりと光った。その光を素直に綺麗だと感じていると、アマンティは私へと視線を滑らせる。その瞳に宿る色がどこもなく意地悪なもので、私は思わず後ずさりたくなる。

……一体何を言うつもりなのだろうか？ 彼女の視線を追うよう

にしてこちらを見つめる真っ直ぐな紅蓮の瞳の圧力も耐え難いので、どうにかしてほしいのだけれど、それは彼女が放った言葉に無理なのだと悟る。

くすりと、と笑いに笑ったアマンティは今まで自分を召喚しなかった私に対して多分の意地悪を詰め込んだ声で。

「その小娘の協力を得ること、そして地脈を破壊する者を止めること。それが叶えば一年とかわらず地脈は正常な状態に戻るわ。もちろん、地震が起きない程度というものでしかないけど」

「レイアステイ」

「……すみません、もう眠いので寝てもいいでしょうか」

「駄目に決まってるだろう。……いや、寝てもいいが起きたら延々と話をさせてもらおう」

「嫌です。第一私は理由を調べるだけだとお話ししたはずですよ」

そんなことを言ったものだから、ヴァノツサの瞳に宿る意思の強さが増して本当に一歩後ろに下がった。けれどそれを許してもらえなくて、つい棘のある声でそう返してしまった。

アマンティが言うのだから嘘ではないのだろうとは思う。いくら意地悪をしたくても嘘をつくなどということは無いはずだから。けれど原理が分からない上に私に何ができるかも聞かされていない。そんな状態ではいそうですかと頷くことなど到底できなかつた。

下がった分だけこちらに足を踏み出すヴァノツサと、その背後で笑いに笑うアマンティ。私は彼らを見ながらどうしたものかと考えて、結局は理詰めで行くしかないと考え。

「ですがその前に地脈を破壊する者を止めねばならないのでしょうか？ その心当たりは？」

「……」

「言ったでしょ。ピリオン坊やよ」

一番の問題を口にしたらヴァノツサは口を噤み、そしてアマンティは即答した。対称的な二人の答えに私は思わず笑いたくなったものの、耳朶を打つ言葉の響きに一瞬固まる。何度同じ言葉を聞いて

も、やはり動揺してしまう自分が何だかとても悔しかった。

貴女はあの人に会ったの？ と問い詰めたくなる気持ちか再燃する。けれど何となくそれは訊けないと思い、代わりに何て言葉を返せばいいのか詰まっっていると生きているのか？ というヴァノッサの声が聞こえて顔を上げた。先程こちらに近付いてきた体軀は今アマンテイのそのふくよかな土の肢体へと向けられている。そうして片眉を軽く上げた彼女にもう一度生きているのかと尋ねる。

その時自分の背筋に一筋汗が流れた気がしたけれど、その理由は分からない。

「先代が生きているなどとは聞いたことがない。書物にも亡くなり、丁寧に埋葬された旨が記載されていた」

「なら墓の下でも掘ってみたらどうだい？ きつと何も無いか、偽者の死骸があるだけさ。本人は生きていて地脈を破壊するために世界中を飛び回ってるんだから」

ヴァノッサの問いにアマンテイは嫌悪を露に空を見る。そうして若干曇り始めたそれに嫌な空だねと呟いて視線を戻した。その時には嫌悪感は消えていて、私はそれにほっとしながらもそれでも納得いかないことを口にした。

握りしめた両手が嫌に湿っている。きつとこの背中に流れる一筋の汗と同じ理由で流れているのである。汗の原因は、やはり分からなかった。強くなる日差しが彼女の肢体を照らし、そこに見える土中の水分の照り返しが眩しい。けれど目を逸らすことはできない。

動揺なんてものはすでに悟られているかもしれないけれど、だからといってそれに甘んじるわけにもいかない。他の事柄ならともかく、あの人の名前が出ている以上。

「どうして地脈を壊したのが陛下だと？ 人間である陛下が私達みたいに永い時を生きていられるはずがないでしょう」

「あんた分かってないわね。あたくしだって人間が三百年も生きられないことくらい分かってるわよ。でもビリオン坊やは確かに生きてる。これについてはエイミー達とも意見が一致してるんだから」

ありえないわ　　そう言おうとした私の言葉を鼻で笑って遮ったアマンティは、苛立った声でそう言った。腕組みしたその手を離しこちらに片腕を差し出すように伸ばしながら、徐々に強さを増す光にそれを晒す。己の身体に生きる草花の為だろうか、それは分からなかったけれどやはり腑に落ちないことはあり私は睨みつけるような視線でそんな馬鹿なことが、と言い放つ。

そうだ、あるはずがないのだ。死しているはずの人が生きているなど　　あるいは、人間が不死の力を得るなど。御伽噺にも出てこないような夢物語だ。そしてその結果あの人が地脈を　　ファルガスタに害を為すなど。

例え御伽噺でも信じない。信じられるわけ、ない。何より　　どうして今になって。私は次から次から湧き出てくる言葉に翻弄されながらも、何とか己を保とうと深く息を吸う。それは結局徒勞に終わったのだけれど、多少は落ち着いた気がした。

そうしてどうにか自分のこのありえないという気持ちを立証できないものかと言葉を搾り出そうとする。

「地脈を壊す術が人間にあると？」

「それがあたくし達にも分からないのよ。でも現に傍を通った精霊達が紅蓮の色を持つ男を見たと言っている。これだけで坊や以外考えられないと分かるだろうか？」

「……」

「間違っても俺じゃないからな」

自分にも想像ができないほどの質量があるものを破壊することが人間に可能なのだろうか？　　頭に浮かんだ疑問をそのまま口にする、アマンティは困ったように顎に手を当てながらそれでもきつぱりとあの人以外に犯人はいないと口にするので思わず彼によく似たヴァノツサへと視線を向けた。

するとその視線の意味に気付いたのか、怪訝そうな声でそう返されてそれもそうですと独りごちる。確かに自分で壊した地脈のせいで起きた地震について助けを求めるなんて馬鹿な真似、この男は

しないだろう。けれど精霊の証言一つではどうにも信じられない。

エイミー、ガラナ、マーグリス、そしてアマンティ……世界を支える四大元素の精霊達が口を揃えて言うのなら確かにあの人が生きている可能性は高いはずだ。とはいえ絶対の事実ではないはずなのは確かだし、絶対だなんて言わせるつもりもなかった。

ありえない、と今度こそはつきり口にしようとする私のその姿に埒が明かないと思ったのか、アマンティが何気なさを装って訊いた。

「そういえばあの灰猫はどうしたの？ せっかくあたくしが召喚されたのに姿も見せないで。三百年来の付き合いなのにつれないねえ」

「……三百年？ そういえばあの猫は先代の猫だと」

「！？」

ありえない。

そんな言葉を言わせてもくれないほどの言葉に私はびくりと身体を震わせた。そうして睨みつけるようにアマンティとヴァノツサを見据えるが、片方からは挑むような目で、そして片方からは困惑したような目で返されるばかりだ。

どうしたんだ？ と問うような視線を無視してアマンティを見ると答えなんて分かっているんだろう？ と馬鹿にするような声が聞こえてきそうな視線とぶつかる。……分かれている。そんなこと、答えなんてきちんと頭にある。でもその上で私はありえないと言いたかったのに。

考え込むような手を離し再び両腕を組んで仁王立ちになるアマンティから視線を逸らすことなく内心でそう呟いたけれど、それが届くはずもない。私はいつそのことありえないと叫んでしまおうかという誘惑に駆られながらも結局それができないまま、視線に押されるままにある言葉を口にした。

それは、この世界の誰も知らないはずの魔術。

「不死掛け……」

そして一度だけ私が犯した禁忌。

自分の言葉に戦慄して唇を震わせると、傍に立つヴァノツサが若干気遣わしげに声をかけてきたけれどそれに対して答える余裕などなかった。ただ、まさかと心の中の言葉を声に出すことしかできない。震える身体を両腕に抱きしめ、アマンティを再び見据える。先程までの力とは違う弱々しい視線に気付いたのか、アマンティは溜飲を下げて小さく俯いた。

首を振って違うと否定してほしい、馬鹿にしてもいいから笑ってもいいからとかく否定してほしかった。けれど私には彼女が俯くというその動作だけで答えを理解してしまう。嘘、と囁いた言葉は自分にしか聞こえないほどの囁きだというのに頭の中に何度も何度も木霊する。そうして両腕に抱きしめた震えが更に強くなるのを感じながら私はぺたんとして地面に座り込んだ。

魔女の禁忌ではない、すべての生命に等しく存在する禁忌にあの人が触れているというの？ 今この瞬間にも起きるかもしれない地震の原因をあの人が作っている？ でも一体どうして？ あの人にはそんなことをする理由なんて。レイアステイ？ と慌てた様子のヴァノツサが肩に触れる。その柔らかく温かい指先が触れた瞬間なぜだか縋りたくなつたけれど、見上げた先にある紅蓮の瞳と髪に思わず涙が零れた。

どうして。

「な……っ、どうしたんだ！ レイアステイ！」

「して」

「何？」

「どうして、ビリオン様」

不死掛けとは相手の魂を己に癒着させる禁忌の魔術。己と共に生き、己と共に死ぬことを強要する最低最悪の魔術。知らなかったでは済まされないほどの術で、私が犯した大罪そのもの。

今は屋敷でのんびりと眠っているであろう灰猫の姿が頭を過ぎり、もう一筋涙を流しながら私は掠れる声でそう言っていた。

三百年、三百年だ。これだけの長い時を生きてきてどうして一度

も気付かなかった？ あの人が生きていることに気付くには多すぎるほどの時間があったというのに。外に出ていなかったという理由では済まされない事態が確かに存在しているというのに、大事な人の命に関わることだというのにどうして今の今まで気付かなかったの。

そしてどうしてそれだけの魔術が行われたのに、気付くことも止めることもできなかった？ どの誰が行ったかすら分からないけれど、あの人にそんな禁忌を犯させるような魔女や魔導士が当時のファルガスタにいただろうか？

どうか幸せに生きて死んでほしいと願っていたのに。たとえ一生会うことが叶わなくてもそれだけを願っていたのに、どうして。片腕で肩を揺さぶられながら次々と流れる涙を拭うことも止めることもできず、私はただ戦慄したままアマンティと視界の端に映る紅蓮の髪を見ていた。唐突に目の前に出された言葉の重みに潰れそうになり、嘔吐感を覚えるほどの眩暈を感じた。今この瞬間にさえ倒れてしまえそうなほどの強い眩暈は一体何だというのだろう。俯いて地面を見ればそこに地の精霊を見る気がして、無理矢理にでも顔を上げる。けれどやはり顔を上げててもそこにいるアマンティが見えるから、何の変わりもなかった。

現実味を帯びない事実はしかし確かに私を壊すほどの力で襲いかかってくる。もちろんそれは幻影でしかなく、誰も何もしていないのだけれど。肩に触れるヴァノツサの指先にそつと自分のそれを触れさせながら私はそこに現実を見てしゃくりあげるような嗚咽とともに荒い息をついた。

駄目、と心の声のまま外に押し出して。もう一度駄目、と呟く。

そんな私の様子に二人が怪訝そうな顔をしたけれど、それでも再度同じ言葉を吐いた。

そう、駄目よ。

何も知らず何も見ていないのにそんな言葉を受け入れるわけには

いかなかった。

ただ信じたくないだけの我儘でも、それでも。私は何が何でもそれだけは受け入れるわけにはいかず、ただ自分が一番真っ直ぐだと思える目で二人を見てから信じませんと言い放つ。

受け入れるわけにはいかない、アマンティの言葉も地震の事実もそしてこの倒れそうなほどの眩暈さえ。

第九話 不死掛け

あの人が生きているはずがない。

胸の中で何度も何度も反芻した言葉を、もう一度繰り返す。

そうだ、生きているはずがない。

もし生きているなら、どうして私に

。

「信じないってあなた、子供じゃないんだから」

「……子供より性質の悪い頑固者だな」

「貴方は黙っててください」

呆れを前面に押し出して溜息をついたアマンティにヴァノッサが茶々を入れるのでぴしゃりと黙らせる。

呆れられても馬鹿にされても、これだけは譲れないのだとどうも理解してほしかった。私がどう言おうとアマンティがどう言おうと、事実は事実でしかなく何も変わらないのだけれど、それでも。ぐらり、と視界が傾くを感じながら両手を地面につく。するりとヴァノッサの指先から離れた手がひどく重かった。

頭の中で何かが鳴り響いているようなそんな幻聴を聞きながら頭を押さえると、微かに土の匂いがする。その濃い匂いにアマンティの存在を感じ無性に倒れなくなった。心配したのかこちらに近付いてくるアマンティを片手を押し出して制し、深く息を吸い込む。そうして自らの現実逃避からどうにか抜け出そうと何度も何度も深呼吸吸した。

誰も悪くはないのに、どうしても誰かを拒否せずにはいられない。否定するわけにはいかないのに、どうしてもすべてを否定せずにはいられなかった。

「……信じるわけにはいきません。少なくとも、私は何も見ていな

「いし何も知らない」

「だから小娘は」

「待つてくれ。ならば、貴女はどうしたい？ レイアステイ」

私は何も見ていない、何も知らない、何にも気付けなかった。

だからアマンティの言葉が事実であるか分かるはずがなかったし、かといって判断材料がないのだからただ子供のようには否定するわけにはいかなかった。

どうでもいいと言うこともできず、放っておいてと背を向けることもできず、そして信じることも否定することもできない。

ただ疑問だけが頭の中で渦を巻きどうしたらいいのか分からない。何度目かの深呼吸を終えた後、搾り出すように口にした言葉にアマンティが鋭く叱責の言葉を浴びせようとしたがそれをヴァノツサの声が制した。彼女とは対称的なひどく優しい声で問いかけてくるヴァノツサを見上げると、そこに見える紅蓮の髪と瞳にもう一度泣きたくなる。

けれど素直に泣くこともできなくて、私は分かりませんと弱々しく首を振ってから。

「ですが無視することはおろか忘れることなどできません。無理矢理なかったことになってできないでしょう」

「それなら」

「ですから私に少しだけ」

そう、なかったことになんてできるはずがないのだと口にすると、真っ直ぐな目と柔らかかな笑顔でまるで両腕を広げて迎え入れるかのような言葉を向けられそうになったので内心慌てながらそれを遮った。

そしてできる限りヴァノツサの視線の強さに負けないようにじつと彼の紅蓮の瞳を見つめ返しながら、二人だけ聞こえるように小さな声を出した。拒否したい、けれどなかったことになんてできないのは分かっている。ならば私はどうすればいい？ 考えても今すぐになんて答えなんて出せなかったから、だから。

「……時間を、ください」

それだけを言って、アマンティにそつと手の平を向ける。
どうか今は還ってと心の中で願いながら。

するとそこから光が溢れて 地の精霊は音もなく消え去った。

そして。

「はあ」

あれからどれだけの時間が経ったのだろうか。

ヴァノツサに支えられながら屋敷へと戻った私はそのままベッドに倒れこみ、ただ睡眠欲の赴くままに眠り続けた。色んなことがありすぎたのがよかったのか、何の夢も見なかった。

身体にまとわりつくシーツを引き連れながら寝返りを打ち天井を見上げながら溜息をつくとき、とても重たい息の音がした。アマンティを無理矢理還したのが悪かったのか、身体に感じる空気はとても重く精霊達の怒りの声が聞こえてくるようだ。そしてその重みがそのままこの息の重さとなっているのだろうかと思う。

次呼んだ時、今度は一体何て嫌味を言われるのだろうかと思うと少しだけ怖くなったけれどそれ以上にまず今は考えるべきことがあった。

指先で自分の髪を弄びながら思うことはただ一つ。

あの人が本当に生きているのだろうか、ということだけだった。

私と同じく不死掛けを使える者がいるのであれば不可能なことではない。ましてや私ですら使えたものなら、他の誰かが見つけてそれを使ってもおかしくはなかった。

けれど一体誰が何のために、そしてそれが事実であるなら一体どうしてあの人は。

「ありえない、はずなのに」

口にした言葉はどこか空ろで力を持たず、私はそんな自分に腹を

立てながら枕に顔を押し付ける。

地脈を壊す意味を知らなかったとしてもその後起きた地震で嫌でも理解したはずだ。なのに今でもこうして地脈を壊し続けているということは、ファルガスタやモーリス大陸、ノースポートに生きる人達のことなんて無視しているということになる。そんなことをあの人がするとはとても思えなかった。

とはいえ四大元素の精霊達が口を揃えて言うのだから間違いがあるとも思えない。

ざわざわと身体中がざわつく感覚に何度も何度も息を吐き出しそう考えながら、ぎゅっとシーツを握りしめる。答えを出したくても何の判断材料もないことが歯痒くて苦しかった。

そうしてざわつく感覚が最高潮にまで高まった頃、ふと思ったのは別のこと。

もしあの人が生きているとして。

それならどうしてここに来ないのだろうか？

私は今もここで生きているのに会いに来てくれないのは、ただ私という存在を必要としていないからなのだろうか？

それはとても悲しいことの気がしたけれど、それならどうして最後のあの日あの人は泣いていたんだろうか？

やはり答えの出ないそんな疑問をぐるぐると頭の中で考えながら目を閉じる。

すると少しだけ眠気が襲ってきたけれど、不思議と眠る気にはなれなかった。

閉じた視界の中で見えるのはただひたすらの闇と、ちかちかと光る光の残滓。先程視界の端に映っていた星の光だろうか。そういえばもう夜になっていたのかと思えば再度溜息をつきなくなった。何だか最近夜にはかり行動している気がする。

ああ、お風呂にも入ってなかった……少しだけべたつく身体に眉を顰めたが、それでも立ち上がる気力が沸き起こらない。うだうだと何度か寝返りを打ち窓の外とドアを交互に見ながら起き上がるき

っかけを見つげようとすると、しんと静まり返った空気の中でお風呂のために立ち上がるのが馬鹿馬鹿しく感じられたので止めた。

何の気配も感じられないドアの向こうにいるであろうヴァノッサとビーは一体どうしているだろうか。特に何も話さないままにここで眠ってしまったからビーはともかくヴァノッサは困っているのではないだろうか。皇帝がご飯を作れるとも思えないし。

ビーなら少なくとも飢えることはないだろう、ノースポートに行けば魚がたくさんあるんだし。

「……ビー」

軽い気持ちであの灰猫のことを考えて、一気に気持ちが沈んだ。

不死掛けという言葉が嫌でも脳裏に浮かぶ。

ちらりと向けた視線の先にある真っ白な本の中にも書かれていない禁術のスペルを思い出し、その言葉がもたらす影響に身体を震わせた。身体の芯まで凍るような寒気に、足元にある毛布を手繰り寄せ深くかぶる。それでも消えない寒気は何でもない、大丈夫という言葉でかき消した。

二度と使わないと堅く心に誓った魔術を背負ったあの猫は一体そのことについてどう思っているんだろう。

そう考えると名前を呼ばずにはいられなくて、吐き出す息と共に灰猫の名前を呼んだ。

呼べばいつだって来てくれたあの猫は今も来てくれるんだろうか……そんな風に考えながら、心のどこかで来てくれなくていいとも思った。いつだって離れていて私をひたすら憎んでくれればこの罪の重さを何度だって確認できる。けれどあの猫はいつだって優しくてだからこそ忘れてしまうのだ、この痛みを。

誰が悪いわけじゃない、悪いのは私なのにどこか責めるような心の声でビーのことを思った。

すると。

「呼んだ？」

一体どこにいたんだろうか？

呼ばれたことを知った風のビーの声がドアの向こうから聞こえてきて、そこで初めて私は身を起こした。

魔術を使うことなく、自分の足で歩いて行ってドアを開ける。すると自分の視線よりずっと低いところにいたビーがするりとドアの隙間から入り込んできて足元に擦り寄ってきた。

そのやや熱いと言えなくもない高い体温を抱き上げると、にやあと鳴いたビーが頬擦りする。ふさふさとした柔らかな感触にまた涙が出そうになった。甘えるような態度は私を慮ってのことなのか、それとも昨日の夜から話をするのがなかったからなのか。もしかしたら両方かもしれないけれどそれはどうでもいい。

ただ、やっぱり私はビーに来てほしかったのだと思えるほどに嬉しさが込み上げてきて、ぎゅっとその身体を抱きしめた。人間にはないこの体温が何よりも心地良く、長い間何度も何度も触れたこの感触が誰に触れることよりも安心できた。

冷えた空気の中でただそこだけが温かいのだと感じさせてくれる体温に同じように頬擦りをして、私はそれでもどこにいたの？と呆れたように返す。

決して来てくれたのねとは言えなかった。

自分が発した言葉の方がよほど罪深いのだと知っていてもなお。

「レイアの様子がおかしかったから、何回か見に来てたんだよ。なのに全然起きないし」

「そんなに寝てたの？ 私」

「そりゃあもう。触っても叩いても全然起きなくて。そうこうしてたら炎帝まで入ろうとしてきて」

「嘘」

「屋敷中の猫総動員で追い返したのにそれでも起きないし」

まさかヴァノッサに寝顔を見られただなんて失態を犯してしまっただらうかと危惧しているとそれはさすがに防いでくれたらしい。ほっと胸を撫で下ろすがそれでも起きなかった自分に少しショックを受けた。

屋敷中の猫がここに集結して起きないなんてことは今までになかったのだから。それほどまでに疲れていたのだろうかと指先でこめかみを揉んだ。規則正しい鼓動を押しつけるように当てながらビーはもう一度にやあと鳴く。それは多勢に無勢で炎帝を追い返した猫とはとても思えないほどの愛らしさで、高いその声が耳に心地良かった。

ベッドに腰を下ろし膝の上に載せるとそのまま丸まってこちらを見上げてくる金の瞳。どこか心配そうな色を含んだその瞳は何の憤りも恨み悲しみも感じさせない、ただ私を想ってこちらに向けられていた。

それがひどく胸に痛くて、涙が零れる。

どうして怒らないのだろう。

どうして恨まないのだろう。

思えば、不死掛けを終えたその瞬間からこの猫は私が疲れていなか心配する始末だったくらいだし。意味を知らなかったからかもしれないけれど、その意味をちゃんと伝えた後でも怒った様子なんて見せなかった。

幾筋も流れる涙にぎよつとしたビーはそのまま後肢を使って立ち、片方の前肢で頬に触れる。肉球の柔らかい感触が触れると同時に一体どうしたのさ？ という声が耳朶を打つ。

その声はどう答えようかと逡巡していると、囁きですら部屋をすり抜けてテラスに響きそうなほどの静寂の中で凜とした声がもう一度聞こえた。

「また夢でも見たの？」

ああもう、どうしてこの猫は夢を見たせいではないと気付いていてこんなことを訊いてくるのか。

人間ですらこれほどまでに完璧に気を遣うことなどできはしないのに、猫がそれをやってのけている。何だかそれが可笑しかったけれどそれが生きた時間の長さ故だとすると、笑うことなどできなかった。

ふるふると首を振りそつとビーの背中を撫でる。

毛並みを整えるように優しく撫でながら何度か浅い呼吸をし、ようやく言葉を発することができた。

「陛下が　ビリオン様が」

「……うん」

「今も生きていらつしやるかもしれないと、アマンティが言ったの」

あの人の名前を出した瞬間微かに不快そうな色を浮かべたビーはしかし、次に発した言葉に目を見開いた。

「ビーだって気付いていなかったのだろう……私に与えられた魔力とその本能にも近い感覚を持ってしても。」

びくりと身体を震わせたビーを落ち着かせるように何度も撫でながら、私は未だ涙を止めることができないままにぼやけた視界をぎゅつと閉じた。

片頬を撫でる肉球の感触と、片頬を撫でる風の温度差に左右非対称の表情を浮かべているのではないかと錯覚しながら笑う。

「不死掛けを使った者がいるのだと、聞いたわ」

そう、私以外にも愚か者がいたのだと聞いたわ。

そう言いたかったけれど、何かを押し留めようとするようなビーの視線を感じてやめた。

目を閉じていても分かるほどの強さで向けられたその視線は、私
が口を閉ざすと同時に和らぐ。

けれどその一瞬の間について無理矢理気味に言葉を紡いだ。

「三百年前、孤独を恐れた私が死に際の貴方に使った術を、今ビリオン様が受けているの」

「レイア」

「言葉や魔力を与えることなら確かによくあることだわ。でも命を与え枷を嵌めるなど、罪と呼ぶのもおこがましいほど許されないことなのに」

「レイア！」

「なのに私は三百年もそのことに気付かなかった！ 今だって信じられなくて耳を塞いでしまいたいぐらいよ！ あの人がモーリス大陸の地脈を破壊しているだなんてあの頃からは想像もできないもの！」

誰よりも民を愛していたのに。

掠れた声でそう言うのと肉球が頬から離れる感触がしたけれど、目を開けることはできなかった。

怒鳴るように叩きつけた言葉はすべて私の罪であってビーの罪ではないのに、それでも静止しようとする声に負けないほどの大きさを声で響かせた私は一度しゃくり上げてからどうして、と呟いた。

どれだけ涙を流しても、自分を罪を言葉にしても何も変わりはないのに。

それでも口にはいられない。

「どうしてあの人……」

生きているの？ 地脈を破壊しているの？

色々な意味で発した言葉に、はあと息をつく。

その息があまりにも震えているので何だかとても笑いたくなくなった。

私に言われる筋合いではないだろう、きつと。

不死掛けを一度でも使った私はあの人が生きているからといって誰かを責める資格などありはしない。そう、例えあの人に不死掛けを使った者を目の当たりにしても。それだけではないのだと思う。ここまで考えて私はあの人を本当に生きていることを心のどこかで信じているのだと気がついた。生きていくはずがない、ありえないと言いつつも今心の中ではどうしてあの人が生きているのかとそればかり考えている。

……ああ、きつとビーがいるからだわ。ありえないことなどないのだとその身で証明する存在が目の前にいて、ありえないなどと言えないわけがないのだから。そう考えて、私はふと以前からずっと訊きたいと思っていたことを今こそ訊いてしまいたいと思った。我ながら情緒不安定だと思える今でないと、きつとお酒を飲んだとして

も勢いで尋ねることはできないことだから。

こちらをじっと見上げる金の双眸を見下ろしながら、私はビーを撫でる手を止めた。

そうして一体何て訊こうかと少しの間逡巡してから一番端的な言葉で尋ねる。

遠くで一度だけ猫の鳴き声が響いたからその声が止むのを待って、再び屋敷中が静寂に包まれてから。

「ねえ、ビー」

「なに？」

「死にたい？」

自分がずつと訊きたかったことを、できる限り何でもない風を装って訊く。

あまりにもさらりと口にした言葉はしかし、たくさんの逡巡を持って発されたものだったのだけれど。それでもできることなら私が何も思わずそう訊いたのだと思っただけでほしいと願った。

三百年前。病気を患って死の淵に立たされていたビーに、一人になりたくない強く願った。そうして私は自分で不死掛けの術を生み出して、その魂を縛りつけた。私に代償なんて何もなかった。ただ少し疲れただけで、それだけだった。けれどビーはそのせいで私に死なない限り決して死ねない身体になった。代償を負ったのは、被害者であるビーだけ。

本当ならば私が背負うべき代償をこの小さな身体に背負わせてしまったのに、ビーは後先考えない性格だなあと笑っただけだった。本当に、ただそれだけだった。

でも、あの頃を含め今も。

ビーは死にたいと願わなかったのだろうか……ただの一度も。

あまりに穏やかな日々が不死掛けのことすら忘れていたのに、今

更こんな風に尋ねるのは卑怯だと分かっていた。そして死にたいと言われてもきつと私はその術を解く勇気を持ってないのも分かっていた、そう尋ねた。

それでも訊いておきたくて、私は目を閉じたままじつと答えを待つ。

甘えたような声で返事をしたビーは、私の問いに長い間答えることはなかった。ただもう一度遠くで聞こえた猫の声だけが耳朶を打ち、目の前にいる猫の声は聞こえない。代わりに、ぺちんとどことなく間抜けな音がした。同時に微かな痛みを頬に感じて、思わず目を開ける。するとそこには今まで見たこともないほどに怒ったビーの顔が見えた。

「二度は言わない」

「……」

「不死掛けは僕が願ったも同然だし、そう願ったことを一度だって後悔したことはない。だから」

次同じこと訊いたら怒るからね、と言ったビーの顔は真実怒っていて。

予想外の反応に私は面食らうと同時に勢いに押され、はいと答えていた。

するとビーは満面の笑みを浮かべてよろしいと言った後目を閉じてと言った。……目を閉じて？ 意味が分からないままにそれでももう一度言われて渋々目を閉じると、一瞬胸に重みを感じ次の瞬間唇に温かい感触を感じ驚きで目を開けた。

その時にはすでにその感触は消えていたけど、いたずらを画策する子供のような目でこちらを見て笑うビーに声を上げる。

「ちょ、ビー！？」

「なーに？」

「意味分かってないでしょう！」

「分かってるもーん」

いや、別に猫に口付けをされたからといってどうこう言うのもお

かした気はするのだけれど、でも何というかとりあえず文句を言っておきたかったというか。ぐるぐると混乱しながらそう言うつとビーは笑いながら膝から飛び降り、とことことドアへと向かって歩いていく。その楽しげな声に釣られて立ち上がったところで。

「ねえ、レイア」

「何？」

「あいつが生きていたとして、レイアはあいつに会いたい？」

そう尋ねられて、はっとした。

そうしてビーにとってはあの人が生きてるか生きていないかなど関係はないのだと気がつく。きつとビーに大事なものは私があの人に会いたいか会いたくないか、それだけなのだろう。だからこそそうストリートに尋ねるのだと思う。

けれど私はそこに重点を置いて考えていなかったから、分からないと答える。会いたいか会いたくないかだなんて、全然考えていなかった。会いに来てくれないのなら会いたくないのだろうと決めつけて、そこで終わっていたから。

……でも。

会いに来てくれないのはともかくとして、私が会いに行くという道があることによく気付いて私は考えこむ。

花月がそつと照らす半身を見下ろしながら、心に問いかけた。

私はあの人に会いたいの？ と。

もちろん答えを出すのは私なのだから問いかける行為自体が無駄なのかもしれないけれど、それでも形式的にそうしてしまう。それはまるで精霊を召喚する時のようだと思った。

不死掛けで生きているのなら、そんな形で再会なんてしたくない気もしたけれど無視してこの先生生きていくこともできそうになかった。この選択肢を知った以上は。

それに もしまた会うことができるのなら。

あの日の涙の意味を、訊いてみたいと思った。

そしてあの遠い冬の日に何もできなかったことをもう一度詫びた

いと。

だから。

「……会いたい」

会いたいと思う。

事実を知って、地脈を破壊することの意味をとことん教えこんで止めさせたいし、誰かに言われてやっていることであるならその誰かに刃を向けるぐらいのことはしよう。

そうしてあの人に訊こう。

死にたいですか？ と。

そうして死にたいと願ったなら、私は自分の持てる限りの力で不死掛けを解いてあげたいと思った。

素直に口にした言葉に、ビーはそっかと呟いて身体ごとくると振り返る。

そこに不満げな色がないことだけが救いだっただ。

そのことに安堵しながらうん、と頷いた私はそのままビーに近付いていってドアを開ける。動くのが面倒くさいだなんてもう思わなかった、ただあの人に会いたくて……それから。

「ヴァノツサの所に行くてくるわ。そうだ、ビーお腹減ってる？」

「僕？ うん、お腹空いた」

「じゃあ後であれ作るわ、かつおのタタキ」

「本当!？」

「ええ」

もしかしたらしばらく作れないかもしれないから、とは言わなかった。振り返り尋ねると、体全体で喜んでる灰猫の姿が見える。

こちらがこれだけ面倒な事に巻き込まれているのに暢気なものだと思っただけで、口元が綻ぶのは止められない。手を一振りして部屋の外に出ると、にゃあと他の猫の声。

「貴方達はノースポートでもらって頂戴」

さすがに屋敷中の猫にやる分まではない。きっぱりと言うと悲しげに鳴かれたけど、それは気にせずに進んだ。来てくれるのを

待つのではなく、自らの足でヴァノツサに話をしに行くために。

救世主になるという話をしたいわけでもなく、地震を止めてみせましようだなんて断言するわけでもなく、ただ私は私の道を見つけたことをヴァノツサに話しておきたかったから。

とはいえ、アマンティは地脈の破壊を止めたら後は私にもできることなのだと話していた。だからもしも原因が陛下であつたならば、彼を止めることができるのなら。その時は私に持てるすべてで彼の願いを叶えてあげたいと思った。

それが私に僅かでもあの人の存在を見つけさせてくれた、ヴァノツサという私の世界の異分子への最大限の礼だった。

「そろそろ考えはまとまったか？」

「ええ」

そうして。

とりあえずお風呂に入って身綺麗にしてからヴァノツサに与えた部屋の前に立ちドアをノックしようとする、その前に部屋の中から声が聞こえてきた。足音を隠すこともなく歩いてきたから、きつと気付かれていたのだろうと思ひ私は気にすることなく頷いた。

すると微かに床がきしむ音がして、ささやかな足音が近付いてくる。その音を聞きながらあえてドアを開けることをしないでいるときいと音がしてドアが開く。そこから見えた紅蓮の瞳に涙することはもうなかった。

ビーを置いてきたから今は一人でヴァノツサと対峙している私は、軽く息を吸い込んで目の前に立つ彼の瞳を真っ直ぐに見たまま言い放つ。堂々とした声は凜とした響きを持って響き、真っ直ぐにヴァノツサに届いたことだろう。そうであつてくれないと困る。

「精霊達の意見を聞いた後、モーリス大陸へ行こうと思います」

「では」

「勘違いをしないでください。私はただ陛下にお会いしたいだけですから」

「それでも貴女が来ることがこの事態を解決する第一歩だということに変わりはない」

「救世主になどなれなくてもですか？」

真つ直ぐに言い放った言葉に真剣に返されて、私はそれに対して軽口で返す。軽口だけれど、事実を述べる。するとヴァノツサはくつと笑った後で貴女は分かっているのだなと言った。笑いを多分に含んだ楽しい言葉が放つと同時に紅蓮の瞳が細められる。

けれど一体何を分かっているのだろうか。気付いていないことならきつとまだまだあるのだろうとは思っけれど、ヴァノツサに指摘されるようなことは何もいはずだ。

だから慚然とした顔で何をですかと答えると、ヴァノツサはもう一度笑った後で少しだけ声を低くして。

「貴女は決して、民や俺を見捨てるなどということとはしない」

「……決めつけないでください」

「いいや、決めつけてやるさ。これが真実なのだからな」

堂々とそう言うので思わず肩を落としながら答える。

あれだけ拒絶したにも関わらずどうしてそう言いきれたのか。

あまりの自信に呆れることすらできずにいると黒衣を思う様揺らして笑ったヴァノツサは、こちらに向けて手を差し出してきた。

今まで一度も取るものなかった手をなお差し出す心理は分からなかったけれど、それでもヴァノツサは気にした風もなく言った。

「俺と来い、レイアステイ」

取りたいと願った手を、今はまだ取れない。

代わりに私は問うことにした。

真つ直ぐに見据えたままの、怖いほどに真摯な瞳に向けて。

「救世主などなる気はありませんし、私が動いた結果何もできないかもしれません。それでも貴方は、これから私に起こるすべての出来事に責任を持ってくださるのでしょうか」

「当たり前だろう。責任を背負い、一緒に絶望してやる」

「……そうですね。なら、一つだけ約束してください。それで妥協して差し上げます」

どうしてここまで堂々と人の責任を背負うという言葉を使うことができるのだろうか。皇帝であるがゆえ？ それとも他に何か理由でもあるのだろうか。

考えても答えの出ない問いはすぐに頭の端に追いやり、小さく笑って手を差し出した。

ヴァノツサの手を取ることもなく、少しだけ離れた場所に伸ばされた手をじつと見つめる彼に私は。

「もし陛下が生きていたなら、あの人に会わせてください。それが、私が貴方と共に行く条件です」

他の誰かを止めるなんてことは恐らく私にはできないだろう。

けれどももしあの人の原因であつたなら、私に止めることができるかもしれない。

そしてその後には自分の魔力で地脈を癒すことも。

だから私はそう言いながらヴァノツサを見ていた。

自分一人である人を探しに行くという選択肢がないわけではないけれど、それでもこの男に手を伸ばしたのは私が私の道を歩いた結果生まれる副産物を分けてやりたいと思つたからかもしれない。

私を動かすのは陛下の存在唯一つ。

けれどついでにヴァノツサの求める結果を出せるのなら、それで皆満足なのだから問題はないのだと思う。

私の言葉を聞いたヴァノツサは、一度瞠目してから自らの手の位置を微かに動かす。

そうして私の手を取って、その紅蓮の瞳をもう一度こちらに向けながらしっかりと言う。

まるで取引のようなその光景に対する返答はどこまでも真摯で、触れた手の平の熱もどこまでも熱かった。

「承知した」

第十話 月下の約束

初めてここに来た時から随分と長い時間が経ってしまった。
あの人は今でも私を覚えているだろうか。

私は、あの人に会えるのだろうか。

そして　私はあの人に一体何が言えるだろう。

「間違いないわ」

翌日。

開けた場所に立ち四大元素の精霊達を召喚すると、開口一番風の精霊がそう言った。

何が、とは言わない。

別に意思の疎通ができているわけではなく、ただ自分達の行動のすべてがこの四大精霊達には筒抜けなのだ知っているから。

何より今炎帝の真正面に立ちこちらを睨みつけてきているアマンティがすべてを彼らに話したのだと知っているから。

だから何も事情を説明せずにそう、とだけ答えた。

溜息のような返事はとても力なかったけれど、確たる答えをもらえたことで少しは胸の中にあるもやもやとしたものが晴れた気がした。宵闇色のドレスを身に纏った私は分不相応なほどに明るい日差しの中で小さく俯き、手を握りしめる。悔しいわけでも悲しいわけでもなかった。けれど歓喜でもない。

答えは確かに手に入れた。けれどその先で何をすればいいのかが分からない。

地脈が破壊されているその場所に行けばいいのだろうか、いくら魔女でもそうそう行ける場所ではないということとは分かっている。

ならばどうすればあの人を見つけられるのか、実は間違いでした
で済む問題であればいいのにと思いつつもそれがありえないことも
分かっていたから解決策を捻り出そうと顔を上げる。

けれど精霊達の顔を見渡したところで答えが出るはずもなく私は
息をついてとりあえず、と声を出す。

「不本意だけれど、鳥を出てモーリスへ行きます。貴方達は」
地脈の復活の際にまた呼ぶかもしれない。

そう言おうとすると気がざわつく。

それは困惑でも考え込んでいる風でもなく、ただどうしてそんな
ことを言おうとするのかという不満の色を持つてる。

頬を髪を撫でる風の強さが微妙に変わるのを感じながらそれでも
何も言わずにいると、炎の精霊 ガラナがゆらりと揺れる陽炎の
中小さく口を開く。

「俺達は嬢ちゃんに行く。これは世界の問題であると同時に、我ら
精霊すべての問題だ」

そして水の精霊マーグリスも地にばたりと水滴を垂らしながら微
笑む。

性質のせいでガラナとは近づけないように随分と離れた所からだ
つたけれど、それを気にするでもなくただ柔らかい笑みをガラナと
私に向けて。

「僕達皆、ガラナの意見と相違ありません。ねえ、エイミー？ そ
れにアマンテイ」

「ええ」

「置いて行くだなんて許さなくてよ小娘」

付いて行くも何も世界を構成する元素である彼らは私が行くどこ
にでもいるのだろうけれど。

それでもこうして目に見える形で傍にいて言ってくれた。

ふわりと浮かんで笑んだエイミーと仁王立ちで言い放ったアマン
テイを見つめ、呆れたように小さく笑う。

そうして後ろを振り返り、少し遠くに立つヴァノッサにいいです

か？ という意思を籠めて視線を向ける。

すると彼は手をひらりと振って構わないと唇だけを動かした。どことなく偉そうに見えないこともないその態度に何か文句を言いたい気分になったけれど、何だか彼らしい気がして結局は苦笑混じりに頷くだけに留める。

その時目の前の屋敷で猫がにやあと鳴いた気がして、顔を上げた。

精霊達はこれで問題ない。

なら後は。

「ビー！」

ビーだけだ。

彼が来るにしても来ないにしても話だけはしておきたい。

たとえば私がこの道を選ぶことを彼が知っているとしても。

屋敷の中に聞こえるように声を張り上げると、一階のテラスの手すりにしなやかな動きで灰猫が現れた。召喚なんてしなくてもいつだってただ呼ぶだけで現れてくれるその灰猫は金の瞳を静かに向けるのみで、何も言わない。そう、いつだって私が何か言わなくてはならない時にあの猫は黙ったままだ静かにこちらを見ているのだ。目を細めその静かな瞳を見つめながら言う。

「私はヴァノツサと共にモリスへ行くわ」

そうして満足気な色を浮かべるヴァノツサを尻目にビーの返答を待つと、小さく尻尾を振ったビーは唇だけをそう、と動かした。

遠くてもちゃんと見える動きで答えた灰猫はそのまま何も言わない。

失望されただろうか？ あれだけ炎帝を帰そう帰そうと話していたのに、と。

それならばもうどうしようもない。

言い訳なんてする余地のないほどに手の平を返したような自分の結論はあまり好きではないから。

でも。

「僕も行くよ」

「え？」

「精霊達がいるからって、炎帝が危なくないなんて証明にはならないから。だから僕も行く」

「……レイアステイといいその猫といい、どこまでも俺を危険人物にしたいみたいだな」

「したいんじゃないくて危険人物そのものなんだよ。自覚ないの？」

絞り出すような声に目を丸くしているとビーの真っ直ぐな目がヴァノツサを射抜くように向けられる。

けれどヴァノツサはそんな瞳は意に介さずに、軽く青筋を立てて「この……っ！」と言いながらもじゃれあうようにビーの首根っこを掴む。

どこからどう見ても仲の良さそうな一人と一匹の姿にエイミーがぷつと吹き出した。

「要するに皆行くのね」

「……そうみたいね」

笑い混じりの声にそう答えると、エイミーはもう一度吹き出してそれからレイアステイ様、と囁いた。

彼女の創り出す風によって届けられたその小さな声に顔を上げると、自分よりずっと上に浮かんでいるエイミーが綺麗に笑む。

「私達精霊は皆三百年前の誓約を放棄することなく、どこまでも貴女と共に在ります。そのことをお忘れにならないでくださいませ」

「……ずっと気になっていたんだけど、そもそも私にはそこから分からないわ。大体誓約なんて貴女達が無理矢理させたようなものじゃない」

「あら、だって私達レイアステイ様がよかったですもの」
「だからどうして」

何度問いを向けても決して答えを返してくれなかった風の精霊は、今回もその例に漏れず透明な笑みを崩すことなくそれは秘密です、と人差し指を唇に押し当てて片目をぱちんと瞑りながらすうっと消えていった。絶世の美女と言っても通用しそうなほどに綺麗な彼女

が消えていく姿を見ながら脱力して溜息をつく、エイミーと共に他の精霊達が消えていることに気がついた。

……逃げたのね。

喚べば必ず来てくれるけれど、帰りは自由だから都合が悪くなる
とすぐ逃げられるのが難点かもしれない。

頭を抱えているとじゃれあいを終えたのか、相変わらずビーの首
根っこを掴んだままのヴァノツサがこちらへと歩いてくる。

柔らかな空気に揺られる紅蓮の髪を見つめながら、これからどこ
までも騒がしくなりそうだと思ってもう一度溜息をついた。

そして。

「……やはり目立つな」

「貴方が私にこのままの姿で来いと言うからでしょう」

「その上俺はこんな髪と瞳だしな」

最果ての魔女と勘違いされがちな風貌の私と炎帝の色を濃く持つ
ヴァノツサは、その風貌を隠しめせずにモリス大陸行きの船上に
いた。ノースポートまでは髪を幻影で金に見せていても文句を言わ
れなかったのに、ノースポートからモリスへの船へ乗ろうとした
途端これだ。一体何がしたいのか分からなかったけれど、勢いに押
されるままに幻影を解いたせいで大変なことになった。

腕組みをして溜息をつくヴァノツサに釣られて、私も溜息をつく。
ちなみにヴァノツサの骨折はここに来る前に無理矢理治しておい
た。怪我人だなんて目立つただけだからだ……そしてこの判断は大正
解だったと思う。どの道目立つのだけれど。

甲板に出て溜息をついているヴァノツサの背後で幾人もの人達が
興味深げな視線を向けてくる。

かといって今この場で彼らの記憶を奪って再び幻術をかけるのも
面倒くさくて、結局はヴァノツサと一緒に溜息をつきながら

海を見ていた。

太陽の下だと異質に見えるような宵闇のドレスを潮風に揺らせていると、隣からにやあとという声が聞こえてきて視線を下げる。そこにはやはり太陽の下だと異質に見えるような灰色の猫がちよこんと座している。

さすがに人前だから言葉を話すわけにはいかないかと理解しているのだろう。

きらきらとした金の瞳を向けてくるビーはただ視線だけで訴えかける。

『今日の晩御飯魚だよね？』

……何でこういう話だけちゃんと視線で通じるのか分からないけれど、きつとそう言っている気がする。背後に立つ人達に見えないように小さく頷くとビーの瞳が更に輝いたのが見える。やっぱり意味は合っていたのね。

大体あの後かつおのタタキを食べさせたのに、これ以上何の魚を食べたいと言うのだろうかこの猫は。

「レイアステイ」

溜息をついていると声をかけられて、今度はこちらかと思いがら横を見る。

そうして視線を向けた先では、ヴァノツサが手の平に何かを載せてこちらに差し出している。これは、首飾り？

「これを貴女に」

「……これは？」

「結界解除の効果を持つ首飾りだ。先代炎帝の時代に収集された物の一つだとされている」

ああ、だから屋敷の結界が効果を成さなかったのか。

翡翠のついた首飾りを見てそう思っていると、手を取られた。

自分の手の平の上に乗せられたそれに怪訝な顔を向けると、笑みを含んだ声で返された。

「俺にはもう必要ない。貴女が俺の傍に在る以上」

「私は貴方の傍に在ると言った覚えは」

「結界の中にもう籠もりはしないのだろうか？」

「それは、そうですが……」

「ならやはり必要ないんだ、と言って押し付けられたそれに困惑気味の視線を向けるが、太陽の光を反射する翠が眩しくてすぐに目を逸らす。」

ゆらりと揺れる船に体勢を崩さないようにしながら首を振る。

そしてヴァノツサの手を取り、やはり押しつける形で首飾りを手に乗せた。

理由は分かった。

それなら、私にもこれは必要ない。

「元より私には必要のないものです。有事に備え貴方が持っていてください」

「もしも今回の件に魔力を持つ者が関係するのなら、そしてヴァノツサが首を突っ込もうとしているのなら、これがこの先必要になることがあるかもしれない。結界を使うことは魔導師や魔女の常套手段なのだから。」

「今の今まで私に存在を感じさせもしなかった首飾りだ、役に立たないわけがない。」

両手でぎゅっと握りしめて押しつけると、海の色とは正反対の燃える色の視線と自分の視線が交差する。

「けれどヴァノツサは何も言わずに、ただ手の平を握りしめ首飾りを受け取った。」

「使える物だと知っているからこそ持ってきたのであるうし、他の誰でもなく自らが北の孤島に来た理由が、自分の手でどうにかしたかったという思いとこの首飾りの価値の高さにあることを、彼自身よく分かっているはずだから。」

視線を逸らし海を見つめると、自分の瞳の色とそう違いのない深い蒼が見える。

ゆらゆらと揺れる海面と濃い塩の匂いに目を細め、意外と感慨が

湧かないことに気がついた。思えば海を見るのだって久しぶりなのに、こうして船に乗ることだって外の空気を感じることもあって三百年振りなのに。不思議と懐かしいという気持ちにはなれなかった。

無感情とまではいなくても、ほぼ何も思わない自分を不思議に思っているともう一度ヴァノッサに名前を呼ばれて振り返る。そうして揃いも揃って太陽の下では異質な黒の外套を着込んだ彼に沈黙を返すと、ヴァノッサは珍しく逡巡した表情でこちらを見ていた。何かを言いたそうで、でも言いにくいのか口ごもっている。

……何でもはつきりと言う人だと思っていたのに、意外だった。何ですか？ と先を促すように言うと、その言葉に背を押されたのか重い口を開く。

「レイアステイ、もしも」

「うわあああ！ 何だこりゃ！？」

ただ、その先に言葉が続くことはなかった。

……船員の叫び声と猫の鳴き声が聞こえたせいで。

まさか、と足元でビーが呟くのが聞こえる。

そしてその言葉に何となく事態の予測がついた私は船員の叫びに駆け出した人々を追って駆けていく。階段を下りて下りて、食料庫とも言える狭い空間に出る。そこから人々の後ろに立ち透視の術を使うと、腰を抜かした船員とその上に乗っかる大量の猫が見えた。

どこかで見えたことあるかもしれない、じゃない。

明らかに屋敷にいた猫達の姿に、私はがっくりと肩を落としてビーの首根っこを軽くつまんだ。持ち上げた柔らかかな体と視線の高さを合わせると気まづげに視線を逸らされる。

「ビー」

「……僕悪くないもん」

「あれどうにかして」

「海の上だから無理だよ……」

「まあそれはそうだろうな」

他の人間に聞こえないよう囁いた言葉に対する正論に、ヴァノッ

サも力なく頷く。……ああ、久しぶりに外に出たというのにどうして人様に迷惑をかけないといけないのか。ただでさえ目立つのに、こんな変な事態まで引き起こして……今船に乗っている人間達全員この船旅を忘れにくくなるじゃない。

甘えたような猫の鳴き声は可愛らしくないことはないけれど何せ数が数だ。船員だつて一匹二匹なら可愛がれても何十匹もいたら怖いに違いない。脱力感に溜息が漏れそうになつたけれど、そんなことをしたら自分のせいだと疑われてしまう。実際自分のせいなのかと訊かれると首を傾げてしまうが、かといって疑われるのも嫌だから、興味などないという顔をしてその場を後にした。

そうして船員達が猫を追いかけているうちに夜になり、人々が寝静まる。

波の音だけが聞こえる宵闇に溶けるようにして、再び甲板に立つ。今日は華月しか出ないのか、少しだけ欠けたささやかな月明かりを受けながら夜空を見上げる。

そこには満天の星空、とまではいかなくてもたくさん星が見えた。

すっかり塩の匂いが染み付いたドレスをふわりと翻して手すりに背を預ける。目を閉じると塩の匂いと夜の匂い、そして穏やかな波の音がする。あの清涼な緑の匂いはそこにはなくて、やっぱり私はあの島から出てしまったんだなと思った。

元々孤島の中を歩くこともしなかつたから、あの清涼な匂いがしないことに違和感を覚える。

とはいえ戻ることもできなくて、私は目を開いてもう一度夜空を見上げた。

目に映る華月から目が逸らせない。

『君はあの華月によく似ている。ささやかながらも凜とした光を持

つ、その美しさに人は皆魅了される』

「ビリオン様……」

華月を見て思い出すのは、ただあの人の笑顔。

聞いていて恥ずかしくなるような言葉を満面の笑みで言いながら私に華月の名をくれたあの人は、今どこにいるのだろうか。

生きているのだろうか、それとも死んでいるのだろうか。

もし生きているとしたらどんな想いでこの世界を見ているのだろうか。

……何も分からない。

「貴女は本当に月の下が似合うな」

「ヴァノツサ？」

人の気持ちなどそう簡単に理解できるはずなんてなくて、そのもどかしさに目を閉じる。

するとその間に現れたのか、耳朶を打つ声に目を明けると目の前にヴァノツサがいた。

服装には頓着しないのか、昼間と同じ黒の外套を着込んだまま塩のついた髪の毛を軽く払っている。

闇の中でも映える紅蓮の髪と瞳は太陽の下にいる時よりもずっと鮮やかで。

「……その言葉、そっくりそのままお返しします」

月の下というよりも、宵闇の中が似合う人だと思いつつ返す。

小さく返したその言葉にくく、と笑ったヴァノツサは隣に並び同じく手すりに背を預ける。

船室からヴァノツサが出てきてもビーがいないということは、彼は晩御飯を食べ過ぎてすっかり夢の中なのだろう。大量に船に乗り込んだ猫達も、夜行性にも関わらず今は寝静まっているに違いない。王たるビーの存在が感じられることに安堵して。

そしてファルガスタの民も、ヴァノツサが戻ればその存在に安堵してぐっすりと眠ることができるだろうか。……地震の恐怖すら超えて。

きつとそんなことはないのだろうけれど、ヴァノツサがいるのではないのではまた違うのだろうということとは分かる。けれど私はそれに関して触れることなく別のことを口にした。

「昼間」

「？」

「何か言いかけてませんでしたか？」

「……ああ」

あの時は猫達に邪魔されて聞けなかったけれど、ヴァノツサは何を言おうとしていたのか。

そう思い尋ねると彼は珍しくぼんやりとした視線を夜空に向けて答えた。

「もしもいつか、救世主など必要のない時が来たら、その時はただ貴女を救世主ではなくレイアステイとして見たいと。それから、少しの下心も計算もなく、ただ普通に話がしてみたいと思っていた」

「……」

「地脈が破壊されている原因が何にせよ、すべてが終われば貴女はまた北の孤島に帰るだろう。その時はたまにでいい またこうして会いに来て構わないだろうか」

問われた言葉に軽く目を見開く。

隣に立つのは確かにヴァノツサなのに、どうしてだろうか……まったくの別人に、強すぎる視線を持つ炎帝ではなくただの人間に見えた。

弱々しいというわけではない。

けれどこの男もただの人間だったんだという当たり前の認識を今更ながらにさせられて、私は小さく笑いながら貴方はと返す。

「本当にどこまでも変わった人間ですね」

「魔女のくせに人間より優しい貴女に言われたくはない」

「……私は優しくありませんよ」

「いや、優しいな。それでいて甘くない　それで、俺にここまで言わせて返事はなしか？　レイアステイ」

何て偉そうな。

一瞬でも普通の人間に見えたのは私の目が悪くなったせいかしら。口の端を吊り上げてこちらを見るヴァノツサは再び力を取り戻す。その姿を見て、内心で可愛げもないことを呟きながら。

「構いませんよ。その時はお茶ぐらい入れて差し上げます」

そう答えると、ヴァノツサは破顔一笑してそうかと答えた。

まるで子供のような無邪気な顔と本当に嬉しそうな声に目を丸くしていると、もう一つ頼みがあると続ける。

……まだあるのか。

「ファルガスタへ帰還し次第、俺は炎帝となる。だがどうか貴女だけは俺の名を覚えておいてほしい」

「……名、ですか？」

「そうだ。もう誰も、あの国で俺の名を呼ぶ者などいないからな」

だからどうか貴女だけは、俺の名を呼んでくれ。

そう言ったヴァノツサの顔は笑っているのに、なぜか私には泣き出す直前のものに見えた。

その顔を見ていると居ても立ってもいられなくなって。

私はぱちんとはたくようにヴァノツサの頬に強く触れてから、軽く息を吸う。

すると体中に塩の匂いが入り込んでむせそうになっただけれど我慢する。

「貴方が私を救世主と呼ばないうちは仕方がないから名を呼んで差し上げます。そして私に見せるその弱気な態度も皆には秘密にしておいて差し上げますから、ご安心を」

そして、このどこまでも強い視線を持ちながら変な所で寂しそうな心情をちらつかせる男に向かって挑戦的に笑んでみせる。そうするとヴァノツサは私の言葉や表情に微かに目を丸くしながらも、すぐに口の端を吊り上げてそうかと答えた。そしてさりげなく私の手を取って軽く握り込む。

優しく握られた手を見下ろし、そこではっと我に返る。

どうしてだろうか。

ヴァノッサは私を救世主として利用するためにここにいるのに、私はヴァノッサではなくピリオン様を想ってここにいるのに。

どうして放っておくこともできず、こうして慰めるようにこの男の願いを聞き届けているんだろうか。

触るなと拒絶することもなくただされるがままにされているのだろうか。

「ありがとう」

そしてどうして。

どうしてこんなにも穏やかな気持ちで、囁くようなヴァノッサの言葉を聞いているのだろうか。

きっと、ヴァノッサが珍しく弱音を吐いたせいだ。

そしてきつと、ヴァノッサが救世主としてではなく私個人を見ようとし始めているからだ。

数々の違和感にそう結論付け、それ以上何も言うことなく静かに彼の囁いた言葉を受け止めた。

第十一話 氷の魔女

長きに渡る繁栄を約束された地。

最果ての魔女が護り戦い、炎帝が治めた大国。

のはずが。

「……想像以上、ですね」

これは一体、どういうことだろう。

特に船酔いに悩まされることなく数日の船旅を終えた私達は、無事モーリス大陸へと足を踏み入れた。

港はファルガスタの領地らしく、モーリス大陸の共通語に混ざってファルガスタ独自の訛りが入った言葉が聞こえた。時代が移り変わったせいか、所々私にも分からない言葉が聞こえる。

だがそれよりも。

「……これは」

「これが災害の爪痕だ。城下はこれより更にひどい」

人の体調を崩させるほどの地震が何度も来ているのだ、復興が追いつかないのは予測できていた。

けれどまさかここまでとは。

子供ならいとも簡単に落ちてしまいそうなほどの大きな亀裂が入った道、少しでも押ししたら崩れてしまいそうなほどに傾いだ家々、折れ曲がった木々に落ちた栈橋。

ぼろぼろとしか言いようのない港の姿に、無事な場所などないのではないかと錯覚してしまう。

……いや、事実無事な場所などこの港町のどこにもないのかもしれないけれど。

人々はそれでも日々の営みを忘れるわけにはいかないと感じてい

るのか、声を張り上げて市場に店を構えている。私にはそれだけがこの町の唯一の救いに見えた。

目を閉じれば上空でくると飛び回る海鳥達の甲高い鳴き声に混じって人々の声が聞こえ、それだけなら当たり前の光景を想像できたと違いない。

けれど一度目を開いてしまえば波に挟られ、地に揺さぶられた町が嫌でも目に入った。

吐き出す息が震えているのが分かる。

自分が悪態をついている時にこの場所でどれほどのことが起きていたのか、考えさせられてしまうから。

「行くぞ」

吐息を漏らす私を余所に、ヴァノツサは外套を翻して先へと進む。斬り捨てられたのではないかと思うほどに端的な言葉は、苛立ちを表しているように思える。……これだけのものを、そしてそれ以上のものを目に行っているのであれば仕方のないことだとは思いつけれど、ビーは魚の匂いに釣られたのか、他の猫達とどこかへ消えてしまった。

……もしかしたら彼もこの町の有様を見たくなかったのかも知れない、少なくともただ魚に釣られただけだとは情けないから考えたくなかった。

すっかり塩のついたドレスの上にシヨールを羽織り、ヴァノツサの後へと続く。

コツコツと聞き慣れない足音を響かせながら歩いているとぽつりと低い声。

「貴女が目を背けたものが何であるか、分かったか」

「……貴方が背負っているものが何であるかは分かりました」
けれど私にどうにかできるとも思えない。

そう答えると振り返った背が怒っているように見えた。
いや、きつと怒っているのだろう。

先日船の上で見せた穏やかさからは一変して、今この場に立つヴ

アノツサは焦っているように見えたから。

だからこそ、こうして私を責めるような言葉を吐くのだろう。

そしてその気持ちは分かるから、怒りに怒りで返すことはしなかった。

「結果がどうなるかは分からん。だが全力を尽くせ」

「分かっています。不純な動機とはいえ、地脈破壊の原因を探るために私はここに来たのですから」

原因を探る、というか探っていれば必然的にあの人の情報が得られるからというだけだけれど。

そこまでのことを言うことはないだろう。

ヴァノツサだって分かっているはずだから。

静かに言い放つと少しは落ち着いたのか、深々と息をついた彼はごつごつとした手の平で紅蓮の髪を軽く掻きむしった。店を開く人々は皆彼が炎帝だと気付いているはずだけれど、彼の持つ雰囲気のせいかただ遠巻きに彼を見ている。

「……すまない。貴女を責めるのは筋違いなんだが」

「構いません。この光景を目の当たりにしたら、腹を立てるのも道理」

そして私の持つ銀髪に畏れを感じているのか、少しだけ喧騒が静まっている。

……いつまでもここにいてはいいかないうね。

皇帝が辺境の港町にいてはいいから、彼らにとっては驚きのはずなのに、増してや私がいる。

遠巻きに見たら瞳の色など分からないだろうし、きっと彼らには私が最果ての魔女に見えているはずだから。苛立ちをどうにかして収めようとするヴァノツサの肩に触れ、何度か優しく叩いてから行きましようとする。塩の匂いに混じって微かに魚の焼ける匂いを体に取り入れながらそうして前に進もうとすると、意外だったのかひどく驚いた顔をされた。

「何ですか？」

数歩先に進んだ体を後ろへ振り向けて尋ねるといや、という小さな言葉。

「随分と丸くなったものだなと思った」

「……私は今でも刺々しいつもりですが」

「勘弁してくれ」

あら、貴方からそんな言葉が聞けるだなんて意外です。

そう返そうかと思っただけどげんなりとしたヴァノッサに向けて小さく笑うだけに留め、更に数歩先へと進む。

丸くなった、というのとは少し違うと内心で考える。ただあの人の名前と存在が出てきたことで拒絶できなくなっただけ、ヴァノッサの広げた波紋が大きすぎて逃げ切れなくなっただけだと。

あの人に会いたい。

そのためだけに私はここにいるのだから。

でもそれは。

「だが今でもやはり素直ではないんだな」

「失礼な」

ヴァノッサの希う声に応える形になってしまったことに対する、自分への言い訳のように思えてしまう。

あくまでもヴァノッサのためではない、あの人のためなのだと何度も何度も言い聞かせているような。どうしてそんなことをするのかだなんて、分からないけれど。それでも心の奥底では、ついでにヴァノッサのためになればいいと思っていることを知っているから性質が悪かった。

胸元でかき合わせたシヨールにそつと息を落とす。

すると秋が近いのか少し肌寒い空気が吐息を薄く白色に染めた。

「冬が来る前に、決着が着くといいのですが」

塩の匂いに混ざって、つんと鼻をつく秋の匂いにそう呟くと隣を歩くヴァノッサの紅蓮の髪が軽く上下に揺れた。

「そのために俺達がいる」

振り返りもしないその背中はまだひたすらに真っ直ぐで。

「……全力を尽くせば必ず結果がついてくるわけではなくとも？」
「それでも」

気付けばついそんなことを言っていた。
発したのが意地悪な言葉だと、自分でも分かっていた。

けれど目の前に広がる光景に不安を覚えずにはいられないし、先ほど失礼なことを言われた仕返しでもあった。

第一自分達でどうにかできることだとも思っただけではないのだ。
少なくとも冬までに絶対決着が着けられるとは言いきれない。

なのにどうしてこの人は、こつも真つ直ぐな言葉を発することができるんだろう。

すると様々な想いと共に吐き出した言葉にヴァノツサは即答し、一度言葉を区切ってからこちらを振り返りあの怖いほどに真つ直ぐな目でこちらを射抜いた。

「炎帝である限り、俺にはいついかなる時でも全力を尽くして民を守る義務がある」

そしてやはり怖いほどに真つ直ぐな声で答える。その返答に私はびくりと身を竦ませて、瞬間的に怖いと思った。別にそれはヴァノツサの気迫がどうこうではなくその答えがあまりに若く、青く……そして危ついと感じたからだ。

直感、としか言いようのない気持ちはしかしじわじわと不安と恐怖を織り交せて胸の中を侵していく。

人の身などすぐに朽ちてしまうのに。

心の中で別の自分がそう呟くのがどこか遠くで聞こえた気がした。けれどその先はもう聞こえなくて、私は少し怪訝そうな顔をする。ヴァノツサに向けて小さく首を振りながら結局はそれを忘れることにしてそうですねと呟いた。

そのすぐ後に続けて何か言いたかったのに、その言葉すら忘れて。
「行くぞ」

「……はい。転移の魔術で皇城へ行きますか？　すぐですよ」

「いや。それはもう少し後だ……そうだ、レイアスティ」

「何でしょうか」

「いや、何でもない」

転移した方がきつと早い。

……ビーを置いていく形になるけれど。

自分が言いたい言葉を忘れたままそう提案すると、小さく首を振ってそれから苦しげな表情で呟いたからそれを聞き逃せず尋ねる。けれど彼は私の言葉に弱々しい声を返しただけで。そのあまりの力のなさにますます疑念を感じたけれど彼がすたと歩き出してしまったから、結局それに付いて行くしかなかった。

それからしばらく歩いて、町の入り口付近。

人が多く通るからか町中以上に手入れされたそこにはいつから待っていたのか、銀の鎧を身に纏った騎士達が見えた。

彼らはヴァノツサの姿を見つけるや否やただでさえいい姿勢を更に正し、こちらに駆けて来る。そうして目の前に来て膝を折る。かすかに赤い顔をしているのは、寒さのせいなのだろうか……それとも、皇帝の帰還を心から喜んでいいるからなのだろうか。

けれど第一声を発することができない彼らはただ無言で主の言葉を待つ。

すでに人気のない場所に降りた静寂が濃くなった気がした。

昔とは違う、銀の鎧に身を包んだ騎士達をただ一瞥して それからしつかりと自分の民に紅蓮の瞳を向けながら柔らかく笑う。

「連れてきたぞ。最果ての魔女を」

北風と共に耳朶を打つ低い声は、彼らを安心させようとするかのように柔らかい。

それだけでこの男がどれだけ民を想っているのかが分かったから、私は否定の言葉を口にすることができないまま膝を屈する騎士達を見つめる。

ヴァノツサの言葉に少し体を震わせた彼らは、おずおずと私を見上げる。主の言葉なくして顔を上げることが許されないはずの騎士達。けれどヴァノツサはそうしたことにはこだわらないのか咎める様子はない。もしかしたら私がいけない間に随分変わってしまったのかと思っただけで、顔を上げることさえ許されないなんて決まりがそもそも好きではなかったからそれでいいと思った。

こちらを見上げるいくつもの目はまず私の髪に向けられ、それから瞳に向けられた。

そうして誰もが持ちえぬ銀髪に私が魔女であると改めて確信したのでろう。

モーリス大陸の民らしい空色の瞳をした彼らは若干苦しげな顔を浮かべて、深く深く頭を垂れた。

本当は下げたくもないはずの頭を　　畏怖と嫌悪と、それでも他に縋るものがないから下げる。

それほどまでの状況が目の前に横たわっていること、そして向けられた期待がそれほどまでに大きいことを知って私は彼ら同様苦しい顔を浮かべたくなった。

嫌悪も畏怖も怖くない。

ただ向けられた期待が怖かった。

「最果ての魔女よ」

だから思わず身震いしそうになりながらヴァノツサに視線を向けようとしたら先に名前を呼ばれて　その声に、表情に絶句した。

……何、これ。

「お前は転移の魔術が使えると言ったな」

「……言いました、けど」

「ならば使え。急ぎ城へと戻る」

ああ、さつきから歩いていたのは彼らを見つけるためだったのか。どうしてすぐに皇城へ向かわなかったのが分かって納得いったけれど……でも、それにしても。

風の冷たさなど感じないほどに鋭い声。鋭い視線。

魔女たる私を嫌悪する騎士達と相違のない態度に思わず声を上げそうになって、慌てて自分を律した。

ヴァノツサの態度に対する理由など分からなかったけれど、これが本来の姿なのだと思ったら何も言えない。いくら炎帝と口にしていても実感していなかった……そうだ、この男は皇帝だったのだ。あまりに馴れ馴れしいからつい忘れていた。

でもそれにはあまりに唐突過ぎる。予兆すらないだなんて唐突以外の何者でもない。

だからどうしても困惑することを止められなくて。

「ヴァノツサ……？」

小さく呟くと片眉を上げた彼はふん、と鼻で笑ってから。

「図々しい」

「……え？」

「図々しい、と言ったんだ。魔女とは化け物と聞いていたがどうやら耳が悪いらしいな」

そう、斬り捨てた。

それは隣に立てと言った時のこの男の表情も声もすべて斬り捨てていくような冷たい声で。

だけどもさかヴァノツサ以外の誰にも聞こえないような呟きにここまで言葉の向けられるとは思わなくて。私はかつての炎帝が政務に向ける冷たい視線を思い出しながら、それだけではない嫌悪感に体を竦ませそうになった。

けれど。

このあまりにひどい手の平返しに竦ませる体なんて持ち合わせてはいない。腸の煮えくり返るような衝動に駆られながらもそう思い、これが皇帝としてのヴァノツサなのかと認識すると同時に私は半ば自棄になりながら膝をついていた。

一変した態度、口調、声色。

でももうどうでもよかった。

ただあまりの態度にかちんと来たから、私は膝をつき口の端を浮

かべながら。

「それはそれは、申し訳ございませんでした」

図々しくも慇懃無礼にそう言っただけだ。

その言葉にヴァノッサは顔色一つ変えなかったけれど、騎士達は頬を朱に染めてこちらを睨みつけてきたけれど態度を改める気などなかった。

そちらがその気なら、こちらだって。

子供みたいな意地だと分かってはいたけれどそれでも止められない衝動に突き動かされながら私は目を閉じ、両手の平を空へとかざす。

その不可解な行動に騎士達が剣を向けようとしたけれどそれはヴァノッサが制した。

きつと私がこれからすることを理解していたのだろう。

転移のスペルを心の中で呟きながらふと思う。

……そういえばこのまま皇城に向かったらビーはどうなるんだろう。

心配になって探しに行きたくなかったけれど、でも彼ならきつと私が連れて行くまでもなく追いついてきてくれるだろうと信じて結局目を閉じたままスペルを唱え続ける。

そうして騎士達の小さなどよめきを聞きながら体中の血が逆流するよような感覚を覚えながら薄れる潮風を感じて。

次の瞬間目に見える光景が変わりすぎていないことを、少しだけ願った。

数々のどよめきと共に見えたのは、黒の外套を脱ぎ傍にいた騎士に渡すヴァノッサの姿。

そして手の平を降ろすと同時に強くぶつかる畏怖と嫌悪の視線。

すでに幾人かの人間達に向けられていたその視線を改めて大勢に

向けられながら私は立ち上がり、港町でついた土を軽く払った。それは不敬行為であったけれどそんなことは気にしない。

救世主として召喚された魔女が何をしようとして、きつと誰も気に留めはしないだろうと思ったから。

かつかつと足音を響かせながらヴァノツサは前へと進み、玉座へと腰掛ける。

旅装を着込んだまま玉座に腰掛ける皇帝など聞いたことがないが、かといって着替えの時間など与えてやる気はなかった。

脇へと避け、膝をつく騎士や側近を横目に見つつ動かずにいるとヴァノツサの真正面にいるのは私一人になった。

少しだけ上向いて玉座に座すヴァノツサを見つめる。けれど彼の紅蓮の瞳は私の方など向いてはおらず。

「……よく耐えてくれた」

周囲にいる彼の民にのみ向けられていた。

発せられる言葉はここ数日で聞き慣れてしまった彼らしいと思っていた声。そして厳しそうに見えて柔らかい表情も。

「……まあ、この流れだと私にそれが向けられることはないのだからうけれど。」

小さく口の端を浮かべると、色めき立った者達の怒声が響く。

「陛下の御前で無礼な！」

ええ、そうね。これは不敬行為に違いないでしょう。

でも私とヴァノツサのどちらが不敬なのかしら。

私の内心の眩きも態度も、そして怒声を浴びせる人間達も気にしない様子であくまで淡々とヴァノツサは呟く。

けれど。

「少し手こずったが、最果ての魔女を連れてきた。これでファルガスタも救われよう……ああ、どうやら魔女殿は皇族への頭の下げ方も知らないらしいな」

「……っ」

……そう、そこまで言うのですか貴方は。

気にしてない様子じゃない、気にしてない振りをして思いきり私を攻撃している。

あのと同じ顔をして。 。
先ほど感じていた困惑よりもかちんと来る気持ちが次第に強くなる中。内心でそう呟いた瞬間、私はすつと気持ちが冷えていくのを感じた。

そうか。

あの人と同じ顔をして同じ声をして、でも態度が全然違って、それでいいのだ。似ていたらあの人と混同してしまうから。それに、私はこの男が見せる真つ直ぐな言葉と声と視線に困惑してばかりだったではないか。それならいっそのように嫌悪感を示された方がよほど分かりやすい。

そう考えると怒りと困惑のせいでよく見えていなかった周囲の光景がよく見えてきた。昔何度も膝をついた玉座の間は造りこそ変わっていないかったけれど敷物の色を蒼から黒へと変えており、がらりと印象が変わったように感じられた。

側近達の身に着ける衣服も昔より随分暖かそうに見える。あの頃は薄い衣服を何枚も重ねていたのに、今はそんなことをしなくても暖を得られるらしい。

煉瓦と石で造られた城はやや冷えており、私は怒りの冷めた体を少し抱きしめた後で姿勢を正す。

玉座に座す、唐突に別人に成り代わった男を見る。

少し遠くに見えるその顔はやはり三百年前に見たあの人と瓜二つで、しかしあの人が私に対して決して向けない顔をしていて。

決して向けない声をしていて、決して向けない言葉を発して。悲しくないわけではなかった。動機のすべてはあの人のためにあるけれど、それでも副産物ぐらいでもいいからこの男のほしい未来が得られたらいいなと思っていたぐらいなのだから。

理由はどうあれここまで態度を変えられて悲しくないわけがない。けれど私を守ってくれたあの人はそれゆえに多くの人間達から影

で辛辣な言葉を囁かれた。

今の時代だって、魔女に対する見解は変わっていない。ならば、腹は立つけれどこの男の立ち居地が微妙なものにならないよう、私一人で耐えてもいいと思った。

もちろんそれは。

「貴方が私との約束を違えないうちは全力を尽くしましょう。けれど頭を下げるつもりなど毛頭ない」

私を陛下と会わせてくれるのなら、だ。

そしてこれから私に起きるすべての出来事に責任を持てるというなら。

この件にあの人が関わっているのなら会えるまで、そして違うのならそれが立証されるまで私は自分にできる限りのことをしよう。

とはいえ先ほどは嫌がらせで膝を屈したものの、これ以上あのような真似をする気になれなくて私は口の端を浮かべて精一杯声を上げた。

「私は氷の魔女、レイアスティ。救世主になることを乞われて最果ての島から来た私には頭を下げる義務などなく、むしろ頭を下げるのは貴方のはずだ。王よ」

救世主になるつもりもないくせに、そう虚言を述べて嘲笑を浮かべてやる。

普段使わない口調でそう言った私にヴァノツサは不快そうに目を細めたけれど、それ以上何も言わなかった。

色めき立つ人間達のささやかな怒声を身に浴びながら、ヴァノツサは気付いただろうかと考える。

私が氷の魔女と名乗った意味に、それ以外の名で呼ぶなという牽制に。

名を与える余地など、与えてやらない。

「氷の魔女」

言葉に籠めた意味にヴァノツサは気付いたらしい。

その名を呼ぶに相応しい凍えるような冷たい声で私の二つ名を呼

び、ヴァノツサは私同様嘲笑を浮かべながら。

「我が国のために死力を尽くせ。それがお前に求められるすべてだ」

ああ、何て嫌な顔をしているんだろうかあの男は。

私は心底そう思いながらも顔を上げた。

この銀の髪が、海のような蒼と称された瞳がああ男や側近達にはどう見えているだろうか。

それは分からなかったけれどそれ以上見せてやる気もなくて、私は羽織ったシヨールをふわりと宙に浮かせ側近達に横顔が見えないように自分の周囲に浮かばせた後で。

「御意」

歩くだけで周囲の温度を下げたとさえ言われた私の、自分でも分かるほどに凍えた笑みを　　ヴァノツサだけ見えるように浮かべた。

第十二話 炎のある部屋

人から向けられる冷たい視線も嫌悪も畏怖も、すべて久しぶりのこと。

けれど一度慣れてしまったそれに対して心が動くことはないと思っていた。

なのに。

「……疲れた」

あの男に向けられた言葉や視線にいちいち反応してしまう自分に、疲れた。

「そうか」

凍るような笑みで答えた私に、ヴァノッサはそうとだけ言って立ち上がった。

そうしてきびきびとした動きで玉座から立ち上がった彼は辺りにぐるりと視線を向かわせて、家臣や騎士達を黙らせる。炎を孕んだような視線だけで私が作り出した冷気をすべて溶かしたかのような彼はもう一度、今度は視線の強さを和らげてまるで何かを吟味するようにじっくりと辺りを見渡した。

そしてある一人の騎士に視線を止めて、一度頷く。

「リズ」

少し満足そうに頷きながら視線の先にいる騎士に呼びかけるヴァノッサに釣られてそちらをまじまじと見ると。そこには麦色の髪を刈り込んだ長身の男が一人、ファルガスタの騎士なら誰もが身に着けている銀の鎧を身に纏い立っていた。

勲章も何も付けてない辺り、どのような階級に所属しているのか分からないけれど……ただ。

「魔女殿の世話を頼む」

「……了解致しました」

？。

誰もが嫌がるはずのその役目に顔色一つ変えず頷く姿は、ともすれば魔女を恐れていないようにも見えるけれど。

それは別に恐れていないとかそういうものではない気がした……何となくだけれど。

小さなどよめきの中はつきりと答えたその騎士の声はとても硬質で、感情の波を感じさせない。

魔女であろうと人間であろうと、もしかしたらそれ以外の者が現れてもまったく動揺を見せそうにないほどに完璧な無表情。

……けれど、やはりどこか懐かしくもある違和感しか感じられなくて。

私は騎士の背中を見ながらその違和感の原因を探ろうとしたけれど、ゆっくりと這い上がるように思い出しかけた所でがしゃんという音にはっとした。

リズと呼ばれた騎士が鎧を揺らした音だ。

彼は音をさせながら背筋を直し、主に向けて深く一礼する。

するとそれを見てもう一度満足げに頷いたヴァノツサはこちらに凍えた一瞥を向け。

「冬宮へお連れしろ。魔女殿には炎のある部屋を与える」

そう告げてから、背後にある扉の奥へと消えた。

熱い紅蓮の瞳はどこまでも真っ直ぐで、嘘など微塵も感じさせない。

だから私はもう一体何が本当のヴァノツサの姿なのか分からなくなつて、溜息でもつきたい衝動に駆られたが。

「お、お待ちください陛下！」

「なぜ冬宮へなどと　陛下！？」

冬宮がどこであるのか分からないけれど、次々と家臣や騎士達がヴァノツサを追いかけながらも怒号を上げているのが聞こえてそれ

どころではなくなった。

……一体どこに連れて行かれようとしているんだろうか、私は。

内心不安に感じられながらも慌てた様子で消えていく人間達を送り、そうして最後にたった二人残された私はどうしたものかと騎士を見ようとして。

「陛下の温情に感謝するんだな　魔女ごときが冬宮などと、破格という言葉では済まされない」

「……」

吐き捨てるようにそう言われて、ようやく違和感の原因を理解した。

懐かしすぎて忘れていた。

私は、この騎士に嫌悪されているのね。

穢らわしいものでも見るような目を、言葉を吐くことすら忌々しいといった声を向けられてようやく理解した。嫌悪ならここに来る前にすでに向けられていたというのに気付かなかったのは、そこに畏怖が含まれていないからだ。

魔女や魔道士の存在が絶えて久しい今日び、見たこともない存在に畏怖を感じるのは仕方のないことだろう。

そして人間とは違うその存在に微かに嫌悪し、怯えながらも睨みつけてくるぐらいのことをしても気にはしない。

けれど、一体何をしたらここまで純粋な嫌悪を向けられるのかが分からない。

分からないけれど、答えはきつと得られないだろう　男がいきなり話し出さない限り。

麦色の髪と銀の鎧を小さく揺らしながら勝手に歩き始めた男を見ながらそう考えて、何となくヴァノツサがこの男を選んだ理由が分かった気がした。

そしてこれからどのような扱いを受けるのかも。

だから一度目を閉じた私は玉座の間とは思えないほどに冷えきった空気を体に取り込み、シヨールを肩に掛け直してからゆっくりと

男の後を付いていった。

動き出した時間のあまりの速さに、状況の変化に取り残されないように一瞬だけ覚悟して。

けれど一瞬嫌悪するような態度を見せた後は、やはり感情の波など見せないまま男はすたすたと歩いていく。迷いなく歩くその足取りから五歩ほど離れて歩きながら徐々に見えてきた建造物に目を留めた。

いや、留めたんじゃない……釘付けになったのだ。

「この先は……」

皇城を奥へ奥へと進み、最奥の建物が見えた所で立ち止まる。

そうして何百年の時を経てまなお清らかな純白を失わない建造物を下から上へと見上げていく。

まったく改装しないまま、そしてこの大陸を襲う地震にも負けず建ち続けているらしいそれを見ながら吐息のような声を漏らすと前を行く男が振り返る。

「呆けてないでさっさと歩け」

「……この先にあるのは、月宮ですか」

「？」

咎めるようにそう言われ、けれどそれを無視して尋ねると男は怪訝そうに片眉を上げた。

……どうやら今は月宮だなんて呼び方はしていないらしい。

男の態度にそう気付き、小さく首を振りながら何でもありませんと呟いた。

そうして男を抜かして前を歩く。

一歩ずつ近付くただひたすらに白い建造物。

恐らくここが冬宮だろう……これより奥に何かが建設されたということでなければ。

私としては この先に別の建物があった方がずっとよかったのだけれど。

あの頃と用途が変わっていないければここは……。

「後宮に魔女を入れるだなんて、ヴァノツサは何を考えているのですか」

「魔女の分際で陛下を呼び捨てにするお前の方こそ何を考えているのか知りたいものだな」

無意識に呟いた言葉にそう鋭く切り返されて、そこで初めて自分があの男の名前を呼んだことに気がついた。

あれだけの掌返しをされておきながらまだ名で呼ぶことをやめていないなんて……私だけが約束を守っているようで悔しくて。

それでもあの男、と訂正しない自分に苛立ちを感じた。

苛立ちを振り払うように勢いよく振り向くと、視線の先には無表情をかき消し嫌悪感たつぷりの顔をした騎士の顔。

その顔を見た瞬間一気に疲労感を感じたけれど、同時に安堵も感じていた。

そうよ、このぐらい嫌悪された方がずっと気が楽だ。

あの男みたいに手を伸ばされたら喜ぶ前に困惑してしまう。

だから私は疲労感を感じるほどに嫌な顔をされながらも、口の端を吊り上げて小さく笑った。

たつぷりと嘲りを含んだ笑みで。

嫌われているならとことん嫌われてやればいい。

どうせどう接したってこの男の態度は変わりはないし、言われっぱなしでいるのも癪だった。

だから私は誰もが知っている、誰もが想像している魔女そのものを演じるように口調さえ変えて。

「ヴァノツサがそれを望んだからよ。あの男が私に名を呼ばれることを請うたの」

「……戯言を」

「あら、冬宮に私を置くことがその証明なのではなくて？」

相手が女性なら思わず小娘、と付け加えてしまいそうなのにアマンティそっくりの口調で話すと剣を抜かれそうになって肩を竦める。丁寧な口調から一転した私の言葉など、気に留めていないらし

い。それにしても……どうやらそれなりに忠誠を持たれているようだけれど、だとしたらどうして反感を買ったようなことをするのだろうか、あの男は。

嫌悪の情さえ向けられていなければ思わずお茶でも酌み交わしながらあの男の訳の分からなさや語りを合えそうな気がしたけれど、それは無理な相談なのだろう。

獰猛、という言葉が一番しっくり来るような険しい顔をした男はそれでも主の命令がある手前剣を抜くわけにもいかないのだろう。何度も逡巡しながら柄から手を離れた。

それを見計らってもう一度笑ってやり、背中を向けて今は冬宮と呼ばれる後宮を見上げる。

『月宮という名がどういう意味を持っているか、君は知っているはずだ』

もう一度ここに来ることになるだなんて。

国を出た時には考えもしなかった未来の上に立ち、私は事態の滑稽さに哄笑したい衝動に駆られたけれどそれはぐっと押し留める。

代わりに胸元で手を組み合わせ、その手の冷たさをバネにしてほぼ意地だけで声を出した。

触れた体の冷たさが風の与えるものなのか、それとも血の気が引いていく感覚のせいなのか分からないまま。

決して動揺は見せず、あくまで魔女らしい魔女を演じて。

「もういいわ。帰りなさい　それとも、皇帝以外の男が入ること叶わぬ後宮にて私を監視するのかしら？」

「っ」

きつと今この男は悔しそうな顔をしているに違いない。

からかうように言った私の背に、齒噛みするような息が聞こえてきて心の中でそう呟く。

けれどそれを見たら男のプライドはそれこそ完璧に壊されてしまふと思ひ、善意ともいえる思いで振り返るのをやめた。

風を遮る冬宮の入り口に一歩足を踏み入れ、その瞬間ふわりと暖

かい空気が流れたことに軽く目を見開く。建物自体に空気がこもっているという感じではなく、ただ暖炉に火を入れてある、そんな暖かさだった。

そういえば炎のある部屋を与えると聞いていたけれど……そのことなのだろうか。

それとも他に誰かいるのだろうか？ 物音はまったくしないけれど。

不思議に思ってもう一步踏み込もうとする。

「！？」

でもそこで鋭い殺気を感じて、条件反射的に結界を張ったために前には進めなかった。

代わりに、ゆっくりと後ろに振り返る。

結界を張ったのは自分の背後のみ。

それだけで十分だと、知っていたから。

「ちっ」

「何の真似かしら」

舌打ちや甲高い音と共に剣を弾き返した結界を解くと、もう一度今度はぴたりと首筋に刃が当てられる。いとも簡単に人を殺すことのできる冷たさを感じながら、それでも静かに尋ねると男はゆっくりと剣を柄へと戻す。

どうやら下手に不意打ちをかけても私を倒せないことぐらいは理解できたらしい。

騎士らしく背筋を伸ばした男は「警告だ」と言い放った。

予想していたとはいえ、やっぱり謝罪の言葉はない。

「陛下をかどわかそうものなら、容赦はしない」

「あら、その陛下はわざわざ最果ての島まで魔女たる私をかどわかしに来たけれど、それはどうなのかしら？」

「国のためだ。そうでないなら貴様など」

「だとしたら随分と可哀相ね、ヴァノツサも貴方達も。魔女ごときに救われなくちゃならないだなんて」

失礼な。

大体墮とせるものなら墮とそうと思っていたと言っていたのはヴァノツサの方なのに。

少しだけかちんと来てそう返し、本心からの言葉も付け足す。

魔女ごとき、というのとは思っていないことだけれど私ごときに救いを求めないといけないこの国の現状が本当に気の毒だった。

どうせ求めるならもっとやる気のある救世主がいればよかったのだけれど。

ヴァノツサの言うとおり、時間がなかったのだろう。

先ほど刃の触れた首筋にそっと指先を触れさせると、微かにぬるりとした感触を感じた。

痛みは感じなかったけれど、どうやら少し皮を切られたらしい。

寸止めが下手なのか、殺す気満々だったのか……答えは何となく分かっているけれど。

かといってわざわざ治癒のスペルを唱えるほどのものでもなくて私は結局溜息をついただけで首筋から指を離れた。

代わりに、再び剣の柄を握りしめた無感情を装いながらも十分に短気な男の前にその手をかざす。

「私の世話を頼まれているのでしょうか？ せいぜい尽くしなさい」

「っ、誰が！」

「炎帝の命令、でしょ？」

思えばこの男は、私の前だと随分と短気で激情家だ。

背を向けていたら顔を見なくても分かるほどに無感情を装えるくせに、そんなに激昂しないといけないほどの何かが私にあるのだろうか？

……心当たりが多すぎて逆に分からないのだけれど、少なくともそのほとんどは三百年前のものであって今のものではない。

再びくるりと背を向けた私は数歩冬宮の中へ進みながら、徐々に暖かさを増す室内でシヨールをふわりと取る。すると素肌に触れる柔らかな熱が心地良く、更に前に進みたくなっただけれど。

その前に一つ訊いておきたいことがあり、背中を向けたまま尋ねた。

「この中に誰か人は？」

「いるわけがないだろう　第一側室がいるような場所に貴様を置くわけがない」

それもそうだ。

側室なり正妃なりがいるのであれば、私がここに置かれるわけがなかった。

その人達がさながら生贄扱いされてしまう。

だとしたらこの暖かさはヴァノツサが言っていた炎のある部屋から来ているのだろうか。

そうでないなら、誰もいない場所を常に暖かくしているわけでもないでしょうし。疑問に感じながら更に前に進む、すると私がそれ以上話す気はないと理解したのだろう。男は何も言わずに冬宮の外壁に鎧を軽く当て、背を預けた。

どうやら本当に監視する気らしい。予想していたこととはいえ、気が滅入る。

第一、人間のいる場所に来たのも久しぶりなのに四六時中監視されるというのは気分がいいものではない。

だから私は暖かさの元となる部屋を探し、階段を登りながら深く深く溜息をついた。

予想通り、進んだ先にあった部屋には暖炉があり薪がくべられていた。

ぱちぱちと火の爆ぜる音の中、炎に照らされる寝心地の良さそうなベッドや地味だけれど質のよい家具が一通り揃った部屋を見て感嘆の息をついた。

見覚えのある部屋だったからだ。

置かれている家具や寝具はもちろん違うものだったけれど、この場所は覚えている。

一応ここに来るまでに他の部屋も探してみたけれどやはり炎のある部屋はここだけだった。そして、だからこそこの部屋を与えられたことに困惑する。

もしかしたら私のいない間に部屋の持つ意味も変わってしまったのかしら、そうだと思いたい。思わせてほしい。

「まさか皇妃様と同じ部屋になるだなんて……」

額に手を当て、脱力しながらそう言うがその声は暖炉の薪が発する音にかき消されてしまう。

そのことにも何だか疲労感を感じて、そのままベッドに体を預ける。もう立っているのも面倒だった。

体が沈み込んでいきそうなほどに柔らかいベッドに全身を預けて力を抜くと、はぁぁという情けない息が漏れる。

「疲れた……」

がつんと頭を殴りつけられたような眠気が襲う中、一体何なんだと心の中で呟く。

あのリズと呼ばれた騎士に向けられた嫌悪感といいヴァノツサの態度の変わり様といい、一体私が何をしたというんだらう。

冷静になって考えてみればあのヴァノツサの態度はおかしいとしか言い様がないのだけれど、だとしたらどうという理由の元にあんな態度を取ったのかが分からない。

分からないからこそ困惑したし、苛立ちを隠しきれない。

あの島にいた頃のヴァノツサが私を謀っていたということはないとしても、先ほど見せた態度が本心なのだとしたらやはり謀られたような気になるのは当然のこと。こんなことになるんだっただらもう一発魔術を食らわせておくべきだったかと黒い感情に支配されながら、私は頭を何度も打ちつける眠気に負けて目を閉じた。

そして眠りに就く直前の暗闇の中で、あの騎士の姿を思い出す。

きつとあの男はヴァノツサの命令かそれとも自分の意思で、今も

この寒空の下麦色の髪を揺らしながら私がここから出て行かないか、何かしでかさないか見張っているのだろう。

でもそれは徒労としか言い様がなくて、思わず苦笑を漏らす。

だって私はその気になれば転移のスペルを唱えればいいのだし、そうすれば彼は私が出て行ったことにすら気付かないままあの場所に立ちっぱなしの状態になるのだから。

魔女を嫌悪しているのに、誰かに教わったままの魔女を知っているくせにその力に関しては何も知らずの無知であるあの男に今度それを教えてやろうか。

そうすれば今までずっとあの場所で私を監視していたことを悔いるに違いない。

「……」

そこまで考えて、一気に目が冴えた。

今自分がどれだけ性悪なことを考えていたか理解したからだ。

これではヴァノッサの言っていた魔女そのものになってしまう。別にそれが嫌なわけではなかったけれど、この国に来てから、ヴァノッサが態度を変えてからどうにも調子が狂ってしまったことを自覚したのが嫌だった。

今までどれだけ嫌悪されてもあのような態度を取ったことはなかったというのに。

自分の中のあるのかないのか分からないような芯が折れ曲がっていくような感覚を感じて、私はのろのろと手を動かして胸元でぎゅっと握りしめた。

そうして何度かぬるい熱を持った空気を吸い込み、吐き出して何度も心の中で唱える。

惑わされるな、と。

あれだけ求められても救世主になることを拒み続けた頑固さはどこへ行った。

あの頑固さと意地さえあれば、惑わされずに真っ直ぐ立っていることだって難しいことじゃない。

第一ヴァノツサが態度を変えたからといって私まで態度を変えたら、私も共犯者になってしまう。

別に犯罪ではないのだけれどそう思い、もやもやとしていた気持ちが徐々に晴れるのを感じながらもう一度深呼吸した。

力の抜けた体を無理矢理動かして寝返りを打ち、暖炉へと視線を向ける。

そして煉瓦に囲まれてゆらゆらと揺れる炎を見て心を落ち着かせ、何かあった時のために薄く結界を張ってからもう一度目を閉じた。今度はちゃんと眠れそうだった。

「……これは？」

「百年戦争の際に後宮が壊されてからずっと建てずにいたんだけど、そろそろ建ててもいいんじゃないかと宰相に言われてね」

満天の星空の下無理矢理気味に外に連れ出され、まだ秋だというのに冬の訪れを感じさせられるほどの寒さに微かに身を震わせた私がそう呟くと隣に立つ炎帝が小さく笑いながら答えた。

宵闇の中でも映えて見える紅蓮の瞳を柔らかく細めたその人は、瞳同様柔らかい声で言いながら前を見る。

それに釣られて前を見ると、息を呑むほどに綺麗な白。

完成したばかりらしく、中には誰もいなかったけれど姉妹月に照らされて淡く光を放っているように見えるその建物は美しかった。

誰もいないからこそ、無機質な美しさを持つことができたのだろう。そう思えるほどに。

「綺麗ですね……皇妃様もきつとお喜びになりますよ」

「……」

側室のいないこの人が後宮に迎え入れるといたら、やはり皇妃様だろう。

私は頭の中にあのふんわりとした金髪に穏やかな空色の瞳を持つ

女性を思い浮かべて、少しだけ胸が痛くなっただけでもそう言った。

ツヴァイからファルガスタに嫁いでいらっしやっただの日、離れてそれを見ていた私に優しく手を差し伸べてくれたあの人が喜ぶ姿が早く見たくて思わず唇が綻ぶ。

悲しくないと言っただけなら嘘になるけれど、その気持ちを吐露できるような立場ではないことを嫌になるほど理解していた。

だからこそ私はこの人がくれる優しさに勘違いしてはいけないと数歩引いた所に立ちながら何度も何度も心の中で自分を律しているのだから。

どうしてそう思ってしまうのかは分からない。

この人と皇妃様と一緒に歩かれていたのを見て胸が痛くなるのも、悲しくなるのもどうしてだか分からない。

大好きな人達が幸せそうにしているのに、どうしてこんなに切ないのかも。

自分が除け者になったような気がするからだろうか？ でもあの二人は決して私を除け者になんてしないのに。

理解不能な感情を押さえ込んで言った言葉に答える声はない。

いつだって誰にも聞こえそうにないぐらいの呟きだって聞き逃さない人が何も言わないことが不思議で、私は横に立つ自分よりも遙かに身分の高い人を見上げてはっと目を見開いた。

いつから見ていたのだろうか……瞳と同じ紅蓮の髪を秋の夜風に揺らしながらこちらを見るあの人の表情はとても硬かった。そつと指先が頬に触れる。この冷たさの中でもなお体温を失わずにいた自分のそれよりずっと硬い指先をつ、と頬に滑らせたその人は「違うんだ」と小さく首を振った。

「ビリオン様？」

「違うんだ、レイアステイ」

何かを押し隠しているような、けれど隠しきれずに苦しそうな顔をするその人から目を離せないままと声を掛けると、もう一度そう

言ったあの人は今度は指先ではなく手の平を私の頬に触れさせて。

思わずこちらが熱くなりそうなほどに熱い視線を逡巡するように何度か彷徨わせたあの人はそれでもはつきりとした声で言った。

「後宮には、月宮と名付けようと思う」

「月、宮……」

「この名がどういう意味を持っているか、君は知っているはずだ。

華月の魔女」

華月の魔女。

目の前に立つこの人がくれた名を、後宮に付けるということは。

「い、いけません！ それでは心無い者達が貴方を不貞だと！」

「構わない」

「なっ……」

「自分が何をしようとしているのか、私はちゃんと知っている。結果、国中の民に不貞だと言われるのも仕方がないしそれが事実だと理解している」

正妃を排斥、もしくは側室に降格して月の名を持つ私を妃に迎えるということ。

皇帝であれば側室が何人いても誰も気にはしないだろうが、正妃を変えるというのは国の一大事だった。

なぜなら 皇妃様は。

「……百年戦争の後、先代皇帝が築き上げたツヴァイとの親交を壊すおつもりですか」

妃は、自国から選ばれることは滅多にないと聞いたことがある。

そして現炎帝の正妃が先の百年戦争で戦った、西の大国ツヴァイ皇帝の長姫だということも。

親交の証として遣わされた使者とも言える御方をないがしろにするということが、どういうことであるのか分からない人ではないはずだ。

自分よりずっと年上である炎帝の真っ直ぐな瞳を逸らすことがで

きないままに呟くと、彼は一度だけ瞠目して。

「それでも」

政務に向ける冷たさなんて欠片もない、熱い熱い視線で射抜かれる。

こちらの心を溶かそうとするほどの熱さが怖くて後ろに下がろうとしたけれど、軽く腕を捕まれて妨げられた。

それは決して強い力ではなかったけれど、逃げ場がないと理解した瞬間怖くて声を上げそうになる。

「や……っ」

「逃げないでくれ」

すると懇願するようにそう言われ、もがこうとしていた手を止めて一瞬逸らした目を元に戻し 動けなくなった。

今すぐにも泣いてしまおうのではないかと思うような顔が、そこにはあった。

触れたら燃えそうな紅蓮の瞳が何らかの感情で揺れ、そしてようやく頬に触れる手の平が震えていることに気付く。

けれどそれに対して声を上げるより前に、彼が口を開いた。

縦るように抱き寄せられた体が、ひどく痛かった。

「それでも私は」

!?

言葉の続きがかき消されると同時に聞こえてきた甲高い音と境界が傷つけられた感覚に目を見開き飛び起きると、すでに暖炉の炎は燃え尽きたのか濃い暗闇の中に鋭く銀の光が一筋見えた。

同時に、もう一度甲高い音。

月明かりに照らされる銀の光に混ざって見える人影に必死に目を凝らすと、こちらに刃を向けて今にも斬りかかろうとしているのが分かった。

だから、咄嗟に掌を前へ突き出す。

「風姫エイミーの名の下に、風よ！」

四大元素の中で、今最も身近にある存在。

時間差もなく使えるスペルが他に思いつかなくて、私は風の精霊を召喚する。

すると掌がひどく高い熱を持ち、そこに風が集まるのを感じた。球体となりぐるぐると回り続ける風を制御しながらその手を振り上げる。

そして反動転ばないように両足に力を入れ、こちらに剣を向ける影に思いきり振り下ろした。

物を投げつける要領で力一杯風の球を投げると、影は咄嗟に持っていた剣で身を護ろうとしたが……そんなに甘いものじゃないわよ。ただ魔力で編み出した風とは違い、意思ある精霊達の攻撃だ。人間はもとより魔女ですらどうこうできるものではない。

一瞬に満たない時間の中でそう考えている間に、身を護ろうと体の前に突き出した剣は呆気なく折れ影が紙屑のように軽やかに飛んでいく。

「があっ！」

もちろんそんなに爽やかなものでもなんでもなくて強かに壁に体を打ちつけられた影は、低く呻きながら気絶した。

どうやら影の正体は男だったらしく、夜目の利いてきた目に映ったのは随分と大柄な人間だった。

相当強く打ちつけられたのだろう……しばらく意識を取り戻しそうにない。

「……これは」

「さすがは魔女か。俺の出る幕などなかったな」

困惑しながら男を見下ろしていると、後ろからその声を掛けられる。

けれどそこに心配するような響きなどなく、ただ嘲りだけが含まれているのが胸に痛かった。

「何をしに来たのです。護る気がないのなら、後宮に足を踏み入れるべきではないでしょう」

「護ろうとしたら貴様が先に倒したただけだ。もっとも、死んでくれればありがたいと思わなかったわけではないが」

本当に、一体私が何をしたんだ。

自暴自棄になりたい気持ちを抑えきれないままに、吐き捨てるように出て行きなさいと言うと彼は　リズと呼ばれた騎士は肩を疎めるような気配をさせた後で、男を担いで出て行った。

ぱたんと扉が閉じられる音と共に、壁に背中を預けずると座り込む。

今頃になって怖くなったのが、震える体を抑えることができない。がたがたと音を出しそうなほどに震える体をきつく抱きしめて、力の人らない首を動かして窓辺に浮かぶ華月を見上げた。

魔術を使った時特有の熱も先ほどまで持っていたベッドでの熱もすべて消えたただ冷たさだけが体中を支配する中、涙腺が緩むのを必死で押し留める。

戦いに出ることのない生活しか知らない私の無駄に長い人生を、この時ばかりは呪った。

力があればそれでいいというわけではなく、覚悟のない自分に怨嗟の言葉を掛けたと思った。

私がファルガスタに足を踏み入れたことを知っているのはあの場にいた者達しかいないだろう。

港町にいた人間達に姿を見られているが一日二日で追いかけるような距離ではない。

だとしたら私がある前から決められていたことだったのかもかもしれない……もちろん予測でしかないのだけれど。

「……はあ」

深く、息をつく。

そして改めて実感した。

『死んでくれればありがたいと思わなかったわけではないが』

この国のどこにも味方などいないという事実を。
そして、死すら願われているということ。

第十三話 傷ついた世界

『それでも私は
ファルガスタに来てから、毎晩同じ夢を見る。
そして。

「　　つ！　風よ！」
そのたびに結界が傷つく音に目を覚ます。
こんな夜を、あと何度過ごせばいいのだろう。

「気分はどうだ、氷の魔女」

「……………」
ヴァノツサが冬宮へと私を訪ねてきたのは、この国に来てから六日目の昼だった。

我が物顔で後宮へと足を踏み入れた彼は　　本当に我が物なのだけれど　　唯一炎のある部屋へと入るなりそう口にする。

まるで私が毎晩襲われていることなど知らないと言った顔に呆れ混じりに黙り込むと怪訝そうな顔をされたので、小さく首を振っていいえと答えた。

会ったらどう対応しよう、ずっとそう考えていた割にいざヴァノツサを目の前にすると意外と気持ちは冷静だった。

現れたヴァノツサはやはりどこか冷たい表情だったけれど、動揺したりどうしてなんだろうと考えることもない。

気にならないわけではないけれど、心を見透かさないうり分かりはしないのだから。

だから私はあくまで私らしく真っ直ぐ立つたまま自然に答えた。
わざと取り繕って人々の伝承に残る魔女を演じる必要なんてなかったのだ。

その結果発した言葉が人間らしいのか魔女らしいのか判断するのは、あくまで言葉を向けられた相手なのだから。

「音が私の眠りを妨げるもので」

「……音？」

ヴァノツサの後ろにはリズと呼ばれた騎士が、私にしか見えないように口の端を吊り上げているのが見える。

……恐らく、私が毎晩襲われていることなどまったく報告されていないのだろう。

そしてこの期に及んで文句を口にしようと思わないこちらの心情さえ、勘付かかっているに違いない。

毎夜襲撃者を撃退するたびにふらりと現れてはそれを担いで出て行くだけの役立たずの騎士は、しかし悪知恵だけは働くように言えるものなら言ってみると言わんばかりの顔でこちらを見ていた。

小癩な。

「貴方には一生分からない音です」

それでもあの騎士を打ち負かすために、自分は襲われていて夜もおちおち寝れやしらないなどと話すのも癩だった。

いくらヴァノツサの態度に心を動かされまいと決めても、私らしく立っていようと思ってもそれだけは嫌だった。

それに話した瞬間馬鹿にされるのがオチだろう。

まあ、国の威信のためにも襲撃者の元凶ぐらいは突き止めてくれるだろうけれど。突き放すように言うと、不快そうに細められた紅蓮の瞳と視線が合う。

色だけはひどく熱を孕んでいるくせに、今はもうあの最果ての島で見たような熱さはなくただ冷たさだけが垣間見える瞳。

一体何がこの男にそうさせるのかは分からないけれど、訊いたって答えてはくれないだろう。私が今こうして隠し事をしているのと同様に。

けれどそれに卑屈になるのはもうやめたので、視線を合わせるついでにまじまじと顔を見つめる余裕もあった。

するとこの五日間で地震は起きていないものの、やはり政務が溜まっているのかその顔は若干青く……恐らく徹夜をしているのだろう、目の下には薄い隈が見えた。

初めて見た時に着ていた黒の外套は脱ぎ捨て、今は華美とは言いがたいけれどあの外套よりはずつと鮮やかな服を着ている。

少しだけ窮屈そうなそれを身に纏い真っ直ぐに背筋を伸ばしてこちらを見ていたヴァノツサは、やがて諦めたように視線を逸らした。「何かあれば言え。冬宮にいる者に粗相があると知られれば、国の威信に関わる」

「生憎と私はこの国の威信になど興味はありませんし、第一側室でもありませんので、威信に影は落ちないかと」

「後々困る」

「なら壊してしまえばよろしいでしょう。威信や国家間の繋がりを護りたいのなら、このような離れた後宮ではなく貴方が傍に置いて目を光らせておきなさい」

炎帝の側室、もしくは正妃となるならそれはきっと隣国やツヴァイの姫だろう。

なら、今この場で私が傷つけば後々姫君を住まわせる不安要素になる。

この男が心配しているのはそういうことなのだろうと思ったから、思ったままの解決策を口にするのを勘違いしたのか吐き捨てるように。

「お前を傍に置く気などない」

「……何を勘違いしているのか存じませんが、後々の話です。今は私しかいませんし、その私が傷ついたところで威信に影は落ちないし外交問題にもなりはしません」

「ほお、貴女が傷つくようなことがあるとでも？」

「……例えばの話です」
しまった。

吐き捨てられた言葉に短気を起こしてしまったのか、言わなくて

もいいことまで言ってしまった。

ああ、だからビーにも気が短かって怒られるんだわ。

内心で自分を責めながら、片眉を上げて楽しんで言ったヴァノツサに一拍置いて答えると信じていないような声で「そうか」と返された。

その勝利者の笑みに手近な物を投げつけたくなっただけで、いくらなんでもそんなことはできない。

だから私は彼の背後で若干呆れた顔をしている騎士を睨みつけた後で、用件は何ですかと尋ねる。

まさかこの男に限ってただ私の様子を見に来ただけだなんてことはないだろう。

そう思い尋ねた言葉に返ってきたのは実に簡素な言葉だった。

「城下へ降りる気はないか」

「……城下へ？」

「そうだ。状況は港より更に悪いが、お前にはそれを知る義務がある」

何が義務だ、と思ったけれど確かにそれは悪くない。

第一ここに引きこもっていても事態はまったく良くなるし、動きもしないのだ。

城下に出て事態が動く、ということはないだろうけれど何もしいよりいいだろうし……それに気分転換にもなる。

毎晩毎晩襲撃されてさすがに精神的に疲れていた私は、文句を言うことなくヴァノツサの言葉に頷いた。

「分かりました。すぐに行ってまいります」

命令されたからではなく、提案されたものとして受け止めよう。

そう思わなければ何となく悔しかったから。

頷いた私にヴァノツサは満足そうに頷いて。

「三百年も訪れていない地だ、光景も道も随分と変わっていることだろう。魔女が迷子だなんてことにならぬよう、俺が案内しよう」

「今何て？」

「だから、俺も行くと言っている」
ちよつと待つて。

何で貴方も来るの、仮にも皇帝なのに。
壁に寄りかかり艶やかに笑う彼に内心でそう突っ込んだけれど聞
こえるわけもないし、第一聞いてくれるとも思えない。

身綺麗にしているのだろう、昼の日に当たる紅蓮の髪がきらきら
と光る。

元々顔立ちがいい上に持つ色が鮮烈な人だ、それだけで誰かが絵
を描かせてくれと言ってもおかしくはない光景を目の前にしてそれ
でも私は首を振った。

上辺だけの笑顔を見せられて心を動かされるような愚を犯すつも
りはない。

「皇帝は皇帝らしく、城で大人しくしててください」

「相変わらず口の減らない魔女だな……」

「お褒めに預かり光栄です」

「褒めてはいない　だが、随分と」

「？」

「……いや、何でもない」

端的な言葉で斬り捨てながら、それでも余裕を持って小さく笑う
とヴァノツサもどこか楽しそうに笑いながら何かを言いかけ　し
かしすぐに思い留まったのか結局何も言わなかった。

口元に手を当てて、まるで自分が失言を漏らそうとしていたかの
ように舌打ちする。

けれどそれに対して追求をする気もなく、私は「そうですか」
と言いながら扉へ向かって一歩足を踏み出した。

「行きましよう。日が暮れないうちに」

そうして黒のドレスの上に同じ色の外套を着込んだ私はそれを翻
しヴァノツサを見る。

すると彼はどこか虚を突かれたように「……ああ」と頷いてここ
らへ歩いてきた。

その時初めて、私は今五日ぶりに場の空気を先制して掴んだのだと知った。

動揺して、心を揺さぶられていた初日みたいな愚を犯さずにするのだと。

心なしか忌々しそうな顔をしている騎士の顔を見て、ようやく気づいた。

簡単なことだった。

頑固さでも意地でも何でもいいから私らしくあればよかったのだ、気を遣ったり色々考えたりしたからいけなかったのだ。

そうすれば誰にも私を動かせない、操れないし命令もできない。

そんな簡単なことでよかったんだと思うと何だかおかしくて、私は彼と恐らく今も忌々しそうな顔をしているであろう騎士に背を向けて小さく笑いながら扉の向こうへと進んだ。

短気を起こしたり思い悩むことがなくなった分、幾分か心が軽くなり思わず鼻歌でも歌いたくなくなったその時に見えてきた光景はそんな私の気持ちを嘲笑うかのように凄惨だった。

「……何ですか、これは」

「言っただろう。城下は港よりひどいと」

護衛の騎士も連れねずただ二人きりで城下へと降りた私の目に映ったのは、見える限りの亀裂と瓦礫。

世界のすべてが軋んでしまったのでは、と思うほどに傾いた家々に道。

そうして驚きに一歩足を踏み出すたびに亀裂に足を取られそうになる。

それはあまりに深い亀裂だったけれど、その深さよりも亀裂の広さに目を奪われた。

子供ならたやすく体ごと落ちてしまうほどに、大きい。

ばらばらと砂塵が舞うのは、地が脆くなっているからだろう。人々が歩くたびに砂塵が舞うだなんて国で一番道が整備されているであろう城下ではありえないことだ。

歩きながら瓦礫に目を留めると、一番下の層と上の層では石や土の質が違ふことに気がついた。

「直しても直しても壊されていく……」

「そうだ。だからこそ最果ての魔女に救いを求めた。この現状を打破するために」

大人達に怒鳴られながらも、まるで知ったことではないという風にはしゃぎ回る子供達の間をすり抜けて歩いているとヴァノツサの聲が耳朵を打つ。

外套の端を顔に当てて砂塵を吸い込まないようにしていると、服の色が悪かったのかすっかり白っぽくなってしまった。

……こんな状況の中、人々は暮らしているというのか。

いつもあの小綺麗な屋敷にいたせいかわ、どうにも砂塵に慣れずにいると少し進んだ所に仮設のテントが見えた。

髪を隠しているおかげで私の方は誰にも見咎められていないが、ヴァノツサはそうではない。

炎帝の証を堂々と露出したまま歩いているのだから、彼が歩きたびに多くの民が膝をつき頭を垂れる。

服が汚れることなどまるで意に介さず、当たり前だという風に頭を下げる民は畏怖ではなく純粋な尊敬の念からそうしているように見えた。活気があるとはとても言えない凄惨な状況の中、子供達はしゃぎ回る声を希望にして生きる彼らはあまり身綺麗とは言えない風貌でただ平伏する。

隣を見ると、ヴァノツサは凜とした真つ直ぐな表情を民へと向け彼らに状況を尋ねている。

食料について、衣服について、怪我人は出ていないか、新たに崩れた箇所はないかなど。

彼自身にも側近にも騎士にも……私と含め城で安穩と暮らしてい

る者達では分からないことを、そこに暮らす人間に直接訊いていく。
ああ、だからなのか。

「行くぞ」

「……はい」

「？ やけにしおらしいな」

「余計なお世話です」

この男が尊敬の念を抱かれているのは。

どんな人間だって、自分を鑑みてくれる王を選ぶだろう。

手を差し伸べるように人々の意見を聞いていくこの男を、民が選
ばないわけがなかった。

ただ紅蓮の瞳と髪を持っているだけではなかったようね。

その証拠に、ヴァノツサの言葉に答える民の瞳にみるみるうちに
光が戻る。

恐らく地震の前にはあつたであろう、輝きが。

もちろん、民に向ける視線でこの男がどれだけこの国を愛してい
るかは分かっていただけ。

それと同じ分だけ彼は民に愛されている。初代炎帝のように。

そう考えているとヴァノツサが先に進むのが見えただので、私は外
套がずれないように注意しながらゆつくりと歩いていった。

その時、ふとあるものに気がついた。

「？」

振り向くと、そこには先ほどヴァノツサと話していた人間達の姿
しか見えない。

怪訝そうな顔をする彼らから慌てて視線を逸らすものの、やはり
気配は消えない。

透視をすれば見えるのだろうが、どこか死角から私を見ているも
のを感じる。

というか、殺気を隠そうともしない視線がひしひしと伝わってき
て外套越しに伝わった。

だが、民ではないはずだ いくら皇帝と一緒に歩いているから

と行ってそこまで恨まれることはないだろうし。

逆に供を一人も連れていないことの方が問題なのだから、この場に私がいるのは彼らにとつて問題にはならない。

第一彼らは私が魔女であることを知らないのだし。

……だとしたら、毎晩毎晩人の眠りを妨げている例の襲撃者一味か。

思い至った答えにきつと視線を強くして透視のスペルを唱えようとしたら、目の前に柔らかかそうな毛皮が広がった。

「何をしている」

「……別に」

詰問口調でそう言われ、私は小さく返しながら視線が薄れるのを感じた。

どうやらヴァノツサにまで殺気を向ける理由はないらしく、気配ごと消えたようだ。

見上げると迷惑をかけるなどはかりに不快そうな顔をしたヴァノツサと視線が合つて、内心辟易としながら私は彼に背を向けた。

「何でもありません」

「ほお。あれだけの殺気を向けられながら何でもないと切り切れるのか、さすがは魔女殿」

そうして先に進もうとすると、腕を捕まれて耳元にそんな低い声が響いた。

誰にも怪訝に思われないほどの一瞬の出来事に目を丸くしていると、ヴァノツサはすたすた先へと進んでいく。

「付いて来い」

一瞬捕まれた腕に指先で触れるとそこはひどく熱く……そして徐々に触れられた感覚がなぜだかとても懐かしかった。

前へ前へ、皇城から離れていく。

徐々に仮設テントもなくなっていく、人の気配も薄れていく中ひたすら歩いていくと急に開けた場所に出た。

かつては憩いの場として使用されていたのだろうか、わずかな木々が葉を落とし赤や黄の葉がその場所を鮮やかに飾っていた。

だがその木々も変な方向に折れ曲がり、葉も風に揺られて大地の亀裂の中へと消えていく。

荒廃したその光景と先ほどの民の姿にこの地がどれだけ傷ついているかを知った。

それ以上でもそれ以下でもなく、ただその言葉が一番しっくりくるだろう。

でも。

「モーリス大陸のすべてが、こうなっているのですか……」

この地だけではない。

厳密に言えばノースポートもなのだけれど、一番ひどいのはこの大陸だろう。

大陸のすべてが軋み、歪み 瓦解している。

すべての場所を見てきたわけではないし、どこもきちんと見れたわけではないけれどそれでもそう思い眩いた。

ふわり、と風に乗った言葉はヴァノツサの耳朶を打ったのだろうか。

「引きこもりの魔女殿が背中を向けている間に、多くのものを失った地だ」

ええ、そうでしょうとも。

でも何もそこまで言わなくてもいいでしょうに。

第一私が出てきたからといってどうにかなるだなんて保証はないのだし。

港町で言った時には許せた言葉が頭に引っかかって、私はまた短気を起こしそうになりながらもそれをぐっと堪えて広場を見つめた。風が吹くたびに砂塵の舞う、踏みしめれば奈落の底に落ちてしまふいそうなほどに脆い大地。

その痛々しい姿に世界が叫ぶ声が聞こえた気がした。

目を閉じ、魔力の流れを感じようとするとどこかでふつりと途切れた感覚を感じる。

これでは直そうにも直せまい……そして恐らくこれが、地脈が壊された名残。

すっかり砂塵に汚れてしまった外套の裾を握りしめて空を見上げると微かに苦い味がして、そこで自分が唇を噛みしめていることに気がついた。

「魔女殿」

「何ですか」

「結界を張ることはできるか？」

「？」

「俺達の声と姿が見えなくなればそれでいい。できるか？」

ああ、自分の血つてこんな味だったつけとぼんやり考えているとヴァノツサの問いが聞こえてきて視線を戻す。

すると何の気なしに訊きながらも、辺りを警戒した様子の紅蓮の瞳が見えて小さく頷いた。

「できます、けど」

「ならば今すぐ」

けれど、一体何が。

まさか先ほど感じていた殺気の主が近くにいるのかと思いき配を探ったけれど、でもそんなものは微塵も感じられなかった。

むしろまったく人の気配がしない。

だからあまりに唐突な言葉を内心怪訝に感じたけれど、それでも何か考えがあるのだろうかと思いき結界を張る。

普段から自分にかけているものよりも少しだけ大きめの結界を。

スペルは唱えなかった。ただ、心の中でだけ。

それは別に面倒くさかったからではなくて、ヴァノツサが辺りを警戒していたから。

地脈が破壊された名残で大地から魔力の糸を得られそうになかつ

たから、自分自身の魔力を織り込んで作り上げた結界はふわりと乳白色の光を放つ。

「……これで私達の姿も声も感知されないはずです」

突如現れた光に紅蓮の瞳を微かに見開いたヴァノッサにそう呟くと、彼は一度大きく息を吐いてから。

「何で帰らなかった」

「？」

「五日。どうせ襲撃でも受け続けてきたんだろう　なぜ帰らなかった。貴女にはそれができるだけの力があるというのに。一度戻り、またファルガスタへと来ればよかった」

忌々しそうにそう言われて、瞬間頭に血が昇った。

そんなことを言うためだけにわざわざすべての人間達から姿を眩ませる結界を張らせたのか。

確かに思わなかったわけではない。

だが一度帰れば二度と出てこないことは分かっていたし、それでは来た意味がなくなってしまう。

だからこそ私は帰らなかった　帰れなかったのに。

それなのにこの男はなぜ帰らなかったのかと言う。

私にそれを望み、手を差し伸べてまで連れてきた人間が。

「帰ってほしかったのですか」

気づけばそんな言葉を発していた。

結界の中は暖かく、北風の冷たさなどまるで寄せ付けない。

だから私は息をついてから外套を脱ぎ、ふわりと浮かばせる。

けれどそんな結界の暖かさを持ってなお、自分でも驚くほどに冷たい声を発していた。

「今日まで五人の襲撃者と相対しました、それだけで五人。そして命を下した者で最低一人。更にあのリズという騎士で一人」

「……何を」

「少なくとも私は最低七人の人間に死を願われている。確かに安眠するには北の孤島に帰るべきでした。帰り、朝になったら戻るべき

だと。ですが一度戻れば、私は一生あの屋敷から出る気になれないでしょう」

若干乳白色に見える空気の中、吐き捨てるようにそう言うとヴァノツサが息を呑む音が聞こえてきた。

けれどそれには構わず自分よりも頭一つ分高い所にある顔を睨みつけ、続ける。

彼の言うことは正しかったし、ある意味私を心配しているようにも聞こえる。

でも、それでも許せなかった。

「勘違いしないでください」

ヴァノツサの態度の変わりようは、自分の中でそれなりに折り合いを付けたつもりだ。

襲撃者に襲われるのは怖いし本当なら殺す殺されるという世界そのものが遠いものを感じられていたけれど、それでも目の前にいる男に頼る気にはならなかったのはそのせいでもある。

けれど私を求めた事実そのものを覆すようなことを言われたのは、腹立たしくそして悔しかった。

自分の目的を果たすついでとしてでもこの男のために何かをしたと思うた自分に、嫌悪した。

「私は私なりに譲れない想いがあってここにいます。たとえ氷の魔女たる私の存在を知るすべての人に死を願われても、それでも私は、ただ先代炎帝陛下に会いたい気持ちと貴方の手を取った自分を裏切らないためにここにいます」

「……貴女は」

きつと多くの人に死を願われているし、これから先この国にいる限り自分の死を願う人の数は増えていくだろう。

けれど私はあの人が生きているなら会いたかったし、ヴァノツサとの約束を反故にすることもできなかった。

律儀といえばそれまでだけれどただこの男みたいに掌を返すのが嫌だったから。

それに、唯一つだけ。

「ヴァノツサ」

何か言おうとしたヴァノツサを制して名を呼ぶと、肩ほどまでに伸びた髪をびくりと震わせてこちらを見る紅蓮の瞳が見えた。

一瞬動揺しているかのように揺れ、そしてすぐに冷たさを取り戻したその熱い色の瞳に向けて、口元に緩く孤を描かせる。

「貴方は今の今まで私を救世主だと言っていない。だから私も貴方の名を呼び、そしてあの船上で見せた弱さを口外しない。約束は、今も続いているんです」

この男は約束を守っている、それだけは評価してもいい点だった。一步後ろに下がり、背中を向ける。

そうして結界を通して柔らかな熱を得た風を頬に浴びながら、浮かばせた外套を羽織った。

「私は私の想いのためにここにいるのです、貴方の意見など聞きません」

「そうだろうな」

「ですが」

掌を結界に触れさせ、ぱりんと音をさせてゆっくりと壊していく。まるで繭が割れるようにゆっくりと。

そうして結界の割れる音が内部にいる私達にだけ響く中。

「私を求めた貴方がそれを反故にするなら、今晚にでも皇城を離れ自分一人であの人を探しに行きます」

あの人が生きているかもしれないと言われた時、真っ先に頭に浮かんだ道を口にした。

その時ヴァノツサがどんな顔をしているかだなんて知りたくもなかった。

それから私達は特に何も言わないまま、顔を見合わせることもな

いまま仮設テントを訪れ民の状況を一通り見た後で皇城へと戻った。門に入った瞬間すぐにヴァノツサと別れた私はその足ですぐに冬宮へと向かう。

本当ならばあの時すぐに別れば済んだ話なのだけれど、魔導書を冬宮に置きっぱなしにしていたせいでそれができなかった。

それに最後のだから襲撃者を叩きのめして誰が命じたのか訊いてみようとも思ったから。

この五日間はあるのリズという騎士がすぐに連れて行ってしまったから、訊くに訊けなかったし。

訊くだけ訊いたらすぐに出立しよう　どこへ行けばいいのか分からなかったけれど、ここではない場所へ。

「帰ってきたのか」
「ええ、帰ってきました」

すると彼が火の番をしていたのだろうか、部屋に入るとすぐに暖かな暖炉の炎と騎士の姿が見えた。

だから私は舌打ち混じりのその嫌そうな声にきっぱりと答えながら、心の中でもうすぐ出立するけれどと付け足した。

本当なら色々嫌味を言い返しておきたいところだったけれど、それはやめておいた。

第一彼は私が姿を見せると同時に、入れ替わりに部屋を出て行ったから。

色々歩いて疲れていたのかベッドに座り込んだ私は真っ白な魔導書をぱらぱらとめくり、気がつけば寝転がっていた。

窓から空に視線を移せば、夕暮れ時特有の赤を孕んだ空が見える。それがまるでヴァノツサのようで目を閉じた。

どうせまだ夜までは時間がある、そう心の中で呟いて。

最後の仮眠を貪るために少しだけ強めの結界を張り巡らせた。

その日、また同じ夢を見た。

そしてまた同じ所で目が覚めた。

けれどそれは結界が傷ついた音が聞こえたからではなくて。

「？」

ただ何か生温かいものが頬に触れる感触と　結界が切れた音が聞こえたせいだった。

思わず息を呑みそうになりながら反射的に掌を前にかざす。

するとすっかり宵闇の落ちた室内に「落ち着け」という静かな声が響く。

今では聞き慣れた低い声は、ゆっくりと私をベッドに押し倒してそこに影を落とした。

そうして、視界を黒く侵していく。

再び生温かい感触。

ぼたりと唇に落ちた、今日感じたばかりの味にそれが血であるのだと知って私は身を擦る。

瞬間、頭で理解したせいか辺りに血臭が立ち込める　明らかに人間一人分の血がこの部屋に満ちているのだと思わせるほどの強い臭いが。

そして身を擦った影響で横目に血まみれの人間が見えて、強烈な嘔吐感を感じた私は必死にその感覚を飲み込んで声を上げた。

「何を　！」

「ああ、すまない……慌てていたので上手く斬れなかった」

「そういう問題ではありません！」

両手首を押さえ込みこちらを覗きこんでくる男は、襲撃者よりもずっと性質が悪かった。

結界は刃の攻撃をも防いでくれるけれど、この男の持つ首飾りの力だけは退けられない。

だから私は暗闇の中でもはっきりと見える男の姿を恨みを籠めて睨みつける。

恐らく私の結界を傷つけ、精霊の生み出す風に飛ばされる予定だ

った男の命を奪った張本人を。

「何てことを……っ！　　ヴァノツサ、貴方という人は！」

「俺が手を下さなければ死んでいたのは貴女だ」

「私には結界があります！　第一殺さずとも生かして捕らえるぐらいのことはできた！」

なぜ、殺したの。

あくまでも冷静なヴァノツサに向けてそう怒鳴りつけ、風の力を借りて乗りかかる体を突き飛ばす。

そうして血だまりの中倒れる襲撃者へと視線を向けるが、そこに命の鼓動を感じることができなくて私は唇を噛みしめる。

強い嘔吐感に膝を屈しそうになりながらも、頬や唇についた血を手の甲で拭い魔導書をこちらに呼び寄せた。

もうここにはいたくなかった。

自分の知っている人間が誰かを殺したという現実には、意識を囚われてしまいそうだったから。

シヨールを羽織ることもしないままにヴァノツサに背を向ける。

そうして本当なら死ぬはずではなかった襲撃者に心の中で黙祷を捧げてから駆け出そうとして　　。

「っ、行くな！」

いつの間にも手の届く所に現れたのか、強い声と力で押さえ込まれて私はもう一度風を使おうとしたけれどその前にベッドに押し倒されていた。

骨の軋む音が聞こえる……きっと私の腕だ。

大きな掌で腕を押さえ込む力が強すぎて、骨が折れてしまいそんなほどに痛い。

痛みと軋みに顔をしかめていると、再び影が視界を侵す。

そうして血臭が蔓延する中、ヴァノツサは炎のような夕日のような　　血のような紅蓮の髪を私の頬に触れさせながら、その瞳で私を真っ直ぐに射抜きながら。

泣きそうな顔でもう一度「行くな」と言い、近かった顔を更に近

づける。

すると頬に少しだけ湿った感触を感じて、血の臭いがするその口付けに私はもう何が何だか分からなくなって不覚にも視界が潤むのを感じていた。

第十四話 胸の裡

勝手に手を伸ばされて手を取って。

勝手に態度を変えられて悩まされて解決して。

そして今度はこれ。

……一体私が何をしたっていつの。

この男は一体、何がしたいの。

頬に触れた唇が少しだけ動き、もう一度口付けられる。

これで血臭がしていなければと思うほどに優しい口付けはしかし、この悲惨な状況のせいで私の混乱に余計に拍車をかけた。

潤む視界をぎゅっと閉じて涙を一筋流すと、眦に唇が触れる。

そうしてゆっくりとした動作で宥めるように触れた唇が離れると、ヴァノツサはやはり緩慢とした動きで顔を離れた。

濃い影に邪魔されてよくは見えないけれど、そこにあるのはやはりどこか泣きそうな表情。

人一人死んでいるというのに、それにはまったく関係なくあくまで別のことで悲しんでいるように見える表情に私は少し愕然とした。私だってヴァノツサを思いきり傷つけたし、人のことは言えないけれど……でも。

魔術で傷つけるのと刃で傷つけるのでは感触が違いすぎると思う。

鍛えられたのだと分かる体躯を持っているぐらいなのだから、剣の鍛錬ぐらいしていたのだろう。

とはいえそれだけで人を斬る感触に慣れるのはいかななものかとぼんやりと考えていたら、微かな囁き声が聞こえてきた。

「……だ」

「え？」

今まで驚きで聞き返すことはあっても、聞こえなくて聞き返すなんてことはそうなかった気がする。

大体私はそれなりに耳がいいしヴァノッサだっていつもしつかりとした発音で話していた。

なのにこれは何だ。

小さすぎる声に思わず聞き返すと、彼は鋭く息を吸い込んで目をぎゅっと閉じた。

そうして視界から私を追い出すと今度はしつかりと。

「貴女は何なんだ……」

心底困惑したような声色でそう言った。

驚きで目を見開くと、それとは対称的にあの紅蓮の瞳を堅く閉じているヴァノッサがよく見える。

人払いをしているのか襲撃者が出たというのにいつもなら出てくる騎士すら来ないこの静かな場所で、彼は続ける。

「命を狙われているからとか言えないのか貴女は」

「どういう、意味ですか」

「命を狙われているから！ 憎悪されているから！ 怖いから！ だから出て行くと言うのなら俺だって許せた！ 精霊達の言う通りなら、貴女が先代の情報を得ようとする限り地震を解決する唯一の希望となることに代わりはないと理解している。この国にいてくれれば心強いが、かといって無理強いする気もなかった！」

「……」

「なのに貴女は、貴女を求めた俺がそれを反故にするなら出て行くと言った……他の理由じゃなくて、何でそんな」

誰からも見えない結界で覆っているわけではない、いつ誰が来るか分からないしあの騎士が隠れて話を聞いているかもしれない。

けれどヴァノッサはそんなことはまるでお構いなしに呟き声から段々と激昂するように声を荒げて言った。

そうして一度紅蓮の髪をかきむしってから、沈黙する私に向けて

再び力なく言ってから溜息をつく。

激情を吐き出した彼が静かに開いた瞳に困惑する自分が映っているのが見える。

首飾りによって結界の効力を完全に失われ、こうして無防備な状態で相手の瞳に映る自分が見えるほどの至近距離にいて、それでもなお私にはヴァノツサが何が言いたいのか分からなかったけれど。

ただそんな中で感じたのは、彼が困惑しているということと私自身への疑問だ。

言われなければ考えなかったけれど、言われてみると確かに不思議かもしれない。

北の孤島に帰りたいと思わなかったわけではないし、かといって帰ったら二度と出てこないことが分かっているから帰れなかった。

でもこの国を離れて単独であるの人を探しに行こうという考えは今日までまったく考えもしなかったのだ。

初めにあの人の存在を知った時は迷わずそうしようと思っていたのに、どうしてだろう。

こちらを見下ろし、かといって身を起こすわけでもないヴァノツサの視線をぼんやりと見返しながら、先ほど彼の唇が触れた頬が熱いと関係ないことを考えて。

押し倒されているせいで上手く体が動かせない中、頬の熱さを冷やす冷たさを求めて一度ぴくりと動かした指先にふと答えを見つけた気がした。

「きつと」

でも、頭に浮かぶ茫洋としたこの答えを口にするのは躊躇われた。そんなことを言うぐらいなら魔術でこの男を縛りつけ、その間に皇城を去る方がいいのではと。

「きつと、何だ」

からからに乾いた喉に水分を欲しているような、小さくても強く続きを求める声にもう一度逡巡する。

困惑や激情から、徐々に力を取り戻す紅蓮の視線について従いそう

になりながらも何度も逡巡して。

時間に換算したらどれだけになるのか分からないけれど、それでも私からしたら随分長い時間をかけて静かにヴァノツサの求めるものを、従うのではなくあくまで私の意志で与えた。

「きつと、貴方が私を求めなければこの国に来ることはなかったからだと……… 思います、多分」

「曖昧だな」

「ええ。……… けれど、今の所これしか答えを知りません。これしか答えがないと言われればそうかもしれないと思いますし、否定されれば違うのかもしれないと思うでしょう。けれど、私には答えを探す義理もなければ時間も無い」

いつか交わした言葉に似た、けれどまったく逆の立場になりながら言葉を紡ぐとヴァノツサが眉間に皺を寄せる。

それはここ数日で見えた不快そうな表情ではなく、怒っているような拗ねているようなそんな顔だった。

「出て行く気か」

「だからそう言ってるでしょう。まさかもう忘れたのですか？」

「忘れてはいない　いや、忘れたいからそういうことにしておいてくれ」

「……… 何を馬鹿なことを」

相変わらず無茶苦茶な。

けれどどこことなく焦ったような早口でそう言われて、今までこんなことがあつただろうかとふと思う。

慇懃無礼な態度で近付いてきたかと思えば急に誠実になったりもしたけれど、こんな風に焦っているのを見たのは地震があつた時ぐらいだ。

とはいえあの時のように苛立っているわけではなくわざと明るくしようとしている節すら窺えて、それが何だか滑稽だった。

どこか硬質な印象を与える顔立ちにそんなわざとらしい明るさを載せたヴァノツサは、しかし次の瞬間ひどく真剣な表情で。

「今の答えしかないと言えは納得するのか？」
そんなことを訊いてきた。

そうして私の体の動きを制するように両側に置いていた手を更に近付けて置く。

するとヴァノツサの着ている服の感触が肩に触れる。

血がこびりつき、すっかり乾いてしまった彼の衣服を視界の端に捉えながら黙っているのとそれを肯定と捉えたのか「なら」と続ける声がある。

真剣な色を含んだその声は至近距離で聞いたせい、低く甘く私に染み込む。

「それしか答えがないのだと俺が断言する。そして、それが唯一の答えであるなら俺は貴女を強く求める」

……なぜ帰らなかったのかと言ったり、強く求めると言ったり。

結界の中でしかまともに話をしなかったり、結界を壊しているのにこうして普通に話していたり。

この男は、一体。

「一体、貴方は何がしたいんですか……」

心底分からなくて、先ほどのヴァノツサ同様困惑した声を出すとその可笑しかったのかくくつと笑う声が響いた。

そして人より若干長い紅蓮の髪を私の頬に触れさせて、笑いを含んだ声で答える。

「本当に、俺は何がしたいんだろうな」

「……自分でも分かかってないんですか？」

「いや、分かっているさ。分かっているから行動に移した。でも六日もたなかった」

口元に孤を描いて苦笑気味に紡がれた言葉に怪訝な表情を作ってみせる。

六日もたなかった？

あの、掌を返したような態度のことだろうか。
だとしたら一体何が目的であんなことを。

「皇帝らしくあるうと思った。そうして俺が仕方なく、本当に仕方なく魔女に助けを求めたのだからお前達も文句を言うなと態度で示してみせたつもりだった」

「……何でまたそんなことを」

「もしそうでなければ、どこかの馬鹿者どもが俺が魔女に誑かされたのだと吹聴するだろう。それが根も葉もない嘘でも、皆俺でも魔女でもなくその噂を流した者を信じる。そして俺が庇えば庇うほど、貴女の評価が落ちていく」

「まあ、確かに伝承通りの魔女もいましたから……」

「だが貴女は違う。それを知っているのが俺だけだから余計対処に困った。普通に接していれば多くの者に貶められ、命まで狙われるかもしれないと思ったからな」

饒舌に続けられる言葉を聞いて、次第にヴァノツサが何を言わんとしているのか理解できた。

理解はできたのだけれど。

「結局初日から狙われましたけど」

どの道大して変わってはいない。

あの騎士が私に対して言った言葉からしても、ヴァノツサの態度一つではどうにもできない壁というものがあるのは事実だった。

まあ、彼の態度のおかげでまだ被害が少なかったとも言えるのかもしれないけれど。

言い放つと、ヴァノツサがぐりと肩を落とす。

力ないその姿に思わず吹き出しそうになっただけれどそれは我慢して、沈黙で応える。

「本当に馬鹿みたいだ……」

「そうですね」

「貴女は本当に」

「辛口ですか？ ですが、貴方が私に取った態度よりも幾分か可愛げがあると思いますけれど」

「……悪いと思っている」

はつきりと答えてやると更に肩を落とすのが見えて、私は何となくヴァノツサで遊んでいるような気分になる。

そうして彼の謝罪を聞いて、もう一つ言いたかったことを言おうとしたら制された。

「貴女との立ち位置を考えて振り回して、拳句傷つけて出て行かれそうになって……何をしているんだ、俺は」

「更に襲撃者の命を奪ってその魔女を怒らせるわで大変ですな貴方は」

だから返す言葉で言いたいことを言うと、ヴァノツサはそれに対して「後悔はしていない」とはつきり返した。

人を殺しておいて後悔するのは遅すぎる気もするけれど、それすらしないのはどうかと思いきつと睨みつけると静かな視線とかち合った。

「命を奪うということは、命のやり取りをしているということでありならば自分の命が奪われても文句は言えない」

「……ですが」

「それでも命を奪うため刃を取るなら、俺は迷いなくそれを斬り捨てる。ましてやそれが貴女を狙う者なら」

すつと視線を動かしてヴァノツサが血だまりに倒れる襲撃者を見る。

それは決して冷たいだけの視線ではなく、どことなく哀れむような色も含んでいたけれどやはり後悔はしていないのだと思わせるものだった。

「だがもしも貴女が誰かの命が失われることを拒むなら、狙われなければ話が早い」

「無茶なことを。暗に北の孤島に帰れと言っているのですか？」

「違う」

省みもしないというわけではなく、ただ人を斬ってまでも自分が望むものを得る覚悟を持つヴァノツサの視線はどこまでも強くて静かだった。

それはとても残酷なものだと思うけれど、これから先の私に一番必要なものだとも思った。

別に人を傷つけないわけじゃない。

今後もきつと人を殺したりすることはないだろうし、傷つけたら面倒でも治そうとするだろう。ヴァノッサと初めて会った時のように。

けれど、もし。

不死掛けによって生き永らえているビーが眠りを欲したら、私はどうするだろう。

もし予感的中してあの人に不死掛けが使われていたなら私はどうするだろう。

そう考えた時、その状況において一番必要な覚悟が目の前にある気がした。

それでもやはり、襲撃者を殺したヴァノッサへの怒りが消えることはないのだけれど。

睨みつけた視線をそのままにしておく、彼はそれだけは譲れないとしながらも続ける言葉だけは楽しげに。

「俺がここに移民住めばいい」

「……は？」

「もちろん執務をここでするのは無理だが、夜ぐらい共に過ごしてもおかしくはないだろう。何せここは後宮なのだし」

驚く私を見て笑いながら、一度小さく頷いた。

いえ、そこは頷くところではないのだけれど……。

何とか反論しようとする、それを制するように「護りたいなら」と笑い混じりの声が降る。

「傍に置いて目を光らせておけと言ったのは貴女だ」

「お前を傍に置く気などないと言ったのはどこのどなたですか」

「覚えがないな」

白を切るつもりか。

あくまで楽しそうに言うヴァノッサを今一度睨みつけるが、そん

なものまったく効果を為さないらしい。

「レイアステイ」

「……氷の魔女で結構です」

「そうはいかない。それに、どうせ呼ぶなら華月の魔女と呼ぶ」

「いりませ」

「国中から反感を買っても、耐えられるか？」

場の空気を取り込んで自分のものにしながら放ったヴァノッサの言葉は相変わらず残酷だった。

私の過去を知っても手を伸ばした残酷さやいきなり掌を返した残酷さ、そして人の命をいとも簡単に奪う残酷さ。

それらすべてを知っていてもやはり聞いた瞬間酷いことを言う、と心の中で呟く。

挑むようなからかうような言葉は、きつと否定すればあっさりと受け入れてもらえるだろう。

そうして受け入れた後で別の道を探そうと奔走するに違いない私を振り回しながら。

私が傷つかないように、己がどうなってもあくまで己自身の責任で道を選ぶに違いない。

それは私を殺そうとした襲撃者を返り討ちにしたことでも明らかだったし、ヴァノッサはその覚悟をしていた。

さすがにそこまでの覚悟を持つことは今の私には無理だろう。けれど。

「愚問です」

真実は私の中にあり、ヴァノッサの中にもある。

そして今ここにはいないけれどビーだっているのだから、誰に何と言われようと今なら何の問題もなかった。

純粹な嫌悪ならここ数日で受け慣れたし、畏怖を含んだ嫌悪ならもうずっと昔から慣れている。

だからからかうような視線に真っ直ぐなもので返しながら、私も問う。

「ヴァノツサ」

「何だ」

「国中の民から愚帝と呼ばれても、耐えることができますか？」
ヴァノツサがこれからしようとすることは、恐らく私が今口にしたような事態を招くだろう。

魔女に墮とされた愚帝だと口さがない人間達が言つと今からでも予想がつく。

一体誰がどういう教育をしたのかしれないけれど、それだけ悪い印象が魔女という存在について回っているのがこの国の……そして恐らく世界の真実だ。

だからこそ訊いておきたかった。

例え答えが予想できていても、確たる答えがほしかった。

楽しげな色を含んだままのヴァノツサは、口元に緩やかに孤を描いて静かに笑みを刻む。

そうして焼け焦げそうな熱さを湛えた色の瞳を細めて、今度は小さく声を上げて笑った。

「愚問だ」

堂々と答えるヴァノツサの声には、これから先後悔などするものかというほどの強い覚悟が浮かんでいた。

そして彼は今私と同じことを考えていたのか「真実がここにあればいい」と笑う。

まるで憑き物が落ちたかのようにすっきりとした顔のヴァノツサは今度は若干の苦笑を浮かべる。

「六日ももたず、こんな結果になるのなら最初から普通にしておけばよかったんだ」

「まったくです」

「本当は貴女に告げようと思っていた、そうして先に謝罪をしておこうと。だが言えないままだった」

すまない、と続けられた言葉に私はとうとう堪えきれなくなって吹き出す。

そうして笑いの衝動を抑えきれないままにくすくすと笑っている
と、呆気にとられたようなヴァノツサの顔が見えて可笑しくなって
更に笑う。

いつだって場の空気を取り込んで自分の物にしてしまうところも、
あくまで自分の思う方向に話を進めようとするのはいつもと変わら
ない。

けれどあまりにも表情が移り変わっていくのが楽しくて、そして
ヴァノツサも胸の裡では思い悩んでいることがあったのだと思うと
可笑しくて仕方がなかった。

そしてそんな人間が皇帝をしているこの国は大変であり幸福であ
ろうと。

あまりにも滑稽だ、そう思いながら笑い続ける私にヴァノツサは
何て声をかけるべきか悩んでいるようだった。

だから先にこちらから言葉を発す。

「これから私に起きる出来事のすべてに貴方は責任を持つと言いま
したね」

「……言ったが、それが何だ」

「ですがこれはあくまでも私の人生です。ならば貴方は一人で思い
悩まず私に相談する義務があります。私の命が危ういから、私の立
場が危ういから、そんなことを考えて行動に移す前に私に話す義務
があります」

「……」

「そして私も、言いたいことがあれば言えばよかったです。どう
接したらいいか悩んで答えを出す前に、先に文句を言うべきでした」
そう、きつとそうすればよかったのだ。

一人で悩んで勝手に答えを見つけた気になって、その実こうやっ
て安易に振り回される。

けれど誰かと接する限りそれは当たり前前のことで、ならば接する
相手にぶつかればよかったのだ。

北の孤島に来たヴァノツサを追い返そうとした時のように、手を

伸ばされても一線だけは許さなかった意地のよう。

言いたいことをすべて伝えて、それでもなお手を伸ばして拒絶して。

そうして接していけばきつとそれがよかったのだと思った。

今まで深く接してきたあの人やビーや精霊達ともそうして来たように、黙っていないで言いたいことを言えばよかった。

恐らく今の私もヴァノッサのように憑き物が落ちたような顔をしていることだろう。

黙り込んだ彼の顔に小さく笑みが浮かぶのが見えて何となくそう思えた。

「そうだな……それで？俺はもうすべて話したが、貴女はまだ何か言いたそうだな」

「ええ」

そして返された言葉は、実によく私のことを分かっている言葉で。私は素直に答えながらまるでうっとりとするように口元に笑みを刻む。

すると何がおかしかったのかヴァノッサが硬直するのが見えただけれど、それよりもまず。

「とりあえず、色々と言いたいことがあるので覚悟してください」

乾いた音を立ててヴァノッサの頬を張り、この状態で説教をすることもできないので襲撃者を叩くように手配した後、騎士達によって襲撃者が丁重に運ばれるのを見守り。

「そこに座りなさい」

暖炉に火をつけ、宵闇の消えぬベッドに座らせた。

星を見る限りまだ夜は長い。

そしてその長い夜の間のすべてを使い、私はヴァノッサに胸の裡を説教という形でぶつけ続けた。

第十五話 影に見ゆ炎

私の命を護ろうとして別の命を摘み取ったヴァノツサ。

……でも、どうしてそこまでしてくれるのだろうか。

私は自分の目的のために動いているだけで、この国もヴァノツサもついで程度と考えてここに来たのに。

考えても答えなど出るはずもなく、小さく白い息を吐く。

人の気持ちがここまで分からないことなんて、あの人に出会った時以来だった。

翌日からヴァノツサは夜になると必ず私のいる冬宮へとやってきた。た。

今日もその例に漏れず、やってきたヴァノツサはぱちぱちと音を立てながら炎を上げる暖炉の傍に座りどこか不敵に笑いながら。

「誰も彼も、俺がここに来ようとすると目を疑う」

そんなことを言うものだから、呆れながらもそれはそうでしょうと溜息をついた。

「それに貴方は、こともあろうにどこにいるのか分からない襲撃者に向けて宣戦を布告したのですから」

「黒幕が外部の者であるはずがないからな。あの方が早い」

「早いというより、早計です……」

城下の職人に造らせたという木製の椅子をゆらゆらと揺らしながら笑うヴァノツサに向けてもう一度溜息をつきながら言うと、失礼だななどでも言いたげに目を細められた。

けれど失礼も何もあったものではなく、この場合間違はなく私の方が常識的なことを言っている自信があったので謝りはしない。

ヴァノツサが座るものよりも幾分質素な椅子に座り、炎に照らさ

れる紅蓮とそれとは反比例するようにどこか冷たい印象を受ける整った顔を見る。すると浮かべる不敵な笑みよりも疲れの色が濃いのが見て取れて、私も同じく目を細めた。

「溜まっていた政務を一気にこなしているのでしょうか。私の所に来る暇などないのでは？」

「甘いなレイアステイ。どこの世の王も政務を理由に通いを止めることだけはしない」

「……一体どこでそんな無駄な知識を得たのですか、貴方は」
呆れた。

堂々と言い放たれた言葉のあまりの情けなさに思わず頭を抱えたくなっていると、深く椅子に腰掛けたヴァノッサが目を閉じるのが見えた。

暖炉の炎が爆ぜる音にかき消されそうになっているけれど、小さく穏やかな息の音が聞こえる。

……このまま眠るつもりだろうか。

「そこで寝たら風邪をひきますよ」

「なら貴女のベッドで眠らせてもらえると？」

「……寝具ぐらい用意させればいいでしょう」

「仮にも後宮の一室に？ それこそ愚の骨頂だ」

否定はしない。

ここがどういう場所であるか考えたら、同じ部屋に二つもベッドがあるのはおかしい話だというのは私にも理解できていたから。けれどだからといって皇帝を椅子で寝かせるわけにもいかず。

「私が椅子で寝ます」

「馬鹿を言うな」

「貴方の馬鹿さ加減に比べたら可愛らしいものです」

今日も例に漏れず反論する。

実の所、ここ最近毎晩同じ問答を繰り返すのだが結果はあまり芳しくない。

目を閉じたまま、眠いのか少し力の弱い声で返すヴァノッサに鋭

く返す。

けれどそれに取り合う気はないらしく徐々に深くなっていく呼吸の音に小さく溜息を漏らした。

そして仕方がないからベッドから毛布を引つ張り出し、まだ眠っていないであろうヴァノッサにそっとかける。

このぐらいならこの強情な男も許すらしい。細く目を開いたヴァノッサが小さく笑う気配を感じる。

「穏やかだな」

そしてそう言ったきり、本当に眠りに就いた。

それを胸に留めながら向かいの椅子に腰掛けた私は窓の外の宵闇に視線を向ける。

炎の爆ぜる音、しんと静まり返った冬宮の夜。

暖かな空間に満ちるこの無音とは言えない心地良い静けさは確かに穏やかなのだろう。

けれど。

「……問題はこれからでしょう」

何も解決してはいないし、正直に言うとは始まってもない。

解決したのは私達のぎこちなくも冷たい会話と、お互いの存在を隔てるようにそびえていた壁が少し瓦解したというぐらいだ。

瓦解といえば、まだ地震は止んでいない。いつ来るかも分からない。

ただ分かるのは地震が続けば間違いなくファルガスタの地が墮ちるということだ。

はあ、と息をつき星を見つめる。

そこに見えるささやかな光を見つめながら、私はリズムという騎士に悪態をつかれながら言われた言葉とあの時起きた出来事を思い出していた。

「陛下に何をした」

「……いきなり喧嘩を売ってくるのですね」

「うるさい。貴様が何かしでかしていないというのであれば、陛下のあの態度は何だ」

「自分で考えてみたらどうです。それより少しは仕事をしたらどうですか？ そんな態度だからヴァノツサに怒られるのでは？」

ヴァノツサのいない昼間、外の空気を吸おうとテラスに出た私に向けて下から聞こえてきた言葉はまずそれだった。

見下ろすと麦の色が目に入り嫌でもそれがあのリズという騎士であるということを感じ知らされる。

はぁ、と溜息をつきつつそれでも喧嘩に嫌味で返すと小さく舌打ちが聞こえる。

騎士と呼ぶにはあまりに短気な男はそれでもそれ以上喧嘩腰でも無駄だと思ったのか、話題を変えた。

「氷の魔女に害なす者は、すべてこの国に害なし破滅を望む者と判断す」

「？」

「陛下が朝議でそう仰った 貴様に手を出すなど、堂々とな。そして俺への皮肉をたっぷりと籠められた」

腕組みをしてこちらを睨みつけてくる瞳に怪訝な顔で返す 朝

議？

ほぼすべての臣下が集まる場で何てことを言い出すのだあの男は確かに私を救世主と仮定するなら国に関わる一大事でもあるし、言う場所を間違えているとも思えないけれど。

見えぬ敵に宣戦布告をするなど……どうかしている。リズへの皮肉はともかくとしても。

かといってリズの前で怒ってみせるというのも変な気がして、私はそうですかとだけ返して背中を向ける。

私の死を願うこの騎士からしてみたらヴァノツサの皮肉は苦痛以外の何者でもないだろう。

けれどそれに同情してやる気なんて毛頭ない。

「ならばせいぜい護りなさい。今や、私の身が傷つくことは貴方の身の破滅と同義なのでしょうから」

だから少し大袈裟にそう言っていると、痛いほどの憎しみが籠もった視線をぶつけられた。

ひりひりと焼けつくようなその視線にどうしたものかと一瞬悩んだけれど、結局はそのままの体勢でいよとして一度溜息をついた時。

「それだけならまだいい。だが寵妃とはどういうことだ」

「はい？」

唐突にそんな声が聞こえてきて、私は思わず勢いよく振り返る。

見下ろすと慄然とした、というよりももつどこまでも果てしなく憎んでいますと見た瞬間分かるぐらいに険しい顔のリズと目が合った。

けれど今はそんなことはどうでもいい。本当にどうでもよかった。

「今、何て？」

「だから、陛下が貴様を寵妃として囲うと仰ったんだ。だから毎夜通うことを止めるなど」

いえ、そんなことは初耳でもうどうしたらいいのやら。

憎々しげな声に嫌味で返すこともできず困惑していると、その険しい顔に少しだけ怪訝なものが混ざった。

無理もないだろう、普段なら端的にでも何か言葉を返しているのだから。

銀の鎧が光に照らされ、その反射に目を細めながら私は内心で深く深く溜息をついていた。

……確かに数日前、冬宮に移り住むとヴァノッサは言ったし私もそれに賛同した。それは私を護ると同時に、周囲から誤解をされるという危険を孕んでいたけれどお互いそれを理解した上で決めたのだ。けれどまさか寵妃とは……そこまで言う必要がどこにあったのか。

ただ護るためと言うだけでも誤解をされるし、私は元々そういう意味だと思つて了承したのだ。

第一そこまで言つてしまつたらヴァノツサが結婚できなくなるのではないかと不安になった。普通の女なら問題ない、けれど私は魔女なのだから。随分と物事を大きくしてしまつたヴァノツサにもう一度内心で溜息をつきながら、私は怪訝そうな顔のリスに向けて何を言おうか考えて。

「ヴァノツサは、私以外の女はいらぬと話していたもの」とりあえず自分のせいにしておいた。

こう言えば、この短気な騎士は私がヴァノツサを籠絡させたものだと思つだろう。

そういう意味ではこの男が私を憎んでいるのは好都合だった。

口の端を緩やかに吊り上げ、笑つてみせる。

ヴァノツサみたいに艶やかに笑うことはできなかつたけれどそれでも十分だつたらしい。

微かに固まつたりズの顔に今度はくすりと笑つてみせながらとどめに何か言おうと考え、昔この国の書庫で読んだ歴史書に書かれていた一文を思い出す。

「この世の男は、すべて私の思うがままだもの」

「な　自惚れるな！　俺は貴様に籠絡されたりなどしない！」

「さて……その決意がどこまで保つのかしら」

それはかつて一国の主を籠絡させた魔女が放つた一言。

似たような状況下にいる私からしてみたらおあつらえ向きな言葉だった。

そうして怒りに顔を歪めるリスにもう一度笑つてみせると背を向けられた。

怒りのあまり剣を抜きそうになる騎士の背中を見つめ、小さく苦笑を浮かべた私はそれ以上何も言わず遠ざかる銀の背から目を離し遠く見える城下を見つめる。復旧作業をしているのか、所々で砂煙が上がっていた。きっと、ここからでは見えないけれど活気と幾分

かの焦燥に街は支配されているのだろう。

そんな場所に　もうじきヴァノッサの言葉が浸透する。

そしてそれはきつと、常時よりも大きな力を持って人々の胸を打つだろう。

できることなら浸透しきる前にすべてが解決していればいいのに。そう思うものの、思うほど簡単にどこまでできる問題でもないの。無理だと悟り息をつく。

せめてビーが傍にいてくれればいいのだけど、彼は一体どこで何をしているのか……私がファルガスタに来てから一度も姿を現すことはなかった。

精霊達はともかく、ビーは一体何をしに来たのか。

少しだけ憎らしい気持ちになりながらそう内心でばやいていた時。

「？」

ぐらりと体が傾いて、全身に倦怠感が浸透するのを感じた。

手すりに掴まり、はっと城下に目を向ける。けれどこの冬宮にも城下にも揺れは感じられない。

常ならば地震の数秒ほど前に来る感覚なのにいつまで経っても何も起きなかった。

「……どういうこと？」

ずるずると座り込み、内臓がかき回されているような吐き気に耐える。目を閉じても治まらない眩暈と体の震えを無理矢理に押さえ込みながら呟くと、何か温かいものが全身をすり抜ける感触がして目を見開く。

まるで人間の肉体に触れているかのような温度はしかしすぐに掻き消えて、風のように遠ざかる。

同時に体の不調が消えていることに気付いて私はもう一度どういうこと？ と呟いていた。

一体何が？

ゆっくりと辺りを見渡しても誰もいないし、何も無い。

ただ遠い城下で上がる砂煙が日常を飾るのみだった。

「……はあ」

結局あれは何だったのだろうか、眠るヴァノッサを見ながらも一度考える。

そういえばまだヴァノッサにはあの感覚の話をしていなかった。自分ですら何が何だか分からないものについて話してもいいのかどうか少し悩んだけれど、何も話さないのであとで面倒なことになるしそうな気もする。

明日こそは話そうか。

意識を回想からばちばちと火の爆ぜる暖炉の前へと戻して、私も目を閉じる。

ヴァノッサを椅子で寝かせて、自分はベッドで寝るだなんてことはできない。

うとうとと夢へ向けて意識を手放そうとする中、きいという椅子が軋む音と共に私の名を呼ぶヴァノッサの声が聞こえた気がした。けれどどうせ寝言だろうと思えばそれに返すことはなく、私は今度こそ意識を手放した。

そうして翌日。

目を覚ますと、椅子で寝たはずなのにベッドの中にいた。

「……」
辺りを見渡すと、すでに夜が明けているのかヴァノッサの姿はない。

炎は燃え尽きたらしく火の爆ぜる音は聞こえなかったけれど、まだ温さが残る室内の中に小さな紙切れが見えた。

机の上に置かれたその紙には性格に似合わず丁寧に書かれたと思

える言葉が一言。

『椅子で寝ていたことについては、今晚じっくり聞かせてもらう』

「……貴方に言われたくありませんよ」

私は紙切れにそつと触れ、溜息をつきながら外を見つめる。

そこに見える空はどこまでも青く、この世界に起きている問題などまるで感じさせない。

けれど空と対比する大地には問題が大有りで、私は歩を進めてテラスに出てから地面を見下ろした。

城下とは違い、ひび割れていない大地。

きつと春になれば花が咲くのだろう、この寒さにも負けず凜と根を張る草にぼんやりとそう思いながらも少し暖かい服に着替えようと部屋に入ろうとした時。

「っ」

まただ。

強い倦怠感に、体が傾く。

口元を押さえて嘔吐感に必死に抗っていると、頭をがんと殴りつけられような眩暈が襲ってくる。

「は……っ」

息をするのもままならない。

必死に空気を体内に取り込もうとするものの、口を開くと胃の中ものを吐き出しそうでそれもできない。

けれど私の体調と反比例するかのように大地は穏やかで揺れなどまるで感じさせない。

だとしたら一体これは何なんだ。

胸元を掻き筆るように強く指先を食い込ませ、石造りの冷たさを頬に感じながら倒れこむ。

その時に何かを倒したのだろうか、がたんという音が聞こえてきたと同時に下で息を呑むような声が聞こえてきた。

恐らくはあの騎士だろう。

こちらに向かおうとしているのか、鎧の揺れる音も聞こえた。

私はそれを冷静に判断しながらも体だけはままならない苛立ちに目を閉じる。すると眦から涙が流れ、そこだけが熱く頬を濡らした。今の自分の状態では見えるはずのない城下のある一角が、暗闇の中に浮かんできたのはそんな時だった。

市場だろうか……果実や野菜の並ぶ露店の間に見える細く暗い道に、炎が見えた。

すでに涙が触れているのか床が触れているのか、それとも自らの髪が触れているのか　そんなことすら分からないほどに麻痺した感覚の中でその炎だけが鮮烈に感じられる。

あれは一体　。

ゆらゆらと揺れる炎は暖炉の炎よりもずっと濃い紅を持ち、誘うように徐々に奥へと消えていく。

「　待つ、て」

「おい、どうしたんだ！　氷の魔女！」

手を伸ばして炎に触れようとした瞬間、その手は別の誰かに掴まれた。

がっしりとした手に掴まれ、再び暗闇に支配された視界を開くと

細く光が差し込み目の前に麦色の髪が見えた。

慌てたような顔など、初めて見た。

自分の状況を無視してぼんやりとそう考えていると、次第に吐き気や眩暈が薄れていく。

同時に先ほど見えた光景も記憶の奥底へと消えていこうとしたから、私は必死にそれだけは繋ぎとめようと何度も頭の中で思い出した。

そうしてすべてを頭に焼きつけてから、ゆっくりと身を起こす。

もうどこも苦しくはなかった。

「だい、じょうぶです」

握りしめられた手に視線を向けると、慌てたようにぱつと離される。

けれど何を思ったのか魔女に触れることや話すことも嫌悪してい

たはずの男は、私の背に触れて身を起こすのを手伝ってくれた。

指先が動くかどうか確認してから、そつと頬を拭う。

するとあれほど熱かったはずの涙はもうすっかり冷たくなっていた。

「はぁ、と息をつくと背に触れていた手が離され上から「手間をかけさせるな、魔女のくせに」という憎々しげな声が聞こえてきて、そこでああやっと日常に戻ってきたのだと気がついた。

先ほどまで感じていた非日常が今はもう遠い。

それほどまでに急激に回復した体は、もう誰の支えも必要としないほどだった。

ただ、倒れた影響が微かに体が軋む。

堅い石に指先で触れて軋む体を支えながら立ち上がり、声同様ふてぶてしさを残したりズの顔を一瞥してから遠い城下を見つめる。

見たこともない景色だったけれど、なぜかあの光景が城下のものだという自信があった。

そして、行かなくてはいけないという強迫観念にも似た思いも。

「面倒をかけました。ですが、ついでにもう一つ面倒を見ていただいてもいいでしょうか」

「……貴様が物を頼むなど珍しいな、何だ」

「城下へ行きたいのです。一緒に来てください」

あの炎が何であれ、確かめなければ。

地震と同じ不調を与えてくる存在であるのなら、地震と何か関係があるのかもしれない。

なかったとしても、何も関係がないという確証がほしかった。

背を向け謝罪の言葉を発しながら、更に面倒なことを頼む。

普段の魔女らしい態度などしている余裕はなかったし、それにあの態度では絶対に聞き入れてなどくれないだろう。

だからあくまで私らしく頼んでみると、微かに驚いたような声が聞こえてきて同時に逡巡するような沈黙が降りる。無理もない、外に出たいから付いて来いなんて今まで言ったことがないしそもそ

も私が外に出ること自体が稀なのだから。

第一魔女を城下に出していいのか、この騎士としては悩むところだったのだろうか。

「駄目でしたら、私一人で行きますが」

だが、却下されても聞き入れる気など毛頭ない。

私は沈黙の中に鋭く言葉を斬り入れて、部屋の中へと入る。

そうしてヴァノツサより与えられた毛皮を羽織り、指先で髪をなぞり小さくスペルを唱える。

さすがに銀髪の魔女がそこらを歩いていたら問題だろうし、そのぐらいのことを考慮する余裕はあった。

微かに発光した髪の毛は徐々に銀から金へと色を変えていく。

これでどこからどう見てもモーリス大陸の人間らしくなったことだろう。

瞳の色が若干違うけれど、さすがにこの程度なら許容されるはずだ。振り返ると、啞然とした顔のリズと目が合う。そういうえばこうして幻術を見せることなどなかった気がする。それなら驚かれても無理はなかった。

恐らく初めからこうしていればこの男の私を見る目も違っていたのかもしれないけれど、時すでに遅し。

「リズ殿」

声を掛けると、はっと息を呑む音と共に微かに頬を紅潮させたりズが「何だ！」と怒鳴る声が室内を満たした。

……何も怒らなくても。

「私は城下へ参ります。もし付いて来ないのであれば、ヴァノツサが来た時にそのように伝えておいてください」

「待て、それでは俺がいなければ陛下に伝える者がいないだろうが」「置き手紙でもしておけばいいでしょう。来てただけのですか？」

急がなくてはあの光景を忘れてしまいそうで、すたすたと足早に部屋を出ようとすると背中にそう声を掛けられて立ち止まる。だか

ら私は机の上に置いてある紙切れに書かれたヴァノツサの文字のすぐ下に「城下へ行つてきます」とだけ書いておいた。

確かにリズが来る場合誰も私達の居場所を知らないわけだから、ヴァノツサにも心配を掛けてしまう。急いでいるあまり浅慮になっていた自分を少し恥じて、リズに訊ねながらドアを開ける。するとひんやりとした通路の空気が肌に触れて痛かった。

そうして答えを聞く前に行こうとしたら。

「……行けばいいんだろう、行けば」

自棄のような、諦めのような声と共に鎧が揺れるがしやりとした音がした。

どうやらこの男を動かすことができるほどにヴァノツサは何か嫌味を言っただけらしい。

だとしたら可哀相というか何とか、若干の同情心が芽生えそうになるけれど元々はこの男が私の死を願って襲撃者からの攻撃を放置していたことが原因なのだと思うと複雑な気持ちだった。

だから私は「ええ、来ればいいんです」と口の端を吊り上げ横顔を見せてやりながら前へと進む。

急がなければ　その焦燥を悟らせないように、少しだけゆつたりとした歩調で。

さすがに騎士と平民が連れ立って歩いていると不審極まりない。

だから私はせめてもの策として、馬車で移動することを提案した。騎士は普段馬車に乗るものではないけれど、この際仕方がない。まさか御者台に座らせるわけにもいかないし。

車輪の回るからからという音と共に、皇城の中で一番質素な馬車で城下を移動する。

一番質素、と言っても平民が乗れるようなものでもないのだけれど。馬車を探す場所が場所だったがだけに、ものすごく質素なものというのは期待できなかったのだ。

本来なら貴族がお忍びで使うような馬車は外面は質素だが内面には幾分かの豪華さがある。

だからだろうが、隣に座るリズムが落ち着きなさに外を見ていた。これで外からは私達の姿は見えにくくなっていくだろうけれど、この男からしてみたら外を歩いていた方が数段ましだったのかもきれない。

そう思い苦笑を浮かべていると鋭い視線を向けられた。

「何だ」

「いえ、何でも」

馬鹿にするなどでも言いたげな視線に笑いながら返すと、小さく舌打ちされる。

別に馬鹿にしたわけではないのだけれど、騎士らしからぬこの男が少し面白くはあった。

大体ここまで派手に嫌われていたら逆に接しやすいというものだ。落ち着いた足取りで地面に轍を作っていく馬車は、私が御者台の男に指定した通り城下の市場という市場を巡っていく。

何せどこの市場なのかも分からないし、ただの露店が二つ並んでいるだけの場所であったのなら余計に分からない。

だから土地勘の強い人間に案内してもらおう必要があった。

復興作業をしている人々を邪魔しないようになるべく人気のない道を選んで進んでいると、徐々に日が翳ってくるのが見えた。

ちらりと空を見上げると、雪でも降りそうなどんよとした雲と強烈な北風が窓を叩きつける。

その風が砂塵を強く舞い上げ、人々が咳き込むのも見える。

……せめて家が瓦解しなければ。

この時期に仮設の住まいというのはどれほど絶望的なものだろう。悪態をつく人間の間を縫って進んでいくと、ぱらぱらという音が耳朶を打って慌てて窓を開けた。

「お、おい」

「いけない！ 止めて！」

強風のせいかわ、それとも元々脆かったのか 恐らくは両方なのだろうけれど、通り過ぎた家から石の破片が落ちていく音が聞こえる

て慌てて馬車を止めた。

その瞬間ひときわ大きな石の塊が咳き込む人間達の頭上に落ちていくのが見えて、私は自分が身を隠していることも忘れて手を突き出していた。

「風よ！」

そうして誰に聞かれることも気にせず声を張り上げる。

掌から生まれた風は、人間達の頭上に落ちる前に鋭く石へとぶつかっていく。

粗く生み出された風はどんっという激しい音と共に石片を作り出し、同時に砂塵を巻き込みながら遥か上空へと舞い上がっていった。それは一瞬と呼ぶには短すぎる、刹那の出来事だった。

だがとりあえずはこれで大丈夫だろう。

はぁ、と息を吐き出し窓を閉める。

そして一気に疲れた体を背もたれに預けると、リズが御者台の男に馬車を出すように指示していた。

幸いあまりに唐突過ぎる出来事だったせいか誰も私が魔術を用いたことに気付いてはいない。というよりも、魔女自体が物語上の存在でしかないと思われているのだから無理もなかった。

恐らく御者台に座る男ですら気付いていないだろう。

けれど、隣にいる騎士だけは違う。

静かな瞳でこちらを見るリズの視線を同じく静かに受け止めながら、進んでいく馬車の揺れに身を任せる。

そうしていると、小さく耳朵を打つ低い声。

「なぜ、助けた」

心の奥底まで困惑一色なのだろう。

弱々しい声には不思議で仕方がないという色しか含まれていないかった。

それも仕方ないのかもしれない。少なくとも、語り伝えられる魔法女しか知らなければ。

「人の死を願うなら、私はこの国に来てなどいません」

けれど多くの魔女が人の死を願っても、私はそこまで人を憎んではない。

だからこそ堂々とそう言った。

白い吐息と砂塵が舞い上がる外の景色を視界の端に収めながら、驚くりズの顔に向けて言い放つ。

「それが答えです」

そしてその時。

視界の端に捉えていた光景の中に、見覚えのあるものが混ざっていることに気がついて窓を開く。

すると勢いよく開け放った窓からは砂塵が入り込み、何度か咳き込みそうになる。

けれどそんなことはどうでもよかった。

毛皮を顔に寄せて、砂塵を吸い込まないようにする。

そうして吹き荒れる砂に視界を奪われながらそこに見えた二つの露店と、その間に見える細い道を見た。

「あれだわ！」

急いで馬車を止め、勢いよく降りる。

すると何事かとこちらを見る露店商の女性達と目が合ったけれど、それもやはりどうでもよかった。

私が確かめたいのは、露店と露店の間にある道の先。

曇っているせいか、先ほど暗闇の中で見た光景よりもずっと闇の深い道には炎は見えない。けれどこの場所であることに違いはなかった。私とは私は一歩一歩足を進める。じやりつと音をさせながら進む私に慌てたような鎧の音が背後で聞こえた。それに振り返ることをしないままに進んでいくと、徐々に体の力が抜けるのを感じる。

やはりここが元凶か。

ふらりと揺れながら、それでも倒れないように一歩。

がんと頭を殴りつけられるような衝動に負けないように、もう一歩。

すると深い闇の中で徐々に揺らめく炎が見えてきた。他の人間に

は見えないのだろうか、皆こちらに視線を向けているはずなのに突如として現れた炎には驚きの声を上げない。いや、気付いていないだけかもしれない。常ならば辺りを照らすはずの炎はどこも照らしてはいなかったから。

がくんと体が落ち、膝に地の冷たさが触れる。

同時にリスのものであるう手が肩に触れるが、そちらに視線を向けている場合ではなかった。

一瞬でも目を逸らしたら消えてしまいそんな儚さがあの炎にはあったから。

ゆらりと揺れる炎は、遠ざかるように見えてそれでもしつかりと近付いているのか徐々に大きさを増していく。

そして手を伸ばせば届くほどの距離まで近付いてきて、初めてそれが炎でないと気がついた。そうだ、大体辺りを照らしもしないものなど炎とは呼べないのだから。もっと早く気がつくべきだった。けれど、こればかりは予想ができなかった。

「え」

近付かれるたび、強烈な眩暈と吐き気が体を支配する。

そのひどい不調に口元を押さえながらも、押さえきれなかった驚きから声を発すると“それ”は困ったように笑った。

そこにあるのは紅蓮の髪と、瞳。

でもヴァノツサではない。あの男はこんな顔はしないし、第一今頃皇城内で政務の真つ最中のはずだ。

ここにいるはずがない。

なら、今日の前にいるこの人の形をした存在は。

暗がりのせいで炎だと思い込んでいた、それでもちゃんと人の姿をした“それ”は苦笑を浮かべて一步後ろへと下がる。

すると私の不調もその一步分和らいで、恐らく“それ”が私のために一步引いたのだと気がついた。

不調と混乱のせいで姿なんてろくに見えていない。

視界だつて徐々に奪われてきているのを感じている。

けれどあの顔だけは忘れられなくて、私は自分が更に体調不良を起こすと分かっていたいながら力一杯手を伸ばしながら立ち上がった。た。

どこからそんな体力が出てきたのかだなんて分からなかった。

ただただ、必死だった。

「待つて　ピリオン様！」

違うかもしれない、正解かもしれない。

でも思いがけず早く出会えた探し人に繋がるものを、私は手放し
たくなくて。

私は肩に触れていた手を振り切って遠ざかる炎を　　炎のような

人間を追いかけた。

第十六話 再会

行かないで。

必死に手を伸ばし、揺れる炎を追いかける。

近付いては倒れそうになり、遠ざかれば楽になると知っていたけれど。

それでも私は、もう一度あの炎と相對したかった。

「待って！」

路地の間を縫って、もう自分がどこにいるのかも分からないほどに無我夢中で走った。

運動不足のせいで走り始めてすぐに体が軋み始める。けれど相手は風のように軽やかに遠ざかっていくばかりで、遠ざかりはしても近づけはしない。ふわふわと遠ざかる紅蓮に舌打ちし、一度立ち止まる。そして両手の平を前に押し出して左右の壁に響かせるように召喚のスペルを唱えた。

「季節を生み、命を運び、巡る世界を創る者。汝、盟主たる我が名の下に 来たれ、エイミー！」

精霊の名を呼ぶと、まるで今まで傍で呼ばれるのを待っていたかのように素早い反応で竜巻が巻き起こる。強烈な渦を巻く竜巻は徐々に薄れ、中からふわりと笑みを浮かべるエイミーの姿が現れた。頬を撫でる風同様柔らかな笑みを口元に浮かべつつ、若干驚いたように目を見開く。

「あら……？ レイアステイ様、どうなさいましたの？ その髪」

「幻術よ。それよりエイミー、見てたでしょう？」

確かに銀髪のはずの魔女が金の髪だったら驚いても無理はないかもしれないけれど、それに構っている暇はない。第一彼女は風の精

霊なのだから。この世に起こるほとんどのことは彼女が率いる風の精霊達が教えてくれているはずだった。

訊ねるとエイミーはええ、と頷きながら細い腕をこちらに向ける。小さな竜巻を内包した腕は、その竜巻を私にぶつけるように軽く投げつけた。こちらに向かいながら質量を増す風はやがて私の全身を取り込んで、同時に足が地から離れる。

「参りましょう」

そう言いながら自らは更に高く浮かび上がり、エイミーは上空からファルガスタ城下を見下ろす。

恐らくあの炎を探しているのだろう。

少なくとも私が探すより彼女が探した方がずっと確実だ。

「見つけたわ、南方です」

「行くわよ」

絶えず風を取り込み、放出する彼女は恐らくその風から情報を得ているのだと思う。

訊いたことはないから分からないけれど。

でもそうしている間にすぐ炎を見つけたことができたのだから、

あながち間違いではないと思った。

明るい声に鋭く返し、私の肩を抱くエイミーの力で更に高く浮かび上がる。

もちろん民に見つかるとは行かず簡単な幻術のスペルを唱えることも忘れずに。

城下の家々よりも高い位置まで浮かび、エイミーの言った通り南方を見るが私には何も見えない。

恐らく普通の視力では見えないのだろう……だとしたら彼女に頼るしか道がない。

「お願い」

「はい」

頼むと嬉しそうに笑ったエイミーが上体を微かに前に傾け、同時に強烈な風が頬を叩きつけた。

風の膜に護られながらも尚、呼吸が困難になる。

そよ風とは違い強風とも言えるであろう風を生み出しながらひたすら南へ。

皇城を視界の端に収めながら進む私達はきつと今頃砂塵を舞い上がらせているのだろう。そう考えると民に申し訳ないと感じたけれど、もしもあの炎がビリオン様だった場合それも言っていられなくなる。

その時、叩きつける風とは正反対の柔らかい声が耳朶を打つ。

「レイアステイ様」

「何？」

「あの者がビリオン帝だった場合、レイアステイ様はどうなさるつもりなの？」

「……分からない」

どうしよう、そう考える前に体が動いたのだから。

けれど確かにそうだ。もしもあれがビリオン様だった場合私はどうするのだろうか。

もしも次に出会えたなら殺す覚悟をしなくてはならないと、頭では理解していたし覚悟もある程度していた。もちろん、不死掛けをした相手にはそれ相応の報いを受けてもらおうとは思っているけれど。

……でも、いざあの人の前に立った時私にそれができるのだろうか。

不安は尽きず覚悟もできない。

歯痒いを想いをしつつも、それをどうこうするだけの時間はもうなかった。

「待ちなさい！」

見えた！

私の視力でもようやくやくはつきりと見えた炎に大声でそう呼びかける。

そのせいで城下を歩く民が驚いたようにこちらを見ただけれど、恐

らくただ強風が吹きつけてきただけで私の姿は見えなかったことだろう。

風の速度が上がリ、頬を叩きつける風の強さも強くなる。そうして炎を追いかけしていると、それはこちらが見えているのかちらと振り返るように動きを止めた後で一度ゆらりと揺れ、困惑するようにそれきり移動しなかった。

おかげで近付くことができたけど、近付くたびに吐き気が襲う。

「レイアステイ様……」

「大丈夫。目の前で降ろして」

口元を手で覆うと、私の肩を抱くエイミーの不安げな声が聞こえる。

だからできる限り気丈な声で答えると、一秒にも満たない逡巡の後で頷く気配が伝わってきた。

ふわりとした彼女の風の髪の毛が耳に触れる。

同時に諦めたような溜息と共に若干の笑みを含んだ声。

「もしもレイアステイ様に何かありましたら、私達皆でお説教ですからね」

……ええ、恐らく主にアマンティに嫌味を言われ続ける気がしてきたわ。楽しげな声にがくりと肩を落とす動きがエイミーには伝わったことだろう。くすくすと笑う声に対して「肝に銘じておくわ」と言つと、徐々に体が下降を始め全身を覆っていた風がふわりと霧散した。

がつんと頭を殴られたような眩暈を感じると共に、遠目から炎に見えていた人に更に近づく。

「では、いつてらっしゃい」

肩に触れる風が離れる。そしてふわりと降り立った体だったが、思ったように力が入らずへたり込む。エイミーに支えられていたせいで気が付かなかったけれど、どうやらかなり体力を消耗していたらしい。

降り立った場所はまだ細い路地の一角で、ひび割れた建物の壁

見上げ続けていることができず、顔を伏せる。

手の平で口元を押さえ今度は吐き気からではなく嗚咽を我慢しながら、倦怠感からではなくこのよく分からない感情から来る震えに身を任せた。頭が真っ白になり、何て言えばいいのかわからない。会いたいとあれほど思っていたのに、そのためにここまで来たのに結局何もできないまま震えている自分が嫌だった。

何も言わずにいる私の頬に、自分のそれより硬い指先が触れる。触れていいのか躊躇っているような、おずおずとした触れ方にもう一度顔を上げた。

本人だとちゃんと確認が持てたからか、そこに見える表情に恐怖ではなく安堵で心が満たされる。

涙を拭ってくれるふわふわとした指先に目を細めると、あの人が柔らかく笑ったのが見えた。

……でも、本当にビリオン様であるなら、どうして今まで何も答えてくれなかったのだろうか。

「ビリオン様」

「今は、君の問いに答えることができない」

問いを遮るように言われ、それ以上何も言えなくなった。

「すまない」

そして謝罪されることによって文句を言うこともできなくなる。

人のことをどうこう言える立場ではないけれど あまりにすぎる。
あまりにずる。

目をぎゅっと閉じて、目尻に溜まった涙を零す。

「そうして謝ったまま、もう二度と会えないなんてことになるのですか」

あの冬の日、逃げたのは私だ。

そして今、この人が逃げようとしている。

逃げた私と言える義理ではないのだけれど、今逃げてもらおうわけにはいかなかった。

暗闇に支配され、頬と手に触れる指先の感触だけが頼りの世界で

私はあの人が炎のように揺らめきながら遠ざかってからも動くことができず、リスが心配げに肩を揺らしてもまったく反応することができなかった。

あまりの出来事に、頭がついていかなかった。

第十七話 歪み

やっぱり、生きていた。

ぼんやりとする頭の中でそう呟く。

あの人はやっぱり、生きていたんだ。

「おい！」

何度も声を掛けたのだろう、荒い息と共に発せられた怒号に視線を向けると鋭い眼光がこちらを見据えていた。

向けた視線と同時に軟化したその視線は外されることなくただこちらを見ている。

そこに心配するような色が籠められていることに若干驚きつつ、肩に触れる手に目を向けた。

羽織っている毛皮の上からでも分かる硬い指先が自分の肩を掴んでいる。それは分かる。けれど、魔女を心から憎んでいるようでもあったこの男がこうして私に触れているのはひどく不可思議なものだと思った。

「どうしました」

ただ、それを口にしたら今すぐにでも剣先を向けられそうな気がしたので当たり障りのない言葉で返す。

するとこの返答も悪かったのか目の前にいる騎士の目尻が吊り上がった。

「どうしましたじゃない！ さっきのあれは何だ！ なぜ陛下がここにいる！」

「……だからヴァノッサではないと言っているでしょう」

「何を馬鹿な」

「気になるのなら今すぐ皇城に戻りなさい。きっと今頃政務に追わ

れているでしょうから」

なるほど。それで怒ったのね。

騎士の　　リズの言葉に合点し、少し考えてから返事を返す。けれどさすがに、あれは先代の炎帝ですなどと言うことはできなかった。

言ったところで信じてくれるとも思えないし、何よりそのことをヴァノツサに知られていいのか分からなかったから。

若干食い込むように肩を掴んでいた手をやんわりと引き剥がす。そうして大通りに足を向けた。もうこの場所にあの人はいないのだから、この場に留まる理由はない。

石畳の道に踵が触れるたび、そこから体の芯が冷やされていくような錯覚を覚える。

同時にあの人が触れた指先が、頬が、唇に熱を感じた。

涙の跡を消すように手の甲で頬を擦り、寒気と熱を我慢して歩く。そうして大通りに出る直前、ふと足を止めて空を見上げる。

そこにはモーリス大陸の多くの民が持っている瞳と同じ澄んだ空色が見えた。

空気が澄んでいるせいか、薄く透き通るような空色に目を細めるとそこにエイミーの姿が映った。

(レイアステイ様……)

「大丈夫よ」

唇の動きだけでそう呟いたエイミーに、私はそう返して首を振った。

大丈夫、もう一度今度は唇の動きだけで空を映す透明な風姫に告げる。

突然の体調不良も出会いも口付けもすべてひっくり返す。『必ず会いに行く』

あの人はそう言った。なら、まだ猶予はある。

だから今はこの混乱した意識のままでもいい。代わりに次は絶対驚かないから。

落ち着かないと、と焦る必要のない分心に余裕が出てくる。

そんな状況の中で私はまるで夢の中にいるようだったあの邂逅を思い出して、一度目を閉じた。

ふわふわとした暗闇に紅蓮が舞う。

炎と勘違いしてしまうほどに鮮やかな紅蓮を持つ人は、はにかんだ笑顔で柔らかい声で私の名を呼んだのだ。

「レイアステイ」

「レイアステイ・ブラウ・アルジエント」

この、三百年前の皇城で氷の魔女という二つ名以外で呼ばれることのなかった私の真の名を。

脳裏に、そして背後からも、この名を呼ぶ声が聞こえる。

その言葉に反射的に歓喜を覚えたものの、背後から聞こえる声がある人から発せられたものではないと知り愕然とした。

……誰も知らないこの名を、別の誰かが呼んでいる。

けれどそれは、私のせいだと知っていた。

そう、あの人以外誰も知らないのだから訊ねる時もあの人以外の誰もいない場所で訊ねるべきだったのだ。

今自分の名を呼ぶのがあの人でないことを嫌でも思い知り、私は自分の不注意を恥じ、同時に嫌悪した。

「それが貴様の名か」

「何か問題でも？」

呼ばないで。

振り返った先には、あの人とは違う麦色の髪を持つ騎士の姿。

今まであの人以外の誰にも知らせなかった名を呼ばれ、その瞬間微かな苛立ちを感じる。

他の誰の声でも呼ばれたくない。そんな拒絶の感情が渦を巻く。

走ってきたのか未だ乾かぬ汗に前髪を張り付かせるリズムに向け、拒絶を含んだ冷たい視線を向ける。

自分は今ひどく性格が悪いと自覚してなおそれは止められなかった。

するとリズはその視線にたじろぎながらも困惑した声で。

「……魔女は真の名を明かさぬと聞いた」
そう呟いたので、合点した。

確かに魔女は真の名を知られることでその力を悪用される恐れがある。

だからこそ魔力を持つ者は総じて姓か名の片方、もしくは偽名で生きていく。

真の 全ての名を誰かに教えることなどない。

けれどあの人は私の名を知っていた。

リズにはそれが不可思議だったのだろう。

どうして氷の魔女と呼ばれるような女が真の名を明かしているのかと。

そしてそれを知っているあの紅蓮を持つ人は誰なのかと。もちろん、教える気はないけれど。

「私を従わせますか？ 今の貴方にはそれができるかもしれない」
実際にどのような術で魔女や魔導師を従わせるのかは分からない。
だが真の名を知ってさえいれば魔力を持たぬ者にも可能なことであることは知っていた。

体を覆う毛皮を撫でながら訊ねると、リズの顔が強張る。

「ヴァノツサに報告しても構いません。その結果従属させられても、それはあの人に名を問うた私の責任」

悔しいけれど、それは事実だ。

そしてヴァノツサがいざという時には私を従属させる道を選ぶことも。

自分で自分の首を絞めるような言葉を吐きつつ、リズに背を向ける。

毛皮では凌ぎきれない冷たさに一度身震いし、続ける。

「ですが、覚えておきなさい」

それは自分でも驚くほどに冷たい声だった。

自分で発した声に肩を震わせ、そう思う。

涙のせいでパリパリに乾いた頬を微かに歪め、けれど言葉を止められず私はせめてもの逃避として目を閉じた。

「今後一切、私の真の名を呼ぶことは許しません。呼んでもいいのはこの世界で唯一人だけなのだから。それは私が従属させられたとしても同じこと」

そうだ、どうあってもきつと私は拒絶するだろう。

これから先ヴァノツサに心を許してこの名を教えることはあるかもしれないけれど、そうならないかもしれない。

だから自分が望むまでは口にしてほしくなかった。我儘だと理解しているけれどそれでも。

目を開くと、先程よりも身近に薄い空色の瞳が見えた。

いつの間に正面に回りこんでいたのか、こちらを見る瞳は不思議そうな色を湛えてこちらに向けられていた。

こちらの拒絶に嫌悪を示すかと思っていたのにそうではないらしい。

「貴様は」

小さな声は白い息と共に吐き出され、少しの間が空く。

逡巡しているのだろうか？ だとしたら一体何を言おうとしているのだろうか。

常ならば自分が発した言葉に忌々しい顔をするリスは、今回ばかりはそうせずに言葉を紡いだ。

「まるで騎士のようなことを言うな」

「騎士？」

「騎士も基本的に主以外の誰にも名を呼ばせない。名のすべてを呼ぶことを許すとはすなわち、己のすべてを捧げること。それは魔女だけではなく人も同じだ。だから」

そういう考えは嫌いじゃない、そう言われて今度はこちらが困惑する番だった。

だがそれも仕方のないことだと思う。何せあれだけ嫌悪されていたのだから。

あっさりとして理解を示すようなことを言われて驚かないわけがない。だが私を驚かせた張本人は言いたいことは言ったとばかりに背を向けて大通りへと出て行く。

その瞬間なぜだかその背に向けて声を掛けていた。

「貴方は、私が憎いですか？」

魔女が憎いかという言い方はしなかった。卑怯ではあるけれども、その言葉を付け足すと答えが見つかってしまうから。

私の言葉に首だけを向けて振り返ったリズは微かに瞳を細める。

「死んでくれと思っていた」

「……」

その言葉も実にあっさりとしていた。実際私に言ったことがあるのだから隠す必要もないのだろう。

そう思い納得しているとだが、と言う声が耳朵を打つ。

ひどく困惑したような、忌々しげであるような、そんな震えた声だった。

「俺にも分からない。魔女らしい言葉を吐く貴様は心底憎らしいが、そうでない言葉を言う方があまりに多すぎる。魔女なら魔女らしくしていればいいものを」

最後の言葉はまるで負け惜しみにも似た言葉だった。

だからだろうか。

「そうですね」

私は無意識のうちに笑みを浮かべながらそう返していた。

幻術で髪を金に染めてから、リズに近づくように前に進む。そうして隣に立ってから再び耳朵を打つ声に耳を傾けた。

「だから貴様が陛下をかどわかし国を傾けない限りは、陛下の命通り護ってやる。先程我が国の民が救われた借りもあるしな」

「それでは魔女らしくありませんよ」

「……っ！ うるさい！ すでに貴様は魔女らしくないだろうが！」

「魔女なら魔女らしくしていればいいものを、と言ったのはどこのどなたでしょうか。せっかく望まれるまま国を傾けようと思ってい

たものを」

にやりと笑い横に立つ騎士を見上げると、心底憎らしそうな顔と目が合った。

だがそこに怒りが混じっても、今は怖くなかった。

むしる胸の中にあつた少し重たいものが氷解していくように感じられる。

そしてそこで、自分が覚悟とは裏腹に誰かに死を願われるのが悲しいと思っていたのだと気がついた。

これから先私は多くの民にそう思われるというのに、その覚悟をしたというのに。

からかうように笑いながら、内心で溜息をつく。

恐らくリズもこれからヴァノツサが愚帝と言われるようになれば、私への反応が当初と同じものになるのだろう。

ほんの少しでも分かり合えたのが、すぐに消えてしまふ。そう思うと悲しくもある。

けれど。

「皇城に帰りましょう。ヴァノツサに報告したいことがあります」

先代炎帝　ビリオン様に会ったことをいつまでも隠しておくわけにはいかないだろう。

いくら知られていいことか分からないとしても、私達の間には約束がありその約束が有効であるうちは隠していいことではないと思つた。

あの人が生きていたということは、そのままこの大陸の危機に直結する恐れがあるから。

大通りに満ちる喧騒と馬車の音、そして砂塵に薄れる空を見つめ前へと進む。

その後ろからリズが付いてきて……あまりに不自然な光景のせいで民からの好奇の目に晒されながら皇城へと帰った。

「何をしていた」

冬宮へと帰った頃には日が落ちており、そのせいでヴァノッサが部屋で待ち構えていた。

壁へと背を預け、こちらを睨むようにして見るその手には私が書き残した紙切れが握られている。

その様子を見ながら私とリスは目を合わせ、何て答えたものかと考えて。

「書いてあるままですけど」

「そのぐらい分かる。問題は何をしに行ったかだ。髪をそんな色に染めてまで何をしていた」

紅蓮の瞳が暖炉の炎と同じぐらいの熱を孕んでいるのを見て、間違いなく怒っているのは分かったけれどどうしてそこまで怒っているのが分からず首を捻る。

だがとりあえず今この場所にリスを置いていたら彼が八つ当たりされると思い、視線だけで退室するよう頼んだ。

「待て」

「リス殿からの報告は後で聞けばよろしいでしょう。それより、私が何をしていたか知りたいのでは？」

一礼して出て行くこうとするリスをヴァノッサが引き止めたけれど、その声から庇うように訊ねる。

「……冬宮の外で控えている」

そうして渋々その言葉を引き出し、ようやくリスが退室したところまで。

「それで、何をしていたのだ貴女は」

「炎を追いかけていました」

「何？」

ぱちんと指を鳴らし幻術を解いていると叱責するような声が飛んできて、私は溜息をつきながらもそう答える。

正確にはもう少し別の言い方があったのかもしれないけれど、元

はそういう理由だ。

椅子に座るよう勧め、一つのテーブルに向かい合わせに座りながらもう一度溜息をつく。

「昨日、突如としてひどい倦怠感と吐き気に襲われました。そして今日、同じ状態になった時にある光景が頭に浮かんだのです」

「ある光景？」

「城下の一角、露店に挟まれた細い路地の先に炎が揺らめく光景です。私はそれを探しに行っていました」

「うちの騎士を巻き込んだか」

「ええ。今思えば危険な場所だったかもしれないのに、貴方の騎士を連れて行ったことは申し訳なく思っています」

あの時は頭に浮かんだ光景を忘れないために慌てていたせいか、冷静な判断ができていなかったことは確かだ。

危険だという感覚は皆無だったけれど、もしかしたら怪我をさせていたかもしれないのだ。そう思うと本当に悪いことをした。

内心でリスへの謝罪を呟き、ヴァノツサに軽く頭を下げる。

すると彼はそんな反応を期待していなかったらしく苛立ち混じりに舌打ちした。

ここまで苛立っている姿を見るのも久しぶりだ。

以前は私をこの大陸に呼ぶために焦っていたという理由があったけれど、今回は何なのだろうか。

机の上でぎゅっと拳を握りしめたヴァノツサは、こちらを見ずに搾り出すような声を出した。

暖炉の炎が爆ぜる音にかき消されそうなほどに小さく低い声は、やはり多分の怒りを含んでいる。

「それで、何があった」

その怒りを解くのが先なのかそれとも報告するのが先なのか一瞬迷う。

けれど私は視線が合っていないことを若干幸いに思いながら羽織っていた毛皮をそっと椅子の背にかけ、答える。

「炎は、先代炎帝の姿でした。紅蓮の髪が炎に見えていただけのようです」

「……先代が!??」

「ええ。あの人は、生きていました。偽者でもありません」

「なぜそう言える? 姿形が同じだからか?」

「いいえ。私の真の名を、あの方はご存知でしたから」

私の返答にヴァノツサが腰を浮かせる。それを見上げながらようやく合った視線をすぐに離し、続けた。

「あの方は本物の先代炎帝。ビリオン・ヴァン・ファルガスタ本人です」

なぜか目を合わせることができなかった。

あの人と顔が似ているせい、というわけではなく自分でもよく分からない感情で。

するとついと顎に温かいものを感じ、同時に強制的にヴァノツサの方を向かされた。触れたのは彼の指先だったらしい。

「こちらを見て答えろ。それで、貴女はどうしてそんなに浮かぬ顔なんだ。願いが叶ったというのに」

「あの方が生きているということは、地脈を破壊しているのが彼であるという説が有力になるということです。嬉しいわけがありません」

「先代と話したのか? 彼は何と言っていた?」

「今は、何も言えないと……ただそれだけを」

あの人とは違う怖いほどに真つ直ぐな紅蓮の瞳から視線を外したと思いつながらそう答えていると、ヴァノツサが顔をしかめた。

「なぜこちらを見ない。俺が何かしたのか?」

「いえ……」

「じゃあ何だ」

なぜなのだろう。

考え込んで、それからただ見られたくないだけなのだと気がついた。

こんな風に困惑して自分の気持ちもよく分からない自分を、この真つ直ぐすぎる炎帝に見られたくないのだと。

幾分か軟化した声と、少しでも不安げな色が混じる瞳をようやく見れるようになってから呟いた。

同時に頬と目頭が熱くなり涙が流れそうになる。はっとヴァノッサが息を呑む音が聞こえた。

「あの人が本物だと知った時、心から嬉しいと思いました。同時に絶望しました。手に触れた温かさも声も笑顔もすべてあの人のものだと言って、やっと会えて嬉しくないわけがなかった。でも地脈破壊について否定の言葉がないことで、精霊達の言葉に信憑性が出てきました」

「……」

「また会いに来ると言っていました。二度と会えないのは自分が困るからと。それがどういう意味を持つのかは分かりません。ないとは思いつつも彼に不死掛けを施した術者の罠だという可能性も否定できません。ただ」

「ただ？」

ぼつりぼつりと、起こった出来事の断片を呟いているとそう問われる。

だから私は一度浅く息をして呼吸を整えてから続けた。

「術者がどうであろうと、あの人が私を大切に想ってくれていることはよく分かりました。口付けられ、あの時は困惑していたけれど今ではそれがよく分かる。だからこそ不安で堪らない。もしもあの人がこの事件の犯人であった時、私はあの人を手にかけることができるのかと。貴方との約束を守れるのかと。何度も、覚悟したはずなのに……」

言葉にすればするほど胸を突く痛みに支配される。

その痛みに顔をしかめていると、ヴァノッサが立ち上がり覆い被さるように私を抱きしめた。

後頭部に、背中に触れる手がぎゅっとこの体を抱き寄せる。

「すまない」

耳元に寄せられた唇から漏れ出した息がそう言っているのだと気付いた時、思わず呆れるように溜息をついてしまった。

「……貴方もビリオン様も、そう言って謝ってばかりですね」
言つと、頬を寄せられ銀の髪を挟むようにしてお互いの頬が触れる。

それを感じながら私は、この人は今謝ることしかできないのだと思ひ知った。

もしもそれ以外の言葉を言ってしまったら、この国の多くの民が死に絶えるのだから。

責めることはできなかった。それができないほどに彼は多くのものを背負っている。

私はそんな彼の意思に動かされここまで来たのだ。救世主になどなれなくとも、ビリオン様が生きていたらその術を解くために。

それが結果的にヴァノッサを救うことになるのなら私は私の全力を超えてそうしたいと思ったのだ。

そうだ、それが私の覚悟。何度も何度も自問自答してようやく得た私の答え。

そして陛下のためと言いながら、結局は自分自身の想いで行動している利己的な私の我儘に謝罪する人間など誰一人いていいはずがない。

「謝ることなどありません。心配をかけ、謝るべきは私の方です。迷つてなどいられないというのに」

身を離し、できる限りの笑顔でそう言つとヴァノッサが顔を歪め違つ、と言つ。

「違うんだ」

小さくもまるで恫喝するような声に肩を震わせると、今度は優しく首を振りながら続けた。

「この国を救つてほしいと言つて連れて来たのは俺だ。貴女には先代と共に行く道もあるのに、それを封じているのは俺だ」

「ですが私は」

「そして今も、別の道を選んでもいいんだと言えます。この国のために力を尽くせとしか言えぬ」

どの道不死掛けのことを知ったら、それを解こうと考えていただろう。例えヴァノツサが何と言おうと。

そう思い反論しようとしたところを制され、続いた声はまるで泣いているようだった。

それは、私しか見ることのできないヴァノツサの苦悩だった。

そしてその姿を見た瞬間、私は気付いてしまった。私達が同じであることを。

救世主としての私を見るか、私個人として見るか、それを選べずに中途半端な位置にいるヴァノツサ。

ビリオン様への思いや決意だけで動くか、ヴァノツサのために何かしたいと思いき動くか、それを選べずに中途半端な行動しか取れずにいる私。

両方を取るとどこかで必ず歪みや矛盾が生じて 今私達は早くもその歪みの中にいるのだと。

どちらかを選ばないといけない、その時が目の前に迫っているのだと。

ついでにもう片方も、何て甘いことを考えてはいけなかったのだ。こちらを見下ろす紅蓮の瞳が揺れるのを見てそう思いながら、どちらを選ぶかなどどうの昔に決まっているはずなのにと考えた。

ただ、それを選ぶ勇氣がないだけなのだ。もう片方の道が惜しすぎて決意することができずにいる。

出会って日が浅いというのにそこまで悩んでしまうのは、きっとお互いがお互いにとって貴重な存在だからだ。

「私達は、どうしても優柔不断なのでしょうね」

自らを嘲笑うようにそう言うと、ヴァノツサが同意するように溜息をついた。

その時、微かに猫の鳴き声が聞こえて私は思わずがたんと音を立

てながら立ち上がる。

「どうした？」

「今、猫の鳴き声が」

慌ててテラスへと出て、下を覗き込む。

同時に「あ、という聞き慣れた声が聞こえた。」

テラスの手すりから身を乗り出し、目一杯下へと視線を向ける。

今日は花月が出ているおかげで大分明るかったが、その姿を見つめるのには数十秒を要した。

冬宮の庭の、花壇の脇に見える影。小さな猫の形をした影はゆらりと動き私のよく知る灰猫の姿を映した。

「ビーン！」

「にゃあ」

声を上げると嬉しそうに尻尾を振りながら猫らしく鳴くビーン。

私はそれを見て自分でも驚くほどに顔が笑みに染まるのを感じながら、その体躯を抱き上げるべく身を翻して冬宮の外へと駆け出した。

悩みも鬱屈とした思いもその時ばかりは吹き飛んでいた。

「俺は猫に負けるのか……」

その様子を見て思ったのか、部屋を飛び出す私の背にヴァノッサのそんな声が聞こえたけれどそれには答えなかった。

第十八話 紅い月

暖かい体毛に顔を埋める。

すると小さな鼓動を感じて抱きしめた体温が微かに身動きした。

「どこ行つてたの……馬鹿」

触れ慣れた感触に呼びかけると、首筋にざらりとした舌が触れる。慰めるようなその仕草にまるで自分が今北の孤島にいるような錯覚を感じた。

わずかに土埃の匂いがする体躯を抱き上げて頬擦りしていると、背後からがちゃがちゃと鎧の揺れる音がした。

ヴァノツサの言う通り冬宮の外で控えていたのだろう。

「何だ、貴様の猫か？」

背中にリズの声がかかり、私は振り向くことなく頷いた。

安堵のせいで綻んだ顔を何となく見られなくなかったから。

だがそれは彼自身がこちらに回りこんできたことで無駄な足掻きに終わった。

「……どうした」

「何でもありません」

「何でもないことはないだろう。何だその腑抜けた顔は」

「喧嘩を売っているんですか」

ふーっとビーが威嚇するような声を上げる中、呆れたように発されたリズの言葉に目を細める。

それでもどこか声が上がってしまうのは確かに彼の言う通り腑抜けているからかもしれない。

やっぱり一人でいるよりビーがいる方がいい。

腕の力を緩めると同時にその金色の瞳でリズを睨みつけ、威嚇し

ているのか軽く体毛を逆立てているビーを今度はやんわりと抱きしめて、貴方には渡しませんとばかりに身を振る。

そうして自制心が利かないせいで綻ぶ口元を直せないでいるとリズが溜息が聞こえてきた。

「貴様がそんなに猫好きだったとは意外だな」

「猫なら何でもいいってわけではありません。ビーだからです」

「何せ北の孤島ですつと一緒に暮らしてきたのだからな」

陛下、という声と共にリズが膝をつく。

そしてビーがひときわ強く威嚇する声が聞こえた。

……私としてはリズの方が危険人物なのだけれど、ビーにとってはやはりヴァノツサの方が気に食わないらしい。

ゆったりとした動作でこちらに歩いてくるヴァノツサはそんなビーの態度に苦笑を漏らしながら、そつと手を伸ばしてきた。

「久しぶりだな」

「咬まれますよ」

「その時は貴女が手当てしてくれるのだろうか？」

「自業自得で怪我したもので面倒見れません」

だが本気で私に手当てをさせることは間違いないのだろう。

そしてそれを理解していたのか、ビーはヴァノツサが伸ばした手に咬みつくことはしなかった。

そつと灰色の体毛に彼の手が触れる。

居心地悪そうに撫でられながらビーが身を振る。あまり触るなどという意思表示だろう。

リズがいるから喋ることもできないのだろうか。

だがヴァノツサも普段撫でられないものだからいい機会だとばかりにビーの頭をぐりぐりと撫でている。

「こうして素直に撫でられていると可愛いものだな」

「あまり触らないであげてください。機嫌が悪くなります」

「もう遅いだろう……それにしてもやけに汚れているな。おい、リズ」

「は」

それはそうですが。

今にも暴れだしそうな猫をやんわりと宥めながら内心で考えていると、宵闇の中深紅に光る瞳を細めたヴァノツサがリズを呼ぶ。

そうして私の手からビーを取り、首根っこを掴みながら今度はリズの腕の中へそっと入れた。

「にやあっ!?!?」

「ちょ、何するんですか」

「風呂に入れてやれ。言っておくがそいつはかなり凶暴だからな、心してかかれ」

ぶらんと体軀を揺らしながら、見るからに堅い銀の鎧に包まれたリズの腕の中に灰猫が入りこむ。

だがリズは何が何だか分からないらしくビーを受け取ると、困惑したような視線をこちらに向けた。

けれど私にもヴァノツサの行動の意味など分かるはずがない。

責めるように訊ねると彼はリズにそう命じ、同時に私の手を取った。

先程までビーを撫でていた大きな手ががっしりと自分の手を掴む。そうしてしっかりと手を掴んだヴァノツサはそのまま腕を引き私の身を引き寄せた。

肩を抱かれ、若干怒ったような声で言い放つ。だがそれは私に言っただけではなく、ビーに向けた言葉だったようだ。

「お前はファルガス皇帝たる俺が特別待遇で手厚く迎えてやる。だが今宵この魔女は俺が預かるからな」

その言葉と同時にビーがじたばたともがき暴れるが、それはリズの力に負けてこちらに出てくることはなかった。私としてはこのままビーが出てきてヴァノツサを引っかいてもいい気がしたけれど、そうなることややはり手当ては私がするんだろうと考えると面倒くさい。

子供が言う我儘のような言葉に溜息をつくと、がっしりとした手が更に強く肩を抱く。

すると丁度彼の胸元に頬が当たり、普段の彼らしいゆったりとした鼓動が聞こえた。

けれど、その鼓動とは正反対にその次に続いた言葉は早口だった。

「俺より猫を選ぶからだ」

「……え？」

「何でもない。それより、俺はまだ貴女に話があるのだから勝手に外に駆け出すな」

今何と？

あまりと言えばあまりに似合わない言葉に目を丸くしていると、ふいと顔を逸らされた。

若干鼓動が早くなる。私ではなく、ヴァノツサの鼓動が。

何でもないといいながら心臓は嘘をつかないようだ。

ぼかんとしてその言葉に「はぁ」と答えるとヴァノツサは無理矢理前へと歩き出す。

肩を抱かれているせいで否応なしに歩き出すと後ろからビーの鳴く声が聞こえる。

それが何だかとても悲しそうなものに聞こえて首だけでも振り返ろうとすると止められた。

「問題ないだろう」

「問題はないでしょうけれど、でも」

「明日には綺麗になって帰ってくる。それまで待て」

すたすたと早足で歩かれて思わず前につんのめりながら弱い声で反論すると、ぱっさりと斬り捨てるような声。

だがなぜだろう。その言葉がひどいものではなく、ただの照れ隠しに聞こえるのは。

目を細めてじっとヴァノツサの横顔を見つめていると、自分でも分かっているのか更に顔を逸らされる。

……ビーに負けたのがそんなに悔しかったのだろうか。

けれどきつと何度同じことがあっても、私はヴァノツサを放ってビーのいる場所へと駆けるだろう。

一緒にいた時間がそれほどまでに違うのだ。

紅蓮の瞳を冬宮へと向けて大きな歩幅で歩くヴァノッサについて行きながら、こっそり背後を振り返る。

するとリズも背を向けているのか銀色の背中が見えた。

そして銀色の肩越しにきらりと光る金色の瞳も。

不安げなその瞳に私は小さく口の端を上げ、大丈夫というように笑ってみせた。

その時にはもう冬宮の入り口が目の前にあり、ヴァノッサに肩を抱かれた私は硬い表情を見せる彼の横顔を見上げながらこれから一体何を言われるだろうかと不安になった。

「ようやく静かになったか」

「はあ」

「あの猫がないのが不満か」

「……いえ、そうではありませんが。一体貴方が何の話をしたのかと気になって」

暖炉の前の椅子に座り、向かい合う。

くつろいだ様子で足を組むヴァノッサの言葉に対し首を傾げると大きく溜息をつかれた。

あからさまに呆れたと言っているような態度に目を細める。

テーブルに肘をつき、首を傾げて炎のような髪を揺らす。まるで今の私と同じような仕草だ。

鋭く真っ直ぐな瞳に射抜かれ、傾げていた首を元に戻すともう一度溜息が聞こえる。

「何ですか」

「先程まで話していたらどう、その続きだ。……まさかもうあの話は終わりだなと言わないだろうか」

いえ、もう終わったと思っていました。

心からそう思ったけれど口に出すこともできず、視線を逸らして首を横に振る。

だがそれが悪かったのか「まだ終わっていない」と返された。

その言葉に目を向けると、雲に隠れる花月を背にしたヴァノッサが宵闇の中続ける。

真摯な声は、まるで今日は見えない華月のようにささやかな柔らかさを含んでいた。

「それで、貴女はどうしたい？」

気負った様子のない、自然な声に背を伸ばす。

その問いに何をですか、と訊ねたかったけれどそれは憚られた。

訊ねなくても分かっていたからだ。彼が何に対して問いを発したのかを。

椅子の背に体を預け、息をつく。

「もしも私がすべてを捨てあの人と共にいきたいと言えば、貴方は許してくれるのですか？」

「……それは」

「言えないでしょう。貴方はこの大国の皇帝で、すべての民の命を背負っているのですから。ならば、そういう問いを発してはいけません」

黙り込むヴァノッサをじっと見つめ、私もテーブルに肘をつく。

若干近付いた顔と、同じ高さになった視点で彼を見る。すると伏せられた睫毛が小さく揺れた。

それを見て意地悪なことを言ったかもしれないと思ったけれど、後悔はしなかった。優柔不断な私達はこうしてお互いの失言を止めながら進まなければ、きっとその場に足を縫い止められてしまうから。

夜を塗り固めたような漆黒の上着の裾を握りしめ目を伏せたヴァノッサの睫毛を揺らすように小さく息を漏らす。

そうして吐息と共に声を発する。この距離なら聞こえるだろう、そう思えるぎりぎりの声量で。

「心配しなくても、貴方を放ってある日突然消えたりはしません。それだけは保証します」

「……宣言して消えることはあるのか」

「絶対には言いきれません。あの人がファルガスタ国外にいる場合、追って国外に行くかもしれないし」

ただそれは、あの人と共に行くこととは違います。

そう言うところヴァノツサは薄く目を開き「そうか」と呟いた。

「貴女は優しいな」

口元に孤を描き静かに笑う。じわじわと浮かべられる笑みは何だかとても嬉しそうだった。

皇帝らしからぬ弱々しい姿に、私は船上で見た彼の姿を思い出す。

そうだ、あの時もヴァノツサはこうして優しいなと言っていた。

「ヴァノツサ」

何を言いたいわけでもないのに、自然と声が出た。

自身が発した声はあまり大きなものでなかったけれど、室内に凜と響く。

壁を跳ね返り返ってきた声が耳朶を打つと同時に、もう一度「ヴ

アノツサ」と呼ぶ。

続ける言葉なんて見当たらない。

ただ一度目はこの身が勝手に、そして二度目は自分の意思で彼の名を呼びたいと思ったから呼んだ。

その理由を私はちゃんと持つていたけれど、口にする気はない。

「何だ？」

「いえ」

だから何事かと訊ねられ、答えを返すことができなかった。

テーブルについた肘を離し、椅子の背もたれに深く背を預ける。

どうしてこの男はこんな風に魔女を目の前にして怖がることなく、それどころか私が離れていかないことに安堵しているのか。

どうして優しいなどと言って笑うのか。

心の中でそう呟き呆れながら、それは自分も同じだと気付いて首

を振る。

あれだけ民に憎しみや嫌悪を向けられてなお、こうしてその舞台である大国の後宮で人の王と向き合っている私も不可解だ。

それはもう幾度となく考えていたことだけれど何度考えても答えが出ない。

分かるのはただ、この男が変わっているということだけ。

そしてそのせいで私は矛盾を抱え、動けなくなるということぐら이다。

ここでじつとしているわけにはいかない、それは分かっていると
いうのに。

そこまで考えてふと疑問を感じ、暖炉の炎を見つめているヴァノツサの横顔に問いかける。

「そういうえば、貴方はいつ婚儀を執り行うのですか？」

いい加減婚儀をしてもおかしくない歳だろう。そう思い訊ねた瞬間無然とした顔を向けられた。

「出て行きたいのか、ここを」

「そうではありません。ただ、貴方もいい歳なのではないかと思っただけです。それなのに私をここに置いては花嫁が逃げたしま
うでしょう」

愚帝と呼ばれることがどうこう言っている場合ではなかった。

その前にこの男の結婚がかかっていたのだった。

後宮にいながらそんなことも失念していた自分に内心で舌打ちしつつ続けると、ヴァノツサは何だそんなことかと笑った。

そうして先程までとは違うにやりとした笑いを浮かべ、ひらひらと手を振る。

「気にするな。政略結婚なんて少し情勢が変われば嫌でもすることになる」

「……そういうものですか」

「そういうものだ。とはいえ、まったく予定がないわけではない」「？」

「数ヶ月前、ツヴァイ王から親書が届いた。此度の婚儀には妹姫を向きたいとな」

炎に片頬を照らされて赤く染まった笑みから発せられた言葉に、内心で納得する。

ツヴァイといえばモーリス大陸の西を支配する、ファルガスタに並ぶ大国だ。

同時に百年戦争の際ファルガスタと戦った元敵国でもある。

百年戦争直後にも炎帝がツヴァイの姫を娶っていたが、三百年経った今もその流れは続いているらしい。

「まあ、しばらくは断るつもりだがな」

なるほど、と呷くとそう返された。

「地震のことがあるのに結婚などしている場合ではないからな。その辺りのことはツヴァイ王も心得ているだろう。落ち着くまでこの話は進めないよう取り計らってくれた……若いのに話の分かる御仁で助かっている」

ツヴァイ王をまだ見たことはないけれど、確かに話の通じる人なのだろう。

「そういうわけだ。問題はない」

ヴァノツサはにやりとした笑いのままその言葉で話を締めくくる。確かにそれならすべてが終わった後で花嫁が冬宮に来ることになるし、問題はないだろう。

問題はその後、魔女と共に後宮にいた愚帝に対する世間の目ぐらだがそれは本人がすでに覚悟していることだ。私がどうこう言えることではないだろう……結果的にヴァノツサが結婚できなくなったら少しぐらいは手を打ってあげたいところだけけれど。惚れ薬くらいなら頑張れば作れるかもしれないし。

だからこれ以上その話に触れるのはやめようと口を閉ざしたら、逆に問われた。

「先程話している時、先代が貴女の真の名を知っていたと言ったな」
……覚えていたのか。

炎の光で熱せられる片頬に手の平を当て、ひんやりとした感触を
与えながら視線を向けるとにやりと笑うヴァノツサと目が合った。

「すると、レイアスティというのは偽名か？」

「偽名ではありません。……ただ、真の名というのは姓と名すべて
を指すものだから」

「確かに貴女の姓は聞いたことがないな。何と云うんだ？」

「簡単に教えると思っ持っているのですか？　魔女が真の名を教えるこ
との意味ぐらい知っ持っているでしょう」

即答するとヴァノツサの笑みが崩れ眉間に皺が寄る。だがこれば
かりは教えるわけにはいかない。

例えこれから先教えることがあるとしても、今言っ気はなかった。
悪用されるだなんて思っってはいない。

けれどこの名を呼ぶのはあの人だけでいいと思っっているから、た
とえ相手がヴァノツサであろうと教えたくはなかった。

……リズが言うかも知れないけれど、それは私自身の失態のせい
だから文句は言えない。

何となくあの騎士は言わないのではないかという気もするし……
勘だから確証はないけれど。

あの時リズに語った心境をヴァノツサに話すこともしなかった。

まるで騎士みたいだと言われた胸の裡を明かすことは、彼に不安
を与えることになると思っったから。

真っ直ぐにこちらを射抜く紅蓮の瞳を、同じ強さで見返し黙り込
む。そうして沈黙の舞い降りる室内で睨み合う。

「分かった」

どれだけの時間そうしていただろうか。最初に目を逸らしたのは
ヴァノツサだった。

諦めたようにふいと視線を逸らしたヴァノツサは疲れたように椅
子の背に身を預ける。

降参と言っっているような仕草に目を閉じると溜息が耳朵を打つ。

「毎回俺は貴女に無理強いいして尋ねた言葉で墓穴を掘るからな。今

回は止めておく。……これ以上訊いたら本当に貴女がいなくなりかねない」

「よく分かりましたね」

「本当に手厳しい魔女だな。まったく、炎帝である俺をここまでコケにできるのは貴女ぐらいのものだ」

「冗談めいた口調で返すと、やれやれと仰向いたヴァノツサが腕を脛の上に乗せぎし、と体を後ろに傾ける。

ただでさえ政務で疲れているのに遅くまで起きているせいだろう。長く吐き出した息には疲労の色が濃い。

早く眠ればいいものを、そう思ったところで溜息を漏らす。

恐らくリズと私を待っていたせいで休んでもいないのだろうこの男は。

「……すみませんでした」

自分の独断で彼の騎士を連れて行き、あまつさえ危険に晒したことを。

そして私がこの国を離れることを僅かでも恐れている彼を置いて書置き一つで出かけたこと。

自分がしたことを後悔したりはしないけれど、謝罪するほどではないとも思えない。

背筋を伸ばし、銀の横髪がテーブルにつくの横目にしながら頭を下げる。

数秒してから顔を上げると、ヴァノツサが眉間に皺を寄せているのが見えた。

……謝罪すら腹が立つのだろうか。

怪訝に思い黙っていると、彼は大仰に溜息をつきおもむろに腕を伸ばした。

そつと頬に手が触れる……触れて、軽くつまんだ。

「？ 何をするんですか」

「貴女が馬鹿だから思わずつねってみた」

「……意味が分からない上に何で馬鹿だと頬をつまむのかも分かり

ません」

あまりに優しい力でつまむので痛みはないけれど、ふにふにと何
度もつまんでいる様子は楽しんでるようにも見える。

「意外と柔らかいな」

「硬いと思っていたんですか。それより、私で遊ばないでください」
ぱしんと手をはたいてやると、ヴァノツサの眉間の皺が更に深く
刻まれる。だがそんなことで怒られる筋合いはない。

「一体何がしたいのか。」

黙って答えを待つっていると、はたいた手を掴まれた。

「どうせ貴女は俺が怒っている理由を、勝手に行動したからとか俺
の騎士を無断で連れて行き危険に晒したからだとか思っているんだ
らう」

「違うんですか？」

「間違っではない。だが肝心なことが抜けている」

そういえばやけに怒っていると思っていたら、他にもまだ理由が
あったのか。

言われてみて少し考えてみたけれど答えが浮かばず、首を傾げる。
それで更に怒られるのだろうということは分かっていたけれどど
うにもできなかった。

魔女が城下に出たことに対してだとしたら、きちんと髪を染める
という対策は取った。

民を危険に晒したというわけでもない。むしろ助けたとも言える。
他に何かあるだろうか。

「……本気で分かっている顔だな、その顔は」

「分かりません」

だから素直に答えると、ぎゅっと手を握る手に力が籠もった。
包まれるように掴まれた手を凝視していると、ヴァノツサがその
手を自分の方に引き寄せる。

くい、と私まで引き寄せられてテーブルにもう片方の腕をつけた
時掴まれた手に柔らかな唇が触れたのを感じた。

「ヴァノツサ　？」

「貴女の身を案じていた。結果もある、リズムもいる。だがそれでも貴女が傷つかないなどという絶対的な保証はない」

指先に触れた唇が離れる瞬間、その唇が微かに震えているのが分かりはつとする。

「貴女はこの国を救える唯一の希望だ。他の誰も貴女に取って代わることはできぬし、俺でさえもその役割を担うことはできない。人は誰しも誰かの代わりになれないと言うが、同じ役割を担うぐらいならできる。だが貴女の場合は違う、貴女しかないんだ」

「……」

「俺が求めていることは総じて貴女を危険に晒すことだが、それは今ではないはずだ。結果的に先代に会えたのなら間違いではなかったかもしれないが、もしも刺客の罠だったらどうするんだ」

ああ、どうしてヴァノツサがあんなに怒っていたのがやっとなんかかった。

この男は私を心配してくれていただけだったのか。

理由が分かると今まで向けられた怒りがすとんと胸に落ちてきて、私はヴァノツサの手に触れる。

発した声が穏やかなのが自分でもよく分かる。

「地震の原因を追う以上、そして魔女たる私がこの国にいる以上危険は絶えません。そして炎帝である貴方が常に私と一緒にいるわけにもいきませんし、私達がこうして冬宮以外の場所で行動を共にすることは不可能でしょう」

「そんなこと分かっている……っ」

「私は私の、貴方は貴方のすべきことがあり、それは重なっているようで別々のものです。貴方は私の役目を担えないと言いましたが、それは私だって同じです。だから私はこれからも私のすべきことのために一人で勝手に行動すると思いません。貴方が私の預かり知らぬところで政務を行うのと同じことです。けれど」

たしなめるような言葉に、ヴァノツサが声を荒げる。

だがそれを遮るようにして私は彼の手をやりわりと握った。触れずとも言葉は伝わるけれど、彼の震えを治めるためにそうした。

「けれど、心配はありがたく頂戴します。随分と不器用ですが、貴方のその優しさは嬉しく思います」

笑みを浮かべてそう続けると、ヴァノッサが軽く目を見開く。

その様子に笑みを深めながら私はまるで幼い子供を相手にしているような気分になった。

ヴァノッサが幼いというわけではない。確かに危ういほどに若く青いがそういう意味ではなかった。

ただ、今の自分の気持ちがあひどく落ち着いていて私自身が老熟してしまつたように錯覚したせいだ。

もちろん三百も歳の差があればおかしな話ではないのだけれど、それより自分がどうしてこんなに落ち着いているのかが不思議だった。

あの北の孤島で手を差し伸べられた時とは形勢が逆転している。けれどあの時からヴァノッサはまったく変わっていない。

まっすぐにこちらに手を差し伸べ、同じようにまっすぐに私を見ている。歪みを抱え、悩んでも変わらずに。

そして私はそれが心地良くて、こうして穏やかな気持ちでいられるのだろうか。形勢を逆転させて彼を諭すことができるほどに。

こんな風に素直に心配してくれる人間など、あの人以外にいなかったから。

内心でそう呟いた時、空を覆う雲が途切れ月明かりが窓から差し込んできた。

明るさに釣られるように空を見る。そこには大きく強い光を放つ花月が。

「え？」

花月があるはずだった。

だが夜空に浮かんでいるはずの花月は見えず、それを隠すように

揺らめく炎が見えた。

強い月明かりを背負い浮かぶ炎はまるで紅の月のようで、それを見て不吉だと感じると同時に背筋がぞわりと粟立った。

その紅の月が何であるのか、その瞬間分かってしまった。

「どうした、レイアステイ」

「黙っていてください。窓に背を向けたまま、扉の方へ向かって」
きつとこの炎は何もしない。そう頭で何度叫んでも不安が拭えず、私はびしゃりとヴァノツサにそう告げ窓へと一歩進む。

がたんという音がして椅子が倒れる。ふらつく体のせいで上手く歩けないせいだ。

炎とその背に背負う月明かりがぶれて見える。

次第に襲い来る吐き気に口元を押さえながら、横目でヴァノツサが素直に扉の方へと向かうのを確認した。

ヴァノツサを庇うように震える片腕を広げる。もう片方の腕で強い結界を張った。

どうしてここまでするのだろう。この炎の正体を私は知っているのに。

「ひどいな」

一連の行動に「彼」もそう思ったのか、揺らめく炎がそう声を発した。

花月を隠す紅い月は自らも光を発しながらゆっくりと人の姿を形成していく。

「あれは……」

背後からヴァノツサの声が耳朵を打つ。

私はそれを聞きながら沈黙でもって「彼」が人の姿になるのを待つ。

腕が伸び、空を抱くようにゆっくりと広げられる。次に足が伸びていく。それは精霊が召喚される時の光景に似ていたけれど、精霊が風や大地を媒体に形成されるのとは逆に「彼」は何も媒体としていない。

強いて言うなら魂を媒体としているが、それはやはり精霊の召喚とは異なるものだ。

そんなことを考えていると、最後に逸らされた背と横顔が見え、ふわりと紅蓮の髪が舞うのが見える。

そうして完璧に人の形を取った炎はヴァノツサそっくりの端正な顔立ちに、優しすぎる笑みをヴァノツサに向けて浮かべた。

「初めまして、二代目炎帝。会うのを楽しみにしていた」
それから若干悲しそうな笑みを私に向けた。

ヴァノツサなら絶対浮かべそうにないような、ひどく儂い微笑みを。

「約束通り会いに来たよ レイアスティ」

第十九話 二つの炎

こんな形で再会することを、一体この国の誰に予想できただろう。きっと私のことを預言した預言者にすら分からなかったに違いない。

いや、唯一私やヴァノッサ、そしてビーになら予測はできただろう。

無意識のうちに覚悟だっと思っていた。その証拠に私の身はヴァノッサを守るうとしていて、

それでも。

「初めまして、二代目炎帝」

「貴方が、初代炎帝……？」

三百の時を越えて二人の炎帝が出会ったその時、私はどこか夢を見ているような気分だった。

花月を背に立つ紅蓮の王は、悲しげな笑みを浮かべたままた黙って見ていた。

けれど、ヴァノッサを守るべく広げた腕を下ろすと彼は安堵するよように吐息を漏らした。

「何もする気はないよ」

柔らかく笑う彼は、紅の外套の裾をつまみ「やっぱり怖いかなこれ」と見当外れのことを言っている。

私はそれに対して何の言葉も返すことができないままくず折れた。

「レイアステイ!？」

「だい、じょうぶ……です」

維持できなかつた結界が弾けるような音を立てながら砕ける。

頭の片隅でその音を感じながら荒い息をつきつつ答えるも、ヴァ

ノツサにそんな言葉が通用するわけもなく。

「どこがだ！ おい、一体どうした！」

扉の方に向かえとあれほど言ったのに、どうしてこつも聞き分けのない男なのだろうか。

駆けてこちらに向かう足音に内心で舌打ちしつつも、悪態をつく体力もない。

労わるように肩に触れた指先にもう一度大丈夫と告げ息を吐くと、若干気分の悪さが和らいだ。

「……」

ビリオン様、と呟いた声には彼は答えなかった。

代わりに窓の外、足元を支える地のない空の中へ彼はふわりと舞い上がる。

今私の肩に触れる男よりもいくらか短い紅蓮の髪が揺れる。離れた分だけ気分が楽になった。

「すまない　安易に近付いていい身体ではなかった。そちらの炎帝は無事のようにだが」

ふるふるとう首を振り発された声に、はっと後ろを振り返る。

そういえばどうして私だけが不調を訴えているの？　魔女にのみ与える何かがある人にあると？

ひたと彼を見据えるヴァノツサの様子には普段と変わった様子などない。ではなぜ？

急激に下がる体温にぎゅっと身体を抱きしめ、視線を元へ戻す。

そうして立っている場所が地面であるなら、そしてあのような登場の仕方をしなければどこからどう見てもただの人間にしか見えな
いあの人はわずかに首を傾げて問う。

「どうして、君だけがそうなるんだろうね？」

「……私が知りたいぐらいです。なぜヴァノツサが無事なのか、なぜ私だけがこうなるのか」

ともすれば無邪気ともとれる問いにきちんとした回答を与えることはできない。

だから荒い息のままそう返すと、途端にビリオン様の顔が凍りついた。

無表情と言うにはあまりに驚愕したような、けれども余裕なんて遠くに消え去ったかのようなそんな顔で彼はこちらを見下ろした。

私とヴァノツサを見る彼の紅い目は、一体どうしてそんなに驚きに揺れているのだろうか。

瞬間的に視界がぼやけるといふ状況を何度も繰り返しながらぼんやりと空を見上げる。すると肩口に指が食い込んだような痛みを感じた。

「？」

振り返れば、ヴァノツサも同じように空を見ながら 震えを堪えるように全身に力を込めていた。

私の肩に触れていることすら忘れているのだろうか。力の籠もる指先にそつと触れると息を呑む音がした。

「すまない」

「いえ」

痛みという名の熱を与える熱源は、具合など悪くないであろうに震えた吐息とともにその声を絞り出す。

心から悪いと思っっているような声に首を振り、消えた熱を惜しみながらも冷えた身体を立ち上がらせる。

そこまで回復したのはあの人私の身を案じて離れてくれたからだ。

会えるなら会いたいと思っていたのに、離れれば離れるほど楽になる体が恨めしかった。

けれどそんなことに構っている場合ではない。もし今リズが来たらどうするのだ。

「ビリオン様。一体なぜ、皇城にいらしたのです？ もし人間に見られたらどうなさるおつもりなのですか」

見開かれた目をじっと見据え、問う。

花月に照らされる私の顔を見返すビリオン様はああ、と笑った。

「誰も私が初代炎帝とは思わないだろう。私はただの亡霊、民にはそう思われていればいい」

「だからといって」

「君に心配されるなんて嬉しいな。だが　血が、流れたのかと思った。」

それほどまでに紅い瞳がすつと細まり、ヴァノツサを捉える。純然たる敵意が、そこにはあった。

自分の子孫を見ているような目だとはとても思えなかった。

「君の名は」

問う声が答えないことを許さないと暗に告げている。

このまま攻撃でも仕掛けかねないと思えば腕を広げると、背中にごか呆けたようなヴァノツサの声がした。

「ヴァノツサ……ヴァノツサ・ロート・ファルガスタ」

力のない声に、心が冷えた。未だかつて聞いたことのない声だ。ありえないほどに、小さく自信のない。

けれどその気持ちが私にはよく分かった。この人にこんな目を見せて怖くないはずがない。たとえよく彼らがよく似た顔を持つ者同士だとしても、空気を震わせる鋭さが強気に出ることを許してはくれない。

「ヴァノツサ」

冷やかな声でそう呼んだのはビリオン様だ。

そしてすつと腕を伸ばし、指先をこちらへ向けた彼に反射的にヴァノツサを庇うように立つ。

私のその態度に彼はやはり寂しげな微笑を一つ浮かべた後で。

「彼女をこの国のために利用するつもりか」

指先から鮮やかな光が漏れる。

花びらのように舞うその光は辺りを月明かり以上に明るく照らし、緩やかな流れてビリオン様の手を覆った。

小さな光が集まり、輪となって浮遊する。

それはあまりに幻想的な光景だったが、まるで刃の切っ先を思わ

せる鋭さを持つ光の正体がそんなにいいものではないことを理解していた。

なぜならそれは、私がかつて使ったことのある力なのだから。

「壁よ」

呟き、手の平を突き出すとしゃんつと音を立てて結界が形成される。

淡い緑の光を放ち現れた壁越しに彼の光を見つめると、それは戸惑うようにゆらりと動いた。

「レイアステイ、君は」

「ファルガスタ皇帝に、貴方の子孫に一体何をなさるおつもりなのですか？ 怪我ではすまないかもしれないのですよ」

「この国が君に何をしたか忘れたわけではないだろう？」

「ええ、思い出そうとすればいくらでも思い出せます。けれど思い出して、その上で私はここに帰ってきました。ヴァノッサの力となるために、地脈破壊解決の糸口を探すために、そして精霊達の言うとおり貴方が生きているならもう一度会うために」

「……」

「それに、貴方の子孫たる二代目炎帝は危険を冒し単身で北の孤島にやってきました。その決意を私は買ってまいりますから。それに応えられるかは別としても」

静かに腕が下ろされる。

同時に、恐らくはヴァノッサを攻撃しようとしたのであろう光が、霧散した。

そして落ち着きを取り戻したのか、ビリオン様は紅蓮の髪を揺らし横に首を振る。髪の間から苦々しく歪めた口元が見えた。

この方がこんなに落ち着きを失うなんて。

何かと葛藤しているかのような苦しげな表情に内心でそう呟く。いつだって冷静で穏やかだったこの人が、攻撃の魔術を使うなんて。「貴方は」

心の中の自分の声が驚きに震えているのが分かる。

けれどそんな私の様子にはまったく気がついていないのか、背中にヴァノツサの声が響いた。

「貴方は、魔導士だったのか？」

目の前で魔術を使われ、すでに確認するような問いになっているそれにビリオン様は首を振った。

「元々はただの人間だ。この国の歴史書にもそう書かれているはずだが？」

「ならばなぜ魔術を扱える。そのような話は歴史書には書かれていないはずだ」

「それはそうだよ」

ビリオン様が向ける強い敵意は変わらずだったが、それを受けるヴァノツサはすでに瞳を揺らせたりはしなかった。

挑むような視線と空気を震わせる低い声で言い放つと、ビリオン様は若干眉を上げ口の端を吊り上げた。

ふわりと光が舞う。

「私は亡霊。今やただの人間ではないのだから」

「不死掛け、ですね」

再度現れた夜闇を彩る柔らかな光に、ほぼ反射的な動きで結界の力を強める。

そうして結界の緑が内部にいる私とヴァノツサに見える世界の色を歪める中、もはや問いかけではなく確たる事実として不死掛けのことを口にした。

それはもうどうしようもない事実で、変えられない真実で。

いくら昔に戻ったような感覚でいても、ここはあの時から三百の時を超えていて。

どれだけ自分にとって都合のよい解釈をしても捻じ曲げられないことに歯噛みしながら口にした言葉に、あの人は答えなかった。

「君が彼女を連れ出したのか」

代わりに、ヴァノツサに対してそう問う。

緑に歪んだ景色の中でそだけ切り取られたかのようにはっきり

と見えるあの人の顔は、悲しみも怒りもなくなただただ静かなものだった。

無感情を表したような声にヴァノツサが頷くと、彼は一瞬押し黙った後で深く息を吐き出す。そして、意外にも微笑んだ。

緩やかに上がった口角に無感情が発する冷たい空気が霧散する。

「よくやった、さすがは我が子孫……とでも言うべきかな。私の望みを叶えてくれたこと、感謝する」

「……望みだと？」

「最果ての地には彼女の張った強い結界があった。いくら攻撃しても壊せぬ結界だから途方に暮れていたのだよ。私はレイアステイに会うことを、ずっとずっと願っていたのに」

そう言いこちらを見た彼の目は、先ほどまでヴァノツサを見ていたのとは雲泥の差があると見えるほどに優しくなった。

彼を取り巻く光が撫でるように結界に触れ、霧散する。

先ほど現れた光と違い攻撃性のないそれは、自らこちらに触れることのできないビリオン様の代わりなのではないかと思った。

消えた光の先で、どこか拗ねたような顔を浮かべるビリオン様が見える。

「拒絶でもされたのかと思っていた」

そんなことを言われても。

どこか子供っぽい紅蓮の瞳に深く息をつきながら返す。

「それを望んだのはビリオン様です」

「もちろん、それはそうなのだけれど。それでも会いたいことになりなどなかった」

君が人目につかぬよう、そう言って人目につかぬよう最果ての地に屋敷を用意してくれたのは他ならぬこの人だ。

昔よりいくらか無邪気になった彼は低く笑って続けた。

「そのために私はこの世で生き続ける道を選んだのだから。もし会えなかったらどうしようかと思っていた」

「何だと」

ああ、それが答えなのですね。

怒りを多分に含んだヴァノツサの声をどこか遠くに聞きながら、ぼんやりと心の中で呟く。

涙はもう出なかった。これが確たる事実なのだと、そのことがずしりと押し掛かってきてそれどころではなかった。

力なくビリオン様の瞳を見つめると、彼は柔らかい視線を僅かに曇らせてそれから瞳を閉じる。

閉じられた瞳が私と彼の間に越えられない壁を生み出したような錯覚を覚える。

もう後に引くことはできないのだ。

どう否定されようと彼がこの世界に存在する以上、事實は曲げられないのだけれどそれでも否定されればまだどこかに希望を持ち続けられた。

それでもこの人が事実を肯定し目を閉じた瞬間。

もう、どう頑張ってもあの日には戻れないのだと思えば同じように瞳を閉じようとして。

「ふざけるな」

思わず心が震えてしまったほどの強い声に目を見開く。

振り返れば、純然たる怒りで燃える瞳を前方に向けるヴァノツサが見えた。

先ほどあんなに自信を失ったような小さな声を上げていたのに、それが微塵も感じられない。

真つ直ぐな立ち姿は私の前に進み出で、自分と似通った姿の祖先に向けて声を荒げる。

「貴方のその選択がこの国の民を苦しめていること、重々理解しているんだろう！」

「もちろんだ」

「ならばなぜ！ 貴方はこの国の初代炎帝だろう！ 民を愛し、長き戦に疲弊したこのファルガスタの繁栄を生み出したのは貴方じゃなかったのか！」

いくら結界があるとはいえ、どうしてヴァノッサはここまでばかりと物を言えるのだろうか。

強い怒りをぶつける現炎帝に疑問を抱き、一瞬で出た答えに失笑しそうになる。

きっとこの男は私がいようとまいと、結界があるうとなかろうと関係なく同じことを言うのだろうと。

そしてその無鉄砲で青く、そして強い意志を持つこの男に私は付いて来たのだから。

今ここでビリオン様と一緒にあって瞳を閉じている場合ではなかった。

今や目の前にあるヴァノッサの背中を見て、悟られないように口の端に笑みを浮かべる。

この場において誰よりも非力で最も傷つけられる可能性の高い人間が、この場において誰よりも強いことに気がつき、なぜだか笑いたくなくなった。

怒りに震える空気を受け止め、ビリオン様はうつすらと瞳を開くけれどそこにあるのはヴァノッサとは対称的な冷たい光だった。

「欲するものがあるからだ。そのためならば国も民も世界も、すべてを犠牲にしても構わない」

そして発する答えもまた、ひどく対称的なもので。

私はかつてのあの方からは想像もつかないような言葉に愕然としながらも、どこかで納得している自分を嫌悪した。

二人の炎帝は、それぞれの想いを熱く冷たくしてお互いにぶつけ合う。

その間にも花月が朝に向かって沈んでいくのが見えた。

世界はそうして動いているのに、私達だけが時を止めたかのように遠い次元で話を進めているような気がしてならない。

けれど、今目の前で起きているこのやりとりが現実だ。

「レイアステイ」

現実を受け止めようと苦心していると、ビリオン様に呼ばれる。

顔を上げると、世界の端が白む中あの人が微笑んだ。そして彼はそつと手を伸ばす。触れたらきつと温かいのであるう指先がこちらに向けられる。

「私と共にいこう」

柔らかく低い声は、強引過ぎない言葉は、あの日ヴァノツサに差し出された手と言葉よりも遙かに優しい。

けれどなぜだろうか。

「いいえ」

北の孤島で差し出された手に私は散々悩んだはずなのに、なぜか今はその手を取ろうという気持ちになれなかった。

驚きとも喜色ともつかぬヴァノツサの横顔を尻目に続ける。

「炎帝は約束通り陛下に会わせてくださいました。今度は私がこの炎帝との約束を果たす番です」

事態は勝手にこちらに向かって飛び込んできて、ヴァノツサが約束を守ったとは言い難いのだけれど。

そして多分それだけが理由ではないと分かっているのだけれど。

あれほど会いたいと願っていたはずの人からの申し出に応えることができず、そんな理由をつけて首を振る。

「ですから、共に行くことはできません。この大陸に起きている事態を収拾するまでは」

もしもこの人が地脈破壊に関連しているのなら、この言葉で少しだけでいいから迷ってくれないだろうか。

そんな都合のいい考えを幾分か持った自分に落ち込みながら答えを待った。

きつぱりとした声に、ビリオン様が深く息をつく。

伸ばした指先をそのままに「そうか」と呟いた。

「だけど、私もこのまま諦めるわけにはいかないんだ」

堂とした声が響く。魔力を孕んだその声に光が顕現する。

そうして私に向けて放たれようとした光に続いたのは、ビリオン様の攻撃でも私の防御でもなくヴァノツサの言葉だった。

「それは困るな」

口の端を吊り上げた、ひどく人の悪そうな笑みを浮かべたヴァノツサは軽やかな声で続ける。

「俺の魔女を連れて行かれるわけにはいかない。彼女は我らが救世主なのだから」

そうだろうか？ 華月の魔女。

そう同意を求めるヴァノツサの態度はビリオン様の神経を逆なでするようなものでしかない。

下手をしたら殺されてしまうかもしれないのに、どうしてこんなこんな演技を。

常ならば滅多に浮かべることのない甘い笑みを見て、即座にこの男が言っているのはすべて道化なのだと気付く。

けれどこれが演技なのだとビリオン様は知らない。気付いていない。

「彼女が君の魔女？ 違うだろうか？」

冷徹とも凄惨とも言える笑みを浮かべ、それだけで人を殺めることのできそうな敵意を放つ。

「彼女は私の魔女だよ。だから」
くるくるとビリオン様を取り巻く光が大きくなる。きいんと甲高い音がした。

「君がレイアステイを縛るなら、君の死こそが彼女の自由を得る鍵というわけだ」

「駄目 ヴァノツサ、下がって！」
「遅いよ」

結界で防ぎきれるかすら怪しい光の量に視界を奪われながら、手探りでヴァノツサの服を掴み後ろに追いやる。

けれどそれほどまでの光を放っていたはずなのに、いつまで経っても自分の体に衝撃が訪れることはなかった。

「そこまでです」

高らかに響く鋭い声が耳朵を打つ。

その声の主が誰であるのかを理解した瞬間、ああ私はまた後で怒られるのかとげんなりした。

徐々に暗さを取り戻す視界を凝らし、前方を見る。

するとそこには弓を構える風姫と、拳を突き出す地霊、炎を纏う剣を向ける炎鬼に水気でどこか霧に包まれたように見える槍を構える水王の姿が見えた。

世界を構成する四大精霊の王に囲まれ、ビリオン様は呆れたような息をついて手を下ろす。

「まさか君達が全員揃って来るとはね」

「小娘の危機だって知って飛んできたからね　それより、久しぶりだねビリオン坊や。少し見ない間に随分過激になったじゃないか」
「我らが盟主に刃を向けるとは、墜ちたか坊主」

首筋に切っ先を当てられ、それでもどこか余裕があるように笑う
ビリオン様に彼らにはやりと笑みを浮かべる。

けれど攻撃的で挑戦的なその笑みは、決して相手に対して好意を抱いているものとは思えなかった。

「ご無事ですか、レイアステイ様」

常ならば性質の問題上ガラナに近づくことのできないマーグリスが、槍の先からぼたりと水滴を落としそう訊ねた。

穏やかな笑みに頷くと、彼は「僕達皆飛んできたんですよ」とにこやかに言い放つ。

後で絶対お説教ですからね、と言わんばかりのにこやかな笑みに戦慄を感じ私は何も言えないまま頭を抱えた。

けれどそこで今落ち込んでいる場合でもなくて、私は気を落ち着かせてビリオン様を見上げた。

精霊王達に囲まれながら、それでも堂々とした様子の彼は私の視線に気付き眉尻を下げる。

「お互い」

呟いた声は憐く、小さい。

「お互い、願うものが変わってしまったのだね」

泣き出しそうな声に、私は頷くことも否定することもできなかつた。

第二十話 紅蓮の王

変わったものは、年月だけだと思っていた。

その証拠にあの人は私の記憶通りの姿でいるし、私だってあの人の記憶の通りの私だと思う。

けれどなぜだろうか、何かが違うと思ってしまふのは。

心にしみる、穏やかで優しい声。

聞き慣れていたはずのその低い声が聞こえた瞬間、指先が震えた。

「レイアステイ」

呼んだのは、あの人かヴァノツサか。判断がつけられない。

背後にも前方にも見える紅蓮の炎は、夜風に揺れる二人の髪。

三百の時を経て邂逅した、同じ立ち姿の二人に思わず眩暈を感じながら前方へと視線を向ける。

「いいえ、願うものはずっと変わってはいません。変わったとしたら、それは貴方の願いです。ビリオン様」

精霊達が向ける矛先を意にも介さず、こちらを真っ直ぐに見る瞳に向けて言い放つ。

すると軽く目を見開いた彼の瞳の奥に炎が生じたような錯覚を覚えた。

彼の視線をなぞるように吹き抜けた風が、私のドレスを揺らす。

軽やかに布が揺れていく音を聞きながら浅く息を吸う。薄く朝特有の清々しい匂いがした。

きつとこの国の民は明けゆく空に、この清々しい空気に包まれながらゆつくりと穏やかな眠りを楽しんでいるのだろう。

商人達はとつくに目を覚まし、市を開いている頃かもしれない。

静寂に包まれた城下に徐々に活気が満ちていく、境目の時間。

そんな風に過ごしているであろう大多数の人間達のことを想いながら、口を開く。

「国の繁栄を、民の安寧を願っていた貴方の願い。そして貴方やピ―、精霊達との平穩を望んでいた私の願い。どちらが変わったと言えるでしょうか？」

魔女一人のために国や民を犠牲にしてもよいなど、あの頃の彼が言ったことがあっただろうか？

答えは否だ。見上げた先の空に立つ彼に向けて強く言うと、精霊達の放つ輝きに包まれながらあの人は口を閉ざした。

力を失った体に、精霊達が矛先を下ろす。

けれど警戒は解いていないらしく、少し離れたこの場所からもぴりぴりとした空気が伝わってきた。

この様子なら私がいくらか気を抜いても問題はないだろう。そう思い、背後を振り返る。仰向いてビリオン様や精霊達を見ていたヴァノツサに声を掛けた。

「大丈夫ですか？ どこか怪我は？」

「いや……貴女のおかげだ、すまない」

どこか呆けたような声に安堵すると「貴女は」と続けられる。

「北の孤島を出る時もあったことだが、随分と人気者なんだな」

「言わないでください」

精霊達が活動を始める時間になったのか、薄かった朝の匂いが濃くなっている。

その匂いが普段よりもずっと濃厚なのは、四大元素の精霊王達がここにいるせいだ。

一所に集めるべきではない、惹かれあいながらも相反するもの達が揃いも揃って。

先ほどまで強烈な怒りを放っていたはずのヴァノツサのどこか呆れたような声に、釣られて溜息混じりの言葉で返す。

前方に視線を向けると、地水火風から顕現された精霊達と目が合った。

「これは小娘と坊や二人の問題じゃなく、あたくし達の世界の存亡に関わる問題だからね」

急いでいたのか、あまり大きな体積の土を集められなかったらしいアマンティは常よりも小柄な体でふん、と不機嫌そうに鼻を鳴らした。

けれど、それに対して言葉を返したのは私ではなくマーグリスだった。彼もやはり急いで来てくれたのか、朝焼けにどこか疲れた顔を見せながら笑う。

「レイアステイ様の危機を逸早く察知して、僕達を引っ張り出したのはどこの精霊王だったでしょうか」

「うるさいよマーグリス！」

何かしら、このどこか抜けた空気は。先ほどまでの緊張感が霧散して精霊達の団欒の場と化した冬宮の空で、はあと溜息を漏らす。

助かったことに変わりはないけれど、何だかとても滑稽な光景だけれどそれで「はいじゃあ解散」なんてなるような状況では、決してない。

「まあ、アマンティの判断も間違いではなかったということだろう。おかげで嬢ちゃんも傷つくところを見ずに済んだ」

オレンジ色の朝日に溶け込みそうな炎を発しとりなすように言ったガラナは、ガチャリと大仰な音を立てて再び剣をビリオン様に向けた。

首筋に炎が触れそうで触れない、微妙な距離まで近づけて。

「まさか貴様が我らの盟主に手を出すとは思わなんだ」

「私だって彼女を攻撃したかったわけではないよ」

失望するような声に、やれやれと首を横に振ったビリオン様は本当にガラナの剣など意に介していなかった。

その証拠に少し炎が触れたくらいでは顔色一つ変えない。決して温い炎ではないはずなのに。

「私は君の死を望んでいるんだよ。二代目炎帝、ヴァノッサ」

口の端を緩やかに上げて笑う彼の姿が、どこか輪郭を失ったよう

に見えた。

そしてそれは目の錯覚ではなかったらしい。はっとした精霊達の様子がそれを物語っていた。

朝日を背にして、鮮やかな光を輪郭にした彼は暗く影になった表情の中で確かに笑っている。

「ああ、でも そうしなくてもいいのかな」

「? どういう、意味だ」

「要は、私が地脈破壊を止めればモーリスは平和になるのだろうか？
今なら、それは好都合だ」

怪訝そうなヴァノツサの声にくすりと笑い声を漏らしたビリオン様は、溶けて透明になっていく外套をはためかせ両腕を広げて、宣言するように言った。

「ならばこのモーリスに一時の平穏をあげるよ。私も頼まれている手前、あまり長い間何もしないでおくことはできないけれど」

「な それでは何の解決にもならない！」

「構わないよ。解決させたくて止めるわけじゃないのだから」

ヴァノツサの怒号にきっぱりと返したビリオン様は、どこか開き直っているようにも見えて私は何を言っているのか分からずただぽかんと空を見ていた。

けれどそのまま黙って傍観者となれるほど、この事態に自分が関与してないとは思えず。

結局、先ほどビリオン様が言っていた言葉をなぞるために問いを發した。

「もう一度、教えてください」

どくんと大きく心臓が跳ねる音が聞こえる。

一度聞いたことをもう一度なぞるのは、恐ろしいものでしかない。答えを知っているだけに。

それでも訊かなくては。恐らく、それは私の義務でもあるのだと思っから。

体から力が抜けていくその感覚に耐えながら、ぎゅっとドレスの

袖口を握りしめた。透明になり、背後の朝日を共に映し出すビリオン様に向けて、逡巡しながらも言葉を発す。

「地脈破壊を行ったのは、本当に私に会うためなのですか」
言うのに、どれだけ時間をかけただろう。

きつとそれほどの時間など経過してはいないはずなのに、随分と長い時間が経ったような気がした。

ビリオン様は一瞬己の輪郭をゆらりと揺らめかせ首を傾げる。

まるでどうしてそんなことを訊くのが分からないといった様子だった。

辺りを取り囲む濃厚な朝の匂いも、精霊達の姿もそしてヴァノツサのことさえも失念したようにただ真つ直ぐにこちらを見つめる紅蓮の瞳は、純粹に不思議そうな色を湛えている。

けれどこちらが真剣に訊いていることを分かっているのだろう、顎に指先を添えた彼はどこか甘い声で「そうだよ」と答えた。

「頼まれたから、とか色々付け足した理由はあるけれど、結局私は君に会うためにここまで来たことに変わりはないから」

穏やかな笑みに包まれて発された言葉は、決して穏やかではなく目を見開いた私に彼は笑いかけながら背後にある城下を振り返った。

遠い目をして向けた先で彼は何を見ているのだろうかと考え、きつと現在の城下ではないのだろうかという結論に達する。

「それで、君はどうする？」

視線を交わらせることなく問われ、一瞬答えに詰まる。どうする、と言われても。

困惑しながら同じように城下を見る。

そうして思ったのは、今日 正確には昨日か 見て回った城下の光景と崩れゆく家々の石片とそこに生きていた人間達。

遠い日のことは、思い出そうとしても思い出せなかった。

同じものを見ているようでも、結局あの人と同じものを見ることはできないのだと思い知った。

それはひどく悲しいことであつたような気がするけれど、世界からしてみたら当然のことなのだろう。

永遠不変のものなど、ありはしない。たとえ数百年続くものがあったとしても、それは永遠ではないのだから。

けれど、だからこそ得られるものだつて確かにあるはずなのだ。失うものだつて、多いけれど。

「貴方をお止めする以外に、道などないでしょう」

やや感傷的な気持ちになりながら言うと、隣に立っていたヴァノツサが笑むのが見えた。

口の端を上げて、どこか自信に満ちたその表情が横目に見えるとまるで盟友のようにも思える。

昔はこうして立場ある人間の横に並ぶことなど萎縮して考えられなかつたというのに、この男相手だとなぜか遠慮も萎縮もなく立てるのだから不思議だ。

恐らく出会いが最悪だつたせいかもしれないけれど、今はそれが楽だつた。

朝日が赤みを帯びた色を失い、ほぼ完璧な夜明けを運ぶ中あの人は少しだけ不機嫌そうに問う。

「こんな風に不機嫌そうな顔を見るのも、時を経た証拠なのだろう。どうやって止めるつもりなのかな？」

そんなもの、思いつくようならどうにかしてる。

意地悪な問いかけに心からそう思つたけれど、もっともな質問だつたので一瞬考え。

「やめてくださいと言えは、やめていただけるのですか？」

問いに問いで返すと、ヴァノツサが驚いたように勢いよくこちらを振り返り、ビリオン様はきよとんとした顔で一瞬沈黙した。

精霊達もなぜか無言で、舞い降りた沈黙に思わず身を引く。

遠くで皇城の喧騒が聞こえてきそうな、それほどの沈黙だつた。

「ど、どうかしましたか？」

耐えきれず訊ねると、ヴァノツサが「いや」と首を振つた。

「そうだな、それが一番穏便だ」

「何ですかその呆れた感じの言い方は」

「小娘が馬鹿なこと言ってるからだよ。言って止めるなら最初からしないだろう」

「アマンテイ、口を慎みなさい。ですが彼女の言う通りですわ、レイアステイ様」

それはそうだけど。

下ろした風の髪の毛をふわりと舞わせて困ったように小首を傾げるエイミーの言葉に、何だか途方に暮れなくなった。

うなじに張りついた髪を払いのけると、すうとした冷たい空気が肌に触れる。

その気持ちよさで頭を冷やし、何て言えばいいのだろうかと考えているとビリオン様が先に言葉を発した。

しんとした空気に、低い声が響く。空気を震わせて耳朵を打つその声は、やはりどこか甘い。

「君に言われたらさすがに悩むな　でも、言われなくても止めるよ。先ほども言ったように、一時期だけだね」

蕩けるような微笑が空色とともに見えた。

「ヴァノツサ」

けれど、次の瞬間見えたのはどこか敵意を含んだ鋭い表情。

声も甘さを欠いていた。

突然呼ばれたヴァノツサはこちらに向けていた視線を前方に移し、先ほどの私同様額に張りついた髪を指先で払いのけた。

「何だ」

普段通りのぞんざいな口調で返し、それでもどこか緊張の色を孕んだ紅蓮の瞳でビリオン様をじっと見つめるヴァノツサ。

やはり先ほど殺されかけたせいもあるのだろうが、それだけではなくこの純然たる敵意に緊張しているのだろうと思った。

そして、次の瞬間ビリオン様が発した言葉でその緊張は私にも伝染した。

なんて殊勝なことはしてやらず私は数日前にアマンティと交わした会話を思い返すことにした。

「いいかい小娘、今からあたくし達大地の精霊が地盤を支えるからしっかりスペルを唱えなさいよ」

「分かったわ。これもこの前と同じですべて精霊の召喚スペルでいいのかしら？」

ファルガスタ南部の田舎町の片隅。

風車が回るそのすぐ傍で私とアマンティは二人大地を見つめていた。

あまり良質の土が見当たらないのか、普段より小さなサイズで顕現するアマンティが嘆息する。連日の働きで疲れているのだろう。

「問題ないわ。精霊の手をできる限り多く借りられればそれでいいからね」

「こき使つてごめんなさいと伝えておいて頂戴」

「分かっている。皆もそんなに気にしじゃないよ。どうせ応急処置程度のものなんだし」

「……………」

押し黙ると、アマンティが何やら不安でも感じたのか早口でため掛けるように続ける。

「ばらばらと落ちる土塊が地面に弾かれて吸収されていった。」

「分かっている？ これはあくまで脆弱な地盤のせいで二次災害が起きないようにするための、本当にただそれだけの応急処置よ。これじゃ何の解決にもならないし、今の状態では地脈を治そうとしても無駄だからあたくし達は手を出さないよ」

「ええ、分かっているわ。急がなくちゃいけないことも、ちゃんと分かっている」

そう、信じたくなくとも分かっているわ。

この事態を引き起こした張本人が私にそう告げたのだから。それに、地脈が未だ不安定であることは私にも感じられる。

魔力が放出されていないことが幸いなほどに、いつか破裂しそうな穴がこの世界には確かにある。

知りたくも認めたくもないけれど、それは変えようのない事実だ。

「ならいい。それじゃ始めようか……その前に、小娘」

「何？」

スペルを唱えるべく息を吸い込み、意識を集中させる。

しかしそれを阻害する声が聞こえて思わずつつけんどんな声を上げると、アマンティが珍しく憂うような表情を見せた。いつも豪快に笑っている地の女帝のそのような姿を見るのはどれくらいぶりだろうか？

紺のドレスを揺らす風が冷たさを増すと、その風から体を守るようにアマンティが前に浮かんだ。

「あまり気を落とすんじゃないよ。誰にも、あたたくし達四大精霊ですらこの事態は予測不能だったんだから」

「……そうね。ありがとう、アマンティ」

それはビリオン様が生きていたという事実だろうか、地脈を破壊していたということだろうか。

きつとどれもが当てはまり、どれもが単体では外れになるのだろうなと考えているとアマンティが空を仰いだ。伸ばされた手から魔力の奔流を感じる。

「行くよ」

「ええ」

両手を伸ばすと、手の平がじんわりと温かくなる。

その感覚に眼を閉じ、普段は唱えない正式なスペルを口にした。

ここ一月ですっかり唱え慣れてしまったスペルだ。

「水を生み、花を咲かせ、堕ちゆく世界を支える者。汝、地の女帝アマンティの名の元に、今こそその力を示せ」

力の奔流はそれだけの数の精霊が傍に集うことを意味している。

そして精霊達が力を奮うことも。

眼を閉じ、世界を見ることを自ら手放すことで集中力を増そうとした私は胸中でそっと呟く。

一体あとどれだけ、この時が続くのだろうか。

激しい音が響き、扉が開かれる。

そこで思考を中断し振り返ると、走ってきたのかぜいぜいと荒い息をつくりズと目が合った。

騎士なのに随分と息が上がりやすいことね。

……ああ、そうだった。

「ごめんなさい、お茶を淹れるのを忘れてました」

「き、さま！」

「別にいいじゃんか。レイアのお茶が飲みたくて走ってきたわけじゃないんだし」

それは事実だろうけれど、あえて言わないであげて頂戴。余計に怒らせてしまうじゃない。

ビーの言葉に顔を赤くするリスを眺め辟易すると、彼は珍しくすぐに自制心を取り戻したらしく真っ直ぐにこちらに歩いてきたので手近なソファを指し示した。

「どうぞ掛けてください。私のソファではありませんが」

「このソファは」

「そこは普段誰も座らない所なのでご安心を」

「……そうか」

恐らくヴァノツサが普段座る場所ではないのかと考え座れなかったのだろう。きっぱり言いきってやると、彼はあっさりソファに身を沈ませる。これで実はヴァノツサがよく座る椅子なんですよねそれと言ったら斬りかかってきそうだから、何も言わないことにしておこう。事実ヴァノツサはあのソファに座らないのだし。

腕を一振りし、ティーセットを浮かべて正面のテーブルへふわりと置く。先程からお茶を飲もうと思っていたおかげで湯は準備ができているから、すぐにリズにお茶を振舞うことができるだろう。

「それで、私に話とは？」

尋ねると、息を落ち着かせたリズが背を伸ばしこちらを半眼で睨みつける。

ただしそれは敵意から来るものではなく、真剣そのものだからなのだろうと判断する。もちろん、幾らかの敵意は含まれていたと思うのだけれど。

「単刀直入に言う」

ティーカップやポットを蒸らし終え、お茶を淹れるとふわりと甘い香気が漂う。リズが甘いお茶を飲むことができるかは分からなかったが、これしかないのだから仕方がないだろうと諦めた。

リズに向けてティーカップを置いてやり、自分の分のカップは両手で包み口を付ける。

しかしそれが問題だった。

「貴様、本当は陛下の寵妃などではないだろう」

あまりにも単刀直入な言葉に、思わず甘い熱を吐き出しそうになってしまったのだから。

第二十二話 魔女が寵妃たる所以

冬宮に居座る救世主候補の魔女は、現炎帝陛下の寵妃だ。

ヴァノツサの口から告げられたその言葉が皇城内でまことしやかに囁かれ始めて、一体どれぐらいの時が過ぎただろうか。

いや、そんなことはもうどうでもいいのだろう。

今その話は、もの見事に崩れ去ろうとしているのだから。

「なぜ、そう思うのですか？」

器官に入りかけた熱を小さな咳払いで収め、正面に座る騎士へと視線を向ける。真剣に問うと焦りが伝わりそうだったから、あくまで余裕のある笑みを浮かべて。

膝に飛び乗り丸くなる灰猫は、そんな私の思惑を知っているのか黙って目を閉じる。笑うでも焦るでもなく、寝入った振りをすることで沈黙を押し通すつもりなのだ。本当なら私もそうしたい所だったが問われているのは私であって他の誰でもないのだから、狸寝入りを始めるといふことはできない。

「俺がその問いに答える義理なんてあるのか？」

「私が貴方の問いに答える義理なんてあるのかしら」

「……」

「そういうことです」

意地の悪い笑みを浮かべると、リズが舌打ち混じりに視線を逸らす。

恐らくは情報を与えずに私から答えを引き出そうと考えていたのだろう。

けれど、そんなことをさせるつもりはなかった。私は幸いヴァノツサにも手厳しいと言われるほどだから、リズに負けようはずがな

い。

「前々から思っていたんだが、貴様には艶がない」

「殺して差し上げましょうか？」

悔し紛れの侮辱とも取れる発言に静かに返すと、リズが大袈裟に両肩を竦めた。

「冗談だ。まあ艶云々は嘘だが、魔女らしくはないな。貴様では色を使っても誰も墮ちないんじゃないか？」

「何が言いたいのです？」

「貴様のような魔女の手に陛下が墮ちたとはどうにも思えない。それに」

一度言葉を区切ったリズが薄い空色の瞳でこちらを射抜く。

眼光の鋭さを沈黙で返すと、彼は少し言い辛そうに口を開いた。

そのには珍しく切れがない。

「城下で陛下に似た奴に会っただろう」

「ええ」

「ビリオン様、と呼んでいたな」

「そうです」

「あれは」

「それはこの国ではヴァノツサとビー、そして私のみが知る話です」

この国の騎士の誰もが初代炎帝陛下の名を覚えているのかと問われれば、答えは否だろう。名が風化するほどには時が流れていたのだし、彼らにとって大切なのは己が仕える主の名と命なのだから。

けれど、それでもあの方の名を思い出せたリズには密かに賞賛の意を贈ろうと思った。彼が受け取るかは分からないから、あくまで一方的に。

もしかしたら、という考えを口にしようとするリズを制し、甘い茶に口を付ける。

染み込むような熱は今度はすんなりと胃袋に収まった。

「ヴァノツサが命じれば、あの日のことを貴方は決して口にはせすに忘れようとするでしょう」

「……陛下に命じさせる気が」

「貴方がそれを望むのなら、私が代わりに願って差し上げます」
「？」

死ねと言われれば死ぬほどの忠誠心をきつと彼は持っている。彼だけじゃなく、この国の騎士の誰もが。だからもしヴァノツサがこの件については一切公言するな、忘れると命じれば彼は記憶ですら変えようとするだろう。

けれどそれが本当に正しいことなのか分からなかった。

この国はヴァノツサのものであり、民のものだ。

それを一介の魔女に過ぎない私がどうこうしていいとは思えなかった。

魔女に力を借りることを皇城の臣下は皆知っている。

けれど私の命が狙われるという事態が発生したせいで、寵妃という立場を与えられた。

そう、この立場は本当にただそれだけのために用意されたものではないならば、彼に話してその立場を壊すことは別に大した問題ではないように思えた。ヴァノツサに相談をしないことについては後で彼から嫌味の一つでも言われるだろうけれど、彼にとって必要なのは寵妃ではなく救世主なのだからそれほど問題にはならない気がする。ただ不安なのは、この話をする事によってピリオン様の目がそちらに向いてしまわないかということだった。けれど結局は相手の判断に委ねることにして、ゆっくりと問いかけた。

「聞きますか？ 聞いたら後には引けませんけど」

問いながら、後に引けないのは私の方だと胸中で呟く。

こんなことを話さずともやり過ぎす術を持たないわけではないのに、ほとんど聞き直りに近い空気の話そうとしているのはどういうことか。それでも話そうとしているのは、相手がリズだからだろうか。

灰猫の体毛を数度撫で、柔らかなそれをくすぐるように指先を立てて喉元に指を走らせる。

すると眠っていたはずのビーが金の瞳を恍惚で細め、にやあと鳴いた。

「ただの騎士じゃどうにもできないことだけど、それでも聞くの？」
そしてビーは目の前の騎士に寝ぼけ眼を　　どうやら本気で眠りかけていたらしい　　向けて尋ねる。首を突っ込まない方がいいと暗に示すその言葉に気遣いが見えて、思わず目を丸くしてしまった。何だ、やっぱり仲がいいんじゃない。もしかしたらただ餌付けをされてしまっただけかもしれないけれど。

遠く城下で復興の足音が響く。

それをどこか遠い世界のことにように受け止めながら窓の外を見ていると、リズが重々しい声で頷いた。

「聞かせろ」

今、彼の脳裏には何かが天秤に掛けられていたのだろうか。

ヴァノツサの命なく魔女から話を聞くことが不忠だという良心の呵責？　話を聞いたら面倒になるという保身？　いくら考えてもそれは分からなかったけれど、私は彼が何かを天秤に掛けた末に出された答えを尊重することにした。

ただ、その前に聞きたいことがあるから安易に話すことはしないけれど。

「では、その前に聞かせてください」

「何だ」

「私が寵妃ではないという、その理由を」

目を細めて見せると、リズは緊張に強ばっていた顔を渋いものに変える。笑えばそれなりに好青年に見えるそうだというのに、どうしてこうも渋い顔ばかりしているのだろうか。考え、すぐにそれは私という魔女が深く関係しているからだろうと答えを出すことができた。けれどそれを口にするのは癪だから、あえて黙ったままその渋い顔を眺めることにする。

早く話せと催促をするでもなく気を長くして答えを待っていると、唐突にリズが手を伸ばしティーカップを掴み、中身を飲み干した。

……熱いお茶なのに一体何をしているのだろうか。

毒を食らわば皿まで、と言う言葉がぴたりと当てはまりそうなほどの勢いで茶を飲み干したりズは、今頃灼けているであろう喉を震わせた。

「近く、このファルガスタにツヴァイの姫君がいらっしやる」

「ツヴァイの姫君が？」

「そうだ。この意味が分かるか？ 氷の魔女」

西の大国、ツヴァイの姫君。

そんな大層な肩書きを持った人がこの国を訪れる理由など、一つしかないだろう。少なくとも私は一つしか知らない。

「婚儀の日取りが決まったということですね」

「ああ」

「私はそれを知らなかった」

「そうだ」

まったく知らなかったというのは嘘になるのかもしれないけれど、確かにその日が迫っていることは知らなかったのだから反論のしようがない。不満そうに喉を鳴らすビーの口元に手の平を置き牽制をしつつ、続いて問いを返した。ここでリズとビーが口論をした所で、恐らく得られる物などないのだから。

「侍女に頼れないのは、手配に追われているからですか」

「ファルガスタと同じ、大国と呼ばれる国の姫君がいらっしやるんだ。粗相などあつてはならないからな。それもただの姫君じゃない。相手はツヴァイ王の妹姫、星姫ミルヒシュトラーク様なんだからな」
星姫、ミルヒシュトラーク。

星々が作り上げる天の川と同じ意味を持つ彼女のその二つ名は名によく合っているなと感じていると、以前ヴァノツサが似たような話をしていてことを思い出した。それと同時に頭に何かが引っかけたような感覚を覚える。この流れ、どこかで見たことがあるような。

「王の妹姫……ああ、確かヴァノツサが以前話していましたね」

「そうなの？」

「ええ、地震の影響で話を伸ばしてもらっていると聞いたことがあるもの」

ビーの問い掛けに頷くと更に不満そうな声が漏れ出た。

一体何が不満なのかは分からなかったけれど、そちらは後で問うことにして今はリズとの話を優先しようとして口を開いた。

それで、と続ける。

「疑っていたのですね。愛する陛下の元へ姫君が輿入れをする話すら知らぬ女など、寵妃ではないと」

「そうだ。……まあ、願望も混ざっているかな」

「？ 願望？」

ビーがぴくりと耳を動かし顔を上げる。

陽の光が強いせいとか、瞳孔が細められた金の瞳が多少の警戒心を剥き出しにしてリズへと向けられた。

「願望って何」

放たれる声は警戒と緊張で刺々しい。

ビーには何か思うところでもあるのだろうか？

怪訝に思い頭の上に疑問符を浮かべていると、リズが苦々しそうに眉間に皺を寄せた。

「陛下が魔女に籠絡などされていないと願いたい騎士は多くいる」

「ああ、なんだ」

確かにそれは誰もが思うところなのだと思う。少なくとも魔女という存在に対する認識が変わらない今のファルガスタでは。

途端に緊張を解いたビーが再び頭を下げて眠る体勢に入る。あとは勝手にしてくれという姿を見て何て自由な猫なんだと思わないわけではなかったけれど、元よりこれはリズと私の話なのだから文句を言うのは筋違いだった。

ティーカップに口を付け、優雅とも言える一時を噛み締める。ぱちぱちと炎が爆ぜる音を聞いていると心が穏やかになって、まるでここが北の孤島にあるあの屋敷なのではないかと錯覚してしまいそ

うになった。実際の屋敷にこのような銀の鎧を着込んだ騎士などいないのだけれど。

それにしても、また普通に話してしまったと内心で僅かながらに後悔をする。

リズは私に魔女らしくあることを願っているのだし、私も彼のペースを乱して自分のペースを乱し返されたくはないというのに、四六時中文献通りの魔女を演じるなどという演技力がないせいか、またこうして魔女ではなくレイアスティとして話してしまっているこの現状は一体何なのだろう。

無論、私が私らしくあつたところでリズの考えが変わるとは思えないのだけれど。

「あとはそうだな……貴様のせいでもある」

「私の、せい？」

そう考えていた矢先で言われた言葉に思わず声が裏返りそうになる。

喉に詰まった息を吐き出して返した言葉はしかしリズに悟られることはなく、彼は私よりも幾らか高い所にある目の位置を存分に活用してこちらを斜め下に見下ろした。

「相変わらず貴様は魔女らしくないだろう。今だつてそうだ。魔女なら魔女らしくしていればいいし、魔女らしい言動を取るなら四六時申していればいいものを。貴様のように頭がいいのか悪いのか分からない魔女など、俺は聞いたことがない」

黙り込み、吐き捨てるべきかそつと投げかけるべきか逡巡しているような声を受け止める。

私だつて、自分が考えていたことをこうもいい間合いで投げかけてくる人間なんて知らない。ヴァノッサが今一番それに近い人間と言えたけど、リズはヴァノッサよりもずつと人の心を読めているような気がした。実際は自分の言いたいことをただ言っているだけに過ぎないのだろうけれど。

とはいえ私も言われっぱなしで黙っているわけにはいかない。

「貴方だつてそうでしょう？」

「何がだ」

「憎みたいのなら四六時中憎めばよいものを。護衛に関しては主に命じられたことだから致し方ないのかもしれないかもしれませんが、こうして私と向かい合つてお茶を飲んでいる現状で自分はこの魔女を憎んでいるのだと言つても誰も信じはしませんよ」

その言葉は彼の心の琴線に強い衝撃を与えてしまったのだらうか。彼は立ち上がり硬質な音を立てて剣を抜き放つ。真つ直ぐに向けられた切つ先が彼の鎧と同じ銀の髪に触れた。毎日よい香料を与えられ洗っている髪が微かに揺れると、リーズネイションに似た匂いがする。

「随分と単純なことね」

「貴様、まさか俺をからかったのか！」

「まさか。私は事実しか口にする気はありませんけど？ 話を聞くべき相手に剣を向けて、交渉が決裂したらどうするのです？ よく考えて行動なさい」

「年寄りじみたことを言う」

「仕方がないでしょう。私は貴方よりもずっと長く生きているのですから」

口の端を吊り上げて笑つてやると激昂で返され、ほらやつぱり貴方は単純なのですよと呟きかける。

けれどそれは膝の上で眠る灰猫の声に阻害されてしまった。

彼の放った言葉は、私よりもずっと悪意に満ちている。きつと先程から私が失礼なことばかり言われているから腹に据えかねていたのかもしれない。舌を出して威嚇をするビーの姿にはさすがに剣を向けられないらしく、リズが苛立たしそうちにこちらを睨みつける。だから私が言わせているわけではないと言つのに、どうして毎回責任転嫁するのか。

「レイアの頭が悪いんなら、リズなんて脳みそがない単純馬鹿人間だよ。ついでに言うとお、こ、さ、ま」

「……おい、この馬鹿猫の口は塞げないのか」

「私には無理です。貴方が塞いだ方がよいのでは？ 仲も良いみたいですし」

「だからそれは違うと」

「そうだよレイア！ 僕はファルガスタの騎士なんて」

堂々巡りね。

これでは、いつまで経っても話が進まないわ。

「先程の問いに肯定を返せば、安心しますか？」

二人の言葉を遮り言い放つと、瞬時に場が静まり返る。

そうすることで二人の口喧嘩を止めると、大きくなりつつあった喧騒がかき消え急に寂しくなる。けれどそれに対して感傷を抱こうにも、まだまだ話したいことがまったく話せていないのだからこのぐらい許されるはずだと結論づけた。リズだってこんな問答をしたいわけではないはずなのだから。

「愚問だ」

きっぱりと答える姿が、切っ先を収める。

「そうですか。……ねえ、リズ殿」

それを眺めながら親しみを込めた問い掛けを放つと、リズが片眉を吊り上げて応じた。

何だ、ということもしない不遜な態度に小さく笑ってみせる。彼が彼らしい姿を見せていることでできる心の余裕は、嫌われている者として正しいことなのかどうかは分からないけれど、余裕ができること自体は悪くない。

私は自分が口にした言葉からどう話を進めようか考えて、まずは自分が寵妃ではないという理由を話そうと決めた。

そしてそれを決めた瞬間、問いが口を突いて出る。ほぼ無意識に放った問いに、誰よりも自分が首を傾げた。

「貴方は魔女が憎いですか？」

この問いの答えを私はもう知っている。

ではなぜ訊くのだろうか。

「愚問だな。この国の、いやモーリス大陸全土の民が同じ見解のはずだ」

「では、この国を愛していますか？」

この問いの答えも、もちろん知っている。

一体この答えを聞いてどうしたいのだろうか。

「当然だろう。何のために騎士をやっていると思っている」

「きつと、この国の民は皆同じなんでしょうね」

自分でもなぜ問うたのか分からないような、彼や民にとって当たり前の問いに対する答えに呟いてからようやく自分がなぜこの問い掛けをしたのかと理解した。自分のことなのに理解ができなかったというのはひどく気味の悪いことだったけれど、分かっただけならいい。なんてことはない。

この問いには次に続く言葉への重みが籠められているのだから。

「それを知っていてもなお、ヴァノツサは私を寵妃にしました。彼だつて魔女は好きじゃないはずなのに」

「それだけ愛されているのだとも言うつもりか」

「いいえ」

髪を一房掴み、銀のそれに視線を落とす。

誰もが持ち得ない色、絵本でしか見る事のないこの色の髪をきつと誰もが忌み嫌うだろう。救世主という見方をすれば求められて然るべきとはいえ、こんな姿をした人間などいないのだし、この国で魔女はそのまま悪女へと繋がる。

愛する民が皆同じ認識でいる中、ヴァノツサは私を寵妃と定めた。皇帝を愛するが故に魔女を殺そうと企む者達が、皇帝を敵に回したくはないのだと刃を収めてくれるように。きつとそれはひどく甘い考えだつたに違いない。ヴァノツサを敵に回しても何ら問題のない輩だつたなら、私はまた結界に刃が突き立てられる音を聞きながら長い夜を過ごしたのだろうか。

そう考えると私の保身のために寵妃という立場を与えたという事実はひどく理由付けが甘い気がしたし、リズのような見方をする人

間の方が正常なのだから彼に文句を言うことなどできなかつた。

首を振り否定の言葉を続けると、彼は続けざま言葉を紡ごうとしていた口を閉じた。

「貴方が言う通り、私は寵妃でも何でもありません。貴方も知っていることでしょうけど、彼はあくまでこの大陸を襲う地震の解決策として預言に出た私を呼んだに過ぎない。そして呼ばれた私は白銀の魔女ですらないただの魔女です」

「……そこまでは言っていないだろう」

あら、貴方がそんな殊勝なことを言うなんて雨でも降るのかしら、と言おうかと思っただけれどそうするとまた話の腰が折れるのでやめておく。笑いそうになるのを堪え、真面目な顔をしてみせる。

「ヴァノツサは私に魔女らしくないと何度も言っていました。ですが、多くの民にとつて私は嫌悪と畏怖の対象である魔女であり、それを短期間で覆す術もなければ時間もなかつた」

「国を訪れると同時に刺客を放たれるぐらいだしな。俺だつて貴様が死ねばいいと本気で思っていた。大体、誰が魔女に力を借りたいと思うんだ」

「貴方ならそうでしょうね」

そしてそれはリズムのみが持つ特別な感情などではなく、この国の誰もが持ち得る彼らにしてみれば極々当たり前の感情だ。

復興の足音が微かに止む。もしかしたら今頃ヴァノツサが休憩でもしているのかもしれないと考えていると、私の言葉を引き継ぐようにビーが呟いた。

「でも、あいつは違った」

「陛下は」

「彼は皇帝という己の責務を果たすために、この国を救うために忌むべき魔女の館まで足を運び助けを請いました。他に術もなく、時間もなかつたのだと言って」

「……」

反論しようと開かれた口がすぐに閉ざされる。

「そしてそこまでの彼は、せつかく連れてきた魔女を殺されるわけにはいかなかったのです。たとえその魔女が己の身を守る術を持っているのだと知っていても」

「それで寵妃か」

「あくまで傍にいて刺客を遠ざけるための口実に過ぎませんが」
ヴァノツサの名誉のためにそう付け加えておく。

本当ならば何も話さず騙し続けるのが一番良いことなのだけれどそれはもう叶わないのだし、何よりツヴァイの星姫が輿入れをするのなら私とヴァノツサの間には何もなかったのだということ誰かに伝えておきたかった。

何なら毎回毎回ヴァノツサは椅子で寝ていましたと話した方がいいのだろうかとも考え、そうすると烈火の如く怒りだしそうだからと口を紡ぐ。するとその間にリズは何を思ったのか大仰に溜息をついてみせた。どうやら、この話を信じる気はあるらしい。

「……貴様も貴様でよく了承したものだな」

「そうですね。私も可笑しな話だと思えます」

「僕がいたら絶対反対してたけどね」

そうねと笑いながら灰色の毛並みを撫でる。

私の話をすっかり信じきっている純粹なのか疑り深いのか分からない騎士を見て他に何か続けることはないかと考え、ふと浮かび出した言葉を紡ぐ。

「国中から反感を買っても、耐えられるか？」

「は？」

「ヴァノツサが私に言った言葉です」

「ちょっと、まさかレイアはそれに」

「愚問ですと答えたわ。そして私は、国中の民から愚帝と呼ばれても耐えることができますか？　って尋ね返した」

「それで、陛下は？」

「私と同じ答えでした。本当は私達がその問いに至るまでにはもう少し色々あったんですけど、それを口にする気はありません。です

が少なくとも私が寵妃であるという話よりも、ずっと信憑性のある話でしょう?」

そう、炎帝が魔女の手に堕ちたという話よりその方がずっと信憑性がある。

少なくとも、炎帝がヴァノッサであり魔女がレイアステイであればリズは信じてくれるだろう。

魔女のことはさておき、彼らが仕える存在がそのぐらいのことをやってもおかしくはないと彼なら知っているはずなのだから。

「すべてはファルガスタのため、か」

ぽつりと呟く声には疑いなどなく、主の決意に対する深い感慨が見えた。

「はい」

これもヴァノッサの名誉のために頷いておく。無論彼がファルガスタのために動いていることに間違いなどないし、疑う余地などないのだけれど私を寵妃とした選択までもがまったくの間違いない行動だったのかと問われれば答えに窮する。

不満そうなビーの額を撫でてやると、前方からも不満そうな声が漏れた。リズだ。

「貴様はそれでいいのか?」

「何がですか?」

「別にこの国のことなど貴様に関係ないだろう。なぜこの国にいる」
「理由、ですか?」

「貴様だって考えなしに来たわけじゃないだろう」

無論そうだ。けれど、それこそが最初の話に繋がっていることは気付いていないらしいリズは不可解だという風にこちらを凝視していた。簡単に繋がってもおかしくない話を繋げないのは、彼の鈍さ故か、それとも別の理由があるのか。

どちらにせよ、どことなく気遣う姿を見せるリズに興味を湧いたからすぐに答える気などないのだけれど。

「もちろんそうですが、聞いてどうするつもりですか?」

「どうするって……」

「貴方は魔女が憎いんでしょう？ ならばそのようなことを聞く意味なんてないはず。要はこの国が救われて私という魔女が早々に退散すればいいんですから」

首を傾げて問うと、リズがぐつと押し黙る。

しかしすぐに口を開くと、今度はこちらが押し黙る羽目になる。

「それなら、なぜ貴様はまだこの国にいる。地震はもう終わり、復興だって進んでいるだろうが」

「……それは」

救われていないからですと素直に口にするべきなのだろうか。

考えめぐねていると、リズが答えに詰まる私を鼻で笑った。

「答えられないか？ まさかこの後に及んで寵妃の座に居座り続けるつもりだとは思えないが」

「当たり前です」

「そうだろうな。貴様だって負け戦を挑むつもりはないだろう」

「……負け戦？ 何の話ですか？」

だから寵妃ではないと話したのに、どうしてこつこつ減らず口を叩くのか。

人の事を言えないとはいえやはりそう感じてしまい、微かな苛立ちを含んだ声を上げると今度は訳の分からない単語を発されて首を傾げる羽目になってしまふ。負け戦、とは一体何の話なのだろうか。「ツヴァイの姫君は大層な美姫だという噂だからな。たとえ貴様が寵妃の座に居座ろうとしても、陛下の心がすぐに動かれることだろう」

「ああ、なるほど」

そういう意味か。

合点して頷くと、他の反応でも予想していたのかリズが怪訝そうに眉根を寄せた。

「貴方が言うぐらいですから、とてもお綺麗なんでしょうね」

「……まあ、見たことはないけどな」

「レイア！そこは怒っていいんだよ！？魔法とか精霊ぶっ放しても今日なら僕怒らないから！」

「？そんなこと言われても……」

ツヴァイの姫君と言えはかつての皇妃様も同じ国の出身で、そしてあの方はとてもお綺麗だったからと思って頷いたのにビーには怒られるしリズは鼻白むし、一体何がしたいのかしらこの二人は。大体精霊は相手にぶつけるものじゃないわよ。呆れを含んだ視線で二人を眺めていると、リズが早口で星姫を持ち上げるような言葉を続けた。

「礼儀作法も言葉遣いも性格も何一つ申し分のない姫君だそうだが」

「血筋も高貴な御方ですしね」

「女性ですら振り返るほどの輝かしさを持つと聞いている」

「多少の脚色はありそうですけど、ほとんど間違っではないいんでしょうね」

「……氷の魔女」

「はい？」

「馬鹿猫の言葉を借りるわけじゃないが、怒らないのか？」

「どうしてですか？」

浮かぶのは、三百年前に輿入れをしたツヴァイの姫君の姿だけだった。まだ婚儀を済ませておらず、私同様右も左も分からないはずなのにいつでも笑顔を決やさずに優しくかった少女の姿が頭に浮かぶ。それなのにどうして怒ることなどできようか。それから先の未来に憂いや悲しみを感じることはあっても、怒りを感じることはないというのに。

「もついい」

問いに問いで返す形になると、リズがきっぱりとそう言い放つ。

「貴様のその態度が嫌味でも何でもないことがよく分かった。何なんだ貴様は」

「意味が分かりません」

「分からなくていい、大体貴様は色々と間違っ」

つらつらと続くはずだった言葉が唐突に区切られる。ぴたりと縫い止められたように動きを止めたリズの体は、五感を研ぎ澄ませようとしてもしているのか張り詰めた緊張感を纏っていた。その姿に目を閉じ、彼がどうして動きを止めたのかを理解する。同時に腕を振ってティーセットを遠ざけた。ビーも気付いたのか、小さく毒づく。「何もここに来なくてもいいのに。ずっとフェンネルが皇城にいればいいんだ、あんな奴」

「きつと、復興作業が一段落ついたのでしょうね」

呑気に構えていると毒づくビーとは裏腹に焦ったようなリズの声が耳朶を打つ。一応覚悟してここに来たはずなのに、いざ自分が後宮にいる所を見られると思うとやはり気まずいのだろうか。私はもう寵妃ではないと話しているというのに。

「随分と余裕だな」

「貴方という所を見たぐらいでどうこう言う人間ではありませんよ、貴方の主は」

冬宮へと足を踏み入れる一人分の足音が次第に大きくなる。ゆったりとした動きで進められる歩がこの部屋へ向けられるのを座ったまま待ち構えていると、リズは落ち着いてはられないのか扉の傍で膝をついた。

「貴様の話をまだ聞いていないというのに」

「話す機会はまだまだありますよ。書庫でお手伝いしてもらうことですし」

「やはりこき使う気か」

「ええ、馬車馬の如く」

かつん、と高い音が響く。ここまでの道程は遠く、少しばかり待った所で足音の持ち主は現れないというのにリズは辛抱強く膝をついたまま待っている。私に銀の半身を無防備に見せたまま。

「……本当に寵妃で居続ける気はないのか」

「私が人間に恋でもしない限りは」

「ありえないね」

毒づく言葉が、吐き捨てるようなもの変わる。

するとリズはついとこちらに一瞥を寄越してから呟いた。

「ならいい」

きつと彼の中ではいつだって魔女の言うことを信じるか否かという問題が渦巻いているのだろう。そしてその問題の殆どは信じないという結論を出すことで解決されていた気がするが、今回は珍しく違った。

努力をした覚えはないけれど、もしかしたら少しは彼の私に対する好意や信頼関係といったものが築けたのだろうかと考え微笑ましくなる。しかしそれはとんだ思い違いだったようだ。

「氷の魔女」

「何ですか」

「貴様の淹れる茶は甘すぎる」

「……それはそれは、貴方の口に合わないお茶で御免なさいね。今度はファルガスター渋い茶葉を取り寄せてもらうから、覚悟しておきなさい」

少しでも喜んだ私が馬鹿だったわ。

自己嫌悪も籠めて言い放つてやると、リズが小さく、本当に小さく笑うのが見えた。

その横顔に、もしかしたら彼が今言いたかったことはと再び栓無想像に囚われた。

高らかに響く靴音が止まり、扉がノックされる。

「どうぞ」

数度叩かれた扉を開けてもいいと告げるのに数秒の時間を要した理由。

それはリズが笑んだまま主を迎えなくていいようにと、今度は彼の名誉のために動いたことだったけれど彼はきつと気付かないだろうし、気付いてもらう必要などなかった。

麦色の髪をした騎士にあえて視線を向けずに、ただ紅蓮の男へ笑いかける。

「お帰りなさい、ヴァノツサ」

そして騎士が後宮にいることに幾らかの疑問を感じたような立ち姿に向けて声を放ち意識を逸らすと、銀の鎧が安堵したように微妙に動いたような気がした。

「ああ。お前に会いたくて早く帰ってきたんだ。少しは相手をしろ」
「ええ、喜んで」

それにしても、と胸中で呟く。

もう演技をしなくていいんですよと、いつ言えればいいのかしら。

第二十三話 彼が望んだ展開

淹れる茶の甘さは、私自身の甘さを指摘されたのだろうか。

リズの言葉にふとそんな疑問が湧いたけれど、その前に。

「とりあえず二人にして頂ける？」

あまり時間のないヴァノツサに話をしておくことの方が先決だった。

「リズをここに入れたのか？」

「ええ」

リズを退出させるとたちまちのうちに甘やかな空気が飛んでいく。疲労した身をソファへと預け、その紅蓮の瞳に問い掛ける色を灯してこちらを見上げるヴァノツサの姿からは到底先程のような言葉が吐き出される様子はない。当たり前と言えば当たり前前の姿にどこか安堵しながらも頷くと、彼はふむ、と呟いた。

「珍しいな」

ええまあ、そうでしょうね。

私がリズを招くこともなければ、リズが私の誘いに乗ってこの部屋まで来ることがなかったのだから。

「話したいことがあると言われましたので」

「ほお？」

今度は自分の足で歩き、ティーセットを運ぶ。まだ残りのある茶を新しいティーカップに注いで出すと、ヴァノツサはそれを一気に飲み干すでも躊躇いを見せるでもなく優雅な仕草で嚙下する。先刻までリズを見ていたせい、その姿に貫禄を感じて今は冬宮の外に控えているであろう騎士に向けて内心で苦笑を向けた。

洗練された、という言い方が恐らく正しいのであろう礼儀作法を

眺めながらふとリスの言葉が頭を過ぎる。

それからまだ未ぬツヴァイの姫君のことを脳裏に描いた。

彼が褒めるほどの美貌と礼儀作法、その他諸々を持つ星姫　目
の前に座る男の妃となるべき女性の姿を。

「私が寵妃ではないと疑っていましたよ」

「ちよつと待て」

いつか皇妃様同様、この部屋に住まい炎帝を支えて行くべき女性の姿を思い描いて呟くとヴァノツサが茶を吹きこぼしそうになる。先刻の私と同じような態度に何を言うべきか迷い、結局は柵に上げて睨みつけることにするとビーが合いの手を打った。

「レイアも認めたましね」

瞬間、ヴァノツサが再度茶を吹きこぼしそうになる。私ですらそこまでしなかったというのに、行儀の悪い。

自分のことなどすっかり柵に上げた私が溜息をつく姿に何を思ったのだろうか、ヴァノツサは半眼でこちらを睨みながら口元を押さえて息を整える。

「……どうしてそういう流れに持って行くんか、貴女は。認めずとも俺に一言言えばそのぐらい」

ええ、もちろん知っていますとも。

貴方に一言判断を仰げば、リスが二度と同じことを口にしなくなるぐらいは。

「少し協力を頼みかったのもありますし、あとは私にも分かりません。ですが、彼なら他言することもないでしょう？」

「当然だ。どこの国の騎士だと思っている」

挑むような言葉に対し、きっぱりとした答えが返される。彼らしい真つ直ぐなその声を頭の片隅に止めながら、そんなこと私にも分らないと胸中で呟いた。

話した確たる理由など私にだって分からない。

ただ諦めと開き直りと協力を頼みたいからという言い訳と、それから星姫の話聞いたせいだろうということとは理解できた。

それに、と胸中で続ける。

私が魔女らしくないことを知らない者で溢れているからこそ命を狙われるのであり今回の出来事に繋がったのだから、突き詰めれば“私が魔女らしくないこと”を知ってもらえれば、その相手に事実を話すことに何ら支障はないのではないかとも思えたから。どれもこれも後付の理由に他ならないけれど、そう考えるとリスを話相手に選んだことは間違いではなかった気がした。彼は私に何度も魔女なら魔女らしくしろと言っていたのだから。

呆れと疲労を詰め込んだ、それでも強い声に視線を向ける。そうして口にした言葉は我ながら開き直っているように聞こえた。

「どの道魔女に深く関わってしまった以上、そしてその魔女が魔女らしくない以上、ある程度のこととは話しておいた方がいいでしょう？ ツヴァイの星姫様も興入れなさることですし」

「……聞いたのか」

「ええ。言っておきますが、リス殿に嫌味を言うのはお門違いですよ。いずれは耳に入ることなんですから」

放った言葉が与える衝撃は多少なりともヴァノツサの心を揺さぶったようだった。眉間に皺を寄せ精一杯渋くなった顔が何か言い出しそうだったから、更に先手を打ってやる。するとすぐにその口は閉じられた。恐らく、口にしようとしていた言葉がリスへのものだったのだろうとその姿を見て確信する。

「それなら入ってきてすぐに話せばいいものを。うちの騎士に馬鹿な姿を見られた」

しかしリスへの文句が消滅すると同時に、今度はこちらに向けて文句が言いたくなかったようだ。舌打ち混じりの声は私を責めるような響きを持っていて、同時に己を恥じているようだったから素直に謝ることにする。確かにそれに関しては何う機会が見当たらなかったという理由があるとはいえ、私に全くの非がないとは言いきれないのだから。本気になればエイミーや風の精霊に頼むことだってできたのだし。

「悪かったとは思いますが、リズ殿はあの程度で貴方を馬鹿になどしないでしょう?」

「そういふ問題じゃない」

では他にどう謝罪しろというのかしら、この男は。

責める口調が徐々に拗ねたようなそれに变化するのを受け止め、まるで幼い子供を相手にしているようだと感じていると今度は棘のある声が耳朵を打つ。

「そっちだって星姫が来ることをレイアに話してなかったくせに。ほんと嘗めてるよね」

「ビー」

怒りを含んだ高い声に呟きを返すと、ビーが身動きをして膝の上で丸くなる。こちらのお話を聞く気のないその姿に何て声を掛けようかと悩むものの、この二人の馬が合わないことはとうに知っていることなのだからと、とりあえずは好きにさせておくことにした。どの道ビーもこれ以上ヴァノッサに文句を言うことはないだろう。

「……それについては悪かったと思っている」

陽の光に照らされ、温かそうに丸まる灰猫に視線を落としたヴァノッサが呟くもビーに聞く耳などないらしい。ぴくりとも動かない耳は器用に伏せられた。かといってこの言葉を一人消滅させるのは気の毒だからと、代わりに私が首を振って答える。

「貴方は復興作業に追われていたのでしょうか? 首都であるフェンネルはもとより、国境付近の村々に至るまで。話す機会がないのは当然です」

「それはそうだが」

「もしそれでも良心の呵責を感じるようなら、リズ殿へのお咎めは一切なしにしてあげてください。それで許して差し上げます」

何か反論したいことでもあるのかヴァノッサが口を開くが、それはやはり私の牽制によって閉じられる。皇帝の言葉をここまで阻害する存在などこの国中のどこを探しても私一人ではないかと考えてしまふけれど、今更身の振り方を変えた所で気味悪がられるだ

けだろつと考えて殊勝な気持ちで遠くへ投げ捨てた。

閉じられた窓からでも伝わるほどの冷たさが外を覆う中待機する騎士を庇うような発言をすると、途端にヴァノツサが目を丸くする。紅蓮というよりも紅玉のような瞳が疑念を持って向けられた。

「やけにリズに優しいな」

「いつもビーがお世話になってますから」

「……お世話なんかされてないもん」

その答えに対して返ってくる小さな反論は無視し、それにと続ける。幼い子供のような皇帝に同じ幼い子供のような猫を相手にしていたら、いつまで経っても話が進まないということもとうに理解していたから。彼らがどうしていちいち拗ねるような言動を見せるのか、その心理については今でも理解ができないけれど。

「誰だつてもうすぐ大国の姫君が輿入れをなさるといふ大事な時期だというのに後宮に魔女がいたら不安に感じます」

当たり前前ことを当たり前というように口にする。

すると当然だという言葉が返ってきたけれど、それは私の想像するものとは違う意味合いのものだった。

「寵妃を後宮に置かなくてどこに置くんだ」

「ですから、魔女が寵妃と言われていることに不安を感じているのだと言っているんです……」

大体なぜ寵妃などと嘘をついたのかと考え、吐息する。

「愚帝と呼ばれても耐えられるかと訊いたのは貴方だ、レイアステ
イ」

「私はそういう意味で言ったんじゃないやありませんよ、ヴァノツサ」

呆れ返りながら似たような流れで答えを返すと、ヴァノツサが小さく笑んだ。口元に浮かぶ笑みは艶やかで、一体どこをどうしたらこのような笑い方ができるのだろうかと思案する。けれど学んだ所で実践できる気もなかったのですぐに諦めた。詮無いことを考えることほど面倒なことはない。

衣擦れの音がして、ゆっくりと腕が伸ばされる。そうして指先で

銀の髪を一房掴んだヴァノツサは、艶然と微笑んだまま身を寄せ、それに口付けた。髪に感覚などないというのに、唇が触れた瞬間髪が灼けたような錯覚を覚える。その高温は自分でも予想ができないほど早く体中を侵食し、全身に熱を与えた。

「傍に置くということはそういうことだろうか？」

「だからといって寵妃などとは」

「俺はそれを踏まえた上で愚帝になると言ったんだ」

熱くなる頬を抑えつけることも叶わぬまま呟くと、楽しげなヴァノツサの視線と自分の視線が交差する。直情的な力を感じさせない瞳にからかわれているのだと確信するも、頬の熱が収まる気配はない。レイアスティ、と呼ぶ声に返事をせず睨みつけるような視線だけで応えると彼はくく、と笑って手を離れた。熱を失った髪が行き場をなくし、ゆっくりと私の体の側面へと戻っていく。

「睨むことはないだろう」

「生憎私は貴方ほど人をからかう機会がありませんので。第一、もし貴方のその演技力を少しでも身につけることができたら、リス殿に疑われることもなかったでしょうね」

「……そんなに怒らなくてもいいだろう」

「怒ってなどいません。この期に及んで魔女に甘い言葉を吐きかける皇帝陛下に呆れているだけです」

膝下が微かに震える。視線を落とすと、ビーの灰色の肢体が小さく震えているのが見えた。耳を澄ませば笑い声でも聞こえてくるのかもかもしれないけれど、あえてそうはしなかった。暖炉の火が爆ぜる音に意識を傾け、髪を背中へと流す。もう髪には触るなど暗に告げるような仕草に、ヴァノツサが大仰に肩を竦めた。

「やれやれ、少々の言葉では堕ちる気配も見せないくせに何を文句を言う必要があるんだ。この華月の魔女は」

「貴方の言葉が本気かどうかなど、目を見れば分かると言ったはずです」

「では、本気で言えば堕ちると？」

「まさか。貴方に堕ちて一生馬車馬の如く働かされるのなんて御免です」

「……今日はやけに刺々しくないか？」

「気のせいでしょう？ それより、今はツヴァイの星姫様の話です。少なくとも本気で言われれば今のように辛辣な言葉で返すことはないのだろうけれど、それを口にしてやる義理はない。そう思いつ話を元に戻そうとすると、ヴァノツサが残念そうに吐息した。……一体何が言いたいのか、全く持って分からないのだけれど。

足を組んでソファに座り直したヴァノツサはその膝に両肘をついて瞠目する。そうして次の瞬間目を開けた時にはもうその瞳にからかいの色などなく、彼を皇帝たらしめる強さを持った紅蓮の視線が注がれた。疲労を回復するための戯れはこれで終わりだと言わんばかりの鋭い声が耳朶を打つ。どうやらようやく真面目に話をする気になったらしい……彼にはまだ復興作業の続きがあり、時間が余りないのでからこれでも遅いぐらいだけれど。

「此度の婚儀は、半月ほど前にツヴァイ王から提言されたものだ。

お互い地震のこともあり婚儀を執り行うことを避けていたが、もう地震は起きる気配がないからと」

「随分と急ですね。ですが、理解に苦しむような話ではありません」

「ああ。準備に追われる羽目にはなるが、この時期の婚儀が最も適している」とツヴァイ王も分かっているんだろう」

地震がもたらした傷はきつと根深く民の心を侵食している。

たとえ一月ほど何事もないのだとしても、いつまた来るのだろうかかと怯えている者も少なくないはずだ。活気と不安に満ちたその時期に婚儀を執り行うことは、そんな民の痛みを幾分か和らげることができる。そう考えれば、この婚儀を急ぐ意義は十分に感じられた。しかし、と胸中で呟くと同じようにヴァノツサが呟いた。

「おかしな話だとは思わないか？」

「魔女が後宮にいるという事実を知っていてもなお、ということですか？」

「そつだ。モーリス大陸全土が混乱しているとはいえ、人の口に戸は立てられない。一月もあれば十二分に浸透していると思うんだがな。さすがに寵妃云々については城下でもごく一部の人間にしか伝わっていないようだが」

「まあ、貴方の臣下が全力で隠すでしょうし」
確かに不思議な話ではある。

魔女が後宮に現れたことは恐らく誰もが知っていることだろう。その魔女を実際に目にしたかどうかという問題が事実確認をさせてはくれないものの、噂としてなら広まってもおかしくはなかった。胡散臭いが、それでも見逃すことができない噂に飛びつかぬ者などいないだろう。

考え込むヴァノツサに頷きつつ、三つの可能性を想定する。

一つは、魔女が後宮に侍っていることを知らないという可能性。

恐らくツヴァイ自体に噂は広まっているはずだ。ただ、それが姫君の耳に届いているかと言えば断定はできない。婚儀前の姫君にするような話ではないのだし。

そしてもう一つは、魔女が後宮に侍っていることなど姫君がまるで意に介していないという可能性。

これについてはとても僅かな確率の可能性でしかなかったけれど、ないとは言いきるにはこの話は不可解すぎた。

そして最後の一つは、私の役割を知っているという可能性。

恐らくこれが最もあり得る話なのではないかと考え、内心で頷く。預言者が告げた言葉は、あの場にいた臣下も耳にしたのだとヴァノツサから聞いている。それならばまずはその話が流れているはずだった。とはいえ、いくら役割がはっきりしていようと魔女は魔女だ。多少の警戒心は抱いて然るべきだ。

幾つかの可能性を脳裏に描き、首を振る。こればかりはヴァノツサを通してツヴァイの星姫に訊かない限り答えを得ることはできないし、それに。

「どの道」

同じように考え込むヴァノツサに視線を向けると、小さく声を上げて彼が顔を上げた。その姿に若干あの人の姿が重なる。二人の炎帝の姿を視界に捉え、またもや何か引つかかったような気がしたけれどそれは無視した。

甘い茶はとうに冷めてしまったのか、湯気を上げることすらしない。私は冷めた茶を包むティーカップを指先を振って下げてからきっぱりと言いつつ。それに重なるように、火が爆ぜた。

「地震がもう収まったと思われる今、このような流れになることは貴方にも私にも予想がついていたはず」

ただ、お互いがお互いのやるべきことに奔走していてそれに気付くことができなかっただけ。それこそが一番の問題なのだと知らずに。

目を閉じ、ビーの体を撫でるといつの間にか震えるのを止めた体が力を抜くのが感じられる。

紺色に溶け合いやすい色のその体を撫で続けると、まるで自分と一体化しているようにさえ思えた。

「婚儀にとって良い頃合であるように、私が寵妃ではないのだと言するにも良い頃合なのかもしれません」

「しかしそうしたら貴女が」

「私が何の被害も受けないことは、貴方もよく知っているはずですが、私が結界を張り続ける限り私を傷つけることができる者など存在しない。結界解除の首飾りを持つヴァノツサや、同じく魔力を持つ者でない限りは。」

そこでふとあの人のことを思い出す。人間でありながら強い魔力を持った先代炎帝が現れたら、私もさすがに膝を屈するのだろうか……何分、近づかれるだけで吐き気を覚えてしまうほどのだから一体どうして自分だけがあのような状態に陥るのかは分からなかったけれど、あの人だって私がそうなることを望んでいるわけではないのだから文句を言うことなどできなかった。生きているという事実に対して文句を言う必要があるとしても。

あの時の気分の悪さを思い出し、眉根を寄せる。すると膝下で丸くなっていたビーが心配そうにこちらを見上げてきたけれど、首を振って大丈夫だと告げるとすぐにまた丸くなった。静かに気遣ってくれるその様子に内心で感謝の言葉を告げ、もう一度あの人の姿を思い出す。城下で見つけた時ではなく、この冬宮に現れた時のあの人。

その時かち、と何かがはまる音がした。

「そうだわ」

「どうした？」

呟くと、ヴァノッサが首を傾げる気配を感じる。けれどそれには答えない、答えられない。

「どうして今まで気付かなかったのかしら。でも、どうして」

「おい、レイアステイ？」

「レイア？」

ようやく浮かび上がった答えは、どうして今の今まで気付けなかったのか分からないほどに単純明快なものだった。けれどその答えが意味するものが理解できず、今度は更なる困惑の海へと身を投じてしまう。

頬に手の平を押し当て、縦横無尽に駆け巡る思考と過去の出来事を照らし合わせてみる。それで思考が整理されるなどは思わなかったけれど、何もしないよりはましだった。

大陸を襲う大地震。それが収まったという民が安堵する今。百年戦争。幾らかの時を経て民がようやく平和という言葉を噛み締めたあの年。

二つを繋げるのは民を襲う痛みと、その後続く皇帝の婚儀だ。

「ビリオン様がどうしてこの地震を一時的にでも収めたか、その理由を思い出したんです」

どこかで見た流れだと思ったのだ。

『もつすぐ君の身に、三百年前の私と同じことが起きるよ』

あの人だつて、そう言つていたじゃないか。平和と安寧によつてもたらされるものが婚儀であることを、あの人によく知つている。

百年戦争を終えて復興したファルガスタが平和を享受した後、もう戦など起きないのだと両国の皇帝と姫が婚姻を結び、そしてその後にかかるのは。

「……でも、あれは」

魔女の狂宴。

けれど、今の私ですら原因が掴めない狂宴をあの人が起こせるとは思えない。元々あれは病だという話なのだ。冷水を浴びせられようにひやりと心が冷めきる中、それを温めようと必死に両手を握り合わせる。そして魔女の狂宴という最悪の事態については一旦思考の外に投げ捨てることにした。

ではもし魔女の狂宴の話が関係ないのだとしたら、ただ婚姻の話がしたかっただけなのだろうか？

婚儀の際にヴァノツサが何を求め何を選ぶのか、彼はただそのようなことを期待しているのだろうか？

じくじくと胸が小さな痛みを伝える。

それはあの人や皇妃様が婚儀を執り行ったという事実からではなく、この後宮が建設された時に彼が見せた顔のせいだった。

同じこと、とはそこまで含まれているのだろうか？ そんなことはありえないというのに。

考えられる可能性と、信じたくない可能性をふるいにかけてながら思考をまとめようとすることがしかしそれはいつまで経つてもまとまらず、混乱を招くだけだった。辛抱強く答えを待つヴァノツサの姿が見える。その紅蓮の瞳には早くしろと急かす色はなく、むしろこちらを気遣っているようにも見えて私は首を振つてみせた。

……考えても、埒が明かないわ。

「恐らくビリオン様は、平和と安寧が婚儀に繋がることを指していたのだと思います」

長らくの時間を持って発された言葉に、衣擦れの音が返ってくる。私が思考の檻に囚われている間、身動き一つできなかったのだろう。「婚儀？　しかし、それくらいであんなことを言うとは思えないんだがな」

「ええ。もしかしたら他にも何かあるのかもしれませんが……確証はありません。ですが先代次代炎帝に繋がる話というのは、今の所婚儀の話ぐらいですし」

座り直し、背筋を正したヴァノッサの問いにそう答えると、彼は少しだけ訝しように眉根を寄せる。恐らく他にも何かあるのかもしれない、という言葉に引っかけりを感じたのだろう。けれど私はそれを今口にする勇氣はなかった。他にも忘れている情報はないか確認する必要があったから。

ふう、とヴァノッサが深い息を漏らす。

「相変わらず貴女は頑固だな」

「貴方に言われたくはありません」

やはり心中を悟られていたのかと胸中で舌打ちをすると、彼は諦めたように首を振る。

「話せないんだろう？」

「ええ、今は」

「そうか。ならいつか必ず話してくれ。貴女の記憶から出される答えは、恐らく我が国にとって最も重要な情報になるはずだ」

疲労の籠ったその声は、今私を問い詰めた所で無駄だと察しているからか。

低い声が耳朶を打つのを感じ、小さく頷く。確証が持てるのなら隠し立てをする必要などなかった。

窓の外が微かに霞む。それが砂嵐から来るものだと気付いたのは、ヴァノッサが立ち上がった後だった。窓ではなくテラスに歩いていく黒装束には砂や埃がついており、それを見ているだけで彼が復興作業の前線に立っていたのだと察することができる。第一、魔女を迎えに自ら北の孤島に乗り込むような男なのだから皇城でただ指示

を出すだけなどということは耐えられないだろう。それが彼の良さであり、民に敬愛される所以なのだ。今ではもう嫌になるほどよく分かっていた。

「レイアステイ」

「はい」

不意に声を掛けられ、無理矢理に思考を断ち切られる。

「地震は、いつ再開する？」

その声を含む苛立ちは、どこの誰に向けられたものなのだろうか。……分かりません。今破壊されている箇所は精霊達の手によって守られていますから、新たに別の地脈を破壊されない限りは」

「そう、か」

「すみません……」

「貴女が悪いわけじゃない」

謝罪の言葉を口にする、即座に鋭い声が返る。目を見開くと体ごとこちらを振り向いたヴァノツサの肩ほどまで伸びた髪が微かに揺れた。背後で燃え盛る暖炉の炎に酷似したその髪は陽の光に照らされて更に熱を発したように見える。

「そもそも元凶は俺の先祖だ」

「ですが、あの人にそうさせたのは私です」

「それは初代の自業自得だろう。手放したのが悪い」

きっぱりとした言葉に含まれた力は、国を思う皇帝の姿とまるで変わらない。

「ツヴァイの姫君との婚儀を執り行おうとも、俺は貴女を手放す気などない」

「ヴァノツサ」

「分かっている」

不穏な流れに進みそうな話に責めるような響きを混ぜると、即座に返される。

「婚儀は執り行おう。だが、貴女をこの冬宮より外に出す気がないことも覚えておいてくれ……貴女はこの国にとってなくてはならない

存在なんだ。皇帝よりも妃よりも、誰よりも」

背中を向け、城下を見つめる紅蓮の瞳はただ民を見ている。皇帝よりも妃よりも、血筋の高貴な人間よりも民のために今必要な存在なのだとその背が言っているような気がした。私が救世主になれるなどとは未だに一言も言っていないというのに。

「魔女を後宮に住まわせるなど、ツヴァイ王の怒りを買うようなことをすべきではないでしょう」

「どうせ知っていて姫君を寄越すんだ、そのぐらいは構わん。リズに話してしまったとはいえ、貴女の立場が寵妃であることに変わりはないしな」

静かな吐息が膝下から聞こえる。すっかり寝入ってしまったビーの額を撫で溜息をつくと、すげなく返された。

「ベリオン帝と当時の皇妃は幸せな結婚をしたと聞いている。……貴女が皇城にいてもな」

「そう、ですね」

「なら問題ないだろう？ 貴女がいたって変わらず、三百年前と同じことが起こるのなら」

鼓動が跳ねる。常に高い熱を孕むヴァノツサの声ですら熱を与えることが叶わぬほどに心が冷えた。

幸せな結婚。

確かにそれは間違いではないのかもしれない。歴史書にどう書かれているかまでは分からなかったけれど、恐らく傍目には幸福に見えたはずだし事実深い絆で結ばれた人達だった。

けれど、それだけじゃないことを私は知っている。それが私に氷の魔女という名を与えた一因であることも。

ヴァノツサとて、ベリオン様が私に会いたがっていた理由からそのぐらいは推測できているはずなのだけれど、その上で幸せな結婚をしたと口にしたのは、歴史書に記載されていない歴史を予想のみで語ることができなかったせいかな。

知らず、手の平に力が籠る。心の痛みが生み出す緊張をヴァノツ

サに吐き出すべきか、吐き出さないべきか。

『自分が何をしようとしているのか、私はちゃんと知っている。結果、国中の民に不貞だと言われるのも仕方がないしそれが事実だと理解している』

ありえない。

目の前に立つ紅蓮の男の姿を凝視する。彼は遠く城下を眺めながら、あの人よりも少し長い髪を揺らしていた。横顔に宿る表情は鋭く、柔らかさなど感じられない。あの人及時折見せた冷たさは感じられないけれど、その分真摯な熱を孕んだ紅蓮の眼光が復讐の足音を止めた城下の光景に一身に注がれている。

誰よりも国を憂い、誰よりも国を愛し、そして誰よりもこの国を想うこの男が同じことをするとは思えない。

そう思い、私は結局自分の考えを口にすることは止めた。

「ヴァノツサ。貴方にお問い合わせがあるのですが」

「？ 何だ？」

「書庫に入る許可をください。皇城の書庫なら、地脈について役に立つ書物もあるでしょう」

「それは構わないが。貴女一人で探すのか？」

「それについてはリズ殿に頼んでありますのでご安心を」

代わりに言おう言おうとしていた本題を口にする。

自分の考えが彼の言うこの国にとって最も重要な情報というものには当てはまらない気がしたし、何よりこの男に限ってそれはありえないという考えが渦巻いていたせいだ。この男が魔女に現を抜かして皇妃に据えるなどとは思えない。

ただ、それでも自分がこの冬宮にいることには不安を覚えた。三百年前の私は後宮になどいなかったけれど、火種となりそうなことは排除しておいた方がいい。

とはいえ、どう話せばヴァノツサが納得をしてくれるのか。

「そうか、なら自由に使え。兵には俺から伝えておこう」

「ありがとうございます」

あつさりと許可を出したヴァノツサに礼を述べると、彼は気にするなど言う風に首を振る。

恐らく彼とてほとんどの書物は漁っているはずなのだけれど、私が探せばまた違った見方ができると感じたのかもしれない。

「しかし……」

放たれた言葉はしかしすぐに区切られる。

何事かと首を傾げると、ヴァノツサは少し渋い顔をしてこちらを見た。物言いたげなそれに問い掛けるような視線を送ると、ようやく口が開かれる。

「最近やけにリズと親しくないか？」

「そうですか？」

「リズも最近貴女に対して棘が失くなったように見えるしな」

「貴方がリズ殿に嫌味を言ったせいでしょう」

「それはそうだが……」

親しくないか、と言われても。

確かに以前よりもずっと態度は柔らかくなった……気がしないでもないし、こちらが挑発しない限りは特に嫌悪を向けられることもなくなつたけれど、親しいかと問われると答えに窮してしまう。今の場にリズがいたら即座に否と答えてくれるはずだけれど。

頬の手を押し当て溜息を漏らすと、膝下で灰猫が身動きした。

「妬いてるの？」

問いを発したのはビーだった。

悪戯心を秘めた声が発されると、ヴァノツサが眉間に皺を寄せ、けれどそれはすぐに解かれ、溜息に消えていく。

「まあ、そういうことになるな」

「皇帝なのに騎士に妬いてるんだ？」

「猫だつて妬くことぐらいあるだろう」

「まあね」

あつさり吐き出されたのは肯定の言葉で、今度はこちらが溜息を漏らしてしまう。

どうせ冗談でも言っているのだろうと考えてのものだったけれど、冗談にしては性質が悪い。特に、時期が悪すぎる。

「冗談が過ぎますよ。もうすぐ妃を迎える身だというのに」

「たかが政略結婚だ。俺の魔女殿には敵わん」

「貴女の魔女になどなった覚えはありません。冗談でもそんなことは言わないでください」

三百年前のことを思い出し不安が渦巻く今は、冗談でもそのようなことを言われたくはなかった。

くく、と笑いを漏らすヴァノツサを半眼で睨みつけると彼はすぐに笑いを引っ込める。けれどその先に続いたのは謝罪でも別の話でもなく、真摯な声だった。

「本気だと言えば、少しは信じてくれるのか？」

ぴくりと指先が無意識に動く。同時にビーの耳も小さく動いた。

「……」冗談を

「魔女殿はまさかこの短時間に俺の心でも読んだのか？」

「読まずともそれぐらいは分かります」

「ほお？　なら俺の目でも見てみたらどうだ？　少しは分かるかもしれない」

伏せそうになった臉の動きが止まる。自分でも震えているとよく分かるそれをこじ開けて眼前を見れば、紅蓮の瞳に宿るものが思わず後ろに下がりたくなるほどの強さを孕んでいるのが見えた。

本気だ、と直感的に理解する。

そこまで芸の細かい演技を彼ができるようになったのか、それも彼の言葉が紛れもない事実だからなのか。

判別付き難いけれど、今までの経験上後者なのだろう。

ただ彼の求めるものには可能性が二つあったから、私は一つを放り投げて一つを手を取った。

「私は貴方との約を果たすためにここにいます」

「知っている」

「そのような独占欲を持たずとも、私が私に出来ることをすること

「に変わりなどありません」

手に取った可能性は、救世主としての私だ。

ヴァノツサは皇帝として預言に出てきた私を軽んじることができなければ手放すこともできない。地脈を癒すために必要な魔女を失うわけにはいかないのだ、彼は。

「レイアステイ」

ヴァノツサが数歩足を踏み出す。

次第に近づく距離は、最後に伸ばされた腕のせいで零距离となる。硬い指先が頬に頬に触れた。

「貴女は俺が救世主として貴女を見ているとでも？」

「違うと言いつれれますか？」

「言い切れないな。救世主は俺とこの国にとってなくてはならないものだ。……だが」

つ、と頬を滑る指先が唇に触れ、腕を払い落とそうか逡巡する。

その間に次の句を継がれてしまい、何もできなくなるのだけれど。「頼むから、それだけではないことも覚えておいてくれ。俺は救世主という役割を取り除いて貴女を見ることはできないが、それだけじゃないと」

「知っています。だからこそ私はここにいます」

「なら、俺の言いたいことが分かるはずだが？」

居心地悪く身動きする灰猫の肢体に影が落ちる。けれど私はその影が自分の顔に落ちる前に身を引いた。

「私は」

知らず、口が動いていた。

別に甘い囁きを向けられたわけではない。恋情を見せつけられたわけでもない。確たる言葉を得られたわけでもない。それでもなぜだろうか、ヴァノツサの言動から確たる何かが見えてくるのは。

ヴァノツサの言葉にありえないと胸中で呟く声があったし、彼の見せる感情が芽生えるにはこの期間はあまりに短くお互い忙しすぎた。

なのになぜ、と頭の片隅で声がする。やはりからかわれているだけなのだろうか？

けれどもこれは、たとえばからかいたとしても三百年前を知る私には危険すぎるほどの意味を含んだ言葉だったから。

「私は、誰のものにもなるつもりはありません」

冷たすぎず、熱すぎず、出せる限りの毅然とした声で答える。

「それに、どう転んでも貴方はツヴァイの星姫様とご結婚なさるんです。貴方の言うことが冗談であろうと本気であろうと、さっさとその独占欲は捨ててください」

するとヴァノツサは目を細め、怒るでも受け止めるでもない何とも微妙な顔をした。

ただ、どこか辛そうに熱の籠った瞳を揺らがせる。けれどもそれは彼自身が感じた痛みではなく、別の何かのように思えた。

「貴女はその言葉を」

「……え？」

区切られた言葉に呆けた声を返すと、何でもないと言った首を振る。

「何でもない」

頬に触れた指先が離れ、眼前に迫る影が再び陽の光に包まれる。

あつさりと身を引いたヴァノツサはソファへと向かい、深く腰掛けながら目を閉じた。

「少し休む」

「それならベッドで」

「いい。どうせすぐにフェネルに戻るからな」

それならと毛布を掛けてやると、ヴァノツサは片目を開けて囁くような声を発した。

何か思案しているようなその様子に、問いを返すことはできない。素直に頷くのみだ。

それはこの話を区切ってもらいたかったからという下心が含まれていたせいでもあるけれど、ヴァノツサに疲労の影が濃く見えたせいでもあった。彼には休息が必要なのだ。本当であれば、仮眠では

なくもつと深い休息が。

「書庫に行くなら、後で俺も合流しよう。少し調べたいことがある」
「……分かりました」

囁く声が消えると、穏やかな吐息が満ちる。

日溜まりの中で無防備に寝るヴァノッサを見下ろし、眠りの邪魔をしないよう私はビーを連れて静かに部屋を後にした。

第二十四話 掴めぬ活路

月宮と名付けられた後宮を眺める私にあの人が放った言葉が過ぎる。

『一緒に生きてほしい』

そんな道、私には選べません。

それは記憶の奥底にしまい込んで、鍵を掛けてしまった言葉。

そして自分自身をも欺くように隠した記憶であり、ありえないと否定した過去。

冬宮を出た途端、視界の端で陽炎が揺れた。

「嬢ちゃん」

「ガラナ？ どうしてここに？」

白亜とも言える白さを誇る冬宮にはひどく不似合いな紅に目を丸くすると、普段なら召喚されずに現れることのない精霊が緩慢な動きで人の形を取る。人と言うには少し異形でもあるけれど、見ようと思えば人間の男性に見えないこともない姿が顕現し、眼前に立つ。今日は大剣を持ってきてはいないようで、丸腰のガラナは私に近付きすぎない程度の距離で立ち止まる。

「あの坊主は？」

「ヴァノツサなら今は寝てるけど……」

「珍しいね、ガラナが自分から出てくるなんてさ」

足元からひよっこりと頭を覗かせたビーが軽口を叩くと、ガラナは神妙な顔をして黙り込んでしまった。一体、どうしたというのだろうか。

「ガラナ？」

問いかけると、彼は周囲に人がいないことを確認するように辺り

に視線を向ける。

瞳部分である紅玉が誰もいないことを確認すると、彼は自らの持つ熱で私達を焦がしてしまわぬよう、慎重に距離を保つ。

「先刻、俺達炎の精霊が監視している地脈付近でビリオン坊が発見された」

「！？ ビリオン様が？」

「ああ。幸い地脈が破壊されることはなかったが、嬢ちゃんの耳に入れておいた方がいいと思っただけ」

そう、と呟くとビーが心配そうにこちらを見上げるのが見えたらぎこちなく笑い返す。何でもないと切り切るにはひどく嘘くさいその笑みは更にビーの不安を増長したことだろうけれど、完璧な笑みを浮かべることなどできなかった。

「また、始まるのね」

「恐らくは」

何が、とは言わなかった。けれどガラナには伝わったようで、彼は揺れる陽炎の中しっかりと肯定の言葉を返す。

「マーグリス達にはこのことを？」

「まだ伝えてはいない。それに言わずともあいつらなら勝手に情報を仕入れるだろう」

「……それもそうね」

目を閉じ、冷たい風が頬を撫でるのを感じる。そうして踏みしめる大地の堅さを、日差しの温かさを、遠くを流れる水を感じとろうと感覚を研ぎ澄ませた。これらはすべて彼ら四大精霊達が世界を支えて守護するからこそ得られる恩恵だ。そんな彼らには人間のような情報伝達手段など必要なく、彼らは独自の方法で世界のすべての情報を得ることができただけだから。

目を開き、堅い大地に視線を落とす。今やある程度落ち着いた地盤はまたすぐに不安定になるのだろう。

「急がなくてはね」

顔を引き締め、城下を見下ろす。砂埃の舞う空は薄く砂色に染ま

り、体に害が及ばないか心配になった。

「俺達も情報を集めておく。ビリオン坊が不穏な動きをするようならすぐに知らせよう」

「ええ、ありがとう」

遠くでリズの声が聞こえ、ガラナの姿が空気に溶ける。

言葉少なに最低限の情報を与えてくれた精霊に対し精一杯の謝辞を述べると、彼は空気に消えゆく直前で珍しく言葉尻の弱い声を発した。

「嬢ちゃん」

「何？」

「あまり無茶をしてくれるなよ。これは嬢ちゃんが気に止むような問題じゃない」

紅が空気に溶けきり、透明になる。

それをぼつと眺めて見送ってから私はガラナの言葉を舌の上で転がすように呟き、ふつと吹き出した。

「同じようなことをアマンティにも言われたわ」

まったく、過保護に過ぎる精霊達だ。

恐らくはビリオン様を見かけたという情報よりも一番言いたかったのである。言葉に笑みで返し、今もどこかで見ているのである。炎の精霊に向けて呟いた。

「でも、ありがとう。私なら大丈夫だから」

見上げた空が微かに歪み、層気楼を生み出す直前の熱が発せられたような気がしたけれど私はそれに向けてはもう何も言わずに背後から近づいてくる騎士へ向けての言葉を発した。

「いるんでしょう？ リズ殿」

「……誰と話していた」

「誰とも。それより、ヴァノッサの許可が取れましたよ」

くるりと振り向き、予想通りの人物をそこに見つめて足元の灰猫を抱き上げる。胸元に収めてから口の端を吊り上げた。その笑みは騎士へのものではなくどこかで見ているであろう精霊達へ向けての

ものだったけれど、恐らく誰も気付いてはいないだろうし、私もそれでもいいと思っていた。

「書庫へ参りましょう。貴方の主も後で合流するそうですから」

煉瓦と石で造られた黒づくめの皇城の中をリズと二人歩いていく。胸元には灰猫がいたから、二人と一匹というべきだろうか。

敷物の色を変えるだけでこうも印象が変わるのかと思わされる皇城は喧騒に包まれ、一つはファルガスタ復興のため、一つはツヴァイの姫君を迎えるために大あらわだった。侍女や臣下が走り抜ける中をゆったりとした動きで歩いていくと、彼らは振り向きざま私とリズを凝視し、臣下は一礼し侍女は睨みつけて去っていく。この差は何なのかしら。

「随分と嫌われてしまいましたね」

「当たり前だ。ツヴァイの姫君を迎える準備をしている侍女にとって、貴様は邪魔者以外の何者でもないからな」

「……まあ、私がいたら冬宮に誰も入れませんしね」

以前冬宮に連れて行かれた時と違い、小声で囁きながら歩けるほどには至近距離に立つリズを見上げると彼はどこか忌々しそうに侍女達を見ていた。簡素な侍従服を纏う彼女達はファルガスタの貴族の娘達なのだろうか。彼女達は元々良い生活をしてきたのだとよく分かるような立ち振る舞いでリズに一礼するも、こちらに対しての怒りを隠そうとはしない。もっとも、相手が畏怖の対象である魔女だということは理解しているのかその怒気はとてもささやかなものだったけれど。

ビーが侍女達を威嚇するように毛を逆立てる。

けれどもそれを一撫でして落ち着かせると、私は彼女達から視線を逸らして歩を進めた。

「羨のなつてない侍女達だね」

ふん、と胸元で嘲るような高い声。

それはとても小さく周囲の人間達には聞こえないほどの大きさだったけれど、もし聞かれていたら事だと慌ててビーの口を塞いだ。けれどリズは猫が喋るといふことに対して耐性が付きすぎたのか、他の人間達に聞かれるかもしれないという懸念など感じさせないような声でビーの言葉に答えた。

お願いだからもう少し危機感を持って頂きたいところなのだけけれど。

「馬鹿猫に言われたら御仕舞だな。だが、一理ある」

歩幅一步分先導しながら歩くリズは薄い空色の瞳を細めて侍女達の視線を私の代わりに受け止める。

寵妃たる魔女への不敬は皇帝への不敬なのだと伝えるように。

私は珍しいこともあるものだと感じながら、それでも淡々と事実を口にする。そう、悪いのは彼女達ではない。

「お迎えすべき方の準備が整わないのです。彼女達が怒るのは当然よ」

「……そう思うならさっさと冬宮から出て行け」

「ヴァノツサが認めてくれるのなら、今すぐにでも」

すべて、ツヴァイの姫君が輿入れをする日が近いというのに後宮から去らない魔女のせいなのだから。

「陛下は」

「貴方の想像通りです」

「……」

補足すると、魔女を後宮から去らせようとしない皇帝のせいなのだけだ。

溜息混じりに囁き声を返すと、銀の鎧が疲れたように鈍い光を放った気がした。もちろんそれは錯覚であり、実際にはそのようなことはないのだけれどリズが呆れか疲労を感じたのは間違いないだろう。私が冬宮を去れないということは、それほどの問題だった。

地下へと下りる階段を見つけ、そこへ向かう。

手入れが行き届いているのか、通路からは地下へ下りる時独特の暗さやじつとりとした湿気は感じられない。かつての皇城とそう造りは変わらないみたいだから、書庫の位置もあの頃と瓦無いのかもしれない。それならばリズに先導してもらう必要はなかったのだけれど、昔来たことがありますがからと今更話すのもおかしい気がしたのでやめる。

「陛下も何を考えていらっしやるのか……貴様が寵妃の座に居座り続けるような魔女だったらどうする」

「多分、気にしないんでしょうね」

「……だろっな」

そのようなことはすべて些事として片付けてしまいそうだ。

リズのぼやくような声にあっさり返すと溜息混じりの声が反響する。細すぎる階段は音がよく響き、余韻を残すようにリズの低い声が満ちた。その階段ですら敷物は黒だ。一体どれだけ黒尽くめにすれば気が済むのだろうか。

かつん、と音が立てて下りて行くことやがて壁に突き当たる。

左右に分かれたこれもまた細い道の左側を進めば書庫があるのだろう。背後を見れば魔女に付いて来るなどという気概の者はいないらしく、私達以外に人影はなかった。前方にも警備の兵がいないのは不思議な話だけれど。

「兵は先に下がらせておいた。誰だって魔女を間近に見たくはないだろっ」

「ヴァノツサの許可をまだ取っていないのによくそのようなことができましたね」

「寵妃の脅しなら大方は聞き入れるのだろうか？ 陛下は」

「脅しだなんて失礼な。私はただお願いしただけです」

がしゃんと鎧が揺れる。

鈍い銀光を放つそれを半眼で睨みつけると、鼻で笑われる。

「信用できんな」

「私が寵妃でないことは信用したくせに、随分な言い草ですね」

「それはそれ、これはこれだ。着いたぞ」

地上階とそう変わらない光度を保つ通路の先に、豪華な扉が見える。書庫と言うにはあまりに素材に金が掛かっているのではないかと思わされるそれを見てみると、かつて魔導の勉強をここでしていたことを思い出す。あの頃とは扉が随分と変わってしまったけれど、懐かしいことに変わりはない。

扉に手を掛け、リズが先導して書庫に入っていく。その中をくぐると、国中の書物を集めたのではないかと思うほどの大量の本、本本。壁に背を向けてずらりと置かれた巨大な本棚は天井近くまで伸びており、それだけの量の書物をすべて抱え込んでいた。この部屋だけは黒に侵食されていないらしく、緋色の敷物に茶のテーブルの色合いが仄かな明かりに照らされている。

それにしても三百年の間に随分と本が増えたものだ。あの頃はこれほどの書物はなかったはずなのに。

「壮観ですね」

「歴代皇帝が国中から集めた書物だからな」

「……この中から探すのは骨ですね」

ぐるりと見回すも、一見しただけでどこに地脈に関連した書物があるのかは分からない。書庫の管理をしている人間がいたらその者に訊くのが一番早そうだけれど、その者でさえこのすべてを把握しているかは甚だ疑問だ。

ビーを下ろし、中央の円卓へ向かう。この場所で皆書物を読んでいるのだろうか。随分と古い樹で造られたそれを指先でそつとなぞると、ざらりとした感触が返ってきた。掃除も行き届いているらしく、埃臭さはない。

その場に立ち、ふうと息をついた。

本当にこの中から地脈に関する書物を探さなくてはならないのだろうか。

簡単に望むものを探せる魔法なんてものがあればいいのだけれど、生憎そんなものはなかったし自分でスペルを作り上げられる気もし

ない。

書庫の奥を見れば、他の本棚と違う高さの低い本棚が並んでいる場所が見える。他とは違う雰囲気その場所はもしかしたら特別な書物でも置いてあるのかもしれないと思っただけれど、もしあの場所にもなかつたらどうしたものか。

「それで、何を探したいんだ」

「地脈に関する本です。地脈が関わっていれば何でも構いません。

一つ一つ内容を確認しますから」

「随分面倒なことをするんだな」

「重要なことです。面倒くさがってもいられません」

それは事実だった。

ヴァノツサは地脈破壊が地震に繋がると知らなかったのだからもしかしたら見落としているかもしれないし、何よりこの本の量だ。簡単に見つかるとも思えない。

「まずはあそこから探しましょうか」

指差す先にあるのは、先程見つけた毛色の違う本棚のある場所。

「そうだな……」

げんなりとした声がそれに返るけれど、それには何も返さず奥へと進む。ここで随分と長い時を過ごさなくてはならないと覚悟を決めて奥の本棚の前に立つと、そこに置かれているほとんどが歴史書だった。

ファルガスタ建国時から今に到るまで多くの歴史書が並ぶ中、ふとオールド歴四百六十一年の歴史書を手に取ってみる。少しでも乱暴に扱おうものならすぐに粉塵へと帰してしまいそうそれを丁寧に開き、すぐに閉じる。

「ここは歴史書が置かれていたんですね」

古い紙であればこの時代まで残されているはずはないのだけれど、何度も複写をして歴史を伝えてきたのだろう。

重厚な色を放つそれを本棚へと戻し呟くと、リズが呆れたような溜息を漏らした。

「歴史書なら地脈には関係ないだろう」

確かにそうだ。

けれど歴史書を調べることがまったくの無駄かと問われれば、答えは否だ。

「ええ。ですが念のために調べてみましょう。過去に同じようなことが起きているかもしれません」

「そんな話は聞いたことがないが」

「もちろん地震については起きたことはないでしょうけど、小さなことでもいいんです。地脈が関わっていそうな異変があればそれを頼りにします」

精霊達の話聞く限りでは、地脈破壊など今までに一度足りとも起きたことはない。

けれど地脈にまったくの異変がないとは限らないのだし、それにはもう一つ調べておきたいことがあった。慎重に歴史書を取り出す私にリズは何を思ったのか、大袈裟なほどの大きさを溜息を漏らし、背後からすつと腕を伸ばす。それは体の側面を通り過ぎ、私を取り出そうとしていた歴史書の隣の書物をそつと取り出して行く。首だけで振り向くと、丁度リズの胸元辺りが見えた。

「ありがとうございます」

「礼を言うな、気持ち悪い」

「じゃあ遠慮なく働いてもらいましょうか」

一人で慎重な動作を続けるのは骨だから、リズが手伝ってくれらならありがたい。

そう思っただけで口にした謝辞があっさり跳ね返され、私は意地が悪いと思いつつもにこやかに笑ってみせる。

書物に傷をつけないように、一冊一冊傍の円卓へと置いていく。中を確認するのは大まかに書物を取り出してからでもいいだろうとの考えからだっただけけれど、これだけ量があると先に読んでいた方がいいのかもしれない。リズ一人にこの作業をさせるのはさすがに申し訳ないと感じるものの、彼は騎士だ、体力ならあるだろう。

円卓に備え付けられている椅子に腰掛け、一番上に積まれた歴史書を開く。

するとそこには百年戦争が終わったばかりの時代について書かれていた。確かこれは、ビリオン様の御父上の代のはず。

中を読み進めると、そこにはツヴァイとの進行を築くため皇帝が苦悩していたことが綴られていた。それはそうだろう。百年も戦争をしていた相手といきなり仲良くしろと言われても、民も臣下も納得などできない。血がそれだけ流れてしまっているのだから。

皇帝だってそれは同じはずだけれど、立場上何もしないわけにはいかない皇帝はツヴァイの娘と結ばれることでお互いの国交を回復させようとしたらしい。

その次に皇帝に即位するビリオン様同様。

『平和と安寧が、それをもたらすと私は知っているから』

やはり、ビリオン様は婚儀のことを差していたのだろうか。

「氷の魔女」

茫洋とした気持ちで思考に耽っているとき唐突にリスの声が耳朵を打ち、慌てて顔を上げる。

すると先程まで歴史書を本棚から出していたはずの彼は、今や憚然とした顔で向かい側の椅子に腰掛けており、私は一体どれだけの間考え事をしていただろうかと内心で舌打ちしながら首を傾げる。

「何か？」

「考え事とは、随分と余裕だな」

「私だって考えこみたくなることぐらいあります」

「そうだろうな。だが今は貴様の思考について議論する気はない

先程の話の続きを聞かせろ」

無礼な物言いにどう返してやろうかと思案していると、先程の話蒸し返され口を噤む羽目になる。

確かに機会はまだあると話しているのだからいつ切り出されても文句など言えないのだけれど、先程の勢いが失われている今ビリオン様のことを話すのは気が引けた。歴史書を閉じ、そっと脇に退け

る。そうして何もなくなつた空間に両肘を置いて、小さく溜息を漏らした。そんな私の姿をリズの鋭い眼光が射抜く。逃げることも誤魔化すことも許さぬと告げるように。

分かっているわ、逃げたりなどしない。

気が引けることに変わりなどないけれど、話すと決めたのは私なのだから。

「何が聞きたいのです？」

「無論、貴様が先日城下で会つた男についてだ。それと、貴様がこの国に留まる理由も話せ」

問いを再確認すると、ビーが足音も立てずにやって来たので一瞬視線を逸らして椅子を引こうとする。恐らく私の膝の上に来るからだろうと予想してのものだったがしかしビーが私の膝の上に飛び乗ることはなかった。

「邪魔をするな」

ぎにゃあ、と何とも間抜けな声がしてビーがリズに首根っこを掴まれる。

そうしてそのまま自分の肩の上に載せると、私の元へは行くなと言つように眼光を鋭く走らせた。

相手がヴァノッサであつたならただ猫に焼き餅を焼いているだけの動作。けれど相手がリズであるせいで、それが場の流れを変えさせないようにするための動作に見えた。そしてそれはきつと間違ひではない。

堅い鎧に載せられたビーはしばらく降りようともがいていたようだったけれど、すぐに諦めたようでも不機嫌そうな金の瞳をこちらにじつとりと向けながら大人しく身を伸ばしている。その姿がとても愛らしくて、何より隣にある顔がリズの物ということもあって思わず吹き出した。

「笑うな」

「だ、だって貴方が猫を肩に載せるのを見る機会があるなんて……」

無愛想ながらも整った顔立ちの騎士の横に並ぶ、灰猫。こんなに笑える取り合わせが他に存在するだろうか。たとえヴァノッサが同じことをしても私はこれほどまでに笑ったりはしないだろう。

口元を押さえ必死に笑いの衝動を堪えているとリズの顔が更に不機嫌に歪み、このままだと剣を抜かれかねないほどの剣呑な空気が放たれる。

私はその空気を察しながらも笑い続け、かといって話を逸らすことは気の毒だからと笑いながら話を続けた。

「多分、貴方が予想する通りの人ですよ」

唐突に戻った話に、一瞬頭が付いていかなかったようだ。

どうやって私を罵倒しようかと考えていたらしいリズは空色の瞳を軽く見開きこちらを凝視してから顔を引き締める。すると更にピ―が隣にいることが不釣合に見えてきて笑いがこみ上げるけれど、これ以上笑っているわけにもいかなないとこちらも顔を引きしめた。若干頬の筋肉が引きつることは許してほしいところだけれど。

「陛下にそっくりな御仁だった」

「ええ」

「でも貴様は陛下ではないと言うし、ビリオン様と呼んでいた」

「そうです」

「……」

「ビリオン・ヴァン・ファルガスタ」

息を呑む音が耳朶を打つ。

「それが貴方の予想する人物でしょうか？」

彼が答えられなかった答えをあっさり口にする、その名前を聞くだけでも不機嫌になるのかビーが顔を顰めるのが見えたけれどそれについては何も言及しなかった。肘をついたまま、じつとリズの反応を待つ。予想していたとはいえ魔女にそれを言い当てられてしまったリズは困惑を顔一杯に載せて、何やら思索しているようだ。憎むべき存在にこれほど分かりやすい表情を向ける彼は純粹であり単純でもあったけれど、少しぐらい心をひらいてくれたのだ

ろうかと考える私も純粹で単純なのだろう。

「しかし」

呟きがささやかに満ちる。低いそれを発したのは、無論リスだ。

「あの御方は何年前に崩御されたと思っっている」

「三百年近く前ですね」

「相手は人間だぞ」

「知っていますよ」

そう、普通ならば生きていくわけがない。

人も魔女も、この世に生を受ける全ての物がいつかは死に絶える。それにかかる時間に各々差があるとはいえど。

だからこそリスには信じられなかったのだろう。三百年も昔を生きた人物がこの世に存在しているなど。

けれど彼は決して馬鹿げた話だと笑ったりはしなかった。彼とて分かっているのだ、紅蓮の髪と瞳が禁色でありその色を持つ人物がそう簡単に現れるはずのないことを。私だってそうだ、ビリオン様とヴァノツサ以外にあのような色を持つ人間など見たことがなければ聞いたこともない。

「貴様は初代炎帝陛下と関わりがあったのか」

しばらくの時を置いて問われたのは、あの人が存在するか否かという問いではなかった。

思考を整理したいという思惑でもあるのだろうか……私には分かんなかったけれど、頷いてありのままを答えてやる。

それがリスが聞きたいことの全てに繋がっているのだと伝えるために。

「昔救われた御恩があるのです。理由あってすぐにファルガスタを出奔しましたが」

「それで恩のある初代炎帝陛下のために馳せ参じたと？」

それには首を振ってみせる。

「いいえ。この国に下り立ったのは純粹にヴァノツサの願いがあったからこそ。ですが、私は精霊達にビリオン様が生きていらっしや

る可能性が高いとの情報を与えられました。だから」

「あの御方を探しに来たのか」

「ええ。もしもあの方が生きていらっしやったら、それは禁忌に触れたことになるからと」

「禁忌？」

リズの肩に載ったままのビーをちらと見る。すると彼はこちらからの視線が来ることを予期していたのか物言わず金の視線を返してくるのみだった。そこには先程まで見ていた不満はない。

禁忌について尋ねながらも、禁忌そのものを肩に載せていることに無論リズは気付いていない。

私は小さく頷き、同時に拒絶の言葉を口にした。

「そう、禁忌です。ですがこの話をこれ以上貴方にする義理はありませんので、訊かないで頂けるとありがたいのですが」

「中途半端に話したくせに何だその言い草は」

「いいじゃありませんか、私の目的なら伝えたでしょう？」
ぐ、とリズが押し黙る。それを眺めながらふうと溜息をつき、瞼を閉じると再び小さな問いが放たれた。

「貴様は、先代炎帝陛下が生きていらっしやると思っているのか？」

低い声が耳朶を打つと同時に好奇心旺盛なことだと思っただけで、この話には私にも分らないことが多すぎる。答えを求めるのは、決して間違いではないのだろう。

「ええ」

指先に力を込め、瞼をこじ開ける。あまりに強く睨んでしまったのか、リズが怯むのが見えただけで眼光はそのままに続ける。それは弱さを見せないための仮面であり、本心からのものでもあった。

「信じたくはありませんが、あの方は生きています」

「禁忌を犯して、か？」

「そうです」

その言葉は私にとって絶望と同義だ。

けれど見て見ぬ振りをして背中を向けるには、あの人は私の心の

中で大きくなりすぎた。ヴァノツサに事の全てを話した晩のように、再び絶望を吐露したい衝動に駆られるもそれは必死に押し止める。あのような姿を何人も人間に見せることは私のあるのかないのか分らないような自尊心が許さなかった。

「それが貴様がこの国に留まる理由か」

「はい」

実際は私がこの国に留まらずとも、何ら問題などないのだろう。

ピリオン様は私が共に来ればそれで良いのだろうし、そもそもこの地震自体ファルガスタだけで起きているものではないのだから。けれども私がこの国に留まる理由は、単にヴァノツサがいるからか。

かといってそこまで細かく話してやる義理もなければ時間ももつたいないので、あっさりと言いついてみせる。

指先の力を解き楽な姿勢になると、ビーがリズの鎧の上で尻尾を左右に振っているのが見えた。お疲れ様とでも言いたいのだろうか。

再び歴史書へと手を伸ばし、地脈について　そして魔女の狂宴について探っていく。ヴァノツサの口ぶりから魔女の狂宴も一度しか起きてないと思うのだけれど、あれから技術も進んでいるはずだ、もしかしたら対応策や薬の作り方でも発見されたかもしれないと期待を籠める手に力が入りそうになる。

「しかし、初代炎帝陛下に氷の魔女、か」

慌てて手から力を抜こうとしているとぼつりと小さな声が耳朶を打ち、思わず呆けた声を上げる。

「……え？」

「何か不満でもあるの？」

同じような声量で返すとビーが不満そうな声を上げる。

不満があるとすればそれはビーじゃないのかしらと胸中で呟いていると、リズは何やら思案するように首を振った。

「いや、何でもなし……ああ、いややっぱある」

「何なんですか」

まるでヴァノツサみたいなお口ぶりだと感じながら呆れ声で返すと、

リズは一応手伝う気はあるらしく歴史書に手を伸ばしてそれを繊細な手つきで開きながらこちらに視線を寄越す。それはどこまでも油断ならないだったがしかし困惑をも含んでいた。

「貴様がこの国に留まる理由をなぜ訊くのかと言ったな」

「？ 言いましたけど」

「俺は貴様がそんなことを訊く意味が分からん」

「そんなこと言われても……」

少し話が飛んだような気がするけれど、言ったことに間違いはないからと頷く。

するとリズは大仰に溜息を漏らしながら眉間に皺を寄せた。

そんなに渋い顔をしていると後々皺が残ってしまうのではないだろうか。

「隠してもよかったんだろう？」

「ええ、まあ」

「なぜ話した」

私が素直に答えると何か問題でもあるのだろうか。

「……聞いたくせに」

「黙れ馬鹿猫。俺は氷の魔女に訊いているんだ」

随分と失礼なことだと感じていると、私の意図を察したビーが不満たらたらの声で文句を言った。そのせいでもう終わったとばかり思っていた二人の口論が再開される。

「そつちこそ馬鹿馬鹿うるさいよ、馬鹿騎士。大体レイアは氷の魔女じゃなくてレイアステイって名前があるのに、いつになったら覚えるのさ」

「呼ぶ義理などない。大体皇城で氷の魔女と名乗ったのはこいつだ」
そういえば言った気がする。

あの時はヴァノツサの態度に怒りを感じていたから忘れていたけれど、そうすることで少しでも冷たく見えるようにとあの名を選んだのだった。問うような金の瞳に頷いてみせると、理由は理解できないまでも大方の事情を察したらしいビーがむうと口元を歪めた。

「そうだとしても、せめて華月の魔女って呼べばいいのに。僕あの呼び方嫌いだけど」

……今更リズにそのようなことを求めても無理だと思っただけれど。

そう考えたとリズがきよとんと目を丸くしてビーを凝視した後、すぐにこちらを凝視する。頭の中から胸元までじつと見下ろしていったリズの視線はやがて顔の部分で止まり、怪訝そうな声が発される。

「華月？ こいつがか」

「指を差すのはやめてください。行儀の悪い」

しかも指を差して言うほどのことがそれが。

手で払い除けるには位置が遠すぎたので風を送り込みやんわりと指差す方向を変えてやる。けれどリズはそのような動作などまるで意に介した風もなく忌々しげな舌打ちを漏らした。

「そういえば陛下も貴様を華月の魔女と呼び出したな。俺としては氷の魔女という呼び名の方がよかったんだが」

「？ 意味が分かりません」

なぜその呼び名の方が好きなのだろうか。

問うてみると、リズはにやりと獰猛な笑みをこちらに向けた。敵意を顕にしたそれに目を細めてみせる。

「その呼び名なら、思う存分貴様を憎める」

「もつと意味分かんないんだけど」

続く問いはビーのものだ。

リズは私達の問いに対して歴史書の中身を何枚かめくって、中身を見せるようにこちらに差し出した。

「？ これは先代炎帝時代の」

「ここに、一人の魔女の存在が記されている。名は書かれていないがな」

「……そう、ですね」

何が言いたいのだろうか。

ぐるぐると巡り始めた思考が遠くで警鐘を鳴らす。

それは予感めいたものでしかなく、決して確信とは呼べないものだったのだけれど。

先代炎帝と皇妃様の名が刻まれており、同時に魔女の狂宴についても記されていた。

処刑されたのは一人の魔女。

名は記されていないが、確かにその者が処刑されたことが歴史書には書かれている。

そう、公には死んだことになっているのだ　私は。

「氷の魔女」

びくりと肩が跳ねそうになるのを必死で押さえ込み、努めて冷静な声を出す。

「何ですか？」

どうにか押し出した冷静な声とは裏腹に、内心では鼓動が強く跳ねているのを自覚していた。

何を問われるのだろうか、何を言われるのだろうかと警戒心を剥き出しにした鼓動が更に跳ねる。

「貴様、歳は幾つだ？」

「……はい？」

「だから歳は幾つなんだと訊いている」

しかし続いた問いは予想とはかけ離れたもので、私は呆気にとられながら同じく安堵した様子のビーが放つ文句に相槌を打つことしかできなかった。

「レディに歳を訊くなんて騎士の風上にも置けない男だね、こいつ」

「そうね」

「いいから答える！　俺だって好きで訊いてるわけじゃない！」

それにしても歳とは、私自身よく覚えていないというのになぜ知ろうとしているのだろうか。

「それなりに長生きはしていますけど、細かい歳は覚えていません。

それで、そんなことを訊いてどうするのです？」

だから素直に答えると、リスが目を細める。肉食獣を思わせる鋭さに再び緊張感が高まった。

顔を強ばらせると彼は一瞬黙り込み、そして深々と息を吐き出すような声を出す。

「……だからなぜ貴様はそうも魔女らしくない顔をする」

「え？」

「そんな顔をされたら、まるで俺が苛めているみたいだろうが」
突然何の話だろうか。

責めるような、文句を言うような声に知れず言葉が刺々しくなる。ただでさえ緊張しているというのに、どうしてこうも関係のない話を所々に挟むのかとこちらが文句を言いたい所だ。

「貴方は魔女の何を知っているのです。私ですら知らないというのに」

年甲斐もなくと言われそうなほどに口を尖らせて呟くと、彼はこちらに駆け寄ろうとして鎧から滑り落ちそうになったビーの体を支え再び肩に載せ直しながらどこか苦渋に満ちた声で言い放つ。

「少しぐらいなら知っている。少なくとも貴様が知らないことぐらいは」

「？ どういう意味ですか？」

問うと、沈黙が落ちる。

思案するように揺れる薄い空色の瞳は、続く話を私にすべきかどうか考えあぐねているようだった。

けれど結局彼が導き出したのは、私に自分の話をする事だったらしい。

誰もいない地下の書庫のその更に奥という誰も来ない空間にいたということも、彼の背中を後押しする要素だったのだろうか。ひっそりと囁められた声は微かな苛立ちと嫌悪を籠めて放たれる。私に向けたものではなく、彼の脳裏にはびこる存在に向けて。

「俺の遙か遠い祖先の姉君が魔女の被害にあっただけらしい。だから俺

の家系では魔女に関していい話を聞くことがない」

他の歴史書の中身を確認しながらも饒舌なリズに向け、おうむ返しのような言葉を返し、同じく歴史書の中身を確認していく。ピリオン様が統治された時代には地脈に関する出来事はなく、魔女の狂宴の解決策についても何も書かれていなかった。だというのに、その歴史書から目を逸らすことができなかった。彼や皇妃様がどう生き、死んでいったのかが気になったせいで。

「被害、ですか？」

数枚紙をめくりながら問う。

するとリズは自分の家系について話すことに躊躇いを感じなくなったのか、やけにあっさりとした口調で続けた。

「そうだ。貴様は初代炎帝陛下のことを知っているみたいだから知っているだろう。陛下の元に嫁いだツヴァイの姫君がその姉君のことだ」

「っ！？」

鼓動が跳ねる。

「どうした？」

冷えそうになる心を叱咤し、怪訝そうなりズに向けて首を振ってみせた。自分が今平常心であるのだと彼にだけは伝えなくてはならなかった。

「いえ……まさかりズ殿がツヴァイ王家の血を引いているとは知りませんでしたから」

「どうせ本家のことだ。元を辿ればツヴァイ王家の血を引いているんだろうが、俺の家は今やその血も薄い分家だからな　これは何も書いてないぞ」

静かに歴史書を置き、また別のそれに手を伸ばす。目を通す速度の早さに呆気にとられるものの、騎士になるには学力も必要なのだからこれぐらいはできて当然なのかもしれないと思い直し、それと続けた。

「確かに皇妃様のことは知っています。ですが、そのような事実は

知りません」

嘘だ。本当は誰よりもよく知っている。だってそれは私の罪なのだから。

「……そうか」

間を空けて浅く息が吐かれるのを見て、胸中の叫びがどうか届きませんようにと強く願う。

そしてその願いはこの世界の誰かに通じたようで、私は努めて冷静な声を出したまま問うた。まるで自分はその件のことなど全く知らないのだと印象付けるように。

「それで、皇妃様はその魔女にどのようなことをされたのですか？」

「我が家の最重要機密をそうやすやすと教えると思うか？　しかも魔女相手に」

「それもそうですね」

「だが、これだけは言える」

二冊目の歴史書を読み終え、リズが三冊目に取り掛かる。その間もまだ一冊も読み終えていない私に文句を言うでもなく、独白のような声が放たれる。それは研ぎ澄まされた刃よりもずっと強く心を抉る声だった。

「その魔女はこの世界で最も魔女らしく、最も忌むべき存在だとな

何せその魔女は」

黙ったままりズの言葉を待ち、続く言葉に絶句してしまふ。

鋭い眼光に光が灯り、こちらの真意を推し量るようにぴたりと向けられる。

その瞬間、ああきつとこの男はすべてを掴みかけているのだと確信した。

「先代炎帝陛下をかどわかした稀代の悪女なんだからな」

けれども私を断罪する言葉を吐かないのは、きつと。

第二十五話 終焉の見える安寧

リズはきつと、私が自分にとって最も憎むべき存在なのだと気が付き始めている。

「……」

こちらの出方を探るように向けられた薄い空色の瞳。真一文字に引き結んだ唇。

その唇が開いて私を断罪しないのは、きつと唐突に現れた存在が自分の最も忌むべき存在なのだと言う実感が湧かないことと、そして偶然にも掴みかけた存在が、思わず魔女らしくないと呆れるほどの魔女だったせいなのだろう。

「稀代の悪女ですか」

「そうだ。そしてその魔女は氷の魔女と呼ばれていた。歩くだけでその場の温度が下がる、血も涙もない冷たい化物だとな」

「だから私の名が氷の魔女である方が憎みやすいと言ったんですね」
沈黙は肯定だろう。

ビーはこの件に関してだんまりを通すことを決めたようで、視線からも悟らせないよう目を閉じる。尻尾が不安そうに揺れるのみだ。
血も涙もない冷たい化物。

随分と懐かしい言葉を人間から聞かされた気がする。その言葉は今や私とビー以外知らないものだと思っていたのに。

「貴方は」

自分でも驚くほどに弱々しい声が出る。掠れはしないかと我ながら心配になるような声がりズの耳に入った頃、顔を上げた。

声とは裏腹に、あくまで強気な顔を。

「貴方の家系の人間はずっと、その魔女を憎んでいたんですか？」

三百年だ。

それだけの時を越えて、なお自分を憎む存在がいるなどは想像もしていなかった私はその問いへの分かりきった答えを待った。リズが瞳が細められ、こちらの真意を吟味するように再度向けられる。「愚問だ。一族にとって最も高貴な女性の誇りを傷つけられたんだからな」

皇妃様から向けられた数々の言葉が頭を過ぎる。それは幸せなものから悲しいものまで入り交じって、じわりと思考を侵していく。刺すような心の痛みを感じながら、何とか声を搾り出す。

「……そうですか」

まさか、こんな所で皇妃様ゆかりの人間に会うとは思ってもしなかった。

私は自分の浅はかさを呪いながら一体リズはいつ私に断罪の言葉を浴びせるのだろうかと思案する。けれどいつまで経ってもその時は訪れず、リズは私が頷くとすぐに歴史書に視線を落とした。その姿に苛立が混ざっているのは、私の気のせいなんかじゃないのだから。

彼とて、掴みかけた存在に対する罵倒を浴びせたくて仕方がないはずなのだ。

普通の民ならいざ知れず、高貴な出自であり何より彼は騎士なのだから。誇りを重んじる人種がたとえ己ではないとはいえそれを傷つけられて黙っていられるはずがないし、それがなかったとしても氷の魔女は稀代の悪女として知れ渡っている。本当ならば、同じ部屋で同じ円卓を囲むなどとは考えられないはずだ。

同じ二つ名を持つ魔女、同じ時代を生きていた魔女。

これだけで彼の中では証拠は十分であったはずなのに、彼は何も言わず一心不乱に地脈について探っていく。

確信が持てないことへの苛立ちをぶつけるように、私の存在すら忘れて。

いや、もしかしたら地脈のことよりも魔女の名前を見つけた

いと思っっているのかもしれない。

氷の魔女という名前だけではあまりに自分が持つ情報と合致しないからと、歴史書の中のどこかに魔女の名前がないか探しているのかもしれない。そこにレイアステイと書かれていれば、彼は自分の考えが正しいと確信し私を断罪することができるのだから。

そして私も自分から泥沼の事態になることを願うわけではないので歴史書に目を通した。

この歴史書の中に、私の名がないことを願いながら。

書物を傷つけないようにそつと扱いながら、一つ一つ歴史を紐解いていく。けれどその中に欲する情報などなく、私は些か不審に思いながら次の歴史書に手を伸ばした。山のように積まれたそれはまだ半分ほどしか読み終わっておらず、長期戦になることが伺える。

けれどその中にも何も書かれていなかったら、次はとうとうあの大量の本の中から探さなくてはならない。これではツヴァイの姫君が来るまでに間に合うかすら分らないと胸中で溜息を漏らす。するとリズムも同じことを考えていたのか疲れきったような息を吐き出した。

「ないぞ」

「まだ半分しか調べていませんよ」

リズムの言いたいことは最もだけれど、こちらが言うことも事実だ。歴史書の中に地脈に関するところがあるなどと考えたことが間違っていたのかも知れないと考えながら更に読み進め、ふと思案する。

ビリオン様はどうやって地脈の存在を知ったのだろうか。この世界が創造されたその時から完成されていた流れが地脈なのだとアマンティは言っていた。けれど、その地脈に関する知識というものは人間の間ではあまり知れ渡っていないはずなのだ。そもそも彼らには魔力を感知する能力がないのだから。

それを破壊するとなると、やはりそれ相応の知識が必要にもなる。だとしたら裏で暗躍しているのは魔女か魔導士ということになるのだけれど……。

「リズ殿」

「何だ」

「氷の魔女以外で、魔女や魔導士の話を聞いたことはありませんか？」
三百年前の魔女の狂宴の際、魔力を持つ者は皆身を隠したはずなのだ。おいそれと出てくるはずがない。ましてや、ファルガスタ皇帝の元へなどと。

リズに問うと、彼は思案するように視線を逸らしすぐに首を振る。
「少なくとも俺の家には伝わっていない」
「そうですか」

やはり、そう簡単には見つからないものね。

「どうした、仲間でも恋しくなったのか？」

「いえ……少し気に掛かることがあっただけです」
からかうようなリズの問いに素直に答えると、怪訝そうに目を細められる。

しかし私の言葉に対して言及することはせずに歴史書を一冊手に取ったリズはそれとは別の問いを返した。

「氷の魔女」

「はい？」

「なぜ地脈について今更調べる必要があるんだ？」

これもまた、訊かれたら訊かれたで痛いことを訊いてくる。

先程の言葉に言及はされなかったものの、それとほとんど変わらない内容の問いに辟易しながらどう答えたらいいものか思案する。
無論、書物を探すのを手伝ってもらっている身なのだし重要なことなのだから話しておくべきだろうとも考えていたのだけれど、こつこも立て続けに色々話さなくてはならないのは少し面倒だった。

茶でも淹れて持ってくればよかったと思わず考えてしまうほどに喉が乾く。

けれどここで円卓から離れてお茶を持ってきますと言った所で逃がしてなどもらえないことは分かっていたから、私はリズの問いに
対し最も簡潔に答えてやることにした。……簡潔にした所で、詳細

な理由を訊かれることは目に見えているのだけだ。

「此度の地震は、まだ終わってなどいません」

「……何？ どういう意味だ」

訳が分からない、と言う風に剣呑な声を上げるリスを見て若干面倒だという気持ちが強くなるものの、その問い自体は極々当たり前のものだと受け止めて歴史書を更に取り進めながら答えていく。口と同時に手も動かしていかなければ、到底終わりそうになかった。

「そもそも此度の地震は、地脈が破壊されたことにより魔力がそこから溢れ出ていることから起きる現象です」

これにも何も書かれていない。手を伸ばし、もう一冊手に取る。

「もちろん、並の人間であれば地脈に近付くこともできませんし、破壊することなどもつての他です。魔女や魔導士ですら行くことはしません。ですが地脈付近で精霊達がヴァノツサに似た人間を見ていると」

「……先代炎帝か」

「元はそれを確かめるためのが目的だったんですけど、先日城下で先代炎帝陛下のお姿を見たことで確信できました」

戦乱などは縁遠い、穏やかな治世を紐解いていくがやはりそこに異変など記されてはいなかった。

ふう、と息をつき手を動かさずにこちらを見ているリスに視線を向ける。色合いは違えど同じ蒼色の視線が交差した。

「そして地脈破壊の原因である先代炎帝陛下が仰ったのです。期限付きの平穏と安寧を与えると」

「その期限はいつ終わる」

「分かりません。ただ、そう遠い日のことではないはずですよ。あまり長い間地震を収めておくことはできないと仰っていましたから」
けれどそれが明日でも明後日でもないことだけは断ずることができた。

私の予想とはかけ離れているのかもしれないけれど、ヴァノツサの身に何か変化が起きない限り地震が再開されるはずがない。そう

でなければあの人が地震を収めた意味が失くなってしまふのだから。そこまで考え、ふと思いついてはいけないことが頭を過ぎる。

もしも私の予想通りあの人が無事な婚儀を待っているのだとすれば、要するに婚儀を行わなければ地震が起きる日も伸びるのだらうかと。放っておいてもいつかは再開されることに間違いはないけれど、伸びるのであればそれに越したことはない。とはいえ、それを口にしたらリズを悩ませてしまふのかもしれないと思い結局は別のことを口にした。ほんの少しの意地悪心を忍ばせて。

「それと」

「まだあるのか」

嫌そうに顰められた顔に向けて、努めて平坦な声を出してやる。

まるで大したことではないのですがと言うかのように。

「貴方は気付いていないのですが、一月前にビーが冬宮に来た後であの方も冬宮を訪れているのです」

「!？」

リズの頭の中では今頃、地震がいつから収まったかを思い出そうと躍起になっているところなのだろう。そして守るべき主の前に、いくら先代炎帝とはいえどこか得体の知れない存在が現れた時傍にいなかったことを後悔しているに違いない。先程から問いを重ねてきた報いだと思って受け取ってもらいたいところだ。

その怒りがこちらに向けられることは必至なのだけれど。

「……それを、一月も隠していたのか貴様は」

「言ったら怒るでしょう?」

「じゃあなぜ言った」

「喋り疲れたので、腹いせです」

わなわなとリズの拳が震える。無論、怒りのせいだろう。

地脈に関連する異変も魔女の狂宴についても何ら情報を得られな
いまま、ほぼすべての歴史が紐解かれて行く。本格的に長期戦にな
ることをそろそろ覚悟しなくてはと内心で呟いていると、どんと円
卓が揺れた。

「性悪女」

「何を今更」

苛立ち混じりの声ににこやかに答えてやる。するとリスは更に何か言い募ろうと口を開いたが、それはビーの声に阻害された。

「あれ？」

ぱちりと目を開け、だんまりを決め込んでいたビーが呆けた声を上げる。

「レイア」

「どうしたの？」

「地震、来るよ」

……え？

呟いて詳しい話と聞こうと身を乗り出す。けれど遅かったらしく、微かに地面が揺れた。

「どうということだ！」

それは本当に微かな揺れだったのだけれど、慌てた様子でリスが怒鳴り声を上げる。それを耳に入れながら腕を伸ばし、歴史書が崩れないよう支える。小さな揺れが大きなものにならないことを切に願いながら。

目を閉じ、魔力の流れを探ってみる。けれどどこにもおかしい所など見当たらなかった。体に異変がない所から、地脈に関連したものではないのだろう。

「恐らく、地盤の関係でしょう」

「貴様が固めに行ったんじゃないのか」

「完全ではないと言ったでしょう。けれど、大方は安定させているので大きな揺れには繋がらないはずですよ」

言葉通り、揺れはすぐに止み大きくなることもなければ余震が起ることもなかった。

ただ、だからといって万事問題がないわけではない。民にとって地震は忘れたい出来事であり、できることならもう過ぎ去った過去のものとして認識したい事象なのだから。だというのにこうもあつ

けなく大地が揺れるとなると、彼らの不安は再び増長する。天災なのだから誰に文句をぶつけられるわけでもないのだし、政には一切影響はないはずだけれど。

読み終えた歴史書を抱え、棚へと戻す。

話をしている場合などではなかった。急いで地脈について調べなければ。

「地脈が破壊された可能性は？」

「ない、と思います。その場合私は立っていることもままならない状態になりますから」

「先代炎帝が現れた時のようにか」

「……はい」

地脈を破壊されたから具合が悪くなるのか、ビリオン様の存在を感じるから具合が悪くなるのか、それは分からないけれど二つは確かに結びつくものだから頷いておく。リズは考えこむように瞠目し、自分が取れる最善の行動を探しているようだった。一介の騎士ではない彼にできることと言えば主を守り復興の手伝いをするぐらいのだけれど、話を聞いた以上道は探すのだろう。魔女に対して手厳しい彼も、主や民に対しては誠実なのだとの態度を見ていたら分かるから。

円卓から離れ、とりあえず書物の表題を調べべく書庫を歩き回る。表題を見ただけで分かるものから探そうという魂胆だったのだけれど、一周巡ってもそれらしい書物は見当たらない。国中の書物を集めたと聞いていたけれど、そもそも地脈に関しての知識がこの国にないのだろうかという気持ちになってくる。そしてそれはありえない話ではない。かつては魔女や魔導士がいたから話を聞くことはできたのかもしれないけれど、三百年前の魔女の狂宴から姿を現さなくなったのだから。

深く息をつき、天井高くまで伸びる本棚を眺める。二人では到底人手が足りないほどに高く大きなそれを見ていると気が滅入ってしまう。

その時鐘の揺れる音がした。

リズがこちらに向かう気配を首だけ振り返って追う。すると彼は一定の距離を取ってから立ち止まり、ビーを肩から下ろす。

しなやかな動きで駆けたビーが即座に足元に擦り寄ってきたので、今度は私が抱き抱えた。

「これだと次の地震までに情報が集められないな」

嘆息混じりの声に頷いてみせる。確かにこれではヴァノッサの婚儀が終わるまでには調べきれないだろう。

「そうですね。せめて書庫の管理をしている人間がいればよかったです」

「呼んでもすべては分からんだろうな。……少し席を外す。貴様はここで待っている」

「？ はい」

「どこか行くの？」

銀光が明かりの光に揺れ、リズが扉へと近付く。その背に向けてビーが問うと、微かな頷きが返ってきた。

「ああ。馬鹿猫はともかく、貴様は絶対に外に出るなよ」

「はあ……」

調べ物をしているから出る予定などないのだけれど、出たら問題でもあるのだろうか。

確かに魔女がふらふら皇城内を歩くのは彼にとっても臣下にとっても好ましくはないとは思いつけれど、何もそこまで釘を差さなくても。

リズの言葉に呟きで返すと、その程度の答えでも十分だったらしいリズが書庫から出て行く。ばたん、と閉じられた扉を眺めていると胸元でビーが吐息した。

「焦ったね」

「……そうね」

それは恐らく、氷の魔女についての話だろう。

僅かな間を空けて肯定で返すと、ビーは頬をドレスにすり寄せて

小さく喉を鳴らす。その額を撫でてやると、目を細めた彼は扉へと視線を向けた。

「単純なくせに、色々考えてるんだね」

「そうね」

今度は間を空けずに答える。誰のことかとは問わなかった。

「ああいう奴は嫌いじゃない」

ぼつりと聞こえた声に口元が緩む。

「そうね」

全てを知ったら、きっと彼は私を更に強く憎むのだろうけれど。

「でもさ、もしリスが証拠でも掴んだらどうするの？」

「その時のことは考えてないわ。でもきつと、謝るんだと思う。他の誰に謝らなくても、彼にはそうしなくてはいけない気がするから永き時を憎しみに浸す羽目になった一族の末裔である、彼にだけは。」

ビーを抱いたまま少しでも情報を得るために足元に風を起こす。

ふわりと身を浮かばせてから天井近くの棚を見るも、ここにも地脈に関する本はなかった。

「……やっぱりないわね」

「レイア、お願いだからリスがいる所では浮かんじゃ駄目だよ」

「どうして？ 魔法を使ったら魔女らしいから？」

嘆息するとビーが不満そうな声を上げるので、そのまま地面へと戻る。とん、と足先をつかせるとドレスが舞い、それを見ながら更にビーが口を尖らせた。とはいえ、リスはすでに私が魔法を使う所を見ているのだから今更だと思っただけけれど。

「違う」

「他に何かあるかしら」

「……もういいよ。とにかく駄目だからね」

ますます訳が分からない。

首を傾げるもののビーは答える気がないらしく、ふいと顔を逸らしてしまう。一体何がそんなに不満だったのかは分からないけれど、

理由もなくこんな態度を取ることはないだろう。いくら猫が気まぐれとはいえ、彼はそこまで理不尽じゃない。

だから私は何も言わずに幾つか興味を引かれる書物を手に取り円卓へと戻る。それは魔力に関する記述がされた書物で、めくっていくと魔力の制御法が書かれているのが見えた。そしてその魔力が魔女や魔導士だけのものではなく、この世界を巡っているという記述も 世界を巡る、魔力？

無言で書をめくり、読み進めていく。

そこには地脈という言葉はどこにも書かれていなかったけれど、魔力が流れる通り道として確かに地脈のことが書かれていた。私が知っている以上の情報をそこに見つけることはできない。けれど、これedyouやく理解できた。地脈という存在について認知をされていないわけではなく、地脈という言葉が認知されていないのだと。

ならば、次に調べるのは魔力に関する書物だ。

手に取った書物の全てに目を通し、そこに自分も知らない情報がないかと吟味してから席を立つ。

「どうしたの？」

「糸口が見えたわ。この国には地脈という言葉が存在していないみたい」

「？ じゃあどうやって探すのさ」

「魔力よ。地脈って言葉はないけど、魔力が通る道として解説されていたから」

魔力に関する本であれば表題を見た時に幾らかあるのを覚えている。私は自分の記憶を手繰り寄せながら数冊の書物を手に取り、そこで開いた扉に視線を向け目を丸くした。逆光で見えづらいその影に声を掛ける。

「……何かあつたんですか？」

荒い息遣いが聞こえる。何事かと近づいてみれば、紅潮した顔が舌打ちを漏らした。

「この国の人間は腰抜けばかりか！」

「はい？」

何の話だろうか。

「あいつら、口を揃えて魔女がいるから嫌だとか　国の一大事に魔女が怖いなどと言ってられると思っっているのか」

「あ、あの」

苦々しい顔で悪態をつく銀光に小さく声を掛けるも、聞く耳を持たない。一体どうしたものかと思いつながらビーへ視線を向けるものの、彼にも意味が分からないらしく小首を傾げるのみだ。それはそうだろう。少し席を外したと思ったらこのような怒り顔で戻ってくるのだから意味が分からなくても仕方がない。

荒々しく緋色の敷物を踏みしめこちらに向かうリズに他に何て声を掛けようかと思案していると、彼の鋭い瞳がこちらを射抜く。薄氷のようにも見える薄い空色の瞳は怒りに染まっていた。

「さつさと探すぞ」

「え？　あ、はい」

普段ならありえないほど素直に頷いてから円卓に向かうリズの背中を見る。やはり怒っているその背中には、苛立ちが見て取れた。

……それにしても、と思う。

あんなに荒れている理由に確たる答えは見つからないけれど、言葉の断片を繋ぎ合わせてみると仮説ぐらいなら立てられる。

もしかしてリズは　。

「人を呼ぼうとしてくれたんですか？」

人手が足りない言った途端席を外したこと、腰抜け、魔女が嫌だからと誰かが言っていたこと。

繋ぎ合わせるとそれぐらいしか浮かばない。そう考え問い掛けると、リズは一度舌打ちをしてから何やら紙切れをこちらに差し出した。必要な部分だけ破ってきたのか、それはあまり綺麗とは言えない紙だった。

「これは……」

「文官からある程度の本の配置を聞いてきた。これに関係ない本ま

で探す必要はなくなるだろ」

ぞんざいな口調で返され紙切れに視線を落とす。するとそこにはリズの言う通り、この書庫に並ぶ本棚にどのような本が配置されているのかが記されていた。先程私が魔力に関する本を取った場所はその本棚の半分が同じような本に囲まれているらしい。

「地脈に関する本はなかったがな」

「いえ、それは構いません……ありがとうございます」

「礼にはまだ早い。まだ何の情報も得られてないんだからな」

怒りから来る熱が冷めないのかやはりぞんざいな口調で言い放ちながら彼はこちらに近付き、どの本を探せばいいのかと尋ねる。頼んだ時とは打って変わって真面目な態度に鼻白みながらも魔力に関する本を探してほしいと頼むと、彼は場所を確認してすぐに踵を返した。皇城内を走りまわったのだろうか。季節はとくに冬に足を引っ掛けているというのに、リズの麦色の髪はじつとりと汗で濡れていた。

あのままだと風邪をひいてしまうんじゃないだろうかと考えるものの、結局は書庫の気温を少しばかり上げるに留めた。

炎と風の精霊を呼び、融け合う彼らの姿が熱波を呼ぶ。炎の精霊を単体で呼ぶと書物が燃えてしまうから、この策を取るしかなかった。

ある程度気温を上げてから彼らに別れを告げ、私も魔力に関する本を漁っていく。

リズの隣に並んで表題を吟味していると、リズが暑苦しそうに声を上げた。

「暑くないか？」

それはまあそうだろう。

「温度を上げましたから」

「……嫌がらせのつもりか」

「貴方が風邪をひきそうだったので。私は暑くありませんから、汗がひいたら適温に感じられるはずですよ」

手を伸ばし、そつと書物を取り出しながら目もくれずに答えるとリズが黙り込む。文句も剣呑な言葉も飛び出さないこの沈黙は慣れたようでもまだ慣れることができない。

かといつて喋ってくださいと無茶なことを言うこともできず、私は静寂に満ちたその場所で黙々と書物を選んだ。

この中に少しでも望む知識があるといいのだけれど。

スペルに関して書かれた本は流石にないけれど、せめて地脈に付いての知識が得られたら。精霊達が傍にいるのだから彼らに聞くのが一番いいことは分かっている。けれど彼らからは大方知識を得ているのだし、その上で解決策がないのだから打つ手はない。今唯一の解決策として挙げられていることは、私がビリオン様をお止めすることぐらいだし。

他の打開策を見つけないことはできないのか、そう内心で呟いていると低い声が耳朶を打つ。

「貴様が誰かを呪ったり殺したりしている所を、俺は見たことがない」

それはそうだろう。

「……当たり前です。したことはありませんから」

「陛下は魔女に堕ちたことになってるが、他の騎士が堕ちたなどという話は聞かない」

ヴァノツサが堕ちたなどという話がそもそも偽りだ。

「それはまあ、そもそも冬宮から出ませんし」

「城下で民を救った」

それは間違いじゃない。

「何が、言いたいのですか」

どうしてそのようなことを言い出すのか。

先程から話が飛んでは戻ってを繰り返して、訳が分からなくなる。

けれどそれはリズが葛藤している姿なのかもしれないと思い、苛立つでもなく静かに問う。きっと彼はどうしたらいいのか分からなくなってしまうているのだ。そして、どう接したらいいのか分からな

くなっているのかもしれない。三百年前を生きた稀代の悪女と同じ二つ名を持つ、この魔女との接し方が。

「誰も彼も、氷の魔女と接するだけで呪われるかもしれない口にする。そんなことが本当に起きたら、まず俺達の陛下が危ないというのに。陛下の手前、表立って口にすることはないが」

「……そうですね」

「三百年前はこうじゃなかったはずだ」

「ええ。ですがそれもこの国の　モーリス大陸全土で行われている教育ゆえでしょう」

魔女を誰よりも憎んでいるはずなのに、どうして彼はこのようなことを口にしなくてはならないのだろうか。

死んでしまえばいいと口にすることができたなら、もっと楽だったはずなのに。どこで変わってしまったのだろうか。

ただ、出会った時から変わらないことが一つだけあることに気がついた。

「俺は魔女を恐れたりなどしない」

「知っています」

それは彼が魔女を恐れないということ。

あの日、皇城に現れた私を見て嫌悪をぶつけてきた騎士の姿に恐れや怯えなどなかったのだから。嫌悪感をぶつけられる回数が減った今でも、それは変わらない。

手に抱えられるだけの書物を取り、円卓へと戻る。

そうして再び向かい合ってからはお互い無言で書物を読むことに没頭した。話は御仕舞だと言わんばかりの沈黙が痛いほどに脳裏を貫く。

ちらと視線を向ければ、眉間に皺を寄せて渋い顔をしたリズが書物を見ている姿が見える。彼には世界を巡る魔力の通り道に関する記述があつたら教えてほしいと伝えてあるから、何かあれば顔を上げて声を掛けてくれるのだろう。情報があるのに何も言わずにいるほど意地の悪い人間でもなければ、彼は一人では何もできないこと

を理解している。そして魔女の力が必要であることも。

もしかしたらそれは主や預言者の言葉を信じてのものだったのかもしれないけれど、それで十分だった。

魔女を恐れずここに戻ってきた騎士に内心で賞賛を送り、ひよっこりと顔を覗かせるビーと共に書物を読み漁る。

リズに何も話せないでいる罪悪感と魔女を恐れないことへの有り難さと、それから私という魔女を憎まずにいてくれることへの感謝。文字を目で追いながら湧き上がる複雑な感情を顔に出さぬよう苦慮していると、控えめに扉が叩かれる音がした。ビーの耳がぴくりと動き、金の瞳がこちらに向けられる。

「……誰か来たようですね」

「少し待っている、俺が出る」

その音がリズにも聞こえたのか、彼は読みかけの書物をそのままに立ち上がり扉へと向かっていく。さすがに扉を開けたらいきなり魔女がいた、などということがあったら相手も驚くだろうからと配慮してくれたのだろうか。意外と気配りができる騎士だと思いがながら扉を凝視していると、開かれたそこから一人の侍女が現れた。リズに向けて小さく会釈をし、何やら盆を渡しているようだった。奥の円卓から見ているから盆の上は何があるかは分からないけれど、それを見てリズが顔を顰めたのは遠目からでもよく見えた。

「どうしたんだろ」

「さあ……」

囁くような声と同じ音量で返していると、何やら口論が始まったらしい。

「何を考えている！ それでも皇城付きの侍女か！ 分を弁えろ！」

侍女の声は聞こえなかつたけれど、リズの声だけはやたらとよく聞こえてくる。自分以外に誰かを怒鳴りつけている姿など見たことがないから、こちらがその声に驚いてしまう。びくりと肩を震わせていると侍女も同じだったようで、泣きそうな顔をしながらもこちらをきつと睨みつける。……私のせい？

疑問に思っていると、その視線を追ったリズがすぐに私と侍女の間を塞ぐように立ち塞がり腕を伸ばす。押し返すような力に侍女が勢いよく扉の外に出ると彼は勢いよく扉を閉じた。ただ、受け取ってしまった盆を返すことはできなかつたようで渋い顔をして戻ってきた彼はやはり荒々しく盆を円卓の上に置いた。

「お茶ですか」

置かれたそれを見て呟く。

盆の上には一人分のティーセットと焼き菓子が置かれていた。断片的に得られた情報から察するに。

「貴様にやる」

「貴方のために持ってきてくれたのでしょうか？」

書庫で調べ物をしているのが私とリズであると知っていて侍女はこれを用意したのだろう。

だからこそリズが激昂した。

護衛任務を放棄したことがある彼に怒られるとは可哀想な侍女だと思わないでもなかつたけれど。

「……侍女の声が聞こえたのか、この地獄耳」

「生憎貴方の怒声しか聞こえませんでしたよ。でもそれだけ聞けば十分分かる話です」

失礼な。

ティーセットを一人分しか用意しなかつた侍女よりも余程失礼な態度に何て返すべきか考えるが、しかしそれはリズに阻まれてしまふ。苛立ったように寄せられた眉間の皺が消え、瞳が揺れる。弱々しいその姿に口を嚙むと、その隙にリズの声が耳朵を打った。

「人の死を願うなら、この国に来てなどいない　城下で貴様はそう言つたな」

「言いましたけど」

それがどうかしたのだろうか？

「こんな仕打ちを受けても、貴様は何も思わないのか？」

一人分のティーカップ、一人分の量が注がれているのであろうて

イーポット、一人分の焼き菓子。

それらを指差ながら問うリズの瞳は逡巡に揺れていた。

どうして逡巡するのか、どうして当然の報いだと思わないのか、書庫に来れるだけでも破格の待遇だと思えと付け加えないのか。皇城に来た時とはあまりに違うその態度にこちらが困惑しなくてもなかつたけれど、それは決して悪い変化ではなかつたから私は素直に答えた。

「私は魔女です」

「それぐらい知っている」

「魔女がどういう扱いを受けるかなど、貴方が一番よく知っているのでは？」

貴方がそうであったように、皆そうであるのだと含んで話す。するとリズは一瞬押し黙ってから、すぐに怒声を返した。

「しかし今や貴様は陛下の寵妃だろうが！ いや、それがなくとも貴様はこの国を救うべく召喚された救世主だろう」

「寵妃の座はいつか奪われる予定ですし、救世主の名は私が拒んでいます」

「誰にそれが分かる」

「誰にも」

そう、誰も知らない。私が救世主であることを拒むことも、寵妃の座がいつか奪われてしまうことも。

けれど知らない代わりに願っている。

この国が魔女に救われることなどないようと、ツヴァイの姫君に寵妃の座が移行することを……愛する国のためではなく、自分達のために。

そのためならばこの国のことを真剣に考え行動に移したヴァノツサの想いですら無視して。

何て身勝手なのだろうかと思った。そしてそう考えると怒りがこみ上げてこないでもない。

けれど同時に仕方がないことだとも考える 教育とはそういう

ものなのだから。

首を振る私の続く言葉を待つリズに、きっぱりと言い放つ。

「ヴァノツサが冬宮に通うと言った時からこうなることは覚悟していました。魔女として忌み嫌われることはこの国を訪れると決めた時にある程度覚悟していましたし」

「だからと言って」

それに、と続ける。

「この国で最も私に手厳しいのはリズ殿、貴方だと思っていましたか？ 今更この程度の嫌がらせをされた所で、可愛らしいとは思えませんよ」

そう、そしてそれは決して嘘などではない。

もしも私に対する不敬行為が咎められるようになるのなら、それはまずリズに適用されるものだと思うから。されたことを許さないと思っっているわけではないし特に感傷を抱くつもりもないけれど、護衛任務を放棄するのと茶を用意しないのでは格が違う。口の端を吊り上げて笑ってみせれば、リズは心当たりがありすぎるのか押し黙る。もしかしたら今彼の心の中では、庇うようなことを言ったのに何て言葉で返すんだこの魔女は、とかいう言葉が発せられているのかもしれない。けれどそれでもよかった。

性悪女でいるぐらいが、多分お互いにとって丁度良いのだ。

リズは私を憎むことができるし、悩むことがなくなる。私もリズを気遣う必要はなくなる。

……四六時中そういう魔女でいられないことが問題なのだけれど。「私は貴方がそのようなことを言う方が疑問です。魔女が憎いのでしよう？」

「愚問だ」

問いに対し、きっぱりとした答えが返る。

鋭いその声は更に何か言い放ちそうだったけれど、結局何の言葉も紡がれることはなかった。

けれど私はその動作だけで言いたいことが分かったような気がし

て、小さく笑んでみせる。

指摘しないのは、そうすることによって彼の葛藤が強くなると踏んでのことだ。だから礼を言うこともしない。あくまで淡々と語るまで。

「この国のために限界を超えて力を揮うことを、ヴァノツサは願っています。私はそれを叶えるまで。誰が何と言おうと関係などありません」

「……そうか」

眩きが耳朶を打ち、三度沈黙が落ちる。

けれど今度こそ長く続くと思っていた沈黙は長くは続かなかつた。

第二十六話 証拠は断罪者の元へ

普段は誰も寄り付かないはずの自分の周りに、今日はやけに人が寄ってくる。

平穩だったこの一月よりも凝縮されたこの一日は、平穩の終わりでも告げているのだろうか。

書庫の扉が再度開かれる。

細く筋のように伸びる光の元を視線で辿ると、その先に一人の男が立っているのが見えた。

リズが慌てて立ち上がり、床に膝をつく。

けれど私とビーはそのままの姿勢を保ったまま、ただじっとそこに立つ人物を見ているだけだ。

「どうした、俺の顔に何か付いているのか？」

「いえ……今日はやけに来客が多いなと思っていただけです」「？」

あまりにもじっと見つめすぎたせいだろうか。

紅蓮の瞳が細められ、怪訝そうな低音がこちらに放たれる。その言葉に対し首を振りながら答えてやると、男は　ヴァノツサは自分の立場などどこ吹く風とふらふら書庫に足を踏み入れた。無論、供は連れていない。皇城内なのだから供を連れる必要なんて本当はないのかもしれないけれど、皇帝が一人でふらふら出歩くのはいかななものか。

それにしても、どうして今日はこんなにも来客が多いのだろうか。ガラナに侍女にヴァノツサにリズ。

たった四人だけれど、ここ一月のうちのほとんどをビーやアマンティとしか過ごしていなかった私には脅威とも言える数だった。

眼前まで歩を進めたヴァノツサが私の言葉に眉を顰める。暗に来るなど言われたのではないか、疑問符を浮かべたその顔がそう言っているような気がしたから、言葉にはしないまでも首を振って否定する。

「何でもありません。それより、少しは休めましたか？」

「ああ、お陰様で楽になった。起きたら貴女がいなかったのには驚いたがな」

書庫に行くことは話していたというのに驚くことはないだろう。

「起こしたら貴方に散々嫌味を言われそうでしたので」

率直に意見を述べると、ヴァノツサは片眉を上げてからくく、と笑った。

「貴女がそんな気を回すなんて珍しいな」

「貴方が私に喧嘩を売るなんて珍しいですね」

「怒らなくてもいいだろう。褒めたんだ」

「ご丁寧にありがとうございます」

この男はもしかして私のことをそんなに気が利かない魔女だと思っていたのだろうか。取り様によっては失礼とも言える言葉に嫌味を返してやると、彼は苦笑を漏らしながらふと円卓へと視線を移した。私達の調べ物の状況を確認したかったのだろう。

「……ティーカップ？」

「ああ、先程侍女が持ってきたものです」

けれど、本よりも先にティーカップや焼き菓子が目に入ったようだ。

リズがぎょつとした表情を浮かべるのを視界の端に捉えながらあっさりと答えると、ヴァノツサは何やら考えこむように一度目を閉じてから口の端を浮かべる。嘲笑にも見えるそれは、決して私に向けられたものではない。リズへと向けられたのだ。

「一人分しかないが」

「気のせいでしょう」

怒りを受け止める体勢に入っているリズを一瞥し、ヴァノツサの

言葉に即座に返す。何てことはない、という風な声色にヴァノツサはリズが悪いわけではないと察したのかその視線をすぐに和らげこちらに向けた。す、と細められた紅蓮の瞳に強い光が宿る。皇帝として他人に有無など言わせぬと言っているような、そんな瞳と視線を絡め対峙した。

「……………」

「……………」

沈黙が舞い降りる。

けれどどちらもそれが気まずいからと口を開くことなく、ただお互いがしたいままに相手の視線を黙殺していた。

何も問うなと視線を送っても意味がないのはそのせいだ。

ヴァノツサとて、私の言葉から大方検討はついているのだと思う。そうでなければ今すぐにも彼はリズに嫌味を浴びせているだろうし、リズはそれを甘んじて受けているはずなのだから。けれど予想を口にせずにあくまでこちらに問いかけるのは、自国の人間が救世主たる魔女にしたことを受け入れたくないせいだろうか。それは分からないけれど、ヴァノツサが自分の考えを何も口にしなかったことは確かだった。

その姿に、まるでリズのようにだと胸中で呟く。氷の魔女に対する確たる証拠を掴めず、その魔女に頼まれて書物を一緒に探しているのがいい例だ。この国の人間にはそういう気質でもあるのかもしれない。

「貴女は秘密主義者か」

考え事をしながら沈黙をやり過ごしていると、先にヴァノツサが折れた。円卓に片手をつき、溜息混じりに問われる。

「魔女は神秘的なぐらいで丁度いいと思うのですが」

「少しぐらい頼ればいい。俺だって何もできないわけじゃないのだから」

「間に合ってますので結構です」

一度軽く手を振って応じると渋い顔をされてしまっけれど、本当

に心配されるようなことなど何もないのだ。

大体今一番大変なのはヴァノツサのはずなのに、私に構っている暇があるとは思えない。

あまり追求すると私が怒り出すと思ったのだろう。ヴァノツサは吐息して首を振りつつ話題を変えた。

「まあいい。それよりレイアステイ」

「何でしょうか」

ティーカップについてそれ以上触れないことに内心安堵しながら首を傾げると、ヴァノツサはリズを一瞥した後で続ける。

「リズを借りたいんだが」

話を振られたリズは慌てた様子で再び頭を下げる。珍しく、本当に珍しく主から命が与えられることに対して若干の緊張を感じている様子だ。閉じられた瞼の中にある薄い空色の瞳は、もし開かれていたら戸惑いに揺れていたことだろう。私はそんなことをぼんやりと考えながら、あつさりと答えてやる。

「貴方の騎士でしょう。構いませんよ」

元々ヴァノツサの命で渋々私の護衛をしていていた騎士なのだから、借りたいも何もない。本来の任に戻るだけだし、リズとしてもその方がいいはずだ。魔法の相手に比べれば、ずっと。

素直とも薄情とも言える態度にリズが眉を顰めるのが見える。けれどそのような顔をされる筋合いなどなくて、私は同じように眉根を寄せてリズを見下ろした。

親切心で言っているのに、もしかして何か裏があるとも思っているのだろうか。

「リズ」

「はっ」

そんな無言のやりとりはヴァノツサはおろか、ビーですら気付かなかっただろう。ヴァノツサが声を上げ、リズが深々と頭を下げたせいで彼の顔など見えなくなってしまったのだから。銀光が照明に照らされる。緋色の敷物に銀光、そして紅蓮を持つ皇帝。ただ騎士

が主の前で跪いているだけだというのに、その色のせいかひどく幻想的に見える光景を静かに見据える。

従順ながらも鋭い声で返答するリズに向け、ヴァノツサは満足げに頷くでも恐縮するでもなくあくまで上に立つ者らしく無関心を貫きながら小さな紙を差し出した。上質の紙を破って持ってきたのであろうそれを見て、少しだけもつたいない気がしなくてもなかつたけれど彼がその程度のことを気に留めるとは思えない。そんなにい紙を破るなんて、と思うのはきつと私ぐらいのものだ。三百年前は紙は高級品だったから、その時の感覚が染み付いてしまっているせいもあるのだけれど。

「この本を探して魔女殿に預けておけ」

「承知致しました」

恭しく紙切れを受け取ったリズは、そこに書かれている文字を見てふと怪訝そうな顔を浮かべたものにすぐに頭を下げる。その姿に幾らか引つ掛かりを感じるものの、口にはすることはできない。けれどビーモリズの様子に気付いたのだろう。不思議そうに首を傾げているのが見えた。端的なやりとりが終わるのを待つて、とりあえず別の言葉を口にする。

「復興作業ですか？」

元々ヴァノツサは調べたいことがあるからと書庫を訪れる予定だったはずだ。

それなのにリズに書物を探させるということは、すぐにでもどこかに出掛けてしまうから他ならない。控えめに問うとヴァノツサは私の傍に寝転がっているビーを一瞥してそこに何を見たのか眉を顰めるが、すぐに繕ったような笑みを浮かべる。小さな笑みにはやはり疲労の色が濃い。こんな状態の皇帝を野放しにしておいてこの国は大丈夫なのだろうかと思わず不安になるほどに。

「いや、政務が少し溜まっている。ツヴァイから使者が来ることになつてな」

「使者、ですか」

確かに皇城内　いや、ファルガスタ全土が混乱している今、大
国の使者を迎える準備をするなら皇帝自らが采配を奮った方がいい
だろう。

無論、この国の文官達が使えないというわけではない。

けれど彼らだつて手一杯のはずなのだ。そしてヴァノツサはそん
な臣下の様子を知っていて無理をさせるような皇帝ではなかった。

私の言葉に肩を竦めたヴァノツサは、誰もいないのをいいことに
心底面倒くさそうな声で答える。

「この忙しいのに面倒なことだが、迎えないわけにもいかないだろ
う」

「当然です」

「追い返したらそれこそ面倒だしね。僕はそれでもいいけどさ」

それに対し生真面目に返してやると、同調するようにビーが頷い
た。

小国なら少しぐらいの延期を求めても問題はないかもしれないけ
れど、相手は西の大国ツヴァイだ。無下にするなどできないだ
ろう。この時期に遣わされるということは、恐らく内容は復興の祝
いと婚儀の話になるはずだから。追い返した所でビーが言うような
事態になる可能性は極めて低いのだから、余程辛ければ延期をし
ても良いとは思うのだけれど、恐らく彼はそうしないだろう。大国で
あるとはいえ、一国の主として余裕がない所など見せるわけにはい
かないのだから。自分が少々の無理をするだけで保てる物があるの
なら、それこそ疲労ぐらい不敵に笑って吹き飛ばしそうだ。そう考
えると自分以上に苦しい局面にいるヴァノツサが哀れに思えた。

「使者はいつこちらへ？」

隣にある椅子を引き、ゆっくりと手で示す。リズがいる手前、私
が呼んだぐらいでふらふらと近寄るべきではないのかもしれないと
行動した後で気付くがしかし予想に反してヴァノツサはこちらに近
付き、引いた椅子に腰掛けた。彼のものとは全く違う銀の髪が一房
掴まれる。そうして以前したようにそれに口付けたヴァノツサは、

先程よりは幾らか疲労が薄くなった笑みを向け囁くような声で答えた。

「二日後だ」

「……随分と急ですね」

「だから困っている。他国の使者を招く余裕など今のファルガスタにはないというのに」

それでも大国の威厳を見せつけておかないと、軽んじられる可能性が出てくる。

「私は国政のことなど分かりませんが」

ヴァノツサが触れる髪に熱を感じながら、表情だけは冷静さを装い溜息混じりに首を振る。

「面倒な話ですね」

「まっただ」

椅子の足ではビーが威嚇するように灰色の毛を逆立てて唸り声を上げている。

対するヴァノツサは、それには取り合わず眼前のリズに視線を向けた。唸り声が強くなる中、燃えるような紅蓮に射貫かれたリズはただでさえ堅苦しい姿勢を更に正して、恐らく何か言葉を放たれるのだろうと沈黙を返す。

「ツヴァイの使者が皇城にいる間、冬宮近辺に配置している騎士はすべて皇城に回す」

「……いえ、リズ以外に騎士がいたなんて知らなかったんですが。」

第一、そんなことに騎士の数を削ぐぐらいならもっと他にできることがあるでしょうに。」

内心でそう呟くもののそれがヴァノツサに伝わるはずもなく、彼は私の髪を弄びながら言葉を続けた。

「その間、魔女殿の護衛はお前だけになる」

「……は」

レイアステイでも華月の魔女でもなく、魔女殿とヴァノツサは言った。

他の臣下達には寵妃で通っているはずの私をそう呼ぶ理由をリズはすぐに察したのだろう。数瞬の沈黙の後で小さいながらも響く声で頭を下げた。その声に安堵が含まれていたのは、私が寵妃ではないという話が真実であると確証を得られたせいだろうか。

「護衛など不要です」

けれどそれは指摘せずに、別の言葉に指摘を向ける。

何度も言っただけの言葉はしかし同じようなヴァノッサの言葉に弾かれる。

「そうはいかないと何度も言っているだろう。貴女は俺に何度同じことを言わせれば気が済むんだ」

「貴方こそ、私に何度同じことを言わせれば気が済むんですか。結界がある以上誰も私を傷つけられないと話しているでしょう。私は貴方に愚帝と呼ばれても耐えられるかと問いましたけど、頭の悪い皇帝になれとは言っていないですよ」

「……どこまでも口の悪い魔女殿下だ」

呆れたような声に負けじと返すと、ヴァノッサはくるくると指を回して私の髪を絡ませながら不機嫌そうに眉間に皺を寄せた。

ひよいと膝の上に乗ったビーがそんな彼に射殺さんばかりの強い視線を向ける。……本当に仲が悪いんだから。

二人の姿を見て小さく吐息するとヴァノッサはふと何かを思いついたように口の端を吊り上げる。意地の悪い表情に嫌な予感が過ぎつつあれど、彼の表情を変えるような言葉など思いつかず。思案している間に先手を打たれてしまった。

「ではこうしよう」

「聞く気などありません」

「それは困るな。そんなことをしたら騎士が一人職を失ってしまう」

「……どういう意味ですか」

くつくつと笑いながら放たれる楽しげな声は、私を負かすことができると思いきった上で発されるものだった。

ゆったりとした動作で足を組み、椅子に深く身を預けながら余裕

をたつぷりと見せつけるヴァノツサに問いかける。けれど、それが間違いだったのかもしれない。その証拠にヴァノツサはしてやったという笑みを浮かべ、くいと顎をリズへと向けたからだ。

「貴女が護衛を拒否したら、リズは仕事を失うぞ」

「リズ殿は私の騎士ではありません、貴方の騎士でありファルガスタの騎士でしょう」

「そうだ。だが、今は貴女の護衛騎士でもある」

楽しげに目を細めるヴァノツサを睨みつけながら前方を見れば、リズが一体この状況をどうしたものかと思案しているのが見て取れた。彼としては主の言葉に逆らうことなどできないし、かといって主の前で堂々と魔女を罵ることもできないのだ。

「貴方がそんなに性格の悪い人間だとは思いませんでした」

「貴女に比べたら皆性悪だろう」

そんなことを言う人間は、ヴァノツサぐらいのものだろう。

「あら、性悪と言われる私の性格が良く見えるなんて。貴方も存外、見る目がありませんね」

「ほお？ 貴女を性悪だと言う奴がいるのか。それは一度お目にかけたいものだな」

口元に手を当ててくすりと笑ってみせると、ヴァノツサが実に爽やかな笑みを浮かべる。それを見てリズの身が震えた気がしたけれど、私はあえてそちらを見ずに同じような爽やかな笑みを浮かべた。ぴり、と空気が鋭くなる。そんな嫌味の応酬が怖かったのか自分を性悪だと口にしたことが悪かったのか、膝に自分のものより高い体温が押し付けられる。見下ろせば、小さな不満を溜め込んだ金色の瞳がじつとりとこちらを見上げていた。

……別に自分を卑下したわけじゃないのに。

「いい子にしていたらそのうち会えますよ」

今にも文句を口にしようなビーの背中を優しく撫でて機嫌を取りながらヴァノツサに向けて柔らかく笑い掛ける。こういう言葉を言う時にはそれとは逆の優しい顔をする方が効果的だと考えながら笑

んでいる私が性悪じゃなくて、一体何になるというのだろう。

「俺は子供か」

「失礼。随分と子供っぽいことをなさるものですから、つい」

軽く髪の毛を引っ張り文句を言うヴァノツサの指を振り払いながら丁寧な答える。さらりと零れた銀の髪がリズの鎧のように光を放ちながら熱を失い、私の元へと返ってきた。

壁を囲むようにそびえ立つ本棚の圧迫感を視界一杯に留めながら口の端を緩やかに吊り上げると、ヴァノツサはしばし考え込むように目を閉じた後ですぐに話を戻した。

「それで、魔女殿はうちの騎士から仕事を奪うと？」

「……そんなことは言っていないません」

「では素直に護られていてくれ。その方が俺も落ち着く」

人がせつかく話を逸らそうとしていたというのに、どうしてそんなに私に護衛を付けさせようとするのか、この男は。

かといってここでいりませんと口にすれば、リズが職を失う可能性だって出てくるのだ。ヴァノツサとて本気でそのようなことをしようなどとは考えていないのだろうけれど、冗談で一日ぐらい仕事を奪ってしまうぐらいのことはしそうだった。そしてそんなことになれば、リズは元々向けてもいない私への好意を更に節約するだろう。さすがにこれ以上嫌われると剣を向けられそうだからと思索し、ちらとリズに視線を向ける。彼は薄氷のように冷たい目でこちらを見ているのみだ。私に答えを与えることなどなく、むしろ答えなど自分で出せと言っているようだった。

はあ、と溜息を漏らす。

仕方がないわね。

胸中でそう呟くものの、低くぐもった笑いと共に放たれた言葉に頷く気が削がれてしまい、私は円卓に片肘をついて吐息しながら彼から顔を逸らす。けれどそれを諦めと取ったのだろう。眼前では、リズがこちらに向けて怒るべきか感謝するべきか考えあぐねているような顔をしているのが見え、視界の端ではヴァノツサが勝ち誇っ

たように笑んでいるのが見えた。腹立たしいから何か仕返しても、
と考えるものの不毛だからやめておく。

「リズはこの国で唯一俺達のことを知っている騎士だ。あれなら貴
女も気が楽だろう」

「親しくすると文句を言う人に言われたくはありません。大体、護
衛自体の必要性について議論していたはずですけど」

「護衛は必須だ。それを前提に話している」

リズのことでもビーのことでも無視してただこちらだけを見据えてい
るヴァノツサに無言で目を細めてみせる。すると彼は何が面白かつ
たのか、小さく吹き出した。

「不思議だな」

低く静謐な声落ちる。

それを受け止めながら片肘をついたまま沈黙を貫くと、ヴァノツ
サは私は何も言わないことに気付いているのか言葉を続けた。

紡がれる言葉は炎の残滓のように、どこか掠れた響きで書庫を満
たす。

「昔は、城下を眺めているだけで満たされていたんだがな」

「……今は違つと？」

「ああ」

目を閉じて想像しなくても安易にその情景が浮かび上がってくる。
城下に向ける眼差しはその瞳の色にそぐわぬ優しさで、そこに在る
人間達が満たされていればいるほど彼の心も満たされている、そん
な情景が。人ならざるものと影で言われていても彼が皇帝で居続け
るのは、責任感や義務以上にそうした気持ちが強いのだということ
を私は呆れるほどに理解していた。強い眼差しと意思だけで魔女一
人の心を動かそうとするような男なのだから、彼は。

静かな声に同じような声で返すと、ヴァノツサは幾らか苦味を含
んだ笑みを浮かべ微かに吊り上がった唇を開く。

「城下を見て癒されることに変わりなどない。だが、今は貴女とこ
うして喧嘩みたいな言い合いをする方がよほど気が楽になる」

手厳しいだの短気だのと散々文句を言ってきたくせに、とは言わなかった。

言えなかったのだ。炎の残滓が再び熱を帯び、苦味を含んだ笑みが艶やかなそれに変わったせいで。

誰の目など気にしないという風に私に向けてのみ向けられる笑みは甘く思わず目を逸らしそうになるけれど、それは許されなかった。触れているわけでも言葉で止められたわけでもないのに、その笑み一つで縫い止められたように視線が動かせなくなる。魔力も何も籠められていない、ただの人間の笑顔。それがこんな威力を持っているなんて考えもしなかった。

動かせぬ視線の中に映るものから情報を得ようと、何とか冷静さを保ってヴァノツサを凝視する。すると先程まで見えていた疲労の色はすでになく、完璧には遠いのだろうがそれでも回復をした様子の彼の顔が見えて安堵した。気が楽になる、ということが疲労が遠のくという意味に繋がるのかは分からなかったけれど、少しでも疲れが取れたのならそれに越したことはない。彼には皇帝としてまだ仕事が残っているのだから。

甘さと熱に気付かぬ振りをして、小さく笑い返す。呆れ混じりのそれはヴァノツサが求めるものではなかったらしく彼は不満を顕にしたけれどそれには構わない。

「ツヴァイの使者は何のためにここに？」

代わりに、答えの分かりきった問いで話を変えた。先程の言い合いで負けてあげたのだから、このぐらいは許されるだろう。

そしてその考えは間違っていないかったようだ。

ヴァノツサは苦々しい顔をして私同様片肘を円卓につける。

そうして顔を見合わせれば、まるで仲睦まじい恋人のようにも見えた。実際は全然違うのだけれど。

同じことを考えていたのだろう。彼はやはり艶やかな笑みを浮かべるがしかしすぐにその甘さと熱は取り払われ、まるで取り繕ったような笑みに変わる。

「此度の婚儀のことだろうな。復興祝いが目的と聞いているが、ついでだろう」

そうして胡散臭くも柔らかい笑顔のまま放たれたのは、どこまでも面倒くさそうな声だった。腕が伸ばされ、笑顔と同じ分だけの優しさで頭を撫でられる……人目も憚らず。ここは冬宮ではなく、皇城内なのだけだ。いや、そもそもこの場に私が寵妃だと信じている人間などいないというのに。

指先で髪を梳き、零れ落ちていくそれをどこか穏やかな瞳で見ているヴァノツサに内心で呆れ混じりの溜息をつきながら、何度か尋ねた問いを向ける。

婚儀の話は分かりきっていたことだから、それに対してどうこう言うつもりはなかった。

それよりも重要なのは、氷の魔女の行方。

「私を冬宮から出す気は」

「ない」

即答だった。

問うた意味すら見失いそうになるほどの早さに眉を顰めると、膝で丸くなるビーが威嚇体勢を解かぬまま擲擄するような声を上げる。

「強情」

「レイアステイにべつたりくつついているお前に言われたくはない」

「また焼き餅？ 人間の焼き餅は見苦しいよ」

「たまにしか会えない俺の身にもなれ。俺は猫みたいに暇じゃないぞんざいな口ぶりで言い合う二人を無視し、ちらとリスに視線を向ける。」

彼は言いたいことが山ほどあると顔に書いてあるぐらいに渋い表情をしていたけれど、主であるヴァノツサに文句など言えるはずもなくただ押し黙って頭を垂れていた。今この場で文句を言えるのは私かビーぐらいのものなのだ。そして私はもう諦めの境地に立っている。これだけはつきりと言われてなお何と云えばいいのか、もし案があれば教えてほしいところだ。

毎晩北の孤島に戻っていたら私はいつしかこちらに戻ってくることを忘れてしまつかもしれないし、そうなるとヴァノツサが再び屋敷まで足を運ぶ可能性だって出てくるのだ。ブリオン様が地震の原因である以上居場所をファルガスタに絞る理由もないのだけれど、せつかくここまで来たのだからという思いが足を鈍らせる。もちろん、何かあればすぐにでも出て行く気ではあるのだけれど。

先程向けられた甘やかな笑みが脳裏を過ぎる。

ヴァノツサの疲労が取れることは良いことだけれど、あの言葉と笑みは危険だと誰かが告げている気がした。

……私がこの国を去るための“何か”はすぐ傍に迫っているのかもしれない。それが私の勘違いや自意識過剰であればいいのだけれど。

「それで、何を探すつもりなんですか？」

二人を無視したまま、胸の裡を明かさぬように問い掛ける。暗雲の立ち込める不穏な空気など今見せても仕方がない。

「ああ、あの結界解除の首飾りが挟まってた本が気になってな」

「本に挟まっていたんですか？」

確か以前手紙がどうか話していなかっただろうかとヴァノツサの答えを聞いて思案する。

するとヴァノツサは威嚇するビーの頭を無理矢理に一度撫でてから紙切れを持つているであろうリズへと目を向けた。黙ったまま空気のよう控えていたリズが自身の持つ紙切れへと視線を落とす。そこに何が書かれているのか、無論私では分からない。

「正確にはその中に入っていた封筒に入っていたんだが、今回はその本の方に用事がある。封筒は入ったままだから見つけやすいだろう」

そういえばヴァノツサが調べたいことがあると話していたのを思い出す。それに関係があるのだろうか。

何やら深刻そうな様子だったけれど、一体何を？

好奇心が疼き、衝動のまま尋ねそうになるのをぐっと堪える。私

自身話せないことが多くあるというのに、ヴァノツサにばかり答えさせるのも悪い気がしたせいだ。それに、大事であれば向こうから話すだろう。話さないということは、国にも何にも関係しないヴァノツサ自身の問題のはずだ。

けれどそれが伝わってしまったのだろうか。

衣擦れの音を響かせてヴァノツサが足を組み直すのを眺めていると、彼は静かな声で実にあっさりと言った。提案した。

「俺は帰りが遅くなるかもしれないから、貴女が先に読むか？」

「いいんですか？」

やはり黒よりも緋色の方が似合う。そう思わされるほどに敷物と彼の姿はよく合っている。ほんやりとそう考えていた矢先に放たれた言葉はしかしすぐに私の脳に届き、ぱちりと見開いた視界の先にいるヴァノツサに即座にそう返していた。それほどに意外だったのだ、この提案は。

呆けた問いにヴァノツサはどうしてそのようなことを言われるのか分からないという風に首を傾げる。私が知りたがっていることに気付いていて、その上で提案したからだろう。けれどどこか捻くれていると言えなくもない彼が素直に答えてくれるなどは思っていないかった。随分と失礼な話だと自覚はしているのだけれど。

もう政務を行わなくてはいけない時間なのだろうか。

ヴァノツサは背筋を伸ばして立ち上がり、照明のせいかわ自身の心境のせいか分からないがとにかくどこか影のある表情で頷いた。

「ああ、俺と……特に貴女には関係が深いことが書いてあるはずだ」

「私に？」

私に関係があること、とすればそれはビリオン様か魔女の狂宴か……どの道三百年前に関連したことだろう。

それならヴァノツサが私に先に書物を読んでいいと言った言葉にも納得ができた。

ただ、どうして彼が今更そんなことを調べるのかは分からないのだけれど。

呟いた声に頷いたヴァノツサは扉へと向かい、背中を向けたまま続ける。真剣な声色は、書物に何が書かれてあるのか知っている風だった。

「ただ、お世辞にも良いことが書いてあるわけじゃない。それだけは覚えておいてくれ」

「……分かりました」

たとえ好みでも、皇帝が着るべきとはとても思えない漆黒の背中に頷く。三百年前の話を私の口から直接聞いているヴァノツサは、書物を読んで私が古傷を抉られることを危惧してくれているのだろう。ビーをそつと隣の椅子に移し、立ち上がる。これもやはり好みとはいえ魔女が好んで着るにはあまりに人間達の想像にそぐわない紺のドレスが揺れた。

一歩足を踏み出すと、敷物がやんわりと足を押し返す感触。

「レイアステイ」

何ですか、と返すとヴァノツサはあの人よりも少し長い髪を揺らして首だけをこちらに向ける。

「ツヴァイの使者が来る日は予定を空けておいてくれ。寵妃である貴女を傍に置いておきたい」

「まだ寵妃で通す気ですか。もうじき星姫様がいらっしやるというのに」

「愚問だ。牽制には丁度いいだろう？」

何の牽制かはあえて問わない。堂々巡りだと分かっているからだ。シヨールを手繰り寄せ、すっかり自分の体温に染まってしまっているそれで体を包み直す。それさえも諦めを湛える動作に見えたのか、ヴァノツサはくつくつと笑いながらもう一度私の名を呼んだ。視線だけで返せば、自分とは逆の熱の籠もった瞳が閉じられ、口の端が緩やかに釣り上げられる。儚さなんて感じられない、力強くも柔らかい笑み。

「短時間とはいえ、貴女と話す時間が取れてよかった」

子供のように無邪気な笑みを見て、端から持ち合わせていなかった

た毒気を更に抜かれてしまった。

「ぼかんと口を開け、一体何て返そうかと逡巡する。そうしてたっぷり時間を置いてからようやくできたのは、呆れたように笑うことのみだ。」

「そうですか」

「笑みと同じく呆れの混ざったそれは、端的とも言える短い言葉。けれどそれ以上に言うべきことなどない気がして、私はまるで母親がそうするように柔らかく頷くに留めた。」

「くれぐれも無理はしないでください。貴方はこの国の主なのだから」

その声は何を思ったのだろうか。ヴァノッサはふと体ごとこちらに向けてから、すぐに苦笑を浮かべた。

「ああ リズ、あとは任せた」

「は」

そのままリズに声を掛け、踵を返す。敷物の影響で足音をあまり響かせることもないまま、静かに黒い姿は扉の向こうに消え、そして静寂が舞い戻った。先程まであまり意識していなかった圧迫感が襲う。壮観であつたはずの書庫が重苦しく感じられ、私は改めてヴァノッサの存在感を死することとなる。

突然がしゃん、と音がしてはっと目を見開く。何事かと思ひ視線を向ければ、リズが立ち上がっているだけだった。静寂を壊す音に思わず驚いたなんてことを悟られたくなくて、慌てて声を上げる。

「ずっとあの姿勢で疲れませんか？」

「この程度で疲れていたら騎士など務まらない」

「それもそうね。」

我ながらどうしてこんなに間の抜けたことを訊いたのだろうか。呆れつつリズの動きを追うと、彼は歴史書が置かれている本棚の更に奥に向かっているようだった。奥まった場所にあるのは、見た目は一見歴史書とそう大差のない物だ。

「ヴァノッサが探す書物はそこにあるんですか？」

「そうらしいな。まあ、表題を見ずとも本を振って封筒が出てくれば当たりだろう」

何て適当な。

紙切れの内容を見たわけではないけれど、どうやら表題と位置ぐらひは書いてあるらしい。

こちらが探す本の場所にあまり検討がつかないことを考えると親切なことだと思う。

それはそうと、私も魔術に関する本を探さなくては。

ツヴァイの使者がファルガスタにいる間はあまり皇城に入れない。その間にも婚儀が迫っているのだと考えると、悠長にしている場合ではなかった。

リスとは違う本棚へと歩き、魔術に関する表題を探していく。そこでふとヴァノッサがリスに探すよう命じた書物について思案した。彼が言うには、あの中には結界解除の首飾りと封筒があると言っていた。

封筒があるということは手紙だっが入っているはずだ。その手紙には何と書いてあるのだろうか？

『レイアステイ、だな？』

脳裏を過ぎった声に息を呑む。それはとてもささやかなもので、足元に擦り寄ってきたビーにしか聞こえないほどの音だった。唯一それが聞こえたビーは、急に慌てた様子を見せた私に向けて怪訝そうに瞳を細め、幾分か真面目な顔つきになる。予想はできないまでも、大事であるのだと気付いたのかもしれない。そしてそれは間違いでなかった。

北の孤島で私に会った時、私が名乗ってもいないのにヴァノッサは私の名を知っていた。

同時に、氷の魔女という二つ名も手紙を見て知ったと話していた。そうになると、結びつく結論は一つ。

「……………」

慌てて背後を振り返る。

そこでは麦色の髪を揺らすリズがヴァノッサに頼まれた書物を探している所だった。

「リズ殿」

声を掛ける。するとリズは怪訝そうに眉を顰めて何だ、と答えたけれど私はそれに対して余裕のある返答をすることができなかった。取り繕うような笑みを浮かべ、彼の手が動くたびに強くなる焦燥感を必死に抑えつける。

「私が探しましょうか？」

誰が書いた手紙なのかは知らない。

ピリオン様以外の誰かということしか、推測することができない。けれど一つだけ確かなことは、その手紙には私の名前や姿、そして二つ名が書いてあるということだった。

どうして気付かなかったのだろうか。そしてどうしてヴァノッサはよりによってそんな大事なものを書庫になんて置いたのか。

氷の魔女、レイアステイ。

もしその文字を見つけてしまったら、リズは。

「必要ない、それより貴様は自分の事に専念しろ。……ん？」

全身に冷水を浴びせられたような冷たさを感じる。リズが取った書物からはらりと封筒が落ちたせいだ。

無論、それは封筒のみで中身など見えないから、私は一刻も早くかつ穩便に封筒を受け取るうと言葉を探る。

けれど彼にとって重要なのは封筒ではなかったようだ。

偶然目に付いたのだらう。封筒が挟まっていた書物に書かれている文字を読み、眉間に皺を寄せた。

「これは……」

「どうしました？」

焦燥感が強くなり鼓動が跳ねる。けれどそれを悟らせないように冷静な声で問うた。本の内容など知らないけれど私に関係のあることなのだとしたら、最悪の可能性を考慮しなくてはならないから。

リズは私の問いに向けて小さく首を振るがしかしすぐに強い声で

言い換えた。

「何でもない いや、やっぱり嘘だ。大問題がある」
歩が進められ、着実に近づく銀光。

そうやってリズが近づく度に、書庫の圧迫感が増し息苦しくなった。足元の温もりにすがりつくように足を動かすと、ビーも嫌な予感を感じ取ったのか無言のまま私の前まで歩き、鎮座した。これ以上近付くなと牽制するような灰色の塊から少し離れた場所で、リズが立ち止まる。

「レイアステイ」

びくりと身を竦ませる。

氷の魔女でも、魔女でもない。

けれど耳朵を打つ低い声がその言葉を紡ぐことはこれが初めてではないと私は知っていた。

「何です？ 藪から棒に人の名前を呼ぶなんて」

真の名を呼ぶことはしない。あの日私が放った言葉を考慮しているのか、ただ呼びたくないだけなのか。それは分からなかったけれど彼が私の名を呼ぶという、ただそれだけの行為がどれだけ重い意味を持つのかも私は知っていた。

軽い口調で答えると、リズは落とした封筒をそのままに書物だけを大事に手の中に包み鋭い声を上げた。

「一つだけ質問に答える。嘘をつくことは許さん」
「……」

沈黙で返す。ビーが何か言おうと口を開くのが見えたけれど、それよりも先にリズが口を開いた。

誰にも邪魔はさせないと言うような、ヴァノッサに似た強い声が耳朵を打つ。

それはヴァノッサとは異なり、安堵感ではなく圧迫感と息苦しさを私に与えたのだけれど。

「初代炎帝陛下の在位中に嫁いだ、ツヴァイの姫君についてさっき話しただろう」

「ええ」

「魔女の被害に遭ったことも話したよな」

「聞いていましたよ」

「貴様はどういう被害に遭ったのか俺に訊いた。だが、貴様は知っていたんじゃないのか？ 氷の魔女」

ぎゅ、と手を握り締める。

驚愕を顔に表しそうになるのを堪え、鎌をかけているだけなら誤魔化そうと逃げの道を模索する。どこまで行っても最終的に逃げられる気はしないのだけれど、それでも出来得ることなら知られずに終わりたいかった。

けれどそれは無駄骨だったようだ。

リズは手の中に包んだ書物をこちらに差し出す。手に力を入れて平静を装ったまま受け取ると、そこに見たことのある筆跡で三百年前の日付が書かれているのが見えた。

「!? これ」

「ツヴァイの姫君であり、初代炎帝陛下の妻マリエル皇妃の記した日記だ。文字が薄れているが読めないほどじゃない」

女性らしい、柔らかい文体。それは決してビリオン様の物ではない。

けれど彼の次ぐくらいによく知っている文体だった。薄く掠れた文字が綴る日常は、遠い日の残像を脳に叩きつけてくる。

私はそれに目を落としてからヴァノツサを若干恨み、そして自分の浅はかさと思かさを呪った。

「それよりも答えろ」

一歩も近付くことなく、薄い空色の瞳がこちらを射抜く。

殺気すら灯されているその瞳を汪洋とした気持ちで見返しながら続く問いを待ち、放たれた最後の言葉を全身で受け止めてから胸中で呟いた。

「貴様は、何者だ」

証拠は隠すよりも先に、断罪者の手へ渡ってしまった。

もう、逃げられない。

第二十七話 マリエル皇妃

手の中に在るのは皇妃様が書いたらしい日記帳。

確認していないけれど書いてあるのは氷の魔女と私の名前。

初代炎帝に恩義を感じている氷の魔女と、リズの一族から忌むべきとして伝えられている氷の魔女。

それが彼の中で繋がってしまった今、逃げ道などどこにもなかった。

「私は」

冷えた心を叱咤し、何とか声を搾り出す。

相手に聞こえるか聞こえないかの瀬戸際の音量はしかししっかりとリズに届いたようだ。

麦色の髪の毛が一瞬逆立ったような錯覚を覚える。それは決して恐怖を覚える色ではなく、むしろヴァノッサのような紅蓮に比べたら可愛らしいものだったけれど、私は不思議と怒気を孕んでいるわけではないリズの姿に足を引きそうになってしまった。視界を満たす本棚の圧力が増したように感じられるのは気のせいなのだろうか。「貴様が俺達トリストンの一族が忌むべき氷の魔女か」

鋭い声は、私よりもよほど氷の名が似合いそうなほどに冷え切っていた。

ただ鼓膜を震わせる程度の力しかないそれに身を切られたのではないかと不安を覚えていると、リズはそれきり口を噤み私の答えを待つ。その姿にも怒気はない。剣を抜き切っ先を首筋に押し当てるわけでも、いつものように怒声を放つわけでもない。けれどそこそが不安と緊張を呼んだ。陽の光が入らない、照明のみによって周囲を確認することしかできない暗い場所にはお似合いの、逼迫した

緊張感に身を強ばらせ唇を引き結ぶ。

どうせいつかはばれることだったのよ、と心の中で誰かが囁く。

このままファルガスタに留まっていれば誰かが掴んだかもしれない記録。それをたまたまりズが掴んでしまっただけのことじゃないか。第一ビリオン様を追いかける私の姿を見ている以上、リズだっていつかは辿り着く答えだったはずだ。今回は証拠を掴まれてしまったけれど、たとえ証拠がなかったとしても強く育った疑念はいつか確信に変わる。そう、いつかは知られてしまうことだった。なのにそれを胸中で呟いても心が冷えるのを止めることができない。

断罪に耐えることができないから怖いのだろうか 否、その程度三百年前にだって耐えてみせた。

リズからの信頼が壊れることが怖いのだろうか これも否だ。

第一彼は私を信頼などしていない。ではなぜ？

不安げに揺れる金の瞳が視界の下方に見える。それを見返すこともせず、けれど無視することもせずに受け止めているとふとビーをビリオン様に預けられた時のことを思い出した。

この国から逃げる時手渡された小さな命。

灰色に金の瞳を持つ子猫は、魔女の狂宴が城下を包む中で死にかけていた所をビリオン様に助けられた猫だった。猫よりも人間を救うべきだと臣下も皇妃様も声を上げる中、あの人はそれでも弱っていく命を放っておくことなどできなかったのだ。そして誰もそんなビリオン様に逆らうことなどできなかった。ただ、苛立ちの捌け口を求めることは忘れなかったのだけだ。

『こんな魔女に関わったばかりに陛下は……！』

殺意の籠った皇妃様の声。

それは月宮が建設されたせいなのか、魔女の狂宴の原因が魔女だと吹聴されていたからなのだろうか。それは分からなかったけれどどの道そんなことは私にも皇妃様にも関係がなかった。あの人は私に対する苛立ちをぶつけたくて、そして私はあの人からの言葉が痛

くて悲しくて仕方がなかっただけなのだから。皇妃様らしい、優しい色合いのドレスまでもが怒りと狂気を孕んでしまったかのように刺々しい動きを見せたことを、今でも鮮明に覚えている。皇城内の誰が通つてもおかしくない通路の中央で堂々と告げられたその言葉が心の奥底までも抉つたことを知っているのは、恐らく私と皇妃様のみ。

脳裏に焼き付いて離れない苛烈な声と表情、そして優しい笑顔。それが痛みを伴って瞼の奥にちらついていた時、もう笑顔を浮かべてこちらを見てくれなくなってしまうたあの人の瞳がリズの瞳に被つた気がして、はつと息を呑んだ。

その瞬間、心が冷えていた理由を理解する。頭の中の靄が晴れたかのように、すつと辺りを満たす圧迫感が消滅した。

きつと私は、向き合いたくない過去を彼に見ているのだ。

そして、そこから逃げようとしている。これ以上痛みを感じたくなくて、苦しみを誰にも訴えたくなくて。

ドレスをぎゅっと握り締め、北の孤島の屋敷にあるものよりもずつと触り心地のいいそれに縋るように力を込める。そうすると少しは熱を失った心に火を灯すことができた。書物を持つ手で胸にかかると銀髪を背中に払いのけ、ひやりと首筋を撫でる風をそのままに彼の瞳を見返す。力を籠めて射抜く瞳にリズは何を思つたのか、無感情な顔からは察することができなかつたけれど、差し当たって私に逃げる気がないことは理解できたはずだ。

そう、私は逃げるわけにはいかない、目を背けるわけにもいかない。

魔女の狂宴については心当たりがないから何とも言えないけれど、皇妃様の件なら話は別だ。三百年前、あの優しい人を傷つけ狂気へと導いたのは確かに私なのだから。……それを願っていたかは別として。

視界の下方に映るビーの視線には一瞥もくれずリズのみを視線を注ぎ続ける。

ここで目を逸らしてビーに頼ってしまったら、それこそ彼に罵声を浴びせられそうだったから。

「そうです」

放った声は少しでも力を宿せただろうか。ちゃんと話をする姿勢なのだと、伝えられただろうか。

過去の痛みが心をちくりと刺していく。けれどそれには目もくれず頷いた私に対するリズの返答を待った。言葉を重ねることは簡単だが、そうすることが得策とも思えない。

口を噤むとリズが意外そうに眉を上げ、眉間に深い皺が刻まれる。強い怒りはこの短気な騎士をも冷静にするのか、放たれる彼の声は至極冷たく、そして冷静だった。

「初代炎帝陛下をかどわかし、マリエル皇妃の地位を剥奪しようとしたのも事実か」

感情の籠らぬ声で発されたのは、確認の意を込めた問い。

けれどそれを認めることはできなかったから、小さく首を振って答える。

「違います」

事実だった。地位を剥奪しようとなんて考えたこともなかったし、ピリオン様の心が欲しいだなんてことも思っていなかった。ただ、結果的に後宮に月宮の名が付いたことは確かだ。それは誰の罪になるのかと問われれば少なくとも自分の罪でないことは確かなのだけれど、かといってピリオン様の罪にされてしまっぐらいならその罪は私が背負う気でいた。

力を込めすぎて真っ白になった手から力を抜くと、じんと奇妙な冷たさに襲われる。腕に体に正しく巡り始めた血液に、自分も人間と基本的な構造に変わりはないのだと再認識させられた。それは血も涙もない冷たい化物という言葉に対する反抗心だったのか、それとも偶然の産物なのか、私には結論を出すことができなかった。後ろに引きそうになる足をその場に縫止め、仁王立ちでリズの視線を受け止める。信じられないとも言いたげな胡乱気な視線はしかし

すぐに力を失い、溜息と共に泡となり消えていく。

皇妃様に連なる一族の末裔である彼は断罪の言葉を発したいに違いない。

けれどその衝動と逡巡の中間地点で葛藤する様子を見せる彼は、深く深く息を吐き出しながら予想外の言葉を口にした。

「……違うなら話してみせろ。それが一族の誇りを傷つけた貴様の責務だろう」

低く、地の底から這い出るような声はしかし怒りを含むことはなかかといつて諦めを含むこともなく、ただ苦味だけを閉じ込めたものだった。同時に茶の香気と本の埃っぽさが相まつた匂いが鼻腔をつく。リズが傍にあった書物を優しく手近な机の上に放り投げたせいで。ちらと書物を一瞥すれば、表題には魔術という言葉が書かれているのが見える。こんな状態だというのに、私が求める書物を探してくれているのだろうかと驚嘆しながらも、先の発言への驚きに目を丸くすることを止められない。

責める言葉でも断罪する言葉でもなく、ただ私の説明を求められるとは思わなかったのだ。

少なくとも魔女を忌み嫌う彼はそのようなことをしないと断っていたし、今すぐにも殺しにかかると思っていたくらいなのに。

目を丸くしていると、感情の読めない冷たい瞳に射貫かれる。その瞳に再び皇妃様のことを思い出して背筋を冷や汗が伝ったけれど、あの頃と違って話を聞こうとしてくれる存在がいることに幾分か安堵した。おかげで退くことも誤魔化すことも考えずに答えを探すことができる。臆することも悲しむこともしなくて済む。

漂う埃が沈んでいったのか、今度はふわりとティーポットから漂う香気が強くなる。

少し離れた所に置いてあるはずのそれは、私が冬宮で淹れたものよりも少し苦味を感じる匂いだった。

力を込めすぎて未だに麻痺しているような感覚を覚える指先をそつと片方の手で包み込む。そうして自分自身の熱を刻みつけながら

私は香気の漂う空気を浅く吸い込み目を閉じた。

じわりじわりとにじり寄るように記憶に意識を近づける。

一番最初に浮かんだのは、ビリオン様の笑顔だった。

「幸せに生きてほしかったんです」

紅蓮を持つ人の浮かべるものとは思えない、いつだって優しく暖かい笑顔。

レイアステイ、と呼ぶ声が耳にくすぐったくて、記憶がない私の名を呼んでくれた初めての人間の声を聞くことが嬉しくて、いつも涙が出そうになったのを覚えている。この名を呼んでくれるのは、精霊達を除けば彼だけだったから。

手元に視線を落とす。するとそこには皇妃様の名前が記述されていた。

マリエル・エールデ・ツヴァインベルグ。かの人も、初代炎帝に次いで私の名を呼んでくれた。

目頭が熱くなる。故人への想いを今更抱くことになるだなんて想像もしていなかった。

世界の何を犠牲にしても幸せになってほしかった二人は、今はもういない。いや、いないはずなのに。

「私は、マリエル様と初代炎帝陛下がいつまでも幸せに過ごしてくれたらいいと思っていました。魔女である私にも優しくしてください。あの方々、記憶をなくした状態でファルガスタに現れた私を保護してください。初代炎帝陛下。どちらも大切な人だったから、二人と一緒に幸せになってください。それが私にとっても幸せでした」

書庫からでは見ることでできない、柔らかな日差し。真っ白なドレスにじゃれつくような光を絡めとるように歩く皇妃様は、かつて敵国だったファルガスタの中においても毅然とした態度と笑みを絶やさなかった。そしてその凛とした眼差しを注がれながらビリオン様も同じだけ堂々とした視線を返す。それは傍から見ている誰もが敵わないと思わされるような、威厳と矜持に満ちた態度だった。きっと、王族のみが持ち得るものだったのだろう。だからそれができ

ない私は彼らのような視線の応酬を羨ましいと思ったことがあった。人が生きるには永すぎる時が過ぎたというのに、今でもその日の記憶を手繰り寄せようと思えば容易に手に入れることができる。

それがあまりに容易すぎるから、自分はそれほど記憶力の良い魔女だったろうかと疑念を抱いてしまう。けれどその疑念はすぐに首を振ることで霧散した。

人間と出会って心に触れて、生きていたと言える時が短すぎただ。記憶が鮮明になった所で別におかしなことじゃなかった。

皇妃様の日記を抱きしめ顔を伏せると、渋い声が耳朶を打つ。けれど私はそれに対して間髪入れず答えることができた。

「だが、結果として貴様は初代炎帝陛下を」

「あの方が建設した後宮に月の名を付けたことも、私に結婚を申し込んでくださったことも事実です。そこまでマリエル様が妹姫に伝えていらつしやるかは分かりませんが、そういう事実がありました。でも私は、その提案も言葉も受け入れる気などなかったんです。百年戦争を終えたばかりの両国の関係に傷をつけることも、マリエル様を傷つけることも望んでいませんでしたから」

「……」

リズが口を噤み、一瞬の沈黙が辺りを支配する。圧迫感は消えたもののそれでも重苦しさは消えない中、私は独白のように続けた。

月宮の前で伸ばされたピリオン様の腕、苦しげな声。王族としての威厳を決して失わず、かといって魔女を虐げることもしない皇妃様のふんわりとした笑顔、後宮についた名を聞いて絶句し怒りを灯した鮮やかな空色の瞳。

いつだって思い出そうと思えば、簡単に思い出せたのに。

今よりもまだ白さを誇っていた後宮の壁面、宵闇を照らす華月、今はもう絶滅してしまったリズネイション。

そこには、痛みと同じ分だけの幸福が詰まっていた。向きあわなければ気付くことすらできなかった事実はしかし予想通りのものとも言えた。

だって、もしもあの日々の中に幸福が見出せないのなら痛みなんて生まれないのだから。

一步前に踏み込む。

微かな衣擦れの音に身を引いたビーの横を通り過ぎてもう一步足を踏み出せば、リズと至近距離にまで近付くことができた。見上げるように顔を上げると、感情の籠もっていない薄氷のような薄い空色の瞳と視線がぶつかる。鮮やかな夏の空のような色とは 皇妃様とは違うその色をじっと見据え、小さく息を吸った。

私はビリオン様や皇妃様のような威厳を発することはできないけれど、代わりに彼らを想う一つの存在として威厳を放ち、最後の言葉をお口にしました。

「十分だったんです。お二人が私を大事にしてくださいと、その中で生きていけるだけで、それだけで私は誰よりも幸せでいられた」寂しくなかったと言えば嘘になる。

けれどそれ以上に彼らの幸せを願っていたことは紛れもない事実だった。

断罪者であるリズは、そんな私の想いをも見抜いたのだろうか。

「嘘だ」

「嘘では！」

しっかりとした声を上げて放った言葉を即座に否定され、思わず声を荒げる羽目になってしまう。

私は一片の嘘もついていないというのに、どうしてそのようなことを言われなくてはならないのか。

こちらを見下ろすリズの顔はやはり仮面をつけているようで、何を考えているのか推し量ることはできない。だが今の端的な言葉の中に私を責める色がないことだけは理解できた。手を伸ばせば触れられる距離、剣を抜くには近すぎる距離を縮めることも広げることもしずリズは立ち尽くしたまま静謐な声を放つ。どこか逡巡した響きが耳朶を打つ度に、なぜだかこちらまでもが困惑させられる。

「確かに貴様が話していることは事実なのかもしれない。俺の家で

伝わっていることは少し違うが、まあそれは仕方ないこととも言えるだろう」

「なら」

リズの家、トリスタン家でどのような話が伝わっているかは私は知らない。一族の最重要機密だと言って教えてはもらえなかったから。

けれどあくまで皇妃様の側であるのなら、私やピリオン様しか知り得ないことを知らなくても別段おかしなことだとは思わなかった。口を開き、ならばどうして信じてくれないのですかと言いかけて逡巡する。

……信用されなくて、当然なのだ。彼にとっても皇妃様にとっても氷の魔女は稀代の悪女であり、すぐにでも狩るべき対象なのだから。

小さな温もりがそつと足首に触れる。金色の瞳に爛々と怒りを湛えるその温もりは、氷の魔女でも断罪者でもなく今は亡き皇妃様とピリオン様に感情をぶつけるように腕の中の書物を睨みつけていた。丸い瞳が潤んでいるのは、見なかったことにする。

だが、と鋭い声が発せられる。その声にリズへと視線を戻すと、彼は剣の柄に手を触れさせながらまだ抜いてもいないその先端を突きつけるように厳しい態度で続けた。その態度にもしかしたら今この瞬間、私は断罪されているのかもしれないと感じる。感情を顕にされたわけでも、死んでしまえと罵声を浴びせられたわけでもないのに、なぜだかそう思えた。本来ならば彼が私の正体を悟った時に見せるべき態度だったのに、どうして今更と思わないでもない。「貴様がその状況に満足していたとはとてもじゃないが思えない」「どうして、そう思うのですか」

「もし本当に初代炎帝陛下とマリエル皇妃の幸せを願っていたのなら、なぜ貴様はそんなに辛そうな顔をしているんだ」

けれど、断罪させているのは自分なのだと言いついてしまえば声を震わせながら呟くことしかできなかった。

「私、は」

自分は今どんな顔をしているのだろうか。

鏡がないから確認することもできず、リズが言う辛そうな顔というものが理解できないけれど、わざわざ指摘されるぐらいなのだから相当分かりやすい顔をしているのだろうかという予想はついた。震える手で頬に手を当てる。緊張に体温が下がってしまったのか、それは指先よりもずっと冷たかった　こんなに暖かい場所なのに。「本当に誰かの幸せを願う者は、もっと堂々と笑顔で願うことができるはずだ。違うか？」

お世辞にも笑んでいるとは言えない、硬い頬。それは我ながら予想外の表情で、あれほど真っ直ぐ堂々と言い切った言葉が瞬時に力を失ってしまったような錯覚を覚えた。

口にしたことは嘘ではないし、願っていたことも嘘ではない。でも、それならどうして私はリズの言う通り笑ってみせることができないのだろうか。

三百年前の痛みを感じるから？　皇妃様のことを思い出してしまうから？　……自分のことなのに、何一つ理解できない。

体温以外は昔と何ら変わらない肌の感触を指先のみで感じていると、ゆらりと銀光が揺れた。鎧が動く音が辺りを満たす。硬質なそれが視界一杯に広がり、リズが近づいたことを理解した。離れて、剣先を突きつけるのだとばかり思っていたのに。

「貴様が初代炎帝陛下をかどわかすつもりじゃないのは理解できた。だが貴様は本当に気付いていないのか？」

「え？」

降った声に顔を上げる。するとリズはそんな私の態度を訝しむように眉根を寄せた。

刻みつけられた眉間の皺をぼつと見つめっていると、舌打ち混じりの苛立たしげな声が続いた。

「初代炎帝陛下が貴様に堕ちたように、貴様もまた初代炎帝陛下を慕っていたんだろう？　そのぐらい、貴様を見ていればすぐに分か

る。でなければどうしてあの日、城下に出て必死に初代炎帝陛下を追ったのか理解できない」

「そんな。私は」

違う、と言い切れるのだろうか、私に。

脱力すると共に書物を取り落としそうになり慌てて手を伸ばすと、それに先んじてリズムが敷物の上に落ちていく書物をすくい上げた。かざりと音を立ててページがめくられ、再度埃の匂いが鼻についた。同じ位置に手を伸ばしたせいだろう、指先が鎧に触れひんやりとした無機質な冷たさを訴えてくる。それを自覚すると同時にまるで熱いものに触れたかのように素早く指先を引いた。

「……貴様は本当に魔女らしくないな。魔女なら魔女らしく色で墮とそうとすればいいものを」

指先を引いたことに対する感想だろうか。

「今この瞬間に貴方が欲しいと口付ければ、それは魔女らしいでしょうね」

「俺を墮とせとは言ってない」
もちろん知っている。

けれど、もし私があの人への気持ちを自覚したのだとして、それが三百年前だったのだとして、私は色を使おうなどと考えたのだろうか？

答えは否だ。

「冗談です。貴方が言いたいのは初代炎帝陛下に対してのことでしょう？ それはそれで問題があるのではないかしら」

肩を竦めながら、本心とは少し違う模範解答に近い答えを口にす

る。
実際は問題云々というよりもそんなことをしたら自分自身が許せなくなるし、そもそもあの人は魔女の色香に惑わされるような人じゃないと分かっているから何もできないという、ただそれだけのことなのだけれど。自分が色を使った所で効果も期待できそうにないのだし。たとえそのせいで魔女らしくないと言われようと、そもそ

も魔女らしさを私が知らないのだから気にすることはない。願われれば書物に載る魔女のような女を演じてみせるけれど、普段からそうする必要はなかった。だからそれについてはどうでもよかった。

ただ、私があの人をどう思っていたかということが問題だった。

答えを今見つけられる気はしないから、結局の所保留になるのだろうけれど。

「大問題だが、分かりやすいし憎みやすい。……大体、貴様がそんなだから俺まで訳が分からなくなるんだ。本当は貴様の言葉など信じたくないというのに」

険のある声に軽口で返してやると、リズは心底嫌そうな顔をしながら足元へと視線を向ける。挟まれる形で、けれどどちらかと言えば私寄りの位置でこの問答を見守っているビーを見たようだ。

物言いたげなビーはしばしリスと火花の散るような視線の応酬を繰り返した後で、ゆっくりと小さな声を上げる。鈴の鳴るような軽やかな音はしかし自信がないのか小さかった。

「怒らないの？」

「俺には猫に剣を向ける趣味などない」

「そうじゃなくて、レイアのことだよ。氷の魔女はリスの一族がずっと嫌ってたんだよね」

魔女に剣を向ける趣味ならあるのかしらと考えながら、最も気になることを尋ねるビーと答えを探すリズを注視する。

暗い色の背表紙と黒に近い茶の本棚がまるで闇を織りなすように視界の端を埋めていく。幾分か照明が与える光の裏にある影が増した気がしたのは、時刻がもう遅くなっていくせいだ。今度は私が黙り込む番だと言わんばかりに沈黙を貫くと、やがてリズは疲れたという風に吐息した。銀糸を揺らすようにリスの吐息が掛かる。

「殺せるものならとうに殺している」

怒る、ではなく殺すという何とも剣呑な言葉を発するリズは喋り疲れから来る頭痛でも感じているのか、こめかみに指先を当てて目

を閉じる。

「だが陛下が護れと言う以上護るしか道がないことに変わりはないし、この魔女が民を救ったという事実もある」

「理由なんて、氷の魔女つてだけで十分なんじゃないの？」

「……お前は俺に氷の魔女を殺させたいのか？」

呆れを含んだリズの声にビーがふう、と息を漏らしながら首を振る。そうして大きく口を開けて欠伸を漏らしてから若干眠そうな声を上げる。今までの話の中でも寝ていることが多かった気がするのだけれど、もしかしてまだ眠いのだろうか。確かにビーは日中ずっと寝ていることが多かった気はするのだけれど、こんな緊張感しか漂っていない場所でも欠伸が出るなんて。何だか少し羨ましいと、嫌味でも何でもなく素直に思えた。私には到底できない芸当だ。

「違うに決まってるじゃんか。でも、変だなって思われても仕方ないと思うんだけど」

確かにそうだ。彼はこの皇城内で 私が知る中では 唯一の断罪者なのだ。そして事実を知られることを避けていたとはいえ、知られてしまった以上彼に断罪されることは至極当然のことのように思えていたのに、一体どうして彼は何も言わないのだろうか。

いや、何も言っていないというのは語弊がある。

無論言っていないのだ。だが口にしたことがどうにも断罪とは程遠い言葉ばかりだったのは否めない。

一つだけそれらしいと感じた言葉も、どちらかと言えばただ疑問だったという風な言葉だったのだし。

この世界でただ一人氷の魔女を断罪できる立場にいるくせに、それを利用しようとしなない。それが不可解で、私は首でも傾げたい気持ちになりながらリズの手の中にある他の書物よりは幾分か豪華な装飾のされた書物に視線を落とす。お互いまだ中身を細かく見たわけではない。けれどその中には確かに皇妃様の怒りや憎しみが詰まっているのだと確信することができた。それを手にしていてなお、どうして何も言わないのだろうか。

「陛下が魔女を迎えると仰った時から嫌な予感はしていた」
独白のような、疲労の濃い声が耳朵を打つ。

「だが、氷の魔女がこの時代に生きているなど誰に想像できるって言うんだ。唯一陛下は御存知だったようだが、あの封筒の中身は俺達には伝わっていなかったし、そもそも氷の魔女は魔女の狂宴の際処刑されたと聞かされてきたんだ。情報が断片的すぎる。まるでマリエル王妃が隠していたんじゃないかとさえ思えるぐらいにな」
リズの一族には、私がこの場所にいた事が伝わっていなかった？
私は彼の言葉を心の中で転がすように反芻しながら唇に指先を押し当てて目を伏せる。

不可解だった。

王妃様が残した手紙と結界解除の首飾りが日記の中に挟まれていることに端を発した疑問は、私が生きているという事実が妹姫に伝わっていなかったことにも繋がっている。親族に話すほど辛かったのなら、憎かったのならどうして私が北の孤島にいることを伝えなかったのだろうか？ 結界解除の首飾りがあるのなら、容易に私を傷つけることができるというのに。

もしかしたらの未来を想像し、ぞくりと背筋を悪寒が駆け抜けて行く。穏やかに過ごしていた三百年がこの不可解に守られていたのだと、遅からず実感した。

魔術がある以上人間に遅れを取るとは思わない。けれどもしあの首飾りがヴァノッサではなくリズの手に渡っていたら？ 冬宮で無防備に眠っている時に結界を破られたら？ 死にはしないまでも、きつと傷を負うことに間違いなどなかった。

温情なのか幸福なのか、はたまた別の理由があるのか、それは分からない。

だから、守られた三百年の緩やかにして穏やかな時に今更ながら感謝しつつ安堵の息をついた。首飾りがヴァノッサの手にある以上あれを奪う人間などそういるとは思えない。皇帝の私物を盗んだ者は死罪か国外追放を免れないと知っているから。

「氷の魔女」

「何ですか」

呟きのような声に瞼を開くと、自分のものより少し硬そうな唇がささやかに動いた。

「一つだけ忠告しておく」

「？ はい」

「今回だけは何もしてくれるなよ」

今回だけ、というのは。

「此度の婚儀のことでしょうか？」

「それ以外に何がある」

いえ、何もありませんけど。

惘然とした顔に向けて溜息を漏らすと、リズが片眉を上げて応じた。

婚儀、か。

本来なら幸福な言葉であるはずのを胸中で呟くと、なぜか陰鬱な気持ちになってしまう。別にヴァノッサがツヴァイの姫と結婚しようがどうしようがそんなことはどうでもいいのだけれど、三百年前に初代炎帝とツヴァイの姫が婚儀を終えた後に起きたことが悲惨すぎて警戒心がつい強まってしまふ。ピリオン様が願っていることが本当に婚儀なのかは分からないけれど、平穩がもたらすものが私の心に影を落としたことは確かだった。

そつと足を後ろに引き、踵を返す。

「私は地脈破壊を止めるためにファルガスタに来ただけです。もとより何もする気はありません」

「……そうだといいんだがな」

「信じられないなら、根回しでも何でもして私を冬宮から追い出せばいいでしょう。私は別に城下に住んでも構わないのですから」

「それができればとつくにやっている。くそ、陛下がなかなか首を縦に振ってくださらないから」

背中にぶつけられるのは、忌々しそうな舌打ちだった。主に對し

て舌打ちを漏らすなど騎士としてありえないだと窘めるべきなのだろうか。ふとそんな考えが頭を過ぎったけれど結局何も言わずにおいた。この場合悪いのはヴァノツサだ。

魔女を救世主に据えることは預言者を信じてのことだと臣下は少々納得するだろう。たとえモーリス大陸全土で魔女に関してまともな教育がされていないといえど、大地震を収めたいのなら藁にも縋らなくてはならなかったのだから。そう、民を護るためなら魔女に力を請う主を止めたりしない彼らの姿はある意味清々しいと言えた。渋々承知したせいか、風当たりは心なしかきついでいけれど。

「ツヴァイのミルヒシュトラーセ様はいつ頃こちらにいらっしゃるのですか？」

そんな魔女が後宮にいることを、一体誰が許すというのだろうか。そう考えるとリズの言い分はもっともなものだと思えてくるから不思議だった。

仮にも自分のことだというのに、早く出ていけと催促されて納得するなんて馬鹿馬鹿しいにも程がある。それでも出て行く気を失わないのは、あの場所に想い出がありすぎるからなのか、それともツヴァノツサが希うからなのか。

宥めるように静かに問いかけると、その声に溜飲を下げたのかりズは口元を引き結んだまま早口に答えた。

「一月後だ。もう時間がないっていうのに、姫をお迎えする準備さえさせてくださらない。もうじき使者も遣わされるといっ話なのに」棘のある声に振り向いてふと遠くの円卓を見つめる。一人分のティーカップは、リズの怒りと相当分の鬱憤が溜まったものだったのだろう。恐れずに魔女に嫌味を見せつけた侍女に対し、賞賛の意を贈った。上辺のみで媚びへつらうような人間に会う機会の方が少なかったとはいえここまでではつきり敵意を見せてくれるのは、この時代ではリズ以来だ。

けれど、その理由がリズの言う通りなのだとしたらやはり悪いのはヴァノツサだ。

「……大地震とは比べるまでもありませんが、それはそれで国の一大事ですな」

「ああ大問題だ。それもこれも貴様が冬宮に住んでいるから」

「レイアは悪くないもん」

呆れを吐き出すように呟くと、何だか頭が痛くなってくる。

私は魔女で目の前にいるのは騎士で足元にいるのは王とはいえ猫だ。

そんな私達がどうして我俣を言う皇帝の心配をしなくてはならないのか、ほとほと情けない。

紺色のドレスについた埃を軽く払いのけ、魔術でシヨールをふわりと自分の周囲に浮かせると少しだけ温かくなった。

夜が更けたのか、少し冷えた書庫に呆れの拭えぬ声が響く。

「もう一度私から話してみましよう。聞くかどうかは別として、貴方達臣下が言うよりはいい反応があるかもしれませぬ」

「貴様が動くのか？」

……先程の問答を考えるととてもじゃないがヴァノツサが動くとは思えない。

けれど臣下が言うよりはましだろう。

彼は以前私に対し、救世主として隣に立てと言って手を差し伸べた。

そして私は救世主を望まないまでもあの手を取ったのだから、この国で皇帝位を持つ彼と対等に話せるのは私だけなのだ。対等だからこそ言うことを聞かないのが難点だけれど、今度こそ言い負かさねばならない。

胸中で呟きながら口にすると、実に意外そうな声が返ってきた。

先程冬宮について問答をしていた私達を見ていたというのに、今更何を驚くことがあるのか。

「意外ですか？ 言っておきますが、ヴァノツサが婚期を逃したのが私のせいだなんて言われるのは御免ですから」

愚帝とは魔女を一生困って生きろという意味ではない。

私はいつか北の孤島に帰り、彼もまた政略結婚という名の婚儀を行って妻を得るのだ。

その時期が偶然魔女のいる時期だったというだけで彼の人生に罅を入れることなどできなかった。そしてこのモーリス大陸の平穩を壊すつもりもない。東西の大国が結びつくことは平穩に繋がると知っているからこそ。

「それでも駄目だったら？」

「そうですね……」

上体を折り曲げ、そっと灰色の猫を抱き抱える。すると嬉しそうに鳴いたビーは私の腕の中が定位置なのだと言わんばかりに満足げな顔を浮かべた。そのまま軽い口調であっさり道を示す。

「駄目なら逃げちゃえば？」

どこに、とは言わなかった。多分彼としてはどこでもいいのだろう、このファルガスタ以外なら。

「それもいいわね」

「なっ！」

ただ、ファルガスタ以外の場所に行く気はなかったから私は怒声を上げかけたりズを制して温い猫をぎゅっと抱きしめた。

「もちろんあまり城から離れない場所に、ですが。ヴァノッサとも連絡が取りやすい場所なら、彼も安心するでしょう。とにかく今は私が冬宮を出ることが先決です」

「出奔してもいいのに」

「馬鹿猫は黙ってる」

ほっと安堵する息と舌打ちが混ざり合う。

だがそれがまずかつたらしい。

「僕散々黙ってたもん。だからご褒美として今日のご飯はマグロね」

「……マグロ？」

「カナデ島の魚だけど、知らないの？」

「知らん。というかあるわけないだろうが、ここをどこだと思っている」

「皇城ならあるんじゃないの？」

「聞いたことはないが、普通に考えてないだろう」

お互いがそれを聞き咎めた瞬間また言い合いが始まり、私はやはり仲がいいのか悪いのか分からない彼らの会話を止めることなく溜息のみで応じながら指先をくいと動かして書物を手繰り寄せようとして、止めた。強烈な眠気に襲われ、それどころじゃなくなっただせいだ。

緊張の糸が切れたことと、久しぶりに話しすぎたせい、今すぐにも眠ってしまったえそうなほどの眠気に欠伸を噛み殺す。するとそれが見えたのかりズは小さく吐息してから円卓へと歩き、ティーセツトを片手に持った。……結局一口も飲まなかったんじゃないかしら。

「今日はもう遅い、一度冬宮に戻るぞ。陛下に書物をお渡ししたいしな」

「……そうですね。私も少し、疲れました」

結局得られたことは地脈という言葉が存在しないことと、魔術に関連する書物が必要だということぐらいか。

元来た道を戻り、人もめつきり減った皇城の通路を歩きながら窓を見つめささやかな光を放つ華月を見上げていと少しだけ疲労が和らいだ。そうしてどこか温かさのある月明かりに身を浸しながら同じように銀の鎧を月明かりに触れさせる広い背中を見てふと胸中で呟いた。

この疲労感は何の前を歩く騎士との会話があったからであり、断罪に限りなく近くしかし断罪とは呼べない言葉を放たれたからこそだ。唯一の救いは剣を向けられ殺されそうにならなかったことだけれど、それが不可解だった。リズとしては魔女らしくない私を断罪する気が起きないことと、情報が断片的すぎることから困惑しているだけなのだと思うけれど、でもそれはきつと。

マリエル様、と唇だけを動かす。続く言葉はやはり心の中で呟くに留めた。

貴女はきつと御自分が残した想いを誰かが受け継ぎ、動かしていくと考えていたのかも知れません。

そのために妹姫に想いを託した……けれど、まさかこんな形で動き始めるものだとはきつと想っていらっしやらなかったのではありません。

第二十八話 魔女が留まる理由

復讐、という言葉を目指でなぞる。

痛みと怒りと憎しみが詰め込まれたその言葉に、そつと息を吐いた。

「……申し訳ありません」

もう謝罪すべき相手などこの世にいないというのに、その言葉を止めることはできない。

指先でそつと日記を読み進めていく。

暖炉の炎の照り返しに赤く染るその古い紙には、皇妃様の身に起きたことが事細かに書かれていた。

新しいドレスを新調したり、父王と共に過ごしたりといったツヴァイでの穏やかな日々。思わず頬が綻ぶようなあの人の過ごした日々を惜しみながら進めて行くと、私の名前が書かれていることに気がついた。それは丁度皇妃様がファルガスタに輿入れした日に近い。

白銀の魔女のような銀髪の魔女がいるのだと、若干興奮した様子で綴られているそれに目を落とすと、初めて私に会った時の印象が書かれていた。曰く、とても怯えているようなと。そんなに怯えていたかしら、と胸中で呟くがしかし当然のことながら答えは返ってこない。私自身に分からないことを答えられるのは、皇妃様だけなのだから。ただ、予想することはできた。

きっと私は魔女だという理由で嫌われはしないかと不安に思っていたんだろう。そしてその人がビリオン様の隣に立ってしまったら、彼にも嫌われてしまうんじゃないかと。

「本当に、馬鹿ね」

そんなことあるはずがないのだと今なら断言できるのに。

「何がだ」

小さな呟きに返答が返ってくる。

「何でもありません」

視線を向けずに言葉を返すと、後宮の主を迎えるべく開かれていた扉から男が一人入り込んで来る音が聞こえる。書物を閉じ今度は視線を向けると、何か行事でもあったのか白地に紅糸で装飾がされた服を着ているのが見えた。普段は全身黒に染めているというのに珍しい、と感じていると彼は辟易したように吐息する。

「国が保有している建築物が修繕される度に式典があるというのは、意外と面倒なものだ」

「それも皇帝の務めでしょう」

「歴代は参加しなかった。あれは本来皇帝ではなく使者が執り行うものだからな」

ああ、なるほど。胸中で呟いていると皇帝　ヴァノツサがどっかりとソファに座り込む。

着慣れない服でも着て肩が凝ったのか、幾分かがつしりとした手の平を肩に当てて揉んでいた。

そんなに疲れたのなら誰かに解してもらえばいいのに。

「あの猫は食事中か」

「はい。リス殿に無理を言っていたのが気がかりですけど」

「カナデ島のマグロとやらか？　気にするな。さすがにマグロはないだろうが、カナデ島の魚なら探せばどこかにあるだろう」

ふう、とヴァノツサが息をつく。それはとても弱いもので、宵闇にあっさりと溶けてしまった。

「あの猫も運がよかったな」

「どういう意味ですか？」

「今ならモーリス大陸のみならず、他島からの食物も豊富にある」

「ツヴァイの使者のため、ですか？」

「ああ」

ファルガスタ復興に対する祝辞を述べに遣わされるツヴァイから

の使者。

その人間がどのような人となりなのかを恐らくヴァノツサは知らないだろう。無論私にも分かるはずがない。

けれど一つだけ分かるのはその人間が破格の待遇を受けるということだけだ。

別に使者を勞つてのものじゃない。

ただこの国の威信を見せつけてやるために必要なことだからという、ただそれだけの理由だ。そしてそのためにファルガスタ皇城中が騒然としている。民が寝静まっているであろうこの夜更けにも動いている者はいるだろう。警備の騎士はもちろん、文官も侍女も等しく。

「忙しいことですね」

「忙しいを通り越して面倒だ」

言葉通り辟易とした声を聞きながら窓から外を眺め、そこにささやかな華月の光を見つけて安堵する。

姉妹月が揃って天に昇ることはそう頻繁にあることじゃないから、今宵花月が現れることはないだろう。

もしこれが花月だったら、またビリオン様が現れるような気がしたからだ。無論、会いたくないわけじゃないのだし会いたいという気持ちに変わりなどないのだけれど、ヴァノツサを前にした時の儼然たる敵意は見ていて心地良いものではないし、それに私は一度ヴァノツサを危険な目に遭わせている。精霊達がいなくなったらきつと護りきれなかったあの事態を思い出すと身が震えそうになった。

もしかしたら私が見ていない所であの人がヴァノツサに害を為すことがあるかもしれないと考えたけれど、すぐに首を振って否定する。今の彼の目論見の中には二代目炎帝であるヴァノツサが必要なはず、ならば目論見が達成されるまでは彼の命が害されることだけはないと考えたからだ。

それは決して確たるものじゃなくて、お世辞にも救いとは言い難い希望的観測に過ぎない。

ただ、理知的だったあの人が気まぐれを起こすとも思えなかったのは事実だ。

「貴女も悩み事が多そうだな」

「貴方ほどではないでしょう」

掛けられた声に視線を向けることなく返すと、微かな衣擦れの音の後に影が視界の半分を支配する。視線をそちらに向ければ、眩しい白地が見えた。それから炎のような紅蓮の髪がさりりとその上に落ちていくのも。

「初代を説得することに比べたら、俺の疲れなど微々たるものだ」

私が座るソファの肘掛に手を置いてふっと微笑を浮かべたヴァノツサは窓へと視線を向け、そこにある華月に視線を止めた。

「いつ見ても美しいな」

「ええ」

「だが、どれだけ焦がれても月に手は届かない」

日に焼けた手の平が夜空へと伸ばされ、軽く握られる。その中に月を掴もうとするように。

「月が欲しいのですか？」

問いかけるとヴァノツサは片眉をぴくりと上げてから首を振る。

高級な絹を燃やし尽くすように紅が揺れた。

無論熱などないのだから絹が燃えてしまふことなどないのだけだ。

「華月が欲しいだけだ。まあ、空でも飛べない限り難しいことだが」

「飛べた所で無理ですよ。ああ見えて華月はとても大きいのですから」

苦笑で返すと、ヴァノツサは試したことがあるのかとも言いながらこちらを凝視した。

好奇心に満ちた瞳に見据えられ、苦笑を深める。これでは、まるで子供に絵本を読み聞かせる母親みたいだ。書物は手の中にあるし、私の年齢から考えるとヴァノツサを子供と言っても全く差し支えないのだから。いや、孫でも曾孫でも足りない。

「月を欲したことはありません。ですがエイミーに連れられて空を飛んだことなら何度かあります」

必要とあれば自分で飛ぶことも可能だけれど、それには魔力を多く消耗することになるから普段はしない……というかしたくない。

胸中で補足しているとヴァノツサは感嘆の息を吐き、まじまじとこちらを見る。

頭の天辺から足先までじろりと見て、彼は一体何を考えているのだろうか。

少しだけ気になったけれど聞いてしまったが最後、文句を言わずにはいられない気がしたから何も訊かないことにした。お互い疲れているのに、ここで口論をするのは無駄なことだ。

私を見下ろしたままの紅蓮の瞳がやがて柔らかく細められる。それでもどこか硬質な色を湛えるそれを見返していると、月に伸ばされた手がこちらへと向けられる。

「それは残念だ。だが」

壊れ物を扱うようにごつごつとした指先が頬に触れた。

「俺の華月はここに在るから気にすることもない、か」

低い声が耳朶を撫でるように発された瞬間思ったことは、甘いという一言。

「減らず口を」

あの人に似ている整った顔立ちに精一杯穏やかな顔を浮かべるヴァノツサの手首を掴む。冷たい絹の感触が手の平を覆うと、ヴァノツサが意外そうに目を見開いた。彼の持つ紅蓮が広がると同時にぱちりと暖炉の火が爆ぜる。

手首を掴む手に力を込めると、ヴァノツサはくくつと低く笑う。

「悪いがこれが本心だ」

甘やかな声が耳元で囁かれると同時に花の匂いが鼻腔をくすぐった。

リーズネイションとは違う、私の知らない花の匂い。

「貴方は」

地味な色合いながらに高級な家具、暖炉の炎。

それはもうもうすっかり慣れてしまった光景だというのに、その花の香りのせいで一気に知らない場所に見えてしまった。

三百年前ともこの一月とも違う何か。

その空気を全身に感じながら、変わらず甘やかな笑みを浮かべるヴァノツサに問い掛ける。

「私に何を言わせたいのですか？」

穏やかかつ艶然と笑むヴァノツサはそんな私の問いにますます笑みを深める。

子供扱いしてくれるなど、その顔が言っている気がした。

「今は何も。ただ貴方が俺の言葉に減らず口を叩くなと言ってくれているぐらいが丁度いい」

「冷たい言葉を御所望なら、喜んで」

「そうじゃない。分かっていないな」

一体何を理解しろと言うんだらうか、この男は。

手首から手を離し、ヴァノツサを押しつけて立ち上がると彼は軽やかに笑ってからふとこちらを指差す。

「ところで、それは」

彼の指差す方向にあるのは、私が持っている書物だった。

そういえば元はヴァノツサが必要としている書物だったと考え、表題を顔の位置まで持ち上げて見せてやる。

「ビリオン様の妻であり、ツヴァイ王の長姫でもあらせられたマリエル皇妃の日記です」

「ああ、俺が頼んだ書物が」

金字で書かれた皇妃様の名を紅の双眸が追い、静かに書物を受け取る。

少しの衝撃でも命取りだということは理解しているらしく、その扱いは繊細だ。

はらりと指先で紙をめくっていき、その中にある皇妃様の生活を覗き見ながらヴァノツサは視線をそのままに尋ねる。

「マリエル王妃はあまり歴史書に記載がない女性だったはずだが、どんな人物だった？」

静謐なその問いに、不本意ながら肩が震えてしまった……ヴァノッサが書物を見ていてよかった。

心底そう思いながら私は再び脳裏に王妃様を思い浮かべ、レイアステイと呼ぶあの人の声を受け止めて答える。

柔らかな日差しが似合うと同時に、華やかな方でもあった。きっと姉妹月のどちらに似ているかと言われれば多くの民は花月に似ていると答えたことだろう。人々を照らし、その場にいるだけで空気を明るくしてくれる、そんな方だった。

「空色の瞳が印象的な、とても綺麗な方でした。そして私が魔女であることを知っても意に介さないお優しい方でもありました」

けれど、と続ける。脳裏に焼き付いた笑顔にぴしりとひびが入り、代わりに憤怒の表情に差し替えられた。

続けた言葉は無自覚な自嘲を伴って発せられる。

「私は、そんな優しい方を傷つけてしまった」

怒りも悲しみも憂いも似合わない女性だったのに、それを与えてしまったのは自分だ。

望んだことではないし、そんな物を与えないように立ち回ったつもりだったけれど結局何の役にも立たなかった。

窓に手を置き、そっと開ける。きいと音を立てて開かれた窓から突き刺さるような風が吹きつけた。

「貴女のせいではないだろう」

静謐な声が耳朵を打つ。静かな怒りを孕んだ声に振り返り、目を伏せた。

「分かりません。もうそれを確認する術などないのですから」

「だからこそ断言する必要はないと言っている」

不死掛けを施されたビリオン様ならば答えてくれるかもしれないけれど、彼はきつとヴァノッサと同じ答えを返すだろう。もしここで肯定をするようなら、三百年も私に会うことを望んだりはない

はずだから　復讐や怒りでも持っていない限りは。だから彼に訊くことはできなかつた。

それでなくとも、本人に訊かなくては意味などないのだから。それに例え皇妃様にお会いすることができてその場で赦しが得られても、私が一生この問題を抱えていくことにも変わりなどないのだ。それなら確認しようと考えること自体詮無いことだつた。

「はい。ですが、何度か考えたことはありません」

星がきらりと煌めきを放つ。それを茫洋と眺めながら私は更に詮無いことを呟いた。

「もし、私が出会つたのがビリオン様でなく別の人間だつたならと。そうして御二人の人生に関わらずに生きていけたならと。そうすれば、あの方は傷つかなかつた」

「それこそ分らないだろう。例え貴女がいなくとも、初代は別の女性に目を向けたかも知れない」

「いいえ」

慰めるようなヴァノツサの声に返した自分の声にはっと息を呑む。自分でも驚くほど強い声が出たせいだ。

もう一度いいえ、と今度は弱く繰り返しヴァノツサに視線を向ける。

その目に力が籠もるのは、発する言葉が本心だからだろう。

流星が一つ、涙を零すように流れた。

「何の邪魔も入らないのに、ビリオン様が皇妃様を　　マリエル様を手放すはずがありません」

頬を冷やす風がヴァノツサのものとは違う銀の髪を揺らす。それを手の平で掴んで背中に流しながらビリオン様と皇妃様の姿を思い浮かべた。今は亡き皇帝と皇妃、そして私が北の孤島に逃げてから生まれた皇子の姿も。

私がいままだつたら幸福だつたはずだ、きっと。

魔女がいなくとも魔女の狂宴は起きていたことに変わりなどないし、多くの民が死に絶え絶望がファルガスタを襲うことだつて変え

られぬ事実だけれど、でも少なくともあの方達の絆に傷を付けることなどなかったはずだから。

「聡明でお優しいあの方を、どうして手放すことができるでしょうか」

そう、手放そうと考えることさえもあり得ない。

ツヴァイとファルガスタの政略結婚だったとはいえ、皇妃様をあの風に幸福そうに笑わせることができるのはビリオン様ただ御一人だったのだから。ビリオン様だって、そんな風に慕ってくれる女性をないがしろにするような方じゃない。

それにもしそういう感情論を抜きにしたとしても、外交という面において皇妃様を手放すことは自殺行為に近かった。

百年戦争の再来はいつだって起こりうることだったのだから。

「レイアステイ」

独白のような呟きに対し、低い声が返す。

それに対し無言でいるとヴァノツサが続けた。

「一つ訊いてもいいか」

「そんなことを訊くなんて珍しいこともあるものですね」

夜空から目を逸らし振り返るとこちらを窺うような、少しだけ迷いのある紅蓮の視線と自分のそれがかち合う。

先程私が座っていたソファの傍に立ったままで答えを待つヴァノツサの表情は少し硬い。

「どうぞ」

常に堂々としていて時折慙懃無礼で、持つ色と同じ熱を孕んだ人間がこんな態度を取ることには本当に珍しいと感じていると、彼はようやく決心したのかこちらを真っ直ぐに見据えて告げた。

「もしも俺がツヴァイの姫を娶るつもりがないと話したらどうする」

「……理由は？ と訊くでしょうね」

多分の覚悟を決めて発された言葉に、目を丸くする。開かれた双眸の中に目一杯彼の姿が映り込んだ。

呆けた声で返すと、白地を侵食する紅蓮の装飾を指でなぞりなが

らヴァノツサが早口に続ける。

それは本心を語っているというより、何かに餓えた口調だった。

「華月の魔女を愛したからだと言ったらどうする。おまけに冬宮の名を月宮に変えたら」

「ファルガスタから逃げます」

「貴女の頭に、俺の愛に応えるという選択肢はないのか」

「あるわけがないでしょう」

きっぱり返した私に対しヴァノツサが別段傷ついた様子を見せなかったことから、それが本心でないことは理解できる。

ふむ、と顎に手を置いたヴァノツサは肩を竦め、勢いよくソファに沈み込んだ。

「国中から死を願われても耐えられるはずの魔女が、皇帝からの愛一つで逃げ出すなどは誰も想像できないだろうな」

静謐な言の葉が緩やかに流れていく。いや、流したのだ。

愛という言葉を恥ずかしげもなく口にするヴァノツサの神経を疑いたい気持ちで一杯になりつつ、だらりと肘掛の横に下るされた腕の先にある書物に視線を止める。ぷらぷらと揺れたそれはしかしすぐに彼の胸元まで上げられた。

「この日記では調べたいことの半分も調べられない」

ぱたんと書物を閉じ、古びたそれをそっとベッドの上に投げ置く。衝撃で塵に還ってしまう可能性だってあるのに何てことを。

この国の書物は皇帝であるヴァノツサの物なんだから私が文句を言えた義理じゃないのは分かっているのだけれど、それでも書物が投げられるのを見て思わず悲鳴を上げそうになった。

ヴァノツサはそんな私の様子など気にも留めず、強い意志を籠めた瞳でこちらを射抜く。

逡巡など見せないそれは実に彼らしくて、そして私は何度向けられても慣れないそれに緊張感が否応なしに高まるのを感じた。燃やされてしまうのではないかと錯覚するような、高い熱が向けられる。「三百年前の貴女は、同じことを初代に伝えたのか？」

同じこと、とはどの言葉だ。

一瞬訳が分からずきょとんとしてから、すぐに思い当たる言葉を見つけ首を振る。

ファルガスタから逃げるなど、あの頃の私には考えもつかなかった。

この場所が私の世界であり、そして首都フェンネルから外は私の世界の終わりを表していたのだから。

いや、仮に私の世界がもっと外に向けられていたのだとしても、出ようなどと口にすることはなかっただろう。

命の恩人に対してそんなことは到底言えない。

「それを調べたかったですか？」

「少し気になってな。初代の日記でもあれば分かるかと思っていたんだが、心当たりはこれしかなかった」

尋ねるとヴァノツサは肯定の意を示すように仰々しく頷いた。

でも、一体どうしてそんなことを……調べるほどのことではないでしょうに。

「だが、貴女から答えを得られただけ良しとしよう」

ヴァノツサの思考が理解できずに眉を顰めると、彼は一人頷きながら上体を背もたれに預け前後にゆらりと揺らした。

「初代が言っていた通りだな」

そうして勢いを付けて立ち上がり、花月を愛おしげに見上げるヴァノツサの横顔はひどく穏やかで、そのくせどこか自嘲的なものだった。けれど彼が自嘲する理由が分からなくて混乱に拍車がかかる。どうしたのですか？ と声を掛けようとしたけれどそれは彼の声に阻まれる。耳朵を打つ低い声はやはり穏やかだった。

「炎帝だからということもあるんだろうが、辿る道筋も性格も似ているとは思わなかった」

それは、一体どういう。

咄嗟に尋ねようとするも唇が震えていることに気付き慌てて閉じる。

するりと心の中に入り込んでそれを冷やしていく感触が、思いの外強く体を震わせた。

性格はともかく、辿る道筋が似ていることは否定できない。あの時代に地脈破壊が行われたなどという事実はないとしても、若くして皇帝の座に就き氷の魔女に出会った炎帝。それだけで十分な判断材料だ。

「だが」

否定するような声色と共に伸ばされた手は決してこちらには触れず、ぴたりと宙で止められた。

花月を掴もうとした時と同じく、軽く手の平が握り締められる。

そこに月以外の何かを掴もうとするかのように。

「道を知っていれば、打つ手は必ずあるはずだ」

滑らかな軌跡を描き腕が戻される。だらりと体の脇に腕が下ろされたけれど、そんな力のなさなど感じさせない強い声が響いた。冷えた頬が温かく感じるほどの熱を孕んで。

「貴方は、どんな道を進みたいのですか」

その言葉に、今度こそ問うことができた。

高い声はか細く先程のような愚問を発したことに対する断罪の響きを持っていったけれど、ヴァノツサはそれに負けじと紅蓮を煌めかせた。

「民が平穩に生き、俺の名が歴史書にほとんど載らないほど平和な治世を築くこと。そしてそのために此度の地脈破壊を是が非でも止めること、それが第一だ。そのために貴女をここまで連れてきたのだから」

皇帝らしい模範解答ではなく、本心からの答え。

堂とした強さでもって発せられる言葉に感嘆していると、彼は更に強く熱い声で続けた。隣に並ぶと、花の匂いが濃くなる。

「だから必ずこの地震は止めてみせる。人間である俺に出来ることは少ないが、貴女一人に負担を掛けさせるわけにもいかないからな」
全ては愛する祖国と民のために。

それが伝わる真摯な声に、彼の若さを再認識する。熱を孕んだ脆くて強い横顔は、冷静に政務を行っていたピリオン様とは似て非なるものだ。ただ、鉄さえも敵わないであろう意志の硬さはよく似ていた。それから、志の高さも。それは怠惰な時を過ごす魔女である私と違い、鮮烈な光を放っているように見えて多少の羨望が顔を覗かせる。

「だが地脈破壊を止め、癒すことができたなら　そうだな、その時は更なる難関が待っているんだろうな」

「難関、ですか？」

確かに平和な治世を築くことは難関だと思うが、ヴァノツサにそれが難しいことだとはとても思えなかった。

地脈破壊を止めるために魔女を単身で連れ出すような人間が平和な治世を築くことぐらいで苦悩するなんて、意外すぎる。

永き時を生きた魔女でさえ敵わぬ意志の強さを持っているのだから、その気になれば何だってできそうなものを。

「ああ」

吐息のような声に、頷く気配が伝わる。

けれどその先に続いた言葉は私への問い掛けの答えではなかった。

「婚儀が終わるまで、貴女には面倒を掛ける」

話を変えたのは、答えを告げられなかったせいなんだろうか。

それともただ自身の胸の中に収めておきたかったからなんだろうか。

どちらにせよ分かることは、私とその答えに手を伸ばしてはいけないということのみだった。

「面倒ならもう掛けられていますのでご安心を」

「……少しぐらい謙遜したらどうだ」

「それが無理なことぐらい、貴方はとうにご存知なのでは？」

さっぱりとした声に肩を竦めてみせる。

するとヴァノツサが半眼でこちらに視線を向けるもすぐに逸らされる。私に応える気がないことを理解しているのだろう。続く言葉

は諦めを含んだ肯定だった。

「それもそうだな。ああ、そうだ」

影が離れ、ばさりと白地が翻る。

広い背が遠ざかるのを追いかけることもせず声を掛けた。

「こんな夜更けにどこへ？」

「今に分かる。だから魔女殿は大人しく待っていてくれ」

慇懃無礼な色が含まれた態度に眉根を寄せると、ヴァノッサはくくつと笑い手を振る。

「すぐ戻る」

「……分かりました。お気をつけて」

本来ならば夜更けに皇帝が後宮から出るなど考えられないことだけれど、何か用があることは確かだからと自分を納得させて見送る。ツヴァイからの使者の件もあるのだし、何より復興作業はまだ全て終わったわけじゃない。ならば彼が政務に出かけることを訝しむ者も今ならいないだろう。

いたとしても、せいぜい歓喜するぐらいだ。主がようやくと魔女の呪縛から解放されたと。

「放っておいても、直に解放されるといふのにね」

後宮の主が消えた冬宮で一人こちる。

地脈破壊という事件が私達の縁を断ち切ることを許してはくれな
いだろう。

けれど、寵妃という肩書きを捨てることならできる。それはもう、
願われるのなら今すぐにでも。

ああそうだ、冬宮を出たいともう一度ちゃんと伝えなければ。残
された時間はあまりに短いのだから。

その時小さな足音が響き、反射的に顔を上げる。

勢いよく黒のシヨールを取って部屋の外に出ると、丁度眼前に灰
色の塊が転がり出てきた。……それはいいんだけど。

「レイアー！ この国ブリがあつたんだよ！」

何かしらこの至極御満悦という言葉を顔面一杯に載せている猫は。

「こちらは悩むことが多いというのに随分と自由なことだと考え、相手は猫なのだからと首を振る。

猫は食べて寝て遊ぶことが仕事だ。

「ブリ……って、魚のこと？」

「うん！ 脂が乗っててすっごく美味しかった」

恍惚とした表情を浮かべるビーは、先程食べたブリとやらの味を思い出しているんだろう。表情同様御満悦という言葉が聞こえてきそうな甘い吐息を漏らし、空気をくすぐるような音を喉から出した。あまりに嬉しそうな表情をするビーを腕の中に入れると、眠たくなったのかうとうとと瞼が伏せられる。本当に自由すぎる。

かつ、と音を立てて石造りの廊下から部屋へと戻る。するとぴゅと窓から風が入り込んでいることを思い出し、片手で窓を閉じた。かたかたと窓を叩く風は先程より強さを増したらしく、本格的な冬の訪れを感じた。もうじき雪が降るかもしれない。

ソファに座り込み膝の上に灰色の塊を載せると、それは覚醒した意識と睡魔の狭間でたゆたいながら深く息を吐き出した。

その背を撫で、触り心地の良さを再認識しているとほおっと息が漏れそうになる。

こうしていると、随分と気持ち落ち着く。

満腹感と睡魔が強いのだろう。

ビーはリズについてもヴァノッサについても、そして皇妃様についても何も言わずに瞼を閉じる。けれどその静寂を突き破るように今度は高らかな靴音が響いた。先程まで聞いていたそれは、冷たい後宮を紅蓮で彩っていく。

「待たせたな」

扉が開かれ顔を覗かせた男はにやりと口の端を吊り上げ、扉の影に隠すように何かを持っているようだった。

「いえ。……それより、何ですかそれは」

「何だ、魔女殿はすっかり目が悪くなってしまったのか？」

隠されてるから見えないだけです、と返そうとすると彼は私を驚

かせたいのか実際ににこやかな顔で手に持っている物を掲げた。ぴくりとビーの耳が動く。

「見ての通り、ティーセットだ」

「いえ、まあそれは見れば分かりますが」

「比較的歴史の浅い茶を用意した。これなら貴女も新しい味を楽しめるだろう」

ヴァノツサの言う通り、それは盆に置かれたティーセットだった。書庫にいた時よりも明らかに高級そうな陶器には、真紅の薔薇と青の薔薇が描かれている。丁寧な仕事をされていると遠目から見ても分かるほどのそれを指差すが、ヴァノツサは私の言葉など聞こえないという風に早口に続けてこちらに歩み寄る。そうして膝の上にビーがいるのを見ると小さく笑う。

「カナデ島の魚を食べた感想は」

「御満悦」

随分素直なのね、珍しい。

怒声ではなく幸福感を詰め込んだビーの言葉に、ヴァノツサがふむと頷いた。

「舌の肥えた猫が言うのなら問題はないだろう。料理長に伝えておこう」

ツヴァイの使者に出すつもりだろうか。

そう考えているとビーがふるふると首を振った。

「お刺身は止めた方がいいよ。モーリスの人間は生魚を食べる習慣はないだろうし」

「サシミ？ そんな食べ方があるのか。じゃあどんな食べ方なら問題ない？」

「煮るんだよ。カナデ島ではそうやって食べてるって聞いた」

「さすが長生きしている猫は言うことが違うな。参考になる」

どうやらカナデ島の人間は相当魚料理に関して知識が豊富らしい。ビーの言葉に内心でそう感じていると、ヴァノツサが感心しながら机に盆を置きカップに紅い液体を注いだ。

水音を響かせてカップに落ちて行くそれをしばらく眺める。しかしすぐに腰を上げて手を伸ばした。

「何をしているのです」

「皇帝は茶一つ注げないでも思っているのか？ 貴女は」

「違います。自分の分ぐらい自分で注ぐと言っているんです」

ふわりと漂う香気は確かに自分の知らない匂いで、三百年の間に随分と様変わりしてしまったのだと考えさせられる。けれどそれに感心している場合でもなく、私は鼻腔をくすぐるそれをひたたくようにしてヴァノツサから取り上げ、恐らく自分の分であるう青い薔薇の描かれたカップに茶を注いだ。

一体どうして茶など唐突に用意したのかは分からないけれど、皇帝に自分の茶を注がせる気はなかった。そこまで図々しくはないつもりだ。いくら皇帝相手に辛辣な口を利いたとしても、その認識まで変えるつもりはなかった。

「大体、お茶が欲しいのならここにも？」

不満げな顔を浮かべるヴァノツサを睨みつけ、まだ途中までしか入っていないかった真紅の薔薇のカップにも同じ液体を注ぎながら責めるような声を浴びせる。この動作一つとっても子供を相手に行っているようで、何だか不意に可笑しくなった。

ただ、子供扱いばかりもできないことも重々承知していたからそれとは知られないように窺める。そうして盆を指差そうとして、はたと動きを止める。

ティーセットだけが置かれていると思っていた盆の上には、作りたての焼き菓子が置かれていた。一体どうしてこんな夜更けに出来立ての菓子があるのかと考えるも、答えは目の前にあることを理解してそれは問わずにおいた。代わりについとヴァノツサに視線を向ける。これはどういうことですか？ という言葉を詰め込んだそれを受け止めて、ヴァノツサは別室で脱いできたのか先程よりやや軽装となった純白の上着をすり合わせながら腕を組んだ。

「先程はうちの侍女が失礼をした」

「気になどしていません」

「知っている。だが俺の気が収まらない」

その言葉に大方の予想が付く。ただ、それが事実であったとしたら呆れざるを得ない。

ティーポットの熱から逃げるべく、シヨールを手繰り寄せそれで包み持つ。こうやって両手を塞いでおかないと、こめかみに指先を押し当ててしまいそうだった。

「まさか、それでわざわざ皇帝自らがこれを？」

「ああ、皇城に戻り用意させた。さすがに菓子も茶も作れなかったがな。一応毒は入っていないはずだから安心してくれていい」

長く深い溜息が漏れる。するとビーが私の気持ちを肯定するように首を振るのが見えた。

一体この皇帝を教育したのは誰なのかしら、一度顔が見てみたい。人としては問題ないけれど、皇帝としては問題が大有りの現皇帝を一瞥するがしかし彼は自分の行動に何ら問題などないという表情を浮かべるのみだ。当たり前前すぎて強い瞳を向けることすらしないのがその証拠だろう。

でも、と胸中で呟く。

一人きりのティーセットよりもそれはずっと透き通っていて温かく、甘そうに見えた。

ポットを置き、カップを手取る。嗅いだことのない匂いは甘く濃厚だった。

「……………ありがとうございます」

素直に礼を言うと、ヴァノッサはまだ文句を言われると思っていたのか意外そうな顔をした後ですぐに破顔した。同じようにカップを手に取り、そっと口に運んでいる。その様子を見ながら胸中で一人ごちる。

喉を通り過ぎて行く熱と舌を焼く甘い熱に目を閉じる。

三百年前、ここは私の世界そのものだった。

他に行く場所もなく、逃げるなんて思考すらないほど囚われてい

たから、それ以上に世界を広げようなどとは思わなかった。

『それなら、なぜ貴様はまだこの国にいる』

リスの言葉が頭を過ぎる。

あの言葉は正論だ。

ビリオン様は私がこの国に留まることを良しとせず、むしろ出て行くことを願っているのだから。

何より、あの人は私がファルガスタにいたくとも目の前に現れてくれるだろう。

地脈にまで近づけるほどの魔力があるのなら尚更その可能性は高くなる。

それに、あの人に付いて行けば確実に地脈破壊を止めさせられるかもしれない。黒幕が分かれば対処法だって分かる可能性が高いのだから。

けれどそれを理解していて尚、共に行くことを断ったのは。

「貴方も、随分皇帝らしくない皇帝ですな」

「貴女にそんなことを言われるとは心外だな」

「褒めているのです。いえ、この場合文句を言うべきなのでしょうか」

「何か問題でもあったらどうか」

「ええ」

軽く息を吸い込む。そうして心を落ち着かせてから笑んでみせた。その笑みにビーが金の瞳を丸くし、剣呑な空気を鋭くヴァノツサにぶつける。

「貴方がそんな人だから、私はこのファルガスタから離れられない」
地脈破壊を止めるという結果だけを求めるなら、どんな手を使ってもヴァノツサは気にも留めないだろう。そういう意味では確実性を期す方法を選んだ方がいい。その分だけ民に真の安寧が訪れる日が近づくのだ。願ったり叶ったりだろう。

その可能性を知らないヴァノツサではないはずだ。

その上で私を傍に置くというのなら、私はそれに応えつつ彼が願

う道に手を伸ばそうと思った。忌み嫌われるべき魔女のために茶と菓子を用意する皇帝など聞いたことがないし、こんなに熱くて脆い人間もまた私は知らない。甘やかな茶をもう一口嚙下し、ほおと息をつく。それはビーの背を撫でている時のような穏やかさを私に与えてくれた。

「レイアステイ」

嬉しそうな声が耳朶を打つ。その声は何か続けようとするわけじやなく、ただ名を呼ぶただけに使われたようだったから私は続く言葉を待つことなく言葉を区切るように一言だけ呟いた。

「ですが」

そうして今度ははつきりとした口調で続ける。

真つ直ぐな声をヴァノツサの頭に叩きつけるように。冷たすぎると言われる紺碧の視線が更に強さを増すように。

「冬宮に私をいつまでも置くことは感心しません。リズ殿から聞きましたよ、ツヴァイの姫君が一月後に輿入れ予定だそうですね」

「……あの馬鹿者めが」

「馬鹿は貴方です。何を考えているんですか」

ぴしゃりと言い放ち、菓子を口に含んでから茶でそれを流す。新しい菓子というだけあってそれは食べたことのない味がした。どういふ材料を使ったらこんな味になるのか、予想がつかないくらいだ。馬鹿呼ばわりされて頬を引きつらせたヴァノツサは若干冷めた茶を一気に飲み干し、菓子を口に含む。自棄食いのように見えるそれはまるで昼間のリズのように、夫婦は性格が似るといふ言葉の後に主従も性格が似るといふ言葉を頭の中で付け足した。熱いのを無視して飲まないだけ、リズよりましかもしれないけれど。

「私に冬宮から出る許可を。二代目炎帝ヴァノツサ」

陶器の触れ合う甲高い音をささやかに響かせ、胃袋の収まった熱を浅く吐き出してからヴァノツサを射抜く。

真剣だと伝えるために凜とした声を上げかしまった言葉遣いをする、彼は嫌そうに眉を顰めた。

「何があっても、手放すつもりなどない」

真剣な態度に返ってきたのは、不満が塗りたくられたような端的な言葉だった。

「ヴァノツサ」

「くどい」

聞く耳など持たぬ、と態度で表すようにその顔がふいと横に向けられる。駄々っ子じゃないのだからそんなことをしなくともいいというのに、どうしてこつも幼い真似をするのか。本気を出せば誰も見惚れるような表情をすることだってできるくせに。

紅蓮の髪がヴァノツサの横顔に浮かぶ表情を覆い隠す。けれどそこには固い意志があるのだろうと感じ、打つ手を失ってしまった私は溜息を漏らし、そして小さく呟いた。

「分かりました」

諦めなど一欠片も含まない、冷え冷えとした声が部屋に満ちる。

それに一番最初に反応したのはビーだった。

ぴんと耳と尻尾を立てせ小首を傾げる姿は滑稽なほど震えている。

「れ、レイア？」

「どうした」

「いえ」

私の声とビーの反応にただならぬものを感じたのだろう。

ヴァノツサは不満げな顔をかき消して心から案じるような表情を浮かべた。

でもそんな顔をされても意味などない。私が欲しいのは冬宮から出るための許可であって、心配されることじゃない。

そしてその許可が得られないことは今のやり取りで嫌になるほど理解できた、それならば。

「とりあえずもう夜も遅いことですし、眠った方がいいのでは？」

ヴァノツサの声が若干眠たげであることに気付き話を変えるように休息を取ることを促すと、彼は洪々ソファに座り込み目を閉じた。その姿にも疲労感が漂っているようにも見えた。

首元が窮屈なのか、そこだけ緩めて貴崩した服を隠そうともせず、穏やかに息を吐く。

今更私の前で見てくれなど気にしてはいられないだろう。ヴァノツサは目を閉じたせいで急激に襲ってきた疲労感と戦うように顔を顰めながらベッドを指差した。華月のささやかな光が一筋の影を生み、ベッドへと差し込む。柔らかいそこで眠る気は彼にはないらしい。

「今日こそ貴女はベッドで寝てくれ」

「嫌です。貴方の方が疲れているのですから、いい加減ベッドで寝てください」

「強情だな」

「貴方ほどではありません」

もちろん、私とてベッドで寝るつもりなど毛頭ない。

けれど相変わらず人の話を聞く気がないヴァノツサはそのまま寝入るつもりらしく、ティーセットをそのままに深く息を吸い込んだ。薪が燃える匂いと茶や菓子甘さ、そして彼自身が持つ花の匂いが混ざり合った空間を空気として取り込むように。

頑固な態度にとりあえずは従順に従う振りをして、毛布を取り出してやる。そうしてヴァノツサに掛けると彼はぱちりと目を開いてから毛布に視線を落とし、それからこちらを見上げて笑んだ。

眠気のせいかわ無邪気に見える笑みに、この男もこんな顔をするのかと考えながら、何ですかと問い掛けるような視線を向ける。

浮かべられた笑みは破顔した時のそれによく似ているかもしれない、と胸中で呟いた。

「穏やかだ」

ぼつりと耳朵を打つ声は低く、甘い。

「はい」

頷き離れようとすると手首がやんわりと掴まれ、しかしすぐに離される。

魔女だって人間と体温に変わりはないというのに、まるで高熱に

触れてしまったような反応だった。

「何ですか？」

「いや」

口に出して問い掛けると、口早の答えが返る。その声が力なく震えているように聞こえ、もしかして寒いんじゃないだろうかと考えた私は傍にいたビーを抱き上げた。

「寒いのならビーを抱いたら温かいですよ」

「僕嫌だからね、こんな奴」

「……寒くなったら考えよう」

温々としたしたビーを抱きしめるとシヨールよりも遙かに高い熱を感じることが出来る。暖炉があるのだから猫で暖を取る必要はないけれど、寒いのならビーの寝床をヴァノツサの膝の上にしてもらおうと思ったのに彼は微苦笑を浮かべて首を振ったのみだった。

くつくつと、込み上げるような笑い声が耳朶を打つ。

「本当に穏やかだ」

力ないその声は、もしかしたら現実と眠りの狭間をさ迷っていたせいなのかもしれない。

毛布の上に置かれた腕が更に力を失い、穏やかな笑みを象つたどこか硬質な顔立ちがどこまでも静謐なものに変わる。

「こんな夜が、ずっと続けばいい……」

そうして最後にそんな言葉を残し、すうと眠りについたヴァノツサを見下ろしながら思案した私は眠りを邪魔しないように向かい側のソファに座り込み、同じく毛布を掛けて眠ることにした。ビーをその上に載せると、すぐに丸くなって寝息を立てる。

華月の控えめな光が窓から入り込む室内を、ぱちぱちと火の爆ぜる音とヴァノツサやビーの寝息が満たしていく。

誰もが寝静まった部屋でその音を聞きながら私も目を閉じ、思考を闇に浸した。

とろりと睡魔が襲い来るのに抗うことなく、意識を遠く遠くへと追いやる。もうじき忙しくなるのか、とこれからの予定を考え若干

面倒くさい思いに駆られながら、ヴァノッサ同様現実と眠りの狭間をさま迷いつつ呟いた。

確かに。

「こんなにも穏やかな夜がずっと続いたら、幸せなんでしょうね」

皇妃様がここで過ごしたのだと考えると胸が痛くなったけれど、

一月以上過ごしたこの部屋と夜は確かに愛おしかった。

それが永遠に続くものではないと知っているから、尚更に。

ぼつりと呟いた声が部屋を満たす音に重なるように響く。それが

消えると室内に再び穏やかな音が流れ始めた。

暖かく、幸福な夜。

私はそんな夜に全身を浸しながら小さく笑い、最後に残された一片の意識をも手放した。

第二十九話 西の大国からの使者

どれだけ続けばいいと思っけていても、その事柄には必ず終焉が訪れる。

それを知っていたから私達は穏やかな夜があっさりと終わりを告げても文句を言うことなく動き始めた。

お互いが為すべき事を為し、僅かな時間停滞している事態を好転させるために。

けれど二日の時が立った頃、別々に行動していた私達は再び顔を合わせることになる。

「来たようですね」

「ああ」

西の大国からの使者。彼らが皇城に辿り着いたその時に。

微睡みの中に身を浸し、衣擦れの音を子守唄にうとうとと意識をさ迷わせる。

温いシーツの上に差し込む光は明け方を伝えていたけれど、この甘美な欲望に勝てるわけもなく、私は情眠を貪りながら遠くで鎧が揺れる音を聞いていた。

硬質な音が階段を駆け上がり、扉を蹴破る勢いで開け放つ。

後宮に足を踏み入れる男としてやや強引に過ぎる、脳にがんと響く音に対し心の中で窘めの言葉を吐いていると今度は怒声が響いた。「いい加減に起きる氷の魔女！ 今日が何の日かは前に教えただろうが！」

「……貴方の主のせいではほとんど寝ていないのです。少しは寝かせてください」

「陛下のせいにするな。それとその科白は何があっても外で口にす

るなよ、誤解を招く」

「やわやわと腕を伸ばしシーツを掴む。そこに感じるさざりとした感触に再び眠気を誘われるがしかしここで起きないというわけにはいかない。うつすらと瞼を開き、その先に立つ麦色の髪を騎士を数秒見つめてから起き上がる。本当に仕方なく、見下ろす空色の瞳が怒気を孕んでいたから仕方なく起きてやった。」

窓から差し込む光はまだ完全な朝を告げるものではない。

「けれど少しでも身動きして外を覗き込めばそこから市場の喧騒が聞こえるのだらうという刻限であることは理解できた。そんな時間に起きなければならぬ理由は分からないとしても。」

「猫をお風呂に入れられて、魔女の目覚ましにもなれるなんて万能ですね」

目の奥をじわりと刺していく眠気に抗いながら腹いせにそう言い放つと、瞬時に彼の周囲の空気が沸騰した。視覚で捉えられないはずの怒気を察知し、今度は言葉を変えてやる。

「あの話を聞いた後で、よくここへ来る気になれましたね。ヴァノツサの命令ですか？」

「あの話、とはもちろんマリエル皇妃の話だ。」

そして彼の一族の誇りを踏みにじった魔女の話でもある。そんな話を聞いて尚どうしてここに来ることができようか。

眠気に浮かぶ涙を拭って仰向く。すると逆光で暗いリズの空色の視線と自分の視線が交錯した。

「ひたとこちらを見据える瞳に宿るのは、純然たる決意。」

「俺達一族の誇りも、俺の自尊心や怒りも、陛下には何ら関係のないことだ」

「そうでしょうね」

やはり命令されてきたのだとその言葉を聞いて得心する。

「けれどそれには少々の間違ひがあるようだ」と彼が続けた言葉で気が付いた。

「耳朶を打つ敵意と決意を織り交ぜた声。その声に、これが彼なり」

に悩んだ得た結論なのだ知った。

「陛下には何もお伝えしていない。何も憂慮などされず、つつがな
く婚儀を執り行って頂くにはそれが一番の手だからな」

ああ、だから彼は皇妃様の日記をリズに探させたのか。リズなら
ば決して誰にも書物の内容を漏らさないからと。

明らかかな人選ミスだったと言わざるを得ないけれど、それなら納
得はできる。

ただ、納得出来ないこともある。

「……いいんですか？ 私は氷の魔女なんですよ？」

ヴァノツサに全てを話し、私という存在を遠ざけることが恐らく
最も容易い道のはず。だというのに何故リズは三百年前の出来事を
彼に話さないのか。まあ、彼は既に知っていることだとは思っ
ただけれどそのことをリズは知らない。

ベッドから下り、乱れた髪を手で梳く。いくら見目を気にしない
とはいえ、寝起き姿をいつまでも見られるのは気持ちのいいもの
ではない。絡まった髪に指先を当てて丁寧に梳いていくとリズが私の
髪に目を留めた。銀の、一本一本だけを見たら銀糸に見える髪を見
て彼は何を思ったのか。

「殺せないなら、監視するしかないだろう」

「三百年前の過ちが繰り返されないように、ですか？」

「そうだ。俺も民も、そして貴様の言葉が正しければ貴様もそれを
望まないことのはずだ」

吐き捨てるような言葉に問い掛けると更なる言葉が放たれる。け
れど続いた言葉にあったのは棘ではなく確認するような響きだった
から素直に頷くことにした。

私だって三百年前の出来事が再び起こってもらったら困る。

もう二度と、皇妃様のように嘆く人が出てはならないのだから。

見方によっては自意識過剰とも取られかねない憂慮だったが、こ
の際傲慢な魔女だと思われてもいい。憂慮が消えてくれさえすれば
それでよかった。

硬質な音が響く。リズが身動きしこちらを向いたのだと理解した時、彼はこちらに腕を伸ばしていた。

だが、と呟き決意の籠った視線でひたと見据えられる。それはヴァノツサが本気で物を言う時の視線に酷似していた。

若く青く、そして熱い。純度の高い決意が向けられる。

「貴様が陛下をかどわかしたその時は」

喉元にひやりとしたものが触れる。手刀の形を取った、リズの手だ。

「過去の因縁ではなく、現代で害を為す魔女として貴様の首を落とす」

浮かんでいたのはたまに見せる獰猛な笑みではなかった。それどころか、笑みすら浮かんではいなかった。

ただひたすらに強い決意と真剣さが滲み出た表情。それは決して動されることなく、その代わりとばかりに手刀がすつと横にずれた。まるで首を落とすような動作だ、そう思いながら目を細める。

「剣は向けないんですね」

「言っただろう。護れと言われた以上は護ると。だからこそ俺は貴様を殺せない、口惜しいがな」

常ならば抜き放たれているはずの白刃は温い朝日に身を晒すことはなかった。

あくまで人の血の通った刃が喉元を掠める。剣技を鍛えてきたのだらうと理解出来る皮の厚い乾いた指先が触れて、流れてもいない血を掬うように手の平が返された。微かな吐息が漏れる。

「……戯れは終わりだ。それより、貴様が冬宮を出る件はどうなった」

戯れを始めたのは貴方ですけどね。

そう言いたいのは山々だったがここで言い争っていても無意味だし、何よりあまり睡眠の取れていない状態で無駄な行動は取りたくない。

「ヴァノツサがあんなにも強情な性格になった経緯を事細かに問い

質したい、それが答えです」

「……やはり貴様でも駄目か」

梳き終えた髪から手を離して暗い声で答えてやると、リズが嘆息混じりの声で応じる。

この二日間努力した努力は結局報われることはなかった。ヴァノツサは相変わらずの強情さで私の提案を突っぱね、そして私も退くことは出来ないと何度も提案をし続けた。最悪皇城内の端でもいとまで譲歩してあげたのに、何が不満なのかが分からない。

炎は夜の間に燃え尽きたのか、ひやりと冷たい空気が肌に触れる。その寒さに身を震わせながらソファに掛かっている白のシヨールに身を包むと幾分か震えが収まった。容易に身を温めてくれる素材は、三百年間の間に培われた技術の賜か。

窓に近付き音を立てずにそこを開くと、そこから喧騒が雪崩込ん
で来る。

城下よりも近く、皇城の壁を突き抜けて放たれる喧騒は一体いつから続いていたのか。

「皆、随分早くから準備に追われているんですね」

今頃皇城内では掃除に食材集めに奔走している者達がいるのだからと感心しながら呟くと、何を馬鹿な事をとでも言いたげな声が耳朶を打つ。

「当然だ。この国の威信がかかっているんだぞ」

「それもそうですね。それで、私にもこれからすぐに準備をせよと？」

「陛下はそう仰せだ。昼前には使者が皇城に入る、その時に万全の状態で隣に並んで立てるよう支度を整えよと」

万全の状態、それはどういう状態を指すのか。

魔女であるからには着飾ることを指すとは思えないし、魔力を充填しておけということとも違う。だとしたら残るは体調を整えておけということなのかもしれないが、生憎ヴァノツサのせいで寝不足だ。万全とは程遠い。

大体この国の状態が既に万全でも何でもないといいのに、一体こんな早くから私を起こして何をさせたいのか。

遠ざかっていたはずの睡魔に再び襲われる。

顔でも洗わないと完全には消滅しそうにないと思わされる眠気に目を閉じると、今にもくらりと倒れ込んでしまいそうだった。それどころか、少し体がだるくも感じられる。確かにあまり寝ていないとはいえ、ここまでだなんて。

目尻を拭いベッドへと視線を向ける。するとそこには肢体を丸くして眠る灰猫の姿があつて、私はあんな風にもう一度眠れたらいいのにも思いつながら無理矢理瞼をこじ開けた。使者が来た時まで寝ていましたなどということをつつたら、ヴァノツサに何て嫌味を言われるか分かったものではない。情眠は後で貪ることにしよう。

「分かりました。とは言つても、支度なんて顔を洗うぐらいしかすることがないんですけど」

「陛下が服を衣装棚に用意していると仰っていた。それを着て登城しろとも」

「衣装棚……？」

リズの言葉に視線を衣装棚へと向ける。

簡素ながらもしつかりとした作りをしたそれに手を掛けて中を覗いてみると、確かに一着だけ衣服が吊るされていた。

……そう、確かにあるのだけれど。

「何を考えているんですか、あの人は」

皺にならないよう中の横板を全て外して吊るされている衣服を凝視し吐き捨てるように呟くと、後ろからリズの声が掛かる。彼も主が魔女に与えた物がどんな物なのか気がなったのだろう。ただ、知らない方が良かったのかもしれないが。

「どうした？」

「これを」

身を引いて衣装棚の中を見せてやると沈黙が返ってきた。

まじまじと衣服を凝視する鋭い空色の瞳を一瞥し、再びそれへと

視線を戻す。

彼が口を噤むのは無理もないことだった。

掛けられていた服は、モリス大陸全土の人間が古くから抱いていた魔女の印象とはかけ離れたものだった。

足元まで覆うローブではなく、肩や腕の露出のあるドレス。

まだ触ってはいないけれど恐らく触り心地も一級品の物だろう。

そう思わされるベルベットのドレスは衣装棚同様簡素な作りながらも、だからこそ洗練された型だった。着る者を選ぶような、そんな印象さえ受ける。ヴァノツサは私がドレスに選ばれるとも思っているのだろうか。だとしたらとんだ思い違いだと嘲笑を向けてやりたいところだ。

けれど、私が文句を言いたいのはそこだけではなかった。

魔女が好んで着ると言われる色は闇や夜の象徴たる漆黒。

にもかかわらず目の前で吊るされているドレスは漆黒ではなく真紅だった。

「何故禁色など」

呆けたような声でリズが呟くのに頷いてみせる。

騎士である彼にだって分かるのだから、ヴァノツサに分からぬはずがないというのに。そう考えると呆れと共に苛立ちが湧いた。どうして今日この日に着るドレスが真紅なのか。

昔から西の大国ツヴァイは紫、東の大国ファルガスタは紅と禁色を定めていたはずだ。

禁色が変わったという可能性もあるけれど、初代炎帝陛下が持つ色がそのまま当時の禁色になったのだから二代目が生まれたこの治世に違う色であるとは考えにくい。そしてリズの言葉から察するに私の予想は間違いじゃなかった。

「これを着てツヴァイの使者の前に出るといいますか」

「……そういうことになるな」

「止めてくれてもいいんですよ」

むしろ止めてもらえた方が有り難い。

そうすれば私はどうとでも理由を付けてこのドレスを着ることを拒めると思うから。

懇願するようにリズを見ると、彼は私の言いたいことに気付いたはずだがそれでも諦めたように首を振った。合わせて刈り込んだ麦色の髪が力なく揺れる。

細い銀光が伸び、吊るされたドレスをそつと手に取り腕へと掛ける。

その時鎧に触れた衣擦れの音に、見た目とは違い幾らか重そうな印象を受けた。寒くないようにと厚手の素材を使ったのだろうか？ そんな気遣いをするぐらいなら色をどうにかして欲しいところだけれど。

「この国で最も尊い御方が命じたことを、俺に止めると？」

恐らくは皇城で使者を迎えるために采配を振っているヴァノツサへと内心で苦言を呈していると、リズが腕ごとドレスを差し出す。

目に鮮やかな真紅に顔を上げると、長身の騎士が懽然とした表情を浮かべていた。……その表情は今の私にこそ相応しいというのに。

無言の圧力を掛けられ、渋々ドレスを手取る。予想通りの、自分には酷く不似合いな触り心地。

良い物はその人の見た目を良く見せてくれるけれど、中身までは変えてくれない。それをヴァノツサは知っているのだろうかとかややずっしりとした重みを感じながら胸中で呟いた。そして即座に否定する、きつと彼は分かっている。何かにつけて私を過大評価する傾向にある彼からすれば、理解していないというよりもそれだけの評価をしているということになるのだろうけれど、得てしてそれが正しい判断とは言い切れない。というよりも言いたくない。

真紅のベルベットのみの、レースも何も使われていない簡素な形は悪くない。

ただ、それとこれとは話が別だとも思った。

「魔女に禁色を与えるだなんて、この国の皇帝は何を考えているのでしょうか」

「俺達にそれが分かるんでも？」

「……愚問でしたね」

分かれれば誰も苦勞などしない。否、分かった所で誰にも止められはしない。

この国で彼の行動を止めることができるのは魔女である私とビーぐらいのものなのだから。

だから本来ならば私が止めるべきなのだと理解もしていた。

「国益を考えれば、私がこれを着るべきではないはずです」

魔女が皇帝の隣に立つということだって、十分すぎるほどの異常事態だ。

だというのにその魔女が禁色である紅を身に纏うなど、ツヴァイを刺激するだけの行為でしかない。復興したばかりのファルガスタの民を想うのなら、そしてこれから先の国の在り方を想うのなら彼はこの様な所で馬鹿なことをしてはならなかった。そのはずなのだ、特に今は。

「寵姫だと使者に伝えることになるからな」

「ええ」

一月後にはツヴァイの姫君の輿入れが待っている。

その時に他国から訪れた星姫に不安を与えるようなことがあつてはならない。

見ず知らずの国に見ず知らずの人間達。そんな環境で見ず知らずの男に嫁ぐ女性にそれ以上の心労を与えたいと思うほど私は非情になつたつもりなどなかった。無論ヴァノッサとてそのような非情な仕打ちを望んでいるわけではないと思うけれど、どれだけ言い訳をした所で状況が悪い。

なぜなら彼はこのドレスを着る道しか用意していない。

「だが、貴様とてそれしか道がないと知っているはずだ。陛下がわざわざ貴様の為に用意させたのだから」

もちろん分かっていますとも。

ただ、胸囲や腹囲をどうやって彼が知り得たのかという疑問はこ

の際置いておこう。……その方が私の為にもなるし、ヴァノツサの為にもなると思いたかったから。

リズの言葉に沈黙で持つて返し、自分が持つ色とはあまりに違すぎる熱の高い色のドレスに吐息を落とす。

するとそこにきらりと光る物が見えて、私はさらさらとしたベルベットの感触を無視して朝日の照り返しを受けるそれを手に取った。「!?!」

そして驚愕に目を見開く羽目になってしまった。
深い色を宿す翡翠の首飾り。

これはまさか。

「リズ殿」

「何だ」

「出て行ってください」

「は?」

辛辣さすら感じさせてしまうような鋭い声にリズが眉を顰める。しかしそれに構っている暇などなかった。事態は一刻を争うのだ。首飾りの冷たさをぎゅっと握り締め、胸中でありつたあの罵詈雑言を吐き捨てる。もちろん、ヴァノツサ宛に。

そうして唐突に出て行けと言われ訳が分からない様子のリズに向けて睨みつけるような一瞥をくれてやる。明らかに八つ当たりだったけれど、彼はそのぐらいのことで本気になって怒りはしないと知っていた。

「着替えるので出て行ってくださいと言ったんです。急ぎ支度を整えますからヴァノツサの元へ連れて行ってください」

言い放つとリズが私の意図に気付いたのか目を丸くし、慌てたようにすまないと告げて背を向ける。別に今すぐ服を脱いだりはしないのだけれど、分かってくれたのならいい。そう思いつつ首飾りに視線を落とすと、それは不思議な力を宿しながら自らの力が発揮される時を待ち沈黙しているように見えた。

結界を出すべくスペルを唱える。けれどそれはすぐにふつりとい

う音と共に霧散し、形らしい形を形成せずには終わった。

予想は大当たりというわけね。

舌打ちでもしたい衝動に駆られつつ、ドレスをベッドに放り投げる。そうしてリズが扉を閉じてその向こうに消えたのを確認してから夜着を脱いだ。肌に触れる冷たさに再び震えが走る。けれどそれ以上に強い眠気とだるさに襲われていたから、冷たさなど大した障害にはならなかった。

ベルベットの感触を受け入れ、滑らかなそれに身を包む。すると次第に意識が覚醒してくるような錯覚に見舞われた。

実際は覚醒など一切していないというのに、衣服一つでこうも変わるなんて。

さすがに肌の露出があるドレスのみだと寒いから、毛皮のコートを着ることは忘れない。

あの男の馬鹿らしい考えに付き合っつて風邪をひくなど以ての外だ。そうして全ての準備を終えた私は、しかし決して首飾りだけは身に付けず握りしめたままベッドの上で眠るビーを柔らかく揺さぶる。

「ビー」

「んー？」

微睡みの中で反応を返すビーに果たして声が届くのかは分からなかったけれど、一応伝えておく。

「今からヴァノッサの所に行くから、何か異変があったらリズ殿に伝えて頂戴」

「はい……」

本当に分かっているのかしら。

疑問は尽きないけれど、こちらも急いでいるからそれ以上のことは言わずにおいた。どの道異変などそうそう起きはしない。

櫛で梳いた髪がゆつたりとした動作で揺れる。もしかしたら結い上げた方がいいのかもれないけれど、そうする時間も惜しかった。扉を開けると、傍でリズが控えているのが見えた。普段あれだけ気が短い方だというのにこういう時は何ら問題なく忍耐力が発揮さ

れるらしく、背筋を伸ばした銀の立ち姿が私を見つけてようやく動き出す。もしかして今まで指一本動かしていなかったのかしら。そんな疑問が頭を過ぎったけれど、訊くのも馬鹿馬鹿しい話だ。

そう思い私はリズの眼前に寄ってから首飾りを突きつけた。

陽の光が当たりにくい廊下でも光を放つ事を忘れない翡翠がリズの空色の瞳に映る。

「ヴァノツサにこれを叩き返さなければなりません。急ぎましょう」「それは」

「皇妃様の日記に挟まれていた封筒の中身です。結界解除の力を持つています」

翡翠を凝視する瞳が怪訝な色に染まる。

「結界解除？ それなら別段急ぐ必要もないだろう」

ええ、確かにそれだけなら何ら急ぐ必要なんてないでしょうね。

結界を張れる物であれば多少なりとも焦って然るべきだけれど、

これは結界を張った者への対策の一つでしかない。

そしてこの国には人間しか存在しておらず、結界を張れるのは私一人。

確かに問題なんてない。

けれど、私は一つだけある可能性を危惧していた。

かつんと音を立てて先へと進む。そうして慌てて後を追う鎧の音に向けて背を向けたまま告げた。

「詳しくは話せません。けれど、有事に備えて持つよう託した首飾りを残したということは、私に喧嘩を売っている証拠です」

本当はそんな理由などでは決していない。

けれど結界を張ることができ、なおかつヴァノツサの死を願う人物が存在することをリズに伝える気にはなれなかった。下手に混乱を招くだけだ。

きつと私の考えは憂慮に過ぎないのだと胸中で溜息を漏らす。

あの人は、ピリオン様はヴァノツサが今死ぬことを望みはしないのだしそれならば結界を張るような敵もない。それを理解してい

ても私の中の不安感が消えることはなかった。

時折体の芯が冷えていくような感覚に陥る。

恐らく不調のせいだろう、そう断ずることは容易いがこの感覚は地震が来る前のものに酷似していた。それが私の中の不安を増長させるのだ。

「一つ、提案があるんだが」

いつ掃除されているのか、どんな時でも染み一つない冬宮を出て皇城への道を歩いていると背後から声を掛けられる。

軽く、そのくせどこか逡巡するような響きを持った低い声に背中を向けたまま返す。

「提案？ 何でしょうか？」

「陛下は貴様を冬宮から出す気はないんだらう」

「そのようですね。腹立たしいことに」

ついでに首飾りを置いてまで、何が何でもドレスを着て出て来いという態度を取ることも腹立たしい。

いっそのことドレスを着ずに首飾りだけ持って出るという術もないわけではなかったけれど、そんなことをしたらヴァノツサ自ら着替させようとするだろう。そのぐらいのことをしてもおかしくはない。相手はヴァノツサなのだから。

一体何故そこまでしてツヴァイの使者の前に私を立たせたいのかは分からない。

ただこちらが傍迷惑ということだけは確かだったから、私は不敬行為だろうが何だろうが気にせず素直な言葉を言い放った。

皇城へと繋がる石畳の通路を力を込めて踏みしめる。

すると常ならば出ない高らかな音が閑静な通路に響き渡った。

怒りが音楽のように流れ出る中で、こちらに文句を言おうとしたのであるうりズが口を閉じ代わりに別のことを口にする。

「ならば、トリスタン家に来る気はないか？」

その言葉に思わず立ち止まり、怒りが鳴りを潜める。

トリスタンの家、それって。

「トリスタン　　って、貴方の家じゃないですか。いいんですか？
氷の魔女を入れても」

「三百年前と同じ事を繰り返さないため、と言えば納得ぐらいはするだろう。基本的には温厚な性格の人間ばかりだから、貴様が殺されかけるなんてことも多分ない。第一行き先を用意しておかないと、貴様は勝手に消えかねん」

まず間違いなく氷の魔女が近付くような所ではないことは確かだ。そう思い目を丸くして尋ねるとリズは憮然とした表情のままそう答える。

大体温厚な性格の人間ばかりとリズに言われても説得力がない。彼自身が温厚などではないのだから。

けれど、と胸中で呟く。

行く場所があるということは強みかもしれない。

少なくともそれを材料にヴァノツサに交渉を迫ることができるし、交渉が決裂したとしてもトリスタン家に行くという方法も取れる。

リズの立場が危うくなることだけが心配の種だけれど、私がファルガスタにいるということと彼が御咎を受けることもなくなるはずだ。いくらツヴァイ王家の血を引いているとはいえ、今や彼はファルガスタの騎士。その彼の家が郊外にあるとも思えない。

「いい案ですね、少し使わせてもらいます。何かあっても貴方には迷惑の掛からないよう配慮しましょう」

苛立ちが和らぎ、口元に笑みが浮かぶだけの余裕が出てくる。

指を唇に押し当てて笑うとリズが気味悪そうな顔をしたけれど、私はそれに対して文句を言うことなく皇城へと視線を向ける。最初に訪れた玉座の間をひたと見据えて笑みを深める。

「馬鹿な真似をした罰です。ヴァノツサには少し痛い目を見て頂きましょう」

ただ、その前にお互いやるべきことが残っている。

全てはそれが終わってからだと結論付け、私は空間転移を使うことなく自分の足で登城した。

黒の敷物に支配された玉座の間に足を踏み入れる。

するとリズが音を立てて跪き、玉座の間に侍っていた臣下達がこちらへ視線を注いだ。嫌悪や畏怖の籠ったそれはすぐに驚愕に変わり、問うような視線をこちらに向ける。怒りさえ孕んだ視線はしかしそれ以上の行動は起こさない。

敷物に触れ合いそんなほどの長さのベルベットがふわりと舞う。

そうして玉座の前に立って背筋を伸ばすと、そこに座す男がやはりと口の端を吊り上げた。

「やはり似合うな」

「……ヴァノツサ」

「まあそう怒るな　こちらへ」

ただ一言名を呼んだ私に苦笑を浮かべたヴァノツサが立ち上がる。白地に紅の刺繍が施された丈の長い上衣が音を立てて揺れた。

ヴァノツサが手を差し出すと、ざざと雑音のようなざわめきが玉座の間を支配する。

けれど私はそれに見向きもせずヴァノツサが差し出した手を凝視していた。凝視するのみで取りはしない。

「不要です」

そして拒否の言葉を言い放ちながら自らヴァノツサに近づくと彼は更に苦笑を深めながら強引に私の手を取った。

「ごつごつとした手の平に手首を掴まれ、引き寄せられる。けれど体がヴァノツサの胸元に寄せられる前に私は首飾りを彼の胸元に押し付けた。臣下達には無論見られてはいない。こんな所を見られたら喧騒が強くなってしまふ。」

空いた方の手に収まる翡翠の首飾りは真紅よりも彼が纏う白にこそ相応しく見えた。

きつとヴァノツサを睨みつける。

「何故これを手放したのです」

「今なら問題はないだろう」

それはそうだけれど。

「万が一ということがないと言い切れますか？ 貴方はこの国の皇帝でしょう」

「知っている。だが仕方がないだろう。貴女の所の精霊の思し召しだ」

「精霊……？」

怒りの矛先が丸くなる。

私の所の精霊の思し召しだなんて、一体どういうこと？

訳が分からず目を丸くしているとヴァノツサが考え込むように顎に手を当てる。

……どさくさに紛れて背中に手を回すのは止めてほしいところだが。

「ガラナと言ったか。炎の精霊王が貴女に首飾りを渡せと」

文句を言い、身を離そうとした所でそんな言葉が聞こえたから動きが止まってしまった。

狙い澄ましたような時に放たれた言葉にぴくりと指先が震える。

ガラナが？

そういえば先日珍しくガラナが冬宮に来ていたけれど、あの時の話と何か関係があるのかしら。

だとすれば、あながち私の危機感も間違いではなかったということになる。それがいいことだとは思えなかったけれど。

臣下達やリズは、抱き合うような私達に対し何を言うべきか考えあぐねている様子だった。背中にちくちくとした視線を感じる。その居心地悪さに身動きし、早く離してくださいと呟いた。けれどヴァノツサはそんな視線から隠すように腕を回すばかりで身を離す気配など微塵も見せない。

「貴女は俺の寵姫だ。こうすることに何の不都合がある？」

「まだそんな戯言を」

「戯言ではないが、貴女に信じてもらうには今は少し時間が足りないな」

くつくつと低く笑ったヴァノッサがようやく背中から手を離す。そうして私を隣に置いたまま玉座へと座りこんだ。

ヴァノッサは隣を指差しながら座るか？ と尋ねてきたけれど座ってやるつもりなんかなかった。大体あそこは皇妃が座る所じゃないか。

「結構です」

きっぱり言い放つと彼は眉尻を下げて残念そうな顔をした後で視界に広がる臣下達を一瞥した。

紅蓮の瞳が細められると、それだけでざわめきが途切れる。結構な力を持った瞳だと感心していると、入口近くに控えているリズが鋭くこちらを睨んでいるのが見えた。……私に怒りを向けられても結局返すことのできなかった首飾りを握り締める。すると鈍い気怠さが遠ざかり頭からもやが取り払われたような気がした。

澄んだ思考と視界に不調が好調へと変わっていく。

大分楽になった体にほつと安堵の息をついていると再び手が伸ばされた。今度は手の平を柔らかく握られ、肘掛の上へと導かれる。戯れのような優しい動作に問い掛けるような視線を向けると、こちらを横目に見上げるヴァノッサと目が合った。

「隣に座らないのなら、手ぐらい傍にあってもいいだろう」

「既に隣に立っているでしょう」

「まだ足りないな」

足りる足りないの問題でもない。

首筋に掛かる少し長めの紅蓮の髪と肩が揺れる。そうして楽しみに笑うヴァノッサはこのやり取りを楽しんでいる風でもあった。何て呑気な、と思わないでもなかったけれどこれから使者との謁見を控えている人間に言うべきことでもないと思いい口を噤んだ。

使者が属する国は西の大国ツヴァイだ。同じく大陸を襲う地震の被害に遭ってはいるものの、どちらかと言えば被害が少ない国。

その国からわざわざ復興の祝いとして使者が遣わされるのだ。一番弱っているであろう、この時に。

いくら慇懃無礼な態度を取ることが多いヴァノツサと云えど、色々と思う所があるはず。

そう思い口を閉ざしたものの、しんと静まり返った場所で二人して沈黙を貫くというのも緊張するものだったから、私は誰にも聞かえないようにヴァノツサの傍に近付き耳元で囁いた。傍から見れば皇帝に甘言を弄する魔女に見えなくもない。

寵姫に見られるつもりなど毛頭ないけれど、悪女に見られるのなら本望よ。

「貴方は、リズ殿の家系のことを御存知でしたか？」

吐息に紅蓮の髪がふわりと揺れる。

同時にくすぐったいのかヴァノツサが身動きした。……意外な弱点を見てしまったわね。

「リズの？ 代々文官や騎士を輩出してきた名門だということなら」

「では、氷の魔女を三百年もの間憎み続けてきたということとは？」

「……何だと？」

かといって言葉尻を和らげるつもりもなく、私は鋭く切り返すように問いを発する。

すると憎み続けてきたという言葉に彼が即座に反応した。

ヴァノツサが勢いよく入口付近へと視線を向ける。釣られるように視線を向けると、そこには麦色の髪をした騎士が怪訝そうな顔を浮かべつつも深々と頭を下げる姿があった。

「あの日記は」

「見られましたよ。私の浅はかさと思かさ、そして貴方の無知故に囁くような声が掠れて響く。後悔を吐き出すような吐息が漏れた。けれどそれに対して今更ですと責める気にはなれない。元々彼が気にすべきことではないのだ。

もっと早く気付くべきだったのは、私なのだから。

「すまなかつた」

「謝る必要などありません。全ての元凶は私にあるわけですから」
だから私はヴァノツサの謝罪に対し本心からそう答えることができた。恨めしいと思いはしたけれど、悔恨を籠めた声に追い打ちを掛ける気にはなれない。強いて言うなら隠し通そうとしていたリズに申し訳ないと思つた程度だが、こちらも恐らくはいつかは分かることなのだからと結論づけた。

ヴァノツサの視線を受け止め止めるリズは私が何か言つたのではないかと警戒するように目尻を吊り上げる。

しかしそんな顔を主に見せることもできず、すぐに伏せる。良くも悪くも忠誠心に溢れる騎士だ。

「悪いと思つているのなら、せめてリズ殿には知らぬ存ぜぬで通してください」

「? 何故だ」

「彼は貴方に何の憂慮もなく婚儀を終えて欲しいと願っています。良い騎士をお持ちの様ですね」

そんなリズの姿を目に留めつつ一切の嫌味もなく笑んでみせるとヴァノツサがきよとんと目を丸くする。一体何に驚いているのか、そう考えていると彼はすぐにふつと柔らかく笑つた。民に向けるものと同じ、優しい笑顔だ。

どこか慈愛に近い笑みを浮かべたヴァノツサは私の手を握り締める手を上へと向ける。

そのまま私の髪を梳き、誇りに満ちた声で答えた。

「どこの国の騎士だと思つている　そうだ、騎士で一つ思い出したことがある」

「? 何ですか」

一体何だろうか。

騎士で思い出すことなどないような気もするのだけれどと思い返答を待っていると、ヴァノツサは途端に面倒くさそうな顔を浮かべた。眉間に皺が寄り、声に溜息が混じる。思わず鼻白むほどに変わった態度をしかし気にすることなく彼は続ける。

「ツヴァイからの使者は女性騎士が二人だそうだ」

「女性の騎士、ですか？」

「ああ、珍しいがツヴァイでもファルガスタでも異例のことではない。使者を務める所から察するに、ツヴァイの有力貴族が絡んでいるんだらう」

三百年前には一切見ることがなかったというのに、一体いつの間に女性が騎士になれる時代が来たのだろうか。あの頃は貴族女性と言えば家の為に嫁ぐものだと言われていたけれど、今は大分社会的地位が高くなっているようだ。

それ自体はともいいことだと思い、一体何が不満なのかと首を傾げるとヴァノッサがやれやれと言う風に首を振る。

「女性が来るとは予想していなかったからな、客室の準備に追われている」

「何か特別に準備することでも？」

「男と女では好む色合いも調度品も違うからな。それから料理もだ」それは人それぞれだと思うのだけれど、そう思うのは私だけなのかしら。

終わったと思っていた準備がまだ終わっていないことに面倒くささを感じているらしいヴァノッサの嘆息に、表面上はなるほどと頷いてみせる。そうして身を離すとするりと彼の指から髪がこぼれ落ちた。

瞬間、玉座の間の扉が開かれる。静かに足を踏み入れた文官の一人が深々と頭を下げた。

一枚か二枚着るだけで暖が取れる、あの頃とは違う厚手の服が擦れる。

「使者様がいらっしやいました」

「報告御苦労。すぐに御通ししろ」

「はっ」

きびきびとした動作で動いた文官はもう一度深く頭を下げて退室する。その背を見送っていると、ヴァノッサが囁くような声をこち

らに向けた。

熱を孕んだ熱い声が耳朶を打つ。

それは黒の敷物にも煉瓦や石造りの壁にも染み込むことなく、ただひたすらに私の脳にのみ浸透した。

「紅も貴女によく似合っている」

戯れを。

「御褒めに与り光栄ですが、もう少し緊張感を持つたらどうですか」
顔も見ず答えると、深い息を吐くのが聞こえてくる。再び握られた手に力が込められた。

「素直に受け取ってもいいだろう」

「禁色を魔女に与える貴方の浅はかさなら受け止めていますか？」
包まれるような手の平を睨みつけているとくらりと目眩がしてきた。

一体、何が。

一転して不調に状態が戻される中、胸中でそう呟くものの中で倒れるわけにはいかないと足に力を入れる。いざとなったら浮かんでもいいからここで立っている姿を見せなくては。

この国の寵姫たる魔女がどのような存在で伝わっているかは分からないが、大国からの使者が来る日にふらふらしているようではフアルガスタの威信に関わる。

別にこの国のことなどどうでもいいと言えればそれまでだけれど。

第一ヴァノツサは私が倒れたぐらいで傾くような威信ではないと言いきりただけれど、それでも。

思いがけず早く、扉が叩かれる。その音に無理矢理背筋を伸ばすとふっと意識が軽くなる。波のように寄せては返す不調に苛立ちを感じながら、早すぎる来訪に眉を顰めた。

通常、皇帝に謁見する際はそれなりに緊張して時間を置くものだ。例え緊張していないとしてもそう見せることで相手の自尊心を満たす為に。

けれど使者はそれをしなかった。余程余裕がないのか、それとも

相手の自尊心など関係ないと思っっているのか……。

「入れ」

黙ったままでいると堂としたヴァノツサの声が玉座の間を満たす。それに続いて扉が開かれ、先程の文官が姿を現した。背後に二人の女性騎士を率いて。

数歩歩いた所でヴァノツサに合図された文官は頭を下げて脇へと避ける。そうして二人きりになった道を彼女達は堂々とした足取りで歩いた。

「ほお」

その姿にヴァノツサが関心するように呟き、彼女達に視線を注ぐ。紅蓮の、このモーリス大陸で唯一の色を持つ人間からの視線にも動じることのないその立ち姿をじっと見つめる。しかし見れば見るほど騎士らしい出で立ちには見えなくて、私は首を傾げながら近衛騎士と彼女達を何度も見比べてしまった。

まず、鎧というものを彼女達は纏っていなかった。

錆浅葱の上衣に同色のパンツ、砂色の糸でツヴァイの紋章が描かれている所からまず間違いなく騎士隊の服だということは理解できたけれど、それは剣で貫かれても守るべき防具が何一つない無防備な姿に見える。否、正しくそうなのだと思った。一つだけ守るべき物があるとすれば、彼女達の出で立ちにはあまりに不釣合な兜だった。銀色のそれは頭というよりも目を隠すのみの簡易なものだったから、役に立つかどうかは判断付けかねるけれど。

武器としては、腰に巻かれたベルトに鞘を差してあることから帯剣はしているのだろう。無論謁見をするにあたってそれは危険すぎるので、彼女達はすぐに騎士に預けていたのだけけれど。

ただ、帯剣していたとしても果たしてそれを使ったことがあるのかが疑わしい。

そう思つるのは時の流れに付いていけない私だけなのかもしれないと思わないでもないが。

二人の女性騎士が膝をつき、皇帝であるヴァノツサへと頭を下げ

る。

けれどその様子にも遜る様子は見えない。なぜなら彼女達は兜を外していないのだから。

ただ、ヴァノツサには興味深い事態だったのだろう。瞳の奥を煌めかせてから頭を上げるよう命じる。

「ツヴァイからの長旅、難儀だっただろう。ようこそファルガスタへ」

「有難き御言葉に御座います」

ふわりとした少女の声が耳朶を打つ。

たおやかさのある言葉遣いは淑女のそれに似ていた。

鈴が鳴るようなという表現が相応しい声に、一層彼女達が騎士なのか疑いたくなる。

「ただ、兜も外さず俺と話そうというのは関心しないな。それがツヴァイなりの礼の尽くし方だと言うなら致し方ないが」

なあ、レイアステイ。

そう問い掛けられ、私は唐突に話を振られた驚きに目を見開くもしかしすぐに自分を落ち着かせるようにそれを細める。一步退くこともなく、かといって出ることもなくどこまでも対等な位置に立つ魔女の視線に彼女達は何を思ったのだろうか。

兜の奥の双眸がこちらに向けられた気がして思わず凝視しそうになる。好奇心が胸を侵食するように疼いた。

「そうですね……」

見えずともひたと見据えられていると分かる視線を受け止め眩き、次に聞こえやすい声を発する。

出来得る限り魔女らしく、艶のある声が出るように。

「陛下に御顔を見られることを恥ずかしがっていらっしやるのやもしれません。少女のように初心で、御可愛らしいこと」

魔女を手籠めにしようとしたぐらいの好色だから顔を見せたら終わりです、とは言えなかった。

温々とした毛皮のコートの袖を口元に当て、小さく笑んでみせる。

受け取る者によっては揶揄するようにも聞こえる言葉に殺気立つような空気が満ちた。

実際は揶揄でも何でもなく、ただ魔女らしくしたかっただけなのだけれど。

喧騒と殺気に満ちる中で、彼女達は動揺した様子を見せず深く頭を下げた。

「御無礼を承知で登城致しました。兜を取れば騒ぎになると思いましたもので」

微かにくぐもった声に、ヴァノツサが眉根を寄せる。

「騒ぎ？」

一体何の騒ぎが起こるといふのだろうか。ただ兜を外すだけのことだといふのに。

頭の上を疑問符が飛び交い、ちらりとヴァノツサと二人視線を交錯し合う。

けれど答えが出ないまま先程から言葉を返していた騎士が頷き、もう一人の騎士へと声を掛ける。

「はい　カタリナ、兜を外しなさい」

「承知致しました」

ふわりとした声に返ってきたのは対照的な程に硬質な声だった。

人間ではなく物が喋っているようにさえ感じられる声を発した騎士は、ゆっくりと兜を取り外す。そこからきつちりと結い上げた亜麻色の髪が姿を現した。そして、声同様無表情な顔も。

けれど、彼女が兜を外した所で誰も動揺する様子などない。

強いて言うなら騎士には不似合いな線の細さということぐらいだが、それは大した問題ではないだろう。

ヴァノツサもそう思ったのか、眉間の皺を更に深くしてもう一人の騎士を見ている。

鋭い紅蓮の瞳は怒りこそ宿していないものの、戯れが過ぎると相手を窘めているようにも見えた。

戯れが過ぎることに關して彼の右に出る者などいないと思ってい

たのに、意外なことだ。

胸中でそう呟いていると、もう一人の騎士が兜に手を掛けてそれを取り払う。そうして結い上げられた髪を下ろし、軽く振る。見事な金の髪が舞った。

玉座の間に怒りや殺気とは違う喧騒が溢れる。

それは先よりもずっと強く大きなものだったが、ヴァノツサはそれを止めることができなかった。

喧騒の中でまだ少女とも言える女性がたおやかに笑んだ。それは騎士服を着ていてもなお美しさを損なわない、綺麗な笑顔だった。

「御初に御目に掛かります、ファルガスタ炎帝陛下」

「貴方は……」

手の平を包み込むヴァノツサの手に力が籠る。

まさか、彼女の美しさに見惚れているのだろうか。

そんな風に考えたものの、続いた高らかな声に息を呑む羽目になった。

立ち上がった彼女は紅紫の大きな瞳でヴァノツサを真っ直ぐに見据える。

「ツヴァイ王が妹姫、ミルヒシュトラーク・リラ・ツヴァインベルグに御座います。以後、御見知りおきくださいませ」

緩やかに吊り上げられた赤い唇。

そこから紡がれた言葉に私は驚きよりも先にリズの言葉が正しかったことを知った。

そして知った後で一番実感したくないことを実感してしまった。

ツヴァイの星姫、ミルヒシュトラーク。

その彼女がどういふ事情かこのファルガスタに来てしまい、そして。

そんな最悪の状況下で私は禁色を纏っているのだと。

第三十話 ツヴァイの姫君

騎士服を纏う星姫はたおやかに笑んだままちらとこちらに視線を向ける。

ヴァノツサや私同様、珍しい紅紫の双眸は敵対心と微かな好奇心を覗かせてすぐに離れていった。

玉座の肘掛に置かれたヴァノツサの手の甲にそつと触れる。

「レイ つ！ ……何を」

「黙りなさい」

そつしてそれを何の躊躇いもなく振り上げた。

この程度では、私の困惑と怒りを発散するには到底足りないのだけれど。

幸い、ヴァノツサの手の甲を抓ったのは毛皮に隠れて誰にも見えなかったようだ。喧騒は私の皇帝への不敬行為ではなく、前方に立つ女性騎士への物で満ちている。亜麻色の髪が無表情な騎士では多分ないのだろうけれど、星姫で膝をついて深々とヴァノツサへの礼を尽くしていたが、当の星姫はもう膝を屈することなどできないと言わんばかりに背筋を伸ばして立っていた。恐らくそれが今彼女に出来る誇りの示し方なのだろうと感じ、ヴァノツサへと視線を向ける。

ヴァノツサは立ったまま皇帝と話をしようとする騎士姿の女性に対し、不敬だとも冒瀆だとも言わなかった。

代わりに一度赤くなつた手の甲をさり気なくさすり、足を組む。

「ツヴァイの星姫はモリス大陸一の美姫と聞いている」

そつして発した第一声はそれだった。

……やはり顔を見せない方が良かったのではないかと考えるもの

の、彼が言いたいことはそれだけではないと理解出来ていたから口を挟みはしない。代わりに辺りを見渡すと漆黒の敷物の上に並ぶ臣下達の戸惑ったような顔がこちらに向けられていることに気が付いた。

もしかしてこの展開は魔女のせいだと考えているのだろうか？

そう考え、何て理不尽なことだと胸中で悪態をつきかけてからふとリズの目に浮かぶ感情を理解して即座に否定する。

要はこの状態をどうにかしろと言いたいのだ、彼等は。

望まれた所で私は救世主でもなければ人様の国事に干渉もできない力なき魔女だ。何が出来るわけでもない。

向けられた空色の瞳に諦めを返すと、リズは深々と息をついて若干視線を落とす。それは遠目では理解出来ないほどの微々たるものだったが、私には彼が何を見ているのかがすぐに理解できた。

胸元に触れる。すると指が毛皮に埋もれていないベルベットをすりりと撫でていった。そこに見える色は真紅だ。

もう帰りたい、そう考え思わず辟易しそうになるが状況がそれを許してはくれない。

「有難き御言葉に御座います」

ドレスの裾をつまむような仕草で星姫　ミルヒシュトラークがちょこんと一礼する。先程まで結い上げていたこともあり若干乱れている金髪はしかしきらきらと光を放っており美しく見えた。錆浅葱も砂色も彼女を暗く印象付けることはできない、そうこの場にいる全ての人間に思わせるような光にヴァノッサが嘆息する。

ただ、それは彼女の美しさに漏らしたうつつとしたものではない。純粹な呆れから来るものだった。

「だが、その星姫がじゃじゃ馬だとは聞いていない」

「勿論です。わたくしも騎士に成りすましてファルガスタ皇城に入ることになるうとは、夢にも思いませんでした」

けれど嘲りとも取れる言葉に対しミルヒシュトラークははにかむような笑みを浮かべ、さらりと流すようにふうと息をついた。

漆黒が酷く不似合いな立ち姿に視線を縫い止められてしまうのはきつと私だけじゃないはずだ。

ただその考えは色々な意味で規格外と言えるヴァノツサには通用しなかったのだけれど。

「何故貴方が使者を」

訝しむような声が放たれる。

「王族……それもツヴァイ王家の者がファルガスタに使者として遣わされたなど聞いたことがない」

「わたくしも存じ上げません」

「ならば何故ファルガスタへ？ 輿入れにはやや早すぎる気がするのだが」

ヴァノツサの問いは最もなことだった。

私は三百年前のファルガスタしか見たことがないが、書庫で歴史書を見ている限り今までにそのような出来事が起きたことなど一度たりともない。彼もそれを知っているからこそ問うたのだろう。私が抓った手の甲の痛みなど忘れてしまったように、腫れたその場所を放置して彼はミルヒシュトラ―セを注視する。そこに一片の嘘でも見つけようものなら追求しようと、鋭く細められた紅蓮の瞳が語っていた。

剣呑とは若干違う、かといって好意的なものでもない視線に隣で膝をついていた女性　カタリナが身動きする。

「大丈夫よ、カタリナ」

恐らくは主をヴァノツサの視線から護ろうとしたのだろう。

けれどそれはどこかおっとりとした声に阻まれてすぐに動きを止める。息をしているのかさえ怪しいほどびくりとも動かない姿に、何故だかりズの事を思い出した。彼も私を待っていた時こうやって指一つ動かしていなかったように思えたから。

皇帝を警戒するようなカタリナの動きに対し、ミルヒシュトラ―セが詫びるように瞼を伏せる。

しかしすぐにそれはこじ開けられ、鈴が鳴るような高らかな声が

玉座の間を満たした。

「兄王から秘密裏に使者の任を拝受致しました。ファルガスタ復興の祝辞を述べ、確認するために」

紅紫の瞳がヴァノツサを見据える。

姫君であれば、このように他国の人間に囲まれた状態で怖くないはずがないだろうに彼女は淑女らしくありながらも毅然とした態度を崩さなかった。怖いと震える心を叱咤している様子でもないから、あるいは本当に恐怖など感じていないのかもしれない。ツヴァイの姫は代々精神力の強い方が多いのだろうか、そんな考えが頭を過ぎる。

皇妃様も人前で恐怖を表すことなどなかったのだから。

感嘆に似た懐かしさを抱きながら、私はふと彼女の口にした言葉を脳内で反芻してみる。

ファルガスタ復興の祝辞、これは問題はない。それが本来の使者の役目であり、どう裏の意味があろうとも表向きはこう口にするべきだと知っている。

けれど確認とは一体。

「確認、とは？」

ヴァノツサも同じことを考えたのか、すつと目を細めてミルヒシユトララーセを一瞥する。焔の熱を孕んだ紅蓮の瞳が浮かべるのは、国を軽んじられているのではないかという懸念と怒りだったのではないか。

大国ツヴァイが確認することなど、ファルガスタの弱体以外にないのだから。

紅蓮の双眸が鋭くなるのを見届けて、こちらはあくまで泰然とミルヒシユトララーセを見つめる。私が感情的になれば、そこで魔女らしい魔女という言葉は消えてしまう。それは避けたかった……ただでさえこの国の禁色を纏っているのだから、できれば凶々しい魔女ぐらいに思われておきたい。

どの道寵妃であることはすでに示されてしまった。ならばせめて

このぐらいいは。

紫、と一口に言い切ることが正しいのかは分からないが紫に限りなく近い紅色がゆっくりと細められる。

そこに一筋の水滴を垂らして潤いをもたらせばきつとこの大陸中の男が傳くのではないだろうか、そう不躰なことを考えてしまうほどに整えられた顔立ちが笑みを形作りヴァノツサへと向けられた。

こちらに敵意などないと告げるように、どこまでも穏やかな声が耳朵を打つ。

その声に幾人かが溜息のような息を漏らしたのが聞こえた気がした。

「炎帝陛下の御側に侍る寵妃が白銀の魔女なのか、否かを」

なるほど、これならリズが褒めるのも無理はないと納得できる声だったから私も吐息する一団に混ざろうと口を開き、放たれた言葉の意味を理解してすぐに口を噤んだ。

白銀の魔女？

紅を引いた唇が楽しげに弧を描く。私はその唇を見つめたまま、泰然とした態度を保てずにいた。

その間にもミルヒシュトラークはヴァノツサから視線を逸らし、こちらをまじまじと凝視する。大きめの瞳が向けるのは真紅のドレスではなく、私の瞳一つだ。

本来ならばそれに疑問を感じるべきなのだろう。

けれど私は彼女が何を確認したいのかが分かっていたから、物怖じすることなくただ見つめ返すことのみに専念した。

ヴァノツサが困惑したように肘掛に置いた私の手を握り締める。

彼は魔女の存在がモーリス大陸でどのように認知されているかを熟知している。だから私がこれからどのように扱われるかを想像して心配してくれたのだらう。自国が軽んじられているという予想が消えたからこそできる芸当だとは思っただけれど。

優しい温もりに大丈夫だというように笑みを返すと、斬り込むような声が放たれる。

その声に多分の敵意と苛立ちが混ざっているのは、私に向けた言葉だからだろうか。

「噂は正しかったようですね。その魔法の瞳は海の蒼、翡翠ではありません」

「元より白銀の魔法が侍っているなどという話を流した覚えはない」
そうだ、第一ヴァノッサが言うには預言者は海の蒼を持つ魔法を所望したのだから、本物の白銀の魔法がここにいるわけがない。

大体白銀の魔法など絵本の中の出来事だけだと思っていたのに、何故そのようなことを確認したかったのだろうか。

怪訝に思い眉根を寄せるとミルヒシュトラークが上目遣いにこちらを見上げながらやはり敵意を顕にすつと横に手を差し出す。何事かと思つて見てみれば、気配を消すように静かに隣にいたカタリナが恭しく何かを彼女に差し出していた。薄い木の色をしたあれは、扇子？

カタリナが腕を下げると同時にミルヒシュトラークがぱつと扇子を広げる。

そうしてようやく人心地ついたのか、数度自らを仰いでから小さく頷いた。

けれど扇子によつて口元を隠され表情は読み取れない。

「はい、その御言葉は最もなことです。ですが兄王は浮き足立って早々に確認をさせたかったようですから」

兄王、ということとはツヴァイ王のことです。まず間違いはないだろう。というよりも、ツヴァイ王しかない。

ただ……何故ツヴァイ王が白銀の魔法の再来に浮き足立つのかは分からなかった。

物語によると百年戦争の際に白銀の魔法はツヴァイの敵だったはずだ。確かにツヴァイを繁栄に導いたのも白銀の魔法に他ならないとは書いてあったけれど、どちらかといえば警戒していてもおかしくはない。それなのにツヴァイ王はファルガスタに居着く銀髪の魔法の正体を探らせようとしたのだ、このような方法で、しかも妹姫

を使って。

一体何故。

陽光がよく似合う金の髪がベルベットのよう滑らかな光を放つ
のを見下ろし熟考していると、ヴァノッサがふと声を漏らす。

「念の為に訊くが、此度の婚儀が早まったのは」

小さくも真つ直ぐに放たれた声にミルヒシュトラレーセが苦笑らし
きものを漏らした。

「……御想像通りですわ、炎帝陛下。ツヴァイを代表することは出
来ませんけれど、妹として御詫び申し上げます」

扇子が閉じられ、もう一度ちょこんと一礼される。

苦味を含んだ笑みに此度の婚儀の裏にある思惑が見えてしまった。
しかし、できればその思惑を信じたくはない。

なぜならもしその言葉が正しいのならば。

「魔女を見るために婚儀を執り行うとは、ツヴァイ王は余程魔女が
御好きと見える」

此度の婚儀は国のためでも地震に疲れきった民の心を明るくする
ためでもない、ただ白銀の魔女が本物かどうかを確かめたいが為の
極めて自己中心的なものだったから。

魔女は見世物ではないし、民は駒ではないというのに。

ヴァノッサやミルヒシュトラレーセだつてそうだ。彼等にとっては
一生が賭かっていることを、ツヴァイ王はさらりとやろうとしてい
るのだ。どの道いつかは結ばれる縁だとしても、こんな思惑の下執
り行われるべきものでは決してない。

小さく手の平が震える。それを受け止めるようにヴァノッサが指
先に力を籠めた。

「ですが、別段可笑しな話ではありませんわ」

けれど当のミルヒシュトラレーセはまったく意に介した様子を見せ
ず、もう一度扇子を開いて口元を隠してからぐるりと玉座の間を見
渡した。ぎよっとする臣下達が慌てて頭を垂れるのを見て、くすりと
笑う。そうして歌うような声で告げた。

「魔女と関わった者は等しく呪われるとこの国の者達が申し立ておりましたけれど、それは炎帝陛下の御教育の賜でしょうか？」

「揶揄するような響きは鳥のさえずりよりも低いものの、朗々たる響きに満ちていた。」

ミルヒシュトラレーセに告げた当人が、それとも心のどこかで考えているという後ろめたさ故か。

どちらにせよいい意味ではないのであると理解できる動きで、臣下の何人かが更に深く頭を垂れる。ヴァノツサはその様子を見てふんと鼻で笑ってからミルヒシュトラレーセを睨めつけた。大陸一の美姫を見るような目でもツヴァイ王の妹姫を見る目でも、そしてこれから伴侶となる女性を見る目でも決してない色を灯した紅蓮に初めて彼女が驚きを露にする。

「そんな訳がないだろう。呪われるのなら既にこの身が朽ちている」

力強い声が怒りに似た熱を孕んで放たれる。それがミルヒシュトラレーセ個人に向けられた真っ直ぐなものでないことを、この場にいる者の何人が理解できただろうか。

銀の鎧がきらりと光を反射する。その煌めきに視線をずらすと薄い空色の瞳と目が合った。その瞳が幾分誇らしげに見えるのは、自分の主がツヴァイ王の妹姫の存在を食っているからか。

笑いかけるとすぐに逸らされた瞳に別れを告げ、再びミルヒシュトラレーセを注視する。彼女はヴァノツサの言葉に瞠目してから、深く息をついた。しみじみとした賛同の意と意外な言葉に雑音のようなざわめきがゆるゆると流れ出る。

「わたくしも有り得ぬ話だと思っております。第一、ツヴァイ王家では魔女は安寧をもたらすと伝えられておりますもの」

「？　しかし、モーリス大陸全土では魔女を忌むべき者だと教育しているはずだが」

「勿論建前としての教育では、魔女は危険であり関わるべきではないとされております。ですがそれは傾国の魔女がいたという事実には

基づいて話しているだけの、言わば教訓のようなものですわ。呪われたり殺されたり、そのような迷信を民に吹き込んだりは致しません。誰が始めた教育かは存じませんが、悪質極まりないわ」

安寧をもたらず？ 魔女が？

三百年前には病原菌を撒き散らす存在だとして狩られそうになっていたというのに、ツヴァイではそのような考えが根付いているだなんて知らなかった。

皇城で何を言われたのか、怒りを吐き出すように饒舌になるミルヒシュトラーセに向けて目を丸くしていると彼女がちゃんと扇子を閉じる。勢いの良い音に思わず肩を震わせてしまうと、彼女は漆黒を踏みしめて一歩進みぐりと首を回して周囲にいる臣下達を睨みつけてからヴァノツサを見据え、ようやく笑んだ。

「あまりに酷い教育に、趣味が悪い国だと思っていた所です。ですから炎帝陛下が魔女を毛嫌いなさらなくて本当に良う御座いました。……良い教育者に巡り合えましたのね」

「互いにな。星姫には悪い言葉を聞かせてしまったかもしれないが、何れは塗り替えられるべき知識として流して頂けると大変助かる。

そして塗り替える時には、ツヴァイの助力も仰ぎたい」

「ええ、それぐらいでしたらわたくしでも御返事することができましょう。兄王はわたくしよりもずっと魔女に対して思い入れが強い御方ですから」

「ああ、話の分かる御仁でファルガスタも多分に助けられている」
擲諭の言葉でも掛けるのかと思いきや、ミルヒシュトラーセはただ心からの安堵を浮かべるのみだった。

余程ファルガスタの臣下が口にした魔女の話が気に食わなかったと見えるが、それならどうして私に対して敵意を見せたりするのだろうか。よもや私が魔女ではないと考えているとは思えないのだけだ。

毛皮のコートからちらちらと見える真紅に彼女の双眸が真っ直ぐに向けられる。ここになってようやく向けられた気まずい視線に身

動ぎするとヴァノツサがくつくつと笑った。どうやら彼には鋭い視線がどこを見ているか分からないらしい。

「魔女に対する教育が変われば、少しはこの魔女にとって住みやすい国となるう。なあ、レイアステイ」

「……ええ、そうなることを切に願っておりますわ。ヴァノツサの力ならそう遠くない未来の御話でしょうから」

それは、確かに魅力的な話だろう。

私は地脈破壊が静まりモーリスに平穩が戻れば最果ての島へと戻るけれど、魔女への偏見を取り除くことができればまた三百年前みたいに魔力を持った者が表立って街を歩くことだってできるのだ。そうすれば今のようになり一人で地脈破壊への対抗策を練らずとも、有事には多くの魔女や魔導士が駆けつけてくれる。

今は手元がない本を抱きしめるように片手で胸元をぎゅっと掴む。誰が書いたのか分からない魔導書。それは私に今まで生きていくための術を教えてくれたけれど、彼等が戻ってくればそれらは全て口で伝えられるようになる。消えゆく誰かが託したのではなく、未来へと確実に伝えるために。

そんな未来が来ればいいと思う。そうすれば私のように何故誰も読めない文字が読めるのか、どうして魔導書を持っているのかと記憶を探らなくても良くなるから。

どういう意図で放たれたのか理解できないヴァノツサの言葉に、魔女らしく甘やかな声を返してやる。そうして切なる願いを押し殺して彼の名前を呼んだ時、ミルヒシュトラークがぎゅっと唇を噛み締めるのが視界の端に見えた。金の髪を後ろへと流し、扇子がびしりところらに向けられる。その所作に誰かが声を上げたけれど、続いた言葉に声はすぐに掻き消えた。ヴァノツサへ不敬を働いたわけではないと知ったからだ。

「貴女の二つ名は、氷だったかしら？」

魔女は安寧をもたらすと口にしたのと同じ唇が、敵意を籠めた声で放たれる。それでもどこか可愛らしく聞こえてしまうのは、彼女

の声の問題か。

儂くも清涼な声に、氷の名まで聞かされているのかと瞠目してから小さく笑みを浮かべる。

幼子を見るような目に彼女が柳眉を上げるけれど、さすがは淑女だけあり激することはない。私はそれを見て更に笑みを深めてから頷いた。

「は」

「華月だ」

ただ、それは言葉にする前に隣に座る男によって遮られたのだけ
れど。

こちらにも扇子があれば顔を隠すことができたのに、と考えながらヴァノツサを見ると彼は整った顔立ちにしてやったりという色を載せてミルヒシュトラ―セを見ている。あえてこちらを見ないのは、後で私から説教を受けることが嫌な為か。

私にも似たような経験があるから気持ちは分からないでもないけれど、皇帝にはやや相応しくない態度だ。

ふうと嘆息し密やかに呆れを伝えると、怒っていると勘違いしたのかヴァノツサが戦慄したように頬を強ばらせた。どうやら私を怒らせるだけの心当たりはあるみたいね、今更だけれど。

そつとヴァノツサの手から逃れ自分一人で立つ。それでもただどこまでも隣に在り続ける態度に業を煮やしたのか、ミルヒシュトラ―セが硬い声で言い放った。

誰も口を開かぬ玉座の間に、純然たる決意を滲ませた声が響く。

「よく覚えておきなさい、華月の」

氷の魔女と言わなかったのは、ヴァノツサの手前言えなかっただけなのだろうか？

ヴァノツサとビリオン様以外では三人目となる華月の名を使ったミルヒシュトラ―セはすうと息を吸い込んでから続けた。

「わたくしと炎帝陛下の婚姻は政略的なもの。決して良い縁とは言えないでしょう。ですがツヴァイ王家に生まれた以上、わたくしに

も受け入れる覚悟は出来ております。両国のため、そこに住まう民のため、そして平和を願う兄王のためにわたくしはこのファルガスタへと嫁ぎます」

饒舌な言葉がすらすらと赤い唇から飛び出してくる。

けれどそれをお喋りに過ぎるとは思わなかった。ヴァノツサだつてそうだろう。彼は強い決意を籠めた彼女の声ににやりと口の端を浮かべてとんと肘掛を指先で叩く。続きは？ と催促するように。ヴァノツサには、彼女が何を言おうとしているのか分かっているのかしら？

吊り上がった唇を見ながらそんなことを考えていると、一度言葉を区切ったミルヒシュトラレーセが再度息を吸った。錆浅葱の騎士服が微かに膨らむ。

耳朶を打った声はそのような地味な服には似つかわしくない、華やかさのあるものだった。

「ですから今のうちに宣言致します」
扇子が向けられる。

私の立つ位置から、ついと横に滑って皇妃の座へ。

そうしてぴたりと照準を皇妃の座へと向けたミルヒシュトラレーセが続いた言葉は、どこまでも挑戦的で自信に満ちたものだった。

「貴女が立つその位置、必ずやわたくしが貰い受けます。形だけの皇妃として座すだけではなく、寵妃となるために」

好きにしてくださいと即座に申し上げたい所なんです。

胸中でそう呟いていると、おお、とどよめきが漏れる。歓喜を含んだそれを発したのは無論ファルガスタの臣下だ。

……本当に、いい臣下を御持ちで。

不機嫌そうな顔のヴァノツサに擲掬するような視線を向けると、ふいと逸らされる。紅蓮が揺れ、扇子と同じ皇妃の座へと向けられた。

誰も座っていない寂しい場所はまだ埋まっていはいない。

けれどあと一月もすれば今はまだ目の前に立っているだけの星姫

がそこに座るのだろう。彼女が願おうと願うまいと、そう決められた以上は。ただ、絶対に嫌だと言われるよりは何が何でもその座に就くと言われた方が気持ち良かった。ミルヒシュトラークと出会ったのは今日だけれど、ヴァノッサとはそれより少し長い時を過ごしている。彼の婚姻が少しでも明るいものになるなら、私にとって喜ばしいことだった。

「祝辞が遅れ馳せまして申し訳ありません。此度の地震からの復興、大変に目出度き事に御座います」

「ああ、ツヴァイも復興作業が一段落したと聞いている。何れこちらからも使者を遣わそう」

「有難う存じます。ツヴァイとファルガスタ、両国の民が一日も早く健やかに過ごせますよう、兄王も望んでおります故」

彼女が向ける敵意の正体を理解しほつと胸を撫で下ろすと、彼女はカタリナを連れて深々と頭を下げる。そうして今や誰もが忘れ去っていた祝辞を告げると、ヴァノッサは苦々しく笑いながら手をひらりと振った。今更堅苦しい喋り方をするなど言いたいのだろう。威厳も何もあつたものではないが、確かに今の会話の後にいきなり硬い口調になられると違和感が拭えない。

冷たさを漂わせる石造りの壁面にも、それに違わぬ冷たい空気にも震えた様子を見せないミルヒシュトラークはヴァノッサの言葉に悪戯っぽくくりと笑う。

「今宵はファルガスタ皇城でもてなす。我が国の文化をその肌で感じてください」

「有難う存じます」

「この者達の案内を。部屋は冬宮に用意させてある」

そうしてもう一度深々と頭を下げると、慌てた様子で文官の一人が進み出る。それを合図に鎧浅葱が揺れもはや必要のない兜を預けたミルヒシュトラークとカタリナが退室した。

ちらりと首だけでこちらを振り返った紅紫の双眸と自分の蒼が絡み合う。

幾らかの敵対心と好奇心が入り交じったそれを受け止めながら、私は胸中で嘆息しながらも一つの決意を固めることにした。

ミルヒシュトラークの客室は冬宮、後宮にある。

一体いつの間に準備を整えたのかは分からないが、私が外に出ている時間は多分にあつたからその間に行われたのかもしれない。

いや、そんなことよりまだ妃となっていない女性を招くには常識外れもいい所だ。一体どういった見だろうか。

けれど確かにあの場所なら警備もし易いし、ヴァノツサが近づかなければあんなに安全な場所もないだろうということは分かっていたからそれに関しては文句を言わない。

ただ、その安全性はそこに魔女がいなければの話だ。

「……」

黙ったままぎゅっと結界解除の首飾りを握り締め、胸中で呟く。

もう一刻の猶予もない。

リズが提案したことを、すぐにでも使わせてもらわなければ。

「それで、これはどういうことだ？ レイアステイ」

その声が放たれたのは、冬宮の炎のある部屋だった。

ミルヒシュトラークセ達が進室してすぐさま冬宮へと戻り真紅のドレスを脱いだ私はそのままリズを連れ、ある準備を進めていたのだ。

……途中でヴァノツサが入ってくるとは思わなかったけれど、これしきのことば揺らぐような決意ではない。私はヴァノツサの渋い声に鞆を閉じながらにっこりと笑いかけ、実に丁寧な口調で答えてやる。

「見ての通り、荷造りをしているのですが？」

リズが膝を着いて臣下の礼を尽くすべきかどうか悩んでいる様子が視界の端に見えたから、首を振って制する。

無論彼が私の言うことを聞くはずはない。ただ、時間がないこと

は理解していたからこそ悩んでいたのだろう。

扉に手を掛け、そこに体重を掛けるようにもたれかかる紅蓮の立ち姿は返ってきた言葉に頭を抱えた。

「まずどこに行くつもりなのかを話すべきじゃないのか？　ここは「そついえばそつだ。」

「ああ、そうでした。リズ殿のお屋敷へ参ります。今日からそちらに住まわせて頂けることになりましたので」

「……は？」

ヴァノツサの問いは最もだと理解し、更に噛み砕いて答えると呆けたような声が返ってきた。これもまた珍しい反応だ。

疲労のせいかもしれないと本当に驚いているのか、常ならば鋭く細められるはずの瞳をぱちりと見開いた彼の反応に胸中で驚きを感じつつ、繰り返し告げる。勝手に事を起こすつもりだったのだから事情を説明する義理もないのだけれど、見られてしまった以上は作戦を変更しなくてはならない。

頬に人差し指を当て、何てことはないという風に小首を傾げてみせる。

「ですから、リズ殿のお屋敷です。トリスタン家と言つべきでしょうか？」

「何でそんな話になっている」

そんなの決まっている。

「貴方が首を縦に振らないからです、ヴァノツサ。私がトリスタン家に行くのが不満なら、別の住居を手配してください」

「だから何で貴女が冬宮を出ないといけないんだ！」

何なら皇城でも、と言いかけたがそれは止めた。それこそミルヒシュトラークが嫌がるだろうし、私だって嫌だ。

少々の嫌がらせならば甘んじて受けるが、何事もないならそれに越したことはないのだから。

何着かの衣服に魔導書、それに猫の餌を詰め込んだ鞆を手に持つとリズが覚悟を決めたようにごくりと唾を飲む音が聞こえてくるよ

うだった。主への忠誠心故に逆らう決心を固めるなんて、矛盾しているけれど間違った判断と笑う気にはなれない。

涼やかな空色の瞳を一瞥してから紅蓮の双眸を見返す。

室内を怒号で包んだヴァノッサに呆れ混じりの溜息を返してやった。

何で私が冬宮を出なくてはならないかだなんて、そんなの皇城にいる誰もが理解しているというのに。

「ミルヒシュトラーク様がいらっしゃるのでしょうか？ それなのに、同じ建物に魔女を居着かせる貴方の神経が信じられません」

「……当の本人である魔女が言う台詞か、それは」

「貴方が考えなしだから、私もつい口を挟みたくなるのです」

夜は宴が催され、それが終われば彼女達はこの冬宮に来てしまう。その前に何としても私はこの場所を出なくてはならなかった。

例えツヴァイ王家が魔女に対して悪い感情を抱いていないとしても、ファルガスタの人間はそうはいかないのだから。侍女や執事、多くの者達が彼女達の世話に冬宮を訪れる必要があるというのに魔女が怖くて来られなかったらどうするつもりだ。

それに、彼女は何れ皇妃となる女性だ。ならば尚更この部屋にはいられない。

「本来この部屋は皇妃が使うべき部屋です。そこに私がいるなど、居心地が悪いにも程があります。さあ、準備ができました。行きましようか、リズ殿」

「ああ。それでは陛下、失礼致します」

本当ならビーを連れて行きかけた所だけど、彼は魚でも求めていいのか戻ってきた時には部屋にいなかった。けれど猫ならばミルヒシュトラークも悪いようにはしないだろうと結論付け、差し当たって一番問題な自分を排除することにする。

にこやかに笑いかけてリズを促すと、後ろめたさと良心の呵責で心を押し潰されそうになっていた彼が毅然と顔を上げる。そうして私が持っていた鞆を引っ手繰るように奪って颯爽と部屋を出て行く

うとした。銀の鎧が甲高い音を立て彼の本気を伝えると、ヴァノツサが慌てたように声を上げる。

「ちよつと待て！ リズ！ お前どういふつもりだ！」

鎧を掴みかけない勢いのヴァノツサの声にぴたりと銀光が動きを止める。しかしリズは振り返って深々と礼をするものの、決して自分がしていることを曲げないと言うように硬い口調で告げた。

彼だつて必死なのだ。三百年前の過ちの再来が訪れないよう、自分達の主が堕ちていかないようにと。

そして私だつてある意味必死だつたからこそ、私達は珍しく共闘することが出来ている。

少々の人数の臣下では役に立たない、一人の騎士でも寵妃と噂される魔女でも、個々人ではこの強情な皇帝相手に齒が立たない。けれど私達二人でなら道は開けるはずだつた。

こちらには名門トリストアン家という大きな後ろ盾があるのだから。「ご安心ください。最果ての魔女殿は当家で責任を持って御世話させて頂きますので。近衛騎士ほどではありませんが、当家の家人もそれなりに剣を扱えます」

「だそうです。魔女一人分の生活費が浮いてよかつたですね、これでファルガスタの国庫も安泰です」

「……お前達、いつの間になんかに親しくなつたんだ」

貴方が私を手放さないのが悪いのです。

そう胸中で毒づいてからぱんと手を打ち鳴らし、やたらと明るい声を響かせる。こんな声今までに出したことがあつただろうかと自問自答してしまいそんな声に、ヴァノツサもリズも鼻白んだ様子を見せた……失礼な。

確かに私はそれほど明るい性格ではないけれど、そんな顔をされるほどでもない。

……そう思いたい。

「秘密です。さ、行きましよう。何なら私が寵妃ではないと皆に知らせるために、リズ殿と腕でも組んで差し上げましようか？」

希望的観測を心の中に押し込めて明るい声を出しつつ、すつと腕を伸ばす。それは紅蓮の立ち姿ではなく銀光に向けて真っ直ぐ伸ばされ、冷たい鎧の感触に触れた。

小さく息を呑む音が頭上から聞こえてくる。声にならない悲鳴を上げたリズがこちらを睨めつけるのが見えたが、それに意地の悪い笑みで返す。どの道後で悪態をつかれるのなら、今のうちに来ることをしておいた方が得策だと思ったからだ。

鎧に腕を絡めるとシヨールでは庇いきれなかった部分に素肌が触れてひやりとした冷たさを与えてくる。この寒いのこれ以上冷たい物に触れるなんて常ならば避けたい所だったけれど、ここまで来て文句を言っではいられなかった。

嫌悪感に耐えるためか何なのか、かちこちに固まったりリズの腕に更に体を押し付ける。

こうしていればより親密に見えるはずだ。

「行きましようか？」

「あ、ああ」

これなら大丈夫だと満足してリズを見上げると、彼は顔を逸らしたままで小さく頷く。怒声を放つのを我慢しているのか、罵詈雑言を胸中で渦巻かせているのか、何れにせよあまりいい感情ではないのだろうと結論づけて早々にこの場を退散することを決意した。

ヴァノツサもリズも私も、誰もがこれを演技だと知っている。

けれどその前提の上で成り立っているような状況でも、今この場でリズに地を出されては困るのだ。

そうでなくては、冬宮を出た後でぼろが出る。

「分かった」

低く、怒りを抑えた声が耳朶を打つ。

「分かったからとりあえず腕を離せ。リズ、お前もだ。荷物を置かせてその声に思考を中断してヴァノツサを見ると、彼は微かに顔を伏せて体重を掛けていた扉から離れる。そのまま私の眼前へと立ち、影となってよく見えない表情のままリズの腕から私の腕を引き剥が

した。

「分かったとはどういうことでしょう？」

ベリッと音を立てそうなほどに強く腕を引き剥がされ、そのまま手首を掴まれる。ごっごつとした手が震えているのは、やはり怒り故か。

…… 勿論怒られても仕方がないことではあるのだし、下手をすればこのまま牢へ連れて行かれたとしても文句は言えない。後宮に住まう女が皇帝を捨てて他の男と外に出ようとしているのだから、それぐらいのことは覚悟しなくてはならないだろう。女は女でも私は魔女だからそれが適用されるかは別として。

とはいえ今までも散々怒られるようなことはしてきているし、後悔など一切していないのだからと自分を慰めてヴァノツサに問い掛ける。すると即座に答えが返ってきた。

「貴女は冬宮に変わらず住まわせる。魔女が姫君に御執心だから危険だと伝えれば誰も文句は言わない。皇城から離れた場所に魔女を置いておいた方が皆も安心するだろうしな。代わりにツヴァイの姫には皇城にある部屋を用意させる。俺の執務室の隣だが皇城内で一、二を争う部屋だからこれも文句はないだろう」

「そんな、陛下」

「広さは申し分ないし、調度品は今から移動させても間に合う。傍に置くということの意味を、いい意味に捉えてもらえるといいんだがな」

ミルヒシュトラレーセを迎えた時と同じ、白地の礼服が揺れる。

炎が爆ぜる音と共に燃え上がるように見えた刺繍が酷く目に焼き付いた。

「満足したか」

「…… 満点とはいきませんが、まあ満足ということにしておきましようか」

手首を掴まれたまま上目遣いにそう答えてやると、ヴァノツサは観念したという風に深く息を漏らす。しかしすぐに表情を引き締め

ると、リズに向けて腕を振った。

「そういうわけだ。手当たり次第声を掛けて人を集め、急ぎ客室の準備を整える」

「はっ」

邪魔にならない位置に鞆が置かれ、リズが一礼してから足早に出て行く。きつと彼の心の中では助かったという一言のみが繰り返されているのだろうなと考えていると、ぐっと手首に力が込められ舌打ちが聞こえてきた。

「馬鹿な真似を」

「え？　っ」

怒りを多分に含んだ声に顔を上げると、眼前に紅蓮の瞳が見えた。溶けてしまいそうな熱さに身を引こうにも腰を抱かれてしまい、身動きすることすら叶わない。かといって顔を逸らすこともできなかった。

瞬きを忘れ、目が乾ききるまで縫い止められてしまう。

それほどの熱さを孕んだ紅蓮は今まで国の事以外で浮かべることのなかった強い怒りをも内包していて、私は今しがた放たれた毒に對して文句を言うことを忘れて彼の名を呼んでいた。

「ヴァノツサ？」

返ってきたのは静謐な声だった。

「俺が何を言っても、貴女は戯れだと言ったな」

「言いましたけど、でもそれは」

「俺の目を見る」

ただひたすらに真っ直ぐで、そのくせ静かすぎる声にびくりと身を震わせ言われるがままにヴァノツサの目を見る。至近距離で見つめる双眸に映る銀髪に、自分の顔。それはどこか憔悴しているように見えた。

私は、一体何に憔悴しているのだろうか。

「俺の目は、熱を孕んでいるか？」

「……ええ」

ヴァノツサの瞳が熱を孕んでいるからだろうか？
その瞳が真剣だと私に伝えているからだろうか？

「何故熱を孕んでいるか分かるか？」

「怒っているからでしょう？」

それとも怒りに耐えきれないからだろうか？

否、きつとどれもが正しくて間違いだ。

「そっだ」

思考するせいで茫洋と答えを返すと、ヴァノツサが大きく頷く。

さらりと流れた紅蓮の髪と暖炉の炎が同じ色に見えた。

腰に添えられた手が力を帯び、ゆっくりと抱き寄せられる。そうしてぴつたりと密着した体勢からヴァノツサの声が降ってきた。

「そしてこの怒りこそが、俺の想いだ」

「……意味が分かりません」

けれどその言葉の真意を押し量るには脳内の警鐘が強すぎて、答えることができない。

だから私はきっぱりと答えてやり、急いでこの状況を打破しなくてはと考えを巡らせる。

逃げ道を探している時点で、私はもう答えを知っているのだと相手に教えているようなものだというのに。

紅蓮の瞳に映る自分の顔が更に疲れを露にする。いくら体調が悪くとも自分自身に言いたくなるような顔はしかし体調不良のせいなんかじゃ決してないと分かっていたから、笑うことができなかった。

警鐘が強くなる。

このままではいけないと大きな声で叫んでいる。

心に突き刺さる遠い日の傷が今更ながらに血を流し始め、じわじわと全身を侵食していく。

甘さとは違う痺れに、目尻に涙が浮かびそうになった。

けれどヴァノツサはそんな私の顔を見ても声色を変えずに真っ直ぐな声で言い放つ。そうすることで広がる痛みのことなんて、まる

で意に介さず。

「他の男に貴女が自ら触れている。それを見て感じた怒りが嫉妬でないのなら、貴女は俺のこの気持ちに何て名前を付けるんだ」

全ては演技だ。それをヴァノツサも知っている。

それでもこれが演技だからと笑えなかったヴァノツサの怒りがこの言葉に繋がったことに、私は自分の浅はかさを恥じた。

けれど、それなら一体どうすればよかったのだろう。

素直に従ったら喜ばれる、反抗したら想いをぶつけられる。離れようとしたら強引に繋ぎ止められる。

逃げ道なんてどこにもないのではないか。そんな風に思えてしまい私は困惑にくらりと体が脱力するのを感じた。

「……すまない」

泣きそうな私の顔に溜飲を下げたヴァノツサがようやく身を離す。けれど言うことは全て言ったのである。彼の表情は晴れず、紅蓮の瞳は怒りではなく困惑と悲しみに揺れていた。

さらりと衣擦れの音がしてヴァノツサが踵を返す。かつんと石畳を踏みしめる音に混ざって別の言葉が耳朵を打った。

「今宵はなるべく早く戻る」

「そう、ですか」

「ああ」

一歩踏み出す音を見送ることもせず顔を伏せていると、最後に小さな呟きが聞こえてきた。

聞こえても聞こえなくてもいい、その程度の声に目を丸くする。

「居心地の悪い想いをさせたことは謝る。だが貴女が禁色を纏った日に星姫が現れたのは、俺にとっては良い誤算だったことは伝えておく」

良い誤算？

何をとんでもないことを。

「貴方という人は……っ」

禁色を纏った自分に非がないとは言い切れない。けれど良い誤算

だなんてことは口が裂けても言えなかった。

こんなことなら三百年前から高貴な人間に抗う反抗心を育てておけばよかったと胸中で毒づきつつ、苛立ちをそのままに声を荒げるとヴァノッサが振り返らずに答える。

「今は顔を見せないでおく。そうすれば、本気が嘘か告げずに済むだろうからな」

振り返らないのは表情を見せないためだろう。ひらりと揺れたケープに施された紅色の刺繍はどこか弱々しく見え、あの場所が焔心なのではないかと錯覚する。そもそもヴァノッサは炎ではなく人間なのだから、焔心などないはずなのに……本当にどうかしている。消えていく背に向けて、私は何も言わずにずるずると腰を下ろす。ひんやりとした床にへたり込むとどつとやって来た疲労感に意識を持って行かれそうになった。

目を閉じ、耳鳴りがしそうな静寂に身を浸す。すると頭の中で誰かがそう囁いたのが聞こえてきた。

本当は一つだけ簡単な方法があるのに。

けれどそれはあまりに簡単すぎて、だからこそ実行しづらいものだった。

響く声が更に言葉を紡ぐ。

私がファルガスタを出奔すれば全ては丸く収まるのに。

そう、いつまでもファルガスタに囚われずに別の場所に行けばきっとこんな警鐘は二度と鳴り響いたりはしない。

けれどそれには私はぬるま湯に浸かりすぎていて、上手く足を踏み出すことができずにいた。

火が爆ぜる音に瞼をこじ開ける。ゆるゆると伝わる温かさに眠気が増長した。

一人きりになった部屋で過ごす時間はとても穏やかで、夜の静けさの中でヴァノッサやビーと共に過ごす時間はとても温かくて。

色々理由を付けて居座ったこの月日は短くともどこか満ち足りていて、だからこそ動くことができなかった。

いつでも切り捨てられるはずの国や人間が一人の人間によって重みを増す。そうして踏み出せるはずの一步に足枷を嵌められていく。私はその重さに気付くこともなければ気付くこともしなかった……情けないことに。

けれど、その足枷を外さなくてはならないことだけは知っていた。

このままではいけない。

自分の考えが全て杞憂に終わってくれれば、自意識過剰な考えで終わってくれればそれはそれでいい。

ただもしいち中していた時の事も考えておかなければならなかったから、このままではいられないという気持ちに変わりなどなかった。「ビリオン様は、私にこのための時間をくださったのかしら……」

呟きに呼応するように炎が大きく爆ぜる。それを視界の端に留めながら嘆息した。

『君はきつと私と共に来るよ』

あの人の言葉は、こうなることを予見してのものだったのだろうか。

「……………」

黙ったまま翡翠の首飾りを握り締める。

ガラナや、何よりあの人自身の言葉が正しければきつとあの人はもうすぐ私の目の前に現れる。その時にこれは必要不可欠な物のように思えたから。

不意に冬宮が騒がしくなった。

リズが人を集めたのかも知れない。そう考え、私は立ち上がって邪魔にならないよう眠りに就くことにした。

結界解除の首飾りを遠ざけ、誰も私に触れることができないように念入りに結界を張る。

そうしてベッドの上に身を横たえてから目を閉じた。

どうせどこにも逃げられないのなら、夢の中へぐらい逃げ込んで罰は当たらないはずだ。

だから今は何も考えずに眠らせて。

我ながら切実な声が胸中で木霊する。それを実感しながらすすくと深呼吸すると、存外早く世界が暗転した。

第三十一話 蒼の宝玉

清々しいまでに真つ直ぐな宣戦布告と紅紫の瞳が脳裏を過ぎる。それは茫洋と輪郭を持たずゆらゆらとたゆたうように思考の波を漂い、一つの考えを与えてくれた。

もう、三百年前のようなことがあつてはならない。

私はもう、氷の魔女になんかなりたくない。

「おい、起きろ」

「ん……」

気怠さを助長するようにゆさゆさと肩を揺さぶられる。

冷たく硬質なそれが肩に触れるのを感じしながら声を漏らすと、頭上高くからこちらを見下ろしているであろう存在がちつと舌打ちを漏らした。

恐らく寝起きの悪い魔女に対して罵詈雑言でも与えたかったのだろう。

その程度の事を今更口にされた所で目を覚ます気などないのだけれど。

うつすらと瞼を開ける。するとテラスから差し込む薄い陽光が視界を焼くように眩しく入り込んだ。とはいえそれはまだ朝と言うには早い時間のそれで、思わず夢と現実の狭間で溜息を漏らす。

「……こんな朝早くから何事ですか、リズ殿」

精一杯の面倒くささと反抗心から毛布を頭までかけ直しつつ呟く。そうして全身を包む温さに再び目を閉じると勢いよく毛布を剥がされてしまった。

「ツヴァイの姫が出立される。その前に陛下に謁見されるそうだから、貴様も玉座の間に来いと仰せだ」

「まだ書物を探せてないんですが」

「そちらは俺が先にしておく。とにかくさっさと起きろ。いい年して寝起きが悪いとはみっともないな貴様は」

ゆるく開いた視界に入り込む銀が眩しい。思わず手の平で日差を作つてその方向を睨みつけると、その騒ぎに目を覚ましたのか枕元の灰猫が身動きした。うるさいと言わんばかりの動作は私の心情をも表している。

勿論、その程度で彼が動じるわけがないのだけれど。

「いい年して朝っぱらから喧嘩を売る人に言われたくありません。

……いえ、貴方はまだまだ子供でしたね」

「黙れ年増」

……年増？

言われたことのない言葉は新鮮ではあったが、言われた相手が相手なだけにぴくりと頬が引き攣るのを止められない。

確かにこの国の全ての人間は魔女である私より年若なことは否めないし、彼等の父母や祖父母とてこの年齢には敵わないだろう。しかしそれを年増という言葉で片付けるのはどうかと思う。

上半身を起こし、乱れた髪を背中に流しながらぐるりと指先を回す。

「ビー、危ないから今だけ起きて下がって。そうしたら寝てもいいから」

「れ、レイア！ もしかしてまた攻撃スペル使う気？」

「売られた喧嘩は買わなければね。そうでしょう？ 骨折ぐらいは覚悟してくださいね、リス殿」

起きてという言葉に目を覚ましたのか、それとも別の危機感で目を覚ましたのか。

とにもかくにもビーがそんな慌てた声を出すものだから、努めて明るい声で返してやる。

そうしてビーを安堵させようとしたものの逆効果だったらしく、ビーは私の膝の上に乗って前肢でぐるりと回される指先を押さえつ

ける。ただ手持ち無沙汰に見えるだけの指先から魔力が練られていくことを感知したのかもしれない。彼に与えた魔力が私の力を嫌になるほど感じさせるはずだから。

「何だ、貴様でも年増と言われれば怒るのか」

「……レディに言うような科白じゃないよね」

さすがに北の孤島に置いてきた屋敷の門番を召喚するわけにはいかないとはいえ、少々の傷ぐらい負わせても罰は当たらないのではないか。そんな剣呑なことを考えているとリスの声が耳朵を打ち、私はビーが溜息をつく中で挑むような笑みを浮かべてやる。

口の端が普段とは違う形に歪む。それを見て何を感じたのかリスが目丸くした。

「別に長生きしている事に関してはどうとも思いませんが、リス殿に言われると腹が立ちます。そんなに歳を取っているように見えませんか？」

薄氷に近い青が今度は細められる。

こちらを凝視するように注意深く向けられた視線を受け止めてみると率直な言葉が返ってきた。

「中身はな。外見は十代の小娘と大差ないだろう。……そんなに若作りがしたいのか？」

「好きで歳を食わないわけではありません」

「魔術を施しているわけじゃないのか？」

誰が好きでこのようなことをすると思っっているのだろうか。

もしかしたら無意識化で何かを行っているのかもしれないけれど、少なくとも意識して何をしているわけじゃない。

魔女や魔導士という存在については当人である自分にもよく分からないが、三百年前に得た知識から長寿の種族であることは理解している。恐らく外見年齢が変わらないのもそれが理由だろう。ただ、それを手放して喜ぶ気にはなれない。

「当たり前でしょう。成長し、老いへと向かうことが生物としての自然な在り方です。その理を曲げる理由などありません」

私もいつかは年老いることができるのかもしれない。

文献がない以上これから先魔女がどのように成長するのは分からないけれど、そうならなければそれは魔女という存在が異質であるということを示している。

この世に生きる全ての者は生を受け老いて死ぬ。それは誰もが避け得ぬ道であり、この世の理なのだから。

……唯一つ、不死掛けを行わない限りは。

「何もしなくても三百年前とちつとも変わらないもんね、レイアは」
「世の中の女が知ったら、貴様の血か肉でも欲しがりそうだな」

灰猫の前肢がやんわりと指先を下ろさせる。そのせいで手持ち無沙汰になったからと柔らかな肉球をつつくと揶揄するような声が耳朵を打った。低く楽しげな声に、顔を見返すこともなく答えてやる。肉か血を食べたところで何がどう変わるとも思えないけれど、もしそんな邪な考えを持つ者が現れたらきつと。

「そんなことを企もうものなら、私は今まで以上に籠の鳥になってしまうでしょうね」

もしそうなれば、ヴァノツサは愚帝と言われるでしょうね。

くすりと笑って揶揄し返せば、リズがぐつと押し黙ってこちらを半眼で睨めつける。

元はと言えばそちらが売った喧嘩だというのに大人気ない。……
大人気のなさを言うのは今更だと言われればそれまでだけれど。

すっかり眠気の消えた頭をふるふると軽く振る。そうして完全に覚醒した頭で仕方無しに話を変えた。

これ以上の戯れは血を呼んでしまう。他でもない私達ならば尚更。
「十代の娘と言えば、ツヴァイの星姫様も随分お若い方のようにですね」

気持ちがいいのか大きく尻尾を振る灰猫の背を撫でる。

そうして髪を梳くこともしないままに尋ねるとリズは棚に置かれた櫛を取ってこちらに投げて寄越した。さっさと準備をしるということだろう。

「ああ、確か十九になられたばかりのはずだ」

「そうですか。貴方が言う通りの女性で驚きました」

「美姫だという話か？」

「ええ。彼女に見惚れなかったのなんてヴァノツサぐらいでは？」

手の中に収まった櫛を使うと寝相が悪かったのか髪が絡まっていた少し痛みを感じる。引つ張りすぎないように丁寧に絡まりを解きながら答え、よく考えたら寝起きをリズに見られたのは何度目だろうかと数えていると彼がにやりと笑うのが見えた。

吊り上がった口の端から漏れるのはやはり揶揄するような声だ。

いや、これはむしろ勝ち誇った声と言っても過言ではない。……

別にリズが私に勝つようなことをしたわけではないというのに。

「何だ、負け惜しみか？ 陛下が見惚れるわけがないと」

「何を言っているのです。大国の王族と謁見するのに見惚れている場合ではないでしょう。一時は国が貶められていると勘違いをしていたようですから」

触れれば斬れるのではないかというほどにあの場の空気は研ぎ澄まされていたことにリズは気付いていなかったのだろうか。そう考え小馬鹿にするように返した私につまりまらなさそうな顔を向けてから視線を逸らした所からして、一応理解はしているらしいが。

「確かに噂に違わぬ美しさだったな」

膝の上からビーをどかせ立ち上がるとひんやりとした床が素足に触れる。冷たさに目を細め靴を探し、何とか足が冷えることを回避しようとする私の耳朶を打ったのはやはりつまりまらなさそうな淡々とした声だった。

「ええ。貴方も玉座の間へ行くのでしょうか？ せいぜい見惚れてなさい」

「俺は別に見惚れてなど」

見惚れてなどいない、と言いたいのかしら。

それ自体は別におかしなことではないけれど、リズが言うには不思議な話だ。

「へえ、あれほど星姫のことを持ち上げてたくせに」

胸中での疑問をビーが口にする。その言葉に対し同調するように頷いて見せるとリズが苦々しく顔を歪めた。

「噂を述べたまでだ。確かに噂は間違っていないが、見惚れるほどではない。大体、騎士がそのようなことにうつつを抜かしてどうする」

確かにそれはそうかもしれない。騎士である以上皇帝たるヴァノツサ以上に周囲に気を配らねばならないというのに、あの場にいた殆どの者はそれが出来ていなかったように思われる。情けない話と言えばそれまでだが、裏を返せばそれだけミルヒシュトラークが美しかったということだ。

「正論ですが、その正論を打ち破る美しさがあるということでしょう？」

「そうかもしれないが……」

だというのにリズは彼女は見惚れていなかった。あの場で私を睨みつけるだけのことをしてのけたのだから、その言葉が嘘でも何でもないことぐらいは理解出来る。あれだけ美姫だと持ち上げていたにも関わらず、だ。

皇帝を護る騎士として、その冷静さは褒めてもいいかもしれない。ただ、一人の男性として褒めるべきかは分からなかった。もしかして彼は美的感覚が人とは違うのではないかと不安になってしまったから。けれど美しいことは分かっているのだ。それならば問題はない、と思いたかった。

いや、それ以前にどうして私はこんなことを案じているのだろうか。

婚儀がどうのと悩むのはヴァノツサー一人で十分だというのに。

「何だ、じろじろと人を見て」

「いえ。それより、何か言いかけていませんでしたか？」

巡る思考についていけず自分で自分を諫めている間にリズを凝視してしまっていたようだ。リズの瞳が胡乱気に細められるのを見て首を振って返すと、彼は何かを思い出したように渋い顔を浮かべた。

顰められた眉が眉間に深い皺を刻み、つまらなさそうと言うよりは忌々しそうに唇が歪められる。

もしかしたら魔女に見つめられて嫌悪でも感じたのかもしれないと考えるものそんなことは今更だし、どちらかと言えばリズの態度は自己嫌悪しているようにも見えたからすぐに胸中での疑問を打ち消す。そうして黙ったまま答えを待っている、十秒にも満たない沈黙を裂くように鋭い声が放たれた。

「何でもない。それよりさっさと支度をしろ。今日は黒を用意しているから案ずるなと陛下から承っている」

銀の鎧が背を向き、この前と同じ衣装棚から今度は漆黒のドレスを取り出す。まるで侍従のような態度に目を白黒させていると彼はドレスをベッドに置いてすぐに扉の外に出て行ってしまった。

やはり不満そうな横顔が扉の外に消えると同時にビーが首を傾げた。

「何だったんだろ」

「さあ……」

女心は秋の空という言葉があるけれど、男の方が余程移り気なのではないか。

リズの態度を見ていて思わずそう感じつつビーの問いに答える。

男だから女だからというよりも、リズという人間の感情が変わりやすいという可能性は考えないことにした。

ただ一つだけ理解出来ることは、彼が浮かべた不満がこちらに対するものではないということだ。

だから私は特段気にすることもないと結論づけ、凝り固まった体を静かに伸ばした。

血が全身を流れて行く心地よさに目を閉じる。

「行くの？」

「ええ。呼ばれている以上行くしかないわ」

すると今度はビーが不満そうな声を出したから若干面倒くさそうに言葉を返した。面倒なのはビーの問いに答えることではなく、玉

座の間に行くことなただけねど。

ベッドに載せられたドレスを一瞥する。それは先日とは打って変わってふんわりとした型で作られていた。陽光にきらりと光るのは宝石ではないものの、何か特殊な細工が施されていることが見て取れる。レースで作られた幾重もの段は少しでも動こうものなら大きく舞ってしまうだろう。それは私よりも遙かにミルヒシュトラークに似合う型に見えた。

相変わらず人に似合わないドレスばかりを贈ってくる。

溜息混じりにドレスに手を伸ばす。ベルベットとは違うよく見れば縦に細かい線が入っているそれは私が見たことのない素材で、とても暖かそうに見えた。見た目に反して若干固めの触感を確認し、深く息を吐きつつ着ている服を脱ぎ捨てる。

黒を贈ってきたことだけはヴァノッサを評価してやってもいいと偉そうに考えながら。

玉座の間は昨日よりも豪華に飾りつけられていた。

「何ですか、これは」

行き来する臣下達の間をすり抜けて玉座の前へと進み出ると紅蓮の瞳が細められ、小さな吐息が聞こえてきた。

「ツヴァイ王家の姫を迎えるのならばもう少しここを整えた方がいいと言われてな」

「付け焼刃の豪華さになどあの方は興味を持たないでしょう。第一あの方は使者という名目でファルガスタに来ているのでは？」

「ああ。だが我俣を通してある間に勝手に準備されていたのだから仕方がないだろう」

我俣というのはミルヒシュトラークの寝室を移動させたことだろうか。

じろりとこちらを見据える視線にそう胸中で呟いていると綺羅び

やかな漆黒の絨毯が運び込まれてきた。派手にしたいのなら色合いから変えるべきだと思いが、勝手に事を進めている時点で臣下としては冷や汗が出そうなるほどに緊張することなのかもしれないと思うとさほど気にはならなかった。これ以上色まで変えたらヴァノッサに止められてしまう。

ヴァノッサが座す椅子の肘掛に手の平程の大きさの宝玉が埋め込まれているのに目を留め、その色に目を見開く。

「良い物だろう?」

「ええ……宝石の善し悪しは私には分かりませんが、良い品だとは思いますが」

深い、海のような蒼がそこには在った。

それは漆黒で彩られ、紅蓮を持つ人間が座す場所に埋まるにはあまりに浮いた色で、私は浅い息を吐き出すようにしながら言葉を選んで紡ぐ。

確かに良い品なのだろう。素人である私にも分かるほどそれは美しく、印象的な色合いだったから。

けれど何故今その色を玉座に埋め込んだのかが分からない。

「貴女には黒を贈った。だからせめてこれは我慢してくれ」

「昨日の事は貴方が無知だったと許すことが出来ます。ですが、どうして全てを知った今日この日にその色を使ったのですか」

肩を竦め傍に寄るよう手招きをするヴァノッサに数歩近付く。昨日着たベルベットよりも幾分か重みを感じるドレスを揺らして前に進むと、ヴァノッサがやれやれと言う風に首を振った。

刹那、細められた紅蓮がひとところに向けられる。

「貴女も存外鈍いな。……全てを知ったからこそ、と考える気はなかったのか?」

誰がそのような事を考えるのだろうか。

「馬鹿な事を」

私が寵姫であるということ嫌々ながらに信じているであろう臣下達に聞こえないよう、極力小さな声で呟く。そうして呆れた目で

遠くに立つリズを振り向けば、彼は薄い空色の瞳を怪訝そうな色に染めた。恐らく彼には宝玉が見えていないのだろう。ならば、そのまま知らずにいてもらいたい所だ。

前を向き、真っ直ぐにこちらを見据える瞳と対峙する。高い熱を孕むそれを小馬鹿にするように睨めつけるもそれは苦笑で返され、それ以上の反論を許しはしない。これで堂々とした反論の言葉が返ってくればこちらとしても反抗しやすいというものを。

「陛下。ミルヒシュトラーク様が御見えです」

「通せ。レイアステイ、貴女はこちらへ」

苦々しい感情を閉じ込めてしばしの間お互いを見つめていると、若干気まずそうな声で臣下が告げる。それに対し手招きする手の動きが強くなるのを見て取ってヴァノツサの横に並んだ。勿論、反抗心として昨日より一歩分離れた場所に立つことは忘れないが。

ちらりとこちらを見上げるヴァノツサは自分が立って玉座を動かすという手に出られないことを理解しているのか、困ったように溜息を漏らす。……それではまるで私が彼を困らせているようではないかと考えるものの、否定はできないので甘んじて受ける事にした。実際困っているのは私だが、同時に彼を困らせていることを認めないほど幼い思考を持った覚えはない。

「俺は星姫より貴女の方が大事だと言ったはずだ」

「それを対外的に証明する必要性を感じません。どうするのですか、そんな所に埋め込んで。外すのだって難儀でしょう」

だからこそ私はヴァノツサが小さくぼやくのに対して冷静に返すことができたし、嫌味を言っただけのけることができた。拗ねて答えを返すことを放棄するような子供とは違うのだ、私は。

意地の悪い想いに捉われている事が幼さの定義だというのなら、私も存外幼いと言えるけれど。

使者をもてなす為に宴を開いたり部屋を移動させたりと忙しかつたせいか、幾分か目元に疲労感を漂わせるヴァノツサの横顔を見下ろすと無理矢理に笑みを刻まれた。

「外すつもりなどない。……大体、星姫が貴女を挑発しなければこんなことはしなかった」

臣下の前で身を案じることを言うなとその笑顔に言われている気がして、私はヴァノツサの肩に手を置いて心の中でのみスペルを唱えた。じわりと手の平に熱が生まれ、それがヴァノツサへと流れ込んで行く。

光を生めば誰かに勘付かれる可能性がある。だからなるべく静かに緩慢に練り上げた魔力を使っていく。

「……これは」

「静かに」

自身の身に起きていることを察知したのだろう。驚愕を含んだ咳きが耳朶を打ち、ヴァノツサが手の平をゆっくりと開閉しているのが見えた。

顔色も疲労感も遠のいた表情が困惑と疑問を含んでこちらに向けられる。彼にしては間が抜けた表情に思わず口元を緩め、彼が望むように不要な言葉は排除した端的な言葉で告げる。

「私は魔女ですから」

それが答えにならない答えだと理解はしている。それでも、大丈夫ですか？ という言葉や調子は良くなりましたか？ という言葉が使えない以上このぐらいの言葉しか言えなくても許されると考え、ヴァノツサが纏う厚手の生地をそっと撫でる。

広い肩は自分のそれよりずっと硬く、凝り固まっているように感じられる。血の巡りが悪いから顔色が悪いのだと理解はできるが、疲労を取り除くスペルは知っていても血の巡りを良くするようなスペルなど知らないからそのままにしておく。後で指摘をすれば誰かが彼の肩を揉むだろう。

肩に触れる手の平に、ふと熱を感じる。

何事かと思つてそちらを見下ろせば、紅蓮の視線が突き刺さっているのが感じられた。そしてその視線の持ち主が実に嬉しそうに顔を綻ばせていることも。

「来ますよ」

「甘やかとも艶やかとも言えないその笑みはどこまでも幸福そうで、私は彼がこのままずっとこんな表情を浮かべていてくれたらいいと感じつつも結局は手を離す。そうして彼の気を引き締めるように言い放つと、幸福そうな顔がすぐに皇帝としての表情へと変わり前方の扉へと向けられた。」

「あまりの変わり身の早さはしかしヴァノツサの表情を惜しむ時間を失ったという点では効果的とも言える。」

「初代炎帝と比べればずっと硬質な顔立ちが不敵な笑みを刻んでいく。それはこれから現れる使者に向けて放たれたもののだと気付いた時には、重厚な扉はもう開いていた。」

「昨日と同じ鎧浅葱の騎士服を纏う女性が二人、静かにこちらに向かって歩く。そうしておおよそ表情というものを感ぜさせない亜麻色の髪の女性、カタリナが深々と一礼するのに合わせ、ミルヒシュトラレーセがちょこんと頭を下げた。」

「おはようございます、炎帝陛下」

「少しはくつろいで頂けたか？ ツヴァイの星姫殿」

「ええ。ツヴァイよりも物資が豊かに行き来していることに驚きましたわ。遠く離れていなければ、もっと交流を持つことが出来ましように」

「ドレスの裾をつまむような仕草で下げた頭からさらりと金糸が零れ落ちる。自分のようにぞんざいに扱っているわけではない、丁寧な光を放つそれに騎士や臣下がほうと感嘆の息を漏らした。しかしやはりヴァノツサはそんな女性を目の当たりにしても不敵な笑みを崩さない。玉座から立つことももっと近くにと言うこともなく、ただじつとミルヒシュトラレーセを見つめる紅蓮は何かを待っているようにも見える。」

「そしてそれは間違いでも勘違いでもなかったらしい。」

「あら？」

「ふと、何かに気付いた様子のミルヒシュトラレーセが声を漏らす。」

鈴の鳴るような澄んだ声は、紅紫の視線と共にこちらに向けられた。
……私に何か用でもあるのだろうか。

「それはツヴァイの」
カタリナから扇を受け取り、ぱっと開いたそれで顔の半分を覆い隠す。

けれどいくら顔を隠そうとも彼女が驚きを感じていることは否応なしに伝わった。

「ああ、先日ツヴァイの商家から取り寄せた衣を使わせた。さすが織物産業が盛んな国だな。良い物に仕上がった」

まあ、と嬉しそうな声上がる。

扇の奥に隠れている顔が綻んでいるのだとその声を聞いたただけで理解出来た。

そして何故彼女がこちらを見ていたのかも。

ベルベットよりも寒さを防ぐ素材を使用しているおかげで毛皮のコートを羽織る必要性を感じないドレスは、恐らくツヴァイで作られた生地を使用しているのだろう。道理で見たことがない素材だと得心して生地を撫でてみればざらりとした重たさを感じることができた。

幾重にも折り重なり重たさを感じさせない型で作られたそれが自分に似合うかはともかくとして、良い品であることは否定できない。そう思い口の端を吊り上げて笑ってみせると、ミルヒシュトラークも同じように笑みを返した。たおやかな淑女のそれは、自分には出せない気品に満ちている。

「それは光栄ですわ。華月の魔法のドレスに形を変えたと聞けば、兄王も喜びましょう」

「白銀の魔法ではないのか？」

「そのようなことは些事ではありません。ツヴァイ王家が敬愛する魔法という存在が纏うことに意味があるのです」

そういうものだろうか。きょとんと目を丸くしたいのを我慢してヴァノツサをちらりと盗み見ると、彼も似たようなことを考えてい

そんな意外そうな顔を浮かべていた。慇懃無礼であり自己中心的に己を見せる彼にしては珍しく素直な表情とも言えるそれから目を逸らすと、一度大きく動いた扇がミルヒシュトラークの口元だけではなく目から下という大部分を覆い隠した。

ただ、それだけでも十分だったのかもしれない。

彼女が顔も隠さずにその場に立っていれば、付け焼刃とはいえ豪奢に飾られた玉座の間ですら意味を成さなくなりそうだったからだ。花月を思わせる華やかさはそれだけの力を持っている。

見惚れる様にミルヒシュトラークを見てみると彼女の瞳がずっと細められ、含みのある言葉が紡がれた。

「とはいえ、兄王の御気持ちとわたくしの決意が必ずしも一致するわけではありません」

「というと？」

ツヴァイ王と気持ちが一致しないというのはどうということだろうか。

ヴァノツサと二人頭に疑問符を浮かべていると臣下達が驚きをどよめきに変えた。

けれど本当に動揺に弱い国民だと胸中で呆れ返る前にミルヒシュトラークの言葉が耳朶を打つ。どよめきを貫く声はどこか甘く拗ねた響きを持っていて、瞬時に部屋の温度が増した。

「勿論わたくしもツヴァイ王家の姫として兄王と同じ喜びを感じております。けれど正直申し上げますと、少し悔しくもありますの。我が国で作られた衣を、よりによって寵を競う魔女が纏っているんですもの」

臣下や騎士達は、今の言葉でさぞや大きな期待を抱いたことだろう。

星姫ミルヒシュトラークが、魔女に堕ちた皇帝を必ず救い出してくれると。

ただ、こちらは呆れることしかできなかった。

寵など元よりこの手にはないというのに、どうせ誰も彼も敵対心

を抱いてこちらを見るのだろうか。

……いや、そもそもいつになったら私は寵を得てなどいないと口にできるのか。それさえ口にしてなおかつヴァノッサが領けば全てが丸く収まるはずなのに、彼はあえてそれをしようとはしない。

それどころか。

「織物も良いが、ツヴァイは鉱石も良い物が採れると聞いている」

「はい、確かに我がツヴァイの鉱山からは良質な鉱石が採れますわ。ですが、それが何か？」

唐突にヴァノッサが話を変える。

それに対しミルヒシュトラークが小首を傾げる姿を見て、思わず最大級の攻撃スペルを唱えかけて慌てて止めた。ここで皇帝を傷つけるわけにはいかないと理性が歯止めを掛けたのだ。けれど、ヴァノッサに言葉を続けさせてはいけないということも理解していたから慌ててヴァノッサの肩に手を置くと彼がにやりと口の端を吊り上げたのが見えた。

嫣然と笑んだ姿に、背中を戦慄が駆け抜ける。わざとやっているのだと言う確信を嫌でも得てしまった。

何て止めればいいのかと口を開閉させ、何とかヴァノッサの名を呼ぼうとするがしかしそれは彼の声の上塗りされてしまい誰の耳にも届かない。そう、唯一人ヴァノッサを除いて。けれど彼はそんな私の声をなかつたものにして玉座の肘掛をぼんと叩いた。白地の礼服が衣擦れの音を立て、対照的な黒にはまる蒼を指差す。

「先日取り寄せたのは彼女が纏うドレスに使った織物とこの宝玉だ。本当に良い品を扱っているな、ツヴァイの商家は」

ぴくりとミルヒシュトラークの視線が固まる。

まじまじと凝視する紅紫の視線は宝玉を捉えており、そしてその傍に立つ魔女の瞳が蒼であることを知ったのだろう。遠目からでは目を凝らさないと見えないほどの動きで扇が震えたのがその証拠だった。

背筋を伸ばし、無理矢理に真っ直ぐ放たれる高い声が凜と響き渡

る。

「有難う存じます。……後程商家の名を教えてくださいませ。我がツヴァイ王家からも感謝の意を伝えたいのです」

「そのぐらいならば喜んで。懇意にしてやれ、あれだけの品を扱う商家はそうあるものではない」

「勿論ですわ」

ほとんどの者達はミルヒシュトラーセの背中や横顔ばかりが見えていることだろう。だからきつと彼女の様子がおかしいことに気付きはしない。

けれど真正面から彼女の声を受け止めているヴァノツサと私には、彼女が自尊心を打ち砕こうとする私という魔女に対し憤怒の感情を抱いていることが痛いほどに伝わってしまう。ただ救いなのは、彼女が魔女という存在だからこそ私に負の感情を抱くのではなく寵姫だからという理由で敵意を剥き出しにすることだった。そして、私一人に対して怒りを覚えるわけではないということも。

何段もの薄い段で作り上げられたドレスの裾を口元に持つて行き、ミルヒシュトラーセ同様口元を隠す。そうしてヴァノツサがしたことに対し憂いを感じて歪む表情を押し隠した私は彼女に嘲笑を向けているのだと思わせようと無理矢理口の端を吊り上げ、射抜くような視線が向けられるのを感じて顔を上げた。

頬に突き刺さるその視線は遠く、扉の傍から向けられたものだった。彼は鎧が放つ銀光の上に乗る二つの空色の瞳でひたとこちらを見据えている。ただ、問い掛けるような色だけを載せて。

「……」

彼は、リズはきつと私が嘲笑など向けようとしていないことを見抜いている。

だからといって今ここで答えを返す気にはなれなかつたしそもそも返せるだけの距離もないと考え、黙り込んだまま視線を逸らす。

そうして扇を閉じ、唇を真一文字に引き結んだミルヒシュトラーセが皇妃様に良く似た面差しでこちらを睨みつけるのを受け止めた。

純度の高い憤怒はしかし理性によって押さえつけられ、放たれる声はやはりたおやかだった。

「わたくしはこれよりツヴァイへ戻ります。ですがすぐにまたファルガスタの地を踏むことになることを御忘れなく」

傍に控えるカタリナが主に合わせるように視線をこちらへと向ける。感情の抜け落ちた亜麻色の瞳が、何も無いからこそその鮮烈な印象を焼き付けて逸らされた。

魔女を敬愛するでも嫌悪するでも、主と寵を競う中だからと敵対心を抱くでもない。

本当に何も無い視線は、生きていいのかどうかさえ怪しいものだ。生きていいのかどうかさえ、その言葉にぞくりと体に寒気が走る。生きていたとは言えない存在を私はこの世界で二つも知っているのだから。

とはいえそれを面に出すこともできない。そう思い敵意を含むミルヒシュトラールに向けてくすりと笑みを零してみせた。

本人がどう思っているかと、今はまだ私は寵姫なのだから。

「そう。……道中御気をつけて。ツヴァイ王家の姫が狙われることなどこの時世にはないことでしょうけど、絶対とは言えませんから」「あら、では貴方がわたくしの護衛でもなさったら？ その方が兄王も喜びましょう」

「悪いが魔女殿を外に出そうとするのは遠慮してもらえないか。彼女がいけない夜など、俺には耐えられないからな」

どの口がそのような戯言を。大体冬宮で夜を過ごすことの方が少ないでしょうに。

いい加減こちらも苛立ちが強くなるのを止められず、これが終わったらどれだけの嫌味を浴びせてやろうかと考えていると忌々しうに目を細めたミルヒシュトラールが呟きを放つのが聞こえてきた。「……随分な溺愛ぶりですこと」

「モーリス大陸中に噂が響くぐらいだ。これでもまだ足りぬ」

心底苛立っている。それが伝わる声色にヴァノッサが堂とした態

度で応じる。

傍から見れば開き直りとしか言えない態度にミルヒシュトラークは更に何か言い募ろうとして、そこでようやく言葉を発したカタリナに止められた。

「姫様」

「分かっていてよ。参りましょう」

柔らかくもやはり感情の感じられない声に、ミルヒシュトラークが唇を閉じ一礼する。

ツヴァイまでの道のりがどれだけのものかは分からないものの、遠い事には変わりはない。従者であるカタリナも夜が近づく前に少しでも前に進みたいと考えたのだろう。

これで話は終わりだと言わんばかりの態度に、その場の誰も不敬だとは言わなかった。

ただ踵を返し去っていく金と錆浅葱の立ち姿を見送り、扉を開くのみだ。

「御免なさい」

彼女は何もしていない。生まれがツヴァイ王家であり、ファルガスタに嫁ぐことが予め決まっていただけというそれだけの姫だ。

だというのにどうして彼女が自尊心を傷つけられるような真似をされなくてはならなかったのか。

望まれてはいないのだと、夫となるべき男に言われなくてはならないのか。

小さな呟きは無論ミルヒシュトラークの耳には届かない。

けれど私は何も言わないことはできなかった。

例え行動を起こしたのがヴァノッサであろうと、元を正せば私がファルガスタにいるのが原因だ。

零した呟きはヴァノッサには届いたらしく、彼は案ずるように手を伸ばしこちらに触れようとする。けれど私はさり気なく身を掠つてそれを回避した。

「触らないでください」

我ながら冷え冷えとした声が全身を響かせる。

それと同時に足を踏み出した私はそのまま逃げるように玉座の間を出て行くこうとして捕まってしまった。

「しばし、華月の魔女と二人にしてくれ」

腕を掴む手の平の持ち主は玉座から立ち上がったままの体勢で周囲の臣下にそう告げる。ぐるりと紅蓮の視線が彼等を一瞥すると、興奮気味の臣下達の声が非難の色を含んで返された。

「陛下!?!」

「なりません！ その者は」

当然だ、誰が魔女と皇帝を二人にさせたがるというのだ。

私ですら分かることを何故ヴァノツサは理解しないのか、甚だ理解に苦しむ。

「黙れ。何代にも渡り守られてきた玉座の間に手を加えることを許容したんだ。これ以上口出しすることは許さん」

けれど何も理解していないのか、理解した上なのかヴァノツサは雑音とも言える多くの声に対しぴしゃりと返し、それ以上の反論を許さない。静かな怒りに染まった表情は彼に似つかわしくなく、それ故に目を引く力を持っていた。

誰が謁見しようとして決して玉座から立ち上がることはない皇帝が立ち上がったことから何かを察したことや彼の表情が険しいことでようやく自分を納得させたのであろう臣下達が深く礼をし、次々に玉座の間から姿を消す。

最後にはリスだけが残されたが、ヴァノツサはリスにだけは何も言わなかった。

「レイアステイ」

困ったような低音が背中を打つ。逃がさないと伝えるように手の平に力が込められたが、振り向いてやる気はなかった。

名を呼んだ声はその後に続く言葉を持たないのかそれきり何も聞こえてこなくなる。

そうと知った瞬間、怨嗟とも言える声が口をついて出てきた。

「何故あんなことをしたのです」

「……」

「彼女を、ミルヒシュトラーク様を傷つけるような真似をしてまで貴方は何がしたいんですか」

禁色を纏わせたことは彼女を傷つけるためにしたことではないと理解している。けれど玉座にはまる宝玉は違う。

ヴァノツサは明らかに狙っていたのだ。それをミルヒシュトラークに見せるために。

「貴方はもしかしたら彼女と結婚したくないと思っっているのかもしれませんが」

沈黙が返ってくる。けれど気まずいとも言えるその沈黙を破るのが自分の声一つだけだとしても構いはしない。

「ですが貴方はこのファルガスタの皇帝です。望む望まないに関わらず、貴方には貴方の為すべきことがある」

「ツヴァイとの婚儀が為すべきことに入るとは思っていない」

そうかもしれない。私だってそんなことが義務であってほしいとはとてもじゃないが言えない。けれど。

「貴方はそうかもしれませんが。ですがツヴァイはそう思っていない。何より、どんな理由があろうと貴方がミルヒシュトラーク様を傷つけたことは事実です」

それは一人の人間を傷つける理由には決してならないし、なっちはならない。

美しい顔立ちが歪む姿が脳裏を過ぎる。あの時ミルヒシュトラークが見せた憤怒は私に対するものだけではなく、ヴァノツサに対するものも含まれていた。痛みを含んだその憤怒にヴァノツサが気付かぬわけがないというのに、何故彼はあんなことを。

腕を戒める力が微かに緩む。それを罪悪感の表れだと感じた私はそのまま言葉を続けた。

「婚儀をしてほしいと願うのは貴方にとって酷かもしれません。だから婚儀を拒否したとしても私には貴方を責める権利などないし、

ツヴァイとの戦争にならない限り文句を言う気もない。ですが、私を巻き込むことはしないでください」

それは懇願だった。強く太く、三百年もの時間をかけて織り込まれた願いだった。

声が震えているのが自分でもよく分かる。リズに見られないように顔を伏せるものの、平常心ではないことはとうに悟られているだろうと内心で舌打ちを漏らす。

こんなことを言いたかったわけでも、こんな風に激情に駆られるつもりでもなかったのにそれでも言葉が止められない。

訪れてほしくない展開が間近に迫っている。それをどうしても止めなくてはならなかったから。

「私はもう、氷の魔女になんてなりたくない」

そんな願いを自分が抱いているなんて今まで知る由もなかった。

俯いた視界一杯に漆黒の敷物が見える。まだ敷いたばかりの綺麗なその場所を見つめていると、闇に心を絡め取られそうになってしまった。

もう限界だ、そんな声が胸中で響き渡る。

けれど既に限界点など見えない所にまで来てしまっていることは自覚していたから、そのまま目を閉じて溜息を漏らす。

どれだけこの国が落ち着く場所になるうとしていても、やはり私がヴァノツサの傍にすることは危険だ。

そんな、今更とも言えることを実感し脳を浸す闇に溶けそうになる思考を何とか引き上げようと顔を上げる。

俯いているよりも先に、出来ることがあるはずだと知っていたから。

「っ！？」

その時だった。

純度の高い魔力が練り上げられていくのを察知すると同時に、がくりと全身から力が抜ける。頭の中から爪先までをも駆け巡る吐き気に身を折ると慌ててリズが駆け寄ってきた。

「おい、どうした!？」

「レイアステイ!　まさか!？」

ゆっくりと寒気が体の芯に近づいてくる。その冷たさから逃れようとリズの手を掴むと、何かに気付いた様子のヴァノツサが現れた炎と私を遮るように立ちはだかった。

「リズ!　レイアステイを少しでもあれから遠ざける!」

そうしてリズに指示を出すヴァノツサの前で、彼に酷似した声が部屋を満たした。

「　いや、彼女はそのままがいい。私が離れるから」

穏やかな声は悲しみを含んでおり、私を案じるように遠ざかる。

そのおかげで吐き気も寒気も遠ざかる中、私は白と黒に明滅する視界を何とか前に向けようと目を凝らしながら呟いた。

「ビリオン様……?」

くらりと世界が回る。その感覚から立ち直れないまま呟いた声に、彼が小さく笑んだ気がした。

第三十二話 紅と紅の選択肢

陽炎が、揺れる。

それは紅蓮の髪となり瞳となり、そして。

「ビリオン様……」

「すまない、少し近づきすぎてしまったようだね」

最後にあの人の姿となって、悲しげな表情を浮かべる。

その顔が求婚を断った時の表情に被って、何となく彼が話したい事が何なのかを理解してしまった。

「何をしに来た。まだ貴方が現れるには早いのではないか？」

リズに肩を抱かれながら、茫洋とした視界の中に映る二つの紅蓮を見比べる。

すると陽炎ではなくはつきりとした実体で立つ方の紅蓮が口を開き、私を守るように片腕を広げた。それだけで襲い来る魔術を防げるはずはないのに、彼が腕を下ろす気配はない。

……このままではいけない、そんな焦燥感にも似た想いが胸を過ぎる。

私ならいざ知らず、ヴァノッサはビリオン様に敵視されているのだ。そんな状況で彼が自分より前に出てはいけないのに。

深く息を吸い込み目眩を遠ざける。そうしてリズの手を引き剥がそうと肩に手を持っていく最中、ふと首元の首飾りに手が触れた。

「っ！？」

刹那、体を襲っていた気怠さが霧散して私は目を見開きながら今度は恐る恐る首飾りに触れてみた。相手の境界も自分の境界も、全てを解除するその首飾りに触れるとやはり体調が楽になるのを感じられた。……そういえば、前にもこんな事があったような。あの時

は何も考えずに握りしめただけだったが、まさかこの首飾りにはビリオン様の魔力を遠ざける効果もあるのだろうか。いや、でももしそうならあの時の体調不良もビリオン様のせいということになる。そしてそれは、ビリオン様が人知れず自分に近づいていたと言うことにも繋がるはずだ。それは何故？ 姿も見せずにただ見ているだけだなんて、眼前に浮かぶ人はしそうにないというのに。

「レイアステイに逢いたいから来たただだよ。別に君に用事があるわけじゃない」

問うべきか問わないべきか考えあぐねていると、ビリオン様がヴァノツサの問いに答える。白日の下に晒された体軀がこちらを向いて、紅蓮の瞳が柔らかく細められる。けれど愛おしむようなその視線に向けて同じく甘やかに笑い返すことはできない。

それどころかまずは指摘しなくてはならないのだ。

彼が現れたのは玉座の間。下手をすれば大勢の臣下がいてもおかしくはない場所なのだ。

勿論ビリオン様とて機を見て現れたはずだけれど、この場には一人だけ部外者が存在していることに気付いているのだろうか。

「ヴァノツサのみならず騎士のいる前に現れるなんて、何を考えているのです」

立ち上がり指摘すると、彼は鋭い視線を浴びせられるとは思っていなかったのか少し残念そうに首を傾げてから答えた。低く柔らかな声が耳朶を打つと何度も感じた既視感が再び襲ってきたけれど、それはおくびにも出さなのまま脳内でのみ受け止める。

「その騎士は一度私に会っているから大丈夫だろうか？ それに、彼と君の会話も精霊達から聞き及んでいる。何でも、トリスタンの末裔だとか」

小首を傾げ、指先を城壁に触れさせながら言い放つビリオン様の言葉にリズが慌てたように顔を上げる。薄氷のような淡い空色が紅蓮へと向けられ、その横顔が敵意なのか畏怖なのか分からないもので歪んだ。ただ一言で言うなら緊張感を孕んでいると言えるその表

情に私も類の筋肉に力を入れる。……ビリオン様がどこまでの話を聞いているのかが分からないから、下手に情報を与えてしまわないように自分を律する必要があったから。

「それにしても、まさかトリスタン家の人間がファルガスタにいるとはね」

本来ならば私の前に立つべき銀光は動かぬまま私の肩を掴む手に力を込める。するとそれが伝わったわけではないはずだけど、この時代のファルガスタで最も尊い紅蓮が身動きした。魔女だけではなく騎士をも守るように立ちはだかる純白の背は、眩しいほどに広く見える。

「俺の騎士の本家がツヴァイ王家にあるからと言って、何か貴方に問題でも？」

「気にはなるけど問題はないよ。……レイアステイさえ無事ならね」
無事というのは何の無事を指しているのだろうか。

まさか、護衛任務を放棄したことまで伝わっているのかしら。だとしたらそれはビリオン様にとって怒りの対象になって然るべきものかもしれない。例え私の護衛任務でなかったとしても、騎士が職務を放棄する事を彼は許さないだろうから。

斬りつけるような鋭い低音に返すビリオン様はちゃんと触れられているのか分からない壁面を指でなぞってから、ヴァノツサをいない存在とするかのようにそこより遠くを見据える。そこにいるのは勿論、私とリズだ。

優しい双眸なのに何故か見据えられると萎縮してしまう。そんな視線を向けられて平然としていられる人間など、この世にそう居はしないだろう。ヴァノツサですら最初は弱々しい声を出していたくらいなのだから。そしてリズもそうした人間の一人だった。

魔力とは別の力に縫い止められたようにリズが動きを止める。恐怖を感じているはずの顔はしかし背ける事を許されず、彼はぴたりと視界の中心にビリオン様を捉えて離さない。

ビリオン様は決してリズに対して敵対心や冷たく暗い感情をぶつ

けているわけではない。

けれど三百年前のトリスタン家がツヴァイにあったという事実と、それを知られている意味に気付いたからこそリズは動けなかったのだと思う。確証はなくとも、可能性の一つとして捉えられる事は私の頭からも離れないぐらいなのだから。

出来れば当たってほしくない、私とリズが恐れている可能性。それはトリスタン家が長い間ずっと氷の魔女を憎んできたという、リズの家の最重要機密をビリオン様が知っているかもしれないという事だった。そしてもしそれを知られてしまったら、リズのみならずトリスタン家が危機に晒されてしまう。

「私に会いに来たということは、何か用事が御有りなのでしょう？」
だから私はこの場で膝を屈している訳にはいかなかった。結界解除の首飾りを強く握り締め、柔らかな絨毯に足を取られないようにしっかりと全身に力を入れる。そうしてヴァノツサより一步分前に立って真っ直ぐにビリオン様を見据えると、彼は少しだけ不満そうに眉を顰めて呟いた。その不満と同じ分だけの拗ねた声が耳朵を打つ。

「その首飾りを持った状態で私の魔術を防げるとでも？」
それはどう足掻いた所で無理だろう。

結界解除の首飾りは相手の結界を破壊することが出来るけれど、その分自分も結界を張ることができなくなるのだから。

けれどそれで十分だった。
「いいえ。ですがもしビリオン様が魔術を使うのなら、その時は私が盾になり彼等を守ります」

以前見せつけられた魔力から察するに、当たり所が悪ければ即死してしまうかもしれない魔術でも当たるのが私ならば問題はない。自殺願望も自己犠牲の精神も持ち合わせてはいないけれど、もしビリオン様が誰かを殺そうとするのならその相手は私が守らなくてはならない人だということは分かっていたから躊躇うことなく言い放つ事ができた。

勿論、死ぬぐらいならその前に一矢報いてみせるぐらいの気概は忘れない。

……方法はまだ考えていないけれど。

「レイアステイ」

名を呼ぶ声は前後のどちらの炎帝が放ったものなのだろうか。

一瞬だけ戸惑い、声の主がどちらか探してしまふ。すると自分の声だったのだと告げるように怒気を孕んだ視線が背中に突き刺さり、ようやく誰の声だったのか理解した私は緩慢な動きで首だけを後ろに傾いだ。

「前回の様に焦るのは御免です」

そうして言い放つ。放った相手が誰で在るのか理解できたから、その答えを出すことも簡単だった。

静かな声にヴァノツサが爛と目を輝かせる。怒りのせいか白地の正装ですら燃え上がりそうに見える立ち姿を視界に捉えながら、そつと片腕を広げた。異論など挟ませたりはしない、そう態度で示すために。

もう二度と目の前で誰かの死を見る事などないように。

それに、もしかしてヴァノツサは気付いていないのだろうか？

「貴方が死んだら私は誰との約を果たせばいいのです」

そして誰が私に起きる全てに責任を持ち、共に絶望してくれるとこのだろうか。

ヴァノツサには悪いけれど、私はそんな思考のずれた人間は彼一人しかいないと断ずることが出来たしそれに対して反論を許す気もなかった。例えば私が魔女ではなくとも、誰がそのような役目を引き受ける？

呟いた声はがらんとした玉座の間に緩やかに染み渡りヴァノツサの耳朵を打つ。

虚しささえ籠めた声に、彼はようやく溜飲を下げた。

恐らく気付いたのだろう、私の言いたい事の本当の意味を。

貴方が死んだら私は地脈破壊の解決などしようとは考えないとい

う、その意志を。

端正な顔立ちが逡巡に染まり、唇が真一文字に引き結ばれる。下手な事は口に出来ないと言葉を探すその姿を尻目に、今度はもう一人の炎帝を見据える。そこにあつた顔もヴァノツサ同様逡巡に染まつており、一瞬どちらがどちらだか分からなくなった。それだけ彼等は似通つた雰囲気でそこに居ただけだから。

「それよりビリオン様、今日は何の御話でしょうか？」

不調から回復しかおかげか、大分冷静さが取り戻せた思考から言葉を引き張り出し出来る限り柔らかい口調で問う。別に私はビリオン様と敵対したいわけでもなければ、辛辣な言葉で生きている事を責めたいわけでもないのだからそれでいいのだと思った。

ツヴァイの星姫を見送っていた関係か、はたまたヴァノツサの命令が功を奏したのか、静寂が玉座の間周辺を取り囲む。人の声一つしない空間で一人凜とした声を放てば、それがどれだけ小さな声でも大音量に感じられてしまうほどに。事実それほど大きく放つたつもりもない声は不必要なまでに大きく響き渡り、あちらこちらの壁面を打っては返りながら彼等に届いた。

「……ああ、すまない。少しぼんやりしていたようだ」

どのような理由かは分からないけれど、ヴァノツサと同じような表情をしていたビリオン様がその声で思考を引き戻されたように焦点を合わせる。そうしてようやく私との距離に気付いたようで、慌てて一歩下がった。私が具合を悪くしてしまわないようにと。

そう、目の前で浮かぶ初代炎帝はそうして相手を気遣えるだけの優しさを確かに持っている。なのにどうしてヴァノツサやリスに対してこれだけ敵しい態度を取るのかが理解できなかった。

無性に胸が切なくなる。

……変わったのはやはり私ではなく彼なのだと、嫌でも認識させられてしまうから。

「今回の皇妃候補は随分と気の強い姫みただね」

痛みのような切なさ顔に顔を歪めそうになると、それを制そうとで

も言つのかビリオン様が先程の私の問いとは少しずれた言葉を放つた。何事かと首を傾げてみるものの、きつとそれがただの世間話ではないのだと思えたから無理矢理答えを探す。

「？ たおやかな姫君ではありませんけど、もしかして彼女の事も精霊から？」

「いや」

問い掛けると、即座に否定される。

「ツヴァイの姫が来ると精霊達から聞いてね。興味があつたから少し前から来てたんだ……そのせいで、君には少し辛い思いをさせてしまった」

申し訳なさそうな声に、握りしめた首飾りの感触を思い出す。体温が伝わり温くなったそれを再び握り直すと、霞がかつた思考が幾分すつきりした気がした。

強烈な睡魔、睡眠不足のせいだと思つていた気怠さ、それらの理由に合点がいつたせいだろうか。

「いいえ」

覗き見じみた真似をしそうには思つていたけれど、どうやら予想は当たつていたらしい。珍しい事だと思わないわけではないけれど、臣下達が大勢行き来している皇城内に忽然と姿を現すぐらゐならその方がいいのかもしれないとも思えたから首を振つて謝罪などいらないと態度で告げる。するとビリオン様はあからさまに安堵の表情を浮かべたものの、すぐに毅然とした雰囲気を取り戻す。心に染み込むような穏やかさが払拭し、こちらに向けられたものではない鋭さが黒の長身から放たれる。

紅蓮がひたと同じ色を持つ人間へと向けられる。親しみなど決して与えないと徹底しているその視線を受け止めたヴァノツサはしかし敢然とした態度で背筋を伸ばし、同じ分だけの鋭さを籠めた視線を返す。それはビリオン様とマリエル様のような好意に満ちたものではなかつたけれど、矜持に満ちた応酬のように見えて何故だかひどく懐かしくなつた。

本来ならばこの視線の応酬を危険だと判断すべきなのに。

自分のような身分の低い存在や騎士であるリズでさえも立ち入る隙も与えられない、特殊な空間に緊張感を孕んだ空気が流れる。けれどその息苦しい空間で放たれた低音に答えたのは私だった。

「君はツヴァイの姫を娶るつもりかな？」

「当然です」

そうであつてもらわなければ困るという意味を籠めて即答すると答える機会を奪われたヴァノツサが身動きする気配が伝わる。そしてリズが目を丸くしている姿も視界の端に映った。別に意外な事でも何でもないはずなのに、一体何を驚いているのだろうか彼は。

そして、私は私で何をこんなに意地になっているのだろうか。

放つておいてもヴァノツサは肯定の言葉を返してくれると 信じたいのに。

「当然、か」

感慨深げな声が耳朶を打つ。その声に顔を上げると、ピリオン様がそつと瞼を閉じた。

そうして口の端を吊り上げて緩やかに笑い、くすりと楽しげな声を漏らす。歌うような声はただひたすらにこの状況を楽しむような傍観者の笑みを湛えていた。

「皇帝としては良き選択だろうね。でも私はその選択が必ずしも正しいとは思わない」

「……え？」

ふわりと黒衣が舞い、開かれた窓枠にとんと靴の爪先を載せる。

軽やかなその姿は重みなどまるで感じさせないが、それはつまり彼が人間ではない事を改めて周囲に知らしめる結果となった。

「まあ、私としては好都合なのだけれど」

与えられたドレスと同じ黒が揺れるのを呆けたように見つめる。

その黒は暗がり立つ自分とは違い陽光を一身に浴びながらも決して明るさに染まることなく、くつきりとした暗さを保って立っていた。

まるで今の彼自身の存在が明るいものではないのだと言うような暗さに思考を奪われ、答えを求めるように紅蓮の双眸を注視する。けれど彼は答えではなく、己の想いのみを口にした。

「ヴァノツサ」

「何だ」

歌うような声が名を呼び、ヴァノツサが怪訝そうに続きを催促する。その姿はどこまでも傲岸不遜で、不死掛けを施された魔導士に向けるものでは決してないのだけれど同時に彼らしくもあつた。

同じ顔立ちと立場を持つていながら、彼等是对比するように両極端な雰囲気と立ち姿をしていた。

ビリオン様とは打って変わってヴァノツサは暗がりにあつても明るさを強調する白が映え、その存在が明るいものであることを示しているのだから。

生者と死するべき者、現在と過去が相対する。

尋常ではないその光景の中にあつて身動き一つしないリズをちらりと一瞥すると、彼は剣の柄に手を触れさせながらもどう動いたらいいものか考えあぐねているようだった。それはそうだろう、いくら不死掛けを施され人間と呼べない存在になつたとはいえビリオン様は初代炎帝……この国で最も尊い存在だつた人なのだから。けれどもいつでも剣が抜けるようにぴくりとも指先を動かさず緊張状態を保っているのは感嘆に値する。本当にいい騎士を持つているものね。「私は君に同情するよ。同じ色を持つ炎帝として、ファルガスタの元皇帝として」

リズの精神力に胸中で呟いていると、そんな声が放たれる。憐憫を籠めたその声はヴァノツサに向けるにはあまりに優しくすぎるものだったけれど、ヴァノツサはそれに対しても好戦的な笑みで返した。「残念だつたな。同情などされなくとも、幸いな事に俺には貴方がいる……道を違える事はしない」

「では婚儀を受けると?」

「当然血を絶やさぬためにも婚儀は執り行つ。ただし、相手がツヴ

アイの星姫だと名言はしない」

憐憫混じりの穏やかな問いにヴァノツサの口の端が吊り上げられる。そうして言葉遊びをするようにどこかぼやけた事を言った彼は危険性など意に介さずと言うように足を前に踏み出す。新品の絨毯が足型をつけるように強く踏みしめられ、真っ直ぐな立ち姿が隣に並んだ。堂とした重みを感じさせる態度に、もしかしたらヴァノツサは意図してビリオン様との対比を生み出しているのではないかと考えてしまった。服装に関しては本人としても不本意だと思うけれど、それ以外は彼自身が選び取る行動なのだから。

「ファルガスタの皇帝はツヴァイの姫と結ばれる。それが慣例で、他に皇妃候補はいないはずだけれど」

「慣例通りならな」

鋭く突き刺さるような北風が入り込み、肺を凍りつかせていく。

けれどそれが溶けそうになるほど、隣に立つ男の視線は高い熱を孕んでいた。慇懃無礼な態度でも不遜な態度でもなくただ本心を曝け出した瞳は、こちらに向けられたわけでもないのに怖いほど真剣なものだった。

「俺と同じ色を持ち、似た道を辿った貴方には俺の答えが言わずとも分かるはずだ。他の誰でもない、初代炎帝ビリオンならば」

熱い、どこまでも強い言葉が放たれる。

低音が紡ぐそれは挑戦的であり頼もしくもあり、そして一瞬にして焦燥感に駆られてしまうようなそんな言葉だった。

確たる答えを言葉にはしていない。けれどビリオン様と同じ道を辿りつつもツヴァイの姫君だと公言しないということとはつまり。

「貴方は……」

震えた声が無意識に放たれる。続けて言葉を紡ぐつもりなどなかったのに、何か言わなくてはならない気がした。

ヴァノツサは本気で三百年前と同じ道を辿ろうとしている。それを私は何が何でも止めなくてはならないのだから。

けれど何を言えば彼はその意志を曲げるのだろうか。氷の魔女に

などなりたくないという言葉は無視してでもあの言葉は放たれてしまったというのに。そして私はもう既に嫌になるほど彼が本気である事を知ってしまった。あの強すぎる意志に抗う術を今すぐ思い浮かべる事など、とてもじゃないけれどできない。

拒絶の言葉は反抗心を生み、恭順は歓喜を生む。ならば私は一体どうすれば。

全身の震えを抑えるためにドレスを掴み握り締める。与えられた上質の衣が皺を刻み、力の分だけ深く細い影を生み出すのを見てピリオン様が小さく嘆息した。

「君の苦悩が少しだけ分かった気がするよ」

「……御理解頂けて何よりです」

それが御理解頂けたのなら、どうしてまだこの場にいるのだろうか。

苛立ちのせいです。ついそんな事を考えてしまった自分を嫌悪し、無理矢理に顔を上げる。すると言いたい事が伝わったのか彼は困ったように微笑を浮かべながら肩を竦めた。北風と陽光を遮るように立つ姿はしかし全てを防ぎきる事はできず、そのどれもが細く玉座の間へと漏れて入った。

「行く所がないのなら、私の所を選べばよかったのに」

もしかして、トリスタン家に行こうとしていた事も知られてしまったのだろうか。

「いくら苦悩しようとも、地脈破壊の手伝いなどする気にはなれません」

「勿論君にそんなことは頼まないし、誰に言われてもさせるつもりはないよ。君は人間を殺すには優しすぎる」

ピリオン様と共に行くという選択肢も無かったわけじゃない。けれど私はその道を選ぶ事が出来なかった。この国は、冬宮はあまりに穏やかでつい離れがなくなってしまうから。

……いや、それだけじゃない。自身の考えに胸中で首を振り、考えるべきではない事をしかし忘れてはならないと言うように呟いた。

私がファルガスタから離れられないのは正義感や自己犠牲の精神から来るものでは決してない。

冬宮は静かで穏やかだけれど、それは自分やビーだけで得られるものではない。

そう、全てはヴァノツサがそこに居たからだ。

けれどそれを口にする事は在らぬ誤解を生むと分かっていたから決して口にはしない。

私は地脈破壊を止める為に召喚された魔女でありそれ以上でもそれ以下でもないし、私自身その立ち位置からずれる事をよしとはしないだろう。

そう、だから私は目の前の人に対しても同じ態度で接さなくてはならない。

皇帝を相手にするにはやや不敬な態度だけれど、そこは許してもらおう。

「レイアステイ」

「何でしょうか」

名を呼ばれ思考を一度遠ざけると、窓枠に立つ彼は輪郭を陽炎のようにゆらりと揺らめかせてから胸元に咲くリイズネイションを指先で撫でた。そのままの体勢で、世間話をするようにさらりと言いつ放つ。

「愛しているよ」

それはさりげなさを装った、深く重い言葉だった。

胸が痛みに疼く。けれど私はそれが歓喜なのか悲しみなのか分からないまま目を閉じ、静かに首を振ることしかできなかった。

そうして、ヴァノツサにいつも言う言葉を少しだけ丁寧なものにして告げようとする。

「お」

「戯れではないよ。君はそれを、誰より知っているはずだ。そしてこの言葉がどんな意味を持っているのかも」

けれどその言葉は遮られ、ピリオン様は微かに怒りを含んだ目で

こちらを射抜いた。

殺気や敵意とは少し違う種類の、かといって怒りではないと言い切れない鋭い視線がこちらを見据える。

風が一度強く吹き付け、彼が纏う外套を大きく揺らす。だというのに寒さはこちらには伝わらず、そればかりか緊張感が体を熱くした。

焔を思わせる瞳に体を動かす事を忘れ、隣に立つヴァノッサの気配さえ感じられなくなった。ひどく希薄な五感に目眩がしそうになる。

そこでようやく気が付いた　これも一種の魔術なのだ。

慌てて結界解除の首飾りに視線を落とす。けれどそれは正常に機能しており、私が結界を貼ろうとしても魔力は断ち切られるばかりだった。ということはこれは結界系のスペルではないということになる、それなのに何故ヴァノッサやリズが傍にいる事が分からないのだろうか。

一体これは何のスペルなのだろうか、そう考えながら記憶を手繰り寄せ一っだけ近いものに思い当たる。けれどそれをビリオン様を使うのはやはり性格的に不似合いな気がして、結論が出せないまま私は口を噤んだ。それを見計らったようにビリオン様の唇が開く。紡がれる言葉は鋭くも悲しみを含んでおり、自分が感じる痛みよりも彼が感じる痛みに眉を顰めた。

「君はずっとそうだったね。私の気持ちを聞いても、君の気持ちは聞かせてくれない」

「……」

「私の言葉は、そんなに信憑性が薄いのだろうか」

「いえ。ですがその言葉は」

「マリエルはもういない」

痛みは痺れるような甘さも感じさせ、私の思考を侵していく。けれどその中にあっても受け入れる事は出来ないのだと告げようとすると、静謐な声が耳朶を打った。当たり前としか言いようの無い事

実はしかし、叩きつけるように心を打つ。ぴしりと何かがひび割れるような音がして、思わず目を見開いて彼を凝視してしまった。

そこには全てを受け入れた上で、知った上でこちらを見据える紅の瞳があった。それは感覚が曖昧で人の気配さえ感じられない世界の中で、唯一鮮やかに色づく焔として厳然とそこに存在しているように見える。

「君と私を隔てるものなんて、もう何もないはずだ。華月の魔女」
体が訴える不調も曖昧になってしまったのか、ビリオン様が一步踏み出しても気分は一向に悪くならなかった。

「だから聞かせてほしいんだ」

衣擦れの音と共に腕が伸ばされる。頬に触れた指の感覚は不思議なほどにしつかりと伝わって、ぞくりとするような甘やかさが心の中に広がった。もっと触れて欲しいと催促するように手を触れさせると、望んでいた通りの熱が両頬に与えられる。安堵の共に吐き出した吐息には、自分でも驚くほどの歓喜が含まれていた。けれどもまだ足りない。頬だけではなく全身に触れ、抱きしめ、口付けてほしい。そしてどうか私を。

「私を、どう思っているのかを」

「……っ！」

そんな欲望が心に火を付けた瞬間、無意識にある魔術を無効化するスペルを早口に唱えていた。

それは最後の理性が起こした、最大限の反抗だった。

五感が徐々に鋭さを取り戻す。陽光の眩しさと冬風の寒さにぐらりと視界が歪み、手の平で顔を覆う。

「レイアステイ！？ 一体何が」

「だい、じょうぶ……です」

どつと冷や汗が全身に流れ、ようやく流れ出した正常な時に力が抜けそうになる。

その体を抱きとめてくれたヴァノッサの腕に縋りながら、私はビリオン様を強く睨みつけた。

力強い腕が体に触れても、今はもう馬鹿な事は考えない。それは唱えたスペルが正しい効果を發揮した証拠だった。

「魅了のスペルを使って答えを聞き出した所で、それは本心ではなく術者が作り上げた偽りです！」

ピリオン様があのようなスペルを使ったとは思いたくはないから様子を見ていたのに、その結果がこれだ。情けないにも程があると自身を責めながら、手に力を込めるとヴァノッサが私の怒号に目を丸くしながらも物言いたげな視線でこちらを見下ろしていた。けれど、今はそれに答える事はできない。

じつとりと汗に濡れた肌を乱暴に拭って足に力を入れる。そうして自分の足で立つてからリズに向けて結界解除の首飾りを放り投げた。

「それを持って少し遠くへ」

早口に言い放つと、リズはヴァノッサが頷くのを確認してから後ろへと下がる。そうしてようやく結界を張ることが出来る程度に離れた所で腕を振った。

しゃん、と涼やかな音が淡い緑の光と共に放たれる。

いつもに増して強い結界を張ると、その先に立つピリオン様が微笑を浮かべた。

「ああでもないしと君は答えなんてくれないと思ったからしたんだよ。術が解けても解けなくても、君はきつと本気になってくれると思っていたから」

それは例えば向けられるものが怒りでも何でもいいのだと言っているようだった。

同時にこうやって壁を作ることほしめないでほしいと言われた気がして、私は怒りを徐々に和らげながら溜息をついた。首筋に張り付いた髪の毛を指先で払い、体温が下がる程に濡れた体を冬風に晒す。そうして熱した思考を冷やしてから瞬きの後に答えた。

「あの頃、貴方に婚儀の話などなくずつと穏やかな時を過ごしていたなら、私は貴方に持つてはならない気持ちを抱いてそれを自覚し

たのかもしれない」

それはもしもの話であり、今彼が聞きたい答えではないということとは分かっていた。

それでもこれが私に出来る精一杯の妥協だったから、譲る気もなかった。

「私は恋を知りません。貴方が告げるような愛がどんなものかも、正直申し上げて理解していません。ですがずっとあの頃のままなら、知る事ができたのではないかと思えます」

「レイアステイ」

「ですが」

仮定とはいえ本心であることに代わりなどない言葉にビリオン様が吐息を漏らす。

けれどどこか期待を含んだその声は、期待を与えた私自身の声で断ち切った。

壁ではなく、本心からこの言葉を告げるのはきつとこれが最後になるだろう。

そう思って、私は出来る限り精一杯誠意のある声で言い放った。

「今にして思えば知らなくて良かったと思つています。もし知つてしまつたら、私はきつと狂つてしまつたでしょうから」

愛する人がいつかは婚儀の時を迎える事に怯え、いつかは死んでしまう事に怯え、そしていなくなつてしまつた世界で生きる事に絶望して、そうして私はいつしか狂つてしまつところだったからこれでも良かったのだと言い切ることができた。

少し前、リズは私がビリオン様を慕つていたのだと指摘していた。きつとそれは間違いではないのだと思う。

けれどそれを自覚してしまつたらもう後戻りができなくなるから、口にする事は避けた。

その時、騒ぎに気付かれたのか扉がとんと叩かれる。その音にビリオン様は残念そうに溜息を漏らすも、その身は後ろには下がらずこちらに向かつてやって来た。敵意のなさに結界を解くと彼は感謝

するように目を細めてから腕を伸ばし、そのまま私の手を掴んだ。

「失う恐怖も狂気も私が決して与えはしない。死を乗り越え立場を失い、私の手元には何も残ってはいないのだから」

だから、と呟きながら手に力が込められる。

離さないときつく握られた手の平から痛いほどの感情が伝わってくるようだった。

「どうか私と一緒に来てほしい。あの日をもう一度繰り返す事はできないけれど、君の知らない想いは私ならきつと教えてあげられる」「ビリオン、様……」

静けさや穏やかさと言った感情をかなぐり捨ててただ真っ直ぐこちらを見据える紅に目が奪われる。あまりに真剣な姿に、私は彼がいつかは命を奪わなければならぬ相手だと言う事を一瞬忘れてしまった。それどころか地脈破壊を行っている犯人だと言うことさえも。

今まで生きてきた人生で一番鮮やかだった時に思考が戻っていく。ファルガスタこそが世界の全てで、皇城こそが自分に必要な家で、そしてビリオン様から伸ばされる手が何より大切だったあの頃に。

戻れるものなら、とうに戻ってやり直している。そんな声が頭を過ぎる。けれどビリオン様はそれが出来ないと知っているから、それを踏まえた上で一緒に進もうと言ってくれた。

それはひどく魅力的で、魅了のスペルになど掛からなくても迷ってしまうような事だったけれど。

「それを許すだけでも？」

握り締められた手に掛かる重みが、そんな躊躇いがちな想いを全て絶ち切ってしまった。

低く、冷静な怒りが籠められた静謐な声が耳朶を打つ。

その声に見ると、そこにはビリオン様と私以外にもう一つの手が掛かっていた。

温かな指先が微かに触れ、一瞬だけ不遜な笑みが向けられる。

その温もりと笑顔に全身から力が抜けそうな安堵を感じて、私は

そこで知らなくてもいい答えを知ってしまった気がした。

どうしてこんな時に、と思わないでもない。

けれどそんな疑問も得そうになった答えも全て強い声にかき消されていく。

「ここは今は俺の城だ。そんな場所で彼女を口説くのはやめてもらおうか」

声と同時に負荷が離れ、誰にも触れられていない手の平がひんやりとした空気を感じた。ヴァノツサがビリオン様の手を取り払ったのだ。

頭一つ分高い二人の視線が同じ高さで絡み合う。

けれど扉から伝わる音が次第に大きくなっていくことに気が付き、先にビリオン様が視線を逸らした。

代わりに敵愾心を孕んだ声がヴァノツサに向けて放たれる。

「なら、別の場所で口説かせてもらう。レイアステイが私と共に来る事を選ぶまで」

「まさか初代炎帝ともあるう男が、しつこい男は嫌われるという格言を知らないとは思わなかったな」

「その言葉はリボンを付けて君に贈り返すよ。毎回の様に私の邪魔をする君に言われる筋合いはない」

……何て胃の痛くなるような応酬なんだろうか。

流石に私が傍にいる状況で魔術を使おうとは考えないらしくビリオン様も口でしか応戦しないのが幸いと言えば幸いなだけけれど、あのよく口が回るヴァノツサに太刀打ち出来るのだから彼も相当の手練だ。こんな人を相手にして、よく何度も拒絶できたものだと自分自身を賞賛しているとふと何かに気付いたようにビリオン様が首を傾げた。

ゆつたりとした態度はしかし徐々に輪郭を失っていき、今にも開かれそうな扉を気にしているように見えた。

「君は、マリエルの日記を見つけたんだろ？」

「？ ええ」

そこまで知られているということは、リズと私の会話も全て聞かれている気がするのだけれどあえて尋ねる事はないと言葉を閉ざす。するとビリオン様は考え込むように視線をずらしてから、何やらいい事を思いついたと言わんばかりの笑みを浮かべた。ただしその笑みが黒さを含んでいないのは彼が本心から楽しんでいるせいか。

「マリエルの物が残っているくらいなら、私のもどこかにあるはずだ。ならばそれを読んでもらえれば君にも私の気持ち伝わるかもしれない。もし良ければ探してもらえないだろうか？」

確かに皇妃様の日記が残されているのなら皇帝たるビリオン様のものも秘密裏に残されている可能性は高い。勿論それが只の臣下では見つけられない代物である事は確かなのだけれど、何せこちらには現皇帝がいる。

「自分で探せばいいだろう」

そう思いヴァノツサに目を向けると、彼は心底面倒くさそうな顔をして渋い声を放つ。

本当に国と民の事しか考えられない彼からすれば、初代炎帝の気持など正直な話どうでもいいのだろう。いや、気にはなっても優先順位が違うというのが正しい言い方か。

「皇城内をふらふらしてもいいのならやるよ。でも君はともかくレイアステイがそれを望んでいない」

「当たり前です。貴方とヴァノツサは外見だけは瓜二つなのですから」

「だけはと強調した理由については是非詳しく聞かせてもらいたい所だな」

「向こう見ずな人間には教えません。それから、貴方は少し黙っていてください」

ヴァノツサの答えにビリオン様が同じく渋い顔をする。少しでも殺気を見せようものなら結界を張る必要があるのだから有り難い話だ。ただ、こうして軽口を叩くような状況になるとは思わなかった。そして自分がこんなに強気にビリオン様と話している現実も、少し

前なら想像だにしなかったに違いない。

きつぱりとした声にヴァノッサが頬を引きつらせてこちらを見下ろす。

けれどそれにふいと顔を逸らしてやると、何を思ったのかビリオン様が不満そうな声を上げた。

「あまり親しげにしないでもらえるかな」

相手がビリオン様でなければ、今のが親しげに見えるのならば一体何が不仲そうに見えるのかと問い詰めていた所だろう。しかしいくらはつきりとした物言いが出来るようになったとはいえ相手はビリオン様だからそれはできなかった。

その代わりとばかりに辟易とした表情を浮かべてみせると、彼は拗ねた様に眉尻を軽く吊り上げて輪郭を失いつつある陽炎を揺らした。

「二代目が君に触れる度、私が嫉妬で気が狂いそうになっていることを君は知らないだろう？」

甘やかでありそのくせどこか苦々しい声に、答える言葉が出てこない。

けれど彼はそれを求める気はなかったらしく、一度だけどんと叩かれた扉に溜息をついてからふわりと浮かび上がった。紅蓮の髪先が風に揺れ、より一層の柔らかさを伝える。冬よりも春の方が似合っているのではないかと思うような穏やかな雰囲気そのままに、彼はヴァノッサやリズを無視して言葉を紡ぐ。

「愛しているよ、私の魔女。もう、何にも遠慮せずにそう言える」
今度こそ甘い声と言葉が発せられる。

そして同じような甘さのまま、戯れだと言ってはいけないよと続ける声が耳朶を打った。

「心からの想いを告げてはならないと世界が決めたのなら、それは世界の方が間違っているのだから」

それは否定しようものなら世界ごと壊してやるというささやかにして被害が大きすぎる脅しだったのだろう。だから私は言いたい言

葉を呑み込んで陽炎が消えて行くのを見ている事しか出来なかった。前のように空にはなく、ただひたすらに眩しい陽光に溶けていく。消える瞬間歪んだ光が塵気楼のように見えて、今の季節は何だっただろうかと一瞬考えてしまった。

穏やかさを持ちながら、どこか不安定な人が消えた玉座の間に安堵が満ちる。気付けば膝が絨毯に触れ、すとんと腰が抜けていた。恐らく魅了のスペルに抗った影響が強いのだろうけれど、それだけじゃない気もした。

「さすがに魅了のスペルに抗うのは骨が折れます」
へたりこみながら、ヴァノツサとリスが慌ててこちらに駆け寄る前に呟く。そうして大丈夫だと告げてから目を閉じた。

「探すのか？」
ヴァノツサの声が耳朶を打つ。主語のない言葉はしかし意図する事をしつかりと示していて、私は思考を巡らせてから頷く。

「探すしかないでしょう」
皇妃様の日記が残っているのならとピリオン様は話していた。ピリオン様がその場所を知らないという事は、恐らく精霊達ですらまだ見つけていないものだろう。となれば見つけるのは容易ではないはず。

けれど、そこに何らかの手がかりが掴めるかもしれないから放っておくことはできなかった。

「しかし貴様にはそんな暇」
「地脈破壊の原因であるあの方が残した書物ならば、読んでおいても損はないはずです」

リスの反論にきっぱりと返す声とは裏腹に、胸中で怯えたような声が響く。

知らない方が、読まない方が本当はいいのかもしれない。

皇妃様が本心を吐露していたようにあの人も本心を綴っているのならそれは一生目にしない方がいいものなかもしれないと、頭の中の冷静な部分が告げている。けれど魔力に関する書物だけでは何

の手がかりも得られなかった時の為に読んでおく必要があることも事実だった。例えそこに書かれていることが地脈破壊に全く関係の無い事だったとしても、関係が無かったという答えを得られるだけ気がかりが一つ減る分楽になれるから。

ただ、やはり知ってしまう事に恐怖心を覚えてしまうことは止められない。

「……少し気が重いですけどね」

だから私は深い息と共にそう呟き、ビリオン様が放った言葉を心の中でのみ受け止めてから思考を切り替えようと地脈に関する知識を頭の中で巡らせた。

初代炎帝と二代目炎帝、それぞれが触れて提示した道のどちらを選択するかなどという事は今はまだ考えられない。あの時出してしまえばもう戻らなくなった答えは遮られ、再び零地点に戻されてしまったのだから。

だから私は一番単純な、自分にとって今一番大事な約を果たす為に思考を全て使おうと決意した。

それが逃避だと分かっているにしても、今はそうすることでしか冷静さを保てなかったから。

第三十三話 騎士の誇り

二人の炎帝が触れた手は、今もまだ熱を感じている。

痺れるような痛みと甘さに溶解しそうなその熱を押さえ込むように深く息を吸い、顔を上げた。

「どこにあるのかは分かりませんが、皇城内を虱潰しに探します。よろしいですか？」

「……ああ」

今は忘れなくては。二人分の笑顔も声も提案もこの熱も、全て。

私は氷の魔女、救世主としての道を拒んだものの限界を超えて力を奮う事を約束した魔女なのだから。

そう、ただそれだけの存在でなくてはならないのだから。

陽炎が陽光に消えて少し経ち、ようやく立ち上がる事が出来たその直後。

「陛下！ 何事です！」

臣下の一人がヴァノッサの許可を取らずに扉を開け、同時に近衛騎士達が雪崩るように押し寄せてきた。

どうやらこの中で何か起きていた事は理解しているらしく、彼等は何故か敵意を露にした眼差しをこちらへと向ける。どうしてこの国の人間は何かあるとすぐにこちらを見るのかと内心呆れ果てていると、魔力の波が微かに揺らいで銀光が眼前に現れた。

広く、硬質な背中が向けられる。けれど何故彼が目の前に立つのか分からずに、呆気にとられたように麦色の後ろ髪を見上げていると極めて冷静で堅苦しい声が玉座の間に響いた。

「陛下の御前で何を騒いでいるのです」

すると、銀光に阻害されて見えないけれど恐らく騎士なのである

う男の怒号が響いた。

「リス！ お前が付いていながら何だこの騒ぎは！」

「騒ぎ？ それは俺の科白だ。何も起きていないのに何故騒いでいるのか理解できんのだが」

同僚なのか、リスの口調が少しだけ崩れる。先程の言葉は文官達に向けられたものだったのかとその言葉に納得が行ったものの、放たれた言葉の内容にまでは納得ができない。

……何も起きていないのに？

ちらりとヴァノツサを一瞥すると彼はビリオン様が消えた場所を真剣な眼差しで見据えた後、すぐに踵を返す。純白のマントが翻り、それは玉座へと一直線に向かった。数段の高みを誰にも咎められる事なく歩き玉座に座す。そうして指先で蒼の宝玉を撫でてから口の端を吊り上げた。

その間にも騎士や文官がリスの言葉を疑い食って掛かっている。

貴方は何もしないのですか？ と問い掛けるように視線を向けると、彼はまあ少し待てと軽く目を閉じた。……本当にそういう気持ちがあったのかどうかは言葉にされていないから分からないけれど、ヴァノツサならばいざという時に助け舟を出すだろうと考え黙っておくことにする。

ただ、一つだけ気に掛かることがある。

「何が可笑しいのです」

ぼつりと呟きが漏れる。

それは至近距離に立つリスにしか届かなかったと思うのだけれど、別に誰かに聞かせたかったわけじゃないからと不満に思うことはなかった。ただ文句が言いたかっただけなのだ、ヴァノツサの肩が微かに震え明らかに笑っている風であることに対しての文句が。

小刻みに揺れる白に気付いたのは、私一人のようだった。

それどころか彼等は気付くことさえも放棄して、ただ一人妻色の髪をした騎士のみを視界に入れて話を続けているようだった。膝を屈し頭を下げるべき皇帝が玉座に座しているというのに、それを無

視して話を進める事を果たして容認してもいいのだろうか。

浅い溜息を漏らしつつそう胸中で呟くものの、皇帝自身が楽しげに傍観しているのだから何も言えない。

だから私も銀光に隠れた文官や近衛騎士の声を茫洋とした気持ちで聞いている事しか出来なかった。

「明らかに面妖な空気が玉座の間から漂っていたではないか！」
怒号を放つ野太い男の声が強く響き渡る。

それは甲高い音とは違う種類の耳の痛さだったけれど、リズは全く動じる様子を見せなかった。

より一層の白々しさで話を受け流す声はいつそ清々しくもあつて、ヴァノツサではないけれど笑いたくなくなってしまふ。

「面妖？ それはどのような空気を指しているのでしょうか？ 今日は気候も温暖でよく晴れております。それだけでしょう」

「白々しい嘘を！ どうせその魔女が良からぬ事を企んだのではないのか！」

「リズ、別に魔女相手ならお前の責任にはならないんだから隠す必要もないんだぞ？ 魔女にはそれ相応の罰が与えられるだろうが」

黒に包まれたドレスの胸元が揺れ、自分が笑いを噛み殺しているのだと数瞬遅れて気付く。

けれど魔女が何かしようとしたという疑いには反論するなり同調するなりしなくてはならないかと考え顔を上げると、その動きに氣付いたのかリズが一步前に進み出る。まるで私に何も口にするなど言っているような、牽制するような動きだった。

焔の見えない窓辺から溢れる光が眩しい程に鎧を照らし出す。するとこの黒に溢れた玉座にも温かさが広がるようで、思わずほうと息をついてしまった。

北風は冷たく今も身を震わせるけれど、どことなく春に近い温かさがそこにはあったから。

靴裏から伝わる絨毯の柔らかさは若草のように新鮮で、一瞬だけ自分が別の場所に迷い込んでしまったような錯覚に襲われた。

光を絡めとるように更に足を踏み出す銀の鎧に、懐かしい女性の事を思い出す。性別も見目も違うのに、一体何故。

そういえば、前にもこんな事があったような。

あれは皇妃様でもリズでもなくて、もっと別の誰かだったような気がするのだけれど。

「口が過ぎるぞ」

こめかみよりも少し頭の裏に近い部分を指先で押さえ、沈んでいた記憶を手繰り寄せようと目を閉じる。その刹那斬りつけるような声が聞こえてきて、思考と記憶はあつという間に霧散してしまった。刺すような痛みにも目を開く。……もう少しで手に入りそうだったのにと半眼で前方を睨みつけると、銀光の奥で狼狽する幾つもの気配を感じた。とはいえ別に見えない魔女の視線に狼狽えたわけではない。

「な、何？ お前誰に向かって」

「口が過ぎるぞ、と申し上げたのです。少なくとも、陛下の御前で申し上げるべき事ではない。それは相手が誰であろうと同じ事ではありませんか？ 宰相殿」

恐らくそれはリズよりもずっと位の高い人間だったのだろう。

怒気に震える声が掠れて響くと、リズは渋々ながらといった様子で丁寧話し始める。だがそこにも侮蔑に満ちた感情が籠められている事は確実に、余計に相手の怒りを煽ってしまふ。いえ、きつとそれを狙っているのね彼は。

気色ばむ文官や近衛騎士達は今頃憤怒に湯気を立てんばかりの赤い顔をしているに違いない。姿が見えないから絶対とは言えないけれど、そのぐらいの怒気が伝わる事は確かだった。仮に彼等の中に赤い顔をしていない人間がいるのなら、それは単に胃を痛めて顔を真っ青にしているかどうかの違いなのだと思う。

激情に駆られ、恐らく誰にも聞こえないであろう笑い声が今度こそはつきりと聞こえてくる。

背後を振り返り責めるような視線を送ると、玉座に座す炎帝が余

り笑わせるなど言う風に片手で腹を抱えているのが見えた。

……それだけ苦しいのならばいっそ大声を上げて笑ってしまえばいいものと思わないだけじゃないけれど、それ以前に一体どうしてこの中で笑っていられるのかという事の方が疑問に思えてならない。私にとってはひたすらに面倒で頭を悩ませるような状況も、彼にとっては日常茶飯事なのだろうか。ならばこの状況を一刻も早く收拾してもらいたい所だ。

視線を前に戻し、ヴァノッサよりもなお高い位置に存在する麦色の髪の毛を見つめる。

風にそよぐそれは決してこちらを振り返らないが、私の前から退く気配もなかった。退いてしまったら私は臣下達の視線に晒される、それが更なる怒号を生むと思つての判断なのかもしれない。賢明な判断だ。当人である魔女が考える事ではないと思つただけだ。

口々に放たれる反論の言葉に彼は口を噤んだままだった。

真つ直ぐな立ち姿で怒号を受け止め、それを流すリズムの姿はこの場の誰よりも堂々としていて隙がない。心を波立たせる事など何一つ無いのだとその背が言っているようだった。

あの短気な騎士が、と胸中で呟き瞠目する。けれど感心したのも束の間。

「氷の魔女などと、異端が皇城内を彷徨っているだけでも怖気が走るというのに」

誰が放つたのか分からない言葉が、その感心を打ち砕いてしまった。

「口を慎めと言っている」

光の強さに比例するように影が濃くなる。

その中に立つリズムの声もまた、光と影のように一際鮮やかに耳を打った。

「よもや御忘れではあるまい」

どちらかと言えば光の方が鮮やかに見える銀の鎧が微かに動き、腕が剣の柄に触れられる。けれどそれは抜剣される事なくただに柄

に触れるのみで、誰に向けられるでもない。なのに皆、狼狽を露に
一歩引いてしまった。文官ならいざ知れず、近衛騎士までもが。

一体今リズはどんな顔をしているんだらう。そんな好奇心に似た
想いが顔を覗かせる。

けれどそれを見ることは叶わぬまま、深く息を吸い込んだリズは
饒舌に言葉を紡いだ。敵かに、ゆっくりと言い含めるように。

「華月の魔女レイアステイ殿は陛下の寵妃。我らが守り仕えるべき
相手ではあっても、在らぬ疑いを掛けられるような立場の御方では
ない」

刹那、ヴァノツサと私の肩が一際高く跳ね上がった。ヴァノツサ
は笑いの衝動に、こちらは純粹な驚きにだ。

露出した肩を撫でる風の冷たさなど気にならなくなるほど、その
言葉は衝撃的だった。

驚嘆に息を呑みそうになり、慌てて飲み込む。口元を押さえ、す
ぐに離してからリズを見上げると彼はやはりこちらを見る事無く更
に続けた。

「仮に寵妃という立場がなくとも、彼女はこの国の為に尽力する事
を陛下に誓った救世主。呪われるだの殺されるだのと被害妄想に取
りつかれた思考はいい加減に捨ててしまえ」

それこそ本人を前に言うべき事じゃない気がするのですが。

物怖じしないリズの言葉に心の中でそう考えるものの、とても彼
らしいとも思えたから苦笑を漏らすに留めておいた。するとようや
く口を出す気になったのか、遠く背後から力ある低音が放たれる。

「そういう事だ。それで？ 俺を無視して寵妃に疑いを掛けるお前
達に俺はどんな罰を下せばいい？」

無視していた事は確かだとしても、大笑いしながら傍観していた
のは何処のどなたでしょうか。

今度は苦笑さえも与えず心底からの呆れを視線で送ってやる。す
るとヴァノツサは紅蓮の瞳を細めてくくつと笑ってから指先を臣下
と騎士に向けた。ただそれだけの動きなのに、彼等はびくりと身を

竦め慌てて膝を折る。

「し、失礼致しました！」

「陛下の御身に何かあったものだと思います」

「何事もない」

罰を下されると思ったのだろう。宰相も文官も近衛騎士も、等しく冷や汗を流していた。

額に浮かぶ汗は離れた位置に立つ私の視界にもはつきり見え、きらりとした雫が絨毯を汚さないように何度も拭われる。ここまで来ると哀れなものだ。

彼等が感じた不穏な空気は決して嘘偽りではなく真のものだったのに。

「只の戯れだ」

それでもヴァノツサはさらりとそう返す。

ビリオン様が現れた事も魔女が奪われそうになった事も何一つ口にはせず笑う口元には不敵な笑みしか浮かんでいない。けれど戯れだと言った一瞬に掠れた声は感情を隠しきれていなかったのではないかと思えて、無意識のうちにドレスを握りしめてしまった。少し厚手の織物が皺を刻み、鮮やかに影を生み出す。

魅了のスペルには打ち勝ったけれど、そのような魔術がなくとも迷ってしまった事に対する苦々しい感情が込み上げる。

それは別に罪悪感だとか良心の呵責だとかそんな生易しいものではなく、安易な道に走ろうとした自分を責めるもので。同時に突きつけられた道を今まさに忘れようとしている自分への軽蔑が含まれていた。だからと言って今この場所で向き合うわけにもいかないのだけれど。

「案ずるな。今回の事は不問に付してやる　リズとレイアステイに免じてな」

だからだと汗を流す男達に忍び笑いを漏らしながらヴァノツサが告げると、たちまちの内に安堵の空気が流れる。玉座から伸ばされた手がひらりと一度振られ退出を促すと、その空気は更に濃度を増

しながら扉の奥へと消えて行った。

常ならば大仰な音を立てるはずの扉が慎重な静けさで閉じられ、ぴたりと閉じ合わされてからヴァノツサは口元に笑みを浮かべたまま肘をつく。

「現金な奴らだ」

「ええ。ですがそんな事を言う前に、笑いたければ笑ったらどうです？」

笑いの残滓が張り付いた口の端を見てそう言ってやると、ヴァノツサは愉快そうに大きく笑ってから一人だけ汗を流さずに頭を下げる男を見下ろした。

「臣下の自尊心を守るのも皇帝の務めだ。それよりリズ」

「はっ」

ゆらり、と紅蓮が揺らめく。

それは中心部で煌々とした光を放ちながらリズを真っ直ぐに見据え、揶揄へと変わった。

「やってくれたな」

くつくつと笑いながら告げるのは、皇帝を無視して一人文官達と相対した事に対する嫌味か。

けれど、何も言わず傍観していたのはヴァノツサだ。リズに非はない。

「出過ぎた真似を致しました」

とはいえそんな事で文句を言えるのはこの場では私ぐらいのものだ。だから深々と頭を下げる姿に何て声を掛けるべきか思索するものの、微かに覗く空色の瞳に後悔の色が滲んでいない事を見て取ってしまったから何も言えなかった。恐らくはヴァノツサに言われる事を覚悟であるような態度に出たのだらうと、その瞳から察する事ができたから。

けれどヴァノツサはそんなリズに対して怒るでも揶揄するでもなく、ただ小さく首を振った。

「責めているわけじゃない、褒めているんだ。よくぞあの敵意から

魔女殿を守った　それでこそ護衛騎士。俺もお前を指名した甲斐があつたというものだ」

「有難き幸せに御座います」

意外な褒め言葉にリズは一瞬呆気に取られた顔をしたが、すぐに頭を下げて言葉を受け止める。

主からの賞賛は騎士にとって最大の誉れ。

だから常ならばやましい事が無い限り喜んで受け入れるべきものなだけけれど、やはりリズからは釈然としない雰囲気を感じられた。もちろん彼にやましい事など何一つないのだろう。それでも納得し難いのは、このどこか意地の悪い皇帝が素直に褒めるだけだとは思えなかつたせいかもしれない。

だとすればリズは本当によく出来た騎士だ。もしくは、人を見る目があると言うべきか。

「これからも良く護れよ。……だが、一つ肝に銘じておけ」

「？　はっ」

端正な顔立ちから漏れる笑い声は、最後の一言で鋭さを増す。

唐突に真剣味を帯びた主の声にリズが更に身を低めて頷くと、ヴァノツサは蒼の宝玉を優しい手つきで一撫でしてから言い放つた。こちらからすれば腹立たしい事この上なく、かつ人の話を聞いていなかったのかと思うような事を。

「そこにいる華月の魔女は俺の魔女。他の誰にも渡す気などない事を」

「私は貴方の魔女になつた覚えはないと言っているでしょう」

一体何度言えば理解してもらえるのだろうか。

私は誰の物でもなければ、ヴァノツサの魔女になつた覚えも無いのだと言うのに。

第一リズに言うべき事でもない。もし誰かに言わなくてはならぬのだとすれば、それはビリオン様に言うべきなのだと思うから。言つて欲しいかどうかは別として。

意味の分からない言葉を言われてさぞかし困惑しているだろうと

考えリズを見ると、彼はやはり困惑を示しながらも軽く目を見開き汗を流しているようだった。先程までの臣下達とは違ってそれはじわりと滲む程度のものであったけれど、尋常ではない事は一目で分かる。

……一体どうしたのかしら。確かに今の言葉は牽制を含んではいたけれど、リズには心当たりなどないはずなのに。

そう考えながらもとりあえずは言うべき事があると結論付けた私は、堂々とした真っ直ぐな声に苛立混じりの言葉をぶつけてやる。

すると彼が柳眉を顰めてやんわりとした不満を示したが、黙ってやるつもりなど毛頭なかった。

もしかして彼は、この期に及んで私が不満に素直に応じてやるほど優しい魔女だとも思っているのだろうか。

「貴女は少し黙っていてくれ。口を挟まれたら皇帝の威厳が損なわれるだろう」

「その程度で損なわれる威厳など元より大した事が無いという事でしょう。それに、私が自分に関する話で口を挟めぬ程大人しい人間ではない事を貴方はよくご存知のはずでは？」

「相変わらずよく回る口だな」

「御褒めに預り恐縮ですが、貴方に言われたくはありません」

饒舌さと減らず口を叩いた回数なら私は貴方に到底及ばないわ。

そんな気持ちをもそのまま詰め込んで言っていると、ヴァノッサは敵わないとばかりに肩を竦める。

「とにかく、よく覚えておけ」

「はっ」

一瞬の間を開けてリズが空気を震わせる程の声を張り上げる。

そうして勝手に私を自分の魔女にしたままさっさと話を終わらせてしまったヴァノッサは、何かを思案するようにふむと呟いてこちらをじっと見つめた。

いや、私だけじゃない。リズと私を見ているのだ。

「何か？」

「いや」

熱は感じないまでも、どこか居心地の悪い視線に身動きしながらもそう問うと彼は即座に答えてから窓の外を一瞥した。

首都フェンネルを見ているのだろうか？

楽しそうに煌めく瞳にふとそんな考えを抱くものの、それが外れである事を数瞬の後に聞かされてしまった。

「ツヴァイの協力を得て教育改革をするのが楽しみだと考えていたんだ」

「教育改革？」

「魔女への偏見に凝り固まったモーリス大陸全土の教育改革だ」

確かにミルヒシュトラークとそんな話をしていた気がするけれど、でもそれは今楽しみにすべき事ではないのではないだろうか。

第一何百年にも渡って続けられてきた教育の改革が一年二年で終わるとは到底思えない。

そんな考えを悟られたのだろうか。

「何、簡単な。なあリス」

「……？」

頬杖について軽やかな声でリスに問い掛ける声は絶対の信頼を寄せるそれで、彼は唐突な言葉に意味が分からないという風に不思議そうに顔を上げた。

折り曲げられた長身がほんの少しだけ伸ばされる。ほんの数歩分離れた先で膝を屈する騎士を見下ろすと丁度視線が合うものの、ヴァノッサが言わんとする事など私に分かるわけもないから諦めを籠めて小さく首を振った。光に細い銀が透かされ、鎧の色と混ざり合う。

するとそれを見計らったようにヴァノッサが告げた。

「お前がレイアステイを庇ったんだ。この世の常識を変える事など造作も無い。只の魔女ではなく、華月の魔女さえいればな」

教育改革に付き合うつもりはないと突っぱねるべきなのだろうか、
ここは。

「御言葉ですが陛下、私は」

それとも皇帝相手であつてもそれだけは違つと否定しようとする
リズを褒め称えるべきなのだろうか。

一体どういふ反応をすればいいのだろうか。

そんな風に考え内心で頭を抱えていると、立ち上がったヴァノツ
サがにやりと不敵な笑みを浮かべて言い放つた。反論など許さないと
いう、どこまでも不遜な声色で。

「俺の前ではなく魔女殿の前に立つた。それが全てだ」

きつとそれは責めているわけじゃなく、本当に褒めているだけな
のだろう。

けれどリズはファルガスタの、ひいてはヴァノツサの騎士だ。だ
からその騎士に言うにはあまりに配慮に欠けた言葉のように思
えてならなかつたし、ヴァノツサとてそのぐらいは分かつていたは
ずだ。

不安になつて斜め後ろを振り返ると膝をつくりズの肩が震えてい
るのが見える。

自尊心を傷つけられてしまったのだろうか？ そんな不安が頭を
過ぎり思わず手を伸ばしそつになる。

けれどそれは彼に向ける言葉となる前に別の言葉でかき消されて
しまった。

「誇れ」

放たれたのは、酷く端的な言葉だつた。

「……は」

小さく答えるリズを見て満足げに頷いたヴァノツサは、そのまま
彼に近付き腰に下げられた剣を鞘ごと抜き放つた。そしてそれほど
軽くはないはずの鞘をそのまま彼の眼前に突きつける。まるでファ
ルガスタで古来より行われている儀式のように。

いや、恐らくこれは本当に儀式なのだろう。

皇帝が騎士に剣を渡し自分の騎士だと認める大切な儀式を再現し
た、戯れのように戯れではない所作。

それは常ならば有り得ない事で、息を呑み顔を上げたリズの顔にはありありと驚愕が浮かべられていた。

「陛下？」

問う声が微かに震えている。

それはそうだろう、彼は一度剣を拝受している身。これ以上剣を受ける必要性など皆無なのだから。

もしその必要性が生じるのだとすれば、それは剣を返さなければならぬ時だ。

「案ずるな。俺の剣がないから借りただけだ」

けれどヴァノッサはリズから騎士の任を解くつもりではないらしく、苦笑混じりに首を振ってから鈍い音を響かせてもう一度剣を突きつける。

そうして何も答えられずにいるリズに対し、放熱するように言葉を吐き出した。

「華月の魔女は誰にも渡さんし、譲る気もない。だがお前が彼女を護りそれを誇るのなら、俺はその誇りを認め是が非でも守ってやる。例えこの国中の民が認めずとも、二代目炎帝ヴァノッサの名の下に批判と非難を収めてやる」

だから誇れと告げる声に、もしかしたらこれは魔女の護衛騎士ではなくトリスタン家の人間に対し放った言葉なのかもしれないと思案する。

相変わらず前半部分の言葉の必要性についてはよく理解が出来ないけれど、迷うなど背中を押しているヴァノッサの態度には好感を持つことが出来た。

勿論その程度でトリスタン家と氷の魔女の確執がどうこうなるとは思えないし、元々護衛騎士など不要だと思っっているのだからヴァノッサの言葉は有難迷惑でしかない。けれど氷の魔女に対する処遇でリズが悩んでいる事は勘付いていたから、私の口からではなく主であるヴァノッサの口からああ言ってもらえるのは良い事である気がした。

魔女らしくない魔女と憎しみを抱えながらも対応に苦慮する騎士二人だけでは、この問題への決着はなかなか着かなかっただろう。それが嫌になるほど分かっていったから、尚更に。

薄氷に似た瞳が一瞬だけこちらを窺う。

その瞳に向けて笑ったらしいのか首を振ればいいのか分からずつい曖昧な表情を返すと、リズは呆れたように口元を緩めてから静かに剣を受け取り上体を傾いだ。

「承知致しました」

皇帝に仕える者としては格別の言葉に万感の想いを籠めてリズが答える。

重みのある剣が両の手の平に載せられる様はファルガスタの人間ではない私から見ても荘厳で、思わず紅蓮と空色の瞳に見入ってしまった。

そう、立場は違えど威厳と矜持に満ちたその瞳はまるでビリオン様とマリエル皇妃のようで。

「……………」

そこで慌てて思考を打ち消す。

そして片手で髪をくしゃりと掴むように頭を抱え、神聖な場所から静かに去ろうと踵を返す。

また懐かしさに浸ってしまう所だった。胸中にそんな自責の念が芽生え、思わず舌打ちしたい衝動に駆られながらも前を見る。

無論、過去や痛みと向き合ったり懐古する事が悪いとは思わない。けれど今の自分にはそうするべきではないという想いがあつた事も事実だった。ここは三百年前ではなく、何よりも私には懐古するよりも前にやるべき事がある。だから今はビリオン様の事を考える訳にはいかないのだ、決して。

過去を振り返る事は痛みに繋がり、痛みを抱くという事は心の隙に繋がる。

そしてその隙は魅了のスペルの様な術中に簡単に溺れてしまう事を意味しているのだから。

……けれど、きっとそれだけではない事も私には分かっている。
その上で逃避しているのだとも。

柔らかな絨毯を踏みしめるとまるで過去が追い続けるように足元を取られてしまう。

だがそれには目も暮れずに先へと進むと、ヴァノツサに声を掛けられた。

「行くのか？」

「はい」

多少の不自然には目を瞑るつもりらしく、彼は特段変わりのない声で問う。

それに対し言葉少なに答えるとヴァノツサは私の名を呼んだ後で続けた。

今一番触れられたくない話題に、心が震える。

「後悔しているのか。あの時初代の手を取らなかつたから」

「っ！」

狼狽など伝えたくないのに、反射的に息を呑む。

「……そういう自滅しそうな事を訊くのはやめなさいと申し上げたはずです」

「では自滅させられるとでも？」

「そういう事もあるという話です。今がどうというわけではありません」

「ならば答えてくれ。……そんな顔をされたまま出て行かれたら敵わん」

何故そのような事を今になって訊くのだろう。

訳が分からないままにヴァノツサを睨みつけると、彼は燃え盛る紅蓮を陽光に照らしなお輝かせながらこちらを見据えていた。強い視線は冗談やかからかいではないと告げている。けれど真剣な方がもっと性質が悪い事をこの男は知らないのだろうか。そして何故私がこんな顔をしているのかも。

「後悔は絶望と同義です。ですから私がもし後悔しているのなら、

その時は貴方が絶望する時

「では」

慎重に言葉を選ぶと、ヴァノツサが静謐な声を放つ。

言葉が少ないのは相手も言葉を選んでいるせいだろうか。

ぐるりと思いを巡らせる。しかしどれだけ探しても彼の言葉に続ける良い答えは期待できそうになかった。

代わりに正直な言葉をぞんざいに吐く。

「分かりません。ですが、考えたくもない」

敵意であれ好意であれ愛情であれ、気付いてしまったらきつと感じる痛みは今よりも遙かに鮮烈で鋭い。

だから出来れば気付きたくなくて、顔を背けてしまう。

それは水が無ければ押し流される事のないこの世の淀みのようにどろりとした怠惰な感情で、私はふと水の精霊王の姿を思い浮かべた。

彼ならば淀みを押し流してくれるのだろうか。

知るべきではない答えと共に、淀みごと身も心もどこか遠くへ。

無機質な柱を抉るように指先に力を込める。そうして唇を引き結んでそれ以上の問いは許さないとばかりにヴァノツサを見据えると、彼は一瞬呆気にとられたような顔をしてから臉を伏せた。

「そうか」

熱を孕んだ紅蓮が消え、穏やかな静寂に包まれる。

けれどそれだけでは居心地が悪いので、私はさりげなさを装って別の話をする事にした。

「ビリオン様の残した日記に心当たりはありますか？」

尋ねると片眉が上げられる。

同時に開いた瞳はもう問うような色を発してはおらず、ひとまずの安息を得られたのだと密かに胸を撫で下ろした。

「いや、ないな。皇城内の書物の表題は大体知っているが、そのような貴重な物はないはずだ」

「そうですね……」

あれだけの書物の表題をほとんど把握しているという辺りは、流石炎帝と言うべきなのだろうか。

驚嘆しながらも呟き、ならばどこにあるのだろうかと思案していると逆に問われてしまった。

「そういう貴女こそ心当たりはないのか？ 初代に関しては貴女の方が詳しいだろう」

「そう言われても、皇城には詳しくありませんし」

「皇城にないのだとしたらどうだ？」

「まさか。他の書物ならいざ知れず、炎帝の日記ですよ？」

「だからこそ、だ。俺なら見られて困るものを皇城内に隠したりはしない。勿論初代もそうだろうが、歴史書によると彼は急死したらしいからな。燃やす暇も隠す暇もなかったはずだ」

確かにどうしても見られたくないのなら燃やすなり何なりして書物ごと消滅させる方がいい。

それでも残されていると本人が口にしたという事は、そうする暇がなかったか隠す程のものではなかったという事になる。

そして後者ならばあっさりと皇城内で見つかっていて然るべきだ。ということは前者か。

とはいえ、皇城以外に手がかりなんて……。

「あ」

「分かったのか？」

不意に浮かんだ光景に声を上げるとヴァノッサが意外そうに声を上げる。

彼もまさか答えが出てくるとは思っていなかったのだろう。

「いえ、でも」

けれどその答えははっきり言って彼のような皇族に言うべき事が悩んでしまうから、私は言葉を濁すようにドレスの裾を翻した。

「もしかしたら、という心当たりが幾つかあります。というわけで少し出かけてきてもいいですか？」

「出かける？ どこにだ」

それが言えたら苦労しない。

「城下です。ですが細かい場所は秘密にさせていただきます」

だから曖昧な笑みを顔に貼り付けたまま扉に手を掛けると、即座に近づいたヴァノッサが扉との間に私を挟むように背後から両腕を伸ばした。

長い影が落ち、背中に熱が触れる。その感覚に身を震わせると彼は実に嬉しそうな声を降らせた。

「それは無理だ。俺も付いて行くんだからな」

「はい……？」

今、何と？

意味が分からず頭の上に疑問符を浮かべると鎧が揺れる音がしてリズが声を張り上げる。

それはどこか外にいるであろう臣下達に聞こえてほしいと思っ
ているような、それほどに大きな声だった。

「陛下！？ 彼女は私が」

「ああ、護衛としてお前も連れて行くが俺も行く。復興作業が滞りなく行われているかこの目で確認したいしな。何、途中までだ」

本当だろうか？

さらりとした言葉に心底そう思うものの、彼の皇帝としての責任感
は疑う余地がないからと溜息混じりに首を振る。

「ヴェルナーとヴィクトリアの両通りを歩くだけです」

「なら都合も良いな。丁度ヴィクトリア通りから西地区に行く所だ
つたんだ」

そうして渋々ながら答えの一部を提示するとヴァノッサが満足し
たように戒めを解いた。

とはいえ、このまま共に行くというのは賛同できないものがある。

「貴方がいたら目立ちます」

「それは貴女もだろう？」

「御心配なく。私は髪の色を変える事もできますので」

炎帝が共に歩いていたら嫌でも目に付くだろう。例え隣に歩くの

が銀髪の魔女であろうと金髪の街娘であろうと。

だからこそ拒絶したのに、彼は少し考え込んでから手を打ち鳴らす。

「何なら瞳を紅紫にしたらどうだ？ そうすれば民もツヴァイの星姫だと思っただろう」

「御冗談を」

仮にそう見られたとしても、瞳と髪の色が同じなだけだ。モリス大陸一の美姫には到底なれない。

「貴方に嫌味を言う程の時間があるとは思いませんでした」

だからこそ精一杯の皮肉を籠めて言い放つと、何故かヴァノツサはこちらをまじまじと見下ろした後で盛大な溜息をついてしまった。一体何故こちらが溜息をつかれなければならないのかしら。リズに助けを求めようとしても、彼も何だか呆れているし。

只の戯れに本気で怒っている事に呆れているのだろうか。だとすれば、何と性質の悪い。

確かに私は魔女であって人間ではないのだから人間との比較など大した事はないと思われるかもしれないけれど、それにしても比べる相手が悪すぎないか。

噂だけならばともかく、実物を見た後だから尚更に性質の悪さを感じてしまう。

「何か？」

「……いや、何でもない」

そう思い静かな怒りと共に尋ねると呆れ混じりの声で返され、更に苛立ちが増す。

だから私は簡単なスペルを唱えて手を軽く振った後、彼等の願いの色を纏った。

どうせ炎帝が傍にいるのなら、どんな色をしていても目立つ事に変わりはない。

「行くのなら早く行きましょう。日が暮れたら貴方の家臣も黙ってはいないでしょう」

「あ、ああ……しかしレイアステイ、それは」

「提案したのは貴方です」

ならばいっそ彼等の嫌味通りの色になって、私とミルヒシュトラ
ーセがいかに違うのか見てもらおうと思った。

そうして嫌味を受け入れる形を取れば彼等とて二度と同じ事は言
わないだろう。嫌がらせは私には通じないと理解してさえもらえれ
ば。

たおやかさの欠片もない鋭い眼光でヴァノツサを射抜き、怯んだ
隙に扉を開ける。そうして待ち構えていた臣下達がぎよつとした顔
をするのを見て胸がすく想いを感じながら、ヴァノツサが頭を下げ
るまでしばらくその姿のまま皇城内を歩き続けた。

後になって考えてみればどうしてあんな短気な事をしたのか理解
できない。

けれど頭を下げるヴァノツサが私に向かって貴女は自分の顔を鏡
で見た事がないのかと口にした瞬間感じた殺意は、後になってから
も決して消える事はなかった事を付け足しておく。

第三十四話 生者の墓前

眞実は、時に虚構よりも残酷だと言う。

ピリオン様が残した日記は、その言葉通りの残酷さを背負っているのだろうか。

私が信じている過去を覆してしまつのだろうか。

分からない。分からないけれど、きつと。

「……はあ」

考えれば考えるほど気が重くなってくる。

けれどこのまま手をこまねいているわけにもいかず、私は渋谷城下へと向かった。

例え探す物がどれだけ残酷な事実を突きつけても、逃げるわけにはいかないのだから。

「まだ怒っているのか？」

「元より怒つてなどいません」

皇城を出た先に広がるヴェルナー通りを並んで歩くヴァノツサの聲に堅い声で答える。

けれど言葉とは裏腹に内心苛立ちを含んでいる事は否めなかった。いえ、苛立ちというよりは殺気とも言えるかもしれないわね。

「どうせ私は鏡もまともに見たことがない女ですから持つ色を変えた私に向けてヴァノツサが放つた一言が未だに尾を引いているのだ。」

確かに、モーリス大陸一の美姫と比べるべくもなく顔の造形では自分が負けているという自信がある。ただ、それをあえて指摘しなくてもいいはずだ。

「だからそれは悪い意味じゃないと言っているだろう」

「ではどんな意味がある？」

困ったような声には目も合わせずに早足に煉瓦を踏みしめる。冬の匂いが濃い風が吹き抜け、着ていたドレスを揺らした。

何でここまで腹が立つのだろうかとはもう考えなかった。どう理由を探した所で腹が立つものは腹が立つのだから。

三百年前ほどではないにせよ、それなりに厚い衣服を着込んだ民がさり気なく道を開けながら静かに歩を進めて行く。その様子を尻目にヴァノツサの答えを待つと、それはという言葉が耳朶を打った。「……面と向かって訊かれると答え辛いな」

「貴方のような傍若無人な人間にも答え辛い事があるとは驚きです」けれど結局言い訳は放たれず、私は鼻であしらうように笑ってみせた。

第一言い訳など聞きたくもない。

「おい」

主への暴言に耐えかねたのかリズが叱責の声を上げる。

伸びる銀光が私の肩を掴もうとする。けれどその動きは身動きして避けた。

「リズ殿は黙っててください。これは私とヴァノツサの問題です」肌にはひんやりとした風が触れる。冷たさに震えそうになる体を叱咤してヴァノツサから視線を逸らす。その間にもリズが懨然とした顔を目一杯に浮かべるのが見えたけれど、何と言われても受け付ける気にはなれなかった。たかだか、人間に鏡を見ると言われただけなのに。

そもそも自分はヴァノツサに何と言ってもらいたかったのだろうかと思案するが、答えなど浮かぶはずもない。強いて言うなら、何も言わずにいればよかったのだと結論付ける。金髪に紅紫の瞳にしたらどうかなどと提案されなければ、こんな気持ちにはならなかった。だが、こんな気持ちとは一体どういう気持ちなのだろうか。

自分でも持て余してしまうような感情に吐息する。白くけぶった息がふわりと立ち上ると、ずっしりとしたドレスの重みを感じた。

馬鹿馬鹿しい。

誰にともなく呟き、再び歩調を早める。

人間に何て言われようと気にしなればいいのだ。戯れのような言葉に踊らされていては、とてもじゃないけれど身が持たないのだから。

そう考えていたのを見透かされたように、ヴァノツサが笑いを堪えながら問いを発した。思わず肩がはねる。

「美醜に関して、貴女がそんなに怒ることがあるとは予想外だった」「怒ってなどいないと言っているでしょう。貴方の耳は節穴ですか」「いいや、貴女は怒っているな。よく貴女を怒らせている俺が言うのだから間違いない」

小さな反論に対し、何の自慢にもならないような言葉が返る。堂々とした態度に溜息を漏らすと、素直に私が呆れているのだと受け取ったヴァノツサがふるふる首を振った。

違うんだ。そう言うように。

「俺が鏡を見ると言ったのは、貴女に知って欲しかったからだ」

「？ 何をです」

踵をしっかりとつけ、高らかな音を響かせる。

ゆつたりとした二人分の靴音と、少しだけ早足の自分の靴音。けれど不思議な事にどれだけ早く歩いても彼等を追い越す事は出来なかった。

ヴァノツサの目が私の金髪に目を留める。穏やかな日差しを浴びて煌めくそれを眩しそうに見据える。

細められた瞳に熱が浮かび上がる。それを気のせいだと断じる前にヴァノツサはこちらに手を伸ばしていた。あまりにも自然な態度に身構える事も忘れてしまう。

「貴女は、貴女が思う以上に美しいという事をだ。正直な話、貴女に金と紅紫がそこまで似合うとは思っていなかった」

「ごつごつとした指先が掬う髪が静かに落ちていく。色が違うせいだ、自分の物だとは思えないそれを視界の端に収めながら黙ったま

までいると、今度は手の平全体で触れられる。

周囲に人の姿はない。せめてもの救いに胸を撫で下ろした。

愛おしそうに髪を撫でる手つきが止まり、ヴァノツサの顔に満足気な色が浮かぶ。

肯定こそされないものの、否定もされてはいない。彼の満足心はそこから来ているのだろうかと思った。

勿論否定をしたいのは山々だけれど、何を言った所でヴァノツサが人の話を聞かないことは経験済みだ。最も、普段ならそれを理解した上で更なる反論を試みるのだけれど、何故か今はそうする気にはなれなかった。

黙ったままの私に、正面から声が掛けられる。

「貴女は魔女で俺達は人間だ。そして魔女である貴女は人間の言葉にそう苛立つ事がない」

ヴァノツサのその言葉に、これをビーに聞かせたら彼はどんな反応をするだろうかと思案する。

やれ短気だの冷静になれたのと常日頃から注意している彼としては、ヴァノツサの言葉はさぞや予想外なのに違いない。仕舞いにはあいつには見る目が無いなどと言いそうだ……否定はしないけれど。

ヴァノツサの発言は、私にとっても疑問だった。

なぜなら彼は私が放った魔法を直に受けた事があるのだから。

「そうでしょうか。リズ殿に年増と言われたら腹が立ちましたか」

かといってそれをリズの前で口にすることも出来ず、結局はそんな反論をするに留めた。

輪郭をなぞるように人差し指を滑らせ、あの時感じたささやかな苛立ちをそのまま笑顔に詰め込む。

ぎくりとリズの肩が強張り、足が止まる。

良い気味だと感じた時にはもうヴァノツサの叱責にも似た声が放たれていた。

「……リズ」

「事実です」

何て事を、という心の声が聞こえてきそうなヴァノツサの声にしかしリズはきつぱりと返した。どうしてこうもおかしな部分で肝が座っているのかは分からない。けれど、氷の魔女に対し一步でも引くことができない彼としては、当の魔女に対する言葉を撤回することが耐えられなかったのかもしれない。

居直り、きびきびとした動作で再び歩き始める銀光に忍び笑いを漏らす。

それでこそトリスタン家の末裔だ。そうやって意味もなく賞賛する。

今の今までトリスタン家の事など知りもしなかったくせに、だ。

勿論それは適当にこじつけただけの理由に過ぎない。

私としては、魔女嫌いで通すリズの方が接しやすかったから笑っているだけなのだから。

口元を隠すように手を当て小刻みに肩を震わせる。笑っている事が即座にばれてしまうような態度だったけれど、幸いそれを咎められる事は無かった。かといって笑い続ける事もできない。

黙ったままでいたヴァノツサが息を吸い込み、言葉を放つ。それだけで笑いなんて吹き飛んだ。

「永い時を生きている事自体は事実だが、騎士としてあるまじき暴言だ、慎め。あとレイアステイを怒らせていいのは俺だけだからそれも覚えておけ」

……騎士を諭すのは勝手だが、もう少し言葉を選ぶ事は出来ないのかしらこの男は。

ぴり、と痛むこめかみに指先を当てる。痛みが増したのはその少し後だった。

「申し訳ありません」

いえ、そこは律儀に頭を下げる所ではないから。

「御二人揃って、一度痛い目を見て頂いた方が良いでしょうか」

あまりの馬鹿馬鹿しさに痛む頭を抑えながら、溜息混じりに言い放つ。白い息に混じって溶ける言葉はしかし彼等の耳に届かず、た

だ空に向かつて伸びただけだった。

皇城に近いとはいえ、未だ不安定さの残る地面を慎重に歩いて空を見上げる。

そのまま視線を合わせずに尋ねる事にした。

「それで、結局何が言いたいのです」

戯れに 果たしてリスにとつてこれが戯れなのかどうかはさておき 付き合っている暇などないと言外に告げると視界の端で角張った肩が竦められた。

「貴女が人間の言葉で苛立ちを見せるとは珍しいと言いたかったんだ」

「馬鹿にしているんですか」

渋々といった形で発せられた言葉を斬りつけてやると、もう一度肩が竦められる。硬いまめのついた手の平が空を向く。

「誤解してもらっては困るな。俺はただ嬉しいだけだ」

「意味が分かりません」

苛立ちを見せる事が嬉しいとは、まさかヴァノッサはそういう趣味の持ち主なのだろうか。

だとすれば私は今すぐにでもこの男の前を辞したい。こちらにはそのような趣味などないのだから。

第一、怒られて喜ぶような人間を怒っても嬉しくも何ともない。

けれどヴァノッサは私が身を引く事を想定していたのか空に向けた手の平を伸ばした。そのまま腰を抱き寄せる。触れるか触れないかの距離に近づいた体から微かに熱を感じる。その熱より幾らか高い熱を孕んだ声色で言葉が紡がれた。

「少々の事では眉一つ動かさない貴女がそも感情を露にするんだ。それだけの関心が俺にはあるということだろうか？」

「自意識過剰もそこまで来ると気持ちのいいものですね」

気持ちがいいどころか清々しいとも言えるかもしれない。そんな嫌味をたつぷりと籠めて返してやるとヴァノッサの喉が震え低い笑い声が漏れた。

蹄の音が前方から聞こえてくる。それに合わせて腰から手を離した彼は肩を震わせて笑ったまま続けた。

「俺はそう思わないな」

それより、と告げた声は甘かった。唐突な甘さに警戒心を露にする、予想通りの甘い言葉。

「その色も捨てがたいが、やはり貴女には貴女自身が持つ色こそ相応しいな。どうせ認めないんだろうが、貴女は本当に綺麗だ」

一体何がそれよりなのか、そう突っ込んで聞いてしまいたいと思わなかったわけではない。

けれど緩やかに弧を描いて吊り上げられた、どちらかといえば硬質な口の端や甘やかで穏やかな笑みに視線が止まってしまふ。同時に、自分でも呆れるほどの安心感を覚えた。

まるでビリオン様が唱えた魅了のスペルを解除した時のような、深い安堵感に息が震える。

先程までの苛立ちはもうなかった。悔しい事に、今のただ一言で呆れながらも許してしまった。

それを認めた瞬間、安心感が消え竜巻が突如として現れたような荒々しい何かが心の中で湧き上がる。警鐘を鳴らし、それを止めようとし、結局どちらつかずのまま竜巻に飲み込まれそうになる心を必死で押し留めた。

ほら、自意識過剰じゃないだろうか？

そうヴァノツサが言っているのではないかと思つて八つ当たり気味に尻尻を吊り上げた。そんな言葉どこからも聞こえてはこないというのに。

……一体どうしてしまったのだろうか、私は。

こんなの、まるでヴァノツサに醜いと思われていたから腹立たしく思えてきて、綺麗だと言われたから嬉しくなつたみたいではないか。それこそ馬鹿馬鹿しい話だ。

これではまるで。

「ええ、認める気にはなれません」

放った言葉はヴァノツサに向けたものなのか、自分に向けたものなのか。それを判別する事はできなかった。

ただ、私がこうして安堵することを見越して発言したヴァノツサへの牽制としてわざとらしくにこやかな笑みを浮かべてやることしかできない。

出来得る限り穏やかに見える笑みを浮かべながら内心で苦しい想いを噛み締める。

例えば今のヴァノツサの発言が私の苛立ちを消すためのものだったとしたら、彼は私自身さえ知らない気持ちに既に掌握していることになる。その上でこんなからかうような事をしている。

けれど、それなら彼はもっと余裕を持っているはずだという予想が拭えなかった。

もしも彼が予想する通りの感情を私が抱いているのなら、ピリオト様が現れても誰が何と言おうと私が離れていく事に動揺などしいはず。……となれば、彼の言葉は自らの願望から来るものだったのかしら。

それならばいくらでもやりようはあった。要は認めなければいいのだから。

私の感情も彼の甘さも熱も全て認めなければ、事態は決して動かない。

リズや私が危惧するようなことには、決して。

「そんなことより」

身を翻し背後に視線を向けると、ヴァノツサが怪訝そうに首を傾げる気配を感じる。

視界の中には親子連れやこれから店を構えようとテントを手に歩く民の姿が見え、彼等はぎょっと目を丸くしながら道の端へと寄って歩いた。頭を垂れないのは、それを望まれないことを知っているせいだろう。

「城下に来たければ馬車を用意すればよかったですでしょう」

手放して駆け寄れるには位が違いすぎる人間を前に、民が足音を

小さくする。ささやかに変わった空気に溜息を漏らし、呆れ混じりに首を振った。

金髪に紅紫の瞳を持つ女に、騎士の証である銀の鎧を身につけた長身の男、そして紅蓮の皇帝。

こんな訳の分からない取り合わせをした三人が、何故徒歩でフェンネルを歩いているのか未だに理解できないと言わんばかりに。

無論、私一人なら問題ない。多少瞳の色が変わっているとはいえ、そこまでまじまじと見られる心配はないからだ。少なくとも銀髪碧眼よりはいいに違いない。

百歩譲ってリズも許せる。彼は鎧こそ目立つものの、それ以外は取り立てて異質なものは感じられないのだから。

……問題はヴァノツサだった。

ファルガスタの禁色を持って堂々と歩けるのは、この国の二代目炎帝のみ。誰もがそれを知っているというのに、何故包み隠さずそのままの姿で歩こうとするのだろうか。先程まではそれほど人がいなかったから良いとはいえ、これだけの民に目撃されたら民の方が気まづいだろう。

「自分の足で歩いてこそ得られるものは大きい。違うか？」

「皇帝として素敵な考えではありませんが、私からすれば迷惑です」

開店には少し遅い時刻に広げられるテントが眩しい。歩けば歩くほど眩しさが増す中でヴァノツサの言葉を聞き流した。

ヴィクトリア通りに連なる出店に初冬の日差しが照りつける。夏とは違いやや緩やかさのあるそれが映し出すのは炭や小物といった、寒さを気にせず売れるような品物ばかりだった。

「朝市と違ってここの出店は開店が遅いようですね」

「観光客相手の商店が多いからだろう。店も殆どが装飾品専門だ」
眩きに対し律儀なリズの声が返ってくる。なるほどと無声音で返し歩を進めた。

ファルガスタはモーリス大陸の中では比較的温暖な気候だが、それ故ここで売られる生鮮食品は痛みやすい。暑さに弱いことは勿論、

寒さにも弱い食物を外で売るような真似はできないのだろう。

ヴァノツサやリズと三人並んで歩く煉瓦道を馬車が通り抜ける。がたごとと音を立てるそれに目を向けると、簡素な御者台に座る男がぎよつと目を見開いた。視線の先にある紅蓮、その色を持つ唯一の人物の名を思い描いたに違いない。

薄い木の板を通して老年の男がどうしたと声を発した。無論、御者台の男は答えられない。

当然だ、例え中の男が誰であろうと目の前に立つ紅蓮の男こそがこの国で最も高貴な人間なのだから。

「貴方は御自分がどれだけ目立つかももう少し考えた方が良いのでは？」

「それを貴女に言われる日が来るとは思わなかったな。貴女も自分がどれだけ目立つかよく考えた方が良い」

「貴方ほど目立ちはしません」
「謙遜だな。なあ、リズ」

「は……。確かに彼女は目立ちますが」

彼女！ リズの口から私を指し示す言葉としてそんな柔らかい物が出てくるだなんて。

軽口の応酬に付き合わされたリズが目を丸くしながらも何とか顔くを見ながら内心で声を上げる。けれどその先には「陛下の方が目立ちます」という言葉があつたに違いないと内心での評価にそつと付け加えた。歯切れの悪い言葉が何よりの証拠だ。

けれど私自身人の事を言えない事は事実だつた。

顔立ちはともかくとして、今の私はミルヒシュトラークと同じ色を持つているのだ。もしこの中にツヴァイ王家に面識のある人間がいたら途端に目を剥いてしまうだろう。勿論そんな人間がこのような場所を徒歩で歩いているとは思えないが。

ヴァノツサとリズから少し離れてしばらく歩いていると、ふらりと歩く私をただの観光客と見てとつた商売人が声を掛けてきた。

「そこのお嬢ちゃん！ どう？ ちょっと寄ってかないかい？ 首

飾りに指輪にペット用の首輪まで何でも揃ってるよ！」

「いえ、私は……」

恰幅の良いその女性が張り上げる声にささやかに首を振ると「ほお」と背後から感心するような声が耳朵を打つ。瞬間、女性がぴしりと体を凍らせた。

「え、炎帝陛下！ いらしてたんですか!？」

「ああ、復興の様子を見に来たんだが レイアステイ」

居住まいを正し、自分の店の商品に何を言われるか身を固くする女性の姿に申し訳なさを感じているとヴァノツサが軽やかに一点を指さした。胡乱気な視線を向けると、そこには小さな紅の首輪が見える。恐らくペット用の首輪というのはこれだろう。

「これはどうだ？ 良い首輪だ。あの灰猫に丁度いい」

「必要ありません。ビーを首輪で繋ぎ止めたくはありませんので」

銀の鈴が付いた上品なデザインのそれに首を振るとヴァノツサが残念そうに眉尻を下げ、店主が顔を青くしたけれど使いもしない物にお金を使う気にはなれなかった。ビーはあれでも猫の王。人に飼われる事を良しとはしないだろうから。

そういえば、ビーはどこに行っただろう。

傍にいる事の方が稀なのだから心配する事はないとは思っけれど、ビーだってファルガスタにはあまり好意を抱いていなかったはずなのに。

せめてフェンネルを離れていなければいいのだけれどと考えながら、何とか場を取り繕う為に商品に目を落とす。このままでは店主である女性の胃を痛めてしまう。

「……あ」

すると幾つもの指輪の中に見慣れた形の花を見つけ、思わず声を上げてしまった。

「どうした？」

「いえ、何でも。 すみませんが、この花は？」

リズの言葉に首を振り、店主に尋ねる。言葉少なな問いに答える

のはヴァノツサに向けるものとは違うあっさりとしたものだった。勿論今までの会話の流れから私とヴァノツサに少なからず交流があると見てとったのだろっけれど、皇帝と同じかそれ以上に敬意を払って良いとも言えないから丁度良かった。

「リーズネイションっていう、もう絶滅した花だよ。確か、救いとか救世主とかそういう花言葉があったはずだけど」

「救いに、救世主？」

「花言葉にしては大仰だな」

鮮やかな青の宝石で形作られた花弁は確かにリーズネイションのものだ。けれど、花言葉までは知らなかった。ましてやそれがおよそ花言葉らしからぬ言葉であるなんて。

指輪を凝視しながら首を傾げると、ヴァノツサも不思議に思ったのか首を傾げる。元々彼はリーズネイションの存在自体知らなかったのだからそこから驚きを感じているのかもしれない。絶滅した花の名前など、普通誰も知りはないのだから。

ヴァノツサの問いに再び身を固くした店主は、答えを探すように視線を泳がせてからやがてこちらを見据えた。

「古い絵本に書かれていたそうですよ。後に救世主になった男が、想い人であるお姫様からリーズネイションを渡されて世界を救うんです。銀の魔女とは違う救世主の話は珍しいので、知名度も高くって、そんな本があったなんて知らなかった。

「なるほど、それで救いと救世主か。しかしその話は読んだことがないな」

「何分古い物ですから。それに主に出回ったのはツヴァイを中心としたモーリス西部なので」

問いに対して返される緊張した声色にちらりと店主を見上げると、そうと予想しなければ分からないとはいえ確かに少し言葉が訛っている気がする。もしかしたら彼女はツヴァイ出身なのかもしれないと考えながらも指輪に視線を落とした。

高級と安物の中間地点。絶妙な値段で設定されている装飾品はど

れも質が良く、ヴァノツサが勧めただけはあると感心した。

首輪はともかくこの指輪は買ってもいいかもしれない。

そんな事を考えていると、がしゃんと鎧が動く音がした。けれどそれはどこか遠い。

「陛下！」

背後から掛けられる言葉に振り返りもせずヴァノツサを見上げる。恐らくは騎士達がやって来たのだろうと予想していると彼は辟易とした顔を取り繕おうともせず肩を落とす。

「もう少し貴女と一緒に歩きたかったんだがな」

「それは残念ですね。もう機会はないと思いますから全力で悔やんでください」

「貴女は悔やんではくれないのか」

「元より貴方は復興作業の現場に行くという話だったでしょう」

リズと同僚なのか、彼は騎士達に向けて軽く手を上げつつヴァノツサの答えを待つ。その間にも近づいてきた騎士達は主であるヴァノツサをどうやって説得すべきか思案しているようだった。

彼等とて分かっているのだ。もしヴァノツサが動かないと決めたら何を言っても無理だということ。

けれど彼はこの場で私と言い合いをするつもりはなかったらしい。「そうだな。まだ残っている作業も多い……今のうちに来る限り土台を固めておきたい。リズ、後を任せる」

「はっ！」

珍しく素直に頷いたヴァノツサはそう言い残し、踵を返す。直立不動でそれを見送るリズの空色の瞳が再びこちらに戻ってくるまでには結構な時間があった。

これからどうするんだと怪訝そうに細められた瞳に頷く。そうして店主に礼を言おうとすると、彼女はヴァノツサがいなくなっただけか体に力を抜いて何か思い出したように声を上げた。青が日の光に照らされ煌めく。

「ああ、それからリイズネイションにはもう一つ花言葉があったん

だった。多分こつちが本来の意味のはずだよ」

「本来の意味ですか？ 一体何でしょう」

救いと救世主はモーリス大陸西部で知られている意味なのだろう。だとすれば本来の花言葉があっても別段おかしなことではない。

そう考え答えを待つと、彼女は意味ありげに口元を緩めてから指輪を胸元へと持っていくような仕草をした。

「心を預ける。それが転じて最初で最後の恋とも言われてるんだよ。まあ、もう絶滅しちゃったから今は別の花で代用してるけどね」

からかうような声に息が詰まりそうになる。

その姿を見てもしかしたら彼女は私とヴァノッサの仲について考えたのかもしれないけれど、私の考えは違った。

三百年前の冬の日に渡されたリイズネイシヨンの種。

あの種には、何か意味があったのだろうか。ただ私が好きな花だから渡してくれたのだらうか、それとも。

「……そう、ですか」

たっぷりの間を空けて答えると彼女は何を思ったのか花屋を指差した。日差しに赤や白の花が眩しい。

「代用の花でいいなら教えようか？ 炎帝陛下の御知り合いなら安くなるはずだよ」

「いえ、大丈夫です。ありがとうございます。そろそろ行きましょうか、リズ殿」

「？ ああ」

代わりとなる花の名前も気になる所ではあったが、それよりも先を急いだ方がいいだろう。ヴァノッサがいないのなら尚更。

そう考えて申し出を辞退し、少し店から遠ざかる。そのまま小さく頭を下げた。

結局何も買わずに帰ってしまう事になってしまって申し訳なかったからだ。

「冷やかすような真似をしてすみませんでした」

「そんな！ 間近に炎帝陛下の御顔を見られただけで十分過ぎるん

だから気にしなくていいんだよ！」

だが店主はそんな事全く気にしていなかったようで、謝る私に向けて慌てて手を振った。大きめの口元に笑顔を浮かべて大丈夫だと言ってくれる。明るい態度に安堵してもう一度頭を下げると、視界の端にリーズネイションを模した指輪が目に入った。

吸い込まれそうな青は恐らくツヴァイの鉱石だろう。

先日ミルヒシュトラークとヴァノッサがツヴァイの鉱石の質が良いと話していたのを思い出す。

……もう輿入れまで時間がない。

私は認めないし気付きたくないと結論づけた気持ちしが再び脳裏を過ぎるのを感じて、慌てて思考を遮断しながらヴィクトリア通りを進んだ。

目指す場所はそう遠くはない所にあるはずだった。

ヴィクトリア通りの終点、煉瓦が切れ土で覆われた道を歩いた先に目当ての物はあった。

頻繁に人が往来しているのだろう。煉瓦や石で整備されていないとはいえ、周囲を覆う草花は丁寧に手入れされ白い凜とした花が咲いていた。全ての季節で咲くように計算でもされているのだろうかと考えながら歩を進めると、リズが困惑したように呟いた。

空色の瞳が前方に見える石を捉える。

「貴様の目当てはここか？」

「ええ」

静かに、その場所に眠る多くの者に敬意を払うように付いてくるリズに向けて簡潔に答える。

それから声を荒らげようとする彼に先回りするように付け足した。「安心してください。私とて墓を暴くつもりはありません」

民が敬愛し、畏れ、時に憎悪した皇帝達。この先にあるのは彼等

が眠る墓地だった。

皇帝の座を降り、天寿を全うしてなおファルガスタを見守る者達の墓を暴くつもりはさすがの私にも毛頭ない。けれど何となく来てみたくなつたのは事実だ。この場所にはあの人の体も魂もないのだと分かつていても。

「初代炎帝の墓はどこにあるのでしょうか」

「もう少し先だ。特異な皇帝だったから、従来の順序とは違って一番景色がいい場所に建てられたと聞いている。俺も何度か行ったが確かに眺めはいい。まさか墓の中身が空だとは思わなかったがな」
「空かどうかは分かりませんが、本物の遺体がないことは確かですね。っ!？」

苦々しい声に苦笑で応じながら進むと、突如として訪れた感覚に足から力が抜けた。前に倒れこみそうになるのを必死に堪え、リズの腕を掴む。

全身を気怠さが襲う。その感覚に、もう疑いを持つ事はしなかった。「どうした？」

急に腕を掴まれリズが息を呑みかけ、すんでの所で押さえる。その隙に体勢を整えて私は掴んだ腕を後ろに追いやった。

「少し下がっててください」

「何を馬鹿な事を。墓の場所が分からないと言ったのは貴様だろう」
「初代炎帝陛下がいらっしゃいます。ですから貴方はどうか後ろへ」
どうしてこの場所にいるのだろうと考える事もしない。ただ在るがままの現実を受け止めて対処するのみだ。

そうしなければ自分の身一つ守れる気がしない。ましてやリズの安全など。

白い花卉が揺れる。魔力が風を生み出しているのだと察知して無理矢理リズを後ろに追いやると、それを待っていたように陽炎が現れた。

冬の日差しには不似合いな炎は冬宮に現れた時のように揺れなが

ら人の姿を形成していく。尋常ならざる光景にリズは今度こそ息を呑むも、反射的に剣を抜き放っていた。陽炎については何度か目にしているから動揺も少なくて済んだのだろう。

「下手に攻撃しないでください。相手は魔導士ですし、剣術もそこいらの騎士で太刀打ち出来るものではありません」

けれど剣を抜くなどは言えなかった。騎士に向ける言葉としてはあまりに酷だと知っていたからだ。

ぐつと唇を噛みしめる気配から視線を逸らし、前方の陽炎を見据える。突き刺すような色を持って凝視していると、耐えかねたように言葉が漏れた。

「金の髪に紅紫の瞳……まるでツヴァイの星姫みたいだね。一瞬見間違えたよ」

「御冗談を」

返す言葉がつつけんどんになるのは、まだ少し先程の事を引きずっているせいだろうか。

感嘆めいた声に言葉少なに返すと、喉を低く鳴らすようにして笑い声が放たれた。

人の姿が形成され、燃え上がる紅蓮が風に揺れる。草花の中に立つと火事を起こしているようにも見えた。これだけ穏やかな声で雰囲気、そのくせ色だけが熱を孕んでいる。

笑い声が収まると、現れた人型　　ピリオン様は挨拶も抜きにからかうように続けた。

「君は多分、彼女のような美姫と自分は比べ物にならないと思っ
ているんだろうね」

「当然です」

「そう、確かにそれは間違いではない。私も君の意見が正しいと思
う」

やはり言葉少なに答える私にピリオン様は得心したとばかりに頷いた。腕を組み、大仰に頷く姿はやはりからかっているようにも見えるけれど彼がそのような態度を取ることが珍しくてつい口を噤ん

でしまった。

リスにしてもそうなのか、詰問すべきかどうか考えあぐねているようで何度も私と向けてちらちらと視線を投げている。どうにかしろと言わんばかりの空色の瞳に、どうにもならないと肩を竦めてやる。

こんなにも短時間に現れる事は稀だけれど、目の前にある全てが事実だ。

そして彼が不穏な事を言い出さない限りこちらから喧嘩を売るわけにはいかなかった。いざとなったら彼はすぐにも地脈を破壊することができるのだから。

悔しいけれど、それも事実だ。問題は本人がそんな私の考えをまるで気にしていないかのような言葉を発している事なのだけれど。

「私からしてみればモーリス大陸一の美姫より、君の方が美しく見えるのだから。勿論、他の人間はどうか知らないけれど。でも、どちらが美しいかなんて事はどうでもいいことだよ。私には君さえいればいいんだから。ツヴァイの星姫は二代目と共に在ればいい」

それで、と続ける声は軽やかだ。

こちらの意図や緊張を、あえて無視した軽さにやはり身が硬くなる思いがした。

「その色も君によく似合うけれど、私の前でまで仮面を被るつもりかな」

揶揄しているのか苦々しく思っているのか、僅かに悲しげな声に慌てて幻術を解く。

胸元に揺れる金糸が銀に変わり、見えないけれど紅紫は蒼に変わったことだろう。

申し訳御座いけませんと非礼を詫びると、ますます苦々しい顔をされてしまった。それでもどこか優しさを感じるのは、生来彼が持ち得る特性なのだろうと結論づける。

「責めたわけではないよ。ただ、銀と蒼の方がより似合うと思っただけだから。太陽は私には少し眩しすぎるんだ」

眩しそうに目を細め、それでも太陽に顔を向けるといふことは嫌ってはいないということだろう。その事に小さな安心感を覚えて緊張を少しだけ解いた。

「私も太陽より月の方が好きですけどね……。それよりも、もう御帰りになつたのでは？」

「自分の墓を見るのは感慨深いと思つてね、寄り道がてらよく来るんだよ。ここは景色も良いし、フェンネルを一望することもできる。それで君は？ このような寂しい場所に用があるとは思えないのだけれど」

「……貴方の日記の手がかりを探しに参りました。墓を暴くつもりはありませんが、少しでも関わりのある場所を手がかりにしたかったので。それにしても三百年経つても御忍びで城下に来ているとは思いませんでした。ヴァノツサが城下によく下りるのはきつと貴方譲りなのでしょうね」

出来れば別物だと思いたくもあつたけれど、ビリオン様も在位中に散々皇城を抜け出していたのだから似ていると言えなくもない。いや、恐らく血筋だと断言した方が早い。

そんな所を似せてしまつぐらいならば温厚さを与えてあげてほしかったのだけれど、そこまで口にするるとリスが顔を真赤にして怒りだしそうだからやめておいた。

口元に呆れを載せると、ビリオン様がふと気付いたように眦を上げた。

「ところで前から気になつていただけけれど、どうして二代目だけちゃんと名前を呼ぶのかな。それも、呼び捨てにして」

恨みがましい目は、自分が在位していた時はほとんど名では呼んでくれなかつたと暗に言っているのだろう。

当たり前だ。誰が命の恩人であり自分より遥かに身分の高い人の名を呼ぶことができる？

炎帝陛下、もしくは陛下と名を呼んで振り向いてもらえるだけでも御の字だというのに。ビリオン様は御自分にそれだけの価値があ

る事を失念しているんじゃないだろうか。

そう思ったものの口にした所で納得してもらえない事は分かっていたから、結局は別の理由をつけることにした。

「名を呼ぶのは約したからです。それ以上の理由もなければそれ以下の理由も御座いませぬ。呼び捨てなのは、単に出会いが悪かったせいだと思います。勝手に結界を壊して慇懃無礼な態度でドアを開けると言い出すような常識知らずな男を、敬称付きで呼ぶ義理などないと思いましたが」

長つたらしく説明したのはどこか後ろめたい気持ちがあるせいだろうかと自分自身に問い掛ける。

けれどその答えを出す必要はなかったらしい。ビリオン様は別の言葉が引つかかったように首を傾げる。

「約束？」

「詳しくは申し上げられません。それも約に入りますので」

名を呼ぶ理由は、彼の弱さだ。その弱さを誰にも話さないと決めた以上、例えビリオン様相手にも話す事はできなかった。

恐らくあの日、北の孤島からモーリスへと渡った船上での出来事をビリオン様は知らないだろう。精霊達は気まぐれで過去の些事についてそれほど覚えてはいない。四大精霊ぐらいになると別だとは思っけれど、幸い彼等は私の味方だ。だから何も言わなければ知られる事はない。ヴァノツサの弱みが知られる事も今後一切ないはず。

なるほど、と感慨深そうな呟きが漏れる。同時に微かな敵意を含んだ声も放たれた。

「君に約束を交わさせるとはね。私も二代目に対する認識を改めなければならぬな」

「させません」

敵意と殺意の交差点。そこに心を置き紅蓮の瞳が揺れるのを見て、私はビリオン様と皇城の間に立った。

微かな驚きを交えた敵意には殺意が感じられない。それでも護る

ように立つ私を見て彼は微苦笑を浮かべた。困ったような顔はこちらの気持ちを宥めようとするように傾げられた。

「私はまだ何も言っていないよ。それに何もしていない……そんなに気負わなくてもいいんだよ。大体二代目は皇城じゃなくてフェンネルにいるんだろう？」

「貴方の目を見て何もしないと樂觀視できるほど気楽な性格ではありません」

ぴりぴりと警戒心をむき出しにする事は不敬だと分かっていたけれど、人命がかかっているのだから気にしてはいらなかった。だから態度を改めるつもりもない。

ピリオン様はそれも理解してくれているのか、別段拗ねる様子を見せずに口元を緩めた。さらりと流れる紅蓮の髪が彼の顔に影を生む。

「知っているよ。慎重すぎる程慎重で真面目で、加えて口数が少ないから大人しい性格なのかと思えば芯が強くてびっくりさせられた事が沢山あるのだから。君の性格を間違って覚えているわけではないよ。だから少し心配ではあるのだけれど」

「心配？　ピリオン様に心配を掛けてしまうような事などありましたか？」

背後でリズが私の名を呼ぶけれど、それに応える余裕はなかった。皇城とピリオン様の間に立っていると彼は静かに頷いた。そのままの静謐さで続ける。

「それだけ気負っていると、いつか緊張の糸が突然切れてしまうんじゃないかと案じているんだよ、私は」

言葉通り心配が滲み出た沈痛な声に視線を下げる。緊張の糸を作り上げているのはピリオン様自身なのだが、存在ごと否定していいものか考えあぐねているとその隙を狙ったかのように明るい声が飛び出した。

ほんと両手を合わせた仕草は空元気とも言える陽気さだった。

「そうだ。ここで話していても埒が明かないし、解決させるために

も一つ良い提案があるのだけれど」

「提案、ですか？」

良い提案と言われて身構えてしまつのは失礼だと思つものの、肩が強張るのは無意識だから仕方がないと諦める。

代わりに声だけは冷静に問い掛けると、ビリオン様は眉尻を下げ、苦笑を漏らしながら努めて明るい声で返した。お互い心中をそのまま口にする事のできない立場である事はよく分かつていたのだ。

墓石に指先を触れさせ、そつと土埃を払いのける仕草は傍から見ても優しい。不死掛けを施されているとはいえ生きながらにして自分の墓前に立つというのは、あまり気分の良いものではないと思つていたのにそれを感じさせない優しさだ。

意外に感じながら目を見張っていると、ビリオン様の視線がこちらを向けられた。どこかいたずらっぽく揺らめく紅が細められる。

不覚にもその瞳一つで自分が身構えた事が間違いではないと悟つてしまった。

「探しているのが私の日記だというのなら、私がついて行つても何ら支障はない。そうだろうか？」

「それはそうですが……。まさか私達と一緒に城下を歩くなどとは言いませんよね？」

フェンネルにはヴァノツサもいるのだからそこまでは言わないだろう。言わないだろうけれど、確認しなくては気が済まない。そう思つて尋ねたのに嫌な予感はそのまま的中した。

「久しぶりに君と一緒にフェンネルを歩きたいんだ。その騎士には即刻退場願いたい所だけれど、追いついたら罰を課せられるかもしれないから強制をする気はないよ」

そこは問題じゃない、と漏らしたのは私かリズか。

がくりと肩を落とし半眼で見上げるとビリオン様は意外そうにくすりと笑つた。意外性で言うのならビリオン様の方がよほど意外だと思つただけれどそれを指摘することはできない。

ヴァノツサ相手ならともかく、ビリオン様にまで嫌味たらしい言

葉を使う気にはなれなかった。例え望まれたって無理なものは無理だ。

「駄目かな」

黙りこくっていると、不安そうな声が掛けられたから瞼を伏せて思案する。

普通に考えてみれば勿論駄目だ。

故人と思われている人間を連れて歩いている事がもし知られたら問題になるのだし、第一今はヴァノツサがフェンネルにいるのだから。彼等が鉢合わせでもしようものなら混乱は更に大きくなる。ただでさえ炎帝が城下をふらふら歩いているだけで皆驚いていたというのに。

かといってこのまま別れていいものか……。

薄く開いた視界の中ではピリオン様が息を詰めて答えを待っていた。この場で最も大きな発言力を持ち、いざとなれば強引にでも私達と共に来ることができるのでそれとは感じさせない不安な感情が彼を儚く見せていた。

緊張した面持ちに、一言命じてくれたら洪々頷く事ができるのに、この人は決してそれを望まないのだろうということが分かった。それは同時に断つても何の不都合も生じないということでもある。有無を言わずといった体を取りたければ事前に言うのだろうから。

ついと視線を逸らし、ピリオン様が眠るとされる墓石を見据える。冬宮と同じ淡い白の墓石の前には多くの花が供えられていた。きつと初代炎帝を慕う民が頻繁に訪れては供えるのだろう。彼が生きている事など露と知らずに。

「分かりました。日記を探す間だけです、御一緒させてください」
おい、とりズに肩を掴まれる。本当に連れて行く気かという囁きを途中で遮って頷いて見せた。

困惑に揺れる空色の瞳を安心させるように笑みを刻んで付け加える。

「離れているよりよほど安全です。時間稼ぎに過ぎませんが、今

のファルガスタに憂いなど一つもあつてはならないのですから」

自分自身に言い聞かせるように努めてゆつくりと話すトリズは頷いたものの、不承不承であることは表情を見ても明らかだ。文句を言わないのは私の言葉に理があるからだろう。

けれど、他にも理由が　それもかなり個人的な感傷が　そこにあることをリズは知らない。

私はただ民に知られたくないだけだった。

国の為に尽力した初代炎帝が、誰よりも国を愛した人が今やこの国を害そうとしているなど知られてはならないことだ。時期的な問題もあるにせよ、例えどれだけ平穏な時代であつたとしても。

初代炎帝の思惑は、二代目炎帝への不審に繋がる。彼等が酷く似通つた容姿を持つが故に。

胸中の声にはつと息を呑む。それを悟らせずに踵を返した。

「行きましよう。あまり長居をしていると怪しまれます。そうでなくともこのような時期に皇族が墓地を訪れる事など皆無でしょう。民に見つかつても上手く説明が出来そうにありません」

百年戦争以前の皇帝達の名が刻まれた墓石の前を歩き、凜とした白い花弁が風にそよぐのを視界に入れつつヴィクトリア通りへと戻るべく前に進んだ。

自分の為でも民の為でも、ピリオン様の為でもない思惑はもう忘れる事にした。

大股に進むとドレスの裾が広がり、段になつた黒がふわりと風に絡まる。墓地を訪れるには丁度いい服だったのだと内心で感じていると、二人も後に続く。

「……陛下に御報告しなくてもいいのか？　これは貴様の独断だろう」

「言つたはずです。今のファルガスタに憂いなど一つもあつてはならないと。ヴァノツサはファルガスタそのものでしょう」

一瞬横に並んだリズの悩みをたっぷりと含んだ重苦しい声を一蹴しつつ、確かにそれはそうなのだけれどと肩を落とした。

精霊を召喚することもせず、騎士や皇帝に助けを求める事もしない。

だから今のこの状況を見たヴァノッサに甘いだの考えなしだのと誇られた所で文句など言えるはずがないと胸中で溜息を漏らす。そう、私は甘いし浅慮でもある。自覚していたからどうなるというわけでもないのだけれど。

「心配しなくても何もしないよ。とはいえ、二代目や今の臣下達に会わなくて済むのならそれに越したことはないのだけれど。民はともかく臣下達には私とヴァノッサの違いが見破られてしまわないとも限らない」

会話が聞こえてきたのだろう。弧を描いた口元を向けて告げたビリオン様の言葉にリズが一步下がる。すると自然とビリオン様が横に並んだ。

清涼さの感じられる花の匂いが鼻腔をつく。人柄を表すような優しい香りはどこか懐かしかった。何となく身を引きそうになるとそれさえ見越したビリオン様が歩調を落とした。

少しでも体を傾けたら手が触れ合いそうな程の距離で並ぶ。

ヴァノッサという時のように堂々とはしていられないけれど、ビリオン様は私が隣以外の場所に立つ事を許してはくれなかった。時々前を向いて隣に立つと、威厳とも言える緊張感が少しやわらいだ。それが悪かったのだ。

「こんな風にビリオン様ともう一度フェンネルを歩けるなどとは思いませんでした。三百年前も、つい先程までも」

ぼろりと溢れてしまった言葉には嘘などなく、本音だけが籠められていた。

そんな事を言おうと思っていたわけでもないのに。むしろ言いたくなかったというのに。

確かに懐かしい気持ちがないと言えば嘘になるし、このまま歩いていられたらと考えるいわけでもない。けれど私達の関係はとうに瓦解しており、あの頃には帰れないことをお互い知っていた。

それでもと、ささやかな反抗心を覗かせる自分の声が頭に響く。死よりは生を。苦笑よりは笑顔を見たいと思つて、何が悪いというのだろうか。

……どうしてこうやって共に歩くことに罪悪感を覚えなくてはならないのだろうか。

どこで何が壊れてしまったのか、何を間違えてしまったのか。それを散々考えて溜息を漏らした。例え答えが出た所で、もう意味などないのだからと。

大地を癒せても風を呼べても、過去にだけは帰れない。分かりきつていた事なのに、胸が痛くなつた。

「そんなに辛そうな顔をしないで」

そつと、春風のような優しい声が掛けられる。その声に首を振つて、私は再び前を見据えた。

高台に位置する皇城の下に広がる城下。そこから流れ出る喧騒を追つて無意識にヴィクトリア通りに視線を滑らせた。そのまま西に顔を向ける。見えるはずのない紅蓮を探すように、このどこか居た堪れない状況から救つてほしいと願うように。

救世主である事を求められているのは私であつてヴァノッサではないにも関わらずだ。けれど当たり前とも言える立場に構つていない事もまた事実だつた。

「辛くなどありません」

言いながら、何て大きな嘘をついてしまったのだろうかと罪悪感を覚える。ビリオン様にも分かつているのだろうか。苦笑を深めたきり何も言わずにいてくれた。

リズがついてくる気配を感じながら、ともすれば地面に縫いつけられそうになる視線を必死で前に向ける。

一体私はどうすればいいのだろうか。

この人の命を在るべき姿に還さなければならぬ。それは分かっている。なのに未だに覚悟ができない。

隣を歩いている彼は今が好機だと言わんばかりに隙だらけだ。今

なら何らかの策を講じる事が出来るはず。術者がいない状態で不死掛けを解く方法は分からないけれど、道を見つけるまで彼を足止めすることならば。

遠くで金槌を打ち鳴らす音がする。どこか陽気さを感じさせる男達の声も。

隣に並ぶビリオン様の足を今止めなければ、彼等の行動の全てが無に帰してしまう。

地脈を破壊するということは世界が堕ちて行くということだ。そして世界に抱かれて生きる全ての命が奪われてしまうということでもある。ヴァノツサはファルガスタの民の為に私に救いを求めたけれど、事態はファルガスタに限った事ではなくなっていた。

スペルを唱える事に大義が必要だとしたら、これほど十分な大義もないだろう。

世界を救うため、命を護るため。立派すぎて眩暈がするようなこの大義なら私がビリオン様を攻撃しても誰も文句は言わない。けれどできなかった。

「どこに行くおつもりですか。今のフェネルはビリオン様も私もほとんど馴染みのない土地も同然になっているはずですが」

「どこでもいいんだよ。ただ、二代目と鉢合わせることがないようにはしないといけないけれど」

「では東へ。ヴァノツサは西地区に行くと言っていましたから」

「そうか。それなら東に向かいながら途中でヴェルナー通りを南下しよう。あそこは貴族が多いから私が歩いていてもそれほど騒ぎになりはしないだろう」

てきぱきと行き先を決めていると背中に刺すような視線を感じ、首だけを振り向かせる。憤怒の表情を隠しもせずはこちらに向けるリズはビリオン様を連れて歩く事に勿論反対なのだろう。それに関しては意見が一致しているのだけれど、かといってビリオン様を放っておけるわけもないので首を振ってみせた。

覚悟がこちらにない以上、地脈は彼の手の中にあるも同然なのだ

から。そう、覚悟がないせいでこんな状態になっている事を私は誰よりも自覚しなくてはならなかった。罪悪感と自分自身への苛立ちが渦巻く中、無理矢理に冷静な思考を手繰り寄せて胸中で問いかけた。

何も覚えていなければ、こんなに苦しくなかったのだろうか。ヴァノッサと出会うより以前の記憶を失くし、ただ彼の願いにだけ耳を傾けられたのならこんなに悩まなかったのだろうか。同じ姿をするピリオン様に多少驚きこそすれ、迷いなどなかったのだろうか。もしくはピリオン様への情の全てを三百年前に捨てていたなら。考えても埒が明かないと分かっているも考えずにはいられない。一体私がどんな悪い事をしたのかと自己憐憫に浸るくらいならば、栓の無い空想でも描いていた方がまだ良かった。

初めて陽炎を見つけた時のように、どうしてですかと泣くことはもう出来なかった。

泣いても事態は変わらず、むしろ時間を無為にする分だけ悪化してしまう。

もう時間が無いのだ。ファルガスタにも私にも、そしてピリオン様御自身にも。だから急がなくてはならなかった。

ピリオン様が再び消えてしまう前に、決断しなければ。

第三十五話 密約

糸を巻くように過ぎた時代が手元に戻っていく。

北の孤島にヴァノツサが現れた時を、モーリス大陸全土を地震が襲った時を、魔女の狂宴が起こった時を静かにくるくると巻き戻していく。

そうして戻ってきた糸の長さは三百年分。

けれどその長さはあつという間に糸巻きへと戻り、何ら不自然な点などないように堂々とそこに居座っていた。

彼もそうだった。本来ならありえない時の中に身を置き、超然たる態度で前を見据えている。

ほんの刹那、全ての事情を知る私でさえもこれが当たり前なだと錯覚してしまった程にその姿勢は自然だった。

その錯覚を自覚し感傷に浸るだけの余裕は、もうない。

墓所での言通り、ビリオン様はヴェルナー通りを南下する道を選んだ。

皇城や主要貴族の屋敷がある北地区とは違い、中堅貴族の屋敷によって形成される南地区は他の地区より静かで人の姿も疎らだ。北地区程ではないにせよ、路面も整備されており煉瓦や敷石も真新しい。……恐らくは地震の影響なのだろうけれど。

市場が密に集まるヴィクトリア通りよりも路面が整備されているということは、北地区や南地区 貴族の居住区を優先して復旧させたのだろうと分かる。その判断についてヴァノツサにどうこう言うつもりはなかったけれど、何だかやるせない気持ちになった。

「いつの時代も変わらないものだね」

そんな私の気持ちを汲み取ったのか、ビリオン様が同じくやるせ

ない口調で呟く。

紅蓮の相貌が地面へと落ちる。ざらりと目の粗い煉瓦をかつんと踏み鳴らし、寒風に溶けいるような溜息をついた。

「波風立てないための策とはいえ、同じ民の中で優先順位をつけるのは忍びない。そう考えると二代目はよくやっていると言っべきなのかな」

誰を責めるわけにもいかなないと悲しげに貴族の屋敷を見回すビリオン様の足取りに迷いは無い。どこに行きたいという希望はなかったはずだが、一体どこに向かうつもりなのだろうか。

そんな風に考えながら、癩 فقطと付け足したビリオン様に釣られて溜息を漏らした。

どれだけやるせないと思っけていても、実際ヴァノツサの手腕は感嘆に値するものと分かつてはいる。

貴族を優先することを民に悟らせず、不満感を煽らないのがいい証拠だ。

その為の根回しや体力、資金資源がどれだけ尽しされているかは想像することさえできない。彼は文字通り身を切る思いで働いているのだ。だからビリオン様が素直に褒めるのは間違ってなどいかなかった。

……ただ、これだけは言わせて頂かないといけない。

「確かにヴァノツサはよくやっているとします。ですが、
」
ヴァノツサが全身全霊を賭けて戦っているのは、ファルガスタを守っているのはひとえに危機が迫っていたからだ。

その危機はまだ去っていない。だからこそ付け加えなくてはならなかった。

歩く速度は緩めずに陽だまりの中を歩く。時折車輪の音がして馬車を通り過ぎる音がした。蹄の音がその中に混ざるのを耳に留めていると、ビリオン様が軽く肩を竦めるのが見えた。

「分かっているよ。全ては地脈破壊が原因と言いたいのだろうか？
君は」

はい、と何故かこちらが肩身の狭い思いをしながら消え入る声で頷くと後ろを歩くりズが代わりに声を張り上げた。

一瞬存在を忘れていた銀光が視界の端をちらつく。麦穂のような髪がさわりと風に揺れていた。

「全ては炎帝の御英断次第ではないかと」

苛立ちや不満のないからりと乾いた声は、その分ずっしりとした重みを持っていた。少なくとも私にとっては。

銀髪の魔女と紅蓮の皇帝を護るように背後を歩くりズは私達が人目を避けていることを知っているので、気配を察知しては自分が前に出て人払いをしているようだったが、こうして言葉を発したのは墓所を出て以来初めてだった。

市の活気も民の喧騒も聞こえない閑静な居住区に響く声は、私の弱気を払拭するように大きい。もっとも、人に察知されない程度のものであるのだけだ。

ぴんと背筋を伸ばして堂々と意見する姿は、何の遠慮も見受けられない。

かつての皇帝とはいえ、リズが今仕える主はヴァノツサだ。そして護るべくは皇帝を含むファルガスタ全土とそこに住まう民。両方を脅かすビリオン様に遠慮などではいられないというのが彼の言なのかもしれないが、ここまで来るといっそ潔い。

分かりやすい敵意より、淡々とした声の方がリズの場合性質が悪い。

「私にとっての英断がお前達にとっての英断にはならない、そういうものだよ。できればレイアステイにとって良い道であればと思わないわけじゃないけれど」

「炎帝陛下は民よりも魔女を優先している。そういう解釈でよろしいのでしょうか」

「その解釈に間違いはない。そしてこの解釈を覆す気もない。だから私は何だかんだと言いながらそれほど同情はしていないんだ」

淡々とした声に平然と返すビリオン様が指し示す「お前達」とは

ヴァノツサヤリズを含めたファルガスタの民のことだろうか。

誰にも見られないように眉を顰め、思考を巡らせてそつと吐息する。

一体どこで何が間違ってしまったのだろう。

何度も発した問いが再び心にわだかまる。どれだけ考えても答えなんて見つけれないのに、考えずにはいられない問い。

けれど今それについて深く考えているわけにはいかなかった。

今隣にはビリオン様がいる。今までにないほど長い時間を、こうして共に過ごしてくれている。相手の意図をより深く察するために、これは好機なのだ。その為にはより多くの言葉を引き出す必要があるのだから、考え事に費やす時間などない。

情報を引き出せるだけ引き出して、彼の中にある思考を読み取ってその上で判断する。自分が彼に対しどうすべきなのかを。

どう力を抑えているのか、今はビリオン様の傍を歩いても具合は悪くならない。体調不良の懸念を抱かなくて良い点も大変に助かる出来事だった。いつもは眩暈と吐き気で正常な判断などできそうになかったから。

「……どうあっても地脈破壊を止めては頂けないのですか？」

足取りだけが軽く、しかし心は錘を投げ込まれたように重たい。

もう幻術をかける事を止めた銀髪と一緒に胸に指を立てる。肉の奥にある心臓が苦しそうにゆっくり脈打った。

「個人的な感情だけで言えば止めたいと思っっているよ。でも、事態は私個人のみで動いているわけではない」

「不死掛けを施した術者ですね」

ちらりとこちらを覗き込む気配の後、ビリオン様が本当に申し訳なさそうに告げる。

いくら申し訳なくされても事実が動かない限り何の慰めにもならないのだけれど、そんな態度を取らせてしまったことだけで罪悪感を感じるのは今までの関係が関係なせいだ。

細路地などほとんど存在しないような南地区の大通りは、時折馬

車が行き交う以外に誰の影も落とさない。

その中を奥へ奥へと向かいながら、私は意を決して尋ねる事にした。

「教えてください。その術者とは一体何者なのです。魔女の狂宴で魔女も魔導士も姿を隠したはずなのに、何故ビリオン様の前に姿を現したりなど」

人間は三百年も生きられない。

かつて北の孤島でアマンティに告げた事実はどれだけ文明が発展しても変わらない絶対のもので、それは性別も立場も何もかもをも凌駕する。唯一例外なのは魔女や魔導士だけれど、そもそも彼等は人間としては扱ってはもらえない。

畏怖と嫌悪でもって接される魔女達は確かに長寿の種族だから、見当違いとも言えないけれど。

今更なことを今更胸中で呟き、でもと続ける。それでも人間が生き続けられる方法が、一つだけある。

私不死掛けと呼ばれるその方法は禁術中の禁術で、更に言えば術者の消耗も激しい。

ビーに不死掛けを施した時は無我夢中であまり詳しいことは覚えていないが、向こう一週間は寝込んでいたはずだ。

だからこそ分からない。

それだけ消耗してまでもビリオン様を生き長らえさせたかったのが誰なのか、目的は何なのか。

ビリオン様と会話しても不毛だと悟ったのか黙り込むリズの鎧が揺れる音と自分達の足音だけが響く中、決意を籠めた真っ直ぐな声にビリオン様が苦笑いした。

「すまないが、それを答える事はできないんだ。君が二代目との約を守るように、私にも約がある」

微かに歪んだ口元を見て、卑怯だと思った。

これだけの被害をもたらしておいて、周囲を巻き込んでおいて自分の事情は語らないなど。

けれどそれ以上言及する事はできなかつた。私が守る約という言葉が引つかかつたせいだ。

口を噤んで視線を逸らしてからきつと前方を睨みつける。温度を増す苛立ちに彼の方を見ていられなかつた。

地脈破壊を指示している人物。それを突き止めるためならヴァノツサはきつと約など放棄しろと言うだろう。彼にとつて一番大切なのは国と民。自分は二の次なのだから。でも言えなかつた。

何があつても約を守りたいという意地ではない。こちらから情報を与えても、必ずしも望む情報が得られるとは限らないからだ。その証拠に「君が話せば私も話すよ」なんて言葉は出ていない。今ここで一人口を滑らせるのは、それだけの愚行だつた。

喉から手が出そうな情報をどうにも上手く引き出せない。ただ、時間だけが過ぎていくばかりで。

せつかくの好機に何も出来ていないことが苛立ちに繋がつて、私は肩を怒らせながら荒い息を吐き出した。

今までこれほどの苛立ちなど感じたりはしなかつたというのに。

空気に砂の味が混ざっているせいだろうか。それとも遠くで復興作業が行われていることを知っているせいだろうか。焦燥感が収まらない。何も分からないことが怖くなる。

私はどうしたらいい？ どうすれば事態は丸く収まる？ そんな問いは情報が足りなさすぎて選択肢を提示する事さえできなくて、それが怖くて腹立たしかつた。……強硬手段に出る覚悟のない自分の日和見主義に一番腹が立てているのだから責められるべきは自分なのだけれど。

半歩前を進み始めた私の背中に、困つたような溜息がぶつかつた。「私の生死を分けた出来事を話す事はできないけれど、別の話をする気ではいるよ。……その角を曲がつた先に見覚えは？」

溜息が誰のものかは分かつていたので無視して歩いていると、唐突にそんな声が耳朶を打つ。

ぴたりと足を止め焦点を合わせると、確かに少し歩いた先に曲が

り角がある。だが一体それが何だというのだろうか。

不審に思い黙ったまま歩を進める。足早に角を曲がると坂道があり高台に続いているようだったが、それだけだ。

けれど、見覚えはと訊くのだから私はここに来た事があるはずだ。三百年前とは違うはずの光景をじつと見据えながら、追いついたピリオン様とリズが隣に並ぶのを視界の端に確認する。

右端に紅蓮が並び、煉瓦道に溶け込む。それに何か見覚えがあるようなと首を捻り、数秒後に弾き出された答えにあつと息を飲んだ。「ここは、もしかして」

そうだ、私は確かにここに来た事がある。

口元を手で覆いながら呟くと、陽炎とは違い極めて人間らしい所作でピリオン様が頷いた。

「あの頃とは少し変わってしまったけれど、私と君が初めて出会った場所だよ。覚えていてくれたんだね」

一瞬何を言いたいのかわかりませんでしたという言葉は喉の奥に引っ込める。

「ピリオン様こそ。もう御忘れになってしまわれたものだとばかり」
「忘れるはずがないじゃないか。あの日は、私にとって一番忘れがたい日になったというのに。それにこの場所も忘れる事なんてできないんだ……ここを歩いていたら私は君に出会えた」

最後の言葉は、心から愛おしむように発せられた。

先を歩き始めるピリオン様の背を追うと、確かに馴染んだ道であることを再認識させられる。この先にある高台がどんな景色を見せてくれるのかも、私はよく知っていた。

あの日、と彼の声が耳朶を打つ。

嬉しそうに、懐かしそうに放たれる言葉に耳を傾けていると頭一つ分よりも高い所にあるピリオン様の頭が坂道の上に向けられた。ヴァノツサやリズほどではないが、それなりに鍛えられていると分かる肩や背中が微かに揺れる。

「夕日が沈む中を一人で駆けて、何かから逃げているようだったか

「私が声を掛けたんだっただね」

優しい声が紡ぐ言葉に、ゆっくりと記憶を手繰り寄せる。

走るのが面倒などと言っていていられないような状況に振り回されていた自分の姿が、昨日の事のように思い出された。

「はい。気付いたら私はフエンネルにいて、ただでさえ記憶がなくて混乱していたのにいきなり現れた四大精霊達に追われたんです。契約をするからつべこべ言わずに領けと言われて」

未だに、あの時の混乱の理由は分からない。

四大精霊は揃いも揃って適当な答えしか返さないし、何故私を見つけたのかも教えてはくれなかったから。

三百年以上経ってもそうなのだ。あの日の自分の混乱も領ける。

「結局追いつめられて契約をしましたが、今考えても謎の多い出来事でした」

素直な気持ちを告げると、ビリオン様は首だけで振り返ってくすりりと笑った。

「そうだね。記憶喪失だけでも珍しいというのに、その上精霊にまで追われるなんて事を経験したのはモーリス大陸広しと言えども君ぐらいのものだよ」

「あんな目に遭うのが何人もいたら大変な事です……」

異論はないとがっくりと肩を落とし、更に笑みを深べるビリオン様に追いつこうと歩幅を大きくする。そんな私の後ろをついてきながら、初めて聞く話にリズが目を丸くしているのが見えた。じつとこちらを見る空色の瞳に、聞かれてもいいのか？ と言われているような気がして小さく頷いた。隠すような話でもない。

傾斜のきつい坂道は、貴族達が決して自分の足で歩かないからこそその造りなのだろう。運動不足の自分には少し辛い。

少しずつ上がり始めた息を悟らせないように坂道を上っていると、左右に立ち並び圧迫感を見せていた屋敷が消え視界が開けた。薄い青空が広がり、まるで今上っているものが空への階段であるかのようになってしまう。

ほう、と息をつき空を見上げる。そんな私にビリオン様は柔らかな笑みを向けた。

細められた目が穏やかな色を湛える。微笑ましくこちらを見る以外に何の意図も感じられない表情が、さらりと恥ずかしくなるような台詞を吐いた。

「あの頃は恥ずかしくて言えなかったけれど、私はあの時既に恋をしていたんだよ。銀の魔女に似ていたからとか綺麗な顔立ちをしていたからとか、そういうのもあったのかもしれない。でも一番は君の言葉があつたからなんだろうね」

不意打ちに息が詰まる。呼吸が荒くなっていたせいか、詰まった息が器官に入り込む。

けほ、と咳を二度三度してから顔を上げる。ビリオン様の姿が陽炎のようにぼやけるのは、視界が滲んでいるからなのだと気がついた。

「えっと……あの時、私は何て？」

身体的にようやく安定して、それでも精神的には不安定なまま尋ねる。動揺しすぎて口調が砕けてしまったけれど、放った言葉は取り消せない。

坂を八割上りきったビリオン様は、涙目になった私を気遣うように首を傾げる。

だが、どうして咳き込んでいたのかを察したのだろう。低く笑いながら答えた。

「避けなかつた私に向けて、怪我したらどうするの！ って、すごい剣幕だったよ。まあ、精霊が追って来ているのだからと思うと頷けるんだけどね」

何て馬鹿な事を。

ビリオン様の言葉を聞いて即座にそう自分を罵った私は、やはり彼相手に強行突破をする覚悟がないのではないか。

ふとそんな事を考えてしまい落ち込みながら溜息を漏らすと、彼は軽やかな声のまま続ける。

「君は私が炎帝だと言うことを知らなかった。でも、自分は少し変わっているからと言った後も変わらない剣幕だったね」

「……馬鹿な事を言ったものだと思っていきます」

本当に馬鹿な事を言ったものだ。

言われてみれば確かに私はあの日ビリオン様を怒鳴りつけていた。これから四大精霊がこぞつてやって来るというのにぼんやり立っていたから、注意をするつもりだったのだ。そしてそのままさっさと去るつもりだった。

次期皇帝として育ち、怒鳴られた事などなかったであろうビリオン様相手に平身低頭という言葉を見殺しして、だ。いくら無知だったとはいえ、今思い出しても恥ずかしい。

じわりと汗ばんだ額を押さえ、深々と溜息を漏らす。

この汗が冷や汗なのか普段使わない体が発する疲労なのか、考える気力もない。

誰よりも自分自身に呆れていると、ぴたりと足を止めたビリオン様が慌てて首を振った。鮮やかな紅蓮がふわりと揺れる。

「そうじゃない。逆なんだ。嬉しかったんだよ」

「え？」

けれど何故そこで嬉しいと言われるのかが分からなくて思わず怪訝な顔を見ると、彼は取り繕うように饒舌さで言葉を紡いだ。

「少しぐらい変わっているからといって血が流れてもいいわけじゃない、王であるうと民草であるうと魔女であるうと人間であるうとそれは変わらないって君は言ってくれた。それはつまり、私が誰であつても心配してくれただって自惚れたんだ。この髪や瞳や血筋がなくても、自分が一人の民でも」

照れたようにはにかむビリオン様が告げたのは、これもまた忘れてしまいたい言葉だった。

民相手に皇帝と変わらないと告げるのはそれほど問題ではない。萎縮はされてしまうかもしれないが。

だが、皇帝相手に民と変わらないと言うのは如何なものか。

……どうしてももう少し言葉を選べなかったのかしら。

いくら喜ばれているとはいえこれにも呆れざるを得ない。ついと視線を逸らし溜息を漏らすと、その不穏さを察知したピリオン様が「本当に嬉しかったから気にすることなんてないんだ」と付け加えた。

「私はまだ帝位を授かって日が浅かったから、緊張や葛藤で毎日息が詰まりそうだったんだ。城下になんてあんまり行ったことがなかったし、民の顔もよく知らなかった。だからあの日下りてみたんだ。自分を守るべき民がどうやって生きてるのかを確かめるために」

そんな話、初耳だ。

目を見開いてピリオン様に顔を向けると、彼はようやく不穏さが拭えたと言わんばかりにほっとしていた。

おいでと私に向かって手招きし、隣に並ぶまで待っていた彼のその表情を真正面から見つめる。精悍な顔立ちに浮かぶどこか柔和な雰囲気は、彼が持つ激しい色を和らげているように見える。いつだってこんな風に穏やかに笑うこの人は、政務の時だけ冷淡とも言える冷静さで善政を敷いていた。

そのはずだった。

だからあの日、彼がどうしてここにいたのかをあまり深く気にすることもなかったのだ。

南地区に住む貴族でも尋ねたのではないかと後々推測はしたのだけれど。

「答えは出ましたか？」

押し潰されそうな重圧を、逃げるわけではなく受け止めるために城下を訪れたピリオン様はそこで何かを見つけたのだろうか。

思いがけず静謐な声に対し、少しの間が空いた。

ああ、と頷く声はしかしその間を感じさせないほどに誇らしげだった。

「私一人では見つけれなかったけれど、答えはちゃんと見つけれた」

来てごらんと手を伸ばされ、咄嗟に掴むときゅつと握り締められる。手を引かれるままに坂道を登り切ると、想像とは違うものの概ね予想通りの光景が見えた。

「精霊達と契約した後で、この場所に来たのを覚えているかな」

「勿論です。あの時も人氣がなくて、私達がここにいた事を知る人間はいませんでした」

言いつつぐるりと身を捻って視界を巡らせる。

建物や木々はなく、視界を阻害する物はない。長く急な坂道の先に待っていたのは、そんな簡素な高台だった。

フェンネルを一望できる、皇城よりも見晴らしの良い場所に立つ。吹き抜ける北風がびゅうと髪をなびかせるが、不思議と寒いとは思わなかった。仮設テントの姿が点々と見える事が地震の傷跡を残しているものの、それでも尚フェンネルは栄えていた。

見えないまでも、ヴェルナーとヴィクトリア両通りの辺りから活気づいた気配が伝わってくるような気がした。東地区からはヴァノツサが采配を振る声が聞こえてくるような気も。

大きくはためくドレスなど気に留めずフェンネルに釘付けになっていると、ピリオン様はやはり誇らしげな声で告げた。

「君はそこから見える景色を見て綺麗だと言ったね。これからもっと豊かになる国だとも。百年戦争を終えたばかりで民はまだ疲弊を拭えず、御世辞にも整備されているとは言えない城下を見てそう言ってくれた。あの時に心が決まったんだよ」

それが答えなのだろう。

すうつと吸い込んだ息の音から放たれる言葉に神経を傾け、真っ直ぐな決意を受け止める準備をする。

苛立ちの殻がぼろりと取れ、心の中心を覗かせながら待った。

例え現状がどうであつても、当時の気持ちに偽りはないのだと信じたかった。

「君が綺麗だと言った国を守りたい、君が言った通りに豊かな国にしたい、君が悲しみながら怒らないよう血が流れないようにしたい。

願うでもなく自然に口にした言葉を叶えたかった。そうしたら、私に向けて笑いかけてくれる気がしたから」

民に向けて演説をするように、朗々とした声が響く。

穏やかに微笑んでいる事が多く、口数はそれ程多い方ではないピリオン様がこれだけ言葉を尽くして話す姿は珍しかった。握られた手を離してもらう隙さえ与えない巧みな話し方は見事だ。

多分それは、返事がなくても私が聞いていると信じているからだろう。

実際それは間違いではないので彼の好意に甘えて黙って話を聞く。「私が皇帝だと告げた時は流石に驚いたみたいだけど、それでも君は私の手を取ってくれた。信頼を寄せて、傍にいてくれた。ピリオンと呼び捨てて呼んでくれなくなっても、敬語を抜きで喋ってくれなくても傍にいてくれたから頑張れたんだ。君のおかげで辛さは消えたから、頑張ったというのは少し間違いかもしれないけれど」

いくら記憶がなくなるとも、皇帝相手に敬語も使えないようではないとその時の私は思っていた。

いえ、正確には思わされていたというべきかしら。

常識知らずだった私に物事を教えてくれたのは皇城に勤める人間達だったから、敬語云々もそこから来ているはずだった。勿論理屈を説明された後は自分自身の意志で態度を変えたのだけれど。

だからあの時の判断を私は間違いだとは思わない。思わない、けれど。

こんな風に淋しげに話されると、罪悪感が拭えない。

「徐々に私自身が国と民を愛せるようになって、やっと堂々と君の隣に並べると思っていたんだ。でも駄目だった。私は少し自惚れすぎていたんだ。君は何があっても私の手を取ってくれると信じていた。君の痛みなんて無視して」

ピリオン様が誇らしげにしていたのはそこまでだった。

次の瞬間浮かべられたのは困ったような苦笑いだ。

「……何の御話ですか？」

ようやく発した問いにビリオン様はやはり困ったように笑ったけれど、次の瞬間には冷徹な表情でフェンネルを見下ろしていた。

唐突に変わった表情にぎょっとしていると、硬質な声が耳朵を打つ。

「戦を起こさせない為にツヴァイの姫を娶る。それは必要な事だったと今でも言える。でも私はその前に君に全てを打ち明けていなければならなかった。君の気持ちを確かめて、その上でツヴァイに返事を出すべきだった。でも君の存在だけは隠し通さなければならなかったから、下手に動くこともできなかった」

「隠し通す？ 誰にです」

「ツヴァイ王家だよ」

予想だにしない答えに、ぽかんと口を開ける。

「ツヴァイ王家？ 何故です？ 私と彼等は何の関わりもないはずです」

慌ててそう言いながら頭の中でツヴァイ王家と自分の関係について洗い出してみる。

だが、どう頑張っても答えなど出るはずがなかった。私が関わったツヴァイ王家の間人はマリエル王妃とミルヒシュトラーセ、そして遠縁で言えばリズのみなのだから。

これがビリオン様が私に与えられる情報の一つなのだろうか。

でも、幾ら何でも突飛に過ぎる。第一私は秘匿されている事さえ知らなかったというのに。

混乱する私をよそに、ビリオン様は冷徹な表情に剣呑さを載せて遙か西方を睥睨した。丁度そちらにはツヴァイがある。

「彼等は白銀の魔女を探していた。百年戦争を終わらせた魔女を探し、ツヴァイに迎えるつもりだったんだ。……当時の王が妻にと望んでいたから」

白銀の魔女を、妻に。

知らなかった、いや知らされなかった事実息を飲み、ですがと声を荒らげた。

「私は」

「そう、君は違う」

怒声になりつつある声を遮りビリオン様が頷いた。燃え上がるような紅蓮が更に熱を帯びる。

「君の瞳は翡翠じゃない、海の蒼だ。それに私は翡翠の瞳を持つ白銀の魔女を愛したんじゃない。華月の魔女レイアステイを妻に迎えたいと思っていた。けれど、銀の髪を持つというだけで王の関心を引いたら？ 功を焦ったツヴァイの臣下が手を回したら？ それこそが戦争の火種になったら？」

ぎくりと肝が冷えて反論を飲み込む。事態がそれほどまでに深刻なものだったなんて。

銀の魔女、最果ての魔女が救世主。

モーリス大陸で最も有名な白銀の魔女は、物語上では最果ての島にいととされている。

位置情報としてはたったそれだけの、不確かな情報。

ましてや、実在したかどうかさえ怪しいような大戦の英雄だ。勿論あの頃は百年戦争を終えたばかりだったから、戦時中に白銀の魔女が発見されたのなら誰かが聞き知っている話ではあるのだし、実在していたのはまず間違いないだろう。だが会ったことのない存在だ。

私だけではない。恐らくはツヴァイ王でさえもそれは同じはず。なのになぜ。

疑問に思い、空いた方の指先で唇に触れながらしかしビリオン様の言葉が大袈裟とも言い切れずにいた。

ツヴァイからの使者として皇城に現れたミルヒシュトラークも言っていたではないか。

ツヴァイ王家は白銀の魔女に対する思い入れが強く、兄王に至っては私が本物の白銀の魔女か気になって仕方がなかった様子なのだ。三百年の時を経た現代でもそれだけの執着を見せているのだ。

百年戦争の傷跡が癒えぬ時代でその執着を否定する事など出来よう

はずもない。

秘め事を告白するような低い声は、当時の事を思い出しか硬い。「私は皇帝としてもビリオン・ヴァン・ファルガスタ個人としてもそれを許さないけれど、君は流れる血を恐れてツヴァイに自ら身を捧げてしまいかもしれない。だから君の情報を隠して安全だと判断できるまで、君の存在を安易に漏らすことができなかった。マリエルにもそれは伝えてあつたし、彼女も了承していたんだよ。彼女も父王の白銀の魔女への執着心に恐怖を抱いていたらしいから、私達は君を隠し通す為に手を組んだんだ。見返りとして、マリエルと結婚する事になつてしまつたけれど」

「マリエル皇妃が……」

知らなかつた事実を次々と公開される動揺に、声が震えた。

二人の結婚の裏側にあつた取り決めなんて知らなかつた。

あの威厳に満ちた二人の視線の応酬が、幸せそうな笑顔が、全てその取り決めて生まれたものだつたなんて。

無論、そんな事をしなくともツヴァイ王家の姫とファルガスタ帝の婚儀は執り行われたのだろう。けれど、こんな。

こんな風に自分が軸になつているだなんて知らなかつた。

「彼女とてファルガスタと戦を起こしたいとは考えていなかったからね。勿論同意見だつたから受け入れられたのだけれど」

「そんな、そんな事一言も！」

リズが息を呑む中、震える声をそのままに叫ぶように反駁した。

「第一、御互い利害が一致しているのなら、何故ビリオン様は約を破ろうとなさつたのです!? 建設された後宮に月宮と名付けていたではありませんか!」

「破られたからだよ」

え、と言葉を詰まらせる私を横目にビリオン様が淡々と続ける。

怒りなのか憎しみなのか悲しみなのか判断できない、複雑な顔をして。

「マリエルを正妃に据える事が条件だつた。だから君が側室になつ

たつてマリエルは構わなかったんだ。でも彼女は約束を破った。君の情報はとうにツヴァイに筒抜けになつていたんだよ」

「そんなはず……！ マリエル様が約を破るなんて！」

「トリスタンの、妹姫ですか？」

震える声でそう問いかけたのはリズだった。

音がしそうなほど勢いよく首を向けると、リズはやや顔を蒼白にしながらビリオン様を見据えていた。

その顔を見て全て察してしまった。情報が漏れたのはきっと。

「末裔でもその情報は伝わっていたのか」

「確証はありませんが、トリスタン家が氷の魔女の情報を詳しいのはその影響かと」

「良い読みだ」

騎士相手だからかヴァノッサのような口調で鷹揚に頷いたビリオン様にリズを責める気はないようだった。もつとも、責めるつもりであるなら間に割つて入つても止めるのだけれど。過去の私達の出来事に対する揶揄を子孫にすべきではない。

「その騎士の言う通り、マリエルは妹姫に君の情報を与えていた。そして妹姫は父王に悟られてしまった。けれどその時には状況はこちらに傾いていたから、ツヴァイは決して手が出せなかったんだ。マリエルが流した情報には瞳の色的事もあつたから、何とか王も踏み止まれたんだと思う。状況が変わっていたら戦になつていた可能性もあつたけれど、そんな暴挙を許すほど私もお人好しではないから」

「過大評価も過小評価もない、事実だけを告げる言葉に間違いはない。」

初めてビリオン様と会った時から少しの月日しか流れていなかったというのに、ファルガスタは戦を恐れなくても良い程に発展を遂げていたのだ。

けれど、当時はそれを知らなかった。知つたのは状況が少し動いてからの事だ。

「それで私を後宮に？」

「約束は破られ、戦の心配もない。あとはただ間者から君を守るために後宮に匿えれば終わりだったからね」

後宮が建てられ、そこに月宮と名付けられたあの夜に私は自分の立ち位置がいかに不安定化を思い知らされた。

否、元々不安定ではあったのだ。どこから来たか知れない記憶喪失の魔女など、どう考えても立ち位置が安定する要素がない。けれどさして気に留めずにいられたのは、庇護してくれる人間達がいたからだ。

だからあの時不安定を感じたのは、自分を庇護してくれる夫婦こそが不安定だと知ったせいかもしれない。

今になってこうして事実を聞かされてみると、その不安定さに拍車がかかった。

元々約によつて成立した関係ならば、そしてその約が破られたのなら不安定になって当然なのだ。

けれど、それが分かっているても激昂するのは止められなかった。

「マリエル様はビリオン様を愛していらしたのです！」

政略結婚ならば必ず婚儀を執り行う事ができる。

ツヴァイの姫であれば正妃の座は確実なのだし、排斥される事も決してないだろう。

それならば何故マリエル皇妃が裏で取引を持ちかけたのか。

答えは一つしかない。

彼女はきつと合意が欲しかったのだ。

どこの生まれかも知らない魔女を必死に守ろうとする婚約者を見て、これから嫁ぐのが不安にならない女などいない。例え自分がどれだけ高貴な育ちで勝つ要素しかなくとも、何かに執着した人間の恐ろしさを彼女は知っている。その上で安穩とはしていられなかったに違いない。

だから約を交わしたのだ。政略結婚だからと醒めた考えで見られないように、正妃の座を奪わせないように。国のためだと言わず、

自分自身のために結婚することを選ぶのだと思わせるために。

誇り高い彼女がそこまでしたのは、自尊心を打ち砕かれたくないという気持ちもあったのだろう。

だが、それ以上にマリエル王妃はビリオン様に惹かれていたからそうしたのだと思った。

ツヴァイ王家として国のために尽くすのが当たり前だと考えていた彼女は、政略結婚に対して誰よりも考えが醒めていた。当たり前のものであり、逃れようがないと私に話してくれたことがあるから間違いはない。

その彼女は、それでもファルガスタに嫁いだのは僥倖だったと幸せそうな顔で話を締めくくったのだ。

あの笑顔が気持ちの全てを裏付けている。

例え私の予想と本心がずれていたとしても、この気持ちはきつと思いは違いない。

「真実愛していた人に裏切られるような真似をされて、あの御方が傷つかないでも御思いですか！」

「ならば私は愛する人と共に生きられないのか！」

放った激昂よりも更に大きな声にびくりと身を竦める。

言葉を封じられ押し黙る私に一瞬だけ申し訳なさそうな顔を浮かべてから、ビリオン様は苦々しく吐き出した。どろりとした感情ごと外に押し出すように。

「マリエルは確かに血を流したのかもしれない。だけど約束が破られた地点で私も血を流した。それなのに君はマリエルの痛みだけしか見てはくれないのか」

今にも泣いてしまいそうな顔に見えた。

目尻が吊り上がり、激する態度でこちらを睨めつけるその姿は持つ色と相まって激しい熱を内包していたけれど、何故かそう思った。その言葉にようやく心が落ち着きを取り戻し、じわじわと冷たさが侵食していく。

決して言うてはいけない事を口にしてしまったのだと今更気付い

た。

そしてビリオン様がマリエル様の事を本当に大切に想っていたのだということも、何となくだけれど気付いてしまった。

それが恋ではなかったにせよ、確かに愛情はあったのだ。……それが救いになるのかは分からないけれど。

薄い青空に砂埃が舞い上がる。

今も家々を立て直しているのだからなと現実逃避をするようにちらりと考えてから、痛いほどの静寂に満ちた空間に佇むビリオン様をじっと見据える。

口を真一文字に引き結んだ彼は、私が何か言うのを待っていた。

穏やかさをかなぐり捨てて、今まで見たこともないような激しい感情を浮かべながら。

からり、と記憶の糸を手繰り寄せる。その中に少しでも私が与えられる言葉がないか探すように。けれどどれだけ探しても見つける事はできなかった。

彼がマリエル様に与えられた痛みを私がどうこうすることはできない。

当事者でない私に慰めの言葉など吐くことは叶わず、彼もそれを望んではいないだろう。

だから見つけれなかったのだ。無神経な慰めならいくらでも言える気がするけれど、ビリオン様を傷つけない言葉が見つからない視線が徐々に下がり、気付けば顔ごと俯いていた。彼の顔をまともに見ることができない。

不意に、悲しげな声で過去を語ったビリオン様の姿を思い出した。つい先ほど聞いた声が脳裏で反芻される。それから、自分が彼に告げた言葉も。

『少しぐらい変わっているからといって血が流れてもいいわけじゃない』

何度も噛み締めた言葉の終わり、私は勢いよく顔を上げた。

言える事が殆どないに等しい事実は変わらない。それでもこれだ

けは口にしたいくて。

「御免なさい」

そしてその言葉は、最初に出会った時と同じような口調で声で伝えられた。

血が流れる事を厭うと言ったのはその時の私で、ビリオン様はその時の私を大事にしてくれていたのだと知ってしまったから。

唐突に放った言葉にビリオン様が驚いたように目を見開いた。

開きかけた口が何か言おうとするのを遮って、私は言葉を紡いだ。まだ話は終わってなどいない。

「沢山傷つけて悲しませて。貴方の血が流れるのは嫌だったのに、苦しい想いをさせてしまって」

マリエル皇妃の痛みは既に感じた。感じた上で彼を責めた。

だから今度は彼の痛みを無視した私が責められるべきで、謝罪すべきだった。

必死に言葉を紡ぐ私の耳に、しゃくり上げるような息使いが聞こえた。

けれどそれは私のものじゃない。

自分が吸い込んだ息はこんなにも静かで、痛みに満ち満ちているのだから。彼の痛みを無視しておいて勝手なことだとは思っけれど、痛みを感じる心を止める術を私は持たない。

それから。吸い込んだ息をそんな言葉で吐き出して、私は先程のビリオン様と交代するような饒舌さで語りかけた。

「今まで有難う。ずっとずっと、守ってくれて。私もファルガスタも、多分ツヴァイ自身もビリオンが守ってくれたから傷一つつかずにいられ！」

何とか届けたかった言葉は途中で遮られた。吸い込んだ息が詰まり、むせそうになる。

何が起きたのかと目を白黒させていると、見かけからは分からない硬い腕が掻き抱くように背中に回された。呼吸が辛い程強く抱きしめられる。

訳が分からず藻掻くものの、腕に込められた力は強まるばかりで抜け出すことは叶わない。何とかリズに助けを求めようと視線をさ迷わせようとするが、その動きさえ縫い止められてしまった。

「 やつと、やつと会えた。ずっと会いたかった……」

泣き出す寸前の震えた声が思考の全てを奪っていく。

「誰に注意されても君は君のまま居て良かったんだ。私を一人の人間として見てくれた時と同じように、立場なんて気にせず一緒にいて欲しかった。もっと私が臣下の信頼を得ていたらあんな態度は取らせなかったのに」

すまない。そんな声が何度も耳朶を打つ。

その言葉に、彼は今尚鮮やかに燃え上がっていた怒りを手放したのだと理解して私はそっと目を閉じた。

言葉は通じたのだ。……最後まで言えはしなかったけれど。

触れてもどこも悪くならない。倒れたりしない。

その理由を知っているのか、私が決して顔色を悪くしないという確固たる自信を持ってピリオン様は更に力を込めて私を抱きしめた。私も逃げる気にはならなかった。目を閉じたまま彼の言葉の意味を理解する。

当時の臣下は 今も大差はないのだけれど 私がピリオン様と親しくする事を好まなかった。対等に話す事を拒み、自分達と同じように接する事を教え込んだ。

それは記憶を失い世間を知らなかった自分にとっては“そういうものなのか”と思う程度の物でしかなかったけれど、まさかピリオン様がそれをこんなに悔いているとは思わなかった。

その時初めて私は、何かとんでもなく大きな誤解や期待をこの人にしてしまったのではないかと不安になった。

ピリオン様の立場を知った瞬間、私は彼に炎帝であることを望みはしなかっただろうか？ 賢君である事を願わなかっただろうか？ 違うと思いたかった。けれど、それが嘘だということぐらい自分にだって分かっていた。

もし本当に違つのなら、あの月宮の名が付いた夜に口にした言葉は何だったのか。

マリエル皇妃を正妃の座から排斥するという事がどういう意味なのか口にした私の気持ちは、一体何だったのか。

……そう、この人の望みを無視してまであんな事を言った私に違つと言つ資格などない。

本来ならば生を終えているはずのこの人への贖罪さえもう許されない。ならば私はこの人に対して何をしてあげられるのだろうか。

生者の証である鼓動が二つ、同じような感覚で音を立てる。

どこまでも安らかな、何の不安もないのだと伝えるような声が溜息のように放たれた。激しい熱ではなく、幸福感に満ちた温い声色だった。

「レイアステイ……」

他の全てを捨ててこの人と共に行く事を選んだら、多少なりとも贖罪になるのだろうか。

掻き抱かれぴったりと触れ合つた体から放たれる体熱が、音無き音を溶かして一つになった。

第三十六話 クレティエン家

礼儀と思いやって来た事が、どれだけこの人を傷つけたのだろうか。

そういうものかと思って放った言葉が、どれだけこの人を悲しませたのだろうか。

当たり前だと思い首を振ったことが、どれだけ
考えれば考えるほどきりが無い。

もしも、この人を選んだらもう痛みを与えることはないのだろうか。

悲しみも苦しみも無く、唯心安らかに。

……分からない。分からないけれど。

痛くとも悲しくとも、ビリオン様が自分を強く求めている事だけは理解出来た。

そして、私が共に行く事で彼への贖罪となるだろうという事も。

決断し、足を踏み出さずに済んだのはひとえにリズの御陰だった。

「いつまでそうしているつもりだ」

苦々しい声が割り込み、驚いて体を離れた隙にぬっと現れた腕が眼前へと伸びた。

銀の鎧に包まれた硬質な腕は、まるで私とビリオン様の間を隔てる壁のようにも見える。

瞬間、嬉しそうに微笑んでいたビリオン様の頬がぴくりと引き攣った。それは分かる者にしか分からないような些細な変化でしかなかったけれど、隠しきれない怒気の影響で彼が今怒っている事だけはよく伝わる。

「騎士風情が私の邪魔をするとはいい度胸だな」

「いくら人目につかないとはいえ、ここに誰も来ないという保証はありません。そして民はこの状況を見て、陛下と氷の魔女が抱き合っているとは勘違いするでしょう」

陛下とはヴァノッサの事だろう。ビリオン様がこの時代に生きているなどと誰も信じないだろうし、紅蓮の髪を見たら誰もがヴァノッサを連想することは周知の事実だ。だからリズの指摘は正しい。離れた体を更に遠ざけるように一歩後ろに足を引く。

同時に、今度は体全体で壁となったりリズの背中がビリオン様の姿を視界に映すことを阻んだ。

眩しいほどに光を反射する銀光に目を細め、口を噤む。不機嫌を顕にしたビリオン様の怒気だけが強く空気を震わせた。

「その程度の事ならば、二代目も本望だろう。むしろ感謝をされるような気さえするんだが」

「我らが望む事ではありません」

「皇帝が魔女と抱き合う程度で揺れる国など、元より崩れて当然だ」
ぴしゃりと叩きつけるようにリズが口にした言葉に、ビリオン様が喉の奥で小さく笑う。

そうして自嘲の響きを持って発せられた言葉に、今彼は何を考えているのだろうかと思案する。

三百年前のあの冬に、魔女の狂宴によって傾いた国の事だろうか。それとも、月宮建設によって壊れ始めてしまった“何か”についてだろうか。

どちらにせよ、ビリオン様は誰よりもよく分かっているはずだ。
ファルガスタもツヴァイも 魔女一人の存在で十分揺れる要素があるのだという事を。

今となつては私以外に存在が確認されていない魔女や魔導士には、それだけの影響力があるのだから。

いえ、もしかしたら……魔女だとかそんな事は関係ないのかもしれない。

ただ得体の知れない女が皇帝の傍にいる。それだけで国が揺れる

には十分なのかもしれない。

最も、ビリオン様が仰る通りその程度で揺れる国など元より大したことなどないのかもしれないけれど。

「一つ思い違いをなさっているようですが」

余程耳を澄ませなくては分からない程の遠くで聞こえる蹄の音に、リズの声が重なる。

彼は一度ちらりとこちらを見下ろしてから言葉を続けた。

「我らという言葉の中には、彼女も含まれております」

「……レイアステイが？」

意外そうな声に含まれたのは喜色だ。

「はい。陛下が氷の魔女と縁を結ぶことを、彼女本人が拒んでいるからこそ私も御止めしているのです」

そうだろうか？

何も語らないはずの背中にそう問われた気がして、私ははっと我に帰って何度も頷いた。

「そうです。ヴァノツサはツヴァイの星姫様と婚儀を控えた身。今ここで魔女との仲を疑われてはいけません。……少なくとも民には」

皇城内では寵妃として通っているのだ。今更噂を立てられた所で痛くも痒くもない。

けれど民相手だと話は別だった。彼等はまだ私の存在を詳しくは知らない。

勿論噂としては聞き及んでいる可能性が高いが、実物を目の当たりにしたわけでも確証を得られるような事態に遭遇したわけでもない。だとしたら、今この場でビリオン様と抱き合っている姿など見られるわけにはいかないというのは至極当然の事だった。

そう、当然の事なのだ。……本当に、どうかしている。

言われるまま幻術を解いた事も、こうして共に歩いている事も、抱きしめられて惚けていた事も、全てどうかしているとしたか言いようのない出来事だった。

顔を俯かせ、唇を噛みしめる。リズが盾となっていて本当に良かったと思っただ。

「魔女一人で傾く国など確かに大したことはないのかもしれませんが、ですが、疲弊した民の心を悪い方へ動かすような出来事の一切は、省かれなくてはなりません」

放置するよりは傍に在る方が間違いはないだろう。

ただそれは、親しくしても良いという免罪符にはならないのだということを、私は誰よりも覚えていなくてはならない。

例え過去の残像がちらつき、彼の痛みは何度も手を伸ばす羽目になったとしても、リズの言葉に否やは言えなかった。

未だに、胸の中では贖罪の形が渦巻いている。

それも一つの選択なのだと、ずしりとした重みを持って訴えかけてきている。

泣かせるぐらいなら、傷つけるぐらいなら、そうした方がずっと良いのだと感情が声高に叫ぶのが頭に響く。けれど、口に出すのはそれとは正反対の理性が生み出す言葉だった。

試すようなりズの言葉に怒りをぶつける余裕などなく、ただ請われるままに別の事を口にしなればならない事が辛かった。

答えは私の中で出てすらいなのに、選ばざるを得ない事が苦しい。

それでも、口にする言葉に偽りが一片たりともない事は救いだっただ。

「貴方の痛みを無かった事にはしません。親しげに話した事に対して誰かに申し訳なさを感じたりもしません。ですが、こんな風に話す私も私なのだと言う事を覚えておいてください。それから」

「ピリオン様が浮かべる少し悲しげな微笑は、私が与えた痛みと私が流させた血から来るものだろう。」

けれども私は口にしなくてはならない。

呪縛のように付き纏う、一つの約のために。

会いたい、と願った私の願いを叶えてくれた彼のために。

何より、北の孤島を出る時に決意した想いの全てを捨てずにいるためには、今この場でほだされてしまふわけにはいかなかった。

「今このファルガスタの重みと期待を一身に背負っている皇帝がいます。彼にこれ以上の重圧を与えないために、可能な限り努力したいのです」

口にするとそれが正しいものとして形を得て、私は安堵の息を内心で漏らしながら自然と下がる目尻を無理矢理に吊り上げた。

不意に、これは一体何のための拒絶なのだろうかと冷静な自分が囁く。

今私が口に行っている事もリズが口に行っている事も、ひとえにヴァノッサと氷の魔女が連れ立っている所を見られたくないという、ただそれだけの事だ。

その為に抱き合うことも親しげに話すこともしたくないと言っている。

では、ビリオン様と一緒にいることはどうなのだろうか？

もしここに住まう全ての民が炎帝の存在など知らず、氷の魔女の存在も知らなかったなら、私はどうしたのだろうか。

誰にも咎められる事がなければ、初めて会った時のように話すことが出来ていたのだろうか。

そしてこのままこの人と共に行くという選択も。

埒もない考えではある。それでも思考を埋め尽くしてしまう問い掛けに息を詰まる思いがした。

日差しを目一杯浴びて立つ紅蓮の立ち姿を見つめる。

柔らかな表情を浮かべるビリオン様が、私の視線を受けて口の端を吊り上げた。

刹那、その立ち姿に、笑顔に、別の人間の笑顔が重なって見えた。柔和なんてものじゃない。どこか硬質で、不敵で、自信に充ち満ちた笑顔。

その笑顔の持ち主の名を心の中で呟いた途端、思考ごと奪う問い掛けが霧散した。

そうだ。見失ってはいけないかったのよ。

私が北の孤島を出る時に決めた事を、ヴァノツサに誓ったことを、決して忘れてはならない。

例えそれが呪詛のように付き纏おうと、選んだのは他ならぬ私自身だ。

ビリオン様と共に行けば真実を得られるかもしれない。それは否定しない。

けれど、この人への贖罪のためだけに足を踏み出す事はできなかった。

もしも私がビリオン様と共に行くなら、それは事態を解決させるための最終手段だ。

それまでは、ヴァノツサと共にファルガスタに。

「おい」

「っ!？」

唐突に声が降る。低く囁くような声にびくりと身を竦ませると、リズが怪訝そうに眉根を寄せた。

問いかけるような眼差しに、握り締めていた手から力を抜く。すると驚くほど急速に血が流れるのを感じてはっと息を飲んだ。冷や汗が一筋、背中を流れる。

……私は今、何を考えていたの？

「な、何ですか？」

「別に用はないが。……顔色が悪いぞ」

指摘され、頬に指先を触れさせる。ひんやりとしたそれは、指が冷たいのか頬が冷たいのか判別できなかった。どこもかしこも血が通っていないように思われる。きつと、リズが言う通り今の自分は顔面蒼白といった状態なのだろう。

けれど何故そうなったのかを指摘されるのが怖くて、私はしらを切るように小首を傾げた。

「そう、でしょうか」

「ああ」

誤魔化すような問いに、即座に返される。鎧に包まれた腕が伸びて、指先が僅かに頬に触れた。陽に当たり仄かに熱を持った金属が冷えた頬に温度を与える。

その様子にはちりと目を開いたビリオン様は、すっと目を細めてから声を上げた。

恐らく私の顔色が悪い事を見て取ったからなのだろうと、心配そうな声が告げていた。

「騎士の言う通りだ。少し休んだ方がいい」

……声色に僅かに刺を感じるのは、気にしない事にする。

流石にリズは無視する事ができなかつたらしく、すぐに指先を遠ざけたけれど。

消えた温もりを追うように自らの指を這わせる。

そうして少しでも顔を良くしようと心がけながらも、問い掛けは止めない。

「休む、と言われましても。皇城に帰るのですか？」

「いや。私の日記を探すのだろうか？ 一つ当てがあるからそこへ行って、ついでに休ませてもらえばいい」

「当て？」

そんなものが一体どこに。

不思議に思い答えを待つと、ビリオン様は「ああ」と頷いた。

「クレティエン家を訪ねようと思っている」

唐突に出てきた名前に、若干面食らってしまった。

けれどすぐに考えを巡らせ、それが一体どんな意味を持つ名なのかを思い出そうとする。

……クレティエン家といえば、確か。

「百年戦争後より栄えていた旧家の事ですか？」

「ああ、病に罹った後にクレティエンの者に日記を託したんだ。もしかしたらまだ手元にあるかもしれない」

そういえば、ビリオン様はフェンネルを訪れる時には必ずと言っていいほどクレティエン家を訪ねていた気がする。

何でも当時の当主とビリオン様が親しかったからだと言う事は聞き及んでいたのだけれど、まさか日記を託していただなんて。

……とはいえ、手がかりを得られたのは僥倖だった。

国中を探さなくても良いとはいえ、フエンネルは首都だ。それなりの面積を持つ街の中から日記帳を一冊探しだすのは骨だった。

何より今はあの頃から三百年が経過している。少しでも手がかりが得られるのならそれに越したことはない。

ただ、一つ問題がある。

「分かりました。ですが、どうやってビリオン様の日記の話をすれば」

クレティエン家は南地区に居を構える貴族だ。

そして、トリスタン家と同じかそれ以上の歴史を持つ旧家でもある。

今のクレティエン家の力がどれほどのものかは知らないけれど、一貴族が突然現れた者に大事な日記帳の話をするはずがない。

頬に手の平を押し当て、溜息混じりに問いかける。それを制してビリオン様がにっこり笑ったような気配がした。

「問題はないよ。今の私は二代目と瓜二つなのだろう？」

「ビリオン様」

「炎帝」

窸める声が二つ合わさったのは、不本意極まりない。

けれどお互い気持ちは同じだったので、リズと二人大きな溜息を漏らした。

足を踏み出しリズの横に立つと、やはり予想通りの表情が視界に映る。子供のように無邪気な笑顔は、何を言っても人の話を聞く気はないのだと知らしめる。

ビリオン様は呆れ顔のリズを一瞥して、そのまま指差した。

「それにほら、ここには騎士もいる。貴族なら君の話も聞いているだろうから、銀髪の魔女がいる事も信憑性を高めるには丁度いい」「それはそうですが……ヴァノツサの名を騙るおつもりですか？」

「貴族は皇族に忠誠を誓っている。私も元とはいえ皇族だから問題はないよ」

「貴族ならば陛下が今東地区にいる事を御存知なのではないかと」
「東地区から南地区まではそう遠くはない。皇帝が気まぐれに貴族の屋敷を訪ねて何か問題があるとしても？」

私の言葉にもリズの言葉にも、口達者な回答が返ってくる。
笑みを含んだ答えに、やはり彼はヴァノツサの祖先なのだ実感した。……こんな所で実感などしたくはないのだけれど。

それにしても、先程まで泣き出しそうだったのに、今はもうここにこと嬉しそうにしているのは何事なのだろうか。

いくら柔らかいとはいえ、じりじりと肌を焼く日差しは高い。背に当たる光を隠すように髪を後ろに流し、微かに首を振った。

これはもう諦めなくてはならないのだろうか。しかし、諦めかけた思考の中で一つだけ疑問が浮かび上がった。それは当然と言えば当然の疑問で、何故思いつかなかったのか不思議なぐらいのものであった。

窺めるように目を細め「駄目かな？」と小首を傾げるピリオン様に、嘆息混じりに問いかける。

「皇帝が貴族の屋敷を訪ねる事自体は、珍しくとも有り得ない事ではありません。ですが、ヴァノツサはクレティエン家の方々と親交があるのでしょうか？」

「……あ」

そこで漸く私の言いたい事に思い至ったのか、リズが呆けたような声を上げた。

す、と薄氷の相貌が細められる。

きっと今の彼の頭の中では、クレティエン家とヴァノツサの関係性について思考が巡らされている事だろう。

それを横目に、私はさも当然と言わんばかりの頷きで続けた。

「殆ど面識がないのに訪ねて行っても、逆に警戒心を抱かれてしまいます」

眼前に立つ方は確かに現皇帝ヴァノツサに瓜二つだ。勿論多少の違いはあるけれど、長年傍で仕えているわけでもない限り気付きはしないだろう。平民が皇帝の真似事をするのなら分らないが、ピリオン様は元々が皇帝なのだから。

とはいえ、いくら皇帝ともあるう方が貴族の屋敷を訪れたとしても、警戒心を抱かれるような状況は考えられる。

そのうちの理由の一つが、ヴァノツサとクレティエン家の関係性だ。

幾ら何でも、親しくもない皇帝が突然笑顔で現れたら恐れられるに違いない。

「確かに、君の言う事にも一理ある」

ふむ、と思案するような紅蓮の相貌を真つ直ぐに見返すとそんな言葉が返ってきて、私はほっと安堵の息をつきながらリズへと視線をずらした。

「リズ殿。クレティエン家は、今皇城に出仕しているのですか？」
「……」

質問に返す沈黙は、若干重い。

何事かと詰問するように鋭い視線を浴びせると、リズは苦々しく口を引き結んだ後でピリオン様に向き合った。

「初代炎帝は全てを御存知なのではありませんか」

「まあ、大体の情報は掴んでいるつもりだが」

硬い声に潜むのは、苦渋と諦め。リズから発せられるにしては珍しい響きに目を丸くしていると、ピリオン様が余裕の笑みを浮かべたので嫌な予感が胸を過ぎった。

手の平をぎゅっと握り締め、リズが導き出したのであろう答えを知るべく問いかける。

「大体の情報というのは、どういう意味です？」

寵妃と呼ばれていても、所詮は偽りの存在だ。

その私がヴァノツサから貴族の情報など聞くわけがなければ、そのような話を聞く必要性すら感じる事はなかった。今更になって悔

やまれる話だ。

ファルガスタ皇城内の勢力に、もう少し敏感になっておけばよかった。

そうすれば自分で自分の首を絞めるような質問をせずに済んだというのに。

悔恨を詰め込んだ感情をどろりと心に流し込み、苦々しいその味に顔を顰める。するとリズがそんな私に首を振ってみせた。

お前のせいではないと告げるような態度の後、質問への答えが返る。

「クレティエン家の当主は病弱で、出仕が出来るような状態ではない。だが、クレティエン夫人の実家なら話は変わってくる」

「夫人の実家、ですか？」

「ああ。貴様は知らないだろうが、クレティエン夫人はミルヴェーデンという新興貴族の長女だ。当主は彼女の兄が務めている」

新興貴族なら、私に分からなくても別段不思議な事ではないだろう。

リズの律儀とも丁寧とも言える解説にそう納得し、ん？ と眉を寄せた。

クレティエン当主はヴァノツサと殆ど縁がない。となると残るのは……。

「では、そのミルヴェーデン当主が出仕を？」

問いかけると、大きな頷きが返ってくる。その表情には疲れたような色が見えた。

高台に一際強く風が吹く。その速さに吞まれるようにして流れる声に渗むのも、純粹な疲労だ。

「それも、ただ出仕しているというだけの問題じゃない。……ミルヴェーデン当主は、現近衛騎士隊長だ」

「近衛騎士隊長？ ということは、貴方の」

「直属の上司になるな……」

はあ、と盛大に吐き出される溜息には何で自分がこんな事態に巻

き込まれているのだという心の声が反映されているような気がした。とはいえ直属の上司と話をしに行くわけではないのだからと軽く考えていたら、考えを読まれたのかリズにぎろりと睨まれてしまった。

凄むようにして光を灯す空色に目を丸くしていると、搾り出すような声が耳朵を打つ。

「ミルヴェーデン当主は、妹可愛さに頻繁にクレティエン家を訪れていると聞く」

妹の嫁ぎ先に、近衛騎士隊長が訪ねる？

いえ、例え近衛騎士隊長ではなくとも異例じゃないだろうか。

夫人が実家に帰るのならばともかく、その逆とは。

「貴族の嫁ぎ先にですか？ 幾ら何でもそれは」

「普通では考えられん。まあ、騎士の最高峰に立つ御方だ。誰も文句が言えんのだろう。仮に近衛騎士隊長でなくとも、誰もあの御方を止められない」

一体どんな人間だ、それは。

主君に対する忠誠心は当然の事として、上下関係にも厳しそうなリズが上司に対してそのような評価をしているとなると、これは由々しき事態だ。

恐らく私も姿ぐらいなら見たことはあるのかもしれないけれど、その時にはリズが言うような人柄だとは全く気付かなかった。第一、騎士の中で誰が一番偉いかなど私には分からないし、覚えていない。自分の中で、ファルガスタの騎士と言えればリズの事ぐらいしか思い浮かばないのだから。

とはいえ、これでリズの言いたいことは分かった。

下手をすれば、クレティエン家を訪ねた時にミルヴェーデン当主と鉢合わせる可能性があるということだろう。その時に皇帝を連れられているとなると、追求は免れない。後々ヴァノッサ自身がこの件について問われたとしても、彼なら事態を把握して上手くあしらうだろうけれど、面倒な事に変わりはない。

ただ、それが分かっていたとしても問うておきたい事はあった。「……ですが、それなら私達はミルヴェーデン家を訪ねる必要があるわけではありませんか？」

用事があるのはクレティエン家だけれど、直接の関係はない。

だとすれば、ミルヴェーデン家から話を通してもらうのが近道ではないだろうか。何より、その程度の事であればヴァノツサから話をしてもらった方が間違いがない。

次第に良くなる血の巡りにじんと指先が痺れていく。くすぐったいような心地良いような痺れにそつと息を吐くと、口を真一文字に引き結んだリズの代わりにビリオン様が答えた。

「今その騎士が話した通り、ミルヴェーデンとクレティエンは昵懇の間柄だ。恐らく皇帝への警戒心はないに等しい。それなら、クレティエンに直接話しても問題はないよ」

余裕のある笑みで言われると、確かにその通りなのかもしれないと納得してしまう。

けれど、例えクレティエンに直接行っても問題はないとはいえ、危険な話ではある。

「直接行くよりも、ヴァノツサに頼んだ方が早そうですね」

「君は私よりも二代目の力を借りたいのかな？」

「そういう問題ではありません」

誰もが紅蓮の持ち主をビリオン様だとは思わないだろうが、同日同時に別々の場所で目撃証言が出るなどという事になれば問題だ。時既に遅しとも言えるけれど。

辺りを見渡し、人影も視線も感じられない事に安堵する。

そのまま指先一つで髪と瞳に再び幻術をかけてから、日陰に入った。

人目を避けるような態度にビリオン様は同じく日陰に入り、ふうと息を漏らす。夜の住人でもないのに、日差しが苦手だと言っているように見えた。

「分かっているよ。だが、日記を得たいのは私と君だ。それなのに

二代目を巻き込むのは、その騎士も望まない事のはずだけれど。今は復興作業と婚儀の準備で忙しいのだろうか？ 彼は」

自分よりもヴァノツサの名を出された事に思う所があるのか、ピリオン様は拗ねるような声でリズを指差した。突然話を振られ困惑したように揺れたリズは、自分だけが日差しを浴びながら眉間に皺を寄せる。これも、上位の人間への態度としては彼らしくない。もつとも、彼が忠誠を誓うべき相手の敵とも言えるのだから当然かもしれないけれど。

沈黙で返すリズを、紅蓮の相貌が射抜く。どうなんだ？ と尋ねているような視線に、リズは逡巡している様子だった。

事実、迷ったのだろうか。

危険極まりない存在を貴族の元に連れて行くか、疲労しているであろうヴァノツサを頼るか。

甲高い声で鳥が鳴き、空を流れる。それと時を同じくして踵を返した後ろ姿が答えだった。

「初代炎帝陛下の仰る通りだ。行くぞ」

ピリオン様はクレティエン家を害する気がない事をリズは知っている。

それが大きな理由となつて、彼は渋々行く気になつたのだろう。

そんな風に思いながら後ろ姿を追うように一歩足を踏み出すと、ピリオン様がやはり余裕の笑みを浮かべた。

何もかもが彼の思い通りに進んでいる。

その事に不安を感じ、私はリズの隣に並んでそつと問いかけた。

「いいんですか？」

恐らくリズも同じ事を考えていたのだろう。声には苦渋がたつぷり籠められていた。

「いいも悪いもあるか。陛下の手を煩わせるわけにはいかない。：

…要は隊長に遭わなければいいだけの話だ」

「……私もその程度の事なら祈っていて差し上げます」

「止める。魔女が祈ったせいで悪い方に転がったらどうする」

「あまり失礼な事を言っていると真剣に祈りますよ」

魔女が祈った程度で悪い方向に転がるなら、それはリズムの日頃の行いのせいだと思ってもらいいたい所だ。

失礼な言葉に口の端を吊り上げて精一杯意地の悪い顔をしたら、心底嫌そうな顔をされてしまった。最初に皇城で顔を合わせた時とは随分と違う、分かりやすい顔だ。

「止めろと言っている。クレティエン家は南地区の中心部だ。くれぐれも幻術は解くなよ」

「言われなくともそうします」

そうしてそんな風に軽口を叩き、ふと思う。

ビリオン様と最初に出会った時から、私達の関係は大きく変わった。

話し方も名前の呼び方も接し方も、今となっては立場やその命の在り方さえも。

けれど、変わっていく事は必ずしも悪い事ではないのではないかと、流れる金の髪を視界の端に収めながら思いもした。

私のこの髪や瞳のように、表面が変わっても中身まで変わりはないのだ。そして、仮に中身が変わったとしてもそれは絶対悪ではない。私とリズムがこうして嫌味を言い合うようになったのと同じように、悪いことばかりではないのだから。

過去を求めるのは容易い。そこにあつた穏やかな時間に手を伸ばしたいという欲求の強さも納得出来る。

ただ、回帰は今の自分を否定されているのと何が違うのだろうかと考えると、やはり少し悲しくなった。

ビリオン様自身にはそのつもりがないのだとしても、それは寂しい事なのだ。

勿論、この考えは私自身にも向けられなくてはならない。

穏やかだった日々を思って悲しむ事も、あの頃与えた痛み of せいですると引きずられてはならないのだ。

私が向き合ふべきなのは、過去ではなく今のビリオン様なの

だから。

「君達は、仲が良いのか悪いのか分かりづらい所があるね。あまり仲が良すぎると腹が立つのだけれど」

思考を満たす考えに、ようやく顔を上げられるようになった頃、ビリオン様が呆れ混じりにそんな事を言ってきたので慌てて後ろを振り向く。

その動作がリズムと被ってしまい、私達はお互い眉を顰めながらもきっぱりと口にした。

「御安心ください」

「仲良くなつた覚えなどありません」

少なくとも、腹を立てられるほど仲良くなつた覚えはなかった。

あまりにもはつきりと言いきる私達の顔を見て、ビリオン様が一瞬面食らつたように目を丸くする。どこか幼さを感じさせるような表情が、すぐに一変して笑顔になった。

「私がない間に、少しは魔女にとつてましな国になったみたいだね」

からりとした笑いに含みは見えない。

純粹に、魔女を恐れず嫌悪せず守る騎士がいる事に安堵しているのだと分かった。

ただ、自分にはそんな国づくりができなかったのだと自嘲しているようにも聞こえて、それが少し気になった。

まるで、変わっていく事を悲しんでいるように見えたせいかもしれない。

その予感、私が続けた言葉で見せた儂い笑顔が裏付けているような気がしてならなかった。

「今後もっと良い国になりますよ。貴方の子孫が育てる国ですから……そうかもしれないね」

二代目の事を買っているんだね、というような言葉は出てこなかった。

静かに頷き、人目に付かないように日陰を歩く陽炎のような立ち

姿は何かを考え込むように黙り込む。誰をも寄せ付けない姿に、私
とリズも顔を見合わせて黙り込んだ。

そこから先、クレティエン家の門前に立つまで私達は終始無言で
歩き続けた。

第三十七話 炎帝が秘めたもの

丁寧に、噛み締めるように書かれた一行に目を奪われる。

「……ああ」

万感の想いが籠められた、そんな言葉に目を閉じた。

ぱたり、涙が手の甲を濡らしていく。けれど私はそれを拭う間もなく次の頁へと手を伸ばした。

遠い日の記憶。その始まりを告げる文字は、あまりに優しかった。

クレティエン夫人は、凡そ貴族らしからぬ女性だった。

「まあ」

応接室に通された私達を出迎えた彼女はビリオン様と私の姿を目に留めるなりそう呟いて、ぴたりと固まってしまったのだ。

焦げ茶のゆったりとしたドレスを着込んだ夫人は、今自分が見せている金髪よりも少しくすんだ金髪を波打たせ、真つ青な瞳を丸くしている。いくらミルヴェーデン家と昵懇とはいえ、唐突に皇帝が訪ねてくるなどとは想像もしていなかったせいだろう。私なら扉を閉めてやる所だ。

脊髄反射的に刻まれているであろう姿勢など皆無の姿にどうしたものかと視線を泳がせる。そのままビリオン様をちらりと一瞥すると彼は鷹揚な態度でじつと夫人を見つめていた。礼を取ることを促すでもなく不敬だと罵るでもなく、ただ彼女が驚きから回復するのを待つ心積もりなのだ。勿論ヴァノツサとてそのぐらいの寛容さは見せるだろうけれど、一つ違うのはその笑顔が穏やかであることか。ヴァノツサはこういう時常に不敵な笑みを浮かべている。

息を呑む音がある。瞬きの間に夫人が深々と礼の形を取った。

「し、失礼致しました。まさか本当に陛下とは思いません」

衣擦れの音と共に下げられる顔が緊張に硬くなる。

先程まで感情豊かに光を灯していた瞳が理知的な冷静さを取り戻す。いくら貴族らしからぬ女性とは言え貴族は貴族。ましてや病弱な当主に代わり家を守ってきた女主人だ。そこいらの民と同じではいけない。

深い礼にリズが安堵の息を漏らす。彼としては直属の上司が愛する妹に罵声を浴びせるわけにはいかないせいだろう。横顔には緊張が宿っている。こちらの方が立場は上のはずだというのに、まるでそれを感じさせない硬い表情に忍び笑いを漏らした。

「構わぬ。突然の来訪で驚かせたこちらが悪い」

「そんな……とんでもないことで御座います。陛下が当家へ御越し頂いたとあれば、主人も鼻が高いでしょう」

「当主は息災にしているか？」

「先日、ようやく寝台から起き上がれるようになった所です」

その間にもビリオン様と夫人が挨拶代わりの言葉を交わしていく。私達はあくまで聞くのみだけれど、夫人はこちらのことも気になるらしく時折目が合った。

侍女が茶を運ぶ刹那、ビリオン様が視線を逸らした刹那。主に視線は私へと向いていた。……まあ、無理もないのだけれど。

彼女の中で向かい側に座るビリオン様はヴァノツサということになっている。現皇帝だ。それだけの高貴な人間が見知らぬ女を連れいているとなれば、気にならない方がおかしい。ともすればツヴァイの星姫と思われているかもしれないのが問題だが。

口の端を僅かに吊り上げて微笑みかける。敵意のない笑みに夫人もようやく相好を崩したようだった。それきり視線も向けられなくなったので思う様心接室の中を見ることが出来た。

一言で言えば質素な部屋だった。

辺りを見渡して見つけたのはテーブルとソファ、そして数点の絵画と燭台のみだ。足元を支える絨毯は年季を感じさせる硬さで、滅多な事では取り替えられていない事が分かる。壁などにひび割れは

見られないものの、古さを感じる事に変わりはない。

絵画にしても、それほど高価な物には思えない。……私は余り目利きが出来るわけじゃないから断言は出来ないけれど、少なくとも皇城にあるものとは全く質が違っていた。いえ、皇城と比べるのが間違いないかもしれないわね。

ともあれ、かつては栄華を極めた大貴族の家とは思えぬ内装だという事は分かった。

ただ、古さが不潔さに繋がるというわけでは決して無い。家具にせよ壁にせよ、綺麗に磨きあげられているのだ。恐らく毎日丁寧に掃除されているのだろうと理解出来た。それは屋敷が古くとも装飾品が高価でなくとも貴族の質の高さを示しているとも思えた。

主に忠誠を誓い真面目に働く侍女や執事がいる。それは主自身の評価にも繋がるのだから。

ティーカップに口を寄せ、ふわりと漂う香気を吸い込む。一口飲むと、格段甘くはないものの優しい味がした。華やかさを感じさせない心地良さに緊張が解けていく。

隣で同じように茶を飲むビリオン様へと目を向ける。彼もその味に満足したのか笑みを刻んだ。

「本来であれば当主が迎えるべき場で代理の私が出てきましたこと、まずは御詫び申し上げます」

ビリオン様の表情が和らいだのを見計らってか夫人が口を開く。驚きから冷静さを刻んだ鮮やかな青の瞳には、今や和やかさが浮かんでいる。旧家の女主人というよりも一般家庭の母親という立場の方が似合っているような、愛嬌のある顔だった。

侍女や執事よりも、子供に囲まれていた方が余程似合うのではないだろうか。悔るわけではないけれどそう考え、彼女の心労を思う。もし私の考えが正しければ、今の彼女の立場は苦しいものでしかないのだから。

もしかしたらミルヴェーデン当主もそう考えて妹の元へ通っているのでは。ふとそんな考えが頭を過ぎる。

すらりとした、線の細い夫人は決して健康的とは言いがたく儂い。もつとも表情の明るさから不健康さも感じられないが、周囲に心配を抱かれても致し方のない見目と立場ではあった。そんな彼女の元に皇帝が突然押し掛けたのはやはり悪い事だった気がして、私は罪悪感を押し流すように茶を一口飲んだ。

けれど、既に私達はクレティエン家を訪ねている。ここでやつぱりいいですと帰るわけにもいかなかった。

「それも構わぬ。俺とて病人に寝台から這ってでも出て来いなどと言うつもりもしないな。それに今日は夫人に用がある」

「私、でしょうか？」

「ああ、そうだ」

本物のヴァノツサのように不敵で堂とした声が耳朶を打つ。

足を組み、真っ直ぐに夫人を射抜く紅蓮の瞳もまるで本人のようで思わず目を剥いた。

「俺達は初代炎帝が遣したとされる日記を探しているんだが、心当たりはないだろうか」

ビリオン様の変貌ぶりに驚いたのはリズも同じらしく、彼はビリオン様の後ろに立ったまま何事かとこちらを見ていた。見るべきは私ではなくビリオン様だと思っただけけれど、不躰にじろじろと見ることの出来る相手となると限られているせいだろう。私は紅紫に染まっっているであろう瞳で見返し、大丈夫だというように小さく首を振った。

驚きはしたけれど、ビリオン様だってヴァノツサに似せようと苦心しているのだろう。きつとそうに違いない。

……少し楽しんでいらっしやるようにも見えるのは気にしないことにする。

「初代炎帝陛下の日記……？」

ヴァノツサもといビリオン様の言葉に夫人がぱちりと目を見開いた。感情豊かな口元が微かに引き結ばれる。

「確かに、それらしい書があることは主人から聞いた事があります

が、それが一体何か」

「日記の内容について少し調べたいことがある。もし持っているのなら渡してもらえないか。本来ならばミルヴェーデン当主を通して頼むべきなんだろうが、奴も多忙でな」

滲み出る警戒心にも全く動じる事無く答えるビリオン様の言葉は淀みない。耳をくすぐる低音に大した役者だと舌を巻いた程だ。これならば誰もビリオン様が偽物だとは思わないだろう。

警戒心を解くようにこちらにも表情を柔らかくする。ビリオン様ほどではないけれど、私だって笑おうと思えば笑うことぐらいは出来るのだから。

クレティエン家にはツヴァイの姫君の噂は広まっているのだろうか。隣に座る私の姿に夫人は一瞬眉根を寄せたようだったが、皇帝たつての願いとあつては断れないはずだ。

「そういう事でしたら、勿論御渡し致しますわ」
案の定、夫人は疑問を抱きながらも頷いた。

内心で安堵の息を漏らす。こつこつと見つかかり肩透かしを食らった気分ではあるが、簡単に見つかるならばそれに越したことはない。私達にはまだまだ調べるべき事があるのだから。

リズムも同じことを考えていたらしく僅かに表情を和らげる。もっとも彼としては近衛騎士隊長に遭わずに帰れそうだという安堵の方が強そうだけれど。

その時「ただ」という夫人の声が耳朶を打つ。

見れば夫人はぎゅっと手の平を握り締め真っ直ぐにビリオン様を見据えていた。決意の籠った双眸が光を宿す。

これだけは例え皇帝相手でも譲れない そんな強い眼差しに今度はこちらが目を見開く番だった。

芯の柔らかそうな女性だと思っていたらしつぺ返しを食らってしまつたような錯覚に陥る。

ティーカップをテーブルへと戻し姿勢を正す。その中でビリオン様だけが寛いだ姿勢のまま尋ねた。怒りを感じさせない静謐さが部

屋を満たす。

「ただ？」

「初代炎帝陛下御自身が当時の当主に日記を託された時、一つ命じられたそうなのです」

「……命じた？ 何をだ」

「ある人が訪れるまで、誰にも日記を渡すなど」

「ちらりとビリオン様に視線を走らせると、彼はそんな事言ったのか忘れてしまったというように首を傾げていた。けれどその仕草が道化じみでいて、もしかしたらこの人は全てを知った上で知らない振りをしているのではと思わせられた。」

「意図は分からないし、あくまで勘でしかないのだけれど。」

「しかしその考えはあながち間違いでなかったらしい。」

「成程」

「にやりと口の端を吊り上げて不遜に笑ったビリオン様は実に楽しげな声で言い放つ。」

「これから先の展開が全て読めた上での笑みだ。そうでなければこれだけ堂々としてはいられない。」

「本物のヴァノッサであれば襲い来る困難を笑いながら受け止めるだろうけれど、ビリオン様は困難の質を見極めた上で手を伸ばす人なのだと知っている。」

「では俺達はその人物を連れてこなければ日記は渡せないと？」

「確認の意味を含めた言葉に夫人が深々と頷く。僅かに茶を含んだ金髪が揺れた。」

「はい。御命令とあらば御渡しする事にやぶさかではありませんが、それが最も初代炎帝陛下の御意向に沿うかと」

「ふむ。だが、もう三百年も前の話だ。今更その人物がいるとは思えないが」

「いいえ、当代の手記を読む限り問題はないようです。初代炎帝陛下が望んだのは華月の魔女。一般的に氷の魔女と呼ばれる魔女の事ですから」

え？ と声が漏れる。ソファから腰が浮き上がりそうになり、慌てて座り直した。自制したからではない。ビリオン様の手が伸びて私のそれに触れたからだ。

落ち着かせるように手の甲を撫でる硬い手の持ち主にじっとりとした視線を向ける。すると意外そうに見開かれた紅蓮が楽しげに細められた。瞬間、ヴァノツサの皮が剥げてビリオン様に戻る。

責める視線でさえも新鮮に感じられてしまったら、一体私はどうやってこの人に怒りをぶつけなければいいのだろうか。

考えても考えても打つ手が見当たらず、結局は溜息混じりの息を吐く。そうしてビリオン様が出す答えを待っていると、彼は手を離れた後で首を傾げてみせた。

「ちなみに夫人は華月の魔女の顔立ちなどは分かるのか？」

「いえ……ただ、銀髪に深い蒼の瞳を持つ美しき魔女だという話なら。手記にはそう書いてありましたから」

その評価はどこからどう流れたものなのか、最早訊く気にもなれない。

指先に込めた力が増す。ドレスに皺が生まれ、深い影を刻んだ。

次に出てくる言葉を察して尚冷静でいられるほど私は落ち着いてなどいなかった。

「なら話は早いな。レイアスティ」

「……はい」

何でしょうか？ と惚けてみせるのも一つの手だ。

けれどそんな回りくどい事をしても欲しい物は得られないと分かっているから、私は素直に頷いて立ち上がった。腕を一振り、横に薙ぐ。

「っ！？」

溢れる光に夫人が息を呑む。カチャリとティーカップが揺れた。

金が銀に、紅紫が蒼に変わっていく。その光景を目の当たりにして夫人が口に両手を当てた。悲鳴を上げなかったのは、貴族としての意地なのだろうか。

零れ落ちそうに見開かれた瞳に微笑みかける。顔の造作は変わっていないはずだから、これで私が先程までの私であったことが分かるだろう。

ほ、と驚嘆に満ちた声が落ちる。そんな夫人の様子に満足気に笑んだビリオン様が口を挟んだ。

「華月の魔女レイアステイはここにいる。これで日記を渡すのに何の支障もない」

「は、はい……」

慣れぬ金の髪が普段通りの色に戻ったことに肩の力を抜くと、夫人がかくかくと頷いているのが視界の端に見えた。例えば私の髪が銀でなかったとしても、あんな物を見せられたら頷くしかないのだからなと考えると気の毒になるが仕方がない。

本来ならば魔女が貴族の家を訪ねるなどあつてはならない事だけれど、今は少し事情が込み入っている。

「少々御待ちください。すぐに日記を御持ちしますので」

「ああ、頼む」

初代炎帝の願いのままに現れた魔女を恐る恐る一瞥して夫人が席を立つ。本来ならば侍女なり執事なりに任せれば良い事だろうけれども、もしかしたらこの場に留まり辛かったのかもしれない。

怯えが見え隠れするぎりぎりの手早さで踵を返した夫人の背を見つめ、扉が閉じられるのを待つ。よく手入れのされた扉が音もなく閉じると、どっと疲れが襲ってきた。

とはいえこの姿でビリオン様の隣に座るのも憚られ、一步後ろに下がってリズの隣に立つ。炎に照らされる銀鎧と銀糸が溶け合うように寄り添うと、リズが嫌そうに顔を顰めた。……元通りの姿になった途端失礼な。

「もう少し平気そうな顔をしたらどうですか。そんな風に嫌がられると傷つきます」

「嘘をつけ。大体、魔女が隣に並んで平気な騎士など不気味だろうが。ここがどこだと思っている」

非難を囁きに載せて告げるとにべもなく返される。先刻までもう少しましな対応だった気がするのに、一体どういう事だろうか。確かにファルガスタの教育方針を照らし合わせてみればリズの言葉は間違いではないのだけれど。

嫌がらせの意味を籠めてぴたりと鎧に腕をくつつける。すると動けないリズがこちらをぎろりと睨みつけたけれど、視線を逸らしてやり過ごした。良い気味だ。

だがその腕はすぐに離す羽目になった。ちりちりと腕を焼かんばかりの視線が、紅蓮の色を灯して向けられたせいで。

「随分と親しい事だ」

「そう見えますか？ これでもお互い嫌がらせしかしていないのですが」

体ごと振り返るビリオン様を見下ろしながら眉根を寄せると、彼はふつと柔らかく笑って腕を伸ばした。そのまま私の腕をリズの鎧から引き離す。素早く有無を言わせぬ動きにきよとんとしている。ビリオン様はにいつと悪戯っぽい笑みをリズに向けた。

「俺の言葉を忘れたか、リズ」

「……………っ！ 失礼致しました！」

くつくつと笑う声に合わせて放たれた声に、リズが反射的にびりりと背筋を伸ばす。まるでヴァノツサを前にしているような態度だ。目の前にいるのはヴァノツサではなくビリオン様だというのに。

リズも遅れて気付いたのだろう。声なき声を上げて頬をかつと赤らめた。

「リズ殿？」

「何でもない、何でもないから黙っている！」

羞恥とも取れる横顔は珍しいを通り越して不気味だ。

そう思い声を掛けると、やはり羞恥のせいか怒鳴り返されてしまった。

……………ビリオン様をヴァノツサと間違えたからといって何もそれほど取り乱さなくてもいいのに。そうは思うけれど、ヴァノツサはリ

ズにとつて唯一にして絶対の主。間違える事などあつてはならないことなのだろう。

「陛下、あまりリズ殿をからかわないであげてください」

「すまない。だがまさかここまで面白い反応が得られるとはね。流石、二代目が気に入るだけのことはある」

このままではリズの自尊心が傷つけられてしまう。

何とはなしにそんな懸念を抱き、呆れ混じりにビリオン様を窺める。流石に名を呼ぶことは憚られるので陛下と呼ぶとビリオン様は少し悲しげに笑ったけれど、それはすぐに笑い声に変わった。

ソファの背に寄りかかり上目遣いに私とリズを見る目は楽しげだ。楽しげで、僅かの切なさを孕んでいる。

「私はそんなに二代目に似ているだろうか」

正確にはヴァノッサがそんなにビリオン様に似ているか、ということなのだろう。そしてビリオン様は私に答えることを望んでいる。掴まれた腕から伝わる温度に軽く瞼を伏せ、こちらを見上げる紅の双眸を見つめた。

確かに、同じ色をしているとは思ふ。

鮮やかな紅蓮を示す髪と瞳は二人共遜色ないように思えるし、顔立ちも似ている。声だつて喋り方さえ気をつければそっくりだろう。私だつて最初ヴァノッサに会った時、ビリオン様だと勘違いしました。

でも、違った。違うということを私はあの後嫌というほど思い知らされた。

「似ていないとは言えません。ですが、もし突然話しかけられても私はそれが誰か見分けられると思います」

一瞬の驚きの後にヴァノッサがビリオン様ではないと理解できたように、逆だつて有り得るのだ。

「どれだけ似ていても、全く同じ存在というものはこの世に存在しませんから」

いくら似せてもビリオン様がヴァノッサになれないように、どれ

だけ目指してもヴァノツサがビリオン様になれないように。そして
どれだけ請われても私が救世主になどなれないように、誰も誰かと
同じ存在にはなれない。

ビリオン様がヴァノツサに似せて話しているのを見て、余計にそ
う感じた。勿論皇帝の事を余り知らない人間であれば容易く誤魔化
す事は可能な程に似てはいるのだけれど。

自分に降り注ぐ声にビリオン様が薄く唇を開く。それは何の言葉
も発することなく、ただ弧を描いた。歓喜するように、絶望するよ
うに。

「ビリオン様……？」

相反する感情の発現に戸惑い、つい真名を呼ぶと彼はふいと顔を
逸らした。

「同じ存在になれないことで私は絶望するのか喜ぶのか……。今に
なつて怖くなつてきたよ」

遠くで足音が聞こえる。恐らくは夫人のものだろう。この距離だ
と会話が聞かれるかもしれないと口を閉ざすと、ビリオン様はぞん
ざいに足を組んだ。

現皇帝を演じる尊大な態度。けれど。

「それでも私は私でしかいられない」

囁き声がそつと耳に入り込む。小さくも強い響きを持つその声が
一体どんな感情を持って放たれたのか、私には分からなかった。分
からないから、曖昧な態度で頷く事しか出来ない。

音もなく扉が開かれる。その刹那に困惑をかき消して艶然と笑み
を刻むと、夫人が面食らったように足を止めた。

今の今まで忘れていたけれど、私は氷の魔女で皇帝を誑かす悪女
だ。少しはそれらしい顔をしておかなければ只の大人しい魔女で終
わってしまいそうだった。

ビリオン様がヴァノツサを演じているのだ。私だって悪女を演じ
なくては。

「それが初代の日記か」

室内に満ちる沈黙を破ったのはビリオン様だった。

「は、はい」

頷く夫人の手には銀色の文字でビリオン様の名が刻まれた日記帳があった。緋色の表紙は長き時を経た今でも鮮やかだ。

壊れてしまわないように慎重に歩く夫人の手から日記帳を受け取ったビリオン様は懐かしげに双眸を細める。

「確かに。これほどに良い状態で保存してもらったこと、感謝する」

「いいえ！ 陛下の御役に立てたのなら歴代当主も浮かばれましょう」

頭を下げはしないものの感謝の言葉を述べるビリオン様に夫人が萎縮しきった声を上げる。その様子を笑って見守っていると、くいとドレスの裾が引かれた。リズだ。

「……？」

「頃合いだ」

意味が分からず眉根を寄せると夫人に聞こえない程度の囁きが響いた。端的過ぎて分かりづらいけれど、そろそろ帰るぞと言いたいらしい。

わざわざ私に言うということは、促せということだろうか。

……ただこれだけの会話で何故そこまで理解できてしまうのか、甚だ疑問だけれど。

「ヴァノツサ、そろそろ帰らなくては皆が心配するわ」

腑に落ちないものを抱えながら声を掛けるとやはり正解だったのかリズがもつともらしく頷く。

「ああ、もうそんな時間か。では夫人、今日はすまなかった。今度ミルヴェーデン当主を通し、クレティエン当主へ薬酒でも贈らせてもらおう」

「そんな、勿体無う御座います。こちらこそ大したおもてなしも出来ず申し訳御座いませんでした」

「いや、大変貴重な収獲があった。十分過ぎるぐらいだ」

立ち上がるビリオン様に向けて放たれる夫人の言葉は、暖かくも貴族らしくはない。皇帝を迎えるというよりも隣人を招いたような気安さを感じるのだ。けれどそのようなことを気にする人間は、今の場にはいない。……というよりも私が知る皇帝は誰も気にしない。

簡単な挨拶を二言三言交わしながらビリオン様と夫人が歩く後ろを付いて歩く。そうして門まで辿り着き、ビリオン様に頭を下げた夫人がふとこちらを見た。

嫌悪でも畏怖でもない視線を意外に感じて見つめ返すと、夫人は恥じ入るように視線を伏せた。それとて怯えからではない。

だからかもしれない。

「……何か？」

知らず、そう尋ねていた。

平坦に尋ねる声に夫人が再び視線を上げる。明るい碧眼がこちらを見据えた時、彼女は純粹な好奇心を覗かせた。

「いえ……ただ、当家に伝わる話と瓜二つの方だと考えておりました」

「？ クレテイエン家に、私の話が？」

「はい。冷たく見えるのは外見だけで、本質はそうではないのだと真っ直ぐな視線に、一瞬どんな顔をしていいのか分からなくなりました。」

「……変わった意見ですこと」

氷の魔女の話が伝わっているのであれば、そこにあるのはリスのような敵意ではないのか。

訳が分からずとりあえず怪訝そうな表情を作ると、夫人はにこやかに笑った。演技が演技であると全て見抜いているような、そんな笑顔だった。

「そうでしょうか？ 少なくとも私は当時の当主の意見が正しいと思っております。魔術を見た時は驚きましたが、貴女様の本質は最初に見た笑顔だった気が致します」

いつの間に日が暮れていたのか、茜色が差し込む世界でにこやかに笑う夫人はやはり貴族らしからぬ態度で断言する。けれど、そんな風に好意的に受け止められる理由が分からない。魔女はいつの世も国を乱す存在だとこの国は教えているはずではなかったか。

仮にヴァノツサの前で私を持ち上げたいと思っっているにしても、夫人の態度には芝居がかった様子が見えない。

そうこうして悩んでいる間に馬車が一台駆けていく。煉瓦を流れる車輪の音を合図に夫人は深く頭を下げた。羽のように広がるドレスが夕日に染め上げられた。

「陛下とツヴァイ王家の婚姻が近いと聞きます。もう二度とあの頃と同じことが繰り返されませんよう、クレティエン・ミルヴェーデン家一同願っております」

「ミルヴェーデン……？」

「私は元々ミルヴェーデン家の人間です。クレティエンに繋がる話はミルヴェーデンも共有しておりますから」

夫人の言葉に首を傾げていると、リズが厳しい表情になる。……が、それは今は無視した。

二度と同じ事が繰り返されないよう。それはやはり私の存在が足枷にならないようにとのことだろうか。

だとすればリズのいるトリスタン家とそう立場は変わらないかもしれない。悪意を持たれていないだけましというだけで。

向けられた言葉に対しそう納得し、私は「分かっているわ」と呆れ混じりの笑みを漏らした。

言われるまでもなく分かっている。第一、私はヴァノツサとミルヒシュトラークの婚姻を後押ししたいくらいなのだから。

会話を終えた私達を見てピリオン様が背を向ける。その後リズが続くと、最後に夫人は大股にこちらに近づき私の耳元に唇を寄せた。誰にも、ピリオン様にも聞こえないように囁く。

「初代炎帝陛下から、もしも貴女様が現れたら伝えて欲しいと言われていた言葉が御座います」

「……何かしら」

早口に告げられる言葉に耳を傾ける。

「君がいた一年、確かに私は幸せだったと」

ビリオン様ではない声で発されたのは、胸をぎゅっと掴まれるような言葉だった。

肩が震える。そんな私の姿を見て夫人は安堵したように微笑んだ。「もう二度と繰り返さないくださいませ。華月の魔女様が現れたと聞いた時から、私達は違う結末を夢見ておりますゆえ」

すつと離れた影を追うように視線を巡らせる。しかしその時には既に夫人は屋敷へと入ろうと足を踏み出していた。仕方なく私も彼女に背を向けて歩き出す。

違う結末。

そんなもの、ありはしないというのに。

力一杯手を握りしめる。指先が白くなるのも構わず力を込め続けると、僅かに冷静さが戻ってきた気がした。

そつだ。違う結末など有り得ない。許さない。

少なくともクレティエン家が願う結末だけは許す事が出来ない。声を響めて誰にも聞こえないようにしたのは、それが国にとって危険な思想である事を理解しての事だろう。けれどそれでも口にした夫人の覚悟は、並々ならぬものだということが分かる。分かるからこそ頭が痛くなってきた。

別にクレティエン家は三百年の長きに渡ってあのような夢を思い描いていたわけではないだろう。

そもそも私は処刑された事になっていたのだから。

……そういえば、何故夫人は私が死んだとは口にしなかったのだろうか。

「そういえば、何故クレティエン家の人間は私が死んでいるとは思わなかったのでしょうか？」

トリスタン家ですら知らなかった事をクレティエン家が知っているのは些か不思議な話だった。

足早に近づき、ビリオン様に真っ先に尋ねる。するとビリオン様は事も無げに告げた。

「私が教えたからだよ。当時のクレティエン当主は宰相位に就いていたから、君の逃亡の時に力を借りたんだ」

そういえばクレティエン家当主とビリオン様は親しかったと聞いている。それに加えて宰相であつたとあれば、知っていたとしても不思議ではないのか。

振り返り、横顔だけで小さく笑つたビリオン様に向けて内心で頷くと、彼は数歩大股に歩いてくるりと振り返つた。

「とりあえず今日はここまでのようだね」

「ビリオン、様？」

夕日を背に、逆光の中立つ姿は微かに揺れている。

塵気楼を思わせる姿にぎよつと目を見開いた。

焦燥感が止められない。消え行く姿に私は一体何をしたらいいんだらう。そんな言葉ばかりが頭を過ぎる。

消える事を、生きている時を、止めなければ。そうしなければ自分が与り知らぬ所で誰かの命が奪われるかもしれない。

そんな事は分かつている。けれど、私にはビリオン様を攻撃することが出来なかつた。結局はそれが答えなのだ。私の中の私が嘲笑する。

ビリオン様と共にには行けない。その癖傷つける事もできない。

嫌だ嫌だと駄々をこねるばかりだ。本当に馬鹿げている。それも分かつている。

これが答えだなんて、何て情けないんだらう。

覚悟なんてまるで見出せない弱さに、発狂してしまいそうだ。

私は一体どうしたらいい？ どうしたらこの答えに嘘をつかずに結論を出せる？

日記を手渡される。ずしりとした重みは年月を吸い込んで更に重量を増した気がした。

「今日は楽しかったよ、レイアスティ。またこんな風に君と歩ける

日が来るといいのだけれど」

柔らかな声と共に、陽炎が空気に溶けていく。

「や、待って……っ」

まだ消えないで！

胸中でそう叫び慌てて手を伸ばすものの、指先は空を切る。

本物の屋気楼のように静かに消えた人影を掴みそこね、唇を噛み締める。

まるでこの日記帳があればそれだけで全て事足りると言わんばかりの、あっけない別れだった。

「また、結論が出せなかった……」

それが胸に重く押し掛り、私は日記帳を抱きかかえ陰鬱な声を漏らした。

焔に包まれるように消えた人影に背を向け、リズと皇城に戻ってきた私はすぐさま冬宮の部屋へと入った。すると、即座に灰色の塊が胸に飛び込んでくる。

「レイア！ お帰り！」

温々としたそれは猫の形をしており、私は重苦しい気持ちを一旦放り投げてそれを抱きしめた。

「ただいま。ビーがここにいるなんて珍しいわね」

「レイアを待ってたんだよ！ まったく、すぐ戻ってくると思ったら城下に行ったって話だしさあ……レイア？」

どうやら朝から放置していた事にご機嫌斜めだったらしく、ビーは次々と小言を繰りだそうとする。だがその声がびたりと止んだ。

「え？」

「どうしたの？ 何か顔色悪いよ？」

小言を受け止めようと寝台に向かっていた所で止まった声に小首を傾げると、案ずるような金の瞳がこちらを見上げた。同時に背後

に立つリズに厳しい視線が向けられる。恐らくリズが何かしたとでも思っているのだろう。

む、と顔を顰めるリズとビーの間に割って入り、安心させるように首を振る。

事実リズに何をされたわけでもない。むしろ、何も出来なかったからこそ落ち込んでいるのだけれど。

「今日は色々ありすぎたからかもしれないわ。それに沢山歩いたし、疲れたのかもね」

「……ふうん」

とはいえそれを口にするところから説明をしなければならぬ。元気な時ならばともかく、今はそうするだけの気力がなくて私は結局はぐらかすように別の理由を持ち出すことしか出来なかった。

苦笑交じりの言葉にビーが気のない返事を返す。……信じてないわね、これは。

付き合いが長いだけあって私が説明を面倒くさがっている事がありありと伝わっているに違いない。どうしたものかしら、と思索しているリズの声が耳朶を打つ。

「おい、馬鹿猫」

「何さ馬鹿騎士」

ぞんざい、というよりも険悪な事この上ないやり取りね。

だがこれが二人なりに親しいやり取りという事なのだろうからと黙っていると、腕から飛び出したビーがリズの傍に寄った。その隙を突いてリズがビーを抱き上げる。否、掴み上げるという方が正しいか。

ぎにゃ、とやたら高い声で鳴いたビーは目一杯暴れるものの、やはり人間には敵わないのか最後には渋々リズの肩の上に落ち着いていた。何度見ても笑いそうになる光景だ。仏頂面の騎士と猫。何て面白い取り合わせなのだろう。

「お前夕食は食べたのか？」

「ただだけど、それが何？」

「ならば風呂に入れた後で食わせてやるからこっちに来い。そいつを少し休ませてやれ」

笑いを噛み殺す私には気付いていないのか、リズとビーは口早に言葉を交わす。その話の内容でさえ笑いが出てしまいそうで必死に口を押さえていると、それとは逆にビーがあんぐりと口を開けた。

「……は？ いいけど、今何かすごい事言わなかった？」

私としては二人の体勢も会話の内容も十分すごい事なのだけれど、と口を挟む事は出来ない。

代わりに沈黙を貫いてリズの答えを待つと、全力で眉間に皺を寄せたリズが瞳に蔑むような色を載せてビーを見据えた。

「風呂ぐらい我慢しろ。仮にも猫の王だろうが」

ビーが猫の王である事など話しただろうか？

リズの言葉に疑問符を浮かべていると、恐らく話した張本人なのであろうビーが声を荒らげた。毛が逆立ち、威嚇の姿勢を取る。

「そうじゃなくて！ レイアを休ませてやれって方だよ！」

「……普段皇城と冬宮に引きこもっている魔女が城下を歩き回ったんだ。消耗していてもおかしくはないだろう」

言われてみれば確かに不思議な話だ。リズが私の体を気遣うなんて。

いや、勿論彼だって私の身を案じてくれる事は多い。多いけれど、それを素直に口にするというのが珍しいのだ。

一体どういう心境なのだろう。興味本位にリズの渋い顔を見てみると、彼の視線がついと私の手に持つ日記帳へと寄せられた。刹那、おおよその事情を理解する。

気遣われては、いる。けれどその方向性は口に行っているものとは違うということなのだろう。

リズの視線を追って、金色の眼差しがちらりと手に持つ書物へと向けられる。

だがビーはそれには触れず「ふうん」と一言で済ませた。彼にも理解が出来たのだろうか。

「分かったよ。じゃあお風呂我慢するから」

「ああ分かった分かった。カナデ島産ではないが、魚ぐらい用意してやるから大人しくしてろ」

暖炉の中で薪が爆ぜる。その音に合わせて尻尾がぺたりとリズの鎧を打った。その動きが少し早めなのは機嫌を直した証拠だ。

「ふふん、分かればいいんだよ。じゃあレイア」

「ええ、行つてらっしゃい」

すっかり機嫌を直したボーイソプラノに苦笑を漏らす。

そうして手をひらりと振ると「さあ行くよ」とビーはリズを促した。私をこの部屋に残し、一人にするために。

扉に手を掛けたリズが振り返る。刹那、視線が交わった。

何の感情も見せない空色に感謝の眼差しを注ぐと、それはすぐに逸らされたけれど。

扉が閉められ足音が遠ざかる。寝台に腰掛けて少し待ち、冬宮から誰もいなくなった事を確認してから私は深く息を吐き出した。ごろんと寝転がり、日記帳の表紙を撫でる。

「……ビリオン様」

この日記帳を託した事で、きっと彼は彼の目的を果たしたんだろう。数多くの目的のうちの、一つを。その中に飛び込むという事は決して上策とは言えなかった。

「でも見なきゃ分からないわ」

とはいえそれも事実だった。

私は結論を出せなかった。どつちつかずの答えしか出せなかった。だからこれを読もうと読むまいと更に迷う事は確定しているのだ。だったら読んでみたかった。

痛いほどの沈黙を抱きしめて寝転がり、俯せになる。頬にかかる髪を耳元へと追いやって表紙を開くと、数頁の空白の後でようやく文字が見えた。

日記の始まりを告げるのは、私にも馴染みのある年の馴染みのある日だ。

黄ばんだ紙を掴む指先が反射的に動きを止める。睫毛が震え、目の奥につんとした痛みが走った。

主語も何もなく、唐突に始まる言葉はとても丁寧に書かれていた。『幸せにしたい人が出来た』

「……………ああ」

見慣れた優しい字には深い想いが籠められているようで、私はこの期に及んで尚あの人を傷つけなくて良かったと思ってしまうた。

ぱたり、涙が溢れる。手の甲を濡らす水滴が冷えきるまで気付かぬまま、私はその一言をじっと見つめていた。

第三十八話 答え

一度堰を切って流れでた涙が枕をしとどに濡らしていく。

今からこんなことじゃ最後まで読めないのではないか。

そう思い内心苦笑を漏らすものの、日記を閉じる事は出来なかった。

知らなければならぬから、知りたいという欲求へと心が移り変わっていく。

私の知らないあの人を知った後の事を考えると胸が痛んだけれど、涙で書物を濡らさぬよう、少し遠ざけながら頁を繰っていく。

全ての始まりは私達の関係が始まった日でもあった。

彼女は、不安と焦燥から心が闇に沈みかけた時に現れた光だと私には思えた。

皇帝に即位し一年が経過した私には国を守る覚悟も民への愛情もなく、ただ目の前にある雑務だけを片付けて生きていた。……いや、今もそれは変わらない。だからこそそんな状態を変えたくて、民の姿を見ようと皇城を抜け出した。

そうして城下を歩いていった際、私は“彼女”に出会った。

彼女を見た時にまず胸を過ぎったのは驚愕だ。それ以外の何者でもない。誰だつて銀髪の女性が慌てた様子で城下を走っていたら驚くだろう。彼女自身は気付いていない様だが、このモーリス大陸で銀髪の女性というのはそれだけの価値があるのだから。

銀の魔女、最果ての魔女が救世主。

初めて見た時に頭を過ぎった言葉がきっかけで私は彼女に声を掛けた。

そこから全てが始まったのではないかと思っている。

どうやら精霊王達に契約を迫られ追われていた彼女は、逃げながらも怒りを籠めて初対面の私の身を案じてくれた。実際彼女は精霊王に攻撃をされたのだから無理もない話だが、どちらにせよ私には喜ばしい話だった。そんな風に心配をされたことなど、只の一度だつてないのだから。

結果として彼女は精霊王達と契約を交わしたが、その理由の一端に自分の存在があつた事が嬉しく思えたのもそのせいだろう。……彼女には悪いから決して口に出せはしないが。

全てが終わつた後、疲れた彼女を休ませる為に南地区の高台へと行つた。

私という存在にとつての始まりが彼女との出会いだとしたら、フアルガスタ皇帝としての始まりはこの時だったのだと今なら言える。夕日に照らされる中、城下を見下ろした彼女は澄んだ目でこの国を綺麗だと言つてくれたのだ。

人に話せば唯それだけの事かと笑われるだろう。けれど、それだけの事で私はようやく執務室へと足を向けられるようになったのだ。経験の浅い、若い皇帝。多くの者がそんな皇帝の拳動に注目している。

その中で落胆し、失望する者もいるだろう。そうさせないだけの力は今の私にはない。そして私はずっと失望されるのが怖かった。ただでさえ化物呼ばわりされているというのに、失望まで呼ばれたら私に何の価値がある？

けれど私はここから逃げないと決めた。決めることが出来た。国を守り、民を率いたその先に彼女の笑顔があると知っているからだ。今はまだ誰にも言えないけれど。

この想いは、いつか臣下が私に心から尽くすようになった時に打ち明けようと思う。少なくとも今は駄目だ。魔女に心を奪われた、それも経験の浅い皇帝など不安の種でしかないだろうし、第一彼女自身を危険に晒す。

だからその日が来るまでは保護という形で彼女をフアルガスタで

匿い、護ろう。彼女を引き止めるのに保護という手段を取りたくはないが、去られてしまうよりずっと良い。私は彼女を失いたくはない。

長々と綴られた言葉を目で辿り、劣化した文字を指先でなぞる。ちりちりと頭の奥が痛む。それが悲哀なのか別のものなのかは分からなかった。

『行く宛がないなら、私の所に来ればいい』

あの時そう言って伸ばされた手を取った瞬間から、私の全てはこの国になった。

だから保護という形でなかったとしても私はこの国を去りはしなかったのに。

……例え記憶を取り戻しても消えるつもりなどなかった程に想いは固いつもりだった。けれど口にしていない想いは届くはずがなく、ビリオン様はビリオン様で悩みを抱えていた事になる。混じり合いそうな部分すれすれですれ違ふ心にそつと溜息をついた。

紙同士が擦れ合う音と共に頁を繰っていく。

ふと時折の空白を挟んで綴られる言葉の中に気になる文字を見つけ、ぴたりと指先を止める。頬に張り付いた髪を払いのけつつその部分を凝視した。

『ツヴァイ王から、三度婚儀について打診された。今度はもう逃れられないだろう。……逃れたくとも、ツヴァイ王にだけはその理由を話すことは出来ない。白銀の魔女を追うツヴァイ王に彼女のことを話せば、それこそ火に油を注ぐようなものだ。そうして悩んでいた時、私は使者としてファルガスタ皇城を訪れたツヴァイの姫マリエルにある提案をされた』

ビリオン様が話してくださった通りだ。

どういう理由からか白銀の魔女を追うツヴァイ王。私を隠そうと

するビリオン様。そして私を守るという条件で婚儀の約束を取り付けたマリエル様。

書くのを何度も躊躇ったような、苦々しい気配が文字から漂ってくる。きつとこの日から多くの物が壊れていったのだ。……私が何も知らない間に。

それから先は大体私も知っているような内容だった。約を破られたビリオン様の怒りと、月宮建設、魔女の狂宴。その中にはビーを拾った日の事や私が氷の魔女と呼ばれ始めた日のことも詳細に書かれていた。

『傍にいてくれるだけで心を暖かくしてくれる人が氷の魔女などとは、何とも馬鹿馬鹿しい話だ』

こんな書き出しで始まっていたその日の日記の文字は荒々しかった。

書き殴られた文字が踊る。暖炉の火に侵食されて薄紅に光る紙までもが怒りを放っているようにも見えた。

『誰が言い出したかは大体察しているが、かといってこのままで済ませるわけにもいかない。例えどのように高貴な出自の者だろうとやっていいことと悪いことがある。とはいえ元凶をどうこうするという手は使えまい。今ならばツヴァイ相手でも引けを取らない自信があるが、私達のせいで民を危険に晒すことなど出来ない。仕方がないので私はすぐに宰相に命じて彼女を貶める者を罰することにした。……本当なら私が表立って動きたい所だが、そうすれば彼女は萎縮してそんな事実はないと口を閉ざしてしまうだろう。ただでさえ辛いと思ったことを口にしない人だ。だから彼女が口にするまで出来る限り裏から抑える事にしよう。彼女に辛いと口にしてもらわなければ動けないなんて、本当に情けない男だと自嘲せずにはいられない自分に呆れるばかりだけれど。……辛いと口にさせないようを守りたかったのに』

忙しい人だと思っていた。だから私が何て呼ばれているかを知らないはずだし、私も口にせずにはいた。

でもそれが違っていたのだと今更気付かされた。

あの人は待つていたのだ。私が口にするまで辛抱強く。

私を氷の魔女と呼び始めた皇妃様は私が誰よりも慕っていた女性だ。だからこそ、ビリオン様は彼女と私の確執が更に深まらないように見えない所で私を守ってくれていたのだ。

物事の側面しか知らない私の話を聞いていつかビーが怒りを顕にしたことがある。もし彼が戻ってきたら違うんだと伝えなければ。あの人はいつだって私を守ってくれていたのだと。

涙に濡れそぼっていく手の甲をぎゅっと握り締める。枕に顔を押し付けると嗚咽が漏れてしまいそうだった。その癖やたらと嬉しいと思ってしまうのは、心のどこかである時のビリオン様を恨めしく思っていたせいだ。有り得ないとは思うものの、歓喜が否定をさせてくれない。

一人ぼっちになってしまったのだと想っていた。だからビーを失いそうになった時その孤独に耐えきれず、禁術に手を出した。

実際物理的に私が一人ぼっちだった事は否めない。北の孤島には誰も訪れなかったのだし、ビーを人として数えなければ確かに私は一人だった。けれど精神的には違ったのだ。

すれ違ったり拒絶したり一方的に相手に期待をかけたりと、私達には多くの問題を抱えていた。それでも一番大切な部分では繋がっていたのだから。

お互いがお互いを大切に想っていた。それだけで孤独は埋まる。満たされたような虚しいような不思議な心境で再び日記を読み始める。まだもう少しだけ続いている頁を捲り、私達にとっての最後の日が書かれている所で目を止めた。

『今日、私はこの短い生の中で最もかけがえない存在を失った』
やはり書き殴られた字は、先程のものよりもどこか弱々しい。

『彼女は私以上にこの国と民を愛していた。魔女の狂宴などとふざけた名のついた伝染病から唯一人の子供を救うべく、昼夜を問わず奔走していた彼女こそがこの国に必要な存在だったはずなのに。そ

れでも彼女がこの国を追われたのは彼女が愛した民達から向けられた殺意故だ。……皮肉なものだと思った。皮肉すぎて、腸が煮えくり返る程に。民の暴動を止められず、伝染病と魔女の関連性を否定できるだけの証拠を見つけられなかった己と、民と、国を心から壊したいと憎む程に、皮肉な出来事だった』

所々が掠れた文字から目を逸らすように瞼を閉じる。暗闇の中でビリオン様が自らそう話しているような幻聴が聞こえてきた。

違う、と首を振る。抗うように、諭すように。

あの冬の日、多くの人が伝染病で死んでいった。それが原因で私はファルガスタを出奔した。

でもそれは誰かのせいなんかじゃない。

苦痛と死への恐怖に狂った病人と彼等の傍にすることで狂気に感染した民に罪はない。ましてや彼等の為に皇城と城下を往復していたビリオン様に罪などあるはずがない。国に至ってはただの舞台だ。

勿論私に原因があるわけでもないからこの場合罪があるとは言えないけれど、誰かに罪を擦り付けなければ民が正気を保てなかったのだと思うと文句など言えなかった。やるせないと思いい人への情も薄れたとはいえ、憐憫ぐらいい抱いているのだ。

泣き疲れて力の抜けた体をベッドへと押し付ける。深く息を吐き出しながら瞼をこじ開けると、今朝聞いたばかりの言葉が書かれていた。狂ったように何度も『愛している』と。

書き殴ったもの、丁寧に書かれたもの、震えているもの 様々な形の愛しているの文字を目で辿り、不意に続く言葉に気付いた。

『船が出航した時、どれだけこの言葉を叫んだか知れない。けれどもこうして何度書いても叫んでも、彼女はもう笑顔を向けてはくれない』

あの日、私がファルガスタを出奔した時、ビリオン様は何かを叫んでいるようだった。泣いて、何かを必死に訴えようとしているようだった。

あの時何を言っていたのか正直言っただけには全く届かなかった。けれどまさかこんな所でそれを知る事になるだなんて。

「私が彼女をどれだけ愛していたかなんて、きっと誰にも分かりはしない。いや、理解することなど許さない。唯一人、私をビリオン・ヴァン・ファルガスタ一人として見てくれた彼女の笑顔が、私にとってどれだけ救いのあるものだったかなど」

後に誰かの手に渡ることを恐れてだろうか、そこに私の名前は書かれていない。だというのに日記に出てくる彼女という言葉が全て自分を示しているのだと理解できた。

もし昔の私が日記を斜め読みしていたとしたらこの言葉はマリエル皇妃への物だったと思い込んでいただろう。心底信じてビリオン様の深い愛情に感銘を受けたかもしれない。けれど今はそう思えなかった。そう思っただけいけないと思いい知らされたのだから。

「これがビリオン様が伝えたかったこと……」

しんと静まり返った室内に響く自分の声がやけに大きく聞こえる。誰かに聞かれはしなかっただろうかと恐れてしまった程だ。実際はリズムもビーも皇城に行っているのだから誰も居るはずがないのだけれど。

指先に力を入れて上体を起こす。気だるげに揺れる髪を背中へと流して座り込んだ時、指が頁に触れて数枚ぺらりと捲った。掠れた文字が目に入る。

まだ日記は終わっていないかったのか。そう思い力なく文字を辿って息を呑んだ。

「っ！？」

視界を限界まで押し広げるようにして目を開け、慌てて日記にかじりつく。

驚愕と恐怖に心臓が早鐘を打つようだった。その全ては“軟禁”の文字によって生み出されている。

「……まるで軟禁されているようだった。皇城から出ることは固く禁じられ、月宮への移動さえも近衛騎士団に付き従われる始末だ。

彼女が処刑されたという情報が嘘であったことは宰相以外には知られていないようだが、この時期にマリエルを刺激する事を誰も望んでいなかったせいだろう。……生まれてくる子供は、父親が魔女に心を奪われていると知ったらどう思うだろうか』

「どうして……私はもうファルガスタを出ていたのに」

大国ファルガスタで最も高貴で強い権力を持つ御方が軟禁状態だなんて、尋常ではない。

文面から察するにマリエル皇妃が妊娠したからだと言う事は分かるが、だからといってこんな……。

妊婦に精神的負担を掛けてはいけないということはいくら魔女だとはいえ理解出来る。案ずる臣下達の気持ちも勿論分かる。……でも、それはビリオン様を閉じ込めても良い事には決してならないはずなのに。

城下にいる時のビリオン様の姿が頭を過ぎる。「民と一緒に歩ける皇帝なんて、私は随分と幸せ者だね」そう言いながら肩の力を抜いて歩く姿はいつもよりも活き活きとしており、見ていて眩しかった。

そんな人から自由を奪ったのか、彼等は、私は。

「私のせいで」

心の中で呟いたはずの言葉が口を突いて出る。

私がファルガスタに現れたせいでビリオン様は自由を奪われたのだ。元凶となる私が消えてからも、長い間。

力一杯握りしめた掌に爪が食い込む。皮を破らんばかりの勢いで爪を立て、ふつと力を抜いた。

これが唯一つの悔恨であったなら私はきつと自分を許せず掌の皮を破っていただろう。だが悔恨はこれ一つだけではない事を知っていた。そして取り返しが付かないということも。

口元を引き締め再び頁を繰っていく。

私が身を引いた　もとい逃げた世界でビリオン様がどう生きて死んだのかを知りたかった。

マリエル王妃が身籠った子供が生まれ、遠巻きながらも成長を見ていくビリオン様の日々が多く空白と共に綴られていく。

その終わりに、彼自身の終焉の始まりが綴られていた。

『死が近づいているのだと気付いた。自ら選びとる死ではなく、それ以外の何かによって与えられる死だ。確かめたことはないけれど、恐らく彼女が望む形の死なんだと思う。最も、こんなに早く死ぬことを彼女はよしとはしないだろう。まだ、平均寿命の半分を越えた程度だ。それでも私は、安堵していた。 やっと、このくだらない世界から解放されるのだ』

以前リズに見せてもらった歴史書ではビリオン様は病死したことになる……それも随分と若くして。これはその時のものなのだろうと納得した。

けれど、これは知らない。

『三日後、ツヴァイ王が皇城を訪れる事になっている。私亡き後の王妃と皇子について頼んでおきたい事もあるし、丁度良かったと思っている。その前に私は決断せねばならないのだけれど』

「決断……？」

死を間近に控えたビリオン様が決断しなければならぬほどの事とは、一体どんな事なのだろうか？

頭の上に疑問符を浮かべ、ふと別の事が気になって私はまじまじとその日の日記を見つめた。見ているのは主に日付だ。

無論その日付自体に何か問題があるわけではない。しかし三日後という言葉が気になっていた。その日付に見覚えがある気がしたのだ。

けれど冷静さを取り戻した頭から記憶を手繰り寄せようとしてみてもなかなか上手くいかない。

……気のせいだろうか。

胸中でそう呟くと本当に気のせいだったような気がしてきて、私は書物を閉じながら嘆息する。胸焼けがしそうな程に思考が渦巻いていた。

過去に端を発した想いは禁忌を辿って現在に繋がっている。その現在で私はどう想いを返せばいいのだろうか。

禁忌ごと打ち破り想いを突っぱねるか　それとも全てを受け止めるか。

どの道を選ぶにせよそこには必ず不死掛けや地脈破壊といった問題が立ちはだかっている。私はそれにどう対処したらいいのか。

不死掛け自体は実は放っておいても良いのでないかという気がしないでもない。命の在り方としては大問題だけれど、それは今すぐに対処しなくてはならないことではない。問題は地脈破壊だ。

命の在り方云々の前に世界が壊れては意味が無いのだ。

私が本当に文字通りの氷の魔女で、情なんてものを一切合切持ち合わせていなかったらこんな悩みはしなかったのかもしれない。

いえ、そうなるとヴァノッサに頼まれて北の孤島から出てくるということさえなかったのかもしれないけれど、それは置いておこう。炎に照らされて鮮やかに色を放つ日記と自分の魔導書を抱きしめる。

私との出会いが書かれた日記に、目が醒めたその時から持っていた魔導書はどちらも大切な書物だった。混乱する思考と状況の中で現実逃避するように懐かしさを見出す為の媒介なのだから。

そこでふと城下に行きたいなと思った。

もう店は閉まっているし人通りも殆どないだろうけれど、急に見たくなつたのだ。何もかもが変わってしまった城下でもう一度あの人の足取りを追いたかった。

「……行くっ」

見た所で何も変わらなくとも、ここで悩んでいるよりはいいはずだ。

呟き、我ながら驚くほどの素早さで立ち上がった私は涙に濡れた頬を拭って部屋の中心へと向かう。

そうして自分に幻術を施してからすぐに空間転移のスペルを唱え、私はふらり、冬宮を抜けだした。

日がとつぷりと暮れて花月が顔を出す夜空を見上げ、私は一人フ
エンネルの東地区へと降り立った。

職人が集う地域だけあり彼等が寝静まった様子はない。工場から
漏れ出す灯りが石畳を照らし、月明かりよりも眩しく私を照らした。
金属が触れ合う音と細く白い煙に人間の気配を色濃く感じながら、
誰もいない道を歩いていく。窓枠の形に切り取られた灯りの下を歩
くと、くつきりとした影が落ちる。

家々を照らす灯りや花月によく似た色の金髪が北風に流れる。あ
の頃は銀髪のまま歩いていたらけれど、確かピリオン様は東地区で鍛
冶師の元に頻繁に出入していた事を思い出した。自分や騎士が手に
持つ剣がどのようにして生まれるのか興味があつたのだと話してい
た気がする。

ヴィクトリア通りを真っ直ぐ歩きながら東地区を抜け、今度は西
地区へと入る。

こちらは寝静まっている民が多く、灯りは殆ど見られない。

花月の光を頼りに歩を進め、そこかしこに見える古い町並みに口
元を綻ばせた。この場所はピリオン様が一番よく訪れた場所だから
だ。主に子供達と遊ぶために。

大人はピリオン様が持つ紅蓮を恐れている節があつたけれど、子
供とは無邪気なものでそんな事は意にも介さなかつた。それが良か
つたのだと思う。

濃密な眠りの気配を壊さぬように静かに歩き、路地を進んで今度
は南地区へと行く。ヴェルナー通りを使わずに路地から入っていつ
たのはその道が三百年前にもあつたからだという唯それだけの理由
だった。

ピリオン様と歩いた道、交わした言葉。それらを月明かりの下を
歩きながら、静かに静かに思い出す。

東地区を通り西地区を過ぎ、そしてあの高台へと向かいながら時折目を閉じて、時折空を見上げて。

今はもう閉まっている店で売られていた花の名前、食物を仕入先である小国の話、ファルガスタやツヴァイの歴史、御伽話。

多くの人に出会った。私を魔女と知っても慕ってくれる子供達の姿もあった。

けれど私の記憶の大部分はビリオン様の姿と声で埋め尽くされていた。

初めてこの国に来た時には殆どまっさらだった記憶の中に降り積もる、一年分の記憶。北の孤島で過ごした三百年よりもずっと色鮮やかな記憶は、自堕落ながらも穏やかな日々を辿って今へと繋がっている。

あの人と共に行けば、またこの記憶は鮮やかに降り積もっていくのだろうか。

膨大な記憶の只中に立ち、ともすればずると堕ちてしまいそうになる意識を首を振って振り払う。

濃い影が落ちる。遠くで車輪が煉瓦の上を走る音がした。

「どうしたらいいのかしらね」

口にしても返事は無い。けれども口に出さずにはいられなかった。過去に手を伸ばされた手と現在で伸ばされた手は、どれだけ似ていたとしても決して相容れない。どちらかの手を取れば、どちらかは消えてしまうのだ。

ふうと息を吐き出し、シヨールの裾を握り締める。

昼間もそれなりに寒いのに夜はもつと冷える。もう少し着込めれば良かったと後悔しながら目を閉じ、冷え冷えとした空気を深く吸い込んだ。

生前のビリオン様から魔力をあまり感じられなかった事から、彼の背後に術者の影があることは明白だ。

だから未だその片鱗を見せもしない術者の術中にはまるわけにはいかないとは知りつつも、思考は奥深くへと入り込んでしまう。

高台へと上り、ぼつぼつとした光に照らされるフェネルの町並みを見下ろす。

初めてこの国に来た時よりもずっと豊かになった国。けれどその場所は今いつ崩れ去るか知れぬ危うさをも孕んでいた。いや、止める事が出来なければ確実に崩れ去るだろう。この世界と共に。

脳裏にビリオン様の笑顔が浮かぶ。民と共に歩いていけることを幸せだと言った時の、はにかむような微笑。闇なんてまるで感じさせない、どこまでも穏やかな笑顔は確かに幸福に満ちていたのだと信じたかった。

寒風にその身を剥き出しにした煉瓦が急速に温度を失っていく。それを靴越しに感じ、私は身を震わせた。

皓々と月明かりに照らされた地面を見つめるとそこには私一人の影しか無いことが分かる。

くつきりと刻まれた影はドレスの裾やショールの形を象っており、不気味に揺れていた。

今自分は一人ぼっちなのだ。三百年前、精霊達に追われた時と同じように。

分かりきっていた事だというのに急に心細くなり、私はぎゅっと自分の体を両腕で掻き抱いた。

「帰らないと……」

震える唇が言葉を紡ぐ。

「帰らなきゃ」

言いながらドレスの裾をひらりと翻し、北地区へと足を向ける。

もう夜も遅い。そろそろヴァノッサも冬宮にいることだろう。

私が突然消えて腹を立てているかもしれないけれど、一夜ぐらいいなら私の帰りを待っていてくれるはずだ。

……それを超えたら兵を城下に向かわせるかもしれないが。

そういえばヴァノッサにまだビリオン様の日記の話をしていなかったと思ひ出す。

彼も気にしているだろうから、今日一日の事について私の口から

も報告をしておいた方がいいだろう。

もつとも、殆どはリスが説明を済ませているのだろうがヴァノツサは私からも説明をさせるだろうから。

ああ、よく考えてみたら茶葉が切れていた。話が長引くのならリズに頼んで持つてきてもらっておけばよかった。

ささやかな後悔が頭を過ぎるが、しかし私はそれ以上の強大な困惑に足を止めた。

帰らなければ 冬宮に、ヴァノツサの所に。そう自然に考えていた自分に驚いた。

闇夜と月明かりに心細くなった自分が無意識に選び取ったものの形はこれだったのかと愕然とした。

手の中にはビリオン様の日記がある。

ずっしりとした重みがこれほど存在を伝えてくるのに、私はそちらに目を向ける事もしなかった。

「……そう、そうね。そうだったわ」

支えを失ったかのようにがくがくと何度も頷く。頷きながら、これで何度目だろうかと思案した。

二つの焰。それらを天秤にかけた時自分がどちらを選び取って来たのか、私は再び思い知らされた。

このファルガスタに留まっている。どのような事情があるうと、それが全てだというのに。

そして私はとうの昔に道を選びとっていたというのに。唯一つの覚悟がないというだけで。

問題は、その覚悟がないことなのだけだ。

思考がずぶずぶと闇へ向かっていく。けれど何故かもう怖くなくなつた。

どれだけ悩んでも私が闇に取り込まれてしまう事はないと、そんな気がしていた。だって私には。

「レイアステイ！」

そう、私にはこんな風にいつだって私の名を呼ぶ声が聞こえるの

だから。

声？

「……ど、どうして？」

空耳とはとても言い難い鋭い声に顔を上げる。

どこを見渡してもここが城下の南地区である事に変わりはない。

けれど、だったらどうして私を呼ぶ声なんて。

先程遠くで聞こえていた車輪と蹄の音が至近距離に近づく。側面に花月の光を浴びる馬車の造りは簡素だが質が良く、それがただの貴族の物ではない事を理解した。

荒々しい音と共に馬車が止まる。開かれたドアから見えた紅蓮に、言い知れぬ安堵を覚えた。

「勝手に冬宮を抜け出したかと思えば、何をしているんだ貴女は」「ヴァノツサ……？」

この男は機でも読んでいるのかしら。

私が思考の闇に沈みそうになる時に、危機的状況にある時にこうして傍にいるこの男は。

否、勿論分かっている。彼はただ冬宮を抜け出した私を探しに来た事も、リズに聞いて南地区に来たのだろうことも。

そして私が何故外に出たのかということも、全て知ったからここにいる。でなければわざわざ探しになど来ないだろう。

「皇帝ともあるう御方が夜分に皇城を抜け出す方が問題でしょう」

「寵妃に逃げられて一人寝など情けなくて出来るか。そもそも貴女が抜け出すのが悪い」

「あら、私がいなければベッドを一人で使えるでしょう？」

「必要ない。俺は貴女と同じ部屋の椅子で寝るのが好きなんだからな」

「……いい加減ベッドで寝てください」

「断る。もつとも、貴女と一緒に寝てくれるというなら話は別だが」

「それこそ御免被ります」

それでもあまりに良い頃合いに現れたヴァノツサは、こうしてあ

っさりと思考を闇から掬い上げてくれる。軽口を叩くだけの余裕をくれる。

相変わらずの不遜な態度もいい加減気にならなくなった。

きっぱりと言いつつ私にヴァノッサが双眸を細める。そうして呆れ混じりの溜息をついてこちらに手を伸ばした。

「何があつたかは後で聞かせてもらおう。とりあえず冬宮に帰るぞ」
「仕方ありませんね……」

寄り道など一切無しの真っ直ぐさで手が伸ばされる。その手をあつさりと取ったことに対し思わず狼狽えた。

何故私はヴァノッサの手は振り払えないのだろう。

腹を立ててもしない限り、こうして出された手を拒んだことはない気がするのだけれど。

当たり前のように伸ばされる手、当たり前のように掴んだ手。

時折道化じみでいて、不遜で、真摯な硬い掌は熱い。生きている事を感じさせる熱がここにはあった。

「冷えているな」

「外が寒いせいでしょう」

手を取るなりそう言われ、小馬鹿にするように返してやる。そんなやりとりでさえ今は思考を冷静にしてくれた。

透明になっていく思考の中で、半ば自棄になったような言葉が流れていく。

理由など分からない。細かい感情がどう作用しているのかも分からない。

けれど私は長い時を共に過ごして来たわけでもない、最近では忙しさのせいで余り顔を合わせることもない男の手を何度でも取るのだろうか。

大切な人の過去を知りそこにある想いを知って悩んでも、最後にはここに辿りつく。結局はそういうことなのだ。

今まで悩んで揺れてその度に決断したように、どこまでも熱く真摯な……その癖どこか脆い男の手を取る事に変わりはない。それを

本人に伝える事は決してないのだろうけれど。

魅了のスペルを唱えられた時にヴァノッサを見て感じた安堵。多分答えは全てそこに詰まっているのだと思った。

そしてビリオン様の笑顔を思い浮かべて感じた事も、私が答えを選び取るには十分過ぎるほどの理由があった。

……心が壊れそうに痛むのは、そのせいだ。私はとうに道を見つけているのだから。ただ、解決法が浮かばなくて悩んでいる。

私が取った手は、今を生きるための手。

その手を振り払わないために自分はこうして悩んでいるのだと、癪だけれど認めることにした。

何度も何度も道を理解したような気になりながらも似たような思考の迷路に迷い込んでいる。

けれど、次からはもう同じ事で悩みはしない。私はヴァノッサの手を取ったのだ。

でも、だからこそ、辛い。

第三十九話 立場の隔たり

世界に満ちる精霊達は、私の決断をもう知っただろうか。ピリオン様は彼等からこの決断を聞かされたのだろうか。

聞いていてほしいし、聞かないでほしいとも思う。

けれど、どう足掻こうとも私達はもう二度と今日みたいにフェネルを歩くことはないのだと思うと、なぜだか無性に寂しくなつた。

寒空の下伸ばされる目には見えない手が追い求めるのは、過去の幻影ではない。

幻影じゃないからこそ空を掴むばかりの手は、いつまでも空を指して伸ばされる。

風を切つて、四輪馬車がフェネルの夜を駆けていく。

冴え冴えとした花月の明かりを一心に浴びる姿は人々の目には止まらない。皆、明日のためにそろそろ寝床に着く頃だからだ。

きらきらと宙を舞う光を見つめる。車輪が煉瓦の上を回るたびに巻き上がる砂埃は、今だけ夜空に浮かぶ星のように思えた。朝になれば憎たらしい存在に成り下がるのだらうけれど、ひっそりと静まり返つた中で舞う粉塵は美しかった。

深く息を吐き出し、背もたれに体を預ける。

辺りには人の気配はない。物音もしない。あるのはただ、自分の手を握り締めるヴァノツサの体温と息遣いだけだった。

小さな箱型の外では従者がいるのだけれど、その存在感はひどく希薄だ。軽やかな馬蹄の音も頭をすり抜けていくばかりで、音らしい音と認識できない。静かな帰り道だった。

皮の厚い指先が私の手の甲を撫でる。「ヴァノツサ？」声を掛け

ると、指先はなお手の甲を撫でていく。存在を確かめるような仕草に内心で首を傾げていると、硬い声が耳朶を打つ。

「貴女が冬宮を出て行く度、肝が冷える」

決して狭くはない客席だというのに半身をびったりとくつつけた状態で囁く声には、隠しきれない疲労が滲み出ていた。政務を終えてすぐにここまで駆けつけたのかもしれない。そうでなくとも、フエンネル中を回って私を探すのは骨だっただろう。悪いことをしたと心の中でちらりと思った。

「貴方の口からそんな言葉が出てくるとは思いもしませんでした」

「俺は毎回心配ばかりしているだろう」

「そうでしたか？ そう言われてみればそうだった気もします」

以前ビリオン様を追って城下に出た時、怒りを顕にしたヴァノツサの姿を思い出す。いつも不敵に笑っていて、怒りや悲しみというものを表さない彼の姿は今も脳裏に焼き付いている。けれど、あえてしらばってくれることにした。

身を案じられる事は決して悪いことじゃない。不要だと跳ね除けるのも忍びない。

相手が私でさえなければ、彼の言動を褒めてやるところだ。私が相手だから問題なのだけれど。

惚けた様子の私にヴァノツサが苦々しい表情を浮かべる。眉間に刻まれた皺がやけにはっきり見えた。

「まったく……少しは自重してくれと言っているだろう。貴女は

「

「代わりのきかない存在なのだから、でしょう？」

続く言葉が何であるかは知っている。先んじて言うと、彼は素直に口を閉じた。

「自分の立場など私が一番分かっています。ですがこの国で私を傷つけられる人間など、そういませんよ」

「それぐらいは知っている。だが」

紅蓮の眼光が鋭くこちらを射抜く。何か言いたげな雰囲気沈黙

で返すと、ヴァノツサは何も言わずに吐息を漏らした。続くはずの言葉は静寂の内に隠されてしまった。

時折、舗装の悪い道に馬車が揺れる。そのたびにヴァノツサの膝の上に置かれた私の手が握り締められた。風を遮断されているとはいえ、気温はまだ低い。その中でヴァノツサに攫われた手だけが熱を持っていった。

離れたら再び私がどこかに行くとも思っているのか、ヴァノツサは一向に手を離そうとはしない。私はと言えば、暖を取るのに丁度いいとあえて文句を言ったりはしない。ぴたりと寄り添う体も手も、他の誰かが見ようものなら　特にリズが見た日には　憤死しかねないほど親しげだ。それが分かっているにもかかわらず、離れることができなかつた。……怖かつたのかもしれない。離れたら何かが心に追いついてきそうぞ。

くつきりと浮かび上がる馬車の影がこちらに向かつてくるような錯覚に、眩暈を覚えそうになる。この感覚を口にすれば、彼にまた心配を掛けるだろうか。それとも一笑に付してあっさり解決してくれるのだろうか。できないことじゃない。少なくとも私をこの国に留めたい彼には容易に出来ることだつた。

ただ一言「それでよかつたんだ」と言えば、きつとこの不安は消えるのだから。

私が手にした決断が正しかつたのだと、心からの言葉で肯定されればそれだけで安心出来る。けれどそれは一番の逃げである気がしたから、私はやはり黙つたままぎこちない沈黙に耐えた。どんな決断をしたにせよ、それに責任を持つのは私以外の誰でもない。私に起こる全ての出来事に責任を持つと言つたヴァノツサにも、それは追わせられないのだ。

目を閉じる。体を感じる熱は言いようのない安堵感を与えてくれた。……離れられない一番の理由だ。

この手と熱が、ともすれば闇に引きずり込まれそうな心を引っ張り上げてくれていることを、今はもう一切の否定の気持ちもなく実

感できた。ほんの僅かでも否定できるものなら、とうに体を離している。ファルガスタごと引っ括めてヴァノツサの力になっているつもりで、実は一番自分が守られているのだ、私は。

勿論口にはしないのだけれど。

煉瓦に轍を刻みながら馬車が進んでいく。

目を開くと、遠目に皇城が聳えているのが見えた。皓々と照らされる城壁は古く堅固で、どこまでも巨大だった。その影がフェンネル中を覆い尽くすのではと、埒もないことを考えてしまうほどに。

城門が近づくの連れ、心が空虚になっていく。自分の決断を危ぶむからではなく、半身に感じる熱を手放さなければならぬ予感にだ。しかし、いつまでもこのままでいられるわけもない。

洪々とも言える自分の気持ちに驚きながらも体を離す。だが、手だけはがっちりと掴まれていて離れなかった。

「ヴァノツサ」

咎める声に、彼は前を向いたまま返す。

「まだこのままでいいだろう。第一、貴女は寵妃だ。……それより、寒いから戻ってくれないか」

懇願しながらも答えなど待たず腕が引かれ、再び零距离になる。

馬車が城門に飲み込まれていく。無表情の衛兵がこちらを一瞥するのをヴァノツサはさらりと無視していた。彼にとつては私が傍にすることは何ら不自然なことじゃないのだと、飄々とした横顔を見て納得する。言葉よりも雄弁な態度に力を抜いた。

やっぱり、守られているのは私の方らしいと思った。

冬宮に入ると、急に温度が上昇したのを感じた。

ほんの数刻離れていただけに随分と懐かしく感じられる火花を背に、ヴァノツサは外套を脱いだ。冷え切ったそれを椅子の背に掛け、自分は別のソファに座る。ぞんざいに足を組み天井を見上げ

る姿は、やはり疲労の色が濃い。

「随分とお疲れのようですね」

声を掛けると炎に照らされる瞳がちらりとこちらを一瞥する。

「昼夜問わずフェンネル中を駆け回っていれば、普通の人間は疲れに決まっているだろう」

「それもそうですね。悪いことをしました」

口調とは裏腹に余裕を見せるような笑みに素直な言葉を向けると、ヴァノツサは目を閉じてややゆっくりな口ぶりで答えた。

「構わん。今日に限っては、貴女の気持ちに分からんでもないからな」

腕を振り、茶器を用意してヴァノツサに振舞う。彼は甘い香気を吸い込み「疲れた時には甘いものがいいと聞くが、香りだけでも効果があるみたいだな」と言いつつ、目の前に座る私を見据えた。暖炉の火が爆ぜる。

「初代に会ったそうだな」

「ええ」

唐突な言葉にしかし驚きは現われなかった。

むしろ、何も言われなければ私の方から口にしていたような話題でもある。

姿勢を正し頷く。流れる髪を背中に払いのけ、リズから聞いているのであるう話を一から繰り返した。知っているのならば話す必要などないのだけれど、恐らく彼は私から聞くつもりなのではないかと思っただからだ。

ヴァノツサは私の髪が眩しいのか目を細めながらも耳を傾けていた。

不意にくつくつと笑い出す。話が丁度終わった頃合いだった。

「まさか俺がクレティエン家に行ったことになっているとはな。リズから聞いた時は耳を疑った」

「すみません。あの場で良い言い訳が見つかりませんでしたので」
ピリオン様の勢いに押されたと言えなくもないのだけれど。

「いや、いい。ミルヴェーデンが何か言ってくるかもしれないが、その程度なら大したことはない。それより……」

茶を飲み終えた彼が姿勢を正す。身を乗り出し、私が手に持つ書物を見やる。

「初代の日記を見つけたんだらう？」

「はい」

視線に促されるように日記を差し出すと、重みを確かめるように日記を上下させて「ふむ」と呟いたヴァノッサは一度だけ窺うような目を向けた。読んでもいいか？ と訊いているのだらうと分かった。

「構いません」

どの道私の物でもない。鷹揚に返すと、紙が擦れる音と暖炉の花に場を支配された。

真剣な目で日記に目を落とすヴァノッサの顔を眺める。日記の持ち主にどこまでもよく似た顔立ちの男が、時を越えて先祖の独白を読んでいるのはとても不思議な感覚だった。

一部の侍女や騎士以外は眠りに就いているであろう深い夜の刻限は、とろりとした濃密な沈黙で部屋を満たす。

北の孤島にいた時ならば、退屈に眠ってしまったらう。けれど、今はまったく眠気を感じなかった。

それどころか、退屈ですらない。ヴァノッサが日記に集中し、話し相手もないというのに。

考えてみれば、彼と一緒にいて沈黙がぎこちなかったことなど数えるほどしかない。それどころか、沈黙に安堵していることの方が多かった。話したくないからというわけでもないのだけれど、包み込まれるような沈黙は肌に心地良かったから。

ちびちびと茶を飲んでいく私の前で、ビリオン様の過ごした日々が紐解かれていく。眺めていると、ヴァノッサは次第に表情を暗くしていった。何を思っているのか、その表情から読み取ることはいきない。

レイアステイ、と名を呼ばれる。沈黙で答えると、苦笑交じりのヴァノツサと目が合った。

「立場の違いというのは、自分が思っている以上に厄介なものだな」
日記を読んで一番最初に感じたことはそれだったのだろう。

何かに困っているような瞳が揺れる。事実困っていたのかもしれない。

ビリオン様とヴァノツサは、同じ立場の人間なのだから。 辿る道筋はさておき。

ティーカップをテーブルに置き、同じく苦笑で返す。

「それは貴方がこの国で一番尊い立場だからですよ、ヴァノツサ。下々は常に頭を下げているのですから、気にならないわけがありません」

「貴女だつてこの国で一番尊い存在だ」

言い訳じみた言葉に返された強い言葉に、心が揺さぶられそうになる。

しかし立場の違いが気にならない者などいないだろうと考え、肯定は避けた。

「あの頃は魔女など探せばいくらでも出てきました」

実際に目にした覚えはないけれど。そんな心の声には蓋をする。

肩を竦めて言い放つ私にヴァノツサが語気を強める。

「だが、今は違う」

「民としては悪い意味で違っているでしょうね。尊いというよりは、最も下賤な存在なのかもしれません」

皇帝の隣を独占している。それだけで誹謗中傷の的になるのは眼に見えていた。魔女であれば尚更だ。

今の自分は立場が違っているからと悩むことはない。上に見られなくても下に見られても、それさえ気にはしないだろう。だが、他者が私とヴァノツサの価値を決める以上、そこには確かに隔たりがあるのだ。ビリオン様の時代だつて、そういうことだったのだと思う。

共にいらなくなる理由なんて、それだけで十分だ。

時代なんて関係なく、皇帝と魔女は相容れない。民がそう決める以上、どうあっても覆せない話なのだから。

だからヴァノッサには分かってもらわなければならなかった。いつまでもこのままではいられないことを。私はいつまでも偽りの寵妃ではいられないのだと。

けれど当たり前のはずのその考えが、何故か胸をちくりと刺した。「私達にはそれだけ隔たりがあるということですよ」

「周囲が勝手に決める隔たりだ」

「ですが貴方は周囲を無視できないでしょう？ 仮にも皇帝を名乗るなら、誰の声も無視できはしません」

自分達は違うのだと口にする瞬間、体がずっしりと重くなった気がした。言いたくないのに言わされているような、よく分からない感情に支配される。

一体どうしてしまったのだろうか、私は。

体中に凝り固まった何かを押し流すように茶を一口飲み込む。温い熱が体を通って行くと、少しだけすつきりした。

「……貴女は違うと思っているのか？」

感情を押し込めたような低い声が耳に入る。真剣な声色にティーカップを口元に運ぶのを止めた。

思っています、と言おうとして寸でのところで首を振る。

普段あれだけヴァノッサと対等の口を利いておいて今更だと思っただからだ。

「人種も位も違うでしょうけど、実際はよく分かりません」

人達の考えでは魔女と皇帝が共にいることなど言語道断なのだろうけれど、それでも現に私達は共にいる。手を取り合い、約に従ってお互いを縛り付けている。

けれども逆を言えば、私達が共にいようとお互いの立場が現実存在していることもまた事実なのだ。そう考えるとよく分からなくなってきた。ただ。

「感情論で言えば、隔たりなど感じない気もしますけどね」

ヴァノツサは私が魔女だからと嫌悪しないし、私もヴァノツサが皇帝だからと遠慮することはない。それが対等ということになるのなら、確かに私達は対等だった。

付け足すような言葉にヴァノツサが瞠目する。鋭い眼光に温かい陽の光が差し込んだような穏やかさが灯った。どこか拭えぬ不安はそのままに、とりあえずは満足したようだった。

日記を閉じ、再び足を組んだ彼が窓の外を見る。

花月は大分傾き、群青色の夜空もどこか薄く見えた。

「日記を読んでいると、俺まで口惜しくなってくる」

「口惜しい？ 貴方がですか？」

不意に響いた言葉に、今度はこちらが瞠目した。

口惜しいなど、ヴァノツサの口から出てくる日が来ようとは。それもビリオン様の日記を読んでだなんて、想像もしていなかった。

分かりやすく驚きを表現する私の目をじろりと一瞥し、ヴァノツサは拗ねた声を上げる。

「貴女は一体俺を何だと思っているんだ」

「傲岸不遜で大凡恐れとか謙虚さというものを知らない、言葉通りの皇帝です」

思わず即答してしまった。遠慮会釈のない物言いにヴァノツサがぐくりと肩を落とす。

「……少しは言葉を選んで頂きたいんだが」

「失礼。つい本音が出てしまいました。それより、何が口惜しいのです？」

演技ではなく本当に落ち込んだらしい姿に、嫌みたらしく笑みを浮かべてから続きを促す。

茶のおかげで大分暖まった体を背もたれに深く預け、ヴァノツサを見つめる。彼は私の暴言を窘めても効果がないことを察したのか、無然とした顔をそのままに観念したように口を開いた。

「皇帝とはいえ、俺達にだって手に入らないものはある。だが、それでも皇帝を辞められないから口惜しいんだ」

手に入れたいものについてはあえて触れないことにした。

「当然でしょう。皇帝が突然退位したら国は混乱の極みです」

第一、そんなことになったら魔女狩りが再開しかねない。

皇帝が自らの責任の下に行動を起こしても、しわ寄せは全て魔女に来るはずだからだ。

眉を顰めると、手の平が顔の前に突き出される。それ以上言葉を紡げなくなる。

「分かっている。だから俺はまだ皇帝位を退くことはないし、退く気もない」

「当たり前です」

もしそんな事を言い出したら、私は出奔してでも止めるだろう。もつとも、ヴァノツサが自分本意な考えで皇帝位を捨てるとも思えないのだけれど。……そんな人間ならば、私はこの国に来てすらない。

激務のせいか、月明かりの下で見るヴァノツサの顔は痩せて見えた。目を凝らせば、頬がこけているのが分かる。今までは巧妙に隠されていたのかもしれない。それとも、今日一日でこんな風になってしまったのだろうか。

どちらにせよヴァノツサの疲労は全て民のためにあるものだ。それだけ働ける人間が皇帝位を退くなどという憂いを本気で抱いたりはしないけれど、表向きはしっかりと釘を刺しておいた。

大きく頷いた私を見て喉の奥で笑ったヴァノツサは「ところで」と話を変えた。

「貴女の目に、俺はどう映る？」

真摯な声だった。私は一瞬思考を停止させてから、静かに返す。俺を何だと思っている、という問いとは違う意味合いの質問に、在り来りだけれども偽りのない言葉を返した。

「……貴方は貴方でしょう。肩書きがあるうとなかるうと、貴方はヴァノツサ・ロート・ファルガスタでしかありません」

捨てられないとはいえ、肩書きはその人間の立場を示すものでし

かない。その命に対しては、何の効力も持たないのだ。だから口にしたことは私の本心だった。

衣擦れの音がする。何事かと思っていると、ソファに深く沈み込んだヴァノツサは両腕で顔を隠して天井を仰いだ。

「ヴァノツサ？」

「やっぱり口惜しいな」

レイアステイ、と名を呼ぶ声は微かに震えていた。

「貴女に名前を呼ばれる度、俺は人間に戻れる気がするよ」

歓喜を持って発される声の震えに、泣いているのだろうかと不安になった。

いや、そんなまさか。考えを否定する。けれど、完璧に否定するには見えない表情が気にかかった。

そして続いた言葉も、私の思考を奪うには十分過ぎるものだった。

「初代もきつと貴女にそう言われることを望んでいたんだろうな」

「……そうかもしれませんね」

皇帝ではなく、一人の人間として自分を見てくれたのが嬉しかったのだとビリオン様は話していた。私に彼等に課せられた重圧は押し量れないけれど、ヴァノツサがこんな風に歓ぶだけのものではあるのだろうかと思った。お優しく繊細なビリオン様であれば、尚更重圧に耐えるのは辛かったに違いない。

「貴女が見つかってよかった。……これを読んだ後に冬宮に戻ってくれたのは、俺にとっては僥倖だ」

黙り込んだ私に代わってヴァノツサが殊更明るい声で言う。腕を外しこちらを見た表情は、泣いているような笑っているような曖昧な顔だった。まるで、迷子のような頼りなげな表情に思わず手を伸ばす。そつと手の甲を撫でると、縋りつくような強さで握られた。

恐らく誰も見ることでできない弱さを、自分に晒しているのだろうかと思った。悪くない気分だった。

「正直言って、ずつと迷っていました。迷ったつもりでいました」
不思議と優しい声が出た。

するりと飛び出た言葉にヴァノツサが目をはるのを見て、笑うだけの余裕もある。

「ですが、つもりはつもりでした。私は最初から答えを持っていたんです。だから、もう迷うことはありませんし、迷ったりしません。いつだって差し伸べられてきた手に自分から触れている。自分の決断が輪郭をしっかりと持ち始めた。

自分の不健康な肌色がヴァノツサの健康的な肌色に重なる。

「これが私の選んだ道です」

精悍で硬質な顔をひたと見据えて言い放つ。真っ直ぐな声が余韻を抱えて室内に滲み込んだ。

音もなくヴァノツサが笑んだ。無邪気で艶などないのに、人を惹きつけて放さない笑顔だった。

「参ったな」

ぼつりと呟く声に首を傾げる。

ヴァノツサは今度こそ声を上げて笑ってから、私の髪を指先で梳くように撫でた。

「貴女にそんな事を言われると、さすがの俺も自惚れそうだ」

「……寝言は寝てから言ってください」

「悪いが、まだ眠る気分じゃないな」

心地良い低音で響く笑い声に盛大な溜息をついて顔を逸らす。軽くなった空気の中で「馬車の中で」と続けられる。

「貴女は自分が代わりのきかない存在だから身を案じられるのだと言ったな」

「事実でしょう」

それ以外の何があるというのか。

ヴァノツサの口から「確かに事実だが」と溜息が漏れる。けれどそれは怒りを含んでいるわけではなく、苦笑のように聞こえた。

「だが俺はそれ以上に貴女が心配なんだ、レイアスティ。大体、貴女は俺に一言の相談もなしに行動することが多すぎる。……：そんな俺は頼りない人間か？」

手を握りしめたまま、口の端が吊り上げられる。問いかける声色に、何故だか心が弾んだ。

心配されて喜ぶというのもおかしな話だけれど。余裕を取り戻しつつある表情を一瞥して首を振る。

「いえ。私を知る現在のファルガスタで、貴方より頼りになる人はいないと思っています。ですが、貴方には貴方の為すべきことがある」

言いながら弾んだ心が鳴りを潜める。そしてヴァノツサが返した言葉に、沈没した。

「貴女の身を案じることも俺の為すべきことだ」
今度は心が重くなる。

何なのよ一体、と自分で自分に苛立ちながらも、表面上は冷静を取り繕ってみせた。

「確かにそうかもしれませんね」

ヴァノツサは私が死ねば、もしくはいなくなればファルガスタを救えないと思っている。ここに翡翠の魔女でもいれば話は別だろうけれど、一刻の猶予もない今、彼のその考えは決して間違いではない。

けれど、何故かしら。分かっているはずの言葉に、苛立ちがこみ上げる。

自分への苛立ち以上に、ヴァノツサに苛立った。

ティーカップの中を空にするようにぐいと煽る。僅かに残っていた茶を一滴残らず飲み干してから、眼光を鋭くした。

「ですが、そんな言葉を向けられる方は堪りません」

「? 何故だ」

突然睨みつけられて驚いたのだろう。ヴァノツサはきよとんと目を丸くしていた。

全然分かっていないようね。

胸中で呟くと余計に苛立ちが募り、一旦思考を停止させる。何も考えず、あえて静かに言った。

「為すべきこととは即ち義務です。義務によって案じられるだなんて、これほど惨めなことが他にあると思いませんか？」

どうしてこんなことを口走っているのか、自分でも分からない。ただ胸に風穴を開けられたような空々しさと惨めさと、苛立ちだけが衝動的に私を動かした。

あるいはそれは、義務など持ち得ない自分だからこそ手にすることの出来る感情なのかもしれない。互いを必要とする何らかの義務を持っていれば、違うものなのだろうか。否、私にも義務らしきものはある。約だ。けれど約だけが私に道を選ばせたわけではないのだと思うと、それはそれで何かが違う気がした。ここで約を義務だと言ってしまうたら、私はその約にこそ甘えている気がしたからだ。もしそんな事を口にしてしまったら、約がなければ傍にはいられないことを認めてしまうように思えた。

それよりも、何故私はそうまでしてヴァノツサの傍にいようとするのだろうか。

思考が複雑になって訳が分からなくなる。目を丸くするヴァノツサが見える。

ああ、こんな風に混乱する様を見られたくはないのに。

何故だか無性に泣きたい気分になりながら瞼を伏せると、大仰な溜息がヴァノツサの口から発せられた。

「貴女に心の機微を察する力はないのか」

話がまったく見えない。心の機微？

「失礼ですね。それより、何ですか突然」

ただでさえこちらは情緒不安定気味だというのに、これ以上訳の分からない話をされたらかなわない。

目を細めて冷やかに一瞥すると、ヴァノツサは尚も呆れた様子で溜息をつけてから「俺はだな、レイアステイ」と言った。

「義務にかこつけて貴女を案じているに過ぎないんだが、それを分かっているのか？」

「かこつけて？ 何のことです？」

「周囲に文句を言われない理由があるから盾にしているだけだという話だ。ただの義務なら、貴女を迎えにフェンネルに行くわけがないだろう。あり得ない話だが、もしこの国に翡翠の魔女がいたとしても俺は貴女の身を案ずるし、手放す気を起こしたりはしない。国や皇帝にとつて代わりがきく相手だとしても、俺に取っては代わりがきかないんだ、貴女は」

饒舌な姿に一切の動きを止めてまじまじとヴァノツサを見つめる。彼は暖炉の炎に照らされる横顔をようやく笑みに刻んだ。

「貴女が心配なんだと言っただろう？ だから貴女は惨めに思う必要などない。誇れとも言えないが」

「言われたら全力で拒否するところでした」

「そうだろうな」

貴女ならやりかねないと笑う姿に憤慨することも忘れ、私はただただヴァノツサを見ていた。理由は分からない。そうしたかったからそうしただけだ。

救世主と予言された魔女ではなく、レイアステイを案じているというヴァノツサの言葉は不可解だった。けれど、そんな不可解な言葉に苛立ちをかき消された自分の気持ちの方がよっぽど不可解だ。繋がりあつた手が汗ばむ。離そうとすると強く握り締められた。

「皇帝と魔女は相入れないものだと思うか？」

唐突に話が戻された。脈絡があるようでもないようでもある会話は、ヴァノツサの疲労を示しているのだろうか。

このまま眠らせてやった方がいいのかもしれない。そうは思うものの、眠らないと言っているのだから無理に眠らせる術は 魔術ぐらいしかなかった。さすがに魔術で眠らせるのは強引に過ぎるからと、私は話に付き合う。

「愚問です」

きっぱり返すと、笑みを刻んだ唇の角度が増す。艶やかな笑顔が不敵に言い放つ。

「ならば同じ位置に立つたらどうなる。魔導士になるのは無理でも、

民や騎士ならどうだ」

「何が言いたいのですか？」

ヴァノツサは一体何が言いたいのか。呆れ混じりに尋ねると、彼は実に真面目な顔をして言った。

「貴女を手に入れる為に、俺はどこまで行けばいい？」

甘やかで艶のある、怖いほどに真つ直ぐな声が耳朶を打つ。ぞくりと背筋が震えた。

顔を強ばらせる私をヴァノツサはただ見ているだけだ。

握られた手が熱い。自惚れるという言葉の意味を今更ながらに実感して、同時に冷水を浴びせかけられたような気がした。私は、一体何を。ヴァノツサが調子づくような言葉ばかり向けてしまった。手を振り払おうとするが、力で負けてしまう。仕方なく私は怒りを顔にきつい口調で言っただけだ。

「どこへも行けません。貴方はこのファルガスタの皇帝でしょう」

私が冷静さを取り戻したのが分かったのか、ヴァノツサは不敵な笑みをかき消した。それでも手だけは放さない。

「知っている。だが夢ぐらいは見させてもらってもいいだろう？
せめてもの慰めだ。どうせ人前に出たら俺は皇帝にしかねないからな」

ぶらぶらと手を揺らしながら拗ねた声で言った彼は、一度目を閉じてから呟いた。

「皇帝の俺が欲しがれば、誰も貴女に手出しはできない。今はそれでもいい。寵妃に据えたのは元は刺客避けのためだからな。だが、本当に貴女が欲しいのならそれが何の意味も持たないことぐらい、俺にだって分かってるんだ」

「……意味が分かりません」

「皇帝という立場は華月を手に入れるのに何の役にも立たないということだ。せめて他の奴らと競える立場にでもなればいいんだが、この状況でそんなことはできないしな」

夜空が更に薄くなっていく。私は顔が曇るのを止められないまま

首を振った。

「手に入れる必要などありません」

「今はな。……約束が有効なうちは、貴女は俺の傍にいてくれるんだらう?」

思いがけず不安げな声に顔を上げる。

ヴァノッサはからかうような、それでいてどこか真剣味のある表情でこちらを見ていた。

「……ええ、勿論です」

頷くと、その表情から真剣味が薄れる。「そうか」と言った表情はどこまでも無邪気だった。

だというのに、頭の中では数瞬前までの真剣な顔が浮かんで離れない。

常ならばガンガンと鳴り響いているはずの警鐘は、明けの明星が煌く時分になっても静まり返ったままだった。

第四十話 最後通告

何故彼は、こんな風に言葉にしてお互いの存在を確かめ合っているのか。

傍にあることを何度でも確約し、その度に安堵しているのか。

ヴァノツサはファルガスタを背負う皇帝、そして私はファルガスタを救うべく召喚された魔女。それ以上でも以下でもないのに、何故彼はこんなにも 平気な振りをしながら、水面下でがむしゃらに手を伸ばしているのか。

理由なんてもう、怖くて予想すらできなかつた。

けれど、彼の行動に対して文句を言うことなどできない。

私は私で、彼が伸ばす手を見つめては道を選んできた身分なのだから。

やまない雨などないように、明けない夜などないように、日は必ず暮れては明けて一日の終わりと始まりを告げる。

冬宮から朝日が差し込んでくる刻限、珍しく早くから目を覚ました私はソファに腰掛け魔導書をめくっていた。白い高級紙に並ぶ手書きのスペルに目を落とし、波紋一つ広がらない心の静けさに耳を澄ませる。

ビリオン様の日記を見たあの日から、奇妙な程に心が落ち着いていた。

自分が進むべき道を選んだからだろうかと思うものの、本当にそれだけだろうかという疑念も渦巻く。確かに自分の心の有り様で落ち着きはしたけれど、それだけとは思えない。その証拠に、頭に浮かぶのはヴァノツサの安堵したような無邪気な笑顔だけだった。喜ばれるのが嬉しいだなんて、可笑しな話だ。私がここに留まること

に喜ばれるなど、本来ならば複雑な気持ちになるべき所なのに。
どうにも最近調子が狂いつぱなしだ。そう考えてから一人苦笑す
る。

調子が狂っているのは最近ではなく、ヴァノッサが屋敷のドアの
前に立った時からだ。けれど、常ならば癪に思うはずのこととも思
議と笑って許せるような気がした。寛容さは余裕の表れだと言っけ
れど、確かにそうなのかもしれない。一つだけでも道を選べたこと
で私は少し心に余裕を持っていた。

ただ、傍から見るとそうでもないらしい。

「何か元氣ないね」

ベッドに寝そべっていた灰猫がむっくりと起き上がり小首を傾げ
る。そのまま一息で私の腿の上に飛び、ふわぁ、と欠伸を漏らした。

「そうかしら」

「そうだよ。もしかしてあいつに何かされたの？ 言ってくれたら
僕がとつちめてやるのに」

ドレス越しに肉球の感触が伝わるほどに重く申し掛る前肢はぷに
ぷにと柔らかく、体を解そうとするかのように右に左に重心をずら
していく。……相手をとつちめているのを想像しての行動なのかも
しれないけれど。

それにしても、あいつというのは誰に当たるのだろうか。

浮かんでくるのは二人の炎帝と護衛騎士だったけれど、誰にした
ところで別段何をされたわけでもない。最近のリズは出会った頃と
比較すれば不気味なほどに親切だし、ヴァノッサは失礼なことを言
いはするものの私の不利益になることは たまにするが最近はし
ていない。そしてピリオン様は。

ちりちりとこめかみが痛む。深く早朝の澄んだ空気を吸い込み、
親指でこめかみを解すと即座に弱まった痛みに苦笑交じりに答えた。

「何もされてないから大丈夫よ。……ねえ、ビー」

「なあに？」

「私、ピリオン様じゃなくてヴァノッサを選んだわ」

その選択を思えば、ビリオン様が私に何かしたなどと言うことはできない。むしろ、何か行動を起こすとすればそれは私の方なのだから。地脈破壊の件では行動を起こすのは彼の方だけれど、私個人に危害を加えようとしていないという点を鑑みればその考えは正しいものに思われた。

意識してさりと出すよう努めた声にビーの耳がぴくりと動いた。痙攣するように小刻みに揺れ、それから彼は欠伸を噛み殺して全身を深く沈み込ませていく。腹面がぴったりとドレスに触れた。

「そう」

よかった、と続けたビーはゴロゴロと喉を鳴らして目を閉じた。黄金が灰色の体毛に隠される。

「僕どっちも嫌いだけど、あいつの方がまだマシだもん」

「あら、どうして？」

どうやらあいつというのはヴァノッサのことらしいと理解する。ただ、ビーはヴァノッサとも不仲だったはずだ。それが彼の方がマシというのはどういうことなのか。

窓から差し込む光がきらきらとビーの体毛を照らし出す。皇城に務める者かりズによるものか、よく手入れされ輝きを増す灰色がふつくらとした柔らかさを上下させる。その中で薄く瞳が開かれた。何か不満でもあるのか、朝日よりなお燦然たる金色は憚然とした光を放っている。

「だってあいつはレイアを泣かしたりしないもん。泣かせるぐらいなら怒らせるか呆れさせるかするはずだよ、きつと。不死掛けでレイアに会うとしても、地脈破壊なんかせずついに不死掛けをした相手を脅して、レイアの結界を破る方法を探させるような性格だろうし。口八丁手八丁な奴だから絶対そうするね、あれは」

まるで見てきたかのような言い振りだ。

この場にヴァノッサが居ようものなら即座に嫌味の応酬になるくらいには信憑性がある言葉に、ぷつと吹き出す。

この二人、不仲だとばかり思っていたのに。

「よく見てるのね。実は仲いいんじゃないの？ 貴方達」

「冗談。あんな奴と仲良くなんてなりたくない」

肩を震わせながら言うと、ビーが心外だと言わんばかりに唸る。けれど何だかんだと言いなながらもビーがヴァノッサをよく見ていることが分かったのが可笑しくて、収まらぬ笑いの衝動に身を浸しながら胸中で呟いた。確かにその通りだと。

ビーの言う通りだ。ヴァノッサは地脈を破壊するだなんて面倒なことをするぐらいならば、別の道を取るだろう。ただ、ビリオン様だって地脈破壊をするような方じゃないと思っただけに、人物像はあまり当てにならないのだけれどそれを踏まえた上でなおヴァノッサは選りすぐりにない道だと思えた。祖国や民を愛しているという理由じゃない。単に彼は、他人に自分の願いを叶える手伝いなど決してさせはしないだろうと予測できたからだ。

笑い声の横から窓越しにフェンネルが目覚める音がする。身支度を整えた商人が、港から届く魚や街道から持ち込まれた野菜や果物を所狭しと並べられているのがありありと想像出来るような明るい活気が空気に混じって届くようだった。きっと、テラスから城下を見下ろせば、砂塵の色をしたテントがぎっしりと密集しているのが見えることだろうと考え、ふと何かが足りないことに気がついた。

「遅いね」

そんな考えを読み取るようにビーの声が耳朵を打つ。「寝坊でもしたのかな？」

「ビーや私じゃあるまいし、リズ殿に限ってそんなことはないですよ」

苦笑する。猫であるビーはともかくとして、自分が寝坊をしないと言いきれないのが情けない。

ぱたんと魔導書を閉じる。手書きの文字が消え、相変わらずそっけない表紙が現れたそれをテーブルに置き窓の外をちらりと覗き見るが、そこに銀の鎧は見えない。外で待機しているというわけでもないらしい。

「珍しいこともあるものね。リス殿が遅れるだなんて」

常ならば足音高く、もとい床を強く踏みつけるように歩いては「この自堕落女」と吐き捨てる言葉を目覚まし代わりにやって来る護衛騎士は、今日に限って現れていない。せつかく早起きをしたというのに、悠々と出迎える機会を失って何だか出鼻を挫かれた気分だ。もつとも、リスを驚かせるために早起きしたわけではないのだから問題は無いが、今までそうあることではなかっただけに気にはなる。思案するように目を閉じ、珍しいこともあるものだと内心で呟いているとビーが身動きした。くねくねと身を振り、駄々をこねるように頬を膨らませる。

「せつかく早く起きたのに、遅れて来たんじゃない意味ないよ」

「そうね、私も少しぐらいは早起きできる姿を見せたかったわ。でも、ヴァノツサの命なら仕方ないわね」

「こんな朝早くから？ でも地震は起きてないよ？」

「元々騎士は被災者を助けるための組織じゃないわ。多分他に何かあったんじゃないかしら。そうでなきゃ、あのリス殿が来ないなんてこと考えられないわ。まあ、私を起こす行為自体途中から命令とは関係ないものだったんだし、来ないのが当たり前なのかもしれないけれど」

そもそもリスが私を起こしに来たのは、ツヴァイの使者が来た時などの特別な事情がある時にヴァノツサに命じられたからだ。だとするに平常時でも後宮に現れては嫌味を垂れ流していくのは、悪趣味極まりなる彼の意志に他ならない。いつか安眠妨害のツケを支払ってもらわなければ。

それにしても、ヴァノツサは命じたのかしら。

勿論ヴァノツサが命を下したなどというのは単なる予測ではない。もしかしたら別の事情があるという可能性も無いわけではない。ただ、それでもヴァノツサの命だと思っ

「皇城が騒がしいわね」

「いつものことじゃない？」

「そうだけど、いつもに増して人がいる気がしない？」

フェンネルの活気を徐々に侵食していく忙しなさが遠く離れた皇城から漏れ出てくるように感じられて、その中にリズがいるのではと考えたからだ。

特別気に掛けていない様子のビーに言いながら皇城に意識を集中させると、石造りの壁から確かにいつもとは違う熱量を感じた。浮き立つような忙しなさに、誰もが一所に留まらずにいるような流動的な熱だ。

指摘した私にビーが「何かあったのかな」と呟いてから顔を上げる。よし、と威勢の良い声が響いた。

「せっかく早起きしたんだから、僕ちよつと見てくる。ついでにこの辺の猫達とも連絡付けたいし。あと朝ご飯食べたいし」

一番最後の言葉が最大の目的なんだろう。

「くれぐれも人前で喋らないようにね。もしリズ殿を見つけたら、忙しいのならばらく来なくて結構ですと伝えて頂戴」

「……うわぁ、何だかそれ言葉だけ聞くと怒ってるみたいだよ、レア」

「気遣ってるだけよ。リズ殿だってそういつもいつも私の護衛にかまけてられないでしょう」

「まあそうだけどさ。……分かった。じゃあ見つけたら伝えておくから、もしリズと僕が入れ違いになったらよろしく」

「ええ、新鮮な魚を用意するよう伝えておくわ」

笑って手を振ると、ビーは上機嫌に鼻歌を歌いながらしなやかな体躯を滑らせて部屋を出て行った。あんな調子で本当に人前で喋らないでいられるのか不安だが、そこはもう信じるしかない。皇城内が慌ただしいのなら私が今ついて行くのはあまり良いことじゃないだろう。

立ち上がり、部屋中の窓を開けて換気をする。きんとした冷たさが全身を打ち身震いした。同時に醒めていく頭が感覚を鋭利にしていく。

だから気付くことができたのだ。

「ビリオン様」

言い放つと、世界に満ちる清々しい空気とは別種の黒々とした魔力が形を成す。

「君に気付かれないように魔力を抑えていたのに、よく分かったものだね」

それは陽炎となり、外套を揺らし、やがて人型へと変わっていく。紅蓮の双眸が柔らかく細められる。その瞳の奥に見える影の濃さが、もう全てを知っているのだと感じさせた。それでも現れたのは、決して影が絶望に染まらないことを私に知らしめるためだろう。

「御陰様で具合は殆ど悪くありませんが、貴方の熱は世界に溶け込めないから少し注意すればすぐに分かるのです。それでビリオン様、今日はどのような御用向きでしょうか？」

「選ぶ道をもう決めたかなと思つてね。……というのは建前で、ただ様子を見にただけだよ。皇城で動きがあったみたいだから」

「確かに忙しないとは思いましたが、ビリオン様が訪ねて来られるほどの事があつたのですか？」

「そうだよ。まあ、正しくは皇城じゃなくてツヴァイが言うべきなのだろうけれど」

ツヴァイが動いた？

的を得ない言葉に困惑を隠しきれずにいると、ビリオン様はその困惑はもつともなことだと言うように一つ頷いてから目を閉じた。

朝日に溶け入りそんな儚さが彼の周囲を覆う。

「ツヴァイの星姫が動き出したんだよ、レイアステイ」

「星姫様が？ どういう意味ですか？」

「二代目が君という寵妃を侍らせているのに我慢がなくなつたんだよ。だからあの姫はツヴァイに帰るなり大急ぎで支度を整え、ファルガスタに押しかけようとしている。婚儀はまだもう少し先のはずだが、早いに越したことはないだろうとツヴァイの文官がファルガスタの文官を言い負かしたんだよ。そして星姫は今朝、ツヴァイ

イからファルガスタに向けて出立した。使者としてではなく、正妃候補としてね」

「それはまた、何とも……」
行動力のある姫だ。全力で後押しをするツヴァイも相当なものだ
が。

呆気に取られていると、ビリオン様は「本当に」と肩を竦めた。それから鋭い眼光でこちらを見据える。空気がぎゅっと濃縮され、時の流れさえ緩慢になるような空間に真剣な声が満ちる。

「それでも君はヴァノツサを選ぶつもりなのかな？ 私ではなく、彼を」

ヴァノツサは星姫を娶り、救世主たる魔女は寵妃の座を追われる。そうなつてもまだファルガスタに留まるのかと彼は訊いているんだろう。そしてこれが、最後通告だ。私は震える心を叱咤し、何事もないと頷いてみせた。

「元より私は皇妃になる気がありません。誰がヴァノツサの隣に並ぼうと、関係の無いことです」

「だが君は寵妃の立場を失うことで更に虐げられることになる。私と共に来れば決してそんな目には遭わせないのに。……私はただ、君と一緒に生きたいだけなんだから」

最後の声は掠れていて、深く心を抉っていく。だというのに私の声はどこまでも凜としていて、弱みなど見せない強気のものだった。それが悲しく誇らしく、矛盾した想いを抱えたまま私は再度彼に首を振ってみせた。

「その御気持ちは、ずっと前に捨てるべきものでした」

「何故？ 君が願う通り、私はマリエルと皇妃とし子ももうけた。守るべき妻であったとしても愛していない女性を抱いてね。君が願う平和の為に、そうすることで君が笑顔になれると思っていたからそうしたんだ。その先で君と生きていけることを夢見て。ねえ、レイアステイ」

吐き捨てる言葉を聞き、眦に力を込める。そうしなければ泣いて

しまつても言うかのように、強く強く。

ビリオン様はそんな私を見下ろして、ひどく優しい声色で呟いた。
「君は私とマリエルに、最も酷なことをさせたんだよ」

慈しむよう大切に繊細に放たれた、私の拒絶を打ち壊さんとする言葉に、肺に息が詰まってむせそうになった。

「何、を」

何を言っているのだろうか、この人は。

息が苦しくなる、体内に入り込む空気の薄さに胸が詰まった。その中でビリオン様は易々と息を吸い込んで続けた。

「私はマリエルを愛せないことを知っていたし、マリエルは私に愛されることはないと気付いていた。それでも触れ合わなくてはならない痛みは、狂気へ堕ちていくには十分だったんだ。義務という言葉がかろうじて私達を正気に繋ぎとめてくれてはいたけれど」

それでも最初はお互い必死で相手を愛し愛されようとしたんだろう。二人の間に約が横たわる限り彼らはお互いの利益のためにそうする必要があったのだし、婚儀を執り行なった以上、自分達がどのような考えを抱いていようと彼らは夫婦なのだから。けれど、約は破られてしまった。その刹那に壊れてしまったものの大きさは、千言万語を費やしても表現し得ないものだったに違いない。

全ては最初の婚儀の地点に問題があったのだと言わざるを得ないことだろう。そもそも婚儀を執り行なわなければ起こり得ない悲劇だ。だがビリオン様は別に、その婚儀自体を引き合いに出して私を責めているわけではないのだと知っていた。あの婚儀は確かに必要なことだったのだ。問題は約が破られた後、ようやく叶いつつあった願いを他ならぬ私が撥ねつけたことだ。

「ここまで来るだけでも随分と永かったよ。何せ三百年だ」

黙りこむ私に向けて声が落ちる。

「魔女の身にも、少し永く感じられるだけの年月です。幸い、ビリオン様から託されたビーの御陰で孤独からは逃れられたのでそれだけが救いでしたが」

「そうか。ビーには感謝しなくてはいけないね　あの子は私を嫌っているだろうけれど」

そんなことは、と言いかけて口を噤む。ここで適当な嘘をつくことが果たしていいことなのかどうか分かりはしないし、第一隠し切ることができないだろう。ビーはビリオン様を憎んでいると言っても過言ではないのだから。

ドレスの裾を握りしめて言葉を探す。けれど良い言葉など思い浮かぶ訳も無く、一人情けなく突っ立つ私の眼前で陽炎が揺らめいた。光を侵食する闇と紅蓮が近づき、微かに体から力が抜けていく。かくんと折れる膝に倒れると感じた刹那、ビリオン様の腕が腰に回って体が支えられた。

「だが、もうビーに頼らずとも君を孤独になどしないだけの生が私にはある。人としての身分がないから、ヴァノッサのように君を不安定な立場に追い込むこともない。……全てを賭して君を護れる。だから　」

鮮やかな紅の前髪が目飛び込み、こつんと額が触れ合う。苦しげに眉間に皺を寄せるビリオン様の顔が至近距離に見えた。希う切実さと熱に目眩がしそうになる。だが私の心を揺さぶるために紡がれるであろう言葉は、最後まで届くことはなかった。

「嘘つき」

常ならば軽やかに放たれているであろう、ボーイソプラノの怨嗟のせいだ。

テーブルの上に置かれている結界解除の首飾りを手探りで見つけ出し、強く握り締める。同時に回復した体調でしつかりと足を踏みしめると、腰に添えられていた手が離れた。

二、三步後ずさり部屋の入口を一瞥する。そこに立つのはかつてビリオン様に命を救われた灰猫と、それから彼に呼ばれて来たのかリズもいた。

「久しいね、ビー」

「僕は二度とあなたに逢いたくなかったよ。レイア、早くそいつか

ら離れて」

ビリオン様が両腕を広げて歓迎するのを鼻で笑い、ビーはくいと顎をしゃくった。猫とはいえさすがは王と言うべきか、拒否等許さない声色に素直に従うとビーは音も立てずに足を滑らせ、私とビリオン様の間に割って入る。だが、ヴァノツサやリズ相手であれば不快感を隠そうともしないビリオン様はビーに対しては寛容なのか、別段気分を害された様子もなく端的に尋ねた。

「嘘つきというのは？」

「あんたはレイアを護れなかった。氷の魔女だって言われても、魔女の狂宴でレイアが追い詰められても」

「ビー、それは」

違うのよ。本当はビリオン様はちゃんと私を護ってくれていたの。そう言いたいのに、ビーは「レイアは黙ってて」とびしゃりと言つてからざろりとビリオン様を睨めつけた。

「あいつの事を褒めるのは癪だけど、あんたの前だからはっきり言わせてもらおうよ」

「……？ 何を？」

「あんたに比べたらヴァノツサの方がずっとマシ」

涼やかなボーイソプラノがビリビリと空気を震わせる。叩きつけるような声に「ほう？」とビリオン様が呟くと、ビーは嘲るでもなく淡々と告げた。

「レイアがこの国の人間に嫌がらせをされても死を願われても、あいつはちゃんとレイアを護ってた。護衛騎士が仕事しなかったら自分が護りに来て、侍女がお茶を出さなかったら自分がお茶を入れて来た。レイアが助けてって言ったわけじゃないのに、あいつはちゃんと察して助けに行ったんだ。言っとくけど、皇帝だから忙しかつたなんて言い訳にならないからね。あいつだって同じ、炎帝だもん」

「痛いところを突くね」

「でも事実だよ。……それにあんたはレイアに会いに来なかった」

「当然ながら会いには行つたよ。結界に邪魔されたけれど」

「皇妃の日記には結界解除の首飾りが挟まっていた。ってことは、あなたにはレイアに会うための手段が存在してたってことだよな？
本当は会いに来るのだから決して不可能なことじゃなかったんだ。
もし結界解除の首飾りが見つけれなかったせいだって言うんなら、それは妻の行動管理もできないあんたの落ち度だよ。魔女や魔術師が消えた後なら、魔術的な道具には国宝級の価値があったはずだよ？ 皇妃とはいえ隠していいもんじゃない」

「ビー！ やめなさい！」

その言葉は、ビリオン様はもとよりマリエル皇妃をも貶めるものだ。私は他の誰よりもビーにはそんなことを口にしてほしくなかった。

強く叱りつけ、慌てて溢れ出る言葉を止めさせる。するとビーはまだ言い足りないとかばかりに毛を逆立てたけれど、私の勘気を悟ったのか渋々といった様子で黙り込んだ。ふいと顔を逸らされる。そんなビーの様子を、ビリオン様はどこか微笑ましいものを見るような苦笑で見守っていた。その隙について、今度はリズが動く。

「動くな。 魔女に手出しすることは許さん」

剣先がビリオン様の喉元にぴたりと当てられる。恐らくビーの態度から彼がヴァノツサではないと気づき、剣を抜く機会を窺っていたんだろう。

「もとより動いてなどいないよ」

その言葉にひよいと肩を竦めたビリオン様は、まるで剣先など意に介していないようだった。そういえば以前精霊達を前にした時と同じことがあったけれど、彼は自分を害するものに一切の注意を払わない様子だった。不死掛けが施されているとはいえ、決して不死身であるわけじゃないのに。

私は彼の、その生命を軽んじるような行動に眉を顰めつつ、この状況をどう打開すればいいのかと思索する。

鋭い剣身に紅蓮が映り込む。

「いい騎士を持っていてることに關しては、二代目を評価するべきだ

ろうか」

くすりと笑んだ口元が淡く溶けていく。穏やかさを失った唇は冷酷なまでに醒めた声で、ヴァノツサによく似た硬質さを持ってリズに呼びかけた。

「トリスタン家の騎士」

「……」

瞬間、リズの体が強張る。主に酷似した声色に条件反射的に体が動きそうになるのを堪えたせいだと、少し経ってから理解した。

青と紅の視線が交錯する。激情と冷徹さを交し合う二人は、傍から見ていても分かるほどの対照的な立ち姿はその時だけ彼らを対等な立場に見せていた。皇帝と臣下ではなく、ただの立場のない者として。

無言を貫くリズの姿を催促と取ったのか、ビリオン様は思案するよう一度目を閉じてから言葉が続けた。瞼が開かれた時にはもう、彼は王者の威厳を取り戻していた。

「華月の、私の魔女を必ず護れ。魔女を忌み嫌うという腐敗した思考を持つ国の民から、彼女を傷つける全てのものから」

だがリズとてそう易々と与したりはしない。爛と煌く空色の瞳が挑戦的にビリオン様を見据える。ビリオン様が王者の威厳を取り戻したのならば、リズは騎士としての誇りを取り戻したのだ。

「俺の主はヴァノツサ帝唯御一人だ。貴方の指図を受ける筋合いなどない」

「それからレイアはあんたの魔女じゃない」

リズの言葉に続き、ビーのボーイソプラノが放たれる。それだけはおかないといけないとばかりに強く上げられた抗議の声に、しかしビリオン様は怒らずにやんわりと窺めるような柔らかさで応じた。

「ではヴァノツサの魔女だとも？ 飼い主としてそれは聞き逃さないな」

「違う」

ビーはただビリオン様だけを見ていた。

「レイアはレイアだ。あんたの魔女でもヴァノッサの魔女でもない、誰かの魔女になんてなってない。所有物にすることでレイアを貶めていることに、いい加減気付きなよ」

今この場にいる私もリズも視界には入っていないとばかりに、ただ彼だけを見て彼のためだけにビーは言葉を紡いだ。それは、ともしれば彼の感情の本質が露呈するようなひたむきさで、私は息を呑みつつ彼らのやりとりを静観していた。

日が高く昇っていく。

とうに早朝と呼べる刻限を過ぎた冬宮はいつも通りの静けさだ。

恐らくこの国の誰も、この場で起きている異変など気にも留めていないことだろう。この場に満ちる緊張感を知らず、彼らは一日を勝手に始めてしまう。それが少し憎らしいと思うのは我儘な話だろうか。

「その台詞を二代目にも言ってみるといい。きっと、私と同じことを答えるだろうから。それでもレイアステイが欲しいのだと」

口の端を緩めて笑う初代炎帝の最後通告を受け止めなければならぬ重圧に潰されそうな今、平和な民に八つ当たりをしたくなるのは図々しいことだろうか。

紅蓮の瞳が私を一瞥する。淡く笑んだ横顔が薄く溶けていく。

「此度の婚儀が流れること自体は私の知った事ではない。情勢が落ち着いているのなら誰と結婚したって気にはしないよ。でも、もしレイアステイを娶るなどと言い出したら……」

見惚れるほど完璧な笑みは、しかし同時に酷薄さをも漂わせていた。

日差しに陽炎が混じってとろりと空気にかき消されていく。その中でビリオン様ははつきりと告げた。

「その時は彼を殺すよ」

鮮やかなまでの殺意が籠った、彼には不似合いすぎる言葉。

ビリオン様、と手を伸ばす。しかし指先は空を切って、またして

も彼は唐突に消えてしまった。剣呑すぎる言葉だけを残して。

「どつするつもりだ」

高熱を孕んだ魔力が消え去った室内で、真っ先に口を開いたのはリズだった。彼は油断なく周囲に視線を走らせ、安全を確かめてから壁に背中を預ける。

「どつするつもり、とは？」

尋ねると、じろりと睨まれてしまった。

「惚けるな。初代炎帝陛下と共に行くのかと訊いている」

緊張感の残滓がこびりついた鋭い声が耳朵を打つ。だが、問いの内容については考えずとも答えることができたので私は緩慢な動きで首を振った。

「私がビリオン様と共に行くことはありません。いつか私が死ぬ時まで、同じ道を進むことはないでしょう」

「随分はつきりとした物言いだな」

きっぱりとした物言いに違和感を覚えたのか、リズが怪訝そうに片眉を上げる。疑っているわけではないものの、容易く信じることもできない答え。恐らくは彼の中でそう位置づけられた答えに、私は嫌みたらしいまでになっこりと微笑んだ。

「もう迷わないと決めましたので。……これで満足かしら？」

訊いておいて信じないのは言語道断だ。

それにこれは私が悩んで悩んだ末の答えなのに、否定されるのは業腹だ。そう思って口にした言葉は苛立ちを体現していたらしく、リズは鼻白んだ後で「荒むな性悪」とぼやく。

「荒んでなど」

「わざとらしく魔女らしい態度を取っておいて荒んでいないとは言わせん」

「……」

意識してはいなかったけれど、もしかして魔女らしかったのかしら、今は。

無意識に口元に当てていた手を慌ててどける。気まずさにくるりと彼に背を向けると、追いかけるような声が背中にぶつかかった。

「悔いているのか？」

「悔いてなどいません。きっと私は何度だってヴァノツサを選びます。だから辛いんです」

即答する。そして、もし二人の立場が逆だったなら、と考えた。

ヴァノツサが地脈破壊を行っていて、ビリオン様がそれを止めようとすると。そんな立ち位置だったなら、私は誰の手を取ったのだろうと。……無論それならビリオン様にならなければおかしい話だ。

けれど、言い切る力は今はない。あれだけ力強く私を引っ張る人間など、ヴァノツサ以外に思い浮かばなかったから。

思考が焼き切れてしまう直前に考えるのをやめる。深々と息をすると、勝手に愚痴が口について出た。

「ヴァノツサは一体何を考えているんでしょうか。魔女を口説くなんて」

だが、その愚痴に対して返ってきたのは酷薄なまでに冷静な言葉だった。

「下々の者に陛下の御考が分かると思うか」

「下々じゃないけど、そもそも僕は理解する気が起きないよ。あんな奴」

それはまあ、確かにそうなのだけだ。

理解しようと思える気が起こらない地点で、ヴァノツサがどれだけ自分にとって異質なのかを思い知る。けれどそれは立場の問題ではない気がする、私はなおも言い募った。

「魔女を口説く云々に關して、皇帝も下々の者も關係ありません。

……いくら物珍しいからと言っても、限度があるでしょうに」

すると、一つ間を空けた後でリズが嘲るような笑いを漏らした。

「珍しいな。貴様がそんな心にもないことを言うとは」

「どつという意味です」

「しらばっくれるな。陛下が好奇心で貴様を傍に置いているわけがないだろう」

リズにしては珍しい、ヴァノツサの本心を認めて言い当てるような言葉に口を噤む。降り積もる沈黙の中、ひたひたと誰かが冬宮へ足を運んでいるような錯覚を覚えた。ツヴァイの星姫の話聞いたせいだろうか。

同じことを考えていたんだろうか。彼は僅かに逡巡するような隙を見せた後で、しかし決然たる態度で続けた。

「陛下は、恐らく本気で貴様を」

けれど、最後まで言わせる気など毛頭ない。

「それで？ それを認めてどうなると言うんです。これ幸いとヴァノツサを籠絡しろとでも？」

「そんなことを俺が認めるとでも思っているのか？」

「まさか。ですがそれなら今の言葉は口にすべきではありません。ヴァノツサは物珍しさから私を困っている。そうでなければならぬのです」

眦に力を入れて強い視線でリズを睨み上げる。

意地のような瞳に、リズは観念したとばかりに肩を竦めた。剣を鞘に収め、ソファに座り込んで天井を眺める。

「認めない割に離れもしない。俺は陛下以上に貴様の思考回路が読めん」

「奇遇ですね、私もです。ただ、安易に離れる道を選ぶのは得策じゃないのかもしれないとは考えています」

少なくともビリオン様の言葉を聞く限り、下手に離れるのは得策ではない。

彼は私を娶ると言い出したらヴァノツサを殺すと言った。さらりとした声色は、いつでもそれが実行に移せるのだと暗に示している。そのような状況でこの国で唯一魔術を行使できる私が離れてもいいのか、そこが問題だった。もっとも、私がいることで事態が悪化擦

る可能性もあるのだと自覚する必要もあるのだけれど。

リズの向かい側に座り、背もたれに深く体を預けて思案する。その様子を何と取ったのか、リズは剣呑な光を眼差しに載せる。

「まさか陛下に心を奪われたなどと言いはしなないだろうな」

「そうではありません。一つ、気になることがあるんです」

第一、そんなことになるうものならビリオン様は今すぐにでもヴァノツサを殺しにかかることでしょうかね。

そう、だから私は伸ばされた手に覚える安堵感も信頼も何もかもなかったことにしなければならぬ。その感情に名前を付けたりはしない。付けてはならないのだと、本能が告げていた。

それに今はそんなことを考えている場合でもない。あの、私の言った意味合いとは全く違う方向性の愚帝になるうとしているヴァノツサの思考を矯正し、ビリオン様の攻撃対象から外させなくてはならないのだから。

そのためには自分という存在が邪魔になる。かと言って何日もヴァノツサの傍を離れることは、それはそれで気になって仕方がなくなるだろうし、下手にヴァノツサを刺激すると何をしてくすか分からない。となると残る案は、彼の合意を得た上で冬宮を離れ、なおかつ頻繁に戻ってこられる状況を作るしかない。……それが出来ないから困っているのだけれど。

「気になること？」

思わせぶりな私の言葉にリズが問う。それに対し一瞬言えませんかと答えかけ、ふと思いついたように「はい」と答えていた。

「合法的に冬宮を出られる方法はないものかと」

「……別に貴様がここに居るのは法で決まっていることではないぞ」「自分こそが法だと言わんばかりの皇帝が許さない限り、合法的とは言えません」

逆を言えば、法が許さなくともヴァノツサが領けばそれでいいのだ。

力なく言い返すとリズは「成程な」と頂垂れた。どうやら言いた

いことは伝わつたらしい。

「それもそうだな。だが、貴様もいよいよ真面目に考える必要が出てきたところだから、丁度良い」

「必要？ 何かあつたんですか？」

「ああ。……宰相以下官共が、元老院を巻き込んで陛下に進言したそう。早く魔女を冬宮から追放しろとな。……その程度で心を動かされる御方ならとくに貴様はここを出ているというのに、事もあるうか奴ら陛下は魔女に操られているとまで言い出した。おかげで不敬だと言って奴らを斬り殺そうとするミルヴェーデン隊長を抑えるのに苦労した」

「そうだったんですか。騎士達も大変だったんですね」

「陛下もだ。連日横で同じ言葉を続けられてうんざりしていらつしやるという話だからな」

「まあ、それはそうでしょうね。ですが自業自得ですよ、あれは」
「それを表立つて言えないから苦労してるんだというのが分かるのか貴様は。だが指摘が間違っていないから問題だな。陛下が首を縦に振ってくださいさればそれで事足りるものを、何故陛下は貴様なんぞに執着していらつしやるのか……」

その答えをもうリスは知っているのだろうけれど、ぼやきたくなる気持ちは分かるから言わせておく。その姿を見ながら、確かにそうだと心の中で付け足すことも忘れない。

そもそも、どうしてヴァノツサはあんなに私に固執しているのだろうか。

彼は私といると人間に戻れると言った。歓喜を持って、震えた声で。あの様子を思い出すと胸が疼くのを止められなくなる自分がいるのに気付いて、私は溜め込んだ息を吐き出した。

ヴァノツサには今まで自分を人間に戻してくれる人はいなかったんだろうか。

「そういえばリス殿」

「何だ」

「ヴァノツサに友人と呼べる人はいますか？」

その疑問が、私にそう問わせていた。

リズは唐突に向けられた問いに目を軽く見開き驚いている様子だった。

「陛下の御友人？」

まさかそのようなことを訊かれるとは思わなかったとその顔に書いてある。いきなり飛んだ話に浮かぶ警戒心を和らげるように、大した話じゃないのだと肩を竦めた。

「そうです。ああ、貴方の友人の話はしなくていいですよ。どうせいないでしょうから」

「やかましいわ！ それに、少なくとも貴様より友人は多い方だ！」

「そうですか？ きつといい勝負になると思いますが」

怒号に対し悪戯めいた笑みを浮かべてやる。にやりと吊り上げられた口の端にリズが何やら暴言を口にする気配を感じたが、それは一言足りとも漏らされることはなかった。

「僕達の盟主に随分と大きな口を叩く人間がいると聞いてはいましたが、まさかこんなに早くお会いできるとは」

涼やかな声にリズが立ち上がり、剣の柄に手を添える。その刹那の間に魔力を練り上げた存在は、高い水音を立てて顕現する。

「マーグリズ……」

「お話中すみません、レイアステイ様」

体を突き抜けて背後の景色をも映しだす透明度の水で構成されたそれは、霧を纏った水の精霊王だった。名を呼ぶと、少し申し訳なさそうな表情になり頭を下げられる。

リズは私達のやり取りに賊ではないと悟ったのか柄から手を離れたものの、第一声が険のある言い方だっただけに、いつでも動き出せる態勢になっていた。当のマーグリズはそんなリズを無視し、理智的な瞳を曇らせた。

「本当であればその騎士が退室した後にもどと思っていたんですが、気になることがあったものですから」

「気になること?」

「あれです」

問いに簡潔に答える声と、すつと遠くへ向けられる指先。ぼたりと水滴を落としては霧となつていく様を見ながら指先を視線で追うと窓へと行き着く。そこに、先程まではなかったものが浮かんでいるのが見えた。

『ツヴァイ王にはくれぐれも気をつけて』

窓には一言そう書かれてある。室外と室内でどれだけ温度差を生み出したのか、白く濁った窓に這った指先が描く文字に啞然とした。きつとビリオン様だろうということは分かっていたけれど、いつの間に。マーグリスに言われなければ、きつと気付かなかっただろう。

けれど、文面にも気になる点が多い。

「ツヴァイ王……?」

三百年前ならばともかく、当代のツヴァイ王を気にかける必要などあるのだろうか。

確かに妹姫であるミルヒシュトラークは語った。此度の婚儀はツヴァイ王が直に魔女を見るために早められたことを、それでも居ても立ってもいられず妹を使者に立てたことを。けれどすでに私は白銀の魔女ではないと証明されているというのに。そうは思ったものの、わざわざ言い忘れたとばかりに残された言葉を無下にはできなかった。精霊達から世界中の情報を手に入れることのできるビリオン様の忠告は、否応なしに緊張感を高めた。

「それから、合法的にここを出る方法であれば一つ御提案できますよ」

強張る肩にそつと触れるような声が聴覚を刺激する。

顔を上げると、丁寧な笑みのマーグリスと目が合った。

「方法があるの?」

「ええ。二代目炎帝も、この方法ならば無下にはできないはずですから」

「教えて！」

気がつけば飛びつくように一步踏み出していた。一体どんなことを言われるのかと不安がないわけではないけれど、マーグリスが提案するのならそれほど酷いことにはならないと思ひ、私はゆっくりと紐解かれる“方法”とやらに耳を傾けた。猫の手も借りたい所で提案された話は確かに今の状況で最も合理的なもので、私は一も二もなく頷いてヴァノツサが帰るその時を心待ちにした。

一つだけ懸念していた事も彼らの提案により消えたことに何より安堵したのは、おくびにも出さずにおいたけれど。

自分が心配しているものの正体と理由。

そんなもの、考えないのに越したことはないのだから。

ヴァノツサが冬宮を訪れたのは、その日の夜半のことだった。

「随分お疲れのようですね」

萎れた花のように覇気のない様子でソファに倒れこむ姿に熱い茶を差し出すと、ヴァノツサは感謝するように目を細めてからそれを受け取り、一気に飲み干した。常ならばむせるほどの熱さも、今の彼には何の障害にもならないらしい。つまり、感覚など殆ど無いのだ。

華月が浮かぶ夜空を見上げ、ヴァノツサはゆっくりと瞼を閉じた。「頭の硬い老人が連日傍でわめいているからな。疲れもする」

辟易とした声色に朝リスから聞かされたことを思い出す。けれど私はしらばっつてくれることにして、さも何も知らないように振舞った。

「何か問題でも？ 地震は起きていないはずですが」

「いや、地震は今のところ収まっているから問題ない。それよりも問題なのは婚儀の件だ」

「ああ、そういえばもうすぐでしたね」

これもまたしらばつくれる。実はツヴァイの星姫がファルガスタに向けて出立してるなんて情報も、知らない振りをする。

茶を飲んで落ち着いたのか、ヴァノツサはやや生気を取り戻した様子で身を起こした。その体に毛布を掛けてやりながら続ける自分の声は、彼が慚然とするほど冷静だった。

「大方、魔女を冬宮から立ち退かせよという話でしょう。別にいいのでは？ 私は拠点^が冬宮でなくても構いませんし」

「貴女がよくとも俺は認めるつもりなどない。手放す気はないとあれほど話したのに、まだ理解してもらえないのか」

「冬宮から出ていくことが手放すことになるとは思っておりませんので。それに遅かれ早かれ私は拠点を換えざるを得ないでしょう。

ここは後宮ですし」

「夜、貴女の元を訪ねる事だけを楽しみに政務をしている俺に向かって、よくもそんなにあつさりと言えたものだな」

貴方こそよくもまあそんなことをあつさりと言えたものですね。

心底そう思ったものの、あえて口にはしないでおく。代わりに本題とも言えることを、何でもないことのように話してやった。

「ヴァノツサ、賢明な貴方なら分かっているとは思いますが、婚儀を終えたら夜私の元を訪れることは出来なくなるんですよ。それならば別に冬宮に滞在する必要もないでしょう。それにそう遠くはないうちに私もしばらく冬宮を離れることになりそうですし」

「……何だと？」

よし、食いついた。

ぴくりと眉を上げたヴァノツサに内心でほくそ笑み、私はやや過剰なまでの愛想笑いを浮かべてみせる。それはもう、嫌みたらしいほどに華やかに。

「地脈について、文献だけでは心許ないのでマーグリスに相談したんです。思えば、地脈を癒す方法については北の孤島でアマンティが仄めかしていたことを思い出したので。それで、とりあえずは私の魔力が地脈に対して有効に働くか、実物を見に行くという話にな

「つたんです」

「では貴女はしばらく地脈に向かうということか」

「そうなります」

実際はそのような話の流れには一切ならなかったのだけれど、ということとは言わぬが花だ。

茶の香気が薄れていく。それに比例して下がっていく温度の中、ヴァノツサだけが不満という熱を孕んでいた。だが、彼には何も言えまい。彼は皇帝なのだから。

「……危険はないと言えるのか」

たつぷりの沈黙の後、問いが向けられた。

「恐らくは。ビリオン様が私を攻撃する可能性は低いと思っていますから」

「魔女も魔導士も近寄らない場所に行くというのか」

「必要とあらばすぐにでも」

堂々と言い切る私に、ヴァノツサが嘆息した。「分かった」と掠れた声で言い放つ。

「許可する。だが、貴女の部屋はここに残しておくからいつでも戻って休んでくれ。それから、頼むからたまには顔を見せに皇城に来てくれないか」

「ええ、勿論。御気遣いありがとうございます」

色々と不満が残る話ではあるが、お互いにとって最大限の譲歩だ。私はヴァノツサの英断に本心からの笑みを浮かべ、最後にこう提案した。

「私がない間に万が一貴方が襲われるようなことがあってもいけませんから、念のため精霊王達の誰かを置いておきます」

これでもしビリオン様が気紛れにヴァノツサを殺しにかかっても、彼の命は護られる。

「誰か？ まあ、構わないが」

提案に、これもまたヴァノツサが頷く。物分りのいいことで助かる。

ほつと胸を撫で下ろす。するとヴァノッサはようやく終わった話に緊張感を解いて「で」と手を伸ばした。がっしりと腕を掴まれ、引き寄せられる。

「貴女と過ごせる数少ない日だ。俺が眠るまで話に付き合ってもら
うぞ」

「……早く寝てください」

「そんな勿体無い事ができるわけないだろう」

くつくつと笑う声と振動が体に伝わる。触れ合った体を離そうとしてもびくともしない腕は、本当に疲労しているのか問い詰めたいほどに力強かった。

さて、どうしたものか。

「レイアステイ」

胸中でぼやいていると、笑っていたヴァノッサが急に真剣味を帯びた声色で私の名を呼んだ。

「必ずや良い報告を」

堂とした声は皇帝としてのものだったのだろう。紅蓮に灯る強靱な光を見据え、私はしっかりと頷いた。

「ええ、必ず」

アマンティ達の太鼓判があるとは言え、絶対という言葉は存在しない。それを案じてのヴァノッサの言葉に同じだけの真摯さで返し、一度だけ強く抱きしめてきた腕を払いのけないまま目を閉じた。

私が在ることで人間に戻れると語った皇帝に、その立場が故に私を手放せと告げることがどれだけ酷かを知っていたから、この腕を振り解くことなど出来はしなかった。

腕の中で強く願う。

自分がいなくてもヴァノッサがピリオン様のように狂気に囚われませんようにと。人に人と思われない痛みに、心を壊しませんようにと。そしていつか、彼を人間にしてくれる人が現われますようにと。

魔女である私は彼の命を護ることはできても、心を護ってあげら

れそうにないから。

夜が更ける。華月が傾ぐ。深い闇の中で、結局ヴァノッサと私はお互い離れないまま他愛ない話をして緩やかな眠りへと落ちていった。

もうしばらく訪れることのない穏やかな夜は、これで終わりを告げた。

星姫ミルヒシュトラ―セが首都フェンネルの地を踏んだのは、それから六日の後であった。

茜色の出会い 前編

例えば目が醒めた時、そこが見ず知らずの場所だったらどうしようなどと考えたことのある人間は少ないだろう。

少女はぼんやりとそんな事を考えながら、ゆっくりと辺りを見回した。

人気のない路地裏。少し進めば市があり、甘やかな果物の匂いが鼻孔を突く。だが。

(ここは、どこ?)

暗がりにもはつきりと分かる銀の髪を震わせ、少女は胸を襲う恐慌に目を細める。その色は深い海の蒼だ。

見れば、通りを歩く人々の姿に少女に似た色を持つ者はいない。ほとんどの者が金髪に空色の瞳。蒼はおるか銀髪がない。顔立ちもどこか少女とは違うものに思われた。少女の顔はどこかあどけなさを残すものの、やや整いすぎている。少女自身に自覚はなかったが、道行く女性の誰も少女ほどに整った顔立ちは持っていないかった。持ち得る色も顔立ちも違う。それはまるで、全く違う国に来たような錯覚を少女に与える。

だがそう考えるものの、そもそも自分がどこの国から来たのかさえ少女には分からない。体を掻き抱くように両腕を肩へと回そうとし、片手が塞がっていたので断念する。そうして一体どうしてこんな事にと思考を巡らせ、すぐに息を詰まらせた。

(私、今まで何をしていたの?)

思い出せない。自分が何故ここにいるのか、今までどう生きてきたのか。まるで分からない。

塞がっている片手に視線を落とす。

知らず力を込めていた手に握り締められているのは、一冊の書物だった。この書物は何というものだったか 必死に空っぽの記憶を漁り、やがてそれが魔導書と呼ばれる物であると思いつけた事に

安堵した。どうやら、何もかも全てを忘れているわけではない。では、何故何も思い出せないのだろう。

「私、は……」

まずは身近な所から御浚いしてみよう。

何度目かの深呼吸の後に決めた少女はとりあえず自分の名を思い出そうとする。

これも分からなければどうしようもない、絶望的だ。そして自分は絶望に囚われたくはない。

ともすれば暗く沈みそうになる思考を払拭し、市の喧騒から一歩遠ざかる。暗がりの静寂の中、走査された記憶は存外と早く少女の名を導き出した。

（私の名前は　　）

「やっと見つけましたわ、レイアステイ様！」

「　っ!？」

ようやく見つけた自分の名前を先んじて呼ばれ、少女　レイアステイはびくりと身を竦ませる。だが、声の主を探して慌てて辺りを見渡すも人の姿は見当たらない。

「ここですわ、ここ」

意味が分からず首を傾げつつ、涼やかな声と気配に上空を見上げる。そして、ぽかんと口を開けた。

自分に向けて呼びかけられた声。その声の主は、空中に浮かんでいた。だがそれだけならば有り得ることだと、レイアステイは記憶から推察する。問題はその姿が人間でないことだ。

眼前に浮かび上がる姿は、形こそ人間女性のそれだが質が全く異なっていた。彼女を構成しているのは人体とは違い、空気　風だったのだから。

無色透明の風が渦巻き、僅かに白く濁る部分が女性の裸体を顕現させる。レイアステイよりも更に整った顔立ちは文字通り彫像の如き精緻さだった。だが無論彫像であるわけがなく、彼女は動いて丁寧な礼の形を取る。その様は淑女のそれで、気品に満ちていた。

「まさかこんな所にいらっしやるだなんて、想像も致しませんでした。……レイアステイ様？」

「あ、貴女……誰？」

だが、自分にはこんな可笑しな知人はいない　恐らく。

(そのはずだわ……というか、そう思いたい)

記憶がないだけに断言することは出来ないが、居て堪るかという想いならばあった。

だが、そんな希望的観測を彼女はあっさりと打ち消した。

「エイミーですわ、レイアステイ様。……やはり、覚えてらっしやらないのですね。でもそれはそれで好都合ですわ」

「はい？」

今何か不穏な言葉が聞こえた気がする。

そう思うものの、この場で問い詰めるだけの冷静さをレイアステイは持ち合わせてはいなかった。ただでさえ、このような知人がいたという記憶を浚うのに手一杯だったのだ。

「アマンティ、ガラナ、マーグリス！　レイアステイ様を発見致しました！　急いで！」

そんなレイアステイの呆けた顔を無視して、エイミーが声を張り上げる。仲間がいるのか　思わず身構えると、エイミーは硬くなつたレイアステイを案じるように「レイアステイ様」と柔らかく微笑んだ。風から生み出されるその笑みはこの世界に存在するのか甚だ疑わしい女神のようだったが、匂わせる空気が剣呑すぎる。知らず、レイアステイは一歩足を引いた。

ガンガンと頭を警鐘が打ち鳴らす。その中で、風を纏う女性もとい風そのものの女性にはこやかに言い放った。

「せつかくですから、大人しく私達と契約してくださいませね」

言うなり、エイミーが放つ魔力が膨れ上がる。

同時に近づいてくる同質量の魔力にレイアステイは踵を返し、走り出す。それはもう本能と呼べるだけの代物でしかなかったが、レイアステイはとにかくエイミーの言う“契約”とやらから逃げるべ

く、本能の赴くまま襲い来る魔力に背を向けた。

モーリス大陸の東側に位置する国、ファルガスタ。

西側に位置するツヴァイと並び称されるこの大国は、今やその名を疑われてもおかしくはないほどに疲弊していた。

先代皇帝の代まで続いていたとされる百年戦争。ツヴァイとファルガスタが覇を競った戦いの傷跡は深くファルガスタの地に食い込み、未だに癒されない。

(まあ、それはツヴァイにも同じことが言えるのだけれど……)

比較的傷の浅い首都フェンネルでさえも癒せないというのに、辺境地域がどうこうできるわけがない。

フェンネルの北地区に位置する皇城の執務室の机に項垂れ、ピリオンはそう胸中で呟きながら力なく目を閉じる。そうしなければ処理速度の追いつかない決済書類から逃避が出来ないからだ。

「陛下、それは急ぎの決済ですぞ」

「分かっているよ。……すぐにやる」

手を休めると同時にすぐさま文官からの声が飛ぶ。堅苦しい声に辟易としながら頷くと、とりあえずは抗議の声は収まった。あくまでとりあえずは、だが。

溜息を一つ漏らし、窓の外に目を向ける。早春の気配に、ああもう一年が経ったのだと気付かされた。

先代皇帝が崩御して、早一年。

それは自分が皇帝位について一年ということにもなる。

本当にがむしゃらに働いたものだとはピリオンは自分の一年を振り返り、呆れ混じりに溜息を漏らした。

政治に必要な知識は全て先代から与えられていた。だが、それでも足りないだけの状況が目の前に鎮座している。そしてそれは、未だに解決の兆しを見せない。百年もの戦いの末に残ったのは、数え

るのも馬鹿馬鹿しいほどの死と怨恨だ。これら全てを、ツヴァイとファルガスタは癒していかなくてはならない。

「ツヴァイ王は一体どうやって乗り切っているのやら」

何の得る物のない戦いだった。恐らくは百年前には欲するものがあつたのだろうが、度重なる世代交代の中でその意義はとうに失われていた。下手をすれば、これ以上に戦いが続いた可能性だつてあるのだ。百年の長きに渡る戦い。大戦と呼ぶに相応しい戦争で英雄と呼ばれた魔女が眠りに就かなければ、ずっと。

銀の魔女、最果ての魔女が救世主。

今や御伽話として語り継がれている大戦の英雄は確かに実在していたと、ビリオンは先代から聞き及んでいる。銀の髪と強大な魔力を持つ魔女。彼女はこのファルガスタの為に戦い、そして魔力を失つて最果ての島で眠りに就いた。モーリス大陸を激震させたその出来事こそが、ツヴァイ王と先代が停戦を決めた理由だ。

（そんな事で終わるのなら、もっと早く眠っていれば良かったんだ）
敵国の英雄が眠る事で、何故ツヴァイ王が停戦に応じたのか詳しい事は知らない。

だが、あつけない終わりに釈然としないものを感じていたのは事実だ。何か腑に落ちない。

（……とはいえ、今は関係ないか）

腑に落ちないが、今はそれを気にしている場合ではない。ファルガスタ皇帝としてやるべき事は終わった戦いの調査ではなく、国の復興作業だ。……分かつてはいるのだが、ビリオンは気が進まなかった。

ペンをくるりと回し、人差し指で髪をくるりと巻く。さらりと指先に絡む髪は鮮やかな紅蓮で、それがビリオンの気を更に落とした。（こんな化物に国を任せるといふのは、どういふ気持ちなのだろう）
ちらと周囲を一瞥する。そこに立つ騎士も文官も、誰も本当は自分の事など必要としてはいない事をビリオンは知っている。それがやる気の出ない理由だ。

否、皇帝は必要なだろう。

ただ願わくばその皇帝がこのような異質な人間でなければ、と思っている事だろうということも知っていた。こんな、紅蓮の髪と瞳を持った化物など願い下げのはずだ。

モーリス大陸に住まう多くの者は、金や茶の髪と空色や淡緑の瞳を持つ。遙か東方の島国では黒髪黒瞳もいるらしいが、紅蓮というのは聞いたことがなかった。

たかが色だ、と言われればそれまでのことだ。とはいえ、悲しいことに人間ほど自分と違う存在を排除したがる性質の生き物はいない。ビリオンは生まれながらにして排除される側に立ってしまったのだ。幸いなことに皇太子だった事から排除されずに済んだが、なまじ生まれが良い分妬みの対象になりやすい。ファルガスタの禁色になったとはいえ、不気味なことに変わりはないのだから。

民が向ける、怯えの色。だがそれも仕方のない事だとビリオンは思っていた。

夥しい量の血が流れたこの国で、血に似た色を持つ自分が如何に不気味かはよく知っている。

知ってはいるが、理不尽に思えてならなかった。

(何故私は働くのだろう)

自分を恐れる民に、排除したがる家臣達。

その中に居ても尚、何故自分は善政を敷く努力をせねばならぬのか。ビリオンは常に自問自答していた。

皇帝としての義務だと言われればそれまでだろう。

ならば、皇帝位を捨てれば良いのだろうか。

民を愛せない皇帝など、民に愛されない皇帝など、居て何の意味がある？

否、本当は愛する愛される以前の問題なのかもしれないとビリオンは胸中で独りごちた。

(民の姿を、私は知らない)

知った所で何も変わらないのかもしれないが、滅多に見ない人間

のために働けというのは土台無理な話だ。ならば、とビリオンは考えを巡らせた。

知らないのなら、知ればいい。

「皆」

内心を悟らせないように鋭く声を上げる。我ながら冷たい声だと苦笑したくなった。

ぴしりと背筋を正し視線を向ける家臣や騎士達を前に立ち上がり、腕を横薙ぎに振る。有無を言わさぬ態度に不快と畏怖が見て取れたが、今更の話だ。

「少し集中したい。外に出ていてくれないか」

自分は民がどのように生活し、どのように成長するかを知らない。ならば見て、感じればいい。

（ここで悩んでいるより、その方がずっと建設的だ）

愛される努力は今後に期待してもらおうしかないが、愛する努力ならばこちらからすることができる。そして自分は全く知らぬ相手を愛せはしないとビリオンは知っていた。例えそれが民であっても変わりはない。

眉根を寄せながらも次々と席を外していく家臣達の背中を見つめ、口の端を吊り上げる。誰もいない執務室からフェンネルへの道程を描き出すのは、思いの外楽しい事だった。

そして半刻後、ビリオンは首都フェンネルの南地区を歩いていた。

「…………ふう」

貴族達の住居が多く存在する南地区は人気が少なく、ビリオンはようやく人心地つけたとばかりに息を吐き出した。

皇城の在る北地区から民の居住区である西地区を回って南下する。ただそれだけの事であるはずなのだが、息苦しさに目が回りそうだった。

無論市を回る事も民と直接会話する事も有意義な事だ。だが、頭をすっぽりと覆い隠す外套が外れたらと気が気でなかったせいである。

いくら外に出られたからとはいえ、皇帝としての姿で出ていけば民は萎縮するだろう。ただでさえ炎帝と呼ばれる外見でもある。そう思い、ビリオンはせめて髪ぐらいはと外套で紅蓮の髪を覆い隠したのだ。瞳ぐらいならば外套の影で見えづらくなっているし、顔立ちに関してはそもそも民は覚えていないだろう。

その予想は大当たりで、見事に誰にも皇帝だとばれずに済んだビリオンは満足していた。満足しつつ、内心で少し落ち込んだのも事実だ。

（誰も彼も、私の色しか見ていないのか）
それが悔しくてならなかった。

だが、悔しさの分収穫もあつたとビリオンは自分自身を鼓舞した。子供達に混ぜて試してみた遊びや、街を流れる噂話、普段民が口にする食物、家庭料理のレシピ。全ては囁かなものでしかないが、ビリオンが民を身近に感じるには十分すぎる材料だった。

遠くで手を振ってくれた子供の姿を思い出す。棒切れのように細い手を目一杯振って、またねと元気一杯に叫ぶ声は耳に心地良かった。

（また来ることが出来ればいいのだけれど）

一度抜けだしてしまつたからには同じ手は通用しないだろう。皇帝が皇城を抜けだして城下に赴くなど、誰も認めないに違いないのだから。

さて、一体どうしたものか。

胸中で呟き視線を地面に落とした時、強く地面を踏みしめる音がしてビリオンははつと顔を上げた。

夕日がフェンネルを赤く染め上げている。その中を一心不乱に走る細い影が視界の中心に入り、ビリオンは思わず見入ってしまった。あまり細かくは見えないが、汗を滴らせて走る横顔は少女のそれ

だった。何かから逃げているのか、ただ前だけを見据える瞳は必死さを湛えている。整った、綺麗な顔立ちをしていた。

だがそれよりもビリオンの目を釘付けにしたのは、きらきらと光る髪だった。

（銀髪……！？）

さらさらとした銀糸が紅の光を受けて輝くのを見て息を呑む。それは目の錯覚でも何でも無く、真正正銘の銀髪だった。

しかし、モーリス大陸には銀髪を持つ人間など存在しない。もし存在するとしたら。

「君！」

銀の魔女、最果ての魔女が救世主。そんな言葉が頭を過ぎる。

慌てて声を上げると、少女の形をした影が足を止める。だがそれも束の間の事で、少女はビリオンの方に駆け寄りながら切羽詰った怒声を返した。

「その人！ 早く逃げて！」

「え？」

だが、言われたことの意味が分からない。分からないから目を丸くしていると、苛立ちを含んだ声が更に近距離で響いた。

いつまでも逃げないビリオンに業を煮やしたのか、はたまた元々の進路方向だったのかは定かではない。ただ分かるのは、全身をぞくりと走り抜ける悪寒だ。

「……くっ」

慌てて前方に目を向ける。逆光になりよく見えないが、確かに悪寒の正体はそこにあつた。

誰がそこにいるのかは分からない。この悪寒の理由も分からない。しかし“何か”が少女の背後に現れる気配を本能で察知し、ビリオンは咄嗟に足を前に出した。そのまま少女へと肉薄し腕を伸ばして抱き込む。

「っ！？ 何を！」

「黙って！」

慌てた様子で藻掻く少女を更に強く抱きしめ、地面へと押し付ける。ビリオンはその上に覆い被さるように夕日に背を向けた。その背の上を、ぶぁんと低い唸り声を上げて風が通り抜けていく。

(何だ、あれは……っ!?)

人間が作り出せるような風ではない。かといって突発的に吹いた風とも思えない。ファルガスタは温暖気候で、突風が吹きやすい土地柄ではないのだ。

となれば、理由は一つしかない。術者がいるのだ。

ビリオンは実際に目にしたことがないが、モーリス大陸には魔女や魔導士が点在していると聞く。それならば合点が行った。

追手が来ないうちに急いで立ち上がり、土を払うのももどかしいというように少女の手を引く。小さく、ほっそりとした手は冷たかった。

「急いで、次の攻撃が来ないうちに！」

「え、ちよつと」

「早く！」

先程の風は殺傷能力こそないものの、直撃すれば一溜りもないだろう。それこそ、脳震盪ぐらいは起こせそうな音がしていた。

ビリオンは少女が逃げると叫んでいた事を思い出し、ぞつとする。だがその感覚は自分が面倒な目に巻き込まれたからという事実からではなく、自分がこの場にいなければ少女がああ攻撃を食らったのではないかという気持ちからだ。無論、ビリオンの予想が正しければ自分などいなくとも少女はこの場を切り抜けられるだろう。それでも不安が拭えなかった。

勢いよく手を引くと少女は困惑した声を上げながらも付いてくる。片手に白い書物を抱える姿は頼りなげで、儂い。何より、覆い被さった時に触れた体は華奢だった。こんな所に放置しておくわけにはいかない。

(このファルガスタで狼藉を働くなど、笑止!)

ツヴァイや他国でどうかは知らないが、ビリオンはファルガスタ

の皇帝だ。このような狼藉を許しておくわけにはいかなかった。

早く皇城に戻り、術者に対抗できる者を探さなければ。路地裏を選びながら大股に走り、少女を引き連れながらビリオンは頭の中でフェンネルの地図を描く。皇城までの最短距離はどれだ。

そうして漸く悪寒が消えた頃、少女が踏ん張るように足を止める。「どうした？ 早く逃げないと」

少女の動作に引きずられるように足を止める。

すると少女は開口一番、強い口調でビリオンを怒鳴りつけた。

「何てことするのよ！」

「……え？」

だが、怒鳴られる理由が分からない。

開きかけた口を閉ざし、また開いたりしながらビリオンが目を白黒させていると少女は顔を上げてきつとビリオンを睨みつけた。深い海の蒼に射抜かれて、言葉が出なくなる。

「危ないじゃない、怪我したらどうするの！」

今度は言われた意味が分かったものの、思考が凍りついた。

怪我をしたらどうするの、という言葉はこちらの台詞だとビリオンは胸中で独りごちる。大体狙われていたのは少女の方だ。だが少女はそれを踏まえた上で腹を立てているのだらうなと思い、ビリオンは咄嗟に思いついた言い訳を口にした。

「大丈夫だよ。私は少し変わっているから」

ファルガスタ国内であれば誰にでも通じるような、他愛ない言い訳だ。

他者とは違う紅蓮の髪と瞳。異形の色を持ち合わせたビリオンのこの言葉は、大体の人を黙らせる事ができると知っていたし、少女もそうなのだろうと思っていた。ビリオンからすれば少女の方が余程変わった色を持っているのだが、それは口に出さない。

柳眉、とも言える整った眉が寄せられる。

「関係ないわ」

切り捨てるような冷え冷えとした声がささやかに響き渡る。低温

の怒りを孕んだ声にビリオンが目を見開くと、少女は吊り上がった尻尻をそのままにビリオンを睨めつける。それがどうしたと言わんばかりの表情に、こちらの方が戸惑いを隠せない。真っ直ぐな目に真正銘怒っているのだとビリオンが感じた刹那、凜とした声が耳朶を打つ。

「少しぐらい変わっているからといって血が流れてもいいわけじゃないわ。王であろうと民草であろうと魔女であろうと人間であろうと、それは変わらない。血が流れたら、誰だって痛いのよ」

王であろうと民草であろうと。

不敬とも不遜とも取れる言葉に、知らず心が震える。

血が流れたら誰だって痛い。それは当然の事だ。生きとし生けるもの全てに共通する感覚だろう。

(けれど、誰も今までそんな事を言っってはくれなかった)

炎帝たる自分だけは違うのだと、誰もが自分を遠ざけた。当たり前。前の感覚を共有してもらったことさえしてもらえなかったのだ。

どのような難問も炎帝ならば出来て当たり前。傷を負ったとしても自力で治せるのではないかと影で囁かれていたほどのだから。

だというのに、目の前に立つ少女はそんな事は関係ないという。

問いは、微かな期待と不安で震えていた。

「こんな髪や瞳の色でも？」

その問いに対する答えは、あまりに簡潔だった。

「？ 関係ないでしょう？」

小首を傾げ、何を馬鹿なことをと言うように眉を顰められる。鈴の音に近い軽やかな声も怪訝そうな表情も、その全てが答えだった。

「……そうだね」

素直に頷きながら、でもとビリオンは胸中で付け足す。

(それを関係ないと言ってくれる人は、ファルガスタにはいないんだよ)

心がじわじわと暖かくなる。歓喜に感情が暴れだしそうになり、ビリオンは腕を伸ばしてぎゅっと少女を抱きしめた。

自分を見てくれる瞳、自分を案じてくれる声。その全てが一瞬にしてかけがえの無いものになった。

「それでも、君が無事で良かったと思うよ」

囁く声に少女の体が熱くなる。きっとこのように抱きしめられた経験など殆どないのだろう。自分だってそうだ。誰かをこんな風に抱きしめた経験など無いに等しい。

精悍とも言われる顔立ち、鍛錬の成果が引き締まった体。それらは普通の男であれば引く手あまたであっただろうが、ビリオンは持つ色のせいか性別を問わず敬遠されてきていた。そもそも自分から誰かに好意を抱くことすらなかったのだから仕方のない話なのだが、静かに、心に何かが降ってくる。それは着地した瞬間、こつんという音を立てた。

恋に落ちる音なんてものがあるとしたら、きっとこんな音なのではないか。

ビリオンはふとそんな風に考えてから、自分が恋をしたことをあつさり認めている事実に狼狽えた。いくら何でも呆気無さすぎる。

だがそれもいいのかもしれないと思った。これを恋と呼べないのなら、一生恋なんて出来ない気がした。

唐突に現れた感情を持て余しながら少女の顔を覗き込む。ビリオンの腕の中で顔を赤く染める少女の顔立ちはやはり整って……否、整いすぎており少々ビリオンを驚かせた。

（傾国の魔女がいたらこんな感じなんだろうな……）

ビリオンも書物でしか読んだことがなかったが、かつてはそのような存在がいたと聞く。もしかして少女がそうなのだろうかと一瞬考え、すぐに頭を振った。少女を表現するのに一番適しているのは傾国の魔女ではない、大戦の英雄たる銀の魔女だ。

「あ、あの」

困惑したように視線を泳がせる少女が口を開く。その声を聞き、ふと大戦の英雄の伝承を思い出した。そういえば銀の魔女は翡翠の瞳ではなかったか。

今腕の中に抱き込んでいる少女の瞳は、深い海の蒼。翡翠ではない。

「……では、この少女は一体。」

「私はビリオンと言うのだけれど、君の名前は？」

疑問を巡らせた次の瞬間、ビリオンは好奇心を隠しもせず尋ねていた。

銀の魔女にも傾国の魔女にも興味がある。だがそれ以上に、少女個人に興味があった。

今のこの機会を逃したら、何も得られない。焦燥感にも似た想いに支配されて放った問いに、少女は一瞬困ったように間を開けてから答えた。

「レイアスティよ。レイアスティ・ブラウ・アルジエント。多分、魔女」

魔女。その響きを聞いた時も別段驚きはしなかった。

銀髪の人間よりも銀髪の魔女の方がしっくり来る。ただ瞳の色からして大戦の英雄ではない事が気がかりだった。何より。

「多分？」

自分を称するのに多分とは何事か。

「覚えてないの。私がどうしてここに居るのかも、何で追われているのかも。……私の方がよっぽど変わってるわ」

不審に思っ眉根を寄せると、レイアスティはそつと苦笑を漏らした。儂げな笑みに、まるで自分が悪いことをしたような気分になる。

「覚えてないって、名前以外？」

「うん。名前と、あと自分が魔女だって言うことは分かるし、スペルも思い出せる。けれど、他のことはさっぱり」

「……そうか」

力なく肩を竦める仕草にビリオンは沈痛な表情を浮かべる。記憶喪失というのもやはり書物でしか見たことがない症例だが、実際に記憶を失った人物に会うとは思ってもよらなかった。ましてやレイア

ステイは記憶のない状態で何者かに追われているのだ。

きつとそれはとても恐ろしかったに違いない。ビリオンは腕に力を籠めてもう一度ぎゅっとレイアステイを抱きしめた。

記憶もなく、身近に自分を知る者もない。それは世界に唯一人取り残されたのと何が違うのだろうか。

そういえば。

「これから行く宛ては？」

フェンネルがレイアステイの見知らぬ土地であったとしたら、これから先どこに行くつもりなのだろうか。

出来ればファルガスタ国内のどこかであってほしいと願っている
と、レイアステイはふるふると首を振った。

「……ないわ。まずは記憶を取り戻さなきゃいけないけど……いいえ、その前に精霊達から逃げなきゃ」

「精霊？」

「先刻私達を攻撃してきた奴らよ。風を放ったのはエイミーという精霊みたい」

「成程……」

(術者ではなく精霊だったのか……だが、何故精霊が人間の街に?)
普段は見えも感じられもしない精霊達は、世界を支える存在だとされている。彼等は人間達の前に姿を現すことはなく、人間界に干渉することもない。だというのに何故このような所へ。

分からない。様々な疑問に埋め尽くされる思考の中ビリオンは溜息を漏らし、腕の中のレイアステイを見やる。今にも消滅してしま
いそうな儂い表情に、まるで華月のようだと思った。

夜空に浮かぶ、双子月のうちの妹月。

姉の花月よりも光はささやかだが、古来より美しさの象徴として讃えられてきた月だ。レイアステイはまさしく華月と言われるに相
応しい顔立ちをしていた。顔立ちだけではなく、心までも美しく
ビリオンには映る。

(……手放したくない)

「レイアステイ」

決断に、逡巡は一切なかった。

「行く宛てがないなら私の所に来るといい」

放った言葉は、自分でも驚くほどに自然に出てきた。

(私には君が必要なんだ、レイアステイ)

ただ、その言葉だけは胸の裡にそつと仕舞い込んでおく。口にすることは、それはあまりに重すぎた。

ビリオンにとってそれは愛を告白するのと同義でもあったのだから。

「いいの？」

「君さえ良ければね」

無論、そのような感情をレイアステイは知らない。だからきよとんとした顔を浮かべる魔女にビリオンは優しく頷いた。自身が抱え始めた深く強い気持ちを悟らせない様に、真綿に包むような穏やかさで笑んだ。

その時。

「おやまあ、よかつたじゃないか。だけど真名を明かすのは関心しないね。小娘、あなたまさか真名の意味まで忘れたんじゃない？」

「笑い事じゃありませんわ、アマンティ。どこの誰かも知らぬ男にレイアステイ様の真名が知られるなんて！」

「っ！？」

頭上から唐突に現れた声に二人してぱつと顔を上げる。慌てて離れようとするレイアステイの体を無理矢理繋ぎ止め、そこに顕現した精霊を睨みつけた。

「先刻からレイアステイを追っていたのは貴方達か」

土塊と石片で構成された女体がビリオンの問いに頷くように高らかに笑う。その隣では渦巻く風で構成されたこれもまた女体が「そうですね」と頷く。見て分かる通り、大地の精霊と風の精霊だろう。

二つの元素を持つ精霊はビリオンを見下ろし、敵意を顕にする。

その理由は先刻口にしていた真名に起因するものだろう。

(そういえば聞いたことがあるな……。確か魔女や魔導士は全ての名を明かしてはいけないのだと)

名は体を表すというように、真名は魔女や魔導士を縛り付ける。どのような方法を取るのかは知らないが、ある手順を踏みなおかつ真名を知ってさえいれば魔女や魔導士を従属させることが出来るのだと聞いたことがある。恐らくはそれを危惧しているのだろう。

「彼女の名を悪用するつもりなどない」

「ふん、どうだかね。真名の意味を知る人間など、危険分子そのものじゃないか」

自分の考えを確かめるために口にした言葉で墓穴を掘ってしまったようだ。ビリオンは内心で舌打ちしつつどうレイアステイを守ればいいのかと考えを巡らせた。

その様子を眺めながら、ふとエイミーが怪訝そうな声を上げる。

「そういえばその髪……貴方、もしかして」

レイアステイを庇うように前に出るビリオンを見てエイミーが首を傾げる。その視線は一身に髪へと注がれていた。居心地が悪く身動きすると、そこでようやく気付いたというようにアマンティが薄茶けた目を丸くする。

「ふふ、成程ね。随分と稀有な人間に懐いてしまったものだね。

ガラナ！ マーグリス！」

怒鳴りつけるような声に身を硬くする。その刹那、アマンティとエイミーの背後に二つの影が顕現した。

熱波と、それを打ち消すだけの冷たさが肌を打つ。

「炎と、水……？」

大地に風に、炎に水。これではまるで。

(世界を構成する四大元素全てが顕現していることになるじゃないか！)

「左様」

驚愕に漏らした声に律儀に返す声は、熱波を放つ精霊から発せられた。

炎を纏い帯剣した精霊は夕日に溶け込むように見えた。

だが、驚愕はこれだけに留まらなかった。炎の精霊から随分と離れた距離に立ち、水を滴らせる水の精霊が穏やかに放った一言がビリオンの思考を止めた。

「こちらは炎の精霊王ガラナ。そして私は水の精霊王マーグリスです。以後お見知りおきを」

「別に知ってもらう必要はないだろう。あたくし達精霊王が人間に関わる事なんて滅多にないんだから」

「……精霊王？」

（只の精霊でも十分だというのに、何故精霊王が……）

背後に立つレイアステイに首だけで振り返って視線を送る。だが固く引き結ばれた唇には困惑が表れており、事情を察しているようには見えなかった。

記憶を失い、途方に暮れた魔女を追う四大元素の精霊王。

異常だ。異常としか言いようがない。

本来ならば国を護る皇帝として、精霊王にも魔女にも即刻退場願わなければならぬだろう。

（だが……）

「ビリオン……っ」

「君は契約したくないんだろう？ だったら、少し下がってくれないか？」

焦りを含んだ声にきっぱりと返し、レイアステイと精霊王達の間立つ。その姿をアマンテイが意外そうな顔で見っていたが、気になどしていられなかった。

馬鹿な事をしていると思う。そもそも自分に魔力などないし、戦う事など出来ないのだ。だが、今自分が傷つけば国が乱れると知っ
ていても尚、この場から離れたくはなかった。

「刃向かうか、小僧」

ガラナが好戦的な笑みを浮かべ、剣の柄へと手を伸ばす。それでも怯まなかったのは、自分にとっても不思議なほどだった。

「精霊王相手に刃向かう気などない。だが、嫌がるレイアステイをこのまま見捨てる事も出来ない」

紅と蒼、高熱を孕んだ炎の精霊王を睨み据える。熱波の影響で肌がじりじりと焼けるのを感じたが、足を引くことは出来ない。

「ならばどうする。戦わず、逃げもしないのならば他にすることは無いだろう」

「簡単だ。貴方達に御帰り頂くよう要求するまで」

「我ら精霊王相手に、要求だと？」

「そうだ。私には貴方達を退けるだけの力はない。かといって懇願する事も出来ない。ならば要求するしかないだろう」

自分は皇帝だ。その皇帝が自国内の誰に見られるとも知れない場所まで頭を下げる事は出来ない。仮にするとしても、それは最終手段だ。だからこそ要求という言葉を使ったビリオンに、ガラナは心底おかしそうに身を震わせた。

「ふはは！　ここまでの阿呆も珍しい！　騎士気取りででかい口を叩くと痛い目を見ると教え込んでやるつか」

「それは困るな。第一私の事を知っているなら分かっているのでは？　私は騎士を気取ったことなどこの人生で一度もない」

呵呵と笑うガラナの姿にレイアステイが身動きする。それを視線で制して不敵に笑うと、ガラナはますます可笑しそうに口の端を吊り上げた。

茜色の出会い 後編

「成程。それだけ本気ということか」

何が本気なのかを口にしないでいてくれたのは、ガラナの優しさなのか。

ビリオンは頷き、ひたと見据えた視線を逸らさずガラナの反応を待った。他の精霊王ではなく、何故かガラナの方に視線が行った。あるいは、自分によく似た性質を持っていると本能で察したからかもしれない。

ふむ、と声が落ちる。

「人間にしては良い目をしている。……だが、我らもそう易々と引き下がるわけにはいかぬ。嬢ちゃんには我らの盟主になってもらわなくてはならんからな」

「だから、何で私が盟主にならなくちゃいけないのかって先刻から訊いてるじゃない！」

剣の柄から手を離れたガラナに、ようやくレイアステイが声を上げる。纏っていた黒のワンピースが激昂に揺れる。

心の底から発せられた問いに答えたのはマーグリスだった。

「我がレイアステイ様をお慕いしているからですよ。それ以外に理由などありません」

「これも先刻から言ってるのに、どうして伝わらないかねこの小娘には」

「あ、当たり前じゃない！いきなり知らない精霊から追い回されたら普通嫌になるわよ！」

臆すること無く怒鳴り上げるレイアステイを見て、もしかしたら四大精霊王とは過去に面識があるのではないかとビリオンは推察した。だが過去を示すような言葉を精霊王達が口にしないのが疑問でもある。そもそも、強大な魔力を持つ精霊王であれば魔女一人分の記憶など容易く取り戻せるのではないかと。

(思い出させる事が出来ないのではなく、しないんじゃないか……?)

不意にそんな考えが頭を過ぎる。とすれば、レイアステイの記憶にはそれだけの何かがあるということになる。それが何かは分からなかったが、どの道ビリオンがレイアステイを手放したくないということに変わりはない。

暫し、アマンティとレイアステイの言葉の応酬が続けられる。平和的とも言える喧嘩にどう割って入ったものかと考えていると、エイミーがじつとこちらを見ているのに気がついた。何事かと眉根を寄せると、エイミーは淑女らしい上品な笑みを浮かべる。

その笑みに背筋が凍りついたのは、やはり本能か。

「ともあれ、レイアステイ様とビリオン様の旗色が悪い事。御忘れではありませんわよね？」

くすりと柔らかな笑みと共に降る声も、どこまでも不吉だ。

エイミーが放った言葉にレイアステイがぐつと黙りこむ。その姿に気を良くしたのかエイミーはふわりと地に足を着けた。……足を着けたように見せかけて実は浮いているのだろうが、そこはどうでもいい話だ。

「レイアステイ様。力が欲しくはありませんか？」

つつ、と地面を滑るようにレイアステイの前に立ったエイミーはそう口火を切った。

「力……？」

「はい。そもそも、契約とはそんなに恐ろしいものではありませんのよ？ 私達と契約し使役する力を持つ為に、貴女が盟主になり契約をする必要があるのです」

「……」

甘い声だ、と思った。媚びるのは違うが、相手を丸め込む甘さを持っている。

ビリオンはいざとなったら間に割って入れるように注意深く耳を向けながら、エイミーの言葉の続きを待った。

「レイアステイ様は私達の事を御存知無いかもしれませんが、私達は知っています。その上で貴女と契約したいんです。貴女に使役される事は私達皆の願いですもの」

「……まるで意味が分からないわ。使役されるのが願いだなんて。いくら私が魔女でも精霊王に比べたらちっぽけな存在でしょう？」

「全て承知の上ですわ。それに……」

そこでちらとエイミーの視線がこちらに向けられる。思わず身を硬くすると、くすくすと笑ったエイミーが続けた。

「ビリオン様は貴女の盾になりました。あの柄の悪いガラナを前にしても臆さずに」

「柄が悪いは余計だ」

「あら、だつて本当の事ですもの。貴方とアマンティは口も悪ければ柄も悪いですわ」

「ちよつとエイミー！ 何であたくしまで！」

そこで騒ぎ始めた精霊王達を無視して、レイアステイが問うた。
「……何が言いたいのだ」

恐らく大体の答えは予想していたのだろう。固く結ばれた唇がそれを示しているようだった。

茜色に染め上げられた空へ舞い上がり、エイミーが声を落とす。

「レイアステイ様に力があれば、そもそも誰かを盾にする必要などありません。力が欲しくはありませんか？」

もう一度同じ問いを発する。その問いに対する答えは、重苦しい沈黙だった。

だがビリオンだけは冷静ではいらなかった。これは要するに自分を使つてレイアステイを揺さぶっているだけに過ぎないのだから。「ちよ、ちよつと待ってくれ！ レイアステイ、そんな言葉は聞かなくても」

慌てて声を上げる。その首筋に熱波を感じて思わず口を閉じた。

「小僧は黙っている」

「そうよ、坊やは黙つてな。これはあたくし達にとって大事な事な

んだからね」

「だったら何で私をだしになどするんだ！」

首筋よりも遙かに遠い場所に当てられたガラナの剣は、離れていても鋭い熱を与えてくる。火傷しそうな熱に顔を顰めながらも怒鳴ると、威勢が良いと思われたのがガラナは楽しげに笑った。

「要は嫌がらなければいいんだろ？」

「だからといって！」

こんなやり方は卑怯だ。そんな意味を籠めて睨みを利かせると、ガラナは一瞬笑みを崩した。

「それに、小僧の事を抜きにしても嬢ちゃんの保身の為に力は必要だ」

「……………」

その仕草も卑怯だ、内心で呟きビリオンは口を噤んだ。

記憶喪失の魔女。仮にビリオンが保護した所で、レイアステイの身が絶対に安全だとは言い切れない。その時己の身を守る術を持っていた方がいいという考えには、反対の余地がなかった。

黙りこんだビリオンをレイアステイが見据える。不安げな瞳に大丈夫だよと微笑むと、一瞬見開かれた蒼の瞳が決意の色を帯びた。

その決意の色に、ビリオンは思わず喜んだ自分を嫌悪した。

「分かったわ。契約します」

ぴんと背筋を伸ばし、四大精霊王をそれぞれ見渡してレイアステイが高らかに宣言する。

「決まりですわね」

芯の通った強い声が響くと四大精霊王は不敵に微笑み、その場に結界を張っていく。

もう後戻りは出来ない状況で、それでもレイアステイはビリオンを見て頬を綻ばせる。

安心させるような笑みにビリオンも唇で弧を描く。

レイアステイが自分の事を想って契約をしようとしてくれている。その事実がビリオンを喜ばせた。

だが同時に悲しくもあつた。

自分のせいでレイアステイが望まぬ道を選んだのではないかという不安と、自分では全てを守れないという事実がどこまでも苦しかった。

契約を終え、ぐったりとしたレイアステイを休ませるためピリオンは南地区にある高台を目指した。いつかとある貴族宅を訪れた際、その辺りに休憩用の椅子があつたことを思い出したのだ。

斜面がきつめの坂道を登ると、沈みきっていない夕焼けが城下を照らしていた。

自分と同じ紅を抱く首都。それはまるで炎に包まれているようで、幼い頃怯えてしまったことを思い出す。

眉根を寄せ、隣に並ぶレイアステイを見やる。するとレイアステイはまるで怯えた様子を見せず「わぁ」と歓声を上げた。輝く表情に視線が釘付けになる。

「綺麗ね……」

「そうかな」

うつとりとした声に、しかしピリオンは苦笑を浮かべた。彼の目には、御世辞にも城下が美しくは見えなかったのだ。

文字通り血で血を洗った百年戦争の痛手から、国土も民も未だ立ち直れてはいない。道は舗装されているとは言い難く、罅割れ、薄汚れていた。耳を打つ喧騒さえ、どこか空々しい。それでもレイアステイはしっかりと頷いた。夕日と混じり合う蒼の瞳が熱を帯びる。

「綺麗よ。貴方の髪や瞳と同じ色ね」

ゆっくりと噛み締めるように語られる言葉に、息を呑む。

高台に立っているせいか、風が強く吹き抜ける。あるいは先刻出会ったエイミーが吹いているのかと思わせる風に目を細めると、髪

を乱すように風に靡かせながらレイアステイは鮮やかに笑んだ。

「この国は、きつともつと豊かになるわ。そうしたら更に綺麗に映るんでしょっね」

軽やかな声に息を詰める。

(綺麗だ)

昼夜を問わず輝いているのである。銀髪も、芯の強さを感じさせる蒼の瞳も、そして何より信頼を持って向けられた笑顔が美しかった。それこそ、今すぐにも攫いたくなるような。

お互いまだ出会ったばかりなのに、どうしてレイアステイは自分を信じ、自分はレイアステイに惹かれるのだろうか。

考えながらまじまじとレイアステイを見つめると、彼女は「何?」とはにかむように笑った。しかし、素直に想いを口にするわけにはいかずビリオンは別の言葉を紡いだ。

「君は先見の力を持っているなんてこと」

「まさか。そんなものはないわ。……ただ、そう思っただけ」

豊かな国。それは皇帝も民も等しく願う国の形だ。

百年戦争で全てを失った国土と民が切望してやまない、けれども一朝一夕には手に入れないもの。

それを手にすることができるとレイアステイは言う。大戦の英雄、救世主とも言われる魔女に似た立ち姿で。

(いや、救世主だとかそんな事は関係ないか)

銀髪の魔女が口にしたからではない。“レイアステイ”が口にした。それだけで十分すぎる気がした。

(君がそう思ってくれるのなら……)

他の誰でもない。自分にならレイアステイの言葉を実現させる事ができる。

その事実を思い出した瞬間、即座に口にしていた。

「なら、豊かな国にしようか」

「え?」

遠くに聞こえる馬車の音をかき消す強い声にレイアステイが顔を

上げる。夕焼けに染まった頬に笑いかけ、紅と混じり合って紫紺に見える瞳をひたと見据えた。

この国を綺麗だと言ってくれた、豊かになると言ってくれた魔女のためならば、何だっけ出来る気がした。

……あれほど執務室内で皇帝としての自分に疑問を抱いていたのが嘘のように。

何を言われたのか分からず惚けた顔をするレイアステイを見て口の端を吊り上げる。弧を描いて笑みを刻んだ口元が、低く囁くような声を放った。

「このファルガスタを豊かな国にできるのは、今の所私だけだ」

皇帝という存在が必要なファルガスタに、その癖自分は unnecessary だと思っていた。今もそれは変わらない。

だが今ほど皇帝位に就いた事を誇りに思ったことはない。

レイアステイが見たこの国の景色をもっと美しく出来るだけの役目を今自分は掴んでいる。

(彼女が笑顔でいられるように、血が流れた者を見て涙を流さないように。私ならその道を作ることができる)

「……貴方は、誰？」

「先刻も言ったじゃないか。私はビリオンだよ」

「私が言いたいのはそういう事じゃないわ」

ビリオンの言葉にレイアステイが警戒心を滲ませる。

(そんなに怯えなくてもいいのに)

しかしその怯えでさえも嬉しく映った。レイアステイの目に自分は一人の人間として映っていたのだと分かったから。

一歩でも足を踏み出せば逃げられそうな緊張感に苦笑を漏らし、ビリオンは頷いた。

「うん。そうだね」

出来れば、口にしたくはなかった。だが、口にしたいとも思った。レイアステイなら、自分の名や立場を聞いても目を逸らさないでくれるのではないかと、期待してしまっただけだ。

息を吸い込む。体内を巡る息さえもが震えてしまつような錯覚を覚え、ピリオンは内心で苦笑してからゆっくりと言葉を紡いだ。

「私はピリオン。ピリオン・ヴァン・ファルガスタ このファルガスタの現皇帝にして、外見の異質さから炎帝と呼ばれている人間だよ」

生まれてこの方、数えきれないほど口にしたにも関わらず、まるで初めて紡いだかのような心持ちだった。

この名を紡ぐことで得られる相手の反応がこれほど気になる事も初めてだった。

記憶を失つていても皇帝という存在については理解しているのか、レイアステイは目を丸く見開く。軽く開かれた唇から、浅い息が漏れた。だがそこに怯えの色はなく、壁も感じられない。ピリオンはその事に心底安堵しつつ「行く宛てがないのなら」と先刻言った言葉を繰り返した。

「皇城において、レイアステイ」

手を伸ばし、レイアステイが応えるのを待つ。

レイアステイは堂々としたピリオンの姿に、たじろぐように首を振りかけた。さらりと零れた銀髪が紅を吸収する。

「でも私は」

「この国に魔女が皇城を出入してはならないという決まりはないよ。あったとしても、それは私が覆せばいい。記憶や身寄りがなくとも、私が許す」

確かに魔女は畏怖の対象であり、皇族の傍に居るには相応しくないと判断されるだろう。だが、それがどうした。

レイアステイを手放したら、それこそ自分は政務など出来なくなってしまう。

ピリオンにはそう断言することができたのだ。

(やっと見つけたんだ)

自分がこの国を愛するに足る理由。統治する覚悟を。

「ここを君の故郷にすればいい。幸い私には君を養うだけの甲斐性

はあるからね」

故郷という言葉にレイアステイが目を丸くする。心が揺れる様に、もう一押しかなと感じていると力なく溜息をついたレイアステイがほっそりとした指先をおずおずとビリオンのそれに触れさせた。怯えさせないように優しく握り返すと、レイアステイは安堵するように目を細めた。その姿が、どこまでも愛しい。

記憶を失った少女と皇帝。魔女と人間。

相容れない存在だ。そう臣下達は口を揃えて言う事だろう。だが、これだけは譲ることが出来ない。皇帝と知ってもなお手を伸ばし返してくれた魔女を、誰にも譲れるわけがないのだ。

(譲れないなら、守り通せばいいだけの話だ)

その役は自分が買って出ればいいし、そもそも譲る気などない。一切の誇張無しに、ビリオンがレイアステイを守るのは歓びだった。まるで甘言を弄しているようだとは思う。ずるい方法ばかり取っているとも。だがレイアステイを守り通すという決意に偽りは無い。それが通じていればいいと願わずにはいらなかった。

一度、目を閉じる。夕焼けに鮮やかさを増した紅蓮が一度消え、すぐに現れる。芯の通った熱がゆらりと揺れた。

レイアステイはそんなビリオンの様子に首を傾げたが、すぐに浮かべられた柔らかな笑みに釣られて笑い返した。

「行こうか」

「……うん」

小さな頷きに痺れるような歓びが広がる。ビリオンはレイアステイの歩幅に合わせて歩きながら、自分が持っていた外套を被せてやった。

「皇城に着くまで、それで髪を隠すといい。君の髪は少し変わった色をしているから」

「ビリオンは？」

「私はいいよ。この姿を見て誰かが迎えに来てくれるかもしれないし」

北地区に戻るまでは南北を繋げるヴェルナー通りを歩くのが一番早い。だが大通りを歩くにはレイアステイの姿は些か目立ち過ぎた。その点自分ならばまだ炎帝と知られるだけで済む。

全身黒に包まれたビリオンと、同じく黒のワンピースを纏うレイアステイはまるで葬式の帰りであるかのような不吉さを撒き散らせながらヴェルナー通りを北上していく。二人とも殆ど会話をせずに歩いていたので、道行く民が不審そうな顔をしながらも頭を下げていた。

きっと明日になれば首都中に噂が広まるだろう　炎帝が見知らぬ女と連れ立って歩いていたらと。

（私達はどういう関係に見えるのだろうか）

出来れば恋人同士であってほしい。

笑みと共に思考を巡らせながら、中心部を抜けて北地区の入り口へと足を踏み入れる。

「ねえ、ビリオン」

その時不意にレイアステイの声が耳朵を打ち、ビリオンは慌てて思考をかき消した。

「？　どうした。もしかして歩くのが早かった？」

「うっん、そうじゃないわ。丁度いいから大丈夫。……皇城に着く前に言っておきたいことが思い浮かんだだけだから」

外套に包まれ銀髪を隠す立ち姿に不安気に問いかけると、レイアステイは即座に否定した。

「私ね」

それから少しの間を空けて、柔らかな声で続ける。

「目を開けた時、本当はこの国が怖かったの。全然知らない景色だし、とにかく寒いし、よく分からないけど精霊達には追われるし。それに、思い出そうとしても名前以外何も思い出せなかったから」

それは誰だって同じだろう。そう思いビリオンは頷いた。

「君の感覚は至って正常だよ。……私だって、似たような目に遭えばこの国が怖くなる」

レイアステイがどこから来たかは知らないが、そもそも言葉が通じた事が奇跡なのではないかとさえ思えてしまうほどだ。この国に銀髪の魔女など、唯一人しか存在しない。そして彼女がその魔女でないということは、伝承に出てくる魔女の風貌からして明らかだった。となれば、彼女はモーリス大陸の人間でない可能性も出てくる。下手をすれば、言葉が通じなかった可能性だってあるのだ。

「本当に散々だったわ。こんな目に遭わせた元凶に攻撃スペルを浴びせたいぐらい。でも」

レイアステイの足が止まる。釣られてビリオンが立ち止まると、レイアステイは眼前に聳え立つ皇城を見上げていた。その横顔には小さな笑みが浮かんでいる。

「もしも絶対にこんな目に遭わなきゃいけないんだったら、ここで良かった」

「ここって、フェンネルの事？」

ビリオンの問いに「うん」と頷く横顔は輝くほどに明るくて、ビリオンまでも嬉しくなった。

今までも、そしてこれからも統治していく国を褒められた気分になつたからだ。

だがレイアステイが言いたいことはそれだけではなかったらしい。皇城に向けて今後への不安を覗かせながらも放つ凜とした声に、ビリオンは鼓動が早くなった。

「それから、一番最初に出会ったのがビリオンで良かった」

早まる鼓動に合わせて耳元までもが熱くなる。

(どうしてそういう事をさらりと言うかな……この娘は)

ビリオンと名で呼ばれる事が、自分を一人の人間として見てくれる事が、どれだけ自分を喜ばせているか。

そして自分がどれだけレイアステイに心奪われているか、本人は知らないに違いない。知らないからこそ無邪気にこんな事を言えるのだ。

たった一瞬とも言えるような時間で恋に落ちた男の事など、まだ

レイアステイには告げられない。告げてしまったら今にも逃げられてしまいそうで怖かった。

「ということは、振り回される事確定か……」

「え？」

「何でもないよ。ほら、行こう？」

恐らくこれから、レイアステイの一挙一投足に浮いたり沈んだりさせられることだろう。だがそれでも良いかとビリオンは楽観的に考えることにした。

レイアステイさえ傍にいてくれれば、自分は頑張れる。

不思議そうに声を上げるレイアステイに笑って誤魔化し、銀髪を隠す外套を取り払う。そうして二人して一度皇城を見上げた。

高く聳え立つ城は魔窟とも呼べる不吉な場所。しかし、今は怖くなかった。

かくして、記憶を失った魔女とその魔女に恋した皇帝は御世辞にも居心地の良いとは言えない皇城へと足を踏み入れた。

若き皇帝を操らんとする奸臣や西の大国の脅威、そして魔女の記憶に皇帝の恋。ビリオンの前に問題は山積みだ。

それでも何故かビリオンは嬉しそうに、楽しそうに足を踏み出す。握った手を決して離さず、縋らず、ただ前だけに。その隣を、レイアステイは困ったように慌てたように追いながら、ぎゅっと手を握り返した。

「へ、陛下……その御方は？」

「銀髪　　もしや大戦の英雄!？」

歩けば歩くほど驚嘆の声を漏らす家臣達が付いて歩く。そうして魔女だ英雄だと言われレイアステイが困惑の瞳を向けた所でビリオンは立ち止まった。振り返り、誰にも聞こえるように声を張り上げる。

「彼女は華月の魔女レイアステイだ！ 大戦の英雄ではない！ これから皇城に住まわせるから、決して粗相のないように。これは勅命だ」

見れば、重臣が多く集っている。「丁度良い事だ」レイアステイしか聞こえないように呟いたビリオンは悪戯めいた笑みを浮かべた。「これで誰も君に手が出せない」

出せないどころか、出させないというのが正しいのだろうかそれは誰も口にしない。いくら若くて経験不足でも皇帝は皇帝。そう易々と歯向かえる者などいないのだ。

それを察知したのだろう。レイアステイが胡乱気にビリオンを一瞥した。

「ビリオンって意外と……」

「ん？ どうしたの？」

「……何でもないわ」

レイアステイに見せる優しく穏やかな姿とは違う何かを、きつとビリオンは持っている。そう感じたものの結局何も言わなかったのは、レイアステイが全面的にビリオンを信頼していたからだだった。

持つ色と同じく激しいものを孕んでいたとしても、それでも良いのだとレイアステイは胸中で独りごちる。

「これからよろしく、レイアステイ」

「こちらこそお世話になります。ところで、華月の魔女って何かしら」

「君の二つ名だよ。似合うだろう？ 華月っていうのは美しさの象徴なんだよ」

「っ 分不相応だわ」

「そうかな？ とても似合っているよ」

一歩後退るレイアステイを逃がすまいとビリオンがしっかりと腕を掴む。そうしてくつくつと低く笑いながら、満面の笑みを浮かべた。

「この国はきつと豊かになるよ。私が作り上げる。だから、見てい

てくれないか？」

自分よりも遙かに年上だというのにどこか幼く見える笑み。だが皇帝位に立つビリオンがそのような表情を浮かべる事は普段出来ないのだからという事をレイアステイは理解していた。だからこそ、覚悟を決めた顔で頷く。

「ええ、ちゃんと見ているわ」

(それに、辛くなったら私も貴方を支えるから)

出来る事などほぼ無いに等しい。それでもビリオンの為に何かをしたかった。

きつぱりとした物言いにビリオンが更に笑みを深める。指先が絡まり、しっかりと手が繋がれた。

「今日からここが君の故郷だ」

低い声に小さく頷く。

故郷。もう今は記憶の中から消えてしまったものを再び与えられて、レイアステイは歓喜に似た想いを抱いてビリオンに笑いかけた。「例え記憶が戻っても、ビリオンの居るこの国が私の還る場所だわ」

その後について、歴史書は何も語らない。

残るのは、戦の傷跡に苦しむファルガスタを繁栄へと導いた若き皇帝の名のみである。

皇城地下書庫には彼の隣に並ぶ後の話が書かれているものが存在するが、その書物にもレイアステイの名は語られてはいない。

唯一度だけ「魔女の狂宴」と呼ばれる事件で銀髪の魔女の存在が語られるが、それ以外にはまるで魔女の存在は記されていないかった。子孫も誰も語らない、銀髪の魔女の存在。

だが。

「あれで良かったんだよ」

「あら、アマンティったら薄情なのね」

土と岩で形成されたアマンティがさつぱりとした声を上げると、風に包まれたエイミーが呆れたように呟く。

その様子を眺め、水滴を滴らせながらマーグリスが首を傾げた。

「エイミーはそう思われるのですか？」

「当然ですわ。だってレイアステイ様の事が忘れ去られるなんて悲しすぎます。大体唯一残っている情報だって悪質なんですもの」

ぷりぷりとして怒る様には、しかし憐憫は感じられない。そのような情をレイアステイが望んでいない事を知っているかのようだ。そしてそんなレイアステイの想いを察したように、遠く離れた場所からガラナが言葉を紡いだ。

「どうだかな。俺もアマンティの意見に賛成だ。多分嬢ちゃんは、名を残されるのなんて真つ平御免のはずだ」

（大人しく振舞ってはいたようだが、あれでも短気で面倒臭がりな狭い世界を持った魔女だ。きっと、民の記憶になど残る気は更々ないに違いない）

胸中でガラナが呟くと、アマンティが大口を開けて笑った。恐らくアマンティにも分かっているのだろう。常に喧嘩腰で会話をしていた割に、アマンティとレイアステイは親しかった。

「よく分かっているじゃないか、ガラナ。名前なんて残されたら、それこそあの小娘は舌打ちするよ。あたくしの花を賭けてもいい」

「いりませんわよ。……マーグリスはどうお思い？」

アマンティの言葉にエイミーがびしゃりと返す。同時に問いを發すると、マーグリスが考え込むように瞼を伏せた。

ひんやりとした冷気にガラナは一步遠ざかる。マーグリスの事は嫌いではないが、そもそも属性として相性が悪いのだ。傍にいたら疲弊してしまう。マーグリスも同感なのか、遠ざかるガラナに文句は言わず穏やかに笑んだ。

「契約者としては遺憾ですけど、ガラナとアマンティの意見にも頷けますね。それに、僕としてはどちらでも良いのです」

人間達が聞こうものなら、どうでも良いのだと取られてしまいか

ねない言葉にしかしエイミーはあっさりと頷く。マーグリスが言いたいのは、どうでも良いということではないのだとこの場に居る全ての者が承知している。

「確かにそうですね。癩ですけれど認めますわ。私もマーグリスに賛成です」

「……何であたくしとガラナの意見は無視でマーグリスなら賛成なのさ」

「人徳の差だろう」

「どこが！ というかあんた自分で人徳がないことを認めてどうするのさ！ 仮にも気高き精霊王だろう！」

「エイミーとマーグリス相手に弁論を振るう度胸は俺にはない。あの小僧じゃあるまいし」

だが、あっさりと頷くエイミーの姿に釈然としないものを感じるのかアマンティが声を荒げる。こちらは属性の相性が正反対とは言え近づけないほどではないらしいが、気性が合わないのが難点だ。笑ってやり過ぎすマーグリスに溜息を漏らしガラナが言葉少なに理由を述べると、アマンティは噛み付くように土片を零した。

気性の激しさはこの中で一番レイアステイに似ている。だがそれを口にするより先にアマンティが口を閉ざした。小僧、という言葉に反応したのだと数瞬遅れて気付く。

「……短い生だったね」

ぼつり、呟かれる声には憐憫の響きが籠められていた。

「ああ。本当に、短かった」

代わりにガラナは至って冷静な声で返す。

（人の世は本当に短い。……嬢ちゃんはこれで良かったんだろうか）その癖心の中では湿り気のある呟きを漏らした。

人間の生は長くとも百年余り。だが魔女はそれよりも遥かに長寿だ。それこそ永遠と呼ばれるほどの年月を生きなければならぬ。

残す者と残される者。一体どちらが幸せなのだろうか。ガラナには全く想像が出来なかった。ただ、一つだけ結論を述べるなら。

「まあ、どちらでも良いというのは頷けるな」

ガラナの言葉におや？ とマーグリスが目を細める。何でも極端な方向に片づけたがるガラナにしては珍しい事だと思ったのだろう。ガラナとしても不思議に思っている。

だが、人の記憶に刻まれるかどうかなど本当にどうでもいい話だった。レイアステイは望まないだろうが、彼女ならば記憶に残ったに残ったで嫌な顔を一つして終わりそうだ。あの魔女は自分にとって大切な物さえ胸の中になれば、それでいいのだ。だから、と胸中で付け足し呟く。

「幸せでいてくれたのならば、それでいい」

例えどんな結末であろうとも。

ガラナの言葉の先に続いた言葉が誰のものか、精霊王達は気にしなかった。

魔女の狂宴。その事件でレイアステイが最果ての島へと姿を消した事を知る者は少ない。だが知られてはならぬのだから、詳しい情報など残らなくて良かったのだ。残された銀髪の魔女の処刑の情報として残されたくはなかっただろうが、例え汚名を被ることになっても構わぬとレイアステイは言ったのだからビリオンはおるかガラナ達にも否やが言えない。そもそも初めは暴徒に殺されてやるつもりだったのだから、逃げると決めただけでも儲け物だったのだ。

全てはビリオンの為。あの皇帝の為にレイアステイは命を失おうとし、あの皇帝の為に生きる道を選んだ。

ガラナの体から発せられる熱が、ゆらりと陽炎のように揺れる。

己の体を見下ろし、そこに見える紅蓮にガラナは口の端を吊り上げた。

(炎帝、か)

人の世では畏怖の対象となる、炎と血の色。だがガラナはビリオンが持つ色を気に入っていた。

「なかなか見所のある小僧だった」

不遜に言い放つとマーグリスがくすりと笑う。

「貴方が気に入るぐらいです。良い皇帝だったのでしょ」

「皇帝の良し悪しなど知らん。俺が言っているのは、ビリオン・ヴァン・ファルガスタ個人の話だ」

世界で唯一人の炎帝。

彼は初めて出会った魔女　精霊王達の主に手を伸ばし、護った。

例え最終的にレイアステイを手放す事になったとしても、ビリオンは最後までレイアステイを守り通した。襲い来る暴徒に怯えず、レイアステイを逃がす算段を立てられた人間を責める事などガラナには出来ない。そしてそれは他の精霊王達も同様だった。主を守り通した事実。その事実だけで十分すぎるほど精霊王達はビリオンを良い方向に評価する事が出来た。

否、例えそのような事実がなくともガラナはビリオンを見所のある人間だと評しただろうと感じていた。

ビリオンが裡に秘めた熱。あの温度は心地良い。

「ああ、成程。……確かに、善い人間でした」

マーグリスの言葉に、示し合わせることなく四人の目が眼下へと向けられる。

朝焼けに彩られた街は、魔女と皇帝が生きた時よりもなお鮮やかだった。

「良い国だ」

各々姿を消していく中、ガラナが静かに言い放つ。溶ける声に、三人分の同意が得られた気がした。

二人が願った、豊かな国。

今日もファルガスタは、緩やかに活気づいていく。

愚かな姫の初恋とその結末

雨に混じって雪がちらついている。

降りしきるそれらを全身で受け止め、マリエルはテラスに仰向けになってぼんやりと曇天を見上げていた。

感覚は既がない。

手足の痺れもいつしか失われ、頬を打つ水滴が熱いのか冷たいのかさえ分からなかった。

白く淡く、きつとどこまでも冷たい雪。地面に触れると即座に溶ける、か弱さの象徴。

だがマリエルは曇天から降り落ちるそれを見る度に叫びだしたい気持ちになるのだ。

押し潰さないで。埋め尽くしてしまわないで。

雲間から月明かりが落ちる。華やかさよりもささやかな美しさを感じさせるその光に、動くはずのない眉がぴくりと動いた。全身を巡る毒よりも恐怖が打ち勝ったのだと、そう考えると何故だかとても泣きたくなった。けれど仕方がない。

月光と雪。冬の訪れ。それはすべてマリエルを恐怖させるもの。

(だって、あの魔女を思い出してしまう)

西の大国ツヴァイから東の大国ファルガスタへと嫁いでから、いつだって頭を離れることがなかった銀髪の魔女。幼い頃絵本で読んだ救世主と似た立ち姿の、しかし決して同じではない幼い魔女はファルガスタに来てから初めてできた友人だった。

百年に渡る戦争を続けた両国の溝を埋めるために遣わされた自分の二つ名は空。それとは逆の月の名を冠する彼女をその通りの名で呼ぶことはほとんどなかったなど、今更になって思い出した。

両国の平和のため、マリエルはファルガスタ皇帝ビリオンに嫁いだ。

あれから一体何年経っただろう。

思考に靄がかかって思い出すことさえままならない。

分かるのは、もう夫も魔女もいないという事実だけ。

(そしてわたくしが、あの方を愛していたということだけ)

呟く。愛しているという響きに、自分の心だということのに絶望が混じっているのが悲しい。

己の人生の全てを捧げても手に入らなかった者の大きさに、心が何度目かの血を流す。同時に本当に口の端から血が流れ出た。否、流れ出たという表現は正しくない。溢れたのだ。この身のどこから、確実に命を奪うものとして。

「……わたくし、は……死ぬ、のね」

当たり前だ。毒と分かりきっているワインを口にしたのは他ならぬ自分なのだから。

ひゅー、と高い音が喉から漏れる。それを隠すように呟いた声は掠れており、いつも侍女達が褒め称えるような涼やかな響きはまったく感じられなかった。だがそれを気にせず済んだのはこの場に誰もいなかったからだ。

雨や雪に濡れた体を起こす者も、血を流す自分を見て悲鳴を上げる者もない。恐らくはこの命が尽きるまで誰も部屋に入りはしないだろう。

誰が仕組んだことか考えるのは詮無い話だ。

だからマリエルは自分に毒を与えた人物のことを一切考えず、代わりに幼い息子を想った。

ヒューイ・トリニティ・ファルガスタ。

父親から一切の愛情を与えられなかったあの哀れな子どもは、これから一人皇帝への階段を昇るのだ。母の手を借りず、誰にも頼れないまま。死への恐れさえ抱かぬマリエルだったが、そのことだけが申し訳なく、辛かった。

救いといえば自分を殺そうとした者でさえヒューイを殺しはしないだろうという確信ぐらいか。

誰もファルガスタを滅ぼしたくてマリエルを殺すわけではないと、

他ならぬ己が一番よく理解していた。殺されるのは自分がツヴァイ王家の人間だから。ただそれだけの理由でしかないことも。

（だからあの子は大丈夫。わたくしを憎んでいたクレティエン家の者達も、あの子だけは必ず助けてくれる）

雨脚が弱まり、雲間から星の光がちらちら見え隠れする。それがあまりに眩しくて手を伸ばすが、マリエルの手を押し返すように曇天が星を隠した。空と呼ばれた自分を拒絶する数多の星と雲に、しかしほつと安堵の息をついて目を閉じる。これで月明かりも消える。夜空を彩る二つの姉妹月。そのどちらも今は見たくなかった。特に妹の華月は。

（だって、あの魔女を思い出してしまう）

もう一度胸中で咳く。

そのままずると記憶の糸を手繰り寄せるように、懐かしい日々が脳裏をよぎった。

ツヴァイ皇帝は大戦の英雄たる白銀の魔女を困っているという。

その噂の真偽を確かめよという父の命を受け、一人でツヴァイを訪れた時、マリエルは彼国の皇帝に恋をした。

「貴方がツヴァイの空姫か」

鮮やかな紅蓮の髪と瞳。他の誰も持ち得ぬ色を持ち、影で化物だと蔑まれながらも堂々と笑う彼はどこまでも強く真っ直ぐで、父であるツヴァイ王よりも威厳に満ちていた。若く経験の少ない皇帝をツヴァイの民が敬愛する気持ちはこれなのだ、初めて会った瞬間に理解できた。

「はい。貴方が炎帝陛下でいらっしやいますね」

「そうだ。そして貴方の夫となるべき者でもある」

だからマリエルもツヴァイ王女として自尊心を打ち砕かれぬよう、

同じだけの威厳を持って彼を見返した。自分は今この場で祖国の顔なのだ。ここでファルガスタ皇帝に押されてはならないと、本能めいた何かに指摘された結果だった。

必死なまでの一生懸命さで背筋を伸ばす。そんなマリエルに挑戦的な笑みを浮かべ、ビリオンが苛烈な眼差しを向ける。

その時自分は恋に落ちたのだ。この熱くて冷たい炎を孕んだ皇帝に。

そして歓喜した。この方の隣に並べる。他の誰でもない自分だけがと。

今回ファルガスタを訪れた表向きの理由は、マリエルとビリオンの婚儀の打ち合わせをするためだ。これは勿論芝居ではなく、百年戦争を終えてからの両国が取り交わした和平の形。だからツヴァイ王はマリエルに命を下したのだ。

始めは政略結婚など大した意味のないものだと思っていた。

無論、王族として生まれついた以上避けられぬ道ではあるし、幼い頃からファルガスタ皇帝に嫁ぐことは決定されていた。だがそれだけだ。誰と結婚しどこで生きようとそこに愛情など存在せず、ただ義務感だけがあるのだとマリエルはずっと考えていた。そこに来てまさか自分が恋をしてしまったのだ。驚かぬわけがないし、嬉しくないわけがない。義務の中に一片でも愛情が見い出せるのなら、それはとても幸福なことだ。

しかしその歓喜は息つく間もなく絶望に塗り替えられた。

「ただし一つだけ覚えておいてほしい。私は貴方を愛することはできない」

「……え？」

「良き夫となろう。賢帝として国を守り、ツヴァイと協力しあい、決して戦争を起こさせないと約束しよう。だが貴方を愛することは決してない。どうかそれを忘れないでほしい」

ざっくりと何かが心に突き刺さる。

それを冷静に判断しながら目を見開くと、ファルガスタの臣下達

が気まずげに目を逸らすのが見えた。彼らには自分の主が何故そのようなことを言うのか、分かっているのだ。ツヴァイ王女である自分にこれほどのことを言いながら諫められないだけの何かが、そこにはあるのだ。

玉座から動かさずこちらを見据える冷徹なまでに静かな眼差しを受け止める。そしてゆっくりと口にした。

「白銀の魔女でしょう」

銀の魔女、最果ての魔女が救世主。

絵本や物語として誰もが目にしたことのあるその言葉は、かつての百年戦争で力を揮った一人の魔女を指している。マリエルの父であるツヴァイ王が探しているのも同じ魔女だ。身が凍りつくような執着を見せ、妻にと望んでいるツヴァイ王は彼の魔女を見つけたらどうするだろうか。

(きっと、戦になるのでしょうか)

民を犠牲にしても、どれだけの血が流れ大地が疲弊しても王は戦いをやめないだろう。何年も娘をやっているのだ、その程度の予想はできる。そしてそれは今代の王に限らない。かつて白銀の魔女がツヴァイに力を貸した時から、代々の王が彼女を手によつともがいているのだという話は王族内では有名な話だった。

賢王と誉れ高い者も愚王と蔑まれる者も、その一点において同じだ。

同じだけ、狂っている。

自分はどうかだろうか。マリエルはふと己に問いかける。

もし白銀の魔女がいたとして、自分は一体どうするだろう。

答えはない。ないままピリオンの反応をつぶさに観察し、その眉が一瞬跳ね上がったのを見て確信だけを得た。

「さて、何の話かな」

「情報はすでに西のツヴァイにまで及んでおります。ファルガスタ炎帝陛下が銀の魔女を困っていると」

「口さがない者達が流した噂だろう。婚儀前の貴方へ話すのは感心

しないが」

「そうでしょうか。わたくしは陛下を見ていてこの噂が本当だと確信致しましたが」

「何故？」

「大した理由などありませんわ。強いて言うなら女の勘でしょうか」「当てにならないな」

「わたくしもそう思います。ですが今だけは信じます」

呆れ混じりの声に苦笑で返す。そしてすぐさまビリオンを射抜くように見据えた。

「御止めなさい」

つい王女として、他国の皇帝に放つには相応しくない言葉で話したのは何のためであったか。

「父王は白銀の魔女を探しています。わたくしが侍女もつけず一人でこの地を訪れたのはそれを確かめるためなのですから」

だからマリエルが王に告げれば、それは確実に戦の火種となるだろう。

暗にそう含めて放った言葉にビリオンが被っていた猫を放り投げるように顔を顰めた。

「どこから情報が漏れた」

問う声に臣下が一斉に首を振る。青ざめ冷や汗を滝のように流す様を見て、何故誰も皇帝を諫めないのかを理解した。恐ろしいのだ、彼らは。

こちらを見もしないビリオンや臣下を見てそう判断し、黙ったまま成り行きを見守る。するとビリオンはやはりこちらを見ないまま「違う」と口にした。

「彼女は貴方達が探している白銀の魔女ではない」

「では何だと仰いますの？」

「銀の髪を持つだけのただの魔女だ。瞳は海の蒼で、翡翠ではない」
開き直って答える姿に嘘は見られない。けれど、と扇子で口元を隠しマリエルは首を振った。

「瞳の色が違い、白銀の魔女ではないのですね」

「ああ」

「ですが銀の髪を持つているのでしょうか？」

沈黙が落ちる。それを肯定だと見なしてそつと溜息を押し出した。

「残念ですが、仮にわたくしがその事実を口にした所で戦は止められないでしょう」

答えはない。きっとそんなこと分かっているのだと、マリエルは情けなくなつた。

白銀の魔女を囲っているという情報が流れるぐらいなのだ。ツヴァイ王家の情報がファルガスタに流れていないわけがない。白銀の魔女に執着し、その一点に置いてのみ狂気に取り憑かれた哀れで愚かな王の話など、気付かれぬ方がおかしい。その狂気が持つ愛情が故に百年戦争は終わったのだから。

どうすればいいのだろう。マリエルは再び己に問いかける。

父王が望むまま事実を口にする。それが一番適当だろう。

自分はツヴァイ王家の人間だ。王命には逆らえない。

しかしそうすることに抵抗を覚えるのは、これから流される民の血に怯えているせいかもしれない。罪の無い多くの命が王の狂気一つで奪われるのは何にも耐え難いことだった。王はその狂気さえなければ賢く優しい人なのだから。生まれた時から大事に慈しまれ、愛されてきたマリエルはその優しさを身を持って体感している。あの優しい王に血を流す命令などさせたくはなかった。

ちらとビリオンを一瞥する。

彼もまた同じ気持ちを抱いているのだろうかとは分かっていた。

ここでマリエルに疑念を抱かせたまま帰すよりも素直に事実を話す道を選んだ彼の皇帝は賢明だ。だが彼もまた魔女を想う者なのだということもまた、分かっていた。あくまで勘だがこれもきつと間違いないだろう。

(だからきつと、この方はわたくしを殺すわ)

どちらにせよ戦になるというのなら、マリエルを殺して戦を起こ

すだろう。

そうして魔女のことを有耶無耶にして　きっとファルガスタが戦勝国となる。今彼の手の内には魔女がいるのだから。

他の魔女や魔導士とてこのモーリス大陸には存在する。

だが彼らを探し助力を仰ぐ隙を目の前の皇帝は与えないだろう。

だからきつと、負ける。完膚なきまでに叩き潰され、魔女を求める王は多くの民の前で殺され、その首を晒される。飾るように掲げられた首が大地を濡らし尽くしても、愚王と呼ばれる屈辱に塗れても長い時間をかけて衆人環視の中。

指先一つ動かさずこちらを見据える眼差し、冷淡さと苛烈さの入り交じった複雑な光は他国の王女を屠るべきか否かを静かに思案している。それは本能を脅かし心に大きな警鐘を鳴らしたがマリエルは一步も引かず、怯えず同じだけの屈いだ感情で受け止めた。受け止めながらビリオンと同じ冷静さで考えを巡らせる。ファルガスタもツヴァイもビリオンも魔女も父王もマリエルも、誰もが落ち着いて暮らせる道はないのかと。

東西の大国の王は魔女を求めている。

求め、そのために争いを繰り返そうとしている。

(魔女がいなければ)

ツヴァイ王家はかつて白銀の魔女に受けた恩を忘れてはいない。だから今でも白銀の魔女を慕い、敬愛している。そんな自分が魔女を邪魔者扱いする日が来ようとは。苦い感情がこみ上げて思わず笑みを浮かべそうになる。それを必死に引き止め、躊躇うように目を閉じた。

開かれた瞼の先で、夏の高い空の色が凜とした光を放つ。

「魔女はおりませんでした」

扇子で顔を隠しませず真正面から言われ、ビリオンが微かに目を見開く。ただそれだけのことだというのに深い充足感がマリエルの胸を満たした。己の言葉でも彼の心を動かせたのだと、それだけが満足で。

自分がいかに幼く拙い策を出そうとしているかという不安は、その充足感の前に消えていた。

「ファルガスタには魔女と蔑まれるただの人間がいただけだとわたくしは父王に伝えましょう。王家に伝わる肖像画とは似ても似つかぬ醜い女が魔女と呼ばれるのを見たのだと」

「何故貴方がそこまでする」

「無論、ただでとは申しません」

ツヴァイ王家の姫が父である王に背くのだ。かつての敵国の皇帝が訝るのも道理。分かりやすい警戒心に晒され、しかしマリエルは笑みさえ湛えてほっそりとした手をビリオンに向けた。遠く揺れる炎に差し伸べるように。

「代わりにわたくしを生かしこの国の皇妃にしてくださいませ、ファルガスタ炎帝陛下。それが叶うのならわたくしは全てを秘し、貴方に同道します」

魔女のために他国の王女を殺そうと、そんな選択肢を一瞬でもちらつかせるのだ。彼が誰を想っているかなど一目瞭然。それでもマリエルは手を差し伸べ、これが最善の道だと言い聞かせる。外交官や宰相がこの場にいれば卒倒するだろう。こんな幼稚な考えで皇帝に取引を持ちかけようというのだから。だが姫君としての教育しか受けてこなかったマリエルにはこれが限界だった。色で誑かして振り向かせようにも、彼はこちらを見ていないのだ。モーリス大陸一の美姫と呼ばれたこの自分だ。

ビリオンは口を噤み値踏みするようにマリエルを見下ろす。愛情の欠片もないそれに苦笑を向けると、真摯な光に射竦められた。

「分かった、貴方が約を守るなら提案を受け入れよう。どの道貴方との婚儀は避けられぬのだから」

「……それはよう御座いました」

手を下ろす。微かに俯くと、玉座から立ち上がったビリオンがこちらに近づき今度は向こうから手を伸ばした。

少し日に焼けた自分のものとは違う大きな手。だが手を伸ばされ

た意図が分からず困惑して彼の手と顔を交互に見ると小さく笑われてしまった。

「私と貴方はこれから夫婦になって支えあうのだ。握手ぐらいしておくべきだろう」

「あ……」

それは単に魔女を守るために協定を結んだ者同士の誓いの形に過ぎない。だからその誓いが一生ものの大事な関係を築くのだとしても、マリエルは自惚れてはいけないしむしろそこまでの決意を彼にさせた魔女に嫉妬してもいいぐらいだ。だというのに心の臓から湧き上がるのは泣きたくなるほどの幸福だった。彼が自分を妻にしてくれるのだと、そのために手を差し伸べられているのだと分かったから。

冷たくとも己を見ていなくとも、どこまでも鮮烈で眩しい炎。それでも。

(この方以上に惹かれる人なんて、きつといない)

愚かで幼く、駆け引きも何もない純粹な感情。

そのどこまでも己を守る殻のない心を引きずってマリエルは心からの笑みを浮かべ、彼の手に己のそれを重ねあわせた。

ファルガスタ皇妃マリエル・エールデ・ツヴァインベルグ。

この肩書を彼女は一生後悔しない。あの日ビリオンと誓いを交わしたことも。

だからこうして　。

こうして地を這うように忍び寄る死は、自業自得なのだと思うっていた。

「……っ」

痛みはとうに潰え、ただ全身がだるく苦しいという感覚だけが残っている。己はもうじき死ぬのだと、マリエルはその時を今か今か

と待つていた。断罪の時を待つ罪人のように。もつとも、待ち続け
て随分長い時が経ってしまったせいで自分が裁かれる日はもう来な
いのだということには分かつていた。あれだけ自分を裁いてくれるだ
ろうと思つていたあの鮮やかな紅蓮の皇帝は、自分を置いてさつさ
と死んでしまった。

ならば神ならどうだろう。何せ全知全能なのだ。いつ何時でも裁
きを下してくれるだろう。だが生憎マリエルの中にいる愚かで慈悲
のない神は彼女を罰することがないし、彼女自身神になど裁かれる
気はなかった。もし己を断罪する者があるとすれば、それは夫以外
であつてはならなかった。あの時二人で隠すと決めた魔女にさえそ
の資格はないし、認めない。

（結局、あの方はわたくしを見てくださらなかった）

皇妃となつても、体を重ねても、子どもが生まれても駄目だった。
彼の燃えるような炎の中心にはあの凍えるような色を持つ魔女しか
入ることを許されなかったのだから。

記憶を失い、己の出自さえ知らない銀髪の魔女。

ファルガスタ皇帝夫妻の邪魔にならないようにといつだつて離れ
た所で二人を見ていた魔女に、マリエルもすぐに心を奪われいつし
か唯一無二の親友になつていた。彼女がもし側室の位を与えられた
としても許せると思えるほどに。正妃として夫が自分を忘れずに見
ているのなら、魔女を僅かに想う程度は許そうと我ながら驚くほど
の寛容さを見せたほど、マリエルはあの魔女が好きだった。華月。
美しさの象徴たる姉妹月の妹月の名前。それを彼女が与えられてい
ると知つた時もそう驚かずにいられたのはそのためだ。

全てが崩れたのは他ならぬマリエルの落ち度によるものだった。

（だって、あれぐらいで崩れるだなんて思わなかつたんですもの）
ツヴァイ王家の分家、トリスタン家の当主に嫁いだ妹姫が毎日心
細そうにしているという話を聞き、少しでも元気づけようとマリエ
ルはファルガスタでの生活を綴つて手紙を送つていた。嫁ぎ先が他
国であるうとどこであるうと幸せにはなれるのだと、繊細な妹に何

度でも言い聞かせた。……その中に魔女の話を書いてしまったのは、もう大丈夫だろうという慢心と、妹なら決して他言しないだろうという信頼が故だった。

結果、どこからどう漏れたのか妹は父王の前に引き立てられ全てを暴かれることになった。トリスタン家当主　夫の生命を盾に取られ。

そこから全てが壊れてしまった。

約を破った自分にビリオンが向ける眼差し。その凍てつく色から殺意を感じることもままあった。当たり前だ。下手をすれば戦になつていたかもしれないのだから。幸いにしてファルガスタの国力がツヴァイの国力を遙かに凌いでいたから避けられたというだけで、王が冷静でなければ多くの民が血を流していたのだ。あの日、自分が恐れたように。

だが、まさかビリオンがあそこまでするとは思っていなかった。

(月宮　華月の魔女のための後宮)

新たに建てられた後宮の名は大体が皇妃の二つ名から取るという。だから臣も民も誰もが、マリエルでさえそこが空宮と名付けられると思つていた。馬鹿な話だ。約を破り信頼を失った地点で、彼が自分を見捨てることなど分かつていたというのに、心の何処かでまだ信じてしまつていた。一緒に過ごしたあの時の中で自分を想つてくれるようになったのだと、信じていた。そしてその気持ちを踏みこじめるように砕かれた時、マリエルの心も壊れてしまった。

心から敬愛し初恋を捧げた夫が保護したあの魔女を憎むようになったのはいつからだつただろう。今となっては分からない。

おまけに修復不可能な事態が次から次へと襲つてきた。

もう随分と昔に感じられるあの年の冬、魔女の狂宴と呼ばれる伝染病に襲われ多くの民の命が奪われた。狂うように叫び身を擦らせやがて死んでいくあの悪夢にマリエルも立ち会い、ああこの国は滅んでしまうのだと荒んだ気持ちで思つたのを覚えている。そして確実に死に至る病に誰も太刀打ちできぬまま、魔女や魔導士だけが病

にかからぬ事実には煮え湯を飲まされた気分になりながら誰もが解決法を探していたあの冬を境に、魔女や魔導士はこの国から いや、モリス大陸から姿を消した。ただ一人、皇帝が保護した魔女を除いて。だから皇城内の、城下の、国内の狂気をあの魔女は全て一人で請け負った。

氷の魔女。彼女をそう呼び、誰もがその二つ名で彼女を呼ぶようになった後から夫婦仲は更に悪くなった。それも当然といえば当然の成り行きだったが、一人死の恐怖から免れている彼女が羨ましく憎らしくて、どうしてあの子だけがと思うたび怨嗟は口からついて出てきた。ぐるぐると悪循環が狂気と勘気と恪気を生んだ。

その先の、本当の結末をマリエルは知らない。

暴徒が皇城に押しかけ根負けしたビリオンが魔女を手放し、彼女は断首台に上った。そこまでは知っている。

だが嘗めてもらっては困る。

(あれは彼女じゃなかった。あんな、似ても似つかぬ影を代わりに立てるなんて)

棺に眠る彼女に別れぐらいは告げようと深夜地下に下りたマリエルを待っていたのは、銀色に染められた髪を持ったただの人間の少女だった。白粉で無理矢理隠されているものの、その肌には紫色の斑点がいくつも浮かんでいる。魔女の狂宴の被害者だということぐらいそれを見たらすぐに分かった。

そして恐らくは彼女自身が安寧を求めたのだということも。

断首台に上つても楽になることを願ったのだということも。

そういう人間をビリオンが探してきたのだということも瞬時に理解した。

残酷なのかそうでないのか分からなくなるような用意周到さだ。あの魔女が知ったらきつと泣いて怒るに違いない。自分のせいで誰かが血を流すことを、彼女は決して望まなかったから。

だから真実はマリエルには分からない。

魔女が逃げたのか人知れず死んだのか、ビリオンがあの後彼女に

会ったのか。

(いいえ、それはないわ)

魔女が死んだと国中に知れ渡ってからそれほどの時を置かずマリエルの妊娠が発覚した。義務的な触れ合いでも子どもができることを、マリエルはこの時初めて知って驚いたぐらいだ。魔女が消えてから発覚したというのも皮肉な話だが。

ともかくもマリエルを刺激しないよう、臣下はすぐにビリオンを皇城に閉じ込めた。そして何年もろくに外に出られぬまま、自分の子どもともほとんど顔を合わせぬまま、病にかかって死んでしまった。公務の時も騎士が張り付いていたと聞いているから、魔女と会うことは決してなかっただろう。誰もが銀髪の魔女を忌むべきものとして認識していたのだ。会えば何が起こるか分かったものではないし、ビリオンもそれを理解していたはずだ。だからこそ大人しく閉じ込められていたことをマリエルは知っている。

彼の頭の中は本当に魔女のことしかないのだ。

そこには国のことも民のこともマリエルのことも、何もない。

ツヴァイ王と同じ、しかし空恐ろしいほど理性的な狂気が彼を取り巻いていた。

その彼ももういない。

「……っ！」

ごぼ、と喉から血が溢れる。顔を横に背けて吐き出すと黒い血の塊が落ちた。その周りにはいつ吐き出したか覚えていない鮮血がテラスを染めている。鮮やかな赤にビリオンを思い、マリエルはそつと目を閉じる。

(どうしてなのかしら)

自業自得とはいえ酷い目に遭わされた。

初恋は終始実ることを知らず、義務的な触れ合いに心を壊す結果にしかならなかった。唯一の救いは息子のヒューイだったが、父親に愛されなかった子どものことを思うと哀れで泣きたくなくなった。自分が彼に愛されていれば決してそんな寂しい思いはさせなかったの

に。

それなのに、マリエルは今でも思う。

（あの方以上に惹かれる人なんていなかった）

優しい男も意思の強い男も、多く皇城に訪れた。

だがその誰一人としてマリエルの心を動かす者たりえなかった。

愛せた人はいなかった。

ビリオンが魔女を心の中心に据えるようにマリエルもまたビリオンを心の中心に据え、そこから溢れ出てくる愛を全としていたのだ。その位置関係を、結局誰も動かせなかった。ビリオンの心もマリエルの心も全てでは固定されたまま。

（ああ、もう……）

意識が薄れていく。聴覚も視覚も既に途絶えてしまった。

死ぬ前にとマリエルは己の中にいるであろう愚かな慈悲なき神に断罪を願ってしまおうかと考える。だがいつだって自分を見守り諫言もしない神に何を願うのかと内心で苦笑しすぐに諦めた。代わりに紅蓮を持つあの皇帝を思い浮かべる。どちらかと言えば、彼の方が愚かで慈悲なき神に見えなくもないが。

（貴方はきつと、わたくしの最期に現れるのをよしとはしないのでしようけれど）

それでも自分は彼を、彼だけを思い浮かべて死にたい。

彼の妻になれたことを誇り、この国と彼を想う臣下に殺されることに微笑みさえ浮かべ、そして彼自身の愚かさを少しだけ嘲りながら自分は死ぬのだ。

恐らくはまだ生きているであろう長命の魔女のことは思い浮かべなかった。

思い浮かべる資格などないのだ。自分には。

（ビリオン、様）

生前は呼ぶことのなかった名を呼ぶことを今だけは許してください。

そう希い、泥のような眠りに落ちていく。

最期に浮かんだ、握手を求めたビリオンの恋しく慕わしいあの日の笑顔を抱いて。

第四十一話 歡迎式典

華やかにかき鳴らされる管楽の調べがフェンネルの街を軽快に駆け下りていく。

夕焼けに溶け込みながら流れる楽奏に、罅割れた大地の上に建つ首都の輝きが一層華やいだ。

きつと誰もが今日は陽気に酒を呑み交わし、近くに迫る祝い事に想いを馳せるのだろう。

ツヴァイの星姫、ミルヒシュトラレーセの登城。

彼女の歡迎式典に備え練習に練習を重ねる楽団の姿を遠目に見ながら、私は一人冬宮でかの皇帝を待っていた。

「そろそろかしら」

目を凝らして視線を遠くへと向けて呟く。

魔術にも精霊にも頼らず肉眼でのみ見据えた視界の先にはフェンネルが放つ明かりと、柔らかくうねる一本の光が見えた。恐らくはあれが星姫一行だろう。松明を掲げ持ちファルガスタを指す一行の姿は肅々と夕焼けと宵闇の境を切り開き、それだけで儀式めいた風情を漂わせていた。

あの歩みならば皇城へ着くまでにはそう時間はかからないだろう。本来ならば私はここでこうして待つているべきではなかった。ミルヒシュトラレーセやツヴァイの一行が安心して登城できるよう、不安要素でしかない魔女は消えて然るべきなのだから。けれどできなかった。

「こんなに悠長なことではいけないのに」

手の平をぎゅっと握り締め、自分に言い聞かせるようにゆっくりと独りごちる。そう、こんな悠長なことではいつか何もかも手遅れ

になつてしまふというのに。

あの日、ビリオン様とマーグリスが現れた日から六日。

それだけの日数を経たにも関わらず、私は未だ地脈へと足を踏み入れてはいなかった。

ヴァノツサによつて引き止められたこと、それも理由の一つだ。

ただ今回ばかりは彼一人の責任にはできない。

恐怖も死も遠くへ押しやって強固な地盤に見せかけたファルガス
タの地に近付く炎をちらと見下ろす。それを振り切るように体ごと
室内へと向け、暖炉を背に立ち目を閉じる。こうしてはいられな
かった。

意識の集中と共に足元に微かな風が沸き立ち、背後の炎を一際鮮
やかに燃え立たせた。

「エイミー、アマンテイ、ガラナ、マーグリス」

名を呼び、姿を頭に思い描く。そうして腕を胸元まで上げた所で
目を開け、誰もいないはずの空間に確たる自信を持って呼びかけた。
「世界を紡ぐ四大精霊の王達よ。盟主レイアステイの名の元に、今
こそその姿を顕せ」

遜つて懇願するのではなく対等な同盟主として願うのではなく、
有無を言わさぬ声色で命じた声に対する反応は素早かった。

「嫌だねこの子は。そんなに怖い声しなくてもあたくし達は呼ばれ
たらちゃんと来るってまだ分からないのかしら」

「そうですね。それにこんな暗い部屋に御一人でいらっしやるなん
て、炎帝やビーはどうしましたの？ 護衛騎士もいないようですわ
ね」

「あの騎士なら炎帝について式典の準備を手伝っているはずだ。さ
つき皇城を回った時に見かけたからな」

「ほう。レイアステイ様を放つて、ですか。……成程、先日見た時
から態度の悪い騎士だとは思っていましたが、護衛対象を放置して
式典の準備とはいいい御身分ですね」

「元々飾りでつけられた騎士にそこまで期待するのが間違いだ。そ

れにビリオン坊相手に戦えるのは嬢ちゃんぐらいのものだろう」

風が土が炎が水が、この月宮ではないどこから運ばれて精霊達の姿を顕現させる。その光景は人間達では見ることの叶わぬ幻想的な光景だったが、いかんせん騒がしすぎるのが問題だった。どうして四人揃うところも五月蠅いのかしら。

楽奏さえかき消すかしましい声に内心で溜息を吐きつつ、背筋だけはぴしりと伸ばして彼等を睨み据える。

「お喋りは後にして。皆も今日呼ばれた理由ぐらいは分かっているでしょう？」

傍で浮遊するエイミーが放つ風が止む。口を嚙んだ四人は口を引き結んだ難しい表情で私をじっと見つめていた。何もかもを理解しきったその態度に追い討ちをかけるように告げた。

「ヴァノツサの頼みで式典が終わるまではここに留まるけど、その後はすぐに地脈に向かうわ。それについては前にも話したわよね」

あの頑固な炎帝が望んだのは今宵、ミルヒシュトラーセの歓迎式典が終わるまで私がここにいることだ。決して地脈に近付くことを止めているわけではないし、仮に言いたくとも立場が邪魔して言えないだろう。だから今までの五日間足止めを食らったのは決して彼のせいではなかった。問題は、こちらだ。

意識して眦を吊り上げ、四人を順に睨んでいく。けれど彼等は誰一人として気まずそうにすることなく私の視線を受け止めた。

「ええ、あたくし達に異存はないわ。時間がないからね」

「そうよ。今は一刻も早く地脈の状態を見て私の魔術が地脈回復に通用するか確かめなければならぬ。……だからいい加減決めなくちゃならないの。分かる？ 時間がないのよ。この国にもヴァノツサにも、それに私にも」

飄々と頷くアマンティにこちらも激しく同意する。時間がない。

それは誰の上にも平等にある感覚で、いつか来るかもしれない終焉を避けるために必要な危機感だ。だというのにどうして彼等はこうもあっさりと私の意見に賛同しながらこちらの願いを聞き届けては

くれないのか。

聞こえるはずのないツヴァイ一行の足音を胸に深く息を吸い込む。「だから」そのまま叩きつけるように言葉を前に押し出した。

「いい加減意地を張るのはやめて、お願いだから誰かヴァノツサの護衛をして頂戴。でないと話が進まないわ」

本当に話が進まなくて困ってるんだから、誰か一人でも領いてほしいのだけど。

「嫌ですわ」

「僕もエイミーと同意見です」

「嬢ちゃんの頼みでもそれは聞けんな」

「あの炎帝なら少々放つとしても死にゃしないよ」

「どうしてそんなに嫌がるのよ……」

きつぱりと首を振ってあらぬ方向を見始める精霊達に深い溜息を漏らす。

私が地脈に行けない一番の理由。それは他の誰でもない精霊達によってもたらされていた。

何故かは分からないけれど、私が地脈に行く間ヴァノツサの護衛をすることを誰もがよしとしないのだ。普段は大抵の願いを聞き届けてくれる彼等だというのにこれだけは譲れないと、何度頼んでも首を縦に振ってはくれない。

暖炉の炎とガラナの放つ光が室内を昼のように明るく照らす。その中で殊更渋い顔を作ってから説得を続けた。魔女たる私では精霊王を屈服させることなどできないし、する気もない。あくまで彼等の助けによつて契約は成り立っているのだから。

「ヴァノツサは今とても危険な状態なの。誰かが傍についていないと」

近衛騎士でも他の誰でも力が足りない。

ピリオン様に対抗するためには魔女か魔導士、もしくは精霊がついていなければ。

両手を組み合わせて懇願するように言う私にガラナが珍しくも困

った表情を浮かべる。陽炎の中に見える一対の瞳がわずかに細められた。

「ビリオン坊の脅しの話か？　だがな嬢ちゃん、あれは今すぐ小僧をどうこうするという話じゃない」

するとガラナの言葉に賛同するようにエイミーが軽やかに前に躍り出た。風と混じり合った炎が一際強く燃え上がる。

「そうですね。あれはあくまでヴァノツサ帝がレイアステイ様に求婚した時に限られています。でしたら彼は大丈夫でしょう？　だってまだ求婚していませんもの」

「そうかもしれない。……でも私は」

二人の言う通り、ヴァノツサがどんな行動に出てもビリオン様は無関心でいるだろう。否、仮に無関心でいられなかったとしても鷹揚に許すぐらいのことはするに違いない。ただ私を娶るなどと馬鹿なことさえ言わなければ。けれど私はどうしても不安感が拭えなかった。

ビリオン様が嘘をついているなどとは思わない。これは単なる直感だ。だというのに私はこの直感が恐ろしい。

地脈を見に行きたいと思う。ヴァノツサと離れるべきだとも思う。けれど完璧に放置するには不安が強すぎる。結局の所六日も足止めを食らっていたのは私自身の問題でもあるのだ。

きつく手を握りしめて言葉を探す。上手く精霊達を説得させられるいい言葉を見つけれなければ、ヴァノツサを一人置いていくことになってしまうのだ。けれどそんな都合のいい言葉など急に思い浮かぶわけもない。彼等の言うことは至極真つ当だからだ。そもそも彼等は堕ち行く世界のために動いている。決して人間一人の命のためにここまで来ているわけではないのだから。

「小娘の気持ちが一番からないわけじゃないよ」

そうやって黙りこむ私をしばらく見ていて何を思ったのかアマンティが口を開く。憐憫を含んだその声に顔を上げると彼女はガラナのように困った顔をした後で、きつと眦を吊り上げた。その表情に、

これから出てくる言葉はきついものなのだろうと覚悟する。

土塊が破片を撒き散らし横に薙ぐ。炎よりも苛烈な動作の次に出
てきたのは予想通りの厳しい言葉だった。

「だけど忘れちゃいないだろう。あなたやあたくし達精霊が何をす
べきなのか。地脈を癒さないことには坊やだつて生きていられない
のよ。優先順位を間違えないことだね」

「……」

「ビリオン坊やのことならあたくし達じゃなくても他の精霊達に警
戒させるし、何の問題もないんだ。小娘がそこまで気にすることじ
やなくつてよ」

そうだろうか。胸中で呟き、あっさりと首を振る。アマンティが
言うならそうなのだろう。

私よりも世界に詳しい精霊達は王への伝達に人間ほどの時間をか
けない。地脈に流れる魔力や他の精霊達の力で瞬時にビリオン様の
動向を探ってくれるに違いない。頼まれていないこと以外には無頓
着な存在だが、一度頼めば従順なまでに情報をもたらしてくれるの
が精霊だ。そこに疑う余地などないし、疑う気もない。……ただ。

肌を打つアマンティの言葉にとりあえずは肩の力を抜く。意識し
て解いた緊張に四人がほつと安堵の息を漏らした気がした。

ほんのりと温かな空気が漂う。きっと彼等の胸中ではやっとこの
我儘な魔女を説き伏せられたと思っっているに違いない。それは間違
いではないし、これ以上彼等を説得できる自信も時間もなかった。
けれどこれだけは訊いておきたい。

常ならば私の意志を尊重してくれる精霊達の強い拒絶と、あえて
厳しいことを言うアマンティの態度が気になって仕方がなかった。

「貴方達がそれほど頑なになるほどの何かが地脈にあるのかしら」
弛緩した空気に相応しい刺のない声で、杭を打ち込むような言葉
を送り込む。瞬間空気が音を立てて固まり、一番正直なアマンティ
が勢いよくこちらに視線を走らせた。

驚愕を滲ませた目の色が肯定を映し出す。それに納得して一つ頷

くとエイミーが腰に手を当ててアマンティを睨めつけた。……その態度も肯定を後押ししているのだけれど、そこまで言うのは酷だろうからやめておく。代わりに今度こそ本当に肩の力を抜いた。

「分かったわ。今回は貴方達に従います」

何かあるのかは分からない。訊いても今は答えてくれないだろう。けれど彼等が断固として私との同行を主張する以上、そこにあるものは精霊達でさえ危惧する何かなのだ。ならばここは一介の魔女である私の判断よりも彼等の判断を受け入れた方がよさそうだった。目を丸くする四人を順に見渡し「だけど」と続ける。

「ヴァノツサに何かあった時には必ず助けてあげて。彼には魔導士と戦う術がないし、私が間に合うとも限らないわ」

護衛として常に置くことは叶わなくともこれだけは譲れない。

ありったけの力を籠めて見据えて言い放つと、四人はそこに不満はないらしく文句は出なかった。

管弦の調べがより鮮やかに城内を駆け巡る。その中で四人を代表するようにマーグリスが口を開いた。

「精霊から報告を受け次第すぐに炎帝の元に向かうとお約束致しましょう。それで、出立はやはり今夜ですか？」

「勿論よ。本当は今すぐでも構わないのだけれど」

そんな事をするその後でヴァノツサに何を言われるか分かったものではない。溜め息混じりに首を振ってみせるとマーグリスが小さく笑った。熱源に囲まれているというのに辛さを全く感じさせない涼やかな口元が笑みを刻む。

「余程気に入っただけじゃないっしょるようですね」

誰が、誰を。

主語のない指摘に一瞬そんな問いが浮かんだけれど、あえて口にはせず「どうかしら」とだけ返しておく。そこに誰の名が入っても安易に答えるべきではない。

楽奏に混じって遠くで猫の鳴き声がある。それから鎧が揺れる甲高い音も。その囁かな音だけでリズムとビーがこちらに向かっている

ことが分かる。足音が一つ多いのはヴァノッサがいるからだろうか？
「あちらはあちらで随分と気に入ったようですね」

……これも主語は問わない方がいいんだろう、きつと。誰が当てはまっても各方面から文句を言われそうだ。

肩を竦める。その時には既に四人の姿は消えていた。先程まで感じていた濃密な魔力が掻き消え、急にぽつんと一人ぼっちになったことを実感して不安になった。精霊達との会話の後はいつもそうだから、今更気にすることはないのだけれど。

窓を開け、冷えた風で室内に満ちた。全身を撫でる空気の冷たさに肌が粟立つけれど、今はこうして頭を冷やして静寂に浸っていたかった。この部屋でこうして穏やかに過ごすのは今宵限りでしばらく御預けになるのだから。……願わくば最後であればいいと願わなくてもないけれど、ヴァノッサの言い分だと無理なのだろう。あの様子では皇妃の部屋は別に用意しそうだわ。

足音が近づき、止まる。扉の前に立つ気配に「どうぞ」と声を掛けると予想した通りの姿が目飛び込んできた。分かってはいたけれどその姿に安堵し、安堵した自分に驚愕した。これではまるで一人を恐れていたみたいではないかと。

動きを止めたままのリスをそのままにビーとヴァノッサが部屋に足を踏み入ると扉が閉められる。暗がりに鈍く映る紅蓮の瞳が私と同じく安堵を湛えて細められた。もっとも安堵の種類は別なのだろうけれど。

「来るのが遅れたから貴女が怒って消えてしまったらどうしようかと思っていたが、まだいてくれたようだな」

「引き止めたのは貴方でしょう。それにその台詞は昨日も聞きました」

「この夜を前に貴女が消えてしまつては困るからな」

駆け寄るビーを抱き上げてヴァノッサの目を見返すと、彼はやや蒼白な顔でそれでも嫣然と笑った。体から緊張感をこそぎ落とした姿はこちらが不安に思うほどの疲労を漂わせていたが、案じる言葉

は彼自身が発した言葉で押し留められてしまった。

「この部屋に貴女がいるのを見る度に帰ってきたのだと思える」

部屋自体にその感想を抱くのならヴァノツサの言葉に賛同したい所だけれど、生憎彼はそんな意味で言ったわけじゃないだろう。それが分かっていたから洗面を貼りつけた顔を向けてやる。

「貴方が帰るべき場所はここではありませんよ、ヴァノツサ」

「そう釣れないことを言うな。今日のために散々身を磨り減らしたんだ。少しは労ってくれてもいいだろう。まあ、ここに残ってくれているだけでも十分だが」

くつくつと笑う顔からは次第に青さが消えていき、ようやくこちらが心配しなくてもよい顔色になる。少なくとも式典用にと纏っている純白の服やマントよりは血色がいい。この様子ならそう気に留める事もないだろう。……疲労を回復するスペルぐらいは唱えておくべきかもしれないが。

「歓迎式典があるからですか？ 別に私などいなくてもいいでしょうに。ミルヒシュトラ―セ様も望んではいらつしやいせんよ」

ミルヒシュトラ―セだけでは足りない。多くの臣下は私がいる事を望んではないだろう。

眩しい程の純白から目を逸らし、暖炉の傍に立つヴァノツサに溜息を漏らす。「駄目だ」だが彼は私の憂慮などまるで意に介さず首を振った。

「外出なら明日にしる、今日だけは認めん。いや、仮に今日出るとしてもせめてツヴァイの姫との謁見が終わるまでは皇城にいてくれ」

「ではせめて書庫に」

「言い方が悪かったか。皇城じゃない、俺の傍にいてほしいんだ」はつとする程真摯な声だった。慌ててヴァノツサを見ると、熱を孕んだ真つ直ぐな眼差しに射抜かれそうになる。その目が、眼差しが、声が、私が彼の隣にすることを許さないと告げているようだった。けれどそれを許し、受け入れていいとは思えない。私は背筋を伸ばし、彼と対等である事ができるように凜とした声を放つ。

「貴方のその馬鹿げた頼みがどれだけミルヒシュトラーセ様と臣下達を刺激するか、いい加減に理解したらいかがです」

「刺激ならいくらでもしてやればいい。貴女を隣に置くことに文句は言わせん」

だがヴァノツサとてこんな問答には慣れている。私がどれだけ言おうと引く気はないだろう。

もっとも、精霊王相手とは違い優位はこちらにある。だというのに私は毎回この強い声に負けそうになる。そうでなければ北の孤島からわざわざ出てきたりはしなかっただろうけれど。

ヴァノツサの声が強いのは、その言葉に偽りがなければ。偽ればたちまちのうちに瞳に糖度が増し、強さは甘さへと変わるだろう。かといってリズや他の臣下に見せる声とも違うのは、彼は私に命令などできないと知っているからだ。だからこんなに真摯になれる。それこそ質が悪い程に。

「お願いですヴァノツサ。これ以上不用意な行動も発言も控えてください。でないと」

反論が弱くなる。その情けなさに辟易しているとヴァノツサが怪訝そうに眉根を寄せた。

「でない、何だ」

問いかけに答えるべきか否か、一瞬悩んだ。

けれどこれは私だけの問題ではないと思ったから、結局は伝える事にした。

「……ビリオン様が貴方の命を奪おうと動き出す可能性があります。それだけは避けなくてはなりません」

「俺が貴女を隣に置くのと初代が俺の命を狙うのと何の関係がある」「あんたが誰と結婚しようとするでもいいけど、レイアを娶るって言ったら殺すってさ。あれ脅しじゃないよ、絶対」

命を奪うという言葉に対してあまりにも淡白に問うヴァノツサに答えたのは腕の中にあるビーだった。金色の瞳が真剣味を帯びる。それはヴァノツサを案じているというよりは牽制しているような色

を帯びていたけれど、ヴァノツサはやはり気にした風もなく頷いた。
「成程、そういうことか。……まあ、まず間違はなく本気だろうな。
初代ならやりかねん」

冷静すぎる態度は気に掛かるが、ビリオン様に何度も命を狙われているだけに理解は早いようだ。

「ようやく御理解頂けたようですね」

私はほっと息をつき小さく笑い、そして凍りついた。

「ああ、よく分かった。要するに娶ると言わなければいいだけの話
だろう」

何だかその台詞、つい先程も聞いたような。あれはエイミーだったかしら。

「……ヴァノツサ、これは言葉遊びじゃないんですよ」

否、言葉遊びに近いものはあるのかもしれない。ビリオン様はヴァノツサが私を娶ると言えばと話していた。ならばそう言いさえしなければ何ら問題はない。……当面は。けれどそれはいつまでも続く保証ではないのだ。

ビリオン様は私が共にいる事を望んでいる。

それは、いつまでもファルガスタに留まる事をよしとはしないと
いう意味だ。

ヴァノツサが真実私を娶るつもりなどないのなら、それはそれで
万々歳だ。ただ、いつまでも隣に立たせる心づもりでいるのならそ
れは困る。いつビリオン様が痺れを切らすかなど、誰にも分からな
いというのに。

苦いものを呑みこんで口を引き結ぶ。するとヴァノツサは何故か
嬉しそうに首を傾げた。

「俺の身を案じてくれているのか、レイアステイ」

自分が殺されるかもしれないというのに、何故こんなに嬉しそう
なのだろうかこの男は。

「精霊王達は貴方の護衛を拒否しました。……私がない間、貴方
を守るのはこの国の騎士だけです。魔導士相手では人間はあまりに

無力だというのに。かといってそれを伝えた所でリス殿は無視して戦うでしょうし」

近衛騎士ならば死さえ恐れず突進するに違いない。けれど自分が戻ってきた時にリスが怪我をしているのは夢見が悪かった。そんな事をさせるぐらいならば確実に勝つ見込みがある精霊王を護衛につけたかったというのに。そうすれば私もヴァノツサも多少は安心できる。

顔を伏せて告げる言葉にヴァノツサの機嫌が悪くなったのを知ったのはいつもより低い声で問われてからだった。

「……一応訊くが、貴女は誰の身を案じているんだ？ 俺か？ それともリスか」

？ そんなこと訊かれるまでもないでしょうに。

「無論どちらもです。皇帝も騎士も国に必要な人材である事に変わりありません」

騎士にとつて皇帝は何より護るべき存在だ。そして皇帝にとつても騎士はなくてはならない存在のはずだ。どちらも大事に決まっている。私個人としてもそうだ。ヴァノツサにもリスにも傷ついてほしくはない。……もし何かあるとしたら、原因は私なのだから。

きっぱりと答えた私にヴァノツサは目を丸くし、それから一瞬儼然としかけてやめ、視線をついと逸らして何やら考えているようだった。まるで百面相を見ているようだ。

「ヴァノツサ？」

腕の中で笑いを堪えるビーの頭をそつと撫でながら問うと、最終的に諦念に近い感情を纏ったヴァノツサはふるふると首を振り「いや、まあいい」と何やら気を取り直した様子で歩き出した。

「念の為に護衛騎士の配備は増やす。それでも初代に対抗できると思えんが、その辺は俺が貴女を口説かなければいいだけの話だ。どの道口説こうにも貴女もいないのだから問題はなかるう」

そこまで言い、くるりと振り返ったヴァノツサは先程までの百面相などなかったように鮮やかに笑った。

「どうだ、これで貴女の憂いは消えたか？」

消えたわけではない、けれど。

「ええ、とりあえずはそれで大丈夫でしょう。精霊王を付けられないのは申し訳ないと思いますけど」

「構わん。彼等が貴女を護ってくれるのならこちらとしても異論はない。貴女の憂いも俺の憂いも消えていいこと尽くめだ。だから貴女は何も気にせず地脈に行ってくれ。俺に良い報告をしてくれるんだらう？」

頷いた私にヴァノツサが浮かべたのは皇帝としての表情だった。だから私もこの国に来た目的を胸に刻んで「はい」と頷き返した。それは例え彼との約がなかったとしても必ず成し遂げなければならなかった。地脈破壊による大地震。それは私のせいでもあるのだから。

「そうか」

微塵の嘘もない答えにヴァノツサが表情を和らげる。硬質な印象を受ける顔立ちが一転して優しく見えた。まるでピリオン様みたい。別人だと理解しているのに、だからこそ余計に似ていると思えるから不思議だ。

「ならばこの件は終わりだ。次は俺の用事を済まさせてもらおう」
……ただ、ピリオン様ならこんな風に強引に話を切り替える事などなさらないのだけれど。

風呂にでも入れてもらったのかまだ少し湿っているビーの背中を撫でつつ片眉を上げて先を促すと、艶やかな紅蓮の髪が揺れて私の横をすり抜けていく。その姿を黙って見送るとヴァノツサは衣装棚の前に立ち、僅かに考え込んだ後でこちらを振り返った。その目に不満の色が浮かんだのは、私が着ている群青のドレスを見たせいかもしれない。不満というよりも、どちらかと言えば拗ねているのだらうけれど。

「何か御不満でも？」

もうすっかりピリオン様と似ても似つかぬ顔で物言いたげな眼差

しを向けられ、渋々問いかける。するとヴァノツサは間髪入れず「当たり前だ」と返した。

「さつきからずっと言おうと思っていたんだ。何故俺が用意したドレスを着ていない」

「あら、用意してくださいださっていたんですか？ それは失礼致しました」

「戯れを。昨日ちゃんと俺の口から伝えただろう」

「そんな昔の事は忘れしました。それに私はこのドレスで式典に出ても構いませんし」

「どうやら文句を言いたそうだという読みは当たっていたらしい。本当にとことん分かりやすい人間だ。」

その分かりやすさを知っているのが魔女一人というのもおかしい話だけれど、ヴァノツサが容易に考えを読まれてはいけないような世界で生きてきた事を知っているから馬鹿にする気にはなれなかった。性格が悪くて友達がいなかったのかもしれないという説はこの際遠くへ置いておく。

苦情をさらりと受け流す私に業を煮やした風のヴァノツサはしかしあくまで冷静な態度で椅子に腰掛けた。ここで感情的になった所で私の態度が変わらない事を承知しているせいだろう。良い読みだ。どうやら私も相当読まれやすいらしい。だから続く言葉もこちらの反応を予期した上で放ったに違いない。

「貴女程の美貌を持った女性を着飾らせたいと思うのは男なら当然のことだ。ドレスの十着や二十着贈るのも自然な事だろう」

開いた口が塞がらないとはこの事か。

「……まさかとは思いますが、本当にそれだけの量をこの中に詰め込んではいませんか？」

放たれた言葉の前半をまるきり無視して問いかけると、彼は片眉を上げて実に楽しそうに笑った。

「何なら確かめてみればいい。衣装棚に鍵をつけた覚えはないぞ」
低く聞き心地のよい笑い声だが、今この状況で聞くと腹立たしい

ことこの上ない。

北の孤島の屋敷でもそうだったけれど、私達は扉をどちらが開けるかとなると毎回こうやって言い合いをしている気がする。もっともあの時はヴァノツサが自分から扉を開けたが、今回はそうはいかないだろう。今衣装棚の中身を知らないのは私だけなのだから。

仕方がないわ。

「あまり大量に入っているようなら全て御返ししますので」

腹立たしさをそのままに言ってからビーを下ろして衣装棚の扉に手を掛ける。少し力をかけるとあっさりと開いた扉の奥は暗がりによく見えなかった。が、そこに何があるのかぐらいはぼんやりと掴むことができた。否、見たくなくても見えてしまったのだ。

「良い品だろう。今回はファルガスタ産の生地で作らせたんだが、暖かさならツヴァイ産に引けは取らん」

「そういう問題ではありません」

ドレスを手に取る私の姿によろやく溜飲を下げたのか、ヴァノツサは満足気に喉の奥で笑って目を細めた。けれどこちらは満足になど到底なれない。

私の予想に反して中に入っていたドレスは一着だけだった。ただ、その一着が問題だった。ええ、それはもう毎度の如くと言っても差し支えないほどに。

「何ですかこの無駄に綺羅綺羅しいドレスは」

どうしてヴァノツサは毎回何かしら文句の付け所があるドレスしか選ばないのだろうか。彼の美的感覚に影響を与えた人物がいたら小一時間問いつめたい。ぴくりと痙攣する頬を空いた手で押さえつけながら真剣にそう思ったほどに、このドレスはどうかしていた。いいえ、どうかしているという言い方はおかしいわね。

ドレス自体に落ち度はない。ヴァノツサの言う通り、滑らかな肌触りはしかとても暖かそうだったし、濃い群青の色は私が好むものだった。型も体の線を強調しすぎずばかりすぎずといった塩梅だ。良い品。その言葉にできることなら頷いてあげたいと思う。

これさえなければ。

「何なのですこれは。一体生地は何を縫い込んだんですか」

「輝石の欠片だ。これを作らせるのは骨が折れた」

「何故こんな物を縫い込んだんですか。不要でしょう。第一、華美過ぎます」

これさえなければ満点をあげたいと思ったドレスは、ただ一点に置いてその点を落としていた。

生地には縫い込まれたキラキラと光る物。それは私が着るには眩しすぎるのだ。この点について、私は一言文句を言わせてもらいたかった。だが大抵の場合においてヴァノツサは人の話を聞かない。今回もそうだった。

しげしげとドレスを見上げるビーの首根っこを掴んで膝の上に載せたヴァノツサはぞんざいに足を組んで「ふむ」と一つ頷いた。

「その方が美しいと思っただからだ。事実、今こうしてドレスを手にかけているだけでも貴女の美しさが際立つて見える。お前もそう思うだろうか？」

「ふん、レイアは何を着たって綺麗だもん。わざわざあんなにキラキラさせなくてね。それよりあれってさ　むぐ」

怪訝そうなビーが何か言いかけるが、それはヴァノツサの手に塞がれてしまった。大きく骨ばった手の平がビーの小さな頭を包み込む様は滑稽だったけれど、ヴァノツサは冗談ではなく真面目にやっているらしい。……今の話にわざわざ隠すような事などあったのだろうか。

ヴァノツサの膝の上から逃れたいのか尻尾を強く振って腕に叩きつけているが、あまりに弱い反抗だ。本気なら噛み付くことぐらいしそうなのにそうしないということは、意外と嫌じゃないのかも知れない。いえ、もしかしたら呼吸さえ止められてしまっているのかもしれない。心なしか四肢をばたつかせているようにも見えない。

「ビーを離してあげてください。それでは苦しそうです」
心配になって近づくと「その前に」と制された。

「そのドレスをよく見てくれ。貴女自身に気付いてもらいたい事がある」

「？ 何を訳の分からない事を……。ただ輝石が入っているだけでしょう？」

「見れば分かる」

やけにもつたいたいぶつた言い方をするヴァノツサに促され、仕方なくドレスを広げてみせる。勢いよく広がったスカート部分がふわりと風を生みながら輝石の光を振りまいて。

「……？」

炎の照り返しを受ける輝石に目を止め、まじまじとドレスを見る。生地には縫い込まれた輝石はとても小さく、無数にあるように思えた。そこまではいい。先程もこの綺羅綺羅しい光に圧倒されたばかりなのだから。けれど、これは何だろう。

「一部分だけ輝石が大きい？」

右から左に滑り落ちていくような線を描いてスカート部分を彩る輝石の大きさが、他とは違っていた。それは少し太い線として他の輝石を押しつけ、一際強い光を放っている。それが何かに似ている気がして、私ははたと気がついた。

群青の生地に縫いこまれた無数の小さな光。滑り落ちていく大きく大きめの光。

それに目を釘付けにされながら、私は何故かドレスを見ているはずがまるで夜空を見ているような気分になってきた。

宵闇を飾る星の光。天の川。

「ミルヒシュトラレー」

手を離してもらえたのか、重なる声はビーのものだった。

彼は慌てた様子でヴァノツサの膝から飛び降りて扉へと向かっていく。

懸命な判断だ。だって私は。

「覚悟はできていますよね。ヴァノツサ」

この頭の悪い皇帝に一度きついお灸を据えてやらなければと思っ

ているのだもの。

手に魔力を集中させる。

さて、一体何のスペルを唱えよう。

攻撃スペルは駄目だからせめて束縛でもして動きを封じ込めてやれば少しは懲りるだろうか。いや、それだけでは温い。ヴァノツサが懲りるような方法と言えば他には何が。二度とこんな馬鹿げた事をしないように体に叩き込むにはどうしたらいいかしら。

ふつつつと煮えたぎる心の中でそんな事ばかりを冷静に考える。

今にも手からは魔力が溢れ出し、ヴァノツサを打ち据えそうだった。

だというのに、彼はあくまで彼だった。

「本来なら覚悟をしなくてはならないだろうな。しかし今回は別だ」足を組んだ尊大な態度で余裕たっぷりな笑みを浮かべるヴァノツサの言葉に目を細める。一体どう育ったらこうも厚顔無恥になれるのか、一度聞いてみたい所だ。けれど彼の言葉は聞き捨てならない。「一応私が怒る事は分かっているようですね。それで、何故今回は別なんです」

今回も次回も前回も許せるような事ではないはずだけれど。

魔力を霧散し、ヴァノツサを睨めつける。歩くだけで周囲の温度を下げる化物と言われる氷の魔女の視線だ。少しくらい効果があつてもよさそうなものを、やはりヴァノツサには通用しなかった。椅子の背もたれに深く体を預け、怒りを隠そうともしない私を満足そうに見ているのみだ。

「決まっている。ツヴァイの星姫が先に攻撃を仕掛けたからだ」

「星姫様が？ それに攻撃というのはまさか」

ツヴァイが攻撃を仕掛けるとなれば、起こるのは戦争だ。ひやりと冷たい手に心を鷲掴みにされるとヴァノツサは「いや」と首を振った。

「無論戦争の話ではない。……いや、戦争でもあるか。ただそれは誰かが死ぬことのない戦いだ。俺と星姫は自尊心を賭けているがその程度の話だ」

「自尊心？」

自分の考えていたような物騒な戦争でなければ問題は無いけれど、皇帝と王女が自尊心を賭けるといふのは決してその程度の話ではないはずだ。

物騒な話を詳しく聞きたくてヴァノツサに近付く。「何でもないだが彼は立ち上がる事でそれを制した。」

「とにかく今回は俺のせいではない。向こうがけしかけたせいだ。だから貴女には必ずそれを着てもらいたい」
何でそうなる。

「ちよつと待つてください。今の話からどうしてそこに繋がるんですか」

「繋がるだろう？」

「繋がらないから言っているんです。疲労のせいで理解が足りないのかもしれないんですが、それで私まで巻き込まないでください」

「……相変わらず貴女の言い様は酷いな。だが今は細かく説明している暇はない。事情は星姫に会えば分かるだろうから、とにかく今はそれを着て式典に出る準備をしてくれ」

そんな言葉で流されると思っているのか、この男は。

けれど、今までヴァノツサがしてきた事で自分のせいではないと言った時は確かにミルヒシュトラークが先に仕掛けていた。私からすれば仕掛けたとは思えない程度のもものばかりなのだけれど

事だった。ならば、今回の件もそうなのだろうか。もっとも、あの程度の可愛らしい言葉を仕掛けるなどという物騒な言葉で片付けたくはないし、そもそも私は彼女を応援する側に立ちたいくらいだ。

「言うておくが今回は前よりも度が過ぎてている。それは貴女も星姫に会えば分かるはずだ」

「ですが」

「他国の王女を叱責するわけにはいかないのだから、せめて貴女がそのドレスを着る事で宥めておきたいんだ。牽制の意味も籠めてな」
「着たくありません」

「そう言わないでくれ。もし貴女が実際に星姫に会ってそれでも納得行かなければ、その時は説教でも何でも受けてやる」

ドレス一つの話だというのに、ヴァノツサは実に真面目にそう言っ
て背を向けた。私が着替える事を信じての行動だろう。

「私でも度が過ぎていると分かるんですか？」

「分からん。だが俺がどうして貴女にそのドレスを贈ったか理解してもらえるだろう。玉座の間で待っている」

ドアが閉じられる。ビーも合わせて出て行ったからまた一人きり
になってしまった。……今度は余計な物もくっついていてくれど。

輝石が散りばめられたドレスを見下ろして一体どうしたものかと
思案する。

本来ならばこれは私が着るべきドレスではない。これに見合う名
を持つ女性が着て初めて真価を発揮できるドレスだ。私には似合わ
ない。

それでも、今はこれを着るしかないんでしょうね。

ヴァノツサはビリオン様を刺激しないようにする腹積もりのはず
だ。その証拠に齒の浮くような言葉を言われた気はするけれど、本
気でこちらが困るような事は言わなかった。私の憂いを取り除くた
めに。この力が存分に揮えるように。

「……はあ」

自分は甘すぎると思う。分かっているのだそんな事は。

着ていたドレスを脱ぎ、新しいドレスに腕を通す。身を飾る装飾
品は何もないけれど、このドレスさえ着ていればヴァノツサは満足
するだろう。

「扇子でも貰えばよかったかしら」

ふとそんな事を思う。そうすれば顔を隠す事ができるのにと。

衣擦れの音が止み、着替えが終わる。後は歩きながら髪を手櫛で
整えればいいだろう。髪を結い上げる時間も上手くできる自信もな
いのだし、それに今は鏡を見たくなかった。……ドレスが似合わな
いと自覚するのは情けない。

露出した肩や腕以外を彩る輝石に落ち着かなくなりながらも扉を開けると、少し離れた所にリズの姿が見えた。

「着たのか」

「ええ、着ました。それよりリズ殿、貴方も騎士なら主を諫めるなり何なりしてください。従順に従うだけが臣下ではありませんよ」

「五月蠅い。大体俺だって一応は御止めしたんだ。間違いなく貴様が短気を起こすから止めた方がいいのでは、とな。だが仕方がないだろう。今回は向こうに非がある」

冬宮から皇城に向かうべく歩き出しながら嫌味を言うと、珍しくヴァノツサの行動に諦念を見せないリズが嫌そうに顔を歪めた。けれどそれは私でもヴァノツサでもなく今まさに近付いている星姫に對してのものだったのだろう。

「貴方も事情を知っているんですか？」

「団長から聞いた。だが相手は大国の王女だ。くれぐれも失礼なきよう、貴様は魔女らしくしてろ」

「魔女らしくしたら余計に失礼な気がするんですが……。善処はします」

リズでさえ腹を立てるような、一体何をしたのだろうか。ミルヒシュトラレーセは。

冬宮を出て皇城に入るまでは極力ゆったりと歩いていく。誰がどこで見ているか分からない場所でせかせか歩いてもいられない。第一、侍女や文官が私の傍を通り過ぎる度に嫌みたらしいまでに魔女らしい笑みを振りまいて歩かなくてはならないのは骨が折れた。別にそんな事をする必要などないのだけれど、そうでもしないと先にリズが相手を怒鳴りつけそうだった。それ程に、皇城内で私達は孤立していた。

誰もが私達を避け、歩くたびにさざ波のように人が引いていく。そのぽつかりと開かれた空洞の中心を歩き、好奇と敵意に晒されながら歩く事自体は苦ではないが些か面倒ではある。だから玉座の間に辿りつくまでに時間が掛かってしまった。

玉座の間の前に立つと何やらしんと静まり返っているのが分かった。張り詰めた緊張感が扉越しに伝わる。

「もういらしたんですね」

式典はもう始まっているんだろう。だとすれば今ここで緊張感を壊したくはない。そう思っただけでリスに声を掛けたというのに。

「そのようだな。入るぞ」

常ならば誰よりも私をこの場に留めておくはずのリスは性急とも言える速度で騎士達から入室許可を得、私を促した。

「リス殿……？」

「急げ。本格的に式典が始まる前に入っておいた方がいいだろう」

ああ、そういうことか。

今はまだヴァノッサとミルヒシュトラークが挨拶でもしているだろうから、今のうちにと言いたいよね。

リスの言葉に納得し、重厚な扉が開かれるのを待つ。

扉と扉の間から次第に広がっていく玉座の間は輝石など比ではない光で溢れかえっていた。照明にガラスが照らされ、楽器が照らされ、貴婦人や侍女の髪飾りが照らされ、ありとあらゆるものが光を照り返していた。

その光の中心に彼女は立っていた。

「御久しぶりね、華月の」

きつちりと結び上げた金の髪。紅紫の瞳。

たおやかなその立ち姿を一目見て、何故ヴァノッサが私にこのドレスをと望んだのか理解した。

第四十二話 触れない唇

ヴァノツサがあれだけの大口を叩くのだから、きつと何かがあるとは思っていた。

ミルヒシュトラレーセを褒め讃えていたリスでさえ、私が纏うドレスを見てそれを許した。

それだけの何かがあるのだ。この国の人間にとっては度し難い、許せない何かがある。

ただ、実際にミルヒシュトラレーセを見て全ての事情を知った上で私は言いたい。

はたして私や彼等に彼女を批判する資格があるのだろうか。

後方以外の全ての方角に溢れる光の洪水に酔いそうになり、私は手の甲で顔を隠しながら目を細める。綺羅びやかな世界は自分にはあまりに不似合いで今にも体を翻して逃げたかったけれど、それは前方に立つ多くの人間もやや後ろに立つリスも許さないだろう。許されるものなら、そもそも祝宴になど出ていない。

光を跳ね返すドレスが何を意味するのかを察したのであろう文官達が落胆の息を吐く。同時に、貴婦人達が玉座の中央に立つ女性の反応に期待を寄せる。古来より修羅場は最高の蜜として他人に好まれる。彼女達が求めているのもそういうことなのだろう。生憎、戦う気など更々ないのだけれど。

そんな人間達の思惑を背負いながらも、ミルヒシュトラレーセは楚楚とした風情を崩さなかった。下々の言う事など気にも留めていないのかもしれない。けれど期待に応えるべく戦う気なのだろうということは、彼女の自信に満ちた笑みから窺い知れる。

「どうしたの、わたくしの顔に何かついていて？」

まるで夏の日差しを浴びているような眩しさの中で目も閉じず、気後れもせずミルヒシュトラレーセが問う。自分が今どんな格好をしていて、どれだけヴァノツサ達を刺激しているかなど、やはり気にも留めていないに違いない。いつそ潔いまでの度胸だ。

私はそれに何と答えたらいいものかと逡巡し、彼女の奥に座しているヴァノツサの静謐な眼差しを受け止めた。恐らくヴァノツサは私がここでミルヒシュトラレーセに何も言わなかったとしても文句は言わないだろう。このドレスを纏って玉座の間に来たこと、それだけが重要なからだ。

それでも言わずに置けなかったのは、背中に当たるリズムの敵意のせいか。

一歩進む。光を反射して撒き散らす輝石を見せつけるように殊更ゆったりとした動きで。

昼日中の眩さの中、一人夜空を纏う私はミルヒシュトラレーセの心に多少なりとも衝撃を与えられているだろうか。そんな事を意識するのは、やはり私もヴァノツサ達同様これは如何なものかと思ったせいか。

ミルヒシュトラレーセの前に立ち笑みを浮かべる。

嫣然としたそれに周囲が息を呑んだ。まるで悲鳴を上げるように。

「面白い趣向ですね。禁色のドレスとは」

くすり、魔女らしい笑い声と共に指先を動かす。

その先にあるのは、いつか私が着ることを余儀なくされた真紅よりも尚鮮やかな緋色のドレスだ。それはこの国の禁色であり、私としては金輪際纏いたくない色でもある。炎帝と呼ばれるヴァノツサやビリオン様の存在そのものを彩る色は、言うまでもなく皇帝の許可無く纏う事が許されない色だ。道理でヴァノツサがミルヒシュトラレーセを挑発するためのドレスを発注するわけだと、胸中で溜息を漏らした。いくら正妃になるとはいえ、現時点で敵国の王女が着てもいい色ではない。

周囲がざわつき、かと思えば波が引くように静まり返る。

誰も彼もが私達のやり取りを注視しているのだと思うと、緊張と共に気分が悪くなったがここで引くこともできない。仕方なく、天の川を模した綺羅綺羅しいドレスを見つめるミルヒシュトラッセを沈黙で受け止めると、柳眉を顰めた彼女はすぐさま華やかに笑った。「貴方こそ随分良い物を賜ったようね。それにこれはわたくしにとつては禁色ではないわ。ツヴァイの禁色は紫ですもの」

「ですがファルガスタの禁色です。何故それを御召になったの？」
「あら、貴方だって着ていたではないの」

好き好んで着たわけじゃない。

コロコロと笑うミルヒシュトラッセに心底毒づきたくなるもの、そんな事をすれば後でヴァノッサに何を言われるか分かったものではない。いえ、後で言われる程度ならまだいい。この場で肩でも抱かれた日には足を踏んでしまいたくなる。

挑発行為以外の何者でもないドレスと女性らしいまろやかな線を描く体を惜しげもなく晒す彼女の優勢に、文官以下貴婦人達も拍手を送りかねない勢いでくすくすと笑っている。密やかなその笑い声を嫌な感じだと思わないでもなかったけれど、まさかここで好意的な態度を示されるなどは思っていなかったので気にしないことにした。

それよりも今は牽制だ。

ここで自分に少しでも有利な状況を作っておかねば、後ろに立つリズが何をするか分からない。……私の周りにはこんな人間ばかりなのかと考えると何だか情けなくなるのだけれど。何故私が彼等の勘気を宥めなくてはならないのかしら。

それにしても牽制か。一体何を言えば彼女を牽制する言葉足り得るのだろうか。今まで寵を争った経験がない私には些か難題だ。しばし黙考し、私は結局ヴァノッサを引き合いに出す事にした。

似合わないはずのドレスを、さも似合っていると思ひ込む。その自意識過剰とも言える感情から生まれる自信を糧に、私は嘲るように笑う。

「私の唯一がそれを願ったからですわ。そうでなければ、いくら私
が不遜な魔女と言えど禁色など纏えないもの」

「……っ。そう、てつきりわたくしは貴方が望んであれを着たのだ
と思っていたわ」

「望まれたから望んだまで。私はヴァノツサから贈られる物なら何
だって嬉しいもの」

大嘘を吐く罪悪感に胸が痛む。実際はドレスを贈られる度に散々
文句をつけているのだけれど、それは誰にも知られないに越したこ
とはない。リズだけで十分だ。もつとも、リズとて私が文句を言う
理由は分かっているのだからそれほど怒りはしない。ヴァノツサを
止められないからさりげなく受け取るよう勧めはするが。

浅慮な判断をした小娘を嘲る魔女として、堂々たる立ち姿で畏怖
と嫌悪の中ミルヒシュトラークの反応を伺う。「無礼な！」そんな
声が聞こえてくる。けれど、この場合一体どちらが無礼なのかしら
と私は内心小首を傾げた。可愛らしい挑発とはいえ、禁色を纏う敵
国の王女の方が余程無礼だ。正妃候補を躡る魔女も勿論無礼だが。
敵意や殺気が膨らむ。そこでふと、絡むような視線を感じて顔を
上げた。

「……？」

見れば玉座に座すヴァノツサの傍に銀の鎧を着込んだ男の姿が見
えた。

無論リズではない。彼は私の後ろにいるのだし、そもそも目の前
の男は豊かな金髪だ。麦色じゃない。ではあれは一体誰だろうか。

ヴァノツサやリズ以外で唯一こちらに敵愾心を向けてこない、あの
騎士は。

「まずいな」

リズが舌打ちする。ちらと視線のみ振り返ると、珍しく彼が青ざ
めているのが見えた。そういえば心なしか周囲を警備する騎士達も
似たような顔をしているような。

「どうかしましたか？ 彼が何か」

忙しない空気に不穏なものを感じ尋ねると、リズはやや気まずそうに顔を伏せた。剣の柄を握っては離し、いつでも抜ける準備をして玉座の隣に立つ男を注意深く観察しながらも。

「頼む」

「え？」

「今は何も言わず、陛下の御傍に行ってください」

唐突な願いの意図が分からず目を瞠る。

今はミルヒシュトラールと話しているというのに、何故そんなことを。

怪訝に思い、詳しい話を聞こうと口を開く。刹那こちらを見ていた男が慇懃無礼なまでの笑みを浮かべたのが視界の端に映り、私は咄嗟に前を向いた。何故だろうか、あの笑みはともヴァノツサに似ている。似すぎて空恐ろしくなるほどに。

騎士以外の誰も玉座の隣に立つ男に注意を払っていない。けれど日々鍛錬し感覚を鍛えている彼等の落ち着きの無さが私を不安にさせた。このままでいれば、何か取り返しのないことになってしまいそうなの、そんな予感がして。

「ミルヒシュトラール様」

口元に手を当て、焦りなど微塵も感じさせない上品な笑みを浮かべる。

「名残惜しいですが、ヴァノツサが呼んでおりますので私はこれで」「炎帝陛下が？　いつ貴方を呼んだというの？」

「玉座の間に来る前から私はずっと呼ばれておりますよ。だから来ましたの」

薄く紅を引いた唇を吊り上げて少しでも魔女らしくなるよう笑んでみせる。ささやかな挑発に彼女がさつと頬を朱に染めるのを見計らって、小さくドレスの裾をつまんで頭を下げた。そのまま玉座へと向かう。

埋め込まれた蒼の宝玉を撫でていたヴァノツサがこちらを見上げ、極上の笑顔で迎える。あまりに甘い笑顔に、彼が全てを理解してい

るのだと察して腹が立ってきた。何が起こっているのか分からないのは私だけというのは業腹だ。

「何だ、もう少し話していてもよかったんだぞ。久しぶりの再会だろう」

「ご冗談を。それよりこの方は」

ヴァノツサの戯言を流して問うと、一歩前に進み出た男が深々と頭を下げた。

「救世主殿に置かれましては御機嫌麗しく。私は近衛騎士隊長、ギルバート・ミルヴェーデンと申します」

「ミルヴェーデン？ ああ、貴方がリス殿の」

「はい。うちのリスは御役に立てておりますでしょうか？」

「ええ、それは勿論」

むしろここで役に立たないと口にしたらどうなるのだろうか。一瞬そんな意地悪な考えが頭を過ぎったけれど、世話になっっているのは確かなので頷いておく。「それは重畳」私の言葉にうんうんと頷いた彼　ギルバートはクレティエン夫人同様魔女を恐れていない様だった。さすがリスの上司と言うべきか。彼と違い嫌悪している風でもない辺り、変わっていると言わざるを得ないが。

ヴァノツサよりもやや年かさに見えるギルバートは、主である皇帝を無視して私の前に立った。

「いつか機がありましたら御会いしたいと考えておりましたが、まさかこうもあっさり叶うとは」

「ギル」

今、場の空気が冷え固まった気がするが、そこは触れないでおいの方がいいのだろうか。

視界の端に見えるリスの青い顔もできるだけ今は目に入れたくない。理由を考えると怖いから。

ヴァノツサがギルバートを呼ぶ。しかしそれさえ無視して彼は話を続けた。

「陛下やリスに頼むといつも洩られるので参っていた所です。それ

にしても御美しい」

「はあ、ありがとございます」

「おい、ギル」

「せつかくですから手の甲に口付けてもよろしいでしょうか」

「は？ ああ、はい。別に構いません」

「ギルバート！」

とうとう手を取られ、ギルバートが膝をつこうとした所でヴァノツサの堪忍袋の緒が切れたらしく、玉座から立ち上がった彼に肩を抱かれた。

「俺の寵妃に触れるな。貴女も易々と触れさせるな」

「はあ……御免なさい」

周囲から落胆の悲鳴が漏れる。同時に騎士達の安堵した溜息も。

……今まで他人の事などほとんど気にしなかったけれど、これからはもう少し気にした方がいいかもしれないと今になって思う。でなければ場の展開についていけない。

それより、騎士が手の甲に口付けるのはそんなに悪いことだっただろうか。女性にするそれは挨拶のようなものだと思っていたのだが、三百年も経つと意味合いが変わってしまったのだろうか。これも後でリズかヴァノツサに聞いた方がいいかもしれない。ここでは私はヴァノツサの寵妃なのだから。

ただ、と胸中で呟く。

このギルバートという男、単に挨拶がしたかったわけではないんじゃないかと思った。無論魔女に手を出したかったわけでもなくまるで意図してヴァノツサを怒らせたように見えて。その証拠にほら。

「……相変わらず仲がよろしいこと」

ひくりと頬を引き攣らせたミルヒシュトラーセの隠しきれない苛立ちが肌にひしひしと伝わる。途端に緋色のドレスが滑稽に見えたのは、纏っていた自信が僅かでも払拭したせいだろうか。他国に足を踏み入れた姫君にこのような扱い、本来ならば大国の名折れもい

い所だが、今回ばかりはミルヒシュトラ―セを庇ってあげることができない。寵妃云々はともかく、事は国の威信を争うのだ。私に口が出せようはずがない。

彼女の声によくやく事を理解したのか、ヴァノツサも落ち着きを取り戻した様子だった。端正な顔に苦いものを浮かべ、ギルバートを睨めつける。しかしリスであれば即座に膝を折って頭を下げる局面で、やはりギルバートは余裕綽々の笑みを浮かべるのみだった。それを咎めない辺り、それが彼等の日常なのだろう。

「謀つたな」

「何を今更。それより、いい牽制になりましたな。もしこのままあの不埒者共が救世主殿を貶めようものなら、叩つ斬っていたところですが」

ああ、だからリスは私をここに寄越したのね。

清々しいまでの笑顔で答えられるとヴァノツサもそれ以上責められないのか、彼は私の肩を抱いたままミルヒシュトラ―セと向き合った。むきだしの肩に触れる手の平が熱い。今まで臣下の前で声を荒げる事のなかったヴァノツサの思いがけない態度のせいか、ひどくその熱が気になった。

抱き寄せる力が増す度にドレスに散りばめられた輝石が光を舞わせる。それが眩しかったわけではないだろうけれどミルヒシュトラ―セが目を細めた。いつの間に見れたのか、あの無表情な侍女カタリナも今日は濃紺のメイド服を着て彼女の隣に控えている。無感情な亜麻色の瞳が私とヴァノツサを観察するようにじっと見つめていた。

「よく来たな、ツヴァイの星姫」

しんと静まり返った玉座の間。そこで口火を切ったのはヴァノツサだった。

「情勢が情勢故あまり派手な歓待はできんが、心づくしの宴席を用意させてもらった。どうか今日は楽しんでいかれよ」

宴の本格的な始まりを告げる言葉にミルヒシュトラ―セがドレス

の裾を持ってちよこんと膝を折った。

「有難う存じます。突然の訪問、驚かせてしまったことと思いが迎えて頂いてよう御座いました」

「ある程度予想はしていたからな。大した問題ではない」

寵妃たる魔女を抱いて堂とした態度を崩さないヴァノッサと、私の存在を出来得る限り無視しようとしているミルヒシュトラーク。彼等は一体、何が目的で言葉を交わしているのだろうかと思議に思った。彼等はいつか夫婦となる者同士だというのに、不可解なほどに甘くない会話にこちらがやきもきしてしまいそうだ。

……分かつている。誰が一番邪魔なのか、弊害なのか。

分かつているのにこの腕から抜け出せないのは、そうすることで嘘が見抜かれてしまうせいだ。今となつてはこの程度の嘘を見抜かれたとて何ら問題はないはずだが、そうする気になれなかったのは何故だろうか。

弦を爪弾く楽師達の生み出す音楽が玉座の間をぱつと明るく染め上げる。それを合図に宴が始まり、敵愾心と好奇心を緋い交ぜにした視線が霧散した。それぞれがそれぞれの思惑の元、行動に映ったのだろう。

さて、私はどうしたものか。

今宵はミルヒシュトラークの歓迎式典だ。格式張つた儀式自体は私が来る前に終わったのだとしても、主賓のミルヒシュトラークはヴァノッサから離れはしないだろう。その間私がずっと傍にいるわけにもいかない。というよりも、私がそれを許さない。これ以上の牽制は毒だ。そうなるかとは壁の花になるか早々に辞去するのが関の山だけれど、それは彼が許されないだろう。一体どうしたものか。

考えを読まれたのか、離さないとばかりにきつく肩を抱く手に視線を落とす。それからやや緩慢な動きでヴァノッサを見ると甘やかな笑みを返された。

「よく似合っている」

「……ありがとうございます。あまり嬉しくありませんが」
ドレスに輝石が縫いつけられていなければもっとよかったのだけ
れど。

「こういう時の贅辞は素直に受け取れ」

言葉にしない想いを汲み取ったのか、ヴァノツサがくつと笑って
今度は腰を抱き寄せた。途端に密着した体が熱い。

まさかもう酔っているのだろうか。まじまじと彼を見るが、顔が
赤く染まっているわけではない。酔っても顔に出ないだけという可
能性もあるけれど……。

「炎帝陛下」

慣れた熱とは違う熱さに驚く私を余所に、ミルヒシュトラレーセが
口を開く。

凜とした声には幾分か嫉妬が混ざっていたものの、いきなり喧
嘩を売るような真似はせず至って冷静なものだった。機嫌の良さそ
うなヴァノツサが胡乱気な眼差しを向けてもそれは変わらない。

「何だ」

「少し、彼女と二人きりで話してみとう御座います」

彼女、とは私の事だろうか？

だとすればミルヒシュトラレーセの神経を疑わざるを得ない。魔女
と二人だなんて。

「二人？ 随分度胸がある申し出だ」

ヴァノツサも同じ事を思ったのだろう。意外そうな声色で返す。

周囲にいた文官達が再び静まり返る。勇気ある姫君の願いへの感
嘆で。本当に、恐れを知らないとはこのことだ。まさかこの国で魔
女と二人になりたいと考える人間がヴァノツサ以外に存在するとは
思わなかった。

華やいだ室内に静寂の風が吹きすさぶ。誰もが押し黙って見守る
中、ミルヒシュトラレーセはやはり恐れを知らぬ者特有の自信に満ち
た笑みを浮かべた。

「申し上げますでしょうか？ わたくし達ツヴァイ王家の者は魔

女を恐れたりしないと」

それは暗に、この国とは違うのだとここにいる多くの人間達に向けた牽制だ。

彼女が小首を傾げる。まさかファルガスタは魔女が怖くて二人きりにすることさえ許されないのですかと問うように。後れ毛の一本すらないきつちりと結び上げられた髪を飾る宝玉が揺れる。カラン、と涼やかな音を立てるそれに耳を澄ませる私にヴァノツサが問いかけた。

「レイアステイ、貴女はどう思う」

その質問にヴァノツサが気にかけていたものが何かを察する。

魔女と他国の王女ではない。レイアステイとミルヒシュトラージェを二人きりにすることに不安を覚えていたのだ。元々寵妃の座を望んでいない私が何をするか分からないから、寵妃を狙うミルヒシュトラージェが何を言うか分からないから。

だから私は目を細めて腰に当てられた手に触れる。そつと撫で、大丈夫だと言いつける。

「願ってもない申し出ですね。私もミルヒシュトラージェ様と御話してみたいと思っていました」

意識的に邪気無くした笑みは、さぞ文官達の心を恐怖させたことだろう。

にもかかわらず騎士達が姫君を守るべく立ち塞がらなかったのは、ギルバートが目を光らせていたからだ。彼等の様子から察することができた。少し破天荒な人間だと聞いてはいたが、一体どんな経歴を持っているのやら。いつかリズに聞いてみたい気分だ。

若干の好奇心を抑えつつ、ついと視線を外へと向ける。

「ではテラスで御話するのはいかがでしょうか？ あそこなら人もいませんわ」

「外だと刺客に狙われる可能性もあるのでは？」

提案する私に疑問をぶつけたのはギルバートだ。

確かに私もミルヒシュトラージェも誰かに狙われる可能性の高い存

在だ。しかし。

「心配いらぬわ」

慇懃無礼さのない騎士らしい顔をしたギルバートに丁寧な笑みを向ける。

「私を攻撃できる者などこのファルガスタにいないもの。どんな刃も私の結界を打ち砕けない」

ヴァノツサ持つ結界解除の首飾りか、ビリオン様が現れでもしない限り。胸中でそう呟き、しかしそれはあり得ないと首を振る。二人には私達を害する理由がないからだ。ビリオン様はどちらかと言えばミルヒシュトラ―セ様を生かしておきたいはずなのだし。

「では参りましょうか」

指先一つとっても魔女らしい艶を帯びたものになるよう、細心の注意を払う。ヴァノツサがいる時は彼が壁となっっているからいいものの、ここからは二人だ。ミルヒシュトラ―セは私しか見るべき相手がいないのだから注意しなければ。リズにも魔女らしくすると言われている。いつものように振舞ってはられない。

先導して歩く私を避けるように人垣が割れる。そこをゆったりと歩いていくと、後ろから髪飾りの揺れる音が付いてきた。躊躇いのない歩みは、真実魔女を恐れていないのだろう。二人きりになることで殺されるかもしれないというのに、彼女はそんな事は一切気に留めていないのだ。そうまでして私に話があるのだろうか。

一体何を話されるのか。

流石にこれ以上の宣戦布告は胃にもたれるので勘弁願いたいけれど、私も個人的に彼女の人となりを見てみたかったので好都合だ。

テラスに出ると、冬の冷たい風が頬を打つ。

これでは寒かろうと薄く結界を張ると、ミルヒシュトラ―セがほろりと白い息を吐き出した。乳白色の膜に見惚れているようでもある。「初めて見たわ」心なしかはしゃいだ声に笑みで返すと、はっと我に返った彼女に睨まれた。小さな咳払いと共に扇子で顔が隠される。「本当に久しいわね。御変わりないようで何よりですわ」

改めての挨拶は照れ隠しだったのだろうか。

意外と言っては失礼だけれど、予想よりも遥かに可愛らしい面につい笑みが深まる。

「ミルヒシュトラーク様も御変わりなく。それにしても随分と早い再会ですこと。その様子ではツヴァイに殆ど落ち着けなかったのではありませんか？」

「兄王からの命は果たしましたもの。なれば残る役目を果たすのみですわ」

「役目、ね……。それにしても荷が少ないようですが」

外から見えた行列。あれでも十分すぎるほどだが、他国へ嫁ぐ者の荷としてはやや少ないように思う。少なくともマリエル王妃の婚儀の時はもっと多くの荷が運び込まれていたのだから。

純粋な好奇心から尋ねると紅紫の瞳が煌めいた。

「ええ、必要な物だけ運びましたの。残りは兄王が届けさせてくださるはずですよ」

では本当に急いでこちらに戻ってきたのか。

目を見開くと挑戦的に吊り上げられた眦と視線が絡む。そのどこまでも好戦的な姿勢は嫌いではない。色々と手段に難があるけれど、そこまでして何かを一生懸命掴もうとするのは決して悪いことではないと思う。ただ、やはり手段が問題だったので私はヴァノッサの手前、牽制の意味を籠めてくすりと笑った。

「まあ。随分と急いでいらっしやるように拝察しますが、心配せざとも婚儀は逃げませんよ」

「あら、貴方がそれを仰るの？ わたくしの立場を脅かさんとする貴方が？」

別に王妃の立場を脅かすつもりなど毛頭ないが、その言葉は無理矢理飲み下した。

代わりに別の言葉を用意する。心からの問いを。

「ミルヒシュトラーク様は本気でヴァノッサの寵妃になられる御積もりなのですね」

ぼつりと零した声に、馬鹿にされたと思ったのかミルヒシュトラ
ーセの声は若干荒かった。

「無論です。そのためにわたくしは急ぎファルガスタへ戻ったので
すから。貴方と正々堂々戦うために」

こちらは元々正妃の座を譲る気ではいるんですが。

扇子を閉じ、こちらにびしりと突きつけるミルヒシュトラーセに
一瞬困惑した顔を浮かべそうになり、慌てて顔を引き締める。そう
して一拍置いてから嫌味なまでの冷静さで答えた。だって戦おうに
も私は。

「そう、ならば好きに戦いなさいませ。私は今夜からしばらく皇城
を離れます故、御相手はできませんけれど」

「分かればいいのです。え？ 今何と仰いましたの？」

「ですから、私はしばらく皇城を離れると申し上げたのです。皇城
というよりも、ファルガスタから離れると言った方がよろしいのか
しら」

仮にヴァノツサヤリズにミルヒシュトラーセの牽制を願われたと
しても、もう私はこの国にはいないのだ。戦うなどできようはずも
ない。せつかくファルガスタに取って返したミルヒシュトラーセに
は悪いが、彼女には一人で奮闘してもらわなければならぬ。もっ
とも邪魔がない分、その方が楽かもしれないが。

結界を通して流れるしつとりとした旋律に耳を澄ませる。

私ですら知っている曲を所望したのはヴァノツサだろっか。随分
と懐かしい曲だ。

そうして鼻歌を歌いそうになりながら彼女の返答を待っていると、
よかったという安堵ではなく怪訝そうな声が耳朶を打つ。

「何故？ 貴方は炎帝陛下の寵愛を受けているのでしょうか？」

それは本当に訳が分からず、どこか途方に暮れているようにさえ
思えて私は聴覚に入る旋律を無視して彼女に視線を走らせた。敵が
いなくなっただのがそれほど衝撃的だったのだろっか。私ならば諸手
を挙げて賛成する所だというのに。不思議に思いながら指先を頬に

当てて首を傾げる。

「それが私の本来の目的だからとしか言いようがありませんわ。まさか、魔女がただ皇帝の寵妃になるためだけに登城したと御思い？

傾国でも画策して？」

「い、いえ。そんな事一度も考えたことなくてよ。では救世主という噂は本当に」

寵妃云々よりも、救世主の話の方が疑われていたのか。

これでは初日から刺客に襲われるわけだと私は苦笑しながら頷いた。

「ツヴァイ王の御期待に添えず申し訳ありませんが、私は白銀の魔女ではありません。ですが救世主という噂は事実です。もつとも、私自身はそのような肩書きで呼ばれる事を許していませんが」

ビリオン様が残してくれていたツヴァイ王への警告を思い出し、そこだけは魔女らしくない私としての言葉で答える。けれどそれだけでは足りないからと思い「ですから」と続けた。ここからは魔女らしく、甘ったるく媚びるように。

「ミルヒシュトラレーセ様も私を救世主だなんて呼ばないでくださいませね」

「……わ、分かりましたわ」

この声でヴァノッサを陥落したとも思ったのか、ミルヒシュトラレーセが一步身を引く。それをからかうような笑い声で追いかけると怒気を孕んだ紅紫の瞳に射抜かれた。とことん好戦的で分かりやすい性格はツヴァイ王家の特性だろうか。不意にリズのことを思い出して吹き出しそうになった。だからだろうか。彼女を見る自分の目が優しいものだと自覚したのは。

「私は元々モーリス大陸を襲う地震を収めるべく召喚された身。その私が務めを放棄することなど出来ませんの。例え他の姫君にヴァノッサが奪われるかもしれないと分かっただけでもね」

「炎帝陛下が離れるなど微塵も信じていないくせに」

「あら、そんなの分からなくてよ。意外なことが次から次へと起こ

るからこの世界は面白いのではないの」

刺を含んだ苦々しい言葉を一蹴する。むしろヴァノツサがミルヒシュトラレーセに惹かれるぐらいでなければ、こちらが大いに困るのだ。どうか彼には長生きしてもらいたい。ビリオン様に狙われることなく、心穏やかに。

口を嚙むミルヒシュトラレーセに背を向け、寒空を見上げる。気付けば言葉が飛び出ていた。

「ミルヒシュトラレーセ様、一つ御伺いしてもよろしいかしら」

「何です。わたくしに答えられることならば答えて差し上げましょよ」

寛容な言葉が私の言葉を待ち続ける。引き伸ばされたように感じられる時間がひどくゆっくりと流れていく。

空には己が纏うドレスと同じ天の川が流れている。細く、けれども力強くしなやかな光の川。その両隣には姉妹月が浮かんでいる。

私はそのうちの花月を眺め、心のどこかに埋もれていた言葉を掘り起こした。

「貴方はヴァノツサを　炎帝陛下の姿をどう思っいらっしゃるの？」

ようやく出てきた言葉に対する返答には数秒の間が空いた。

「それは髪や瞳の色を指しているのかしら」

慎重な問い。それに私はあっさりと頷いてみせる。

「ええ。あれだけ鮮やかな紅蓮を持って生まれる人間など、そういうものではないでしょう」

「それがあの御方が炎帝たる所以でしょう。今更何を」

そう、それこそがビリオン様やヴァノツサが炎帝と呼ばれる所以。ファルガスタの顔となった理由だ。けれどそれが故に彼等が多くのもを手放してきたことを私は知っている。実際に口にされた事があるわけじゃないけれど、彼等の言動を見ていれば嫌になるほど分かるのだ。

名を呼ばれるだけで、ただそれだけで歓喜を覚えるということ。

それはきつと、とても悲しいことだ。本人にとってはよい話であつても。

ビリオン様と初めて会った時、怪我をしたらどうするのと言った私に自分は少し変わっているからと返していたことを思い出す。悲しげに、淋しげに。そんな風に自分を見てしまうほど周囲に言われ続けてきたのだ。自分が周りと違う存在であると。あまりに残酷で愚かしい言葉だ。魔女である私からすれば、彼等はまとめてただの人間だというのに。

ヴァノツサも同じような思いをしてきたのではないか。

そう思うと放っておけなくて、つい言わなくていいことまで口にしてしまう。

「ミルヒシュトラレーセ様、貴方の目にヴァノツサは人間として映っているのかしら。それとも炎帝という人外のものとして見えているのかしら」

「質問の意図が理解できないわ。そんな事を訊いて何になるのです」「いいえ、少し気になっただけですわ。貴方が一体何に嫁ごうとしていらつしゃるのか分からなかったものですから」

ミルヒシュトラレーセはヴァノツサに嫁ぐのか、それともファルガスタに嫁ぐのか、それとも 炎帝と呼ばれる皇帝に嫁ぐのか。無論全て意味合いとしては同じだ。嫁ぐ相手として何ら変わりはない。ただ、その違いこそが一番重要なのではないかと思えてならない。

星が流れ落ち、命を終える。

それを波のない気持ちで見つめる背に慌ただしい足音が聞こえてきた。

「どうやらここまでのようね。」

誰かは知らないが、恐らくはあの場にいた誰かがミルヒシュトラレーセの救出と称して出てくるに違いない。吐息し、夜空に背を向けて境界を解くと全身を冷気が叩いて鳥肌が立った。

「戻りましょう。皆様心配してましてよ」

珍しく長時間魔女らしくしていたせいか、顔の筋肉が引き攣りそ

うだ。何故かとても疲弊した思考でそんな事を考えていると、先を行く私を止めるようにミルヒシュトラーセが声を上げた。

「待って！」

「？ 何かしら」

振り返ると、星々を従えて立つミルヒシュトラーセは両手を胸の前で組んで何度か逡巡した様子を見せる。そうして無粋な輩が沈黙を打ち破らんと突進してくる前に、吐き出すように問うていた。

「貴方の目には、炎帝陛下はどう映ってらっしゃるの？」

問いに対し問いで返されるとは思わず、ぱちりと目を見開く。

けれど別段難しい話でもなかったから私は体ごと彼女に向き合い、真っ直ぐにその真摯な瞳を見返した。

「人間ですよ。少なくとも、私の目にはただの人間にしか見えません」

私の手を引く力強さも、ふとした拍子に見せる弱さも全て彼が人間であるが故だ。決して皇城で囁かれているような化物だからではない。それだけは自信を持って言うことができた。彼はとても人間らしい人間なのだ。……魔女に太鼓判を押されるのは不本意かもしれないけれど。

魔女らしさを捨てた言葉にミルヒシュトラーセが顔を俯ける。

「あの御方は皇帝よ」

昏く、そのくせ芯のある声が耳朵を打つ。

その言葉の意味を頭が理解した瞬間、かっとな頭に血が上るのが分かった。

「それが何だと言うの？ そんなもの、ただの肩書きに過ぎないわ。勿論尊い人であることに変わりはないけれど、それはただ彼が歩んだ道についてきた付属品。彼の人間性を隠すようなものじゃないわ」

そうやって壁を作るから、ビリオン様もヴァノツサも一人になっってしまったのに。

手を握りしめる。そこから練り上げられる魔力は決してミルヒシュトラーセを害すつもりで生み出したものではないのだけれど、激

情が上手く制御できず元に戻すことができない。結果小さな風を手に巻きつけたまま彼女を睨めつけた。私の、レイアスティとしての言葉をぶつけて。

悔しくて涙が出そうだった。

あんなに一生涯命国や民を愛していても、誰も彼等を顧みない。民は己を護る存在を人間だと思ふことさえしない。

報われないにも程がある。そしてそれを理解した上で私に名を呼ばれて笑っていた彼等を思うと苦しくて、やりきれない。

「それが貴方の答えですか、ミルヒシュトラーク様」

ありつたけの怒りを籠めて睨み据えられ、ミルヒシュトラークが青い顔をして一步下がる。頭はとうに冷えているというのに、そういう時こそ相手に恐怖心を抱かせるものだと実感した。

けれど彼女にとっては拷問とも言える時間はそう長くは続かなかった。

「何をしている！」

「ミルヒシュトラーク様！」

テラスに雪崩れ込む文官や騎士がミルヒシュトラークを庇うように立つ。なかなか根性のあることだけれど、生憎こちらは攻撃する意志はない。手を振って魔力を分散させ、私はヴァノッサやギルバートがしていたような慇懃無礼な礼を一つ。

「少し虐めすぎてしまったかしら。どうかこれに凝りずにまた御話してくださいませね、ミルヒシュトラーク様」

その機会が訪れることは二度となさそうだけれど。

茫然自失の体で突っ立ったままのミルヒシュトラークを玉座の間へと戻し、人が消えていく。その最後尾に立つリスとヴァノッサだけが人の波に逆らって私に近づいてきた。

「何があつた」

怒気ではなく案じるようなヴァノッサの声が心に染み込む。

他の人間達と違い、私が攻撃する意志を持っていなかったことを見抜いているのだと思うと素直に嬉しかった。もっとも、手に風を

巻きつけていたのだから皆が危険に思うのは仕方がないのだけれど。ただ、事情を包み隠さず話すことはできない。

「何も」

掠れた声で答える。すると両頬を包むように彼の手が触れた。

「頼むからそんな泣きそうな顔で何も無いなどと言うな」

優しい声音でそんな事を言わないでほしい。

涙腺が緩むのを必死で我慢しながらそんな事を思い、自分を包む手の甲に触れる。血が通った温かさは紛れもなく生きている証だ。人らしい柔らかい熱だ。

「ヴァノツサ」

気付けば名を呼んでいた。

「何だ」

「いいえ、呼んだだけです」

意味などない呼びかけにしかしヴァノツサは「そうか」と頷いただけだった。そうしてリスを下がらせる。私がいつも通りでないと察した上での行動だろう。その声も行動もやはり優しく、私はらしくもなく必死に言葉を紡いでいた。けれど婉曲的な言葉を使おうにも上手くいかなくて、結局は直接的な言葉になってしまった。

「他の誰がどう思おうと貴方は人間ですよ、ヴァノツサ。私にとつて貴方は一人の人間です」

放った言葉に一体どれだけの意味があるのだろうか。

……ヴァノツサはこの言葉を聞いてどう思うだろうか。

今更だと笑うか、何があったか追求するか。

何となく反応が気になったので顔を上げてみる。そうしてきつかり三秒固まった。

「そうか」

姉妹月の光を浴びて濡れたように光る紅蓮の瞳が細められる。それがあまりに嬉しそうで、ああやっぱりあの言葉には意味があったのだと思えた。

顔を綻ばせる私にもう一度笑い、ヴァノツサが顔を近づける。

「貴女に出会えてよかった。レイアステイ」

白い呼吸が触れ合う。そんな距離で放たれた言葉と吐息にようやく自分が何をしているか気付き、慌てて身を引こうとしたが上手くいかない。安心しきったような色を帯びたヴァノツサの目から視線を逸らせない。そのせいで結果として突っ立ったまましていると、唇が触れ合いそうな距離まで近づいた。お互いの前髪が額に触れる。

その冷やかな感触に、ヴァノツサが軽く目を見開いて身を引いた。「っ！」

我に返った、というべきか。

慌てた様子で離れたヴァノツサはばつが悪そうに手の平で顔を覆った。ビリオン様に狙われないよう注意すると言ったことを思い出したのだろう。

「すまない」

「いえ……」

けれど謝られるには色々とこちらにも問題があったので、私は首を振って貴方のせいではないと伝えることしかできなかった。

頬が熱い。同時に自分は何を考えていたのだろうと思うと冷水を浴びせられたような気分になる。相手は皇帝だの人間だと言う以前に、もうすぐ婚儀を迎える存在だというのに。

そもそも今の状況でビリオン様を刺激するようなことをして得なご何一つ無い。にもかかわらず、何だったのだろう今のは。

きつと光に酔ってしまったせいだ。そう思いたい。もしくはあまりに激しい感情に我を忘れてしまったただけなのだ。そうでなければ自分の気持ちを整理する術がない。

常ならば軽口を叩くヴァノツサも今日ばかりは何も言えないのかお互い顔を逸らしたまま沈黙が落ちる。そうしてギルバートがヴァノツサを連れ戻しに来るまでのしばらくの間、私達はただ無言で月と星を眺めていた。

そして宴の終了と共に私は冬宮を出て地脈へと向かった。

あの夜起きたことについて、私もヴァノツサも一切口にはしてい

ない。

第四十三話 地脈

ここはなんて寂しい場所なんだろう。

音無き流れに耳を澄ませ、私は胸中で独りごちる。

大陸や海の奥底、人間では決して到達できない深い地の底。

脈動するように震え魔力と精霊達を巡らせていくこの場所は全ての命を従えている。けれど命の持つ輝きを感じさせない静寂と闇は、私に生まれ落ちる命よりも死にゆく命を連想させた。

ここで、この場所でビリオン様は何を思いながら腕を振るっただろう。

今はいない彼の人を想いながら目を閉じる。

ドクン、どくん。魔力の流れる音がする。

世界が生きている音がする。

「こら、ぼさつとしてんじゃないわよ」

アマンティの言葉に意識を引き戻される。

目を瞬く。すると風が巻き起こる気配と気遣わしげな声が耳朶を打った。

「体はどうですか？ レイアステイ様。辛い所はありませんか？」

「ええ……。どこも辛くないわ、大丈夫」

「それはよかった。僕達四人の結界でも駄目ならと案じていましたがこれなら問題なさそうですね」

地底の闇の中で鮮やかに浮かび上がる四大元素の精霊王達は、この地が持つ異質さなど気にも留めずに平気な顔をして顕現している。世界に近く、純粋な存在である彼等は膨大な魔力が流れる地脈にいても何の影響も受けないのだろう。けれど彼等のように純粋な力の塊でない魔女や人間ならば話は別だ。脆弱な肉体を持つ私達ではこ

の純粹すぎる力の前でその形を保てないのだ。今自分がこうして立っていられるのは、偏に彼等が結界を張って守ってくれているからに他ならない。

手の平に視線を落とす。何度も何度も握っては離しを繰り返す体に異常がないことを確認していると、ガラナが一際強い光を放ちながら前方を見据えた。

「嬢ちゃんの持つ魔力の強さも関係しているんだろう。それより、穴が増えてるように見えるが」

くいと顎をしゃくるガラナに習って三人が口を閉ざし視線を追う。一様に緊張した面持ちなのは、そこに以前にはなかった傷を見つけたせいだろう。一体いつできたものかは知らないけれど、精霊王の耳にも入らなかったということは私達がここに来る直前か。

こんな事ならヴァノッサの意向を無視して歓迎式典を欠席すべきだった。

唇を噛み締め眼前を見据える。声無き悲鳴を受け止めるために。モリス大陸直下、それもファルガスタ直下を通る中では一番大きな地脈に今自分達は立っている。その太く確かな脈に穿たれた穴は、莫大な量の魔力と精霊を本来通るべきではない道へと垂れ流していた。ビリビリと肌を打つ純度の高い魔力に、知らず心に恐れが湧き上がる。ここにいるべきではないと、早々に立ち去れと言われているようでならない。

「ビリオン様がこれを？」

鳥肌が立つ肌をさすりつつ放った問いに皆が一様に複雑そうな顔をする。言葉にして肯定されたわけではないのにその言いづらそうな顔で全てを察し、私は「そう」と頷いた。

「だったらこれは私が修復しないと」

彼の罪は私の罪でもある。元はといえば自分が原因なのだ。

恐れから後ずさりそうになる足を強引に前へと押し出す。精霊達の創り上げた結界があるとはいえ、それらは決して万全ではない。無理矢理歩を進める私を拒絶するように体を押し流そうとする魔力

に抗う足がガクガクと震えた。

縦横無尽に駆け巡る、完成されているとは到底思われぬ流れに群青のドレスがばさり音を立てて翻る。そうして倒れそうになる体を後ろからエイミーが風を呼び起こして支えた。乳白色に彩られた柳眉が顰められる。

「レイアステイ様、無茶はなさらない方が」

「そうだよ。小娘は引っ込んでな」

胸を、腹をぐつと押す力と背中を支える風が拮抗し息が一瞬詰まる。

「そうは、言っても……。ここで私の魔力が有効に働くか確かめに来たんでしょう？」

そんな私の脇をコロコロと精霊達が転がっていくのが見えた。魔力の流れに耐え切れず外に押し流されているらしい。

目の前に飛び込んできた精霊の一人を胸に抱き止めると、淡い桃色の光が驚きに震えていた。まだ生まれただらく人の姿を取れない精霊は明滅する光で感謝の意を示した後でアマンティの傍に飛んでいく。成程、大地の精霊だったのね。

いくら精霊王達が注意喚起すると言えど、突発的な攻撃には対処できない。それが現状を生み出しているのだと感じ、私は咄嗟に地上を見上げた。

地震の直接の原因は地脈破壊だけれど、大地が振動するのは地脈から溢れる魔力や精霊達はその膨大な力をありとあらゆる所にぶつけているからだ。ファルガスタ直下に穴を穿たれてしまっただけは溜まりもない。

昏く闇の帳が落ちたこの場所からはファルガスタの状況など窺い知ることにはできない。けれど、せめて今この時彼の国が穏やかな眠りに包まれていたらと願いながらじつと地上を見上げる私の肩に硬い岩が触れた。

「大丈夫さ、地震は起きちゃいない」

「……そうね」

大地が揺れる事で失われる命よりも私の心情を慮ったアマンティの言葉に返す声は苦い。

違うでしょう？ アマンティ。

そう喉元まで出かかった言葉を呑み込み、握りしめた手に更なる力を籠める。

彼女の言う通り地震は起きてなどいない。その証拠に私の体調は万全だし、一番大地の嘆きを聴ける場所にてなおこの耳は無音の鼓動しか感じないのだから。けれどそれは一時、ほんの一時の話に過ぎない。溢れてしまった力。世界を巡る魔力の本流を在るべき流れに還さなければ、いつしかもつと大きな災害を生み出すのだということぐらい私にだって分かっていた。

「急がなきゃ」

取り返しの付かない事態が目の前で起こってしまう前に、どうか焦燥感に震える声で自分を叱咤し、二人の支えなしに立ち上がる。けれどそんな私の体を縫い止めるように炎と水の結界が前後左右を貫いた。足元にざっくりと突き刺さるそれは属性の相性が悪いというのに、何の矛盾もなく隣り合って存在している。ゆらり揺れる灼熱も、じゅう、と音を立てて水蒸気と化しながらも頑固にこびりついて消えない水の膜も。おかげでこちらは一步も動けなくなってしまう。

「これは一体何のつもり？」

鋭い眼光で射抜いた先にいる二人の精霊王は、盟主の怒りを直に受け止めつつも結界を解かない。

「エイミーとアマンティの言う通りだ」

「今は無理をせず、この場所に慣れて頂きませんか」と

剣を、槍を手に余裕の表情でこちらを見下ろすガラナとマーグリスは、きつと私が結界を解除できないと知っているのだろう。それだけの力もまだ使えない程疲労している事など御見通しだと静かな眼差しが告げていた。その読みが当たっている事が悔しくて素直に領けないのだけれど。

「大丈夫、そんなに焦らずともまだ地震は起きませんよ」

やんわりと慰めるような声に口元を引き締める。無言ですとんと腰を落とすと、ふわりと広がったドレスの裾同様安堵した四人分の呼吸が聞こえた気がした。……何よ、これじゃまるで私が皆に駄々をこねているみたいじゃないの。心の中でそう呟き、途端に苦い気持ち広がる。否定できないだけに。

全身から力を抜く。するとどっと冷や汗が噴き出し、不快感に眉を顰める。自分がこんなに疲労しているとこんな風になるまで気付かなかったとは。最初は炎の結界のせいかとも思ったけれど、どういふ原理か気温には変化がない。となるとこれはやはり自分の体が悲鳴を上げているのだと少々理解した。地脈に転移したばかりの時は然程ではなかった疲労が、時間の経過と共に大きくなっていくのを認めざるを得ない。結界があってもこればかりは自分の体が脆弱なのだから仕方が無いのだけれど。

本来、精霊以外の存在が地脈を訪れるべきではない。それを押しこきまで来たのだから犠牲が出て然るべきだった。マーグリスは慣れて貰わないといけないと言っていたけれど、本当に慣れる日が来るのかも怪しい所だ。無論今は彼の言葉を信じるしかないのだけれど。

溢れ出す魔力もここまでは届かないらしく、時折転がってくる精霊以外に結界に触れるものはいない。頬を打つ風も弱くなってきた事からして恐らくは結界を強化されているのは分かったが、しかしそれだけではないだろう。地脈を流れる魔力量自体が減っているのかもしれない。世界が自ら己の内に流れる魔力を調整できるのかは知らないが、それ以外に説明する言葉が見当たらない。

ふうと息を吐き出す。釣られるように四人も緊張感を解き、私を取り囲んだまま座り込む。立っただけでも座っただけでも疲労など感じないはずの彼等がわざわざそうするのは、私と視線を合わせるためか。何となく嫌な予感を感じる。大体の場合において、彼等が同じ視線で話をする時というのはろくな話じゃない。どれ程の大事の前

であろうと、彼等は私の持つ緊張を無視して途端に関係ない話に持ち込む悪癖があるのだから。

いくら私達と価値観が違うと言ってもね。

嫌な予感を前に側頭部の痛みを感じていると、その間にも相性の悪い属性の精霊王同士は距離を取り、そうでない精霊王と並んで座している。あまりにも自然な配置につき、口火を切ったのはガラナだった。

「ところで嬢ちゃん」

来た。

「どうしたの？ ガラナ」

こちらの警戒心を解こうとあくまで軽く放たれた声に私も似たような声で返す。実際は地脈や地震への懸念が胸にわだかまっていたけれど、おくびにも出さず首を傾げる。何故だろう。そうしなれば心の準備ができないとでも思っているのだろうか。

火照った肩にさらりと銀糸が触れる。細く冷たい感触に心地良さを感じる私にガラナは一切言い淀む気配を見せずに、これもまた軽く問うた。

「嬢ちゃんはその男に惚れでもしたのか？」

「は、い？」

けれどこの問いは、全くの予想外だった。

今、なんて？

ガラナからの問いだから私はてっきり他の三人がするよりは真面目な話だと思っていたのだけれど。そもそもこの問いに出てくるあの男というのは誰の事かしら。ヴァノツサ？ ビリオン様？ いいえ、そんなことよりその問いをガラナ、貴方がするの？

目を瞬きガラナを凝視する。だがこの根がどこまでも真面目な炎鬼は己が口にした問いを一切否定せず、流しめせず、私をじつと見返して沈黙のまま答えを待っていた。まるでそれが世界に関わる一大事なのだと言わんばかりに。

無論、返答如何では一大事に発展する恐れはある。あるが。

それは今、ここで、よりによって破壊されたばかりの地脈前で話だろつか。

「な、何でそんな話になるの……？　というよりも、今それどころじゃ」

意味もなく怯んで後ろに下がりそうになる私の背中を呆れ混じりのアマンティの声が打つ。

「あたくしですら訊けなかった事を随分あっさり言うんだね、あんたって……」

石片がカラカラ落ちる音に混じってエイミーが手の平で口元を隠してくすくす笑う。

「デリカシーがないって言えばいいのかしら。でもそんな貴方に感謝しますわ」

「僕達全員ずっと気にしていましたからね。それにここなら誰にも聞かれる心配はない」

「ああ、ここにはビリオン坊に情報を流す精霊はいないだろうしな」
マーグリスまで。　というか何なの、これって場所まで決めて訊くような事なの？

頭を抱えたい気持ちになりながら必死に言葉を探し、膝を抱えて彼等を見上げる。

「ビリオン様に情報を流す精霊ってなに」

汗で肌張り付く布地をつまんで風を送り込みながら尋ねた私に、マーグリスが音もなく微笑む。うっかり口を滑らせたガラナを窘めるような、私を上手く丸め込もうとするような笑みに眉根を寄せると、案の定首を振られた。

「その話はまた後ほど」

「どちらかと言えばそっちの話の方が重要じゃない」

ぼたりぼたり落ちる水滴が地面を濡らす。その透明な滴を睨む私の前でエイミーがすっと立ち上がった。渦を巻いて風が周囲を圧倒する。

「いいえ！　私達にはこの話の方が大事なんですわ」

ぐつと拳を握りしめて力説するエイミーの言葉と態度にどこからどうやって突っ込めば分からなくなり痛む頭を押さえる。それを好機とばかりにエイミーがにこりと上機嫌に笑んだ。……仮にも自分は貴方達の盟主なのだが。

乳白色だった風が透明感を増し、銀の輝きを放つ。魔女や人間の体とは逆で精霊達には地脈を巡る魔力が肌合っているのだろう。今人の体を得たら肌がツヤツヤしているのだろうと容易に想像させる元気の良さで、彼女が饒舌に続ける。

「あの時、随分といい雰囲気だったじゃありませんの。ですから私てつきりレイアステイ様がヴァノツサ帝に心惹かれたのかと思っておりますのに」

やはりそうか。ヴァノツサの話か。

できることなら一番話題にしたくなかった話に膝を抱え直して遠くに視線を据える。

「……あれは」

もごもご言い淀んでしまう。

状況的に誰に誤解されても文句の言いようがないのだけれど、それを何と言って説明すればいいのだろうか。心が向かうというのは違つと、それだけを言うのは容易いが、じゃあどうしてあの時と問われると反論できない。そんなもの、私にだって分からないのだから。

月明かりに濡れた紅蓮の双眸を思い出す。

あの眼差しも笑顔も言葉もあまりに嬉しそうで、自分が口にした言葉が正しかった安堵に溺れた。意味がある言葉を紡げたのが嬉しかった。警戒心の欠片もない、良く言えば安心しきつた、悪く言えば腑抜けた顔から目が離せなかった。ただそれだけの話なのだ。けれど“ただそれだけの話”がどれだけ問題か、この場にいる誰よりも私が一番理解していた。

「違つ、違つ。あれは」

あれは、なんだ。続く言葉もなくただ首を振る。

自分が何をしていたのか理解した瞬間冷えた頭で、何だったんだ今のはと考えなかったわけじゃない。けれどもそれは地脈へ向かうという使命感によってきつちりと蓋をされ、心の奥底へ放り捨てたのだ。まさかこんなに早く掘り返されるとも知らずに。

駄々をこねる幼子のようにふるふると首を振って「違う」と続ける。理由を、確固たる理由を語れず自分の内にある多分これは本心だと思えるものしか差し出せない私を、誰も責めたりはしなかった。代わりに苦笑交じりに幼子を見守る親のような視線を向ける。ああ、勿論彼等は私よりもずっと長い永遠を生きているのだから親と言っても決して過言ではないのだけれど。

地脈中を埋め尽くす魔力が体に染みこむ。それは毒とも言える力を孕んでいたが、同時に私がここに適応するのに必要な薬でもあった。

体が熱くなり、ぼうと意識が曖昧になる。

でも、まだ駄目。今ここで倒れてしまったら地脈が破壊されたまま捨て置かれてしまう。そんな事を許したくはなかった。

約束したのだ、ヴァノツサと。良い報告をする事を。

その為に私は此処に。

胸中で呟き慌てて否定する。違う、私はその為に地脈に来たんじゃない。勿論地脈を癒せるか確かめたかったというのは本当だけれど、元はと言えば自分を冬宮から遠ざける為にマーグリスの提案を嬉々として受け入れたのだ。ヴァノツサとミルヒシュトラーセにつがなく婚儀を終えてもらう為に。だというのに一体私は何を馬鹿な事を考えていたんだろう。

体が魔力を受け入れるのを邪魔しないよう、極力体を動かさず膝の上に顎を乗つけて肩を小さくする。そうして熱い息を吐き出しながら自己嫌悪に陥る私にアマンティが盛大な溜息を漏らした。

「小娘のことだ。どうせ同情でもしたんじゃないやなくて？」
首を傾げてアマンティを見やる。

ガラナのように惚れたと言わず、エイミーのように心惹かれたと

も言わない。同情の一言で片付ける彼女の言葉は、成程確かに一番近いかもしれないと私に感じさせた。その証拠にどうせと決め付ける言葉にも同情という単語にもどちらにも反論できない。

けれど、あれは本当に同情だったのかしら。

皇帝であるヴァノツサがそんなものを欲しがっていないのは百も承知だ。それでも尚、私は彼に同情したのだろうか。もしそうなら随分失礼な話だと言わざるを得ない。だが報われないと腹を立てるのは可哀想と憐れむ事になるのだろうか。それはそれで、何かが違う気がするのだけれど。

否定せず黙りこむ私を見下ろし、エイミーが「まあ」と大袈裟に背中を仰け反らせて驚きを表現する。

「あれって同情でしたの？　ですがそれではあまりに……その」

「あの坊主もとことん報われんな。相手がビリオン坊なら一笑に付している所だが」

エイミーはともかく、腕組みして真剣な面持ちで唸るガラナを見て何故か不安感がこみ上げる。

「報われないってどういうこと？」

こちらとしては向こうが報われてほしくて必死で言葉を搾り出したというのに、それが悪い事だったかのように言われると途端に自信がなくなる。若干落ち込みながら半眼で彼等を見渡すと、皆を代表してマーグリスが口を開いた。

「レイアステイ様。僕達は精霊ですが、人類の始祖が現れた時からこの世界で彼等を見守ってきました」

「？　それはそうでしょうね」

精霊とはこの世界が生まれた時から存在するのだ。彼等が如何に長命かは今更言われるまでもない。

肯定するとマーグリスは小さく頷いた。

「ええ。それで、ですね。これは今まで散々観察してきた経験から言わせてもらおうんですが」

そこまで言うともマーグリスは珍しく、とても珍しい事に非常に言

い辛そうな顔をしてから私を真っ直ぐに見据えて、実に真面目な顔をして言った。

「思うに、彼は勘違いをしたのでは」

一瞬何を言われたのか分からなかった。

「勘違い？ 意味が分からないわ」

心底分らないので眉を顰めて問うと、再びエイミーが立ち上がって拳を振り上げた。

「殿方というのは自分が好きな女性にちょっとでも受け入れられると、すぐ好かれていると勘違いしてしまう生き物なのです！ しかし口付け一歩手前まで許したんですもの。絶対ヴァノッサ帝はレイアステイ様の御心が自分に向かわれていると誤解なさっているはずですわ」

「……そうなのかしら」

「そうだよ！ ああもう！ 何だってこんな鈍い子に育ったんだか！」

呟きにアマンティがやっていられないとばかりに怒号を放つ。そこまで怒らなくてもいいじゃない。

それよりもエイミー、貴女どうしてそんなに楽しそうなの。アマンティに怒られる私を獲物を見るような目でねっとり見てこれ以上何の話をするつもりなのか。頼むからもう一言も口を開かないでほしい。

精霊は基本的に人間に関心を示さないが、風姫であるエイミーはその中にいて異彩を放つ程噂話を好む。特に人間の女性がするような話を好んでいるのだから質が悪い。今回の話もガラナが口火を切らなければ彼女がその役を担っていたかもしれない。そう思うぐらいに楽しそうだった。

肩を落とし、半眼のまま巨大な空洞を見つめる。

鈍いと言われるのは心外だが、精霊達でさえ誤解したほどの“勘違い”をされているというなら。

「これも、そのせいなのかしら」

大地が震えようと命が零れ落ちようと構わないと一切の慈悲無く空けられた穴がその囁かな勘違いのせいなのだとしたら。もしそうならこれも、私のせいだ。アマンティに鈍いと言わしめた私の浅はかさが原因だ。

火照り、痺れる体が無意識に震える。内側からぞくりと寒気が這い上がってくるようだった。

「どうでしょうね。夜会で何事もなかったとしても攻撃されていたような気はしますが。炎帝も攻撃を受けていないようですし」

蒸気が全身に纏わり付く。水の結界から溢れたそれが私の体温を下げようと肌に触れるといくらか気分が楽になった。そしてマーグリスの言葉にも。

現時点でヴァノツサが無事である事を知り、誰にも悟られないように安堵の息をつく。すると何を我慢できなくなったのか、勢いよく炎に包まれた剣を地面に突き刺してガラナが私以外の三人に刺すような視線を向ける。

「お前等、そんなに嬢ちゃんを責めるな。別に俺は文句が言いたかったわけじゃないんだ」

「あら、そうでしたの？」

「当たり前だ。俺は別に嬢ちゃんが誰に惚れようと構わん。ただ、気になったから訊いただけだ」

そうしてこの場で一番二人の炎帝と相性がいいのであろうガラナは、灼熱の肢体を私に近づけないよう一歩下がってから続けた。

「それに地脈破壊はビリオン坊とあの坊主に不死掛けを施した輩の意志だ。嬢ちゃんのせいじゃないんだからいちいち気にする必要もない」

ヴァノツサの事を問うた理由とは違う言葉は、もしかして私を慰めてくれているのだろうか。不器用だが誠実な言葉に表情を和らげると、マーグリスが堪えきれずと言った体で吹き出した。いつも穏やかにここにこにこ笑っているのとは違う、体を震わせて笑う姿にガラナの眼光が剣呑さを増す。

「何だ」

「いいえ？　ただ、アマンティの次にレイアステイ様に甘かったのはガラナだったなと思ひ出しまして」

くつくつと笑う声にガラナは毒気を抜かれたようにぽかんと口を開ける。しかしこれにはアマンティが反論した。

「ちよつと、別にあたくしはガラナみたいに甘くなんかなくつてよ！」

「十分甘いじゃありませんの」

そのままぴしゃりとエイミーに黙らされ渋々座り込んだアマンティを見てようやく意識を取り戻したのか、ガラナは小さく首を振つて突き刺した剣を抜いた。

「みたいにとはなんだ、みたいにとは。……まあ全く甘くないとは言わんが、お前等と大差ないだろう」

返事はどこからもない。それを意地になつて沈黙で返すガラナにマーグリスが嫌みたらしいまでに清冽な笑顔を浮かべていたけれど、それは見ない事にしよう。後々揉め事に巻き込まれたくはない。

精霊達の賑やかさに、無音の闇に対する寂しさや恐怖心が和らいでいく。何だかんだと言いながらもヴァノツサを気遣っている彼等の姿を見ていると心が軽くなるからだろうか。夕方まで、あれだけお互い意地を張り合つて一触即発状態だったというのに。本当に彼等といると飽きないし余裕が出てくる。自分の肉体を容易に壊せるであろう魔力の本流の中にあつても笑えるぐらいには。

だから私は頑張らなくてはならない。彼等の家を、住処を取り戻す為に。

「いつもありがとう、皆」

火照る体を動かして小さく笑つて囁くと四人は一度こちらを見て視線を逸らしてからもう一度、今度は目を剥いて私を見る。……何故そんなに驚いた顔をされるのか分からないが、笑い返したり体を逸らしたりと各々好き勝手に動きながらもどこことなく嬉しそうだから文句を言うのは止めた。代わりに心の中で決意するのだ、必ず地

脈を元に戻してみせると。

「こつやって私は“だから”という言葉を集み重ねて、増やして、決意をゆっくりと固めていく。そんな事をしてきたせいで今や自分が力を揮う理由は随分と増えてしまったけれど、どれだけ想いを積み重ねても決意の中心で嫣然と笑んで手を伸ばす男の姿が離れない。それが誇れる事が自己嫌悪に陥るべき事か分からないまま歩いてきてしまった私の耳に、エイミーのはにかんだ声が聞こえた。

「さっきはあんな事を言いましたが、私達は誰もレイアステイ様の言葉が間違っていたとは思っておりませんわ」

「私の言葉？」

何の話だろうか。唐突の告白にきょとんとする私を軽やかな声が打つ。闇を切り裂くその声は涼やかで、私やヴァノツサを救う重みをも持っていた。

「ヴァノツサ帝が人間だという言葉ですわ。人間達の中では異質でも、彼はこの広い世界の中で見れば取るに足らない命の一つに過ぎませんもの。勿論それを言うなら精霊も魔女も変わらないと思いませんが」

取るに足らないという言葉を皇城で言おうものなら、リズ辺りに怒号を飛ばされてしまいそうだ。だが私はエイミーのその言葉に納得して素直に頷いた。

「……そうね。ええ、私もそう思うわ」

命は、命の前に対等なのだ。それが同族であれば尚更。種族の違いによって差別や区別をされる事はあっても、最低限同族の中でぐらい対等でなければならぬ。貧しい者も富める者も根本は同じなのだから。

何度も首を縦に振る私にエイミーが優しく微笑んだ。

「あの時レイアステイ様に人間だと言われて喜んだヴァノツサ帝を見て、私は哀れに思いました。それからビリオン帝のことも。人間というのは壁を作るのが相当好きなんですのね」

ああ、確かにそうかもしれない。人間というのは自分と誰かと区

別するのに忙しくて、他の事を疎かにしてでもそちらを優先させてしまう。その度に誰かが傷ついて、修復できない怨嗟が続く。馬鹿らしい話だ。だけど、と私はそこで自分の胸に手を当てた。私はエイミーみたいに彼等を哀れんだのだろうか。私

苦しくて悔しくてやりきれないと思った。だから腹を立てたし、結果としてミルヒシュトラーセを怯えさせてしまった。ただ、あの時ヴァノツサの名を呼んだ私のあの衝動は、そんなものではなかった気がするのだ。

そしてもう一つ。私は、果たして壁を作らずに彼と接した事があったのだろうか。

自分は魔女だ。事実であるその言葉に逃げた事がないと、私は胸を張って言えるのだろうか。……答えは否だ。ビリオン様にもヴァノツサにも、私は同じようにその言葉を振りかざして防衛戦を張っている。こればかりは例え誰が慰めようと覆せない事実だと、今ならはつきりと言える。相手を一人の人間として認めるのは容易いが、自分という存在と混ぜ合わせるのには私にとってひどく難しい話なのだ。そしてそれこそが二人を傷つけた。否、傷つけている。ビリオン様とフェンネルを巡った時、嫌という程思い知らされた事実だ。

でも、それなら、私はどうすればいいの。

贖罪としてビリオン様と共に行く道を選ばなかった私は。

謝っても受け入れてくれそうにないヴァノツサに対して私は。

自分は魔女だ。その言葉がなければ皇城内で立っている事もできない私は。

瞼を閉じる。目が痛くて熱くてこれ以上開けていられなかった。

「僕らも随分長い間レイアステイ様の傍にいましたが、あんな風に純粹に怒っている姿は初めて見ました」

「ごちゃごちゃと色んな感情が詰め込まれた頭の中にずっと入り込むマーグリスの声に「だって」と拗ねた声を出した自分は、何も考えていなかった。マーグリスの穏やかな声がそうさせたのかもしれない。思うがままに、感じたままにあの時の事を思い出す。」

「彼等がちゃんと人として見られていないなんておかしいじゃない」
言いながらああと頷く。そうだ、これだ。

感じた悔しさはそんなのはおかしい、間違っているという反抗心故に生まれたのだ。

「国や民が傷つかないように必死で両腕を広げて護ろうとしている彼等だって、肌が切れれば血が出るし血が出れば痛みを感じるわ。そんなの誰だって同じ事よ。けれど誰もそんな簡単な事に気付いてあげていない。しかも彼等はいつだってそんな境遇に甘んじているのよ。自分が人間だって一番理解していながら、否定されるのを受け入れてそれで彼等にとつては長い時を過ごしてる。でもそんなのっておかしいじゃない。だからせめてミルヒシュトラーク様にはヴァノッサを人間として受け入れてほしかった」

魔力のせいだろうか。靄がかかったような意識の中で自分が何を言っているのかよく分からなくなってきた。

がくりと傾く私を支えるように風が柔らかく半身を包み込む。いつの間にガラナとマーグリスの結界が解けたのだろうか。「峠はすぐそこですわ。そこを越えれば楽になります」耳朶を打つ声に理由訳も分からず頷くと、静かに私の言葉を聞いていたマーグリスがふいに問うた。

「レイアステイ様は、あの炎帝に何を願っているんですか？」

……よかった、その質問になら簡単に答えられるわ。

私は朦朧とした意識から一瞬霞が取り払われたような面持ちで笑った。

「幸せになつてほしいわ。ビリオン様のように不死掛けを求めず、幸せに生きて死んでほしいと思ってる」

それはかつて、ビリオン様にも願った想いだ。

弧を描いた唇から吐く息が熱い。体中で炎が踊っているような感覚に胸を掻きむしると、その手をそつと押さえてアマンティが言葉を零した。

「あなた変わったわね」

「そ、う？」

「ええ、少し前なら二言目には面倒臭いだの何だのと言って人間はおろかあたくし達とも関わろうとしなかつたくせに。変わったというより、戻ったというべきかもしれないけど」

「……そう、なのだろうか。アマンティが言うならそうなのかもしれない。少なくとも今の自分の中に、面倒だから世界が終わっても構わないという気持ちはない。人間と関わるのは少し面倒だけれど、ヴァノツサヤリズと話すのは楽しかった。」

「うん……」

あんなに嫌だったファルガスタも悪くないと思っている。そしてそう思ってる自分も嫌じゃない。

「そう、かも」

頬を緩めて笑う。それ以上はもう動けそうになくて、私はくたりと全身から力を抜いて倒れこむ。

熱い。熱くて苦しくて、何か吐き出してしまいそうだった。

聴覚以外の全ての感覚をぶつりと切られてしまったように、目も開けられず体も動かせない。それでも自分が今彼等に支えられ、守られているのだということは分かった。その証拠に声がすぐ傍から聞こえるから。

「ねえ、これ本当に大丈夫なのかい？ 随分ぐったりしてるじゃない！」

「大丈夫なはずですが……。もう少しゆっくりやった方が良かったんじゃないか」

「気を失っただけだろう。今が峠だ」

「結界無しで地脈にいるんですものね。この程度で済んでるのがすごい話なんですわ」

待って、結界がないってどういう。

エイミーの言葉に問おうとして口も動かない事に気付く。舌打ちしようにも舌さえ動かない。

「それにしても、随分嬉しそうじゃないですか。アマンティ」

「それはあなた達も変わらないんじゃない？ 揃いも揃って顔がにやけてるわよ」

「あら、当然じゃない。だってレイアステイ様のこんな笑顔久しぶりに見たんだもの。嬉しくならない方がおかしいわ」

「そうだな。もうこの際嬢ちゃんがああ坊主達のどちらに惚れてるかなどどうでもよくなってる」

言葉同様心底嬉しそうな声に首を傾げなくなる。私、一体どんな顔をしていたのかしら。

でもそれはガラナの言葉を借りるならどうでもいいのかもしれない。彼等がこんなに喜んでるのなら。

「こんな風に笑えるなら大丈夫だな」

「ええ。万一の時の為には地脈に一人で入れるよう、こうやって四人がかりで練習したわけですし」

「ああ。これならあたくし達がいなくなってもやっていけるだろう。修復だけなら魔力があればいいわけだしね」

「ですが、そうなるかと寂しくなってしまうすわね。私達もレイアステイ様も」

何の話？ ねえ、貴方達何の話をしているの？

いなくなるとか一人でも大丈夫とか、そんな話全然聞かされてない。

けれど体は動かせず、意識もそろそろ途絶えてしまいそうだ。

熱いのか冷たいのか、その感覚さえ失われたままの私の上にガラナの声が落ちる。瞼の裏は真つ暗闇なのに、彼が今笑っているように感じられて無性に泣きたくなった。

「それは大丈夫だろう。嬢ちゃんには がついてる」

掠れた声が聞き取りづらい。だがもう一度言っただけいいと思う私の気持ちとは裏腹に、彼の声が遠ざかる。

「レイアステイ様」

返事など求めていない、ただ気絶した私に呼びかけただけのマーグリスの声。

でも、もう、だめ。

意識が、遠のく。

「
」
声無き声が私の思考をなぞるように届く。その言葉の意味も発した相手の名前も顔も知らないまま、私は深い眠りに落ちた。

ドクン、どくん。自分の鼓動と重なるように魔力の流れる音がする。

第四十四話 銀影

魔力と鼓動の音に揺られて夢を見た。

懐かしい夢だった。少なくとも懐かしさが胸一杯に込み上げる、そんな夢だった。

ぐんぐん駆け抜けていく先に広がる一面の青空と濃い草の匂い。

その中を、土を踏みしめて前へ前へ進む。小さな手に淡い色の花びらが一片落ちた。

「レイア！」

聞き慣れた声に足を止め、振り向く。

手に乗った花びらと同じ花が咲き乱れる中に立つ影が二つ近づいてくる。

その後ろでは四大精霊の王達が微笑んで私達を見ていた。それに私は笑い返す。

此処はどこ？

体が自分のものではないように勝手に動く中、胸中で独りごちる。こんな花の咲き乱れる場所を私は知らなかった。……それに、あの影。

逆光になり見えない顔を見上げる。その顔に向けて私は一人呟いた。

「貴方達は誰？」

問いかけに答えるように一陣の風が吹く。

花吹雪に覆われ、空も草も影も精霊達も皆みんな消えて

。

落ちていくような覚醒感に揺さぶられて目蓋を開ける。

昏く、闇の帳が下りたような静けさはどこか微睡みに似ていて私はふと夢の中にいるのだろうかと思ったけれど、全身が豪雨に打た

れたように濡れた不快感にああこれは現実なのだと思付く。額から伝った汗が瞬きと共に目に触れて染みた。小さな痛みで眉を顰める。すると僅かに離れた場所から囁き声が降ってきた。

「気付いたか」

「ガラナ……？」

低い声に反射的に問い返す。そうして身を起こそうとすると、白い絹糸をより合わせたような風と石塊に押し留められた。

「じつとしてな」

「急に起き上がるのはよろしくありませんわ」

「エイミー……、アマンティ」

意識にかかった霞が段々と薄れていく。視界も鮮明になり、私はようやく自分の傍に四大精霊の王達がいるのに気付いた。私の目覚めに安堵していたのか、皆一様に顔を綻ばせている。その見守るような優しい笑みに、頭がちくりと痛くなった。

何か忘れているような。

あるいは大事なものを取り落としてしまったような、そんな気持ちになる。何かしら、さっきまでは確かに持っていたはずのものをうっかりどこかになくしてしまったような気さえする。けれど頭を捻れば捻るほど答えが遠のいていき、私は渋々考えるのをやめて辺りを見渡した。

精霊王達の放つ光に晒され、深く穿たれた穴とそこから流れ出ていく魔力や流れに逆らえない精霊達が見える。耳を澄ますと物悲しいまでの鼓動が聞こえた。

そうだった、ここはまだ地脈だったのね。

地脈が抱く魔力に耐え切れず意識を失った私を彼等が守ってくれていたのだろう。

胸に手を当てる。体内を焦がす炎のような熱は既になく、汗で水分を失った乾きに満たされる。けれどそれだけであとはどこも苦しくなかったし、地脈の魔力に当てられても然程辛くはなかった。これが私が意識を失う直前に皆が話していた訓練の成果なんだろうか。

そこまで考え、はつと息を飲む。目覚めたら彼等に訊きたいと思っていたことが沢山あったのを忘れていた。

結界無しで地脈にいるとか皆がいなくなるとか、勝手に進められた話の殆どに私は説明を貰っていない。一人でも大丈夫だなんて、そんなものは他ならぬ私が決める事だ。そして決断は例え最低限でも説明がなければできない。

「ねえ、皆」

「レイアステイ様」

エイミーとアマンティに体を支えられながら慌てて口を開く。それに重なる柔らかな声に目を向けると、今まで口を開かなかったマーグリスがつつとこちらに近寄ってくる。

「何よ、マーグリス」

「これだけ汗をかいてらっしやるんです。喉が乾いたでしょう」

ぼたり、水滴を落とすマーグリスの姿は確かに喉の渴きを促す。

喉に指を触れさせると、からからになった体が水分の摂取を訴えた。声さえもが乾くその一歩手前。絶妙な時を計って彼が笑みを深めた。どこか計算高さを感じさせる表情は私が言わんとする事を打ち消そうとしているように見える。前々から有無を言わさぬ態度で話す彼ではあるが、ここまで周到に物事を隠されるのは面白くなくて私は眉根を寄せた。

「マーグリス、貴方はとても賢い精霊王よ」

「ありがとうございます」

「でも、その賢さをたまに憎らしく思うわ」

他の三人とは一線を画す人間臭い賢さを半眼で睨めつける。しかしマーグリスは私の怒りなどどこ吹く風と清冽な笑みを浮かべるのみで詫びもしない。非を認めればそこから切り込まれると知っていることだろう。こういう所も本当に人間臭い。見た目だけなら魔女である私の方がずっと人間に近いのに、内面は精霊王である彼の方がより人間に近かった。自分が種族の違う人間という存在に然程違和感を覚えない理由を、こんな所で思い知らされる。

「これを」

黙りこむ私を息を詰めて見守る三人とは正反対に、あくまでも余裕たっぷりにマーグリスが腕を差し出す。何事かと首を傾げると、手の平から丸い水の球体が現れた。丁度飴玉と同じぐらいの大きさのそれを受け取ると、存外弾力性に富んでいるのが分かる。水でできているはずなのに流れ出ていかないのは不思議な話だ。

「湧き水を固めて作りました。口に入れば水に戻りますから御安心を」

疑念を汲み取ったのだろう。マーグリスがすかさず言う。

静かな声に文句を言いたい気持ちがかみ上げる。けれどももういい加減身体の乾きが限界だ。

「……そう」

渋々睫毛を伏せる。腹立たしいけど、貰ったものにとりあえず感謝した。

「ありがとうございます。頂きます」

「はい」

敵かな声を耳に水でできた飴を口に含む。言われた通り舌に弾力を感じたかと思うとすぐに球体は水に還り、喉に清涼な冷たさが流れこむ。一体どれだけの量を固めていたのか、見た目より遙かに多い水が次から湧いて出てくる。こんなに飢えていたのかと驚くほど夢中で何度も飲み下すと、喉から伝って肩に腕に腿に足に水分が行き渡るのを感じられた。

はあっと息を吐き出し、自分が呼吸さえ忘れていたのだと知る。

水分が体に行き渡るとより体が楽になったことが実感できた。あれほど異物を拒絶していた地脈が今は私に居場所を与えてくれているようですらある。

魔力が馴染んだのだろうか。

両手を握って閉じる。けれど自分の魔力はいつもと同じで変わらないように思えた。少なくとも本質は。違いがあると強いて挙げるなら量が増えた気がするぐらいだ。もっとも私の内に入る魔力量に

は限界があるのだから大きく変わったとは言えないけれど、これだけ調子がいいのも久しぶりだった。

眠っている間に地脈から溢れ出た魔力が体内に混じりこんだのかもしれない。

そう考え、私ははたと思い出した。

勢いよく顔を上げる。驚いたように目を見開く皆に今度こそ問いかけた。

「私、どれくらい寝てた？」

魔力が体に染み込むのにも時間がかかる。こんなにも体に満ち満ちる程になるまでに、一体どれだけの時間を要しただろう。そんな不安を抱えて縋りつかんばかりに答えを求めると、岩壁にもたれかかって離れた場所からこちらを見下ろすガラナが口を開いた。

「案ずるな。せいぜい三日程度のものだ」

「三日も！？ その間地震は？」

せいぜいって、そんなにあっさり言える状況ではないのに。地脈破壊によって、いつ地震が起きるか分からない状況下では十分過ぎる時間の経過だ。青ざめ、周囲を見渡す。幸い岩盤が崩れたようには見えないし、魔力の鼓動は正常でも地震が起きたようには思えないけれど、寝ていただけに不安は募る。身の安全さえ確保されていれば何があっても眠っていられる自信があるだけに。

上を振り仰ぐ。ファルガスタを支える大地を注視する私の肩にアマンティの手が触れた。

「あるわけないだろう。ビリオン坊やもあなたがいるのを知ってるのよ。この三日、地脈には一切足を踏み入れていない」

アマンティとは逆の肩にエイミーが触れる。

「ここで地脈を破壊すればレイアステイ様が巻き込まれるかもしれませんがね。ビリオン帝はレイアステイ様の事になると慎重ですから」

淑やかな笑みを浮かべて頷く姿に強張った体から力を抜く。問いは山ほどあったけれど、ファルガスタに何事もなかったという話に

後はもうどうでもよくなってくる。……ファルガスタというよりはヴァノツサ達と言った方が正しいのだろうが。

私が無事を願うのは見も知らぬ民ではなく、いつも顔を合わせていた者達だ。彼等が傷つくのは流石に夢見が悪いし、彼等が愛すべき者を失って悲しまれると更に夢見が悪いからと民を想う。それだけの関係しかないのにファルガスタの無事を願うのは凶々しい気がして、私は自分の考えを誰にも悟らせないようにふいと顔を背けた。心配でないとは言わない。

心配だ、一応。けれど、どちらかと言えばそれはビリオン様が祖国に滅びを与えるのが嫌だからという気持ちは強い。ならば元凶である私に案ずる資格はなかった。

エイミーから発せられるそよ風が肌を乾かしていく。海風に当てられた時のようにべたつくものの、濡れている時よりずっとまじになり、ますます力が抜けた。

纏う空気に棘がなくなったのを見て取ったマーグリスが唇で弧を描く。透明な、背景が透けて見える笑顔を見返すと彼は転がってきた小さな精霊を片手で受け止め、頭を撫でてやっていた。

「精霊からの報告ですと炎帝も無事のようにです。あの騎士は少し落ち着かなげな様子ですが」

眠りから覚めた私が何を言つかお見通しだったのだろう。

先回りする言葉に内心で舌を巻きつつ、私ははたと首を傾げた。

「リズ殿が？ ……何かあったのかしら」

これがヴァノツサやビーなら分かるが、リズとは意外だ。

長らく冬宮を留守にする話はどうにしていたはずなのだけれど。

まさかもう忘れてしまったということがあるまいと頭に疑問符を浮かべていると、アマンティが大仰に溜息をついた。

「どうせ小娘の帰りが遅いから気を揉んでるんだろうさ。気にすることなくてよ」

「遅いって……。リズ殿が私の帰りなんて気にするとは思えないけど」

ますますもつて不可解だ。

頬に手を当てて考えこむと深く眉間に皺が刻まれる。そうまでして考えても答えの分らない話は気持ち悪いことこの上ないが、全く予想のつかない話というわけでもなかった。リズ個人ならともかく、今彼の傍にはビーがいるのだ。

ビーが我儘を言っていないだけいいんだけど。

今はツヴァイの星姫を歓待する大事な時期だ。厨房にも豊富な食材が揃っているだろうし、余り物を拝借する程度造作もないに違いない。……そんな事を騎士にやらせるのは申し訳ないけれど、こればかりは仕方がない。ファルガスタ嫌いのビーも何のかんのと云いつつリズの事は気に入っているのだし、リズも同様だ。自然、ビーの世話はリズがやる羽目になる。ただ、ビーが我儘を言うなら話は別だ。

「カナデ島の魚だつて毎日あるわけじゃないし、かといつてビーがどこかに行ったらヴァノツサに文句を言われるかもしれないし、リズ殿には苦勞ばかりかけてるわね」

他の誰が知らなくともビーとて客人のようなものだ。出奔などされたら国の威信に関わるとヴァノツサなら思うだろう。彼はビーのことを人間とそう変わらない存在だと考えて接しているのだから。

そう思い呟くと、アマンティに「何言ってるんだい」と呆れられた。「灰猫に手を焼いたぐらいで小娘の帰りを待ちわびる方がどうかしてる」

「それもそうね。まあ、待ちわびてるというのは言いすぎでしょうけど」

ばっさり否定されそれには素直に頷きつつ答えると、エイミーまでもが呆れたように溜息を漏らした。……さっきから一体何なのかしら。

二人の精霊王を見上げる。するとエイミーが軽く咳払いをし、ふわりと笑った。

「ま、まあいいですよ。それよりレイアステイ様。ツヴァイの星

姫ですが、随分奮闘なさってらっしゃるようですよわ」

「ミルヒシュトラーセ様が奮闘って、どういう意味？」

「夜会でのレイアステイ様の御言葉が効いたのかもしれない。折を見てはヴァノッサ帝と御話する時間を設けて、人柄を掴もうと努力なさってますわ」

風の精霊達との井戸端会議にでも興じてきたのか、彼女は口元に手を当てて実に楽しげに笑った。一体何を見たのかは知らないが、そう悪いものではなかったのだと淑やかさを失わない笑顔から読み取りこちらにも笑い返す。

「そうだったの。それならファルガスタの臣達もさぞ胸を撫で下ろしていることでしょうね」

心からの安堵の声にガラナが不満気に鼻を鳴らした。

「奴等の動機は不純過ぎて気に食わん」

盟主を軽んじられたが故の直情的な怒りをこれも笑って返す。首を振ると、まだ汗が乾いていないのか重い毛先が億劫そうに揺れた。「仕方ないわ。誰も魔女が皇帝の相手になるなんて許せないんですよし」

元より救いさえ求めなかった者達だ。皇帝の寵妃など言語道断。

そんな彼等だから、玉座に蒼の宝玉を埋め込んだ時は相当焦りを覚えたはずだ。このままでは寵妃の座が魔女に奪われたまま婚儀を迎えてしまう、どうにかしなければと。

そこへ来て寵妃になる気満々の星姫が現れ、魔女の居ぬ間に彼の皇帝の心を射止めようとしているのだ。快哉を叫びたくなる気持ちは当の魔女である私にも分かった。好きに戦えと言ったぐらいだ、彼女が奮闘するのを微笑ましく思っても厭わしく思うなどありえない。後はヴァノッサの気持ちちが星姫に向きさえすれば、皆の願いは成就する。

……クレティエン家とミルヴェーデン家の願いだけは叶えられないけれど。

二度と同じ事が繰り返されぬようにと真摯な眼差しで願ったクレ

テイエン夫人の姿が頭を過ぎる。ビリオン様を拒絶したあの夜の再現を彼等はきつと喜ばないだろう。世界中の全ての民が喜んで、彼等だけは。

けれど私はその願いを振りきって再び同じ事を考えているという自覚があった。

胸に小さな棘が刺さって抜けないのはその自覚故かもしれない。あるいはいつでも手を差し伸べてくれたヴァノツサの持つ熱故か。あるいは。

考えがうまくまとまらない。安堵しているはずなのに、喜んでいるはずなのに頭の中で誰かがそれは違つと叫んでいるような気がして、私はきつく目を閉じて思考を遠くに追いやつた。歓迎式典の夜に見たヴァノツサの無防備な顔も、遠くへ。

「でもそうね、そういう事情なら」

今はもう結界のない大地を踏みしめ、くるりと皆の方へ振り向く。群青のドレスが勢いよく舞つた。

「私の不在はミルヒシュトラーク様の奮闘に貢献していることになるのね。だけど、それならどうしてリズ殿は喜んでいないのかしら。皆の話が本当なら、あと半年は帰るなど言われそうなのに」

冬宮に魔女がいないのは好都合だ。リズにとっても臣下達にとっても。私を留め置きたいのはヴァノツサ一人で、他の誰も願っていない。だとすればリズはきつと私の帰りなど遅れれば遅れるほどいいと思うに決まっているのに。

そう考え、アマンテイ達が勘違いでもしているのだらうと結論づけるとマーグリスが目を眇めてこちらを見た。

「レイアステイ様、念の為訊きますが本気で言っていますか？ それ」

「一体何を言うかと思えば。」

「？ 当たり前じゃない。貴方もリズ殿を見たことがあるでしょう？ 彼なら言うと思わない？」

ファルガスタ一恐れ知らずであり、誰もが避けて通りたい存在の

魔女に罵詈雑言を吐くのに特化した騎士だ。半年どころかそのままだに地脈に籠っていると言われても不思議じゃない。むしろ中途半端に短い期間を指定されると気味悪く思うだろう。敬愛する主とツヴァイの星姫の婚儀がつつがなく終わるのを誰よりも強く願っているのだ、彼は。永遠に消えろと言われても文句を言う気にはなれない。これが他の人間になると少しは腹立たしくなるだろうが。

そんなリズを見たことのあるマーグリスなら分かってくれるはずだと、私は同意を求めるように質問に質問で返す。と、アマンティが横から首を振って返した。

「マーグリス、訊くだけ無駄よ。小娘は間違いなく本気なんだから……確かに本気だけど、その言い方は馬鹿にされてるようで複雑だわ」

「あら、あなたも少しは嫌味が分かるようになってきたみたいね。その勢いでもつと心の機微に敏感になれば言うことなしだけど、無理だろうね」

「何言ってるの。私だって心の機微ぐらい読んでるわ。だからリズ殿ならああ言いそうだって思ったんじゃない」

嫌みたらしい笑みに、腰に手を当て仁王立ちになり言い返してやる。けれどアマンティは聞く耳持たないと肩を竦めるだけで何も言わない。完全に上からの目線で馬鹿にされて腹が立ったが、ぱらぱらと頭上から落ちてきた石片にぐっと口を噤んだ。

「まあいいわ。今はそれより地脈の回復が先よ」

ゆっくりと数歩歩く。そうして今度こそ止める者のないまま、強大な魔力の波に近づいた。

目尻に力を籠めてビリオン様が傷つけたのであろう地脈を睨み据える。破られたというよりは綺麗に切り取ったかのような穴は、皇城のさえ遙かに超えた大きさだ。一体どんな手段を使ったのかと問い詰めたくなるような容赦の無さ。

痛みを伴う風が銀の髪を後ろに靡かせる。後ろへ後ろへと異物を引っ立てようとするその風を無視し、私は地脈を睨んだまま誰に言

うでもなく言い放つ。

「私の魔力が通じなければヴァノッサに合わせる顔がないわ」

だから絶対、適当な結果では帰れない。

自分で自分を追い込むのは嫌いだが、今はこのぐらいの気持ちで挑まなければならぬと強迫観念めいた気持ちで渦巻く。こんなにも必死になろうとしている理由についてはもう考えない。考えているのは集中できないし、何より今は何も考えたくなかった。星姫の話がちらついていてこれ以上大きくなったら気持ちの整理ができそうにない。

頬を打つ魔力は熱などないのに焦がれそうに熱く感じ、刃など隠していないのに肌から血が滴り落ちそうになり、水の膜で覆われたように呼吸が苦しくなる。その中でただ一つだけ確かな、自分の足が踏みしめる大地の力強さに後押しされて私は色を持たない魔力の波を目で追った。

耳を澄ませなくてもはつきりと聞こえる鼓動が自分のそれと重なる。その瞬間恍惚感に似た目眩がして、ああやっぱり私の中にある魔力はここから供給されたのだと知る。魔力が合わさり一体化するこの感覚は初めて味わうものだけれど、大きく包みこむような力は決して悪いものじゃない。肌に触れるとこんなにも暴力的な波は、内に在るとひどく温かなのだと知る。その熱に向けて腕を突き出した。

「試しに一つスペルを唱えてみるわ。小さくても結果が出れば望みはある」

むしろなくては困る。凜とした声に従い、精霊達が背後に立った。

「では僕達はここでレイアステイ様の援護をしましょう」

「ああ。とはいっても、大して必要なさそうだがな」

「当然ですわ。だってレイアステイ様ですもの」

「エイミー、それじゃ答えになつてない。……まあいい。やれるだけやっておいで。そのために来たんだからね」

わいわいと騒がしい声を締めくくるアマンティの声に背中を向け

たまま頷く。

体に満ちる魔力は十分過ぎる程ある。あとはスペルを唱えるだけだった。

「行くわよ皆。援護をお願い」

吸い込んだ息を深く吐き出す。そうして心の中心に据えた決意の塊を、紅蓮の髪を持つ皇帝の姿にして思い浮かべた。

あれだけ大見得切つて良い報告をすと言ったのだ。今皇城に一人残されているヴァノツサの為にも私自身の為にも、この身に流れる魔力が地脈回復に役立つのか確認したかった。歓迎式典の夜に何もしなかったヴァノツサに対してビリオン様が手を下されるとは思えないけれど、何故だか無性に戻らなくてはという気がして。

背後を支えるように立つ四人の精霊王達は私の言葉に無言で頷き、四方を囲むように移動する。それを尻目に結界の強度を張り、己の魔力で練度を増していく。抵抗感が幾分か和らぎ肌を灼く熱も血が流れそうな鋭さも霧散した。

手に持っていた手製の魔導書を開く。

当然そこに私が求めるスペルはない。けれど似たような治癒のスペルならあるはずだと、慣れた手つきで頁をめくった。

あった。

いつもは口にする事のないスペルを見つけ、胸中でそう呟いた私はそのまま地脈に手をかざす。体内から魔力をかき集める気配を感知したのか四人が各々の体に魔力を帯びた光を纏う。魔女一人の力ではどうにもならないこのスペルを成功させるために。これ以上世界を破壊させないために。

緊張が走る。疾走感のある思考の巡りの早さに目を閉じる事もせず、口を開いた。

「其は動くもの、導くもの、還るもの、育むもの、全なるもの」
突き出した手の平が熱い。収束する光の蒼がまるで炎であるかのように。

足元に風が巻き起こる。群青のドレスの裾が僅かに舞い上がり、

蒼の光に晒された。

「其は原初の光」

自分の視力では確認できない深淵へと想いを馳せる。

昏く寂しい場所に大丈夫と胸中で囁きかけた。大丈夫、時間がかかっても私が必ず直してみせる。だからもう少しだけ耐えてと願う。もし耐え切れなくなったら、それは大地から命が潰える時だ。そんなのは御免だった。

ドクン、どくん。魔力の流れる音がする。その音と鼓動を合わせ、いつものように精霊に頼るのではなく自分自身の魔力を織り上げる。光は次第に大きくなり、結界を飛び出して暴れ狂う。あえて制御せずに放置するのは精霊達がきつと地脈が傷つかぬようによりよい道へと導いてくれると信じてのことだ。この辺りは完全に他力本願だったが、今はスペルを唱えるので精一杯で光の制御まで手が回らなかった。ぷつぷつと吹き出す汗は自分の限界を示しており、気付けばもうとつくに私に織り上げられる魔力量は超えていた。それでも手は緩めない。限界を超えて力を揮うと約したのは私なのだから。「原初の光の名の下に魔女レイアステイが願う」

魔導書を持っていた所で戦う事も活用する事もしなかったつけが回っているのか、純粹な魔力の行使に目が回り始める。同時に胸を駆け巡る躍動感のある興奮は私が魔女である証なのだろうか。

地脈を穿つ穴を光が包む。丁度血の流れた肌をかさぶたが覆うように。

薄く折り重なるそれを見て最後のスペルを紡ぐ。

原初の光の名の下に私は強く願う。

「綻び、消える生命に今一度祝福を！」

荒れ狂う魔術が体内から吐き出されていく。喉から音となり言葉となり地脈を覆う光に混ざっていく。水が氷になるように、溶岩が冷えて固まるように光が音を立って深淵を隠そうと固まっていく。あまりに薄い膜は魔力の波に抗えず壊れてしまうように思われたけれど、光に押し留められてあれほど精霊達を間違った道へと吹き飛

ばしていた魔力の波が元ある形へと戻っていった。私がへたり込むその瞬間にも光は壁となり、簡易の包帯と化す。いつかは取り替えなければならぬ、今だけの包帯に。

けれど、それだけでも私にとってには十分過ぎる。

「……成功、したの？」

たったあれだけのスペルで全ての魔力を使いきり、もう立ち上がることさえ敵わぬ体で何とか精霊達を見上げる。彼等は厳しい顔で壁を見たり実際に手でぺたぺたと触ったりしていたが、やがてこちらに戻ってきて頷いた。

「間違いない。成功だ」

簡潔なガラナの言葉は頭の回らない自分にも分かりやすく助かる。ほっと笑みを浮かべる。「ですが」するとマーグリスが不思議そうに光から生み出された壁を見た。エイミーとアマンティも彼と同じ疑念を抱いているのか、心底不思議そうにこちらを見下ろしている。水と風と地で形成された目に射抜かれて居心地悪くなり、私は身動きしながら「何」と訊いた。

「どこか問題があったの？ あの程度じゃ一日も持たないと言われると返す言葉もないけど」

「そうじゃないわよ。術は成功だ。小娘の力は地脈で通用するし、あれならビリオン坊やが手を出さない限りしばらくは壊れない」

アマンティの言葉にエイミーがうんうんと頷いた。丁寧に巻かれた髪がふわふわと揺れる。

「結果には何の問題もありませんわ。ですがレイアステイ様、あのスペルは元々対人間用の治療スペルだったのでありませんの？」

「確か重症者向けの」

「そうよ。使ったのは初めてだけど、魔術書にはそう書いてあるわ。何度も何度も指でなぞって読んだ手書きの魔術書を見る限り、大体そんな説明だったように思う。不確かなのはスペルは細かく書いてあるものの、その術が何をもちたらすのかという説明がひどく大雑把なせいだった。書き手の性格が透けて見えるようだ。」

上体を支える力までもが失われていく。結果、一番近くに立っていたアマンティの足にもたれかかるとしゃがみ込み目線を合わせたマーグリスがずいと顔を近づけてきた。

「そのスペルをそのまま使って地脈を癒したと？」

真剣な眼差しに一瞬怯みながらも答える。

「治療に変わりはないでしょう？ 相手が世界そのものか人間かの違いだけで」

構造そのもので言えば世界と人間では大きすぎる違いだろう。ただ、二つの存在はとも似通っていた。

人間の血は世界にとって魔力であり、血管は地脈。血管が切れて血が間違った方向に流れ出ていき、痣となって肌に表出する。痣を治したいなら血の流れを止めねばならず、血を止めるには切れた血管を元に戻す必要があった。だからあのスペルを使ったのだ。他に似たようなスペルはどこにもなかったし、どの道私を知りたかったのはこの魔力が地脈に通用するか否かという問への答えだ。その結果少しでも地脈を癒せたなら喜ばしいけれど、今回はそこに重点を置いていたわけではない。

「そんなのであれだけの事ができたんだから、すごいんだか馬鹿なんだか」

あつさりした私の答えにアマンティが天を仰ぐ。馬鹿とは言うのは少し言い過ぎじゃないか。スペルは対人間用でも、一応こちらは真剣にやったのだから。

「勿論今後はスペルを改良する必要があると思うわ。もしかしたらもっと楽に魔力を制御できるものも見つかるともかもしれないし、そこは試行錯誤しないと」

良質な岩石が多い場所だからか、いつもよりずっと大きな足に抗議を伝えるべく体重を掛ける。そんなささやかな抵抗を鼻で笑ってあしらった彼女は、ついと視線を光の壁に向けた。

「世界を従えなさい」

不意に落ちた声に目を見開く。

「世界を従える？」

「そうだ」

鸚鵡返しの声に答えたのはガラナだ。彼もやはり光の壁を見ていた。

「言い換えれば地脈を流れる豊富な魔力を制御できるようになれという話だ。僅かでも取り込めれば嬢ちゃん本体の魔力よりずっと強固な壁が生まれるし、嬢ちゃん自身の消耗も少なくて済む。昔から力のある魔女や魔導士はそうやって力を揮ってきた」

それは初耳だ。

「そう、だったの？ だけど、そんなの一体どうすれば」

「簡単だ」

言つとガラナは地面に突き刺した剣を抜いて肩に担いだ。陽炎の輪郭が一際大きく広がった。

「今はまず魔力に慣れるんだ。それを続ければ徐々に地上にいても魔力の流れが感じられるようになる。後はただ引つ張ってくればいい」

「……何だか最後の言葉が一番難しそうなんだけど」

「そうですね。まったく、ガラナったら全然言葉が足りないんですから」

困り果てた私を助けるようにエイミーが助け舟を出してくれた。

風が濃く吹き荒れ、彼女の身を艶やかに飾る。地上とは違い本当にここでは彼等の姿が大きく強くなるのだなと感じていると、彼女が私の考えを読んでいたかのように自分の体を指差した。「例えばこれですわ」白糸で織り上げられた上質の絹に似た風でできた手をひらりと振る。

「ここでは私達は本来の姿で顕現できます。これは地脈の魔力を汲み取って借りているからなのです。私達は元々地脈の魔力の中を移動していた身ですから、常にこの巨大な魔力に触れてますの。もう一心同体と言ってもいいですわね」

「何となく分かるけど、それがどうかしたの？」

「レイアステイ様も同じようにここの魔力に慣れて頂いて、魔力自身に溶けこんで認めてもらう必要があるという事ですわ。似通った者同士なら力のやり取りも安易にできますし、自分でも呼び寄せやすくなりますもの。召喚と原理は殆ど変わりありません」

にこやかな説明によくガラナの言いたかった事を理解する。けれど、魔力自身に認めてもらうというのはどういう意味だろう。地脈を穿つ穴を何の考えもなしに滅茶苦茶に流れているだけの無機物だと思っていたのに。

「何者にも命はあり、命があれば意思もあります」

無言の問いにマーグリスが答える。穏やかな笑みが広がり、霧を纏う指先が私の額を拭った。べたついていた肌がそれだけで綺麗に洗い流される。触れられた後は僅かに風に冷たさを感じる程度で、殆ど濡れてなどいないのに。

「そしてレイアステイ様はその意思を大事にしなければなりません。炎帝や騎士、ビーとの関わりの中でも他の誰かとの関わりの中でもないんです。レイアステイ様御自身の意思と想いを忘れず、育んで頂くのも肝要です」

「意思と想いつて……、一体何のために」

「まず意思是地脈の魔力に魂を奪われぬ為に必要です。そして想いは魔術を強化する為に必ず必要になります」

言つと彼は立ち上がり、槍を霧散させる。霧が広がり辺りが白く染まる。

「炎帝との約を果たす為にレイアステイ様は対人間用の魔術を地脈用にまで拡大しました。そんな事、いくら僕達の援護があつても簡単にできる事じゃありません。全く、さすがと言わざるを得ませんね」

呆れと感嘆の息に何も言えずただ彼を見返す。そんな事を言われても、私だつて何を考えていたわけではないしどうしてできたのか分からなかった。強く強く願いはしたけれど、それが魔術を強化するという事になるのだろうか。実感の湧かない指摘にただただ驚い

ている私の耳にアマンティの静かな声が響く。「でもね」そうして何度も放たれた言葉が続けられた。

「これだけじゃ足りない。ピリオン坊やが地脈破壊をやめない限り」
「分かってるわ」

そう、分かっている。ここからでは窺い知る事のできない深淵、その最奥がどうなっているか魔力が繋がっていた短い間に教えられた気がするから。エイミー達の言う世界と一心団体になったあの時、恍惚感が与える目眩の先に見たのは昏い闇の底だった。それに。

「こんな状況を見てまだ時間に猶予があるなんて言えないもの」

実際にどれだけ地脈が傷つけられたのか目の当たりにしてまだ大丈夫と言えるほど私は楽観的ではない。今だつて既に猶予は残されていないのだ。いつ崩れ落ちたつておかしくない大地を必死で支える精霊達には頭の下がる思いだ。だが、地上に生きる多くの者達はこの現状を知らない。いつか消え行くかもしれない世界の永遠を信じ、今日も生きているに違いない。それは真実を知る者にとって救いになるが、苦々しいものでもある。

戦わなければならない。選んだ道がファルガスタのあの皇帝の下にあるなら、ピリオン様に不死掛けを施した術者と必ず相対し、勝たなければならない。その先で救われない命があるのを知って尚、私はあの手を取ったのだから。

ぎゅつと唇を噛み締める。無意識に胸の痛みを耐えようとした行動は肉体的な痛みに襲われるまで気付かなかった。

皮が切れ血が流れる寸前に体から力を抜く。そうして何かで逃れるのではなく真つ向から痛みを受け止めようとして、私は視界の端でちらついたものに目を見張った。

あれは、人間？

「あれは……」

流れるような銀影がさつと光の壁よりも奥を進んでいく。一瞬で視界から消え去ったそれを追おうと立ち上がると、ひどい目眩がして前に倒れ込みそうになった。慌てた様子で私を支えるアマンティ

の固い腕に寄りかかる。

「ちよつと、待ちなさい小娘！　あなたまだ魔力が戻ってないのに何やってるんだい！」

「だってアマンティ、今人間の姿が」

「はあ？　人間なんているわけじゃない。ここをどこだと思ってるの！」

アマンティの言う通りだ。

ここは地脈だ。魔女である私ですら最初は魔力に異物扱いされて息さえまともにできなかった。そんな場所に人間がいるわけもないし、いるとしたらそれはビリオン様と彼の後ろにつく術者ぐらいのものだけけど、あの時紅蓮は一片も見えなかった。かといってビリオン様抜きに術者だけ現れるというのも不可解な話だった。私や精霊達が此処にいると知っているなら隠れていそうなものなのに。今まで一度だって姿を見せなかった者が急に現れるとは思えなかった。

「でも、確かに」

独りごちる。誰もいるわけがないと分かっているのに、どうしても気になった。

かくんと膝から力が抜けて崩折れる。冷たい地面に再び座り込んだ私にマーグリスが気遣わしげな声を掛けた。

「気になるのですしたら僕が見てきましようか？」

それがいい。少なくとも自分が行くより彼の方が適任だ。

けれど何故だろう。気付けば私は首を振っていた。

「……いえ、いいわ。ごめんなさい」

頭を何度も過ぎる銀影が気にならないわけがない。万一ビリオン様に不死掛けを施した術者がいるのなら今此処で決着を着けなければならぬくらいだし、違っていたとしても誰なのかぐらいは知っておきたかった。純粹な好奇心だって疼く。

それでも頼まなかったのは結果が見えていたからかもしれない。誰もいないと言われるそんな未来が見えて、願うのを諦めてしまっ

た。この溢れる魔力の中で私の問いに殆ど答えず口を閉ざすマーグリスはきつと銀影の正体も知っているような気がした。それは他の精霊王達も同じだ。この場所で異物に気付かぬほど鈍感なわけがないのだから。けれど、その上で彼等なら何も言わずに存在自体をひた隠しにするだろうと思ってしまう。だから頼まなかった。

でも、必要ならその時はきつと教えてくれるわ。

疑心暗鬼と信頼の狭間で目を閉じる。地脈に流れる魔力に寄り添った時、光の壁の奥で誰かが空間転移を使ったのを感じた。

第四十五話 魔女の帰還を待つ者

地脈で見た銀影。

結局正体を確かめられなかったあれは一体何だったのか、私は未だに知らない。

精霊王達は何も語らない。

頑として口を割らない皆の姿に、私は密やかに溜息を漏らした。でも、今はそれよりも別の問題がある。

姉妹月の光に煌々と照らされた冬の宮。

この宮の主と顔を合わせるのは、少し億劫だった。

地脈を出てファルガスタに戻ると外は一面の闇に覆われていた。

寝静まったフェンネルの街並みが時刻が随分遅いことを伝えてくれる。東地区の職人達はもとより、南地区の貴族達の屋敷までもが闇がもたらす安寧を受け入れていた。そんな城下の様子を見下ろし、静かに息をつく。沈黙と眠りを妨げないような静けさで。

「変な時間に帰ってきたのね」

精霊達は地脈に留まっており、あのやかましさは今はない。皆の眠りを覚まさないという点でそれは好都合だったけれど、随分と騒がしかった数日間を思うと急に一人にされるのはどうにも心細かった。北の孤島にいた頃はビーがノースポートに行っている日も多くて、一人でいることの方が多かったというのに変な話だ。

視界に入る白亜の塔を見上げる。姉の花月と妹の華月、両方の光を浴びる冬宮は自身で発光しているかのような堂々とした態度で沈黙を貫いていた。無機質で冷たげに見える壁は何者をも拒絶しているように。

「せめて昼に戻ればよかったわ」

ひんやりとした壁に触れてばやく。

姉妹月の光で歩くには何ら支障はないものの、皇城とて今は殆どの者が寝静まつている。ヴァノツサが執務室にいるなら会いに行くのが容易い時間ではあるけれど、エイミーの話を思い出すとどうにも体が動かなかった。

私、ここに入ってもいいのかしら。

冬宮を見上げる。部屋は空けておくでヴァノツサは言っていたけれど、ここは元々ツヴァイの星姫のものになる場所だ。今彼女がヴァノツサと親しくなるうとしてしているのなら、私がここに戻るのはいさよさらばに帰ることに思えてならなかった。……もつとも、彼女がどう動こうと私がここにいるのはよくないのだけれど。

風雨にさらされたせいかさざらとした感触に溜息をこぼす。

入れないのなら入らないが、仮に入ってもいいのだとしたらここで背中を向けたらまたヴァノツサが五月蠅いだろうと思うと煩わしい。そう考えていいえと胸中で呟いた。

煩わしいのはヴァノツサじゃない。こんな風に色々と考え込みすぎてしまう自分だ。

誰の意向であろうと、例え相手が皇帝であろうと無視してやればいいのだ、文句など。私は私の仕事をしているのだし、それ以上干渉される言われなどないのだから。それでもやっぱり考えてしまうのが煩わしい所なのだけれど。

地脈にいた時は気になることが山積みでそれどころじゃなかったのに、こうして一人になって静かな夜の中佇んでいると胸に刺さった棘の痛みがいやに鮮明に感じられた。魔女である私の言葉を受け入れるミルヒシュトラークの素直さは好ましく、ヴァノツサを人間として見ようとしている姿勢も微笑ましい。このまま二人が心を通わせて婚儀を迎えられたなら私はきつと安堵の息をついて祝福するに違いない。その気持ちは嘘偽りない。けれど、どうにも痛みが消えないのはなぜかしら。

他にも気になることは多い。

地脈で見た銀の影。夢に見た草原と顔の見えなかった人の姿。精霊王達がいなくなってしまうかもしれないという話に、ピリオン様に情報を伝える精霊の話。何もかも私はまだ答えを得ていなかった。どれもこれもできればすぐ答えが欲しいものばかりだというのに、精霊王達は口を噤んで何も言ってくれなかった。

得られたのはただ、自分の魔力が地脈に影響を与えられるということだけだ。

そう、これだけでも十分なのだ。目的は果たしたのだから。

問題はそれをどう伝えに行くかなのだけれど……。

「入っていいのかわからないのか、誰かに訊ければ早いのに」

もういつそのことも何も考えずに足を踏み入れて、以前いた部屋が今ミルヒシュトラークのものになっていたら笑って出ていけばいいんじゃないか。思考への面倒くささについてそう思うものの、それはそれで面倒になる。

愚痴を零し途方に暮れる。するとそれが聞こえたのかざっと草を踏みしめる音がした。

鎧の揺れる甲高い音が静寂を破り、宵闇に眩しい銀を散らす。

「氷の魔女！」

振り向くと、視界に銀の長身と麦色の髪が飛び込んだ。

「リズ殿？ どうしたんですか？ こんな時間に」

「き、さまがなかなか帰ってこない、から！」

一体どこで私を見つけたのか息を荒げるリズが本物の魔女かと疑うように目を眇める。そんな風に疑わずとも、髪の色も瞳の色も隠してなどいないのだから私以外いないのだけれど彼は久しぶりに戻ってきた魔女をじっと見て、やがて深く息をついた。ややよれてしまった群青のドレスに流れる銀の髪をようやく本物と認めたらしい。「待っててくださいってたんですか？」

尋ねるとギロリと睨まれてしまった。

「悪いか」

低く唸る声に、精霊達が言っていたことは本当なのだと実感した。

季節は冬に近づき、随分と冷え込む日が続いている。そんな中、暖も取らずに外にいるなど頼まれたってしたくないだろう。けれど彼は私が冬宮に現れてからそう時間を置かずに現れたのだ。きつと毎夜こうして見回りをしていたのだろう。護衛対象の魔女が戻るのを待って。……てつきり、私が地脈に行けば本来の仕事に戻されると思っていたのにそうならなかったのかもしれない。そう思うと申し訳なくて私は苦笑しながら首を振った。

「いいえ」

それから白い息を吐くりズの体が冷えないよう、炎と風の精霊達を呼んで薄い膜で覆った結界を作る。その中に彼の体が入るようにし、温度の違いに驚いた素振りを見せる彼に笑いかけた。私なりの感謝の仕方だった。

「ありがとうございます。リズ殿」

薄氷に似たリズの目が逸らされる。怒っているのか素直に本心を明かしたことを恥じているのか分からないけれど、足元を睨み据える眼差しが魔女への憎悪を孕んでいないことに少なからず安堵した。おかえりだなんて言われていないのに、それだけで私がここに帰るのを受け入れてもらえたような気がして。

温風に、刈り上げられた麦色の髪が揺れる。北風が強く吹きすさぶ中、ここだけが豊かな秋を思わせた。

未だ消えない砂塵が肌を舐めていく。細かな塵を厭う声もより高みへ上げようと駆ける子らの声もない。あまりに静かな夜はいつもならヴァノツサとあの暖炉のある部屋で過ごしているのにと思うと、今ここでリズと冬宮の外で顔を合わせているのがとても稀有な事のように思えた。事実珍しいと言えるほど珍しいのだけれど。私が彼と真夜中に顔を合わせたのは刺客に狙われていた頃なのだから。

地面ばかりを見ていた目がこちらに向けられる。忌々しげな、だけれどどこか安堵しているような不思議な視線はしかしすぐに逸らされ、今度は遠くフェンネルの街並みへと向けられた。いくら短気でもそれなりに落ち着きのあるはずなのに、一体どうしたのか。

まさか私の身でも案じてくれていたのかしら。

それならあの苛立ちにも納得がいく。しかし、月明かりが伸びて私達を照らすまでの刹那に浮かんだ考えはすぐにありえないと否定されることになる。私自身の想いによって。

最近では多少棘がなくなつたとはいえ、そんなこと天地がひっくり返つてもありえないのだ。魔女の護衛任務に就いた義務感がある以上全く心配されないとは言わないけれど、エイミー達が言うように帰りを待ちわびてもらえるほどではないだろう。特に今は。

けれど、それなら一体どうしたのだろうか。

不可解な彼の様子に首を傾げると流れた髪が今までとは違う角度から艶を放つ。鋭く細い光の線を視界に入れたのか、リスが我に返つたように目を見開いた。落ち着かなさを自覚しているのだろう。舌打ちと共に問われる。

「何日もどこで油を売っていた」

「地脈ですよ。ちゃんと伝えたでしょう？」

「それはそうだが……」

呆れながら首を傾げると、いつもなら罵声が飛んできそうなものなのにリスはやはり気まずげに顔を逸しただけだった。とつぷりと暮れた夜空から与えられるささやかとも華やかなともいえる月明かりに溺れるように銀の鎧が輝く。その眩しさに私は今しがた触れていた冬宮の壁を思い出し、今度はこちらから問うていた。

「ところでリス殿、一つ訊いてもいいですか？」

「何だ」

「私、まだ冬宮に入れるんでしょうか」

魔女が入るには色々とまずい状況になつてはいないのか。元々問題は多かったのだし、魔女が立ち入つていい場所でもなかったのに訊いてみる。するとリスが「は？」とようやく彼らしい小馬鹿にしたような呆れ顔で答える。

「当たり前だろう。そうでなければ俺がここにいるわけがない」

言われてみればそうだった。

私を待っていたことからしてリズはまだ私の護衛騎士。私が冬宮に戻るのを見越してここで待っているにせよ、問題があるなら早々と皇城なりトリスタン家なり連れて行くはずだ。この場で誰の目も気にせず話ができるなら、私は冬宮に入ってもいいということか。

嬉しいようなミルヒシュトラ―セに喝を入れたくなるような複雑な気持ちになり、私はふうと息を吐き出して呟いた。

「確かにそうですね。ですが、まだミルヒシュトラ―セ様は入られないんでしょうか」

婚儀はまだ先とはいえ、そう遠くない未来の話だ。

ならば彼女が先に冬宮に居を構えた所で何らおかしいことではないだろう。

ツヴァイに帰る気はなさそうなのだし、いつまでも皇城に置いてはおけないはずだ。

「……その件で貴様に話がある」

何の気なしに呟いた私の言葉にリズが苦虫を噛み潰したような顔で低い囁きを漏らす。

眉間に寄せられた皺がくつきりと影を刻んだ。

「何か問題でもあったんですか？」

まさかまたヴァノツサが子供じみた真似でもしたんじゃないでしょうね。

ありえない話じゃない。禁色を魔女に纏わせ、私の瞳の色と同じ宝玉を玉座に植え込み、彼女にこそ相応しい夜空に似たドレスを私に着せた。ひたすら私に甘い顔をし、寵妃と呼んだ。所々理由に納得の行くこともあったけれど、ヴァノツサが何度もミルヒシュトラ―セの自尊心を傷つけてきたのは事実だ。三度あった事に四度目があったとしても驚きはしない。腹が立つから散々嫌味を言わせてはもらうが。

ちらと心の中をよぎった言葉はどうか飲み込みリズの反応を待つ。

「いや、問題というわけじゃないんだが……」

彼は言い淀むように口を閉じた後で深く息を吐いた。

冷たさよりも乾いた熱を感じさせる白い呼気がふわりと空に向かって伸びる。

「貴様、式典の時ツヴァイの星姫に何を言った」

「？ 大したことは言っていないですよ」

少なくともリズが懸念するようなことは言っていない、はずだ。

胸中で呟く。しかしすぐに唇から呼気が溢れた。あ、と言いかけたままで止められた形を見られてぎこちなく笑ってみせる。引きつりそうな頬の筋肉が寒さのせいにより硬さを際立たせた。

心当たりがないわけではなかったのを思い出す。

「まさかミルヒシュトラーク様が怒っていらっしゃるんですか？

私に対して」

あれだけ怖がらせてしまったのだ。腹を立てるのも道理だ。ツヴァイ王家の人間が他国であるような姿をファルガスタ皇帝や騎士に見られたのだから。

あの時こちらが言った言葉も感情も一切の嘘偽りな純粋なものだったけれど、場をわきまえなかった私の失態でもある。もっとも、そんな風に気遣っているのは腹など立てられないが。

魔女に対して怒りを抱けるようなら元氣そうだとほっとしつつ、ヴァノツサやリズに申し訳なさが募る。けれど彼はそんな私の気持ち首を振って否定した。

「違う。星姫は一度も貴様を悪し様には言っていない。ただ」

「ただ？」

問う声に一瞬間が空く。

鎧に包まれていない、素肌を晒した手が握ったり開いたりしている。落ち着きのない横顔が気まずそうに告げた。

「貴様が地脈に向かってから、毎日のように陛下の執務室に通っている」

「ああ」

なるほど、それでリズはこんなに落ち着かない態度でいたのね。

「知ってたのか」

「エイミーが……、風の精霊王が話していました。何でもヴァノツサの人柄を掴むために頑張ってたらかっしやるとか。その話を聞いたので冬宮にまだ部屋があるか案じていたんです」

「知っていてそのまま放っておくのか」

「何か問題がありますか？」

あっさり訊き返す私にリズが目を瞠る。再び濃く眉間に皺が寄せられた。不満があると顔に書かれている表情はしかし何も告げず、無言でこちらを見据えるのみだった。責めるような、そのくせ何も問えない視線は自分でも何を言ったらいいか分からないからだろう。私にだつてリズが何を言いたいかさっぱり分からなかった。いや、言いたいことは分かるのだけれど、これではまるでリズが私を本物の寵妃だと思っているように見えてしまう。そんなことあるはずがないというのに。

沈黙が満ちる。不可解な疑念と問うような視線が交錯する中、夜だけが更けていく。

「ミルヒシュトラーク様は、ヴァノツサの執務を邪魔しているわけではないのでしょうか？」

結局口を開いたのは私だった。

「愚問だ。面会は毎日五分。それ以上は控えて頂いている」

「では一体何の問題があるというんですか？ その程度の時間、彼なら余裕を持って割けるでしょう。大地はまだ時折震えているようですが、私が地脈に在る間はビリオン様も地脈に手を出してきませんでしたし、それほどの被害はなかったはずですよ」

「……ああ、確かに貴様の言う通り被害は驚く程少ない。ないわけではないがな。だが貴様は俺の話を聞いても何とも思わないのか」

低く、恫喝すべきか懇願すべきか判断をつけかねている声に胸の痛みを思い出す。突き刺さったままの棘はまだ抜ける気配はなかったけれど、私は痛みを押し隠して「何も」とだけ返した。原因すら分からないものを安易に口にしたくない。

「私は救世主として喚ばれた魔女に過ぎないと貴方は知っているはずです。彼との約がある以上手は抜けませんし、ミルヒシュトラエ様の行動に難癖をつける資格もありません。私はあくまで為すべきことをしているだけです。ファルガスタもヴァノッサも貴方もそれで十分なはずですが」

代わりに顔を上げて凜とした声で告げる。ひたと見据えられリズが表情を引き締めた。

「陛下は貴様が戻るのを心待ちにしておられる」

言っのを散々迷ったのだろう。

静かなゆつくりとした口調で落とされた声に当然とばかりに頷いた。

「地脈を回復できるかは私にかかっていますから当然でしょう」

ヴァノッサが私を待っている。その程度は私にも分かっていた。

ファルガスタ国民の誰に死を願われても彼だけは私の死を願えない。例えどれだけの憎悪を抱こうと、他の魔女や魔導士がいなくても彼は私以外にもう頼れる相手がいないのだ。それを嬉しいとも悲しいとも思ったことはなく、どちらかといえば面倒とすら思っていたけれど。

そう、だから彼は魔女の帰りを待つ。

その力がどれほど地脈に影響を与えられるか、その結果を聞くために。

私も行かなければならないだろう。必ず良い報告をすると約したのだから。……気は重いが。

頭を巡る考えの中に刃を差し込むように、卑屈になるなかつてリズに言われた言葉が浮かぶ。

卑屈になつてなど。

揶揄するような面倒そうなりズの声に胸中で返す。しかし自分に向けての声だったというのにひどく弱々しい声は尻すぼみになって消えていく。自分でも分かっていたのかもしれない。今自分がどれだけ余計なことを考えているのかを。

本当はこんな当たり前の事をわざわざ反芻する必要などない。それなのに考えてしまうのはおかしいというのも分かっていた。

……事実私はおかしかつたのかもしれない。あの歓迎式典の夜から。いえ、実はもっと前から、北の孤島で手を差し出された時からどこがおかしくなってしまうたのかもしれないわね。

マリエル王妃とビリオン様が生きていた頃の事を思い出してこんな風に感傷的になるのかもしれない。だがあれから三百年が経ったもうあの頃の感情がただの寂しさではないのを、私は知ってしまった。

けれど、だから何だというの。

仮に自分がどんな感情を抱いてしようと、今の自分に何ができるというの。

地脈に穿たれた穴のほとんどは回復を待っており、精霊達は圧倒的な魔力の波に押し流されて今も本来とは違う道に飛ばされている。堕ちていく世界はまだ崩落の運命から逃れたわけではないのに、寂しいだの何だのと言っている場合ではないだろう。私はまだ、私が為すべきことを何も為していないのだから。

冬宮を見て感傷的になっていた心が冷えて固まっていく。

姉妹月を見上げて深く息を吐き出し、目を閉じる。

「そうじゃない！」

そんな私の耳にリズの怒号が響く。

そうじゃない。もう一度繰り返された声に薄く瞼を開けた。どうしてそんなに苦しそうなんですか？ 思わず問いたくなる程憔悴した顔に、私は別の言葉を返した。

「随分ヴァノツサの肩を持つんですね。お忘れかもしれませんが、私は氷の魔女なんですよ」

三百年前、マリエル王妃が排斥されそうになった元凶を前にトリスタン家の騎士が何を。

揶揄するように言う私にリズが視線を落とす。

透明度の高い空色の瞳が細められ、きつく手を握り締める音がし

た。

「……そんな事は百も承知だ。だが最近の陛下を見ているとそうも言っていないらなくなる」

最近のヴァノツサを見ていると？ 一体どういう意味なのだろうか。

頭の上に疑問符を浮かべていると、リズが遠く皇城に目を向けた。今は暗く照明も殆どつけられていない場所の、ある一点を見据える。眼差しは哀れんでいるようにも叱責しているようにも見える。いつも感情表現のはっきりした彼が今宵は珍しいと密かに驚くに値するだけの不安定さを覗かせ、痛みを感じているかのような声がした。

「貴様がいた頃は夜だけでも御休みくださっていたのに、今は昼夜問わず執務室にこもっている。ミルヴェーデン隊長ですら心配する有様だ」

「冬宮へは？」

「空の後宮に入って何になる」

言われてみればそうだ。会うべき者もないのに一人寝をしに後宮を訪れる皇帝の話など聞いたことがない。

馬鹿馬鹿しい問いをしたものだと自分で自分に呆れ返る。けれどもどの道ヴァノツサが執務室から出ていないというのに間違いはないらしいのは気がかりだった。元々冬宮が使われていなかったのなら、皇城内には彼が帰るべき部屋があるはずなのだ。それすら使わず仕事ばかりしているとは。しかも騎士達にまで心配される程となると相当具合を悪くしているに違いない。

地脈に籠って早数日。あれからずつととなると、期間も長かった。「こんな夜更けに貴様を皇城に入れるとまた口うるさいのが出てくるんだろつが、致し方ない。これ以上陛下に不眠不休を強いるわけにもいかんからな。 付いて来い」

夜風に頭を垂れていた草を踏みしめリズが背を向ける。

私が付いて来るのを当然だと思い込んでいる銀の背中に、思わず声を掛けていた。

「私は行くとは言っていないませんが」

数歩分先に行く体がぴたりと止まる。

「陛下が倒れてもいいと？」

首だけでこちらを振り向いた怒気を孕んだ横顔に睨めつけられる。静寂を打ち破る怒号を放たない所は褒めてもいいが、気の弱い者なら怯えて泣き出しそうな顔をされても困る。……慣れてしまったせいで私は何とも思わないのが悲しい話だけれど。

当然ヴァノツサには報告をしなければならぬのだし、行く理由は十分にある。

ただリズの目的を叶えてあげられる保証などできないと肩を竦めた。

「私でなくともいいでしょう」

少なくともただ寝かせるだけなら峰打ちなり薬を盛るなりすればいい。物騒だが。

ただ、文句を言うなり強引にベッドに運ぶなり直接手を下すなりするにはヴァノツサの地位が高すぎるのが難点だった。歓迎式典で見かけたギルバートという騎士にも流石にそこまでのことはできないだろう。

そんな気持ちを見透かすように、一步も踏み出されない爪先までも睨み据えてリズが吐き捨てるように言う。

「貴様でなくともいいのにわざわざ俺が連れて行くと思ってるのか」
ファルガスタの誰にも、他国の者なら余計にできないことを私にしると言っているのだ、リズは。すなわちヴァノツサを叱りつけてしばしの休息を取らせるという、確かに私にしかできそうにない不遜な真似を。

救世主として隣に立てと言われたぐらいだ、その程度の諫言……どころか文句は山と言える自信がある。私だって彼が顔を青くしているのを見たらまず間違いない休ませようとするだろう。最悪、魔術を行使してでも。魔女がいなければ眠りもしない皇帝というのは考えものだけだ。

「貴方が私を待っていたのはこの為だったんですね」

溜息混じりに呟く。独り言に近い言葉に返ってきたのは、逸らされたまま交わされない視線と見えない表情とやや鈍さを感じるゆっくりにした声音だった。

「……それもある」

月光に艶を放ち宵闇を照らす鎧が遠ざかる。

これ以上は何も言わないと告げる後ろ姿が言いたかったことを遅ればせながら理解し、大股に近づいて手を伸ばした。そのまま指先をリズのそれに触れさせると、氷のように冷たい手がぴくりと動く。大丈夫だったかともよく戻ったとも言わない立ち姿。けれど何も言わない素直じゃない態度と指の冷たさがエイミー達の話以上に自分を案じてくれていたのを教えてくれたから、目を丸くするリズを見上げて薄く笑った。しょうがないという諦めを浮かべて。

「誰かに見つかると思う者が出てくるのでしよう」

あまりに冷えた指先の温度を確かめるように一度強く握り、すぐに離す。私が隠された言葉を察したのを理解したのか、忌々しげな舌打ちが漏らされる。それを笑って受け流して空間転移のスペルを唱えると、姉妹月の光が遠ざかり暗い石造りの通路に足裏が触れた。外よりも耳に痛い静寂が満ちた場所を見渡したりズが感嘆の息と共に呟く。

「皇城、か」

風などないのにより冷え切った場所にもう一度風と炎を喚ぶ。融け合う二つの精霊達が生み出す熱と光がぼうと通路を照らした。その中にちよこんと座って、少年のような声が応じる。

「そつだよ」

薄い影の中で、ゆらりと細長い尻尾が揺れる。「ビー」頬を緩ませて呼ぶと揺れる速度が早くなった。「おかえり、レイア」私と同じだけの嬉しそうな声が返ってくる。それでもこれが涙ながらの再会にならないのは、彼が私の帰りを当たり前前のもんとして待ちわびてくれていたからだろう。

灰色の体躯を胸に抱く幸福感に酔いそうになる。頬をすり寄せて汗の匂いがすると言ったビーに苦笑で返すと、そこで初めて心配そうな顔をされたので狭い額を指先で優しく撫でた。

「こんな夜更けに執務室前で何をしていた」
胸に抱いたずっしりとした命の重みにリズが怪訝そうに眉根を寄せる。

それにふふんと得意げに笑ってビーが顎でしゃくって執務室のドアを示した。

「レイアが帰ってきたのはすぐに分かったけど、冬宮には入らないのは分かってたもん。でも、あいつの所になら絶対行くと思ったからここで待つてたんだ」

「帰ったのがすぐに分かった？ 猫に魔力が分かるって？」

「少しならね。でもそれが理由じゃないよ。僕とレイアは魂が繋がってるんだから、分からないはずがないんだ」

ねー？ と首を傾げる姿を優しく抱きしめて背中を撫でる。

「魂が繋がっている？」

「不死掛けを施しましたから」

この寒い中ずっと待つていたのだろう。冷たい毛並みを温めるように何度も撫でてやると満足気な息を漏らすビーが瞼を閉じた。眠たげな彼の眠りを邪魔しないように小さな声で答え、禁忌の名前に苦いものを感じながら執務室のドアを見やる。

「三百年前と構造が違っていたらと案じていましたが、どうやらここがヴァノツサの執務室で間違いないようですね」

他と比べると多少華美に飾り付けられたドアは、持ち主の好みを反映してかそれでも黒が主体となり落ち着いた雰囲気を醸し出している。真ん中に埋められた小さな紅玉が部屋の主を思い起こさせた。ああとリズが頷き先行しようとする。

それを腕に触れることで制し、中に人の気配が殆どないのを確認して扉を開けた。私を連れて来たなどと先に告げられようものならヴァノツサは無理にでも艶のある笑いを浮かべるに違いないと思っ

たからだ。

「誰だ」

厳しい声音が耳朵を打つ。豊かな金髪に今の声がギルバートだと察し、そのまま執務室内に入り込む。

執務机の斜め後ろにややこぶりな窓がある。その前に立つギルバートは月に似た銀の髪に目を留め、はつと息を呑んで剣の柄に置いた手を離した。次いでリズに目を向ける。責めるのではなく、ことなく褒めているような目は、それだけ事が深刻なのだと思える者に伝えた。

絨毯に足先を触れさせ、一歩進む。

大量の書類の山に埋もれるように視線を伏せるヴァノッサはよほど集中しているのか顔を上げない。だから目の前まで行って今まさに押印されようとしている書類に触れるように机に手を置くと、そこでようやく彼が顔を上げた。鬱陶しげな緩慢な動作が、宵闇に隠れそうになっている私の顔を見て速度を増す。椅子を倒す勢いで弾けるようにヴァノッサが立ち上がる。そのせいで頭一つ分以上高い位置へと移動した顔を見上げると、闇にもその鮮やかさを奪われないう紅蓮の双眸が大きく見開かれた。

「レイアステイ……？」

「酷い顔ですね、ヴァノッサ」

本当に貴女なのか。そう言ってみまじと私を見下ろす視線に呆れ混じりに笑いかける。私ならちゃんと戻ると伝えたはずなのに、こうも疑われていたとは知らなかった。けれど当然でしょうと答えるより先に出てきたのは、自分を見る顔のあまりの白さを案じる言葉だった。

顔色だけじゃない。

何日も執務室からろくに出ていないのが分かるやや乱れた髪にくたびれた服に、食事を摂っていないのかやつれたようにさえ見える顔。たった数日で一体何が彼をこうさせたのか分からないと心底思うような顔を一瞥し、お互い何て酷い格好だと笑いたくなくなった。

あれだけ色々悩んでいたのが嘘のように綺麗さっぱり消えていく。寂しさも胸の痛みも消えて、心が軽くなっていく。

「よく戻った」

緩やかに弧を描くヴァノツサの唇が細められた眼差しと共に言葉を紡ぐ。

「おかえり、レイアステイ」

鮮やかさよりも穏やかな夜そのものの静けさを纏った声が耳朶を打つ。

その瞬間、以前ヴァノツサが私におかえりと言われると帰ったのが実感できると話していたのを思い出した。私も同じ事を思ったからだ。たった一言なのに、不思議なくらいに自分がファルガスタに戻ったのを実感した。

「ええ」

魔力を使いきったり地脈を流れる力に触れたりと散々疲弊していたはずの体が楽になっていく。

「ただいま戻りました」

ようやく休めるといふ実感に頬が緩む。

北の孤島の屋敷に戻ったような気分になり、いつそのことこのまま倒れこんでしまいたいと一瞬だけ考えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5188t/>

最果ての魔女

2011年9月30日03時28分発行